
魔法少女リリカルなのは～ 真の紋章と竜の騎士～

剣 流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 真の紋章と竜の騎士

【Nコード】

N0663K

【作者名】

剣 流星

【あらすじ】

（あらすじ変えました）高町なのは、フェイト・テスタロッサ・ハラオン、八神はやて、管理局が誇るこの三人の魔導師には、一人の弟分がいた。彼の名は神谷聖時^{かみやせいじ}。かつて次元世界の危機を救ったかの有名な「赤き翼」のメンバーの一人、神谷聖^{かみやひじり}の息子である。この物語は、英雄の息子の聖時が、父の宿していた真の紋章を受け継ぎ、108の宿星士達と共に、異世界を巻き込んだ大きな戦いを戦い抜き、やがて英雄の名を受け継ぐ物語である。

*初投稿作品です。駄文です。いい話でもなければカオス化してま

す。

また設定の一部がこの作品オリジナルの物になっているので、原作のイメージを壊したくない人は読まない事をお勧めします。（現在はLの季節2編連載中です。）

（別の場所に登場人物紹介と設定資料の場を設けました）（原作名が多すぎる為、この場でその正式名を書きます・ドラゴンクエスト・ダイの大冒険 魔法少女リリカルなのはシリーズ るろうに剣心（技のみ） アルトネリコ2 アルトネリコ3 幻想水滸伝シリーズ Fate・stay night ゼロの使い魔 IZUMO2 聖闘士聖矢 聖闘士聖矢・THE LOST CANVAS冥王神話 魔法先生ネギま！ Lの季節2 黒神 ヴァンパイヤ十字界 pianetarian（ちいさなほしのゆめ） テイルズオブ デステイニー（ソーディアンのみ）魔法少女まどかマジカ）

プロローグ（前書き）

どうも剣 流星です。初投稿作品です。駄文な上、誤字脱字が多い
と思いますがよろしくお願いします。

・・・それにしても、登場作品が多すぎて最初100文字以内に収
まりきれませんでした。（汗）欲張りすぎて、色んな作品を入れ
きたみたいで・・・。

とにかく完結できるように頑張ります。ではどうぞ。

プロローグ

プロローグ

神秘の国・テラン……ここに門の紋章の力で飛んできた魔術師の塔がある。

この塔の主レックナートは塔の上に立ち、両手を広げて空を仰いでいた。

無数の星が瞬く夜空を見上げ、心を沈めて耳を澄まし、意識を全てを星の瞬きにゆだねる。

過去に起こった事件でその両目は光を失っていたが、意識を集中して夜空に向ければ彼女はいつでも星々のささやきを聞くことができた。

レックナート「遙かなる星達よ……輝ける星たちよ……」

いつも通りに、彼女は星見の儀式をおこなった。

しかし星見の術の文言を口にしながらも、レックナートは周囲の空気に、普段とは違う何かを感じとっていた。

レックナート「悠久より世の理を秘める星たちよ……、我に世の未来、掲示したま、え……?」

ふと何か呼びかけられたような気がして、レックナートは言葉を止めた。

彼女は呼びかけられた方角に身体を向けた。

そこに白く輝く星を感じていた。

レックナート「あれは……天魁星^{てんかいせい}……」

レックナートがつぶやくと同時に、白い星がチカリと強い光を放った。すると次の瞬間、他の星たちがそれに応えるかのように光を放ち始めた。

レックナート「そうですか……星たちが、ついに動き始めるのですね……」

???「レックナート様、こちらにおいででしたのですか。」

魔術師の塔に住み込みで、レックナートから星見を習っている占い師のメルルが声をかけてきた。

レックナート「メルル……良くお聞きなさい……」

何かを決意したかのように、レックナートが口を開く。

レックナート「とても大きな戦いが起きます……それはこの世界ばかりではなく、他のあらゆる世界を巻き込んだ物になるでしょう。」

メルル「え……とても大きな戦い……それが今夜の星見の結果なのですね？」

レックナート「そうです、とても大きな戦い・・・真の紋章が関わりあう戦い・・・」

見えますか？あの白い星が・・・あの天魁星の元に宿星は集い戦う運命さだめにあるのです。世界のバランスを保つ紋章の均衡を正し、“乱”から“治”へと世を正す為に。」

メルル「・・・その戦いの先には一体何があるのでしょうか・・・」

レックナート「それは私にもわかりません・・・全ては星の導きのままに・・・」

レックナートは再び空を仰ぎ、啓示を与えてくれた礼を星々に捧げた。そして普段はく口にしない祈りの言葉を、最後に彼女は天に捧げた。

レックナート「全ての人々に、正しき道が示されん事を・・・」

第1話 新生活の幕開け（前書き）

早速の第1話です。それではどうぞ。

第1話 新生活の幕開け

第1話 新生活の幕開け

暗い森の中、亜麻色の髪の小さな男の子と金色の髪の女の子がいる

男の子が女の子を慰める。

男の子「ねえ、泣かないでよ。」

女の子「ぐす、うつつつつ」

男の子「そうだ！一緒に出口を探そう」

女の子「出口？」

男の子「うん、さあ！」

そう言っつて男の子は手を差し出す。

女の子「……………」

男の子「どうしたの？」

女の子「怖くて動けない……………」

男の子「……………」

無理もなかった。女の子は森で迷ったあげく、先ほど魔物に襲われたのだ。

男の子「う〜んどうしよう・・・！！そうだ！」

何かを思いついたのか、男の子は自分が架けている、虹色に輝く石の付いたペンダントを
女の子の首に掛けてあげた。

女の子「・・・きれい・・・これは？」

男の子「お父さんからもらった、お守りの輝きせいせき聖石のペンダント！身につけている人を守ってくれる不思議なお守りなんだ。」

女の子「守ってくれる？」

男の子「うん！だから、さっきみたいな怖いことはないし、なにかあったら守ってあげる！
だから一緒にこ？」

女の子「・・・うん！」

そう言って女の子は男の子の手を取って歩き始めた。

二人が歩き始めてから、ずいぶんと時がたった。

女の子「・・・ねえ、・・・本当にこっちで合ってるの？」

男の子「う、うん・・・・・・多分」

そんな会話をしていると、前方の木々が開けてきた。

男の子「みて！出口だ」

女の子「うん！行こ！」

二人は手を繋げながら走っていき、森をぬけた。

女の子「出られた！」

男の子「ね！だからこっちで合ってるって言ったでしょ？」

女の子「うん！ありがとう。……ねえ……あのね……」

男の子「うん？なあに？」

女の子「わたしね……いままで同じくらいの子と会った事が無いの……」

だからね……わたしとお友達になって欲しいんだけど……」

男の子「けど？」

女の子「……どうすればお友達になれるのか解らないの……」

男の子「そんなの簡単だよ！“なまえを呼んであげればいい”って、前になのはお姉ちゃんが

言ってた！だから名前を呼んで？僕の名前は聖時^{せいじ}！」

女の子「セージ……私の名前はサ

お・・・・・・・・・・・・・・・・て・・・・・・・・・・・・・・・・せ・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・じ

？何処から声が聞こえる・・・・・・・・・・・・・・・・

お・・・・き・・・・て、せ・・・・い・・・・じ。お・・・・き・・・・て
！お・・・・き・・・・て！！

また聞こえてきた。前よりもはつきりと。

けど、あれ？この声どこかで聞き覚えがあるような・・・・

????「いい加減におきろ〜〜〜！！ピティちゃ〜〜ん！！キ〜〜
〜ク！！！！」

ドカツ！

体に強い衝撃が襲い視界が反転し、僕は・・・・ベットから落ちた。

目をあけて見ると、目の前に15センチぐらいの背中に羽を生やした銀髪のショートカットの女の子が、不機嫌そうな顔で浮かんでいた。

????「起きた〜。(怒)「

聖時「何すんだよ！ピティ！」

ピティ「何すんだよ！」「じゃないわよー！人がせつかく起こしてあげたのに

その態度はないんじゃないの〜！」「

聖時「起こすんだつたら普通に起こせよ！」

ピティ「普通に起こしてもらいたいなら、もっと早くに起きなさいよ。」

いつまでも寝ているあんたが悪い。」

聖時「しょうがないだろ、昨夜遅くまで魔法の修行をしていたんだから。」

僕は頭を掻きながら立ち上がる。

僕の名は神谷聖時^{かみやせいじ}今年の春から聖遼学園中等部の一年生になる者で、顔立ちと背の低さ、亜麻色の長い髪のせいで女に間違われやすいが、ちゃんとした男である。

そして、さつきから僕に怒鳴り散らしているこの小さいのはピティ。僕の使い魔である。

昔、父さんからもらった使い魔の卵を、僕が卵から孵して育てた。元気で明るく、物怖じしないとても良い性格である。……少し乱暴なところがあるのがたまにキズだが。

ピティ「今、何か失礼なことを思ってなかった？（怒）」

聖時「き、気のせいだよ。」

僕は再び頭をかいて先ほどまで見ていた夢を思い出してみた。

(……小さい頃に裏山で迷った時の事だよな？……確かあの時にペンダントを渡したままで……)

そう、あの時合った女の子にペンダントを渡したまま、迎えに来て

くれた父さんと一緒に帰ってきたのだ。その後、いくら裏山の周りや裏山を探しても、女の子も、女の子と別れた場所も見つからなかった。

そんな事を思いながら、自分の首から掛けている妹の桃華の形見の輝聖石のペンダントをいじる。

ピティ「聖時！」

聖時「！な、なに？」

ピティ「時間いいの？」

聖時「えっ、時間て？」

ピティ「えっ、じゃないわよ。シグナムとの朝の稽古。時間になっちゃっわよ？」

今日から学校が始まるから時間早くなるんでしょ？」

聖時「………そーだった！遅れるー！！！」

僕は急いでトレーニングウェアを着て、髪を後ろで束ねる。

机の上に置いてあった指輪を指にはめ、立てかけてあった木刀をつかみ部屋を飛び出した。

途中、玄関に行く廊下でスーツ姿で銀髪のロングで落ち着いた感じの女性と出くわす。

????「おはようございます、聖時さん。早朝鍛錬ですか？」

聖時「おはよう、ユニ。うん、今日から学校が始まるから時間を早めにしたんだ。」

彼女の名前はユニ。6年前に行方不明になった父さんの使い魔だ。今は変化の杖の力で普通の人と同じ背丈になっているが、本当の姿はピティと同じぐらいの大きさである。

聖時「それじゃ急いでいるから行くね。朝食の準備お願いね。」

ユニ「鍛錬、がんばってください。」

ユニと別れて玄関に急ぐ。

靴に履き替えてから左足を踏み込んで調子を見、異常がないかを見てから家の外に出た。

神谷家は広い純日本風の広い家で、ここに僕とピティとユニの三人で暮らしている。

両親はいない。母親と双子の妹の桃華は2年前に亡くなっている。

父は6年前に

あった冬木市の大火災で行方知れずになった。

母さんを亡くした時に、母の実家の来迎寺らいこうじの祖父が僕を引き取りたいと言ってきたが断り、この家でユニ達と暮らすことを選んだ。

この家には、父さんと母さん、そして桃華との思い出が詰まっているし、魔法の訓練をするのに都合がいい、何より6年前に行方不明になった父さんが帰ってくるかもしれないから、この家に留まったのである。

走ってシグナムさんが待っている近所の公園に行く。

シグナムさんは同じ町内に住んでいる八神ははやてさんの親戚の人だ。

はやてさんとは生前のうちの母さんとはやてさんのお母さんが学生時代の親友で卒業してからも付き合いは続いている、はやてさんの両親が亡くなった時もはやてさんの主治医の石田先生と一緒にあって面倒をみていた。

シグナムさん達が来てからも、ちよくちよく家族ぐるみで付き合いがあった仲のである。

約束の時間ギリギリで公園に着くと、そこにはシグナムさんが木刀を持って待っていた。

シグナム「時間ピッタリだな。」

聖時「ゼーゼー、はっ、はい〜。」

息を整えながら返事をする。

シグナム「その様子では、準備運動をしなくても体は暖まっているな。時間が惜しいから」

このまま組み手に入るぞ。」

そういつてシグナムさんは持っていた木刀を構えたので、

聖時「はい！お願いいたしますー！」

と返事をして木刀をシグナムさんに向けて構えた。

最初は様子を見るように構えていたが、意を決して僕から切りかかっていった。

最初は片腕で持っていた木刀で防いでいたシグナムさんだったが、僕の剣の鋭さに押されたのか反撃に出た。

僕は左から切りかかって行ったが、シグナムさんが剣で迎撃しに来たので、それを飛んでかわし、そのままシグナムさんの剣の上に着地、そのまま木刀を踏みつけて動けなくしてから切りかかっていった。

（取った！）と思った瞬間、寸でのところでシグナムさんが木刀を持っていない方の手で僕の木刀を掴んで防いでいた。

シグナム「見事だ、聖時。わずか2、3ヶ月で私に両腕を使わせるようになるとは・・・

・・・だが、まだまだ甘い！」

聖時「！」

シグナムさんが何かしてくると感じ取り、体を動かそうとするが、反応に体がついてこない。

シグナムさんが声と共に掴んでいた木刀に力を入れ、僕のバランスを崩すと、踏みつけられた木刀を

引き抜き、僕の木刀をはじく、そして丸腰になった僕に木刀を向けた。

シグナム「お前は私の剣を封じたことにより、私からの反撃がないと思いきを許した。

そこに隙ができ、私の反撃を許してしまった・・・。いいか、剣を

相手に向けたなら最後の瞬間まで気を抜くな！いいな！」

聖時「はっはい！」

シグナム「では訓練をつづけるぞ、構えろ。」

聖時「はい！」

そのまま二人は時間になるまで訓練をつづけた。

シグナム「では今日の訓練はここまでだ。」

聖時「はい！ありがとうございます！」

木刀を納め、シグナムに向けて礼をする。

シグナム「そういえば、聖時は主はやてとは違う学校に行くのだったな。」

聖時「はい、聖遼学園です」

シグナム「聖遼学園・・・確か去年の秋頃、お前が学校見学に行き、突然倒れて意識不明になったところだな。」

聖時「はい。僕だけじゃなく、あの時期には他にも学園の関係者が何人も意識不明に

なったとか……。まっ、その人たちもほとんどが目をさまして、今ではピンピンしてますけど。」

シグナム「しかし、よく受験を受けようと思ったな。普通はあんな目にあつたら受けようとは思わないはずだがな。」

聖時「元々あの学園を受けようと言っていたのは桃華なんです。」

シグナム「？」

聖時「あの学園の創立者は来迎寺らいじょうでいの祖父、母方の父おじいちゃんの繁之しげゆきのお爺ちゃんなんです。生前の母さんとお爺ちゃんは絶縁状態だったそうで・・何でも父さんとの結婚に反対されてたため、父さんと駆け落ち同然で結婚。そのまま絶縁状態が続いてたんですが、妹の桃華が何処からかそのことを聞いてきて、何とか仲直りさせたいと思い、そのきっかけになるようにと聖遼を受験すると言ってたんです。その桃華はもういませんが、桃華がやりたかったことをできる限り僕が変わりにかなえてゆこうと思って聖遼を受けたんです。」

18

シグナム「そうか。」

シグナムさんはそう言って微笑むような顔で僕の頭をなでた。

聖時「撫でないでくださいよ。もう小さい子供じゃないんですから。」

シグナム「おっとすまない。つい癖だな。それよりそろそろ家に戻らないと間に合わなくなるのでは？」

聖時「あつ！そろそろ戻らないと。すいません、それじゃいきます。」

そして僕はそのまま公園から出て家に帰っていった。

家に帰り、シャワーで汗を流してから聖遼の制服に着替えてから居間に行く。

居間にはすでにユニとピティが座って朝食を食べていた。

ピティ「お、聖時！それが聖遼の制服か。なかなか似合ってるじゃない。」

ユニ「お似合いですよ。」

ピティとユニが制服姿をほめてくれた。

聖時「あつ、ありがとう。」

僕はテレながら席について朝食を食べ始める。

聖時「いただきます。」

朝食を食べながら側で食事をしているピティに話しかける。

聖時「そうそう。ところでピティ、まさか前みたいに学校にまでついてくる気なの？」

ピティ「ん？そのつもりだけど？」

聖時「そのつもりって・・・お前な。」

ピティ「いいじゃん、どうせ普通の人には私の姿は見えないんだから」

聖時「けど！・・・まっ、いつか」

そう、普通の人にはピティや元の姿に戻ったユニの姿は見えないのだ。見えるのは、魔力を持っている人に限られる。そしてこの世界では魔力をもっている人はほとんどいない。だから普通の人達にはピティやユニの姿が見えないのである。

聖時「ごちそうさま」

朝食を食べ終わると食器を台所の流しに持っていき、鞆を持って玄関に向かっていった。

靴に履き替え、

聖時・ピティ「行ってきます。」

ピティと共に挨拶をして家を出る。

さあ！新しい生活の幕開けだ！

僕は張り切って駅へと向かっていった。

くおまけコーナーく

ピ ピティと

ユ ユニの

二人 おまけコーナー

ピ はい、始めました！おまけコーナー！司会進行役のピティと、

ユ 解説のユニです。

ピ このコーナーは、本編では補足できなかった事などを補足するためのコーナーです。

さて記念すべき第一回目は、我らが主人公、聖時の血筋の設定についてです。

ユ 聖時さんの血筋についてですが、登場作品の中にもろくに剣心があるのです、

聖時さんの苗字、神谷を見て”主人公の緋村剣心の末裔なのでは？”

と思った方も多いでしょう。

ピ うん、たしかに・・・でも作品紹介の文を見ると、聖時が引いている血は

ドラゴンクエスト・ダイの大冒険の主人公・ダイだと思うんだけど・・・

ユ たしかに、だから聖時さんは、緋村剣心と勇者ダイの両方の血を引いているの。

ピ え！けど聖時の苗字、神谷は確か父親・聖ひつの姓だという設定だよ？

そしてダイの末裔は確か父親のはずで、神谷の家の養子という設定は
ずんだけど・・・

ユ ええ、ですから勇者ダイの末裔が父親の聖ひつさんで、
緋村剣心の末裔が母親の千尋さんなのです。

ピ えっ！、でもそうすると、なんで苗字が神谷じゃなく来迎寺なの？

ユ それは、緋村剣心の子供、神谷剣路の奥さんの苗字が来迎寺だからです。

ピ えっ！どういう事？

ユ このお話は、るるろくに剣心のOVA・星霜編の話の後という事になっております。

このお話の終わりに、剣心の子、剣路には恋人の来迎寺千鶴

という恋人がいるというお話で終わりました。ですから・

ピ あっ！なるほど、つまりその二人が一緒になって、その間に生まれた子供が

二人以上で、そのうちの誰かが来迎寺の苗字を受け継いだ、その末裔なのが・

ユ 母親の千尋さんと言うわけで、神谷の姓を受け継いだ末裔が、父親の聖さんの

養父というわけです。

ピ なるほど、けど、どうしてこんな複雑な設定にしたの？

ユ うっ、いや作者さんは主人公はダイと剣心の末裔にしたかったんだけど、

主人公の父親はダイの末裔にしながらも、苗字は神谷にしたかったみたいなので・

ピ なるほど、しかも話の進行上、母方の方は財閥だとかのお金持ちにしなきゃならな

かったからこうなったと言う訳ね。

ユ そう言うことです。

ピ さて、今回はここまでです。作者の初投稿作品で文才がないため、読みづらく解り

にくいと思いますが完結を目指して頑張ります。

ユ ですからどうか暖かい目で見守ってください。

二人
それでは

第2話 夜天の主とエース・オブ・エース（前書き）

どうも剣 流星です。

早くも2話目です。ではどうぞ。

第2話 夜天の主とエース・オブ・エース

第2話 夜天の主とエース・オブ・エース

桜並木の道に聖祥大付属中学の制服を着た高町なのははたたずんでいた。

後ろから同じ制服をきたアリサ・バニングス、月村すずかが声を掛ける。

アリサ「あ、なのは!」

すずか「なのはちゃん!」

なのはは振り返り手をふりながら返事をする

なのは「アリサちゃん!すずかちゃん!」

アリサ・すずか「おはよう。」

なのは「おはよう。」

二人と合流し歩きながら話す。

アリサ「今日もお仕事?」

なのは「うん。今日は久しぶりにみんな集まるんだ。

お昼過ぎに早退しちゃうから午後のノートお願い。」

アリサ「はいはい。がんばってコピーしやすいノート取るわよ。」

とアリサが返す。

なのは「にゃははは。ありがとう、あ。」

前を見るとこちらと同じ制服を着たフェイト・Ｔ・ハラオンと八神はやてが手を振っていた。

フェイト「おはよう。」

はやて「おはよう。」

と二人が挨拶する。

アリサ「おはよう。今日集まるんだって。」

フェイト「うん」

はやて「ほんま楽しみやわ。」

フェイトとはやては三人と合流し歩きだす。そこに亜麻色の長い髪を後に束ねた、聖遼の制服を着た聖時が歩いてきた。

聖時「あ、おはようございます。なのはさん、フェイトさん、はやてさん、アリサさん、すずかさん。」

なのは「あ、おはよう聖時くん。」

フェイト「おはよう聖時。」

はやて「おはような、聖時。」

アリサ「おはよう。」

すずか「おはよう。」

となのは、フエイト、はやて、すずか、アリサとあいさつを返した。

聖時サイド

駅に向かう途中でなのはさんたちを見かけたので合流する。

アリサ「へ〜。聖遼の制服、なかなか似合ってるじゃない。

そういえば聖遼は今日からだったっけ。」

アリサさんが言い、僕は

聖時「あ、はいそうなんです。」

そう応えながらなのはさん達と合流して歩き出した。

はやて「ところで……なんやさっきの「はやてさん」言っんは。

聖時「え、今日から中学生ですし、年上の人には“さん”づけで言わなきゃならないと思って……。あ、でも“さん”づけよりむしろ先輩の方がいいかも……。」

はやて「ええって、そんな他人行儀みたいな言い方せんでも。今まで道理「はやてお姉ちゃん」

でええやないの。」

はやてさんが言い方を戻すように言ってくるが僕は、

聖時「いえ、こう言う事はきつちりとしないと。」

はやて「せやかて……。」

はやてさんが尚もしつこく言ってくるよ、

フェイト「はやては寂しいだけなんだよね。今まで「はやてお姉ちゃん、はやてお姉ちゃん、」

て、言ってた聖時がお姉ちゃんって言ってくれなくなる事が。」

はやて「な、フェイトちゃん!!」

はやてさんは顔を赤くしてうるたえる。

はやて「う、うちは今までの言い方から別の言い方に変ると違和感を感じるからで、別に寂しいわけじゃ……。」

アリサ「まっ、そう言うことにしますか。」

はやて「アリサちゃんまで……もう。しかし……聖時、最近ますますお母さんの千尋さんに似てきたわな。男にしておくのもつたないくらいに。」

アリサ「本当！時々私も錯覚しちゃうくらい。」

とはやてさん、アリサさんがサラッととんでもないこと言っ。

聖時「っへっへ……。」

グサ！と言葉のナイフが突き刺さる。
ひっ、ひどい、自分が不利になるからって僕のことと話を逸らそうとするなんて。

聖時「どうせ僕は母さん似ですよ。」

激しく落ち込む。

はやて「じよ、冗談やないか、そんなに落ち込まんといて。それより才人とはこれから合流するん？」

聖時「はい、駅で待ち合わせています。」

とはやてさんが聞いてきたので、応える。

はやて「しっかし聖時はともかく、あの才人が聖遼に合格するとは思わんかたわ。」

聖時「「思わんかったわ。」ってそれひどいですよはやてさん。才人だって結構がんばって勉強したんですから。」

はやて「まっ、たしかにがんばってみたいやけど。がんばってたその動機が不純と言うか、なんとと言うか。「自分の欲しいノート型パソコンを買ってもらうためにがんばる。」やもんない。」

僕は苦笑しながらそれを聞いていた。

はやて「そや、ところで聖時、左足の調子はどうや？」

はやてさんが僕の左足について聞いてきた。

聖時「ええ、調子はいいですよ。あれから2年も経ってるんですから。今じゃすっかり僕の体の一部ですよ。なんたって双子の妹の桃華の足なんですから、なじまない方がおかしいんですよ。」

はやて「そか・・・そやな。」

はやてさんが応えた。

アリサ「もう2年経つんだね・・・千尋叔母様と桃華ちゃんが亡くなった飛行場爆破テロ事件から・・・」

はやて「そやな・・・あの日、うちらが連絡を受けて搬送先の病院に行った時には、千尋叔母さんは、

すでに亡くなっていて、聖時は左足切断の重症、桃華ちゃんは意識は在るものの、すでに手のほどこしように無いほどのケガやった・・・」

なのは「桃華ちゃん・・・自分が助からないと悟ったのか、自分の左足を聖時くんにつて最後に
言ったんだよね・・・」

聖時「・・・ええ、僕自身、直接聞いたわけじゃありませんけど・・・でも、そのおかげで今、こうして歩く事ができます。」

はやて「その左足大切にせなな。」

はやてさんはそう言いながら優しい顔で僕の頭を撫でてきた。

聖時「小さな子供みたいに撫でないでくださいよ。」

はやて「ええやんか、減るもんでもないし。」

聖時「減りますよ〜・・・おもに僕の尊厳が・・・。」

はやて「なにが尊厳や、中学に上がった途端、妙に大人ぶって・・・そんなちっこいなりで言っただって
説得力あらへんで〜。」

聖時「うっ、どうせチビですよ・・・。」

・・・たしかに背は低いけど・・・

すずか「まあまあ、まだ成長期なんだから、このあといくらでも伸びるよ。」

聖時「そうですね！成長期なんですからいくらでも伸びますよね
「！」

すずか「うん、うん。」

こんな風に話しながら歩いていけると、分かれ道にさしかかる。

聖時「それじゃ僕はこっちなので。」

はやて「うん。それじゃ気おつけて行きいゃ。」

聖時「はい。はやてさんも気おつけて。」

はやてさん達と別れて駅へ向かった。

はやてサイド

自分の弟分。聖時の背中を見送り私たちは学校への道を歩き始めた。

「????」(はやてちゃん、もういいでしょうか?)

はやて「(ええよ、リーン。聖時はもう行ってもうたさかい。)

リーン「ぶっはー!しゃべらず、念話も出来ないでただジツと隠れているのって疲れます」。

はやて「すまん、リーン。けどあの子にこれ以上魔法の事を知られるわけにいかんから我慢したってな。」

リーン「はいです」

リーンが元気良く返事をする。

なのは「……聖時くん、だいぶよくなってきたね……。千尋叔母さんと桃華ちゃんが亡くなった時はボロボロだったけど、今はもう大丈夫そうに見えるね。」

なのはちゃんが聖時が歩いて行った道を見ながらそう言ってくれ。
はやて「それもこれも、なのはちゃん達が暇を見て聖時の様子を見てくれたからや。
ほんま大きにな。」

なのは「いって別に。それに聖時くんは私たちにとっても弟みたいなもんだし。」

フェイト「それに、生前の千尋さんにはお世話にもなったしね。」
と、なのはちゃんとフェイトちゃんが言う。

はやて「そつか、そやったやな。．．．しかし、聖時の顔を見るとほんまに千尋叔母さんの事を思い出すわ。」

アリサ「たしかにね。」

なのは「千尋さんか．．．優しくて．．．暖かくて．．．。」

フェイト「詩^{うた}が上手で．．．」
すずか「ただそこにいるだけで皆が暖かい気持ちになれる．．．そんな不思議な人だったね．．．。」

はやて「たしかに不思議な人やったな．．．使う魔法も詩魔法って言う不思議なやつ
使こおてたしな．．．。」

リン「魔法で思い出しましたが、はやてちゃん、ここでリンは質問なのです。」

はやて「なんやリン？」

リン「聖時は魔力と使い魔を持ってますよね？」

はやて「そや。」

リン「と言うことは、聖時は魔法が使えるんですよね？ならなんでリンのことやはやてちゃんたちの事、そして、管理局のことを秘密にしているのですか？ばらしちゃっても問題ないと思うのですが。」

はやて「それはな、“聖時には魔法のことに関わらずに普通の人として暮らして欲しい”って言う千尋叔母さんの生前の方針に従って、魔法のことは千尋叔母さんが教えた事以上のことは教えることにとるんよ。使い魔のことだって、普通の人には見えないちよつと変わった生き物程度と言って教えてるしな。」

リン「え、と言うことは……。」

はやて「うん。両親が魔法を使って管理局に協力して戦っていたことも知らへんし、わたしらの事もピティの事が見えない普通の人だと思ってる。」

リン「なんでなんですか。聖時、両親のことすごく知りたかったです。剣術を始めたのだからお父さんの聖さんを知りたがってるから始めた処もあるんですよ？」

なのは「それはねリン。聖時くんが真の紋章を受けつぐことの出来る素質を持っているからだよ。」

なのはちゃんがリンに答えた。

すずか「真の紋章？」

すずかちゃんが疑問に思い聞いてくる。

なのは「詳しいことは言えないけれど、真の紋章は破壊も出来ないし、

封印もとても特殊な方法を使わないといけない物で、そう何度も出来るものではないの。」

それに紋章は一度取り付くと、宿主の命と同化してしまい、無理に引き剥がそうとすると、

命に穴が開き、そこからどんどん生命力が漏れ、最悪の場合死んでしまうの。」

なのはちゃんが疑問に答える。

アリサ「なら取り付いたならそのままほっとけばいいじゃない。」

アリサちゃんが言う。

はやて「所がそうもいかんのや。真の紋章はな、宿した物に強大な力を与えるんや。紋章を宿した者の中には、力を制御できなくて暴走を引き起こし、一つの世界を滅ぼしてしまった者もある。何より紋章は宿主に呪いをかけるとも言われてる。たいていの真の紋章の宿主はその力と呪いのせいではとんだの者が不幸な結末を迎えてる。」

……聖叔父さんや千尋叔母さんがいい例や。」

ありさ・すずか・リーン「「え!?!」」

アリサちゃんとすずかちゃん、リーンが声をそろえて驚く。

はやて「聖叔父さんと千尋叔母さんは、真の紋章を宿してたんや。二人はその紋章の力を使ってさまざまな事件を解決していったんやけど、紋章の力を使うたびに寿命を削っていったんや。」

アリサ「そういえば千尋叔母様、亡くなるちょっと前は結構病気がちだったわね。」

アリサちゃんが思い出したように言い、私は補足するように

はやて「そうや。だからもし聖時が魔法に関わったらその分、真の紋章に取り付かれる機会が多くなる。そしてもし聖時が真の紋章に取り付かれたら、聖時の性格からして、困ってる人や、助けを求めている人がいれば迷わずに紋章の力を使うや。せやから千尋叔母さんもユニさんも聖時にこれ以上魔法に関わらないようにしてきたんや。」

リーン「なるほどなのです……。」

リーンは納得してうなずいた。

はやて「アリサちゃん、すずかちゃん、この話は……。」

アリサ「わかってる。聖時には黙っとしてあげる。」

すずか「わたしも黙ってます。」

はやて「おおきにな。」

アリサ「ま、私だって聖時がそんな目に遭うの望んでないしね。」

はやて「そやな。あ、少し急がなあかんようやわ。」

腕時計で時間を確認し、私たちは急ぎ足で学校へ向かった。

くおまけコーナーく

ピ ピティと

ユ ユニの

二人 おまけコくナく

ピ はくいやってまいりましたおまけコーナー
司会進行役のピテだよ

ユ 解説のユニです。

ユ うっ、たしかにそれは否定できませんね……。

ピ ……。

ユ ……。

ピ な、なんだか話が不穏な方向に向かいそうになってきたので、今回はここまでにしときます。

ユ それでは皆さん、

二人 またね

第2話 夜天の主とエース・オブ・エース（後書き）

いかがだったでしょうか、

次話では、ゼロの使い魔のあのキャラが出てきます。

だれが出てくるかはお楽しみという事で、それではまた。

第3話 私立聖遼学園（前書き）

前話のあとがきで言ったキャラがあきららかに
ではじいぞ。

第3話 私立聖遼学園

第3話 私立聖遼学園

なのはさん達と別れ、駅へと向かう。駅の改作口近くで僕は声をかけられた。

才人「よう！おはよう。」

声の方を見ると聖遼の制服を着た幼馴染の才人がいた。

ひらがさいと
平賀才人、小学校1年生からの付き合いで、クラスも6年間同じ、いわゆる

腐れ縁の中であり、ピティの姿が見え、ピティの事を知っている数少ない友人である。

才人「あれ、所でいつも“五月蠅くて小さいあれ”はいないのか？」

ピティのことを聞いてきたので僕はこたえようとした時、

ピティ「ピティちゃんんきんきんク！！」

ドガッ！

才人「おごっ！」

才人は後頭部にピティのキックを受けて悶絶する。どうやらかなり痛かったようだ。

あの小さい体からいったいどうやってあんな威力の蹴りがさせるんだろう？

ピティ「だ〜れ〜が〜うるさくて小さいあれよ!〜!」

才人「いててて、なんだよ!居たんなら居たって言えよ!〜!」

ピティ「しょうがないでしょ〜、ついさっきまでなのは達と一緒にだったんだから。聖時の

鞆の中に隠れる必要があつたの!」

才人「は?なんで隠れる必要があるんだよ。なのはさん達にはお前の姿が見えないんじゃないかったのか」

ピティ「う〜ん、たしかにそのはずんだけど、時々、本当は私の姿が見えるんじゃないのかっていう態度を取るのよね〜。私の存在がなのは達にばれると後々面倒だから、念のためなのは達の前では隠れることにしたのよ。」

才人「そっか。まっ、秘密を知ってる人間は少ない方がいいしな。」

才人がそうつぶやく。そんな時、

聖時「!.....後ろから声を掛けて僕達を驚かそうと言つのはアキ。」

才人「えっ?!」

そう言つて背後を振り向く才人。

???「あゝあ、ばれちゃった・相変わらずカンがいいね聖時。」
振り向いた先にいたのは、聖遼学園中等部女子の制服に身を包んだ、黒くて長い美しい髪を肩まで伸ばし、見る人に大和撫子と言つ言葉
を思い浮かばせる人物が立っていた。

才人「ア、アキ！」

そこにはもう一人の幼馴染、藤宮アキがそこに立っていた。

藤宮アキ。有名な日本舞踊の家元の子で、才人と同じ小学1年生の頃からの幼馴染で
ピテイの事を知っている数少ない友達である。

アキ「二人とも久しぶり。元気だった？」

才人「アキ！なんでここに……しかも聖遼の制服まで着て……
多少驚きながら尋ねると、

アキ「あれ？なんで驚いてるの？」

才人「い、いや〜てつきり俺は晶あきの方が来るもんだとばかり思っ
てたからさ〜」

アキ「え？私アキが聖遼に行くって話し、ピテイから聞いてない？」

聖時・才人「へ？」

聖時「き、聞いてないよー。」

僕がそう言つと、

ピティ「あっ！ごめん。言つて忘れてた。」

と、のん気声でピティが答えてきた。

聖時「忘れてたって、お前な。」

ピティ「まあまあ。いいじゃない、またこの4人で楽しくやっていきましようよ。」

才人「まっ、たしかにそうだな。」と才人が答えたので僕もうなずく。

聖時「しかし・・・。」

アキの聖遼の制服姿を見ながら、

聖時「なんと言つか、怖すぎる具合に制服姿が似合ってるな。」

僕は複雑な心境でアキの制服姿を見た感想を言う。

アキ「そう？ありがと。」

アキは嬉しそうに返事をした。

ピティ「さあ、早いとこ駅のホームに入ろうよ。電車に乗り遅れるよ。」

ピティが促すので僕らは駅に入った。

駅に入りホームで電車を待つ。少しして入ってきた電車に乗りこんだ。

電車に乗っている間も才人やアキ達と話をする。

聖時「そつだ！ねえアキ、デジエルさんの様子はどう？」

才人「ん？だれだ、そのデジエルさんて・・・」

聖時「春休み中にアキが家の裏山の近くの道で倒れているところを、アキがフェイトさんと一緒に見つけた人だよ」

アキ「あの日、聖時の家にフェイトさんで行った帰り、アンダーズイツのような格好でボロボロになって倒れていたデジエルさんを見つけたんだ。・・・驚いたよ、死んでるんじゃないかと思うぐらいのひどい怪我で、運び込まれた病院で治療を受けたあとも、しばらく目を覚まさなかつたんだから。」

才人「へく、けどなんでそんなケガをして倒れてたんだらうな？」

アキ「わからない・・・このあいだ目を覚ましたんだけど、ケガのせいか記憶が曖昧で、名前以外の事はうまく思い出せないみたいなの・・・」

聖時「そつか・・・それじゃケガが治っても記憶が曖昧なら家に帰れないな・・・。」

アキ「うん、だからね、父さまに退院したら記憶が回復するまで家で住み込みのお手伝いとして働いてもらおうようにしてもらったの。」

聖時「へ〜そうか・・・ねえアキ、デジェルさんの退院の日っていつ?」

アキ「えつと・・・まだととうぶん先みたい・・・」

聖時「そうか・・・よし、なら、こんど病院に見舞いに行くよ。デジェルさんとは倒れていた時に
姿を見かけただけで、まだ話していなかったから。」

アキ「あれ、そうだったっけ?それなら一緒に行きましょう」

聖時「ああ、一緒に行こう。」

そんな風に話していると目的の駅に着いたので電車を降り、改札口を出る。

駅前では自分たちと同じ制服を着た人たちがチラホラ見えた。

みんな聖遼の生徒みたいで同じ方向に向かって歩いていった。中には高等部の先輩方なのか楽しく話しながら歩いている人たちもいる。

高等部の女子「上岡君^{かみおか}！君は新聞部の部長なんだからもつとしつかりしてよ！今年部員を確保しないと私達が卒業する来年には新聞部無くなっちゃうのよ!」

高等部の男子「わっ、分かってるよ天羽さん^{あそ}」

僕らの横を高等部の先輩らしき男女の二人組みが喋りながら通り過ぎてく。

才人「高等部の制服って中等部と違うんだな。」

才人が二人を見てそうつぶやく。

聖時「僕らも三年後にはあれを着るんだろつな。」

僕も二人を見て制服のことを言う。

ピティ「けど、才人は3年以上かかるかもね。」

ピティがニヤニヤと意地の悪い顔をして才人に言った。

才人「む、それどういう意味だよ。」

ピティ「あなたの頭だと留年の可能性が2、3回有りそうだと言うことよ。」

才人「なんだと。俺はそこまで頭悪くないわー。」

おい聖時、お前の使い魔だろ。こいつの口の悪さを少し注意してやってくれよ。」

聖時「ピティ、少し言いすぎだぞ。才人が2、3回留年するなんて。」

僕との言葉を聞き、うん、うん、とうなずく才人。

アキ「そうだよ、才人はそこまで頭悪くないわよ。してもせいぜい1、2回ぐらいよ。」

アキも才人のことをフォローしようとするがフォローになっていなかった。

聖時「アキ・・・それフォローになってない・・・」

僕は呆れ顔でそう言った。

その隣で才人が少し凹んでいる。

そんな風に喋りながら、徒歩で聖遼学園に向かう。

やがて着いた聖遼学園。その校門から中に入りながら、

才人「さくて、掲示板はどこかな。クラス割を見ないと話にもならないからな。」

才人はそう言ってあたりを見渡した。

アキ「ねえ、あれじゃないの？」

才人と同じように周りを見ていたアキが人だかりがある方をさしている。

人だかりの一番後ろの方から張られているクラス割を見ようと背を伸ばす。しかし人垣の高さは自分の背丈より高いので見ることができない・・・。こういう時は、自分の背丈の低さを呪いたくなる。

隣をみると才人とアキもお同じような状態で見ることが出来ないでいる。

ふと、あることを思いつき、ピティに念話で話しかける。

聖時（ピティ、悪いんだけど掲示板を見てきてくれないか？

ピティならこの人垣を飛んで掲示板のクラス割を見てくれるだろ？）

ピティ（あ、そうか。じゃあちよつとまっててね。すぐ見てくるから。）

そう言つてピティは人垣を飛び越えていった。

僕は才人とアキに、“ピティが僕たちのクラス割を見てきてくれる”と伝えて三人でまった。

しばらくして、

ピティ（たっだいま）。三人のクラス割みてきたよ）

聖時（ごくろうさん。それでどうだった。）

ピティ（それがねー、三人とも同じ1-Aだったよ。）

それを聞き、すぐさまに他の二人に話す。

才人「へへ。また同じクラスか。」

アキ「これで7年連続だね。」

才人とアキが嬉しそうに言った。僕自身も嬉しい。

才人「そんじゃ教室へと向かいますか。」

才人が先頭に立って歩き出し、僕らも後を追うように校舎の中に入っていた。

中等部の校舎、1 - Aの教室は1階の端っこにあった。

教室の中に入ると、すでに先に来ていた何人かの生徒たちが、いくつかのグループに別れて話をしていた。

自分に割り振られた席について鞆を置く。席の位置は教室の一番後ろの真ん中あたりで、アキが隣、才人はその前の席になった。

僕が自分の席に着き、周りを見渡しているとサイトとアキがイスを僕の席に寄せて座り話しかける。

才人「席も近くみたいで助かったわ。」

アキ「助かったわ、ってまた授業中に質問で指された時に答えを教えてもらうつもり？」

才人の一言にアキがあきれ返りながら答える。

才人「いいじゃんかよ。友達だろ？」

聖時「才人。たまには自分の力で答えようよ。」

僕は才人に少し忠告した。

そんな時アキが声を潜めて僕らに話しかけてきた。

アキ「ねえ、さっきから向こうの席にいる子、こっちをジーツと見てない？」

そう言ってきたので僕はそちらに視線を向けてみた。

そこには僕と同じ亜麻色の長い髪で、頭の両サイドにリボンをした子が驚いたような顔でこちらを見ていた。

ピティ（ん、あの子もしかして・・・）

ピティがつぶやくと、何を思ったのかピティが僕から離れてしばらく辺りを飛び回った。他の人たちはピティの姿が見えないので無反応だったが、その子だけはピティのことを目で追っていた。

ピティ（やっぱり私のこと見えてるのかな？）そう言つと、その子に顔を向けていきなり

ピティ（つぶれたヒキガエルの顔。）と百面相をし始めた。

最初は驚いていが、次の瞬間、

????「プツ、くくくくく」と声を殺しながらその子が笑い始めた。

（あ、やっぱり 聖時、あの子私が見えるみたい）

僕はそんな馬鹿なことをしているピティの体を引つつかみ、

聖時「馬鹿やろ！わざわざ自分から目立つことをするやつがあるか
~~~~~！」

と怒鳴ってしまった。

周りの人たちが一斉にこちらに視線を向ける。才人とアキは慌てて、愛想笑いを浮かばせながら自分たちの体で僕たちを隠そうとしていた。

周りの人達が視線を戻すのを見計らって、二人とも僕に顔を向けながら声を潜めて、

才人「大声出すやつが要るか！馬鹿野郎。」

と才人に怒られた。

才人「で、どうするんだ。」

聖時「しばらくは様子見にしよう。」

才人「わかった。」

アキ「わかったわ。」

二人が返事をするのと同時に放送で全校集会があるので、講堂に集合と言う放送が流れてきた。

僕らは講堂に移動した。

学園長の長い話をえて、全校集会はおわり、僕らは教室に戻り、ロングホームルームとなった。

ロングホームルームでは、恒例の自己紹介をやることになった。

僕の出番になったので、当たり障りのない自己紹介をして席に着いた。

その後、残りの人の自己紹介を聞き、例の子の番になった。

???「わ、渡良瀬ふたばと言います。趣味は散歩、特技は絵で、苦手な物は運動です。いたらない所があると思いますがよろしくお願ひします。」そう言って自己紹介を終えた。

(へー、あの子、ふたばって言うんだ。) そんなことを思いながら彼女を見てると、

才人 (ずいぶん熱心に彼女のことを見てるんだな。)

才人が小声で話しかけてきた。

聖時 (な、なんだよ。別にいいだろ。)

才人 (さては一目惚れでもしたか?)

聖時 (ばっ、んなわけないだろ!)



などと、才人と馬鹿な会話をしながらロングホームルームは進み、担任の話を書きいて、放課後になった。

先生が出て行くのを見てから僕は帰り支度をして席を立つ。

その時さっきの子、渡良瀬ふたばさんの席を見ると、すでに席にいなかった。

（もう帰ったのかな？）と思いながら才人の席まで移動した。

聖時「ねえ才人、これから学園を回ってみようと思うんだけどどう？」

才人「わり、今日、人と待ち合わせしてるんだ。新作のゲームと一緒に買いに行くことになってるんだ。」

聖時「そっか、アキは？」

僕は近くの席で帰るしたくをしているアキに声をかける。

アキ「私はこれから高等部に居る従姉妹に会ってこなきゃいけないの。」

「私が聖遼アキに通う事になった」と言う事を伝えなきゃいけないから。」

聖時「そっか、それじゃしかたがない。ピティと二人で学園を回るよ。」

アキ「ごめんね。」

才人「すまねえな。」

二人が謝ってきたので、二人に、

聖時「いいよ、きにしないで。それじゃまた明日。」

才人「また明日な！」

アキ「また明日ね！」

二人にあいさつをして教室を出た。

二人と別れてピティと二人で学園内をまわる。

いくつかの教室や部室棟などを回って、最後に屋上にやってきた。

聖時「うーん。とても開放的な所だね。」と背伸びをする。

ピティ「ほんと、空がとても近くに感じてきもちいね。」

ピティと喋りながら屋上のフェンスに近づくと、屋上のフェンスの角地に誰かがいるのを見つけた。どうやら先客らしい。

その人は高等部の制服に身を包んだ黒髪のロングの女性で、とても儂げな印象の人だった。

その人はしばらく部室棟の方を眺めていたが、こちらに気付いたのか、視線をこちらに向けてきた。最初こちらに向けた顔は、無表情だったが、その顔が急に驚きに満ちた顔になっていった。

??? サイド

今日もいつも通りに屋上に来て、ここから新聞部の部室を眺める。もう必要ないとわかつてはいるのだが、半ば習慣と化していた為、またここに来てしまっていた。

すると突然屋上の入り口の扉が開かれ、中から二人分の声が会話をしながら出てきた。

聖時「うくん。とても開放的な所だね。」

ピティ「ほんと、空がとても近くに感じてきもちいね。」

二人分の声がする方を何気なく見てみた。

すると、そこにいた人影を見て私は驚愕した。

一人は中等部の男子の制服を着た髪を後ろで束ねた子だった。

その子だけならさして珍しくもないのだが、もう一つの人影が私を驚かせた。

そこには15センチくらいの、背中に羽を生やしたシヨートカットの女の子が中に浮いていたのである。

その姿は本来“こちら側の世界”ではあり得ない姿のもので、“あちら側の世界”にいる妖精族のものだった。

いったいなぜ？ どうしてここに？ どうやって？

私が驚いてると、

聖時「あの～すいません。なんか邪魔しちゃったみたいですね。すぐに居なくなるなりますんで。それじゃ。」

そう言っつて男の子(?)は、そそくつさと妖精の女の子と一緒に屋上を出て行こうとしたので、慌てて呼び止めようと声をかけた。

???「まっ、まっつて!」

しかし、私の声が届いてないのか、二人はそのまま屋上を去って行った。

後には、私だけが取り残された。

???「あの子達はいっつい・・・」

私の疑問の声は、屋上に広がる青い空に吸い込まれていった。

（おまけコーナー）

ピ ピティと

ユ ユニの

二人 おまけコーナー

ピ はい、早くも三回目になりましたこのおまけコーナー。  
司会進行役のピティです。

ユ 解説のユニです。

ピ さて今回は、サブタイトルの聖遼学園に関してです。

ユ 聖遼学園と聞いて、ピンとこない人もいると思います。聖遼  
学園はLの季節2の舞台になってい る所で・・・

ピ ちょっと待って、先にLの季節2について話した方がいいよ。

ユ たしかにそうですね。では先にLの季節2についてです。L  
の季節2は、2008年に5pbから発売された作品で、1999  
年にプレイステーション用として発売したデジタルノベルの作品で  
あるLの季節の続編作品であります。「現実界」「幻想界」と呼ば  
れる、それぞれ異なる主人公とヒロインが存在する二つの世界から  
成り、物語の冒頭でいずれかの主人公を選択する事でそれぞれの世  
界の物語が展開するようになっていきます。ふーっ、一人で長々と話

すのは疲れます。

ピ 説明ご苦労さん。

ユ ええ、ありがとう。

ピ で、Lの季節2の舞台になる聖遼に聖時が入学するという事は、この話の序盤はLの季節2の話しが中心なわけ？

ユ ええ、そうですね。ちなみに、現実界での視点は、聖時さんが中心で、幻想界側は幻想界側である別のキャラ視点でお送りする予定です。

ピ 別のキャラって？

ユ それはまだ秘密です。……ただ言える事は、幻想界側の視点をつとめるのは、Lの季節2のキャラではないということです。

ピ Lの季節・Lの季節2をもっと詳しく知りたい人、もしくはやりたい人は最近発売された、Lの季節・Lの季節2と一緒に買ったPSPのソフトがお勧めです。

ユ ……なにげに、ゲームソフトの宣伝みたいになってしまいましたね。

ピ 気にしない、気にしない、それじゃ今回はここまで。

ユ それでは皆さん、

二人  
またね

### 第3話 私立聖遼学園（後書き）

いかがだったでしょうか？  
感想・質問お待ちしております。



第4話 下位元神霊(トライバルエンド)(前書き)

どうも最近花粉症になり苦しんでる剣 流星です。

花粉症・・・かかると結構きついですね・・・

それでもがんばって書きました。ではどうぞ。

## 第4話 下位元神霊（トライバルエンド）

### 第4話

トライバル・エンド  
下位元神霊

ここは次元航行船アースラのブリッジ。

時空管理局内でも屈指の実力をもつ魔導師、高町なのは、フエイト・T・ハラオン、八神はやて、リーンフォース・ツヴァイ、そしてボオルケンリッターの四人、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの四人が集まっていた。

クロノ「みんな、良く集まってくれた。」

アースラの艦長、クロノ・ハラオンは集まったメンバーにねぎらいの言葉をかけた。

なのは「ううん、別にいいよ。それに皆が集まるのはひっそりだから、少し楽しみだったんだ。」

なのははそう言って微笑んだ。

ヴィータ「これで全員そろったのか？」

ヴィータがクロノに聞いてくる。

クロノ「いや、後二人来ることになっている。」

フェイト「え、後二人って？」

フェイトがクロノに聞こうとすると、

ユニ「失礼します。」

ユーノ「遅くなりました。」

と挨拶しながらブリッチに入ってくる二人の人物がいた。その顔は、集まったメンバー全員になじみのある顔だった。

なのは「あれ、ユーノくん？」

リン「それにユニなのです。」

なのはとリンが入ってきた人物二人を見て驚いている。

はやて「なんで二人がここにおるん？」

ユニ「今回のことは紋章絡みだから、私も呼ばれたの。」

はやてがユニに聞いてきたで答える。

なのは「ユーノ君は？」

ユーノ「今回のことは遺跡絡みでもあるから。」

ユーノもなのはの質問にそう答えた。

クロノ「これで全員そろったな。では今回の任務について説明する。」

「  
クロノはそう言って話し始めた。

クロノ「今回の事の発端は、ある無人世界での遺跡から始まった物だ。」

なのは「無人世界の遺跡？」

ユーノ「そう、その遺跡は前々からスクライアの一族が目をつけていた物で、今まで管理局の許可が下りずに調査が出来なかった物なんだ。」

なのはが聞き返し、クロノの話の補足をユーノが付け足す感じで話が進む。

ユーノ「そしてようやく管理局の許可が下りたので、僕はスクライアの一族の皆と一緒に早速遺跡に向かったんだ。ところが、着いた遺跡には先客がいて、そいつらがあっちこっち遺跡を調べたり、遺跡の中から何かを運び出そうとしてたんだ。」

シグナム「盗掘団か？」

シグナムがつぶやくように言う。

ユーノ「うん、僕らもそう思って管理局に連絡しようと思ってたんだけど、先にやつらに見つかってね。やつらの中のリーダー格のような人物が、運び出そうとしている物を早く持っていくように指示を出し、回りにいた何名かがこちらに迫ってきたんだ。」

ヴィータ「良く無事だったな。だいじょぶだったのか？」

ヴィータがそう言ってユーノに少し心配そうな声をかける。

ユーノ「心配要らないよ。スクライアの一族は遺跡を巡って旅する一族だから荒事にはある程度慣れていんだ。けど最初のうちは、やつらの変わった戦い方やタフさに少しおどろいて苦戦してしまっただけだね。」

なのは「変わった戦い方やタフさ？」

なのはが再び訊ねてくる。

ユーノ「ああ、やつらは身体強化魔法もなしでいきなり常人離れした動きをしてきたんだ。それに腕にある模様を光らせると、いきなり魔方阵も無しで魔法を使ってきたんだ。おまけに常人離れた耐久力も持ってた……。もっともそれだけだったけどね。動きはバラバラ。オマケに突っ込んでくることしか脳のない連中で、まるでどこかのチンピラみたいだったよ。だからバインドですぐに拘束して黙らせられたよ。」

なのは「さすがユーノ君」

ユーノ「あ、ありがとう。けど戦っている隙に遺跡から持ち出した物は持ち去られてしまったけどね。」

フェイト「何者なんだろうね。その人たち。」

ヴィータ「捕まえたやつを締め上げりゃ何かわかんたろ？」

フエイトの問いにヴィータが答える。

クロノ「管理局もそう思い、捕まえた者達を尋問してみたんだが、彼らは雇われた下っ端の使い捨てだったみたいだ。彼ら自身もそこいらにいるチンピラ程度でたいした情報を持ってなかつたので、たいして問題ではなかつた。……ただ出身世界だけをのぞいて。」

クロノが続きを語りはじめる。

シャマル「出身世界がですか？」

シャマルが補足するようにつぶやく。

クロノ「彼らの出身世界は第97管理外世界の極東、日本だ。」

なのは達「……え！」「……」

クロノの答えになのは達全員が驚きの声を出す。

ユーノ「そういえば、やつらの姿、日本人みたいだったし、使っていた言葉も日本語みたいだった。」

ユーノは思い出すようにつぶやいた。

ヴィータ「けどよ、この世界出身で魔法を使うんだったら魔術協会の魔術師なんじゃないのか？」

ヴィータの問いにクロノが答える。

クロノ「そう思い、魔術協会に問いただしたんだが、「身に覚えが

ない。「の一点張り。梨の礫さ。」

ユニ「仕方がないですよ。魔術協会と時空管理局は表だって対立はしてませんが犬猿のなかですかね。」

ユニが補足する。

リーン「犬猿の仲？ですか」

リーンが聞いてくる。

ユニ「そう。魔術協会と管理局は似たような力を使いますが、設立の理由から違うんです。管理局は治安維持を目的としているのに対し、魔術協会は魔術の隠蔽と根源に至ることを 至上の目的としている集団なのです。判りやすく言うと、管理局は警察機構、魔術協会は研究機関と言う所です。その性質上相反するのは仕方がないと思います。」

ユニがリーンの質問に答える。

ヴィータ「あたし、あいつら魔術師が嫌いだ。6年前の冬木の大火災だってやつらが関わってるって言うじゃないか。・・・そのせいで、聖時の親父さんは行方不明になり、残された聖時たちがどれだけ苦しんだことが・・・。」

はやて「ヴィータ・・・。ところで、捕まえたやつらはこの世界の魔導師である、魔術師なんか？」

はやてが思っていた疑問をクロノに言う。

クロノ「いや、彼らは魔術師でもなければ魔導師でもなかった。なぜなら、かれらの体にはリンカーコアも無ければ魔術回路も無かったからだ。」

シャマル「えっ！そんな！魔法や魔術を使うのに必要なリンカーコアや魔術回路が無いのに魔法が使えるなんて、そんなのありえませんか！」

シャマルが信じられないものでも見たような声をあげる。

クロノ「君がそう思うのも無理ないが、これはれっきとした事実だ。だが彼らが使っていた物が魔法や魔術でない物なら説明がつく。」

なのは「魔法でもなければ魔術でもない物？」

なのはの疑問にクロノが答える。

クロノ「ああ、彼らの力はリンカーコアや魔術回路から来ているのではなく、手などにある紋章から来ている。彼らはこの力を<sup>イクシード</sup>超越技、自分らのように力を授かった者を<sup>トライバル・エンド</sup>下位元神霊と呼んでいて自分のような存在が多数いると聞いていた。」

シグナム「<sup>イクシード</sup>超越技に<sup>トライバル・エンド</sup>下位元神霊……。そんな者が数……………」

シグナムは確認するようにつぶやく。

ユニ「すいませんけど、先ほど紋章から力が来ているようなことを言っていましたけど、その紋章ってまさか……………」

ユニがクロノに尋ねる。



クロノ「そうだ。15年前の戦い。聖時の両親、そして僕の父親が管理局側の代表として部隊を率いて戦った戦いで滅んだ世界。ハルモニア神聖国で使われていた魔法である紋章魔法の紋章が使われていた。」

ユニ「やはり……。けど紋章が入っている封印球はハルモニアでしか取れない物。ハルモニア世界が15年前の戦いで発生した時元震で無くなった今、収入は困難なはず。そんなものをどうやって……はっ、まさか！」

クロノ「そうだ、ユニ、君たちが住んでいる家の裏山にあるシンダール遺跡のように、封印球の鉱山も、もしかしたら次元震の影響でどこかの世界に飛ばされているのかもしれない。連中はそれを見つけてそこから封印球を採掘したんだと思う。あくまで予想だが。」

クロノがユニの疑問に答え、ユーノ続くように話す。

ユーノ「けど、その当たっている可能性は高いと思うよ。現にそれを示唆させる物が海鳴市にある遺跡の他にもあるんだ。」

なのは「海鳴市の遺跡の他に？」

なのはが尋ねる。

ユーノ「うん、今回調査しようとした遺跡、あれも実はハルモニアのあった世界の遺跡であるシンダールの遺跡なんだ。」

「……………!」「……………」

ユ一ノ「しかも、その遺跡を調査してわかったことなんだけど、その遺跡は海鳴にある遺跡と同じで真の紋章を封印していた物だったんだ。」

ユ一ノの話にユニが驚き、そのまま話しかける。

ユニ「それじゃ・・・さっき言ってたやつらが遺跡から持ち出した物ってまさか！」

クロノ「おそらくロストトギアである真の紋章の一つだろうね・・・」

クロノ「ロストトギア・真の紋章・・・人に取り付きその魂と融合し、宿主に自分の力を使わせるように宿主の周りの環境を操作する・・・ひどいものでは、宿主の周りにいる身近な者たちを死に至らしめ、その魂を盗み食らう物や、戦争を起こそうとする物まである。紋章魔法に使われる紋章の源流で全部で27個ある。」

クロノが説明するように紋章のことについて話し続ける。

クロノ「宿主に不老の力と莫大な力を与え、封印するには真の紋章を封印する為に作られた専用のシンダルの遺跡が必要。宿主に与える力の大きさに引き寄せられ、それをめぐって争いが起こり、ついには紋章の力の暴走で一つの世界が滅びることが起きたぐらいの危険な代物だ。」

ユニ「15年前のハルモニアもそれで滅びましたからね。」

クロノに続くようにユニが話す。



出てもらったことにしようよ。」

なのはがクロノに提案する。

クロノ「それは僕も考えた。でも上層部はこれを拒否して、聖時を  
囿にして真の紋章と犯人をおびき出そうと言っ考えたらしい……」

「

ユニ「そんな……。」

ヴィータ「おい！上層部は聖時がどうなるかと知ったことじゃない  
ってのか！」

シグナム「おちつけヴィータ！」

ヴィータ「なんだよ！シグナム！お前は聖時がどうなってもいいっ  
てのか！」

シグナム「だれもそんなこと思ってるものか！！」

「！」

シグナム「私とて聖時が心配だ。だがここで騒いでも何にもならん  
だろうが。」

ヴィータ「……。」

ヴィータがシグナムに言われ黙り込む。

はやて「クロノ君。上層部はなんでこんな方法を取ると思ったん？」

はやてがクロノに問いかける。

クロノ「上層部は15年前のことで、真の紋章の暴走を恐れている。あまり時間をかけると紋章を盗んだ者たちが紋章を暴走させるのではと思い、このような作戦を取ったんだ。・・・僕とて本意では無いんだが、事が事だけに、捜査と聖時の護衛を僕らに任せてもらえるようにするだけで手いっぱいだったんだ・・・。」

クロノが悔しそうに拳を握り締めると、なのはが話し始めた。

なのは「ねえクロノくん。聖時くんの護衛や紋章の捜査は私たちでおこなえるんだよね？」

クロノ「？、ああ」

なのは「つまり、私たちで聖時くんを守ってあげることができるんだよね！」

「「「「「「「「「「「」

ヴィータ「そつ、そつだよな！あたし達で聖時を守ってやればいいんだよな。がんばればいいんだよな！」

はやて「そやな！わたしらみんなで頑張ればいいんや！」

シグナム「そうですね、主はやて。」

リーン「そうなのです！」

フエイト「そうだね、私達みんなでがんばろう！」

シャマル「私も頑張ります！」

「ザフィーラ」そうだな。生前世話になった千尋との約束もあるしな。

「なのは」そうだね。千尋さんのためにもがんばろう！」

ヴィータ、はやて、シグナム、リーン、フエイト、シャマル、ザフィーラ、なのはが鼓舞する。

ユニ「みなさん……。ありがとうございます。どうか聖史さんの事、よろしく願います。」

ユニはなのは達に頭を下げる。

なのは「頭を上げてくださいよ、ユニさん。聖時くんは私たちみんなにとつても大切な弟分なんですから。」

ユニ「なのはさん。」

クロノ「それじゃ状況の説明が済んだのでこれからのことを話すよ。今回は管轄外世界での任務なため、管理局側はおおっぴらに行動できないし魔術協会の手前もある。だが相手は現地の人間の協力者がいる為探すのが困難だ。だからこちらでも現地の人間に協力者してもらおうと思う。そこで……魔法や管理局、こちら側のことを知っている来迎寺氏に協力を頼みたい。ユニ、来迎寺氏との橋渡し役をお願いできるか？」



はやて「なあ、みんなこの後の夕飯どないするん？」

なのは「え？」

はやて「いやな、せつかくみんな集まったんやから、聖時の入学祝いを兼ねて、夕飯はうちの家で

みんなで聖時に手料理を振るおうと思ってるんやけどどない？」

なのは「あ、いいね。」

フエイト「賛成。」

ヴィータ「あたしも賛成。」

シグナム「異論はありません。」

ザフィーラ「同じく。」

リン「リンも。」

ユニ「すいません、わざわざ。」

はやて「ええって、うちらも集まって騒ぎたかったやさかい。それより肝心の主役がないと話にならないやさかい、聖時への電話、よろしく願います。」

ユニ「はい。」

なのは「よし、それじゃさっそく材料を買出しに行こ。」



シャマル「ええ 今日ひさびさに腕を振るつわよ」

なのは達「「「「「「「「「「えー!?」「」「」「」「」

はやて「な、なあシャマル。まさかシャマルも何か料理を作るきか？」

シャマル「?はい、そうですね・・・」

はやて「そうですねどって・・・」

シャマル「いやほら、聖時くん、いつも私の手料理をおいしいって言つて残さず全部食べてくれるでしょ?ですから、入学祝で聖時くんが大好きな私の手料理をお腹一杯食べさせてあげようと思って」

はやて「いや、おいしいって言つて食べてくれるって・・・  
(シャマルの料理の処分にうちらが困てたから、聖時がいつも食べてくれているだけなんだけど・・・)」

シャマル「そうだ!いっそのこと、今日の夕飯は全部わたしが作るうかしら」

シグナム「い、いや、今日は聖時が主役だから、シャマルには聖時の方に集中して欲しい。

(すまん!聖時)」

ヴィータ「そ、そうだよ!そのほうが聖時も喜ぶよ!(怒まないでくれよ聖時)」

シャマル「そお？」

フェイト「うんうん。」

シャマル「それもそうね。それじゃお買い物に行きましょつか？」

上機嫌で買い物に向かうシャマルと、それを見送るその他のメンバー。

なのは「……………買い物リストに、胃薬を追加しなきゃいけない……………」

フェイト「……………うん。」

ユニ「聖時さん大丈夫かしら……………」

リン「リン心配です。」

ザフィーラ「いくら味覚と脳を切り離して物を食べるすべを身につけた聖時でも、シャマルが気合を

入れて作った料理では、胃の方がもたないかもしれん……………」

ヴィータ「あたし……………いつでも救急車呼べるようにしとく……………」

シグナム「すまん、そうしておいてくれ……………」

シャマル「みなさ〜ん！なにやってるんですか〜、おいていきますよ〜！〜！」

はやて「あ、ああ、今行くで〜。」

なのは「……みんな、行こっか……」

フェイト「……うん。」

悲痛な顔でシャマルの後を追いかけるなのは達……

この後、シャマルが作った手料理は、”過去最高の破壊力があつた”と、

聖時は後に語ったと言う……。

#### 第4話 下位元神霊（トライバルエンド）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ちなみに聖時の脳と味覚を切り離す荒業は、小さい頃からシャマルの料理の後始末をしてきた中で身につけたものです・・・ただこれは食べてる時はいいのですが、食べ終わった後の胃のダメージまでごまかせません・・・おそろべしシャマルの料理・・・です。

第5話 渡良瀬（わたらせ）ふたば（前書き）

どうも、昨夜降った雪のせいで朝、事故りそうになった剣 流星です。

・・・ほんと、あぶなかった・・・生きた心地がしませんでした。ま、それはさておき、第5話です。それではどうぞ！>

## 第5話 渡良瀬（わたらせ）ふたば

### 第5話 渡良瀬わたらせふたば

・・・昨夜はひどい目に遭った・・・。

昨日ユニから携帯で、夕食ははやてさんの家でみんなと一緒に食べる事になったと聞いたので、

はやてさんの家に行ったのだが、待っていたのはシャマルさんの手作り料理のフルコースだった。

苦心の末何とか食べ終えたのだが、その後の記憶がない・・・。

ユニの話では、僕は食べ終わった直後に気を失ったらしい・・・もつともシャマルさんは、僕が食べてお腹が一杯になって眠くなったため、そのまま寝てしまったと思っただけらしいが・・・

聖時「うっ、まだダメージが抜け切らない・・・」

味覚を脳から切り離すだけでは、最近耐えられなくなってきた・・・今度は味覚だけではなく、胃も切り離すすべてを身につけなくては・・・

そんな事を思いながら、僕はふらつきながら駅への道をピティと一緒に歩いていく。

駅では、才人とアキの二人が待っていてくれた。

聖時「おはよう・・・才人、アキ。」

才人・アキ「おはよう」

二人が同時に挨拶を返してくれる。

アキ「?、どうしたの顔色悪いわよ?」

才人「だいじょうぶかよ?」

聖時「ああ、なんとかね・・・」

アキ「そう?ならいいんだけど・・・」

そう言いながら僕らは駅に入っていった。

\*

ピティ（ところで聖時、あの子の事どっすなの?）

ピティが電車の中で小声で話しかけてきた。

才人「あの子の事って?」

ピティ「なに言ってるの!あの渡良瀬ふたばって子のことよ!」

聖時「ばかつ、声がデカイ」

僕はピティの口をふさぎ、周りを見渡した。  
どうやら気付かれていないみたいだ。

聖時「ほっ、で、その子をどうするって？」

僕が小声でみんなに話しかける。

アキ「その事なんだけど、あの子が昨日のことを、どの様に捉えているかが問題よね。」

才人「そうだな、そこんことを知らないと話にならない。」

アキ「だから私が、それとなく聞いてみよつと思つたの。」

聖時「アキが？」

アキ「ほら“女の子同士”の方が話しやすいでしょ？」

才人「女の子同士ね。」

聖時「とにかく、しばらくの間、ピティはなるべく身を隠すようにするよつに。」

ピティ「え〜。」

聖時「「え〜」じゃない。本来なら学校につれてこない方がいい方がいいんだぞ！」



ピティ（うう。わかったよ）

そんな話をしながら、学校に向かった。

\*

学校について教室に入り、席に着いて才人たちと“彼女にどうやって話を切り出そうか”と、話そつとしている時に、不意に声を掛けられた。

ふたば「あの、すみません！前に会ったこと覚えてませんか？」

聖時「へっ」

僕は思わず間抜けな声を出してしまった。

才人「（お、おい、どう言うことだよ、なんで彼女の方から話しかけてくるんだよ！）」

聖時「（し、知らないよ。）」

ふたば「えっと……あのぉ……」

聖時「？」

ふたば「あの・・・この前はありがとうございました。気が動転していて、お礼も言えなくて・・・」

聖時「えっと・・・この前・・・？」

彼女に会ったのは、昨日が初めてなはずなんだけど・・・

ふたば「そ、そんな・・・私のこと、覚えてないんですか？」

聖時「ご、ごめん」

ふたば「はう・・・」

彼女、渡良瀬さんが激しく落ち込む。僕はあわてて必死に思い出そうとする。

聖時「ちっ、ちよつと・・・アキ、何とかしてくれよ」（汗）

アキ「しょうがないわねえ・・・聖時、これ一個貸しだからね。それで、聖時はどこかでナンパでもしてたの？」

聖時「ナ、ナンパって・・・」

いきなり何を言い出すんだコイツは。

ふたば「あ、あの・・・違うんです。ラキが車に轢かれそうになった所を助けてくれたんです」

アキ「ラキ？」

ふたば「はい。えっと・・・私が飼っている犬のことです」

才人「ほほお・・・聖時もやるね。可愛い娘の前で格好ついたりなんかしちゃってさ」

才人がからかってくる。

聖時「別にそんなんじゃ・・・」

ふたば「あっ、あのお・・・」

渡良瀬さんが困っている。どうやら内気な子らしい。

アキ「あ、ごめなさい。そうそう、もう知っていると思うけど

私、藤宮アキ。」

才人「俺は平賀才人。それで・・・」

聖時「僕は神谷聖時。」

ふたば「渡良瀬ふたばです。」

聖時「所でさっき話を聞いて思い出したよ。

ごめん忘れてて。」

そう・・・ついさっき話を聞いて思い出したのである。たしか春休みの最中に

白い飼い犬がトラックに惹かれそうになったので、飛び出して助け

たのだった。

もっとも、その場面をなのはさんとユ二に見られて、二人の“お話し”を受けたため犬を助けたことよりも、その後にあった“お話し”のせいで今まで忘れていたのである。

ふたば「いえ、思い出してくれて私も一安心しました・・・だから気にしないでください。

・・・所で昨日のことなんですけど・・・。」

ギクツ、やはりきたか。

聖時「あの、そのことについてなんだけど「席につけー」

担任の先生が入ってきたので他の生徒たちが席に着く。

聖時「君も早く席に着いて、その話は昼休みにでも。」

ふたば「はっ、はい」

彼女はそそくさと自分の席に戻っていった。

とにかく昼休みに話すことになった。

ええ〜い、後は野となれ海と慣れだ！

そう思っつて先生の話に耳を傾けた。

先生「え〜今日はみんなさんに、このクラスに急遽転入することになった留学生を紹介します。

入ってきなさい。」

先生に呼ばれて一人の女子生徒が教室に入ってきた。  
髪は赤みのかかったロングで活発そうな感じの子である。

先生が黒板に女生徒の名前を書く。

先生「留学生のアルフ・ハラオンさんだ。みんな仲良くするように。」

「

アルフサイド

アルフ「アルフ・ハラオンです。よろしくお願いします」  
アルフ（ひくん。なんでこんなことになったんだろ）」

昨日一（アルフの回想）

昨日の聖時の入学祝いの夕食会の後……

アルフ「えっっ！！あたしに聖時のいる聖遼に入れだってっ！！」

アースラで言ってた、フェイトの聖時を守るいい方法とは、アルフに聖遼に入ってもらい、

聖時のクラスメイトになってガードをしてもらったことだった。

家では、ユニが付いているので良いが、学校ともなるとそうも行かない。

そこで、今一番手が空いているアルフに、聖時の学校での護衛を頼むことにしたのである。

フェイト「そう、アルフなら形態を変えて、聖時と同じ位の年に慣れるでしょう？それに、この中で

聖時に顔がばれてないのアルフぐらいだもん。」

そうなのである。聖時はアルフのことを、フェイトが飼っている犬だと思っているのである。

アルフ「それならザフィーラや、リーンでもいいじゃないか」

フェイト「ザフィーラは今回は真の紋章の探索メンバーだし、リーンはいないとはやてが魔法を使うときに困るでしょ？」

アルフ「そ、それに学校にどうやって転入するんだい？」

ユニ「その点につきましては心配ありません。あの学園は、来迎寺グループが設立した物です。

だから、それくらいどうとでもなります。」

なのは「そういえばユニさんは来迎寺グループの総帥である、聖時さんの伯父さんのエルネストさんからついさっき、総帥代行をまかされたんだよね。」

フェイト「なら問題ないね。」

ユニ「はい、明日からでもすぐに可能です。」

アルフ「あ、明日!!」

フェイト「なにか問題あるの?」

アルフ「い、いやないけど」

フェイト「なら問題ないよね」

アルフ「わかったよ、やります!やらせていただきます!!」

(回想終了)

クラス全員の視線がアルフに集まる。

アルフは当たり前障りのない自己紹介をした。

先生「それで席は……神谷の隣でいいな」

そう言って担任の教師は、聖時の開いている隣の席を指した。

アルフ(おっ、あの席なら聖時を見張るのにちょうどいいや。)

そう思いアルフは席に向かった。

席に座る時隣にいる聖時に、「これからよろしく」と挨拶をして席に着いた。

・・・その後、昼休みまでは何事もなく、授業を受けるだけの退屈な時間が

過ぎていった。

昼休み。隣の席の聖時が、才人とアキ、そして亜麻色の長髪の内気  
そうな子と一緒に教室を  
出て行く所を見た。．．．．．なんだか少し様子が変わったので、ア  
ルフは後を付けてみた。  
廊下を歩き、階段を上る。．．．．．どうやら屋上に行くつもりらしい。  
アルフは気付かれないよう注意しながら屋上へと向かった。

\*

聖時サイト

昼休みになり、才人達と一緒に渡良瀬さんを連れて屋上上がった。  
外は良く晴れた天気なのでポカポカしてとても気持ちがいい。  
このままここで昼寝でもすればとても気持ちいいだろうが、今回は  
そうもいかない。  
周りにだれもいないのを確認してから話し始める。

聖時「さて．．．．．何処から話そうか．．．」

ふたば「．．．．．」

才人「．．．．．」

アキ「．．．．．」



僕が言葉を選びながら渡良瀬さんに話しかける。

聖時「えっと・・・渡良瀬さん、昨日君は突然笑い始めたよね？」

ふたば「はっ、はい」

聖時「なんで？」

ふたば「えっーと・・・、こんなこと言うとおかしいんじゃないか  
と思われるんだけど・・・実はあの時、あなたたちの側に妖精み  
たいな子が浮かんでて、その子が突然面白い顔をしたから  
つい笑っちゃって・・・」

聖時「はー、やっぱりか・・・」

渡良瀬さんは、何がなんだか分からないと言う顔をしていた。

聖時「渡良瀬さん・・・君が見た妖精は・・・僕の使い魔なんだよ。」

ふたば「へっ？」

そう言っつて僕は近くに隠れてたピティに声をかける。

聖時「おーい、ピティ、出てきていいよ。」

ピティ「・・・やっぱり話しちゃうの？」

そう言いながら、ピティが僕の側まで飛んできた。

ふたば「!？」

渡良瀬さんが驚いている。

ピティ「はじめまして 聖時の使い魔をしているピティです . . .  
て、

言うか本当に話しちゃうんだ . . . だいじょうぶなの？」

聖時「うん、まだ会ってからそんなにたつてないけど、渡良瀬さん  
なら大丈夫だと思う。

なのはさんやはやてさんと同じ優しくて人を決して裏切らない瞳を  
してるもん。」

ふたば「えっ！」

渡良瀬さんが顔を赤らめる。なんで赤いんだろう？

才人「ふ〜ん、確かに、人の秘密をベラベラしゃべるような子には  
見えないしな . . . .」

アキ「聖時がいったって言うんなら私も賛成。」

ふたば「あっ、あの . . . .」

渡良瀬さんが少し心配そうな顔で、おずおずと話しかける。

聖時「ああっ、ごめん。渡良瀬さん . . . .これから話すことをよ  
く聞いてね。」

双葉「はっ、はい！」

渡良瀬さんがそう言うと、僕は話し始めた。

ピティが生まれた使い魔の卵を

行方不明になった父さんからもらったこと。そこからピティが生まれたこと。

使い魔のことは秘密にしなければならないこと。

ピティは普通の人には見えないこと。

ピティ達使い魔を見るには、魔力を持っていなければならないこと。才人とアキにはその魔力が少しあり、ピティの姿が見えること。そして・・

ピティが僕にとっての大切な家族であるということ話を話した。

僕は話し終わると、渡良瀬さんを正面からみて、

聖時「渡良瀬さんにこの事を話したのは、渡良瀬さんなら秘密にしてくれると

思ったからなんだ・・。だから、渡良瀬さん！どうかピティの事を秘密にしてください！お願いします！」

そう言っ僕は頭を深々と下げた。

ふたば「え！？ちょ、ちょっと待って、頭を上げて！だっ大丈夫だっって、このことは誰にも話さないから。」

聖時「えっ」

ふたば「あなた達は私を信じて、この事を話してくれたんだよね？」

聖時「うっ、うん。」

ふたば「その気持ち、私には裏切れないよ。それに、神谷さんにはラキを助けてもらったしね。」

そう言つて渡良瀬さんは笑顔を向けてくれた。

聖時「あつ、ありがとう。」

その顔がとてもかわいらしくて、思わず赤面してしまった。

才人「おやゝ、顔が赤いけどどうしたのかな。」

ピティ「今日そんなに暑かったかな。」

聖時「おつ、おい才人！ピティ！」

才人「へへ。」

才人とピティは、いたいたずらっ子のような顔して僕をからかった。

アキ「まったくもう、ま、これからもよろしくね。渡良瀬さん。」

ふたば「はい、よろしくお願いします。藤宮さん。」

アキ「アキでいいわよ。」

ふたば「あつ、はい！それでは私もふたばでいいです。」

聖時「じゃあ、僕も聖時でいいよ。」



さらさらないよ。」

聖時「えっ」

アルフ「フェイトの弟分であるあんたを困らせたら、フェイトが悲しむだろ？」

聖時「えっ、フェイトさんを知ってるの？」

アルフ「あたりまえさ。わたしはフェイトの親戚なんだからね。」

アルフ（本当は、使い魔なんだけど・・・）

アキ「あっ、そうか、ハラオンって言うファミリーネーム、どこかで聞いたことがあると思ったら・・・」

なるほど、そう言うことだったのか。

ふたば「あの・・・フェイトさんって？」

才人「聖時のことを小さい頃から面倒を見てくれた人の一人さ。」

聖時「それじゃ、黙っていてももらえるんだね？」

アルフ「もちろんさ！・・・とっ言うわけで、これからも私の事もよろしく」

聖時「あっ、はい。」

ふたば「よ、よろしくお願いします。」

才人「・・・お願いします」

アキ「よろしくお願いします」

ピティ「よ、よろしく」

みんな少し複雑そうな顔をしていた。

なんか軽そうで、少し不安が残るけど・・・まっ、何とかなるか。

聖時「それじゃ、お昼にしよう。早くしないと食べる時間がなくなっちゃうよ。」

才人「そうしようぜ、おれ、さっきから腹へってよ」

アキ「みんなお弁当だね、双葉は？」

ふたば「私もお弁当です」

アルフ「私もそうだよ。」

聖時「それじゃ、このままここで食べるとしようか？」

アルフ「あっ、あたし弁当教室だ。」

ふたば「私もです。早く取ってこないと。ちょっと待っててください。」

そう言って、ふたばとアルフは駆け出して教室に向かった。

ピティ「なんだか賑やかになってきたね」

聖時「ああ、これから、楽しくなりそうだ」

僕は新たに秘密を共有する友達が出来たことで、この生活がさらに楽しい物になりそうな予感を感じていた。

くオマケく

ふたば「ところで、一つ気になることがあるんだけど……」

聖時「？何」

ふたば「神谷さんは女の子なのに、どうして男子の制服を着ているの？」

聖時「へっ！？」

ふたば「あっ、あの……」

聖時「……僕……男なんだけど……」

ふたば「えー！」「ごめんなさい！」

聖時「はははは……いいよ……気にしないで……」



第5話 渡良瀬（わたらせ）ふたば（後書き）

え、基本オマケがある時はおまけコーナーはやすみです。  
楽しみにしてる方、すいません。次話ではあるので楽しみにしてい  
てください。

## 第6話 特務捜査課・前編（前書き）

どうも作者の剣 流星です。

今回初めて戦闘場面を書きました。

結構むずかしいですね。

ちょっとツツコミ所満載でしょうが

第6話です。どうぞ。

## 第6話 特務捜査課・前編

### 第6話 特務捜査課（前編）

ここは警視庁の中にある、ある一室。その扉にはこう書かれてある。

“特務捜査課”と。

その特務捜査課の一室に体つきのいい大柄なスーツ姿の男が、書類に目を通していた。

そこに、扉を開けて、同じようなスーツ姿の端正な顔立ちの20代半の男が入ってきた。

男性「課長<sup>ボス</sup>」

????「四乃森<sup>しのもり</sup>か。」

ボスと呼ばれた男は書類に目を通しながら答えた。

四乃森「・・・さきほど、こんな情報が・・・」

そう言って持っていた書類を差し出した。

????「・・・管理局側はこの事を？」

四乃森「むろん、つかんできます。どうやら例の“エース・オブ・エース”らを差し向けるようです。」

「????」そうか……。四乃森、出撃ぞ！<sup>でる</sup>斉藤にも連絡を入れろ  
！」

四乃森「了解、課長<sup>ホス</sup>」

\*

郊外にある廃墟……ここに紋章を盗んだ組織のアジトがあると  
いう情報をつかみ、

高町なのはとシグナムは乗り込んでいた。

なのは「……………だれもいないね……………」

シグナム「ああ、どうやら引き上げた跡らしい。」

薄暗い建物の中には、いくつかの備品が散らばっていて、そこがす  
でにアジトとしての機能を  
はたしてないことがわかる。

バリヤージャケット姿の二人は手分けして建物の中を探索した。

シグナムと別れ、なのはは建物の中を探索した。  
しばらく歩くと、広い部屋に出た。

そこには、青白いクリスタルのようなベットが円を描くように置かれており、その中心には同じような材質で出来た台座のような物がある。台座は周りにあるベットに台座と同じ材質のラインが伸びていた。どうやら何かの装置のようだ。

なのは「何の装置だろ……」

なのはは装置を触りながらつぶやいた。

シグナム「高町！こっちにきてみる！」

ふいにシグナムの声が響いたので、あわてて声のした方向に向かう。

なのは「どうしたの？シグナ……！！！」

なのははシグナムの視線の先の物を見て驚愕した。

そこには、干からびた何十もの人の死体が積み上げられていた。

なのは「な……なんなの……これ。」

シグナム「……たぶん……やつらの手にかかった犠牲者だろう……」

それにしても……どうやってたらこんなふうに……」

????「教えて欲しいか、なら教えてやるよ。」

不意に二人の後ろから声が聞こえたので、二人はその場からはじかれるように飛びのき、  
声のした方向へ構えた。

薄暗い、声の方向を目を凝らして見てみると、誰かがこちらに歩いてきた。

やがて姿が捉えられる距離まで来た時、その男の姿が目に見えた。  
黒い帽子に黒い服、髪は金髪で長く、三つ編みにしており、瞳は赤と蒼のオッドアイ。

殺気の塊のような感じのする男だ。

シグナム「何者だ。」

なのは「教えるって何を?!」

二人は男が発する殺気に飲まれないよう、必死に自分を奮い立たせる。

???「ああ、そこに転がっている連中が、どうしてそうなったかをな。」

なのは「えっ」

???「そいつらは、はぐれ元神霊もとみつたまという存在らしい」

シグナム「はぐれ元神霊?」

???「そう、本来は、清き処と言う場所に住んでいるのだが、時折、そこから出て

行く者もいるそうだ・・・」

なのは「それがはぐれ元神霊・・・」

????「そう、そいつらは装置にかけられて、テラを抜き取られたからそうなった。」

シグナム「テラを抜き取られた？」

????「テラってのは、言い換えれば自然界に流れてる“気”みたいなもんで、

人の運なんかも司ってるんだと。」

男は愉快そうに笑いながら、話を進める。

????「そんなもんを抜きとれば、干からびて死んじまうのはあたりまえだよな。」

なのは「な、それじゃ・・・この人達は」

シグナム「やつらの手に掛かって、テラを抜き取られた人達のなれのはて・・・」

なのは「ひっ、ひどい・・・」

????「ほんと、ひどいよな、人を殺<sup>や</sup>るんなら、剣で叩き切った方がずっといいのにな!」

なのは「シグナム」「!?!?」「」

男の殺気が膨れ上がる。

二人は構えて臨戦態勢を整える。

「????」そういえば自己紹介がまだだったな。おれの名はユーバ、さっき話したテラを抜き取った連中の……言ってしまうは仲間……みたいなもんだがな。」

そう言つて、男は何処からか出した剣を両手に持ち構える。

ユーバ「こい！きさまらの顔を恐怖の色に染め上げてやる！」

シグナムはユーバーを敵と判断し、すぐに切りかかる。

シグナム「高町！お前は出るな！狭い屋内では、お前の力を発揮する事が出来ない！」

なのは「はっ、はい」

シグナムとユーバの双剣がぶつかる。

ガキッ！

シグナム「くっ！」

ユーバ「くくくっ、いい反応だ。」

シグナムのレヴァンティンとユーバの双剣がぶつかり火花を散らす。数度打ち合つてシグナムは後退する。

シグナム（かなりの使い手だ……気を一瞬でも抜けばこちらがヤラ



れる！)

ユーバ「くくくっ、どうした、もう終わりか？」

シグナム「なめるな！！」

シグナムはユーバが切りかかってきた左の剣をレヴァンティンで内側から外側にそらす。

そして懐にり、右の剣を、左手で剣を持ってた腕ごと押さえつけ、左の剣を逸らしたレヴァンティンで切りつけた。

シグナム(とつた！)

シグナムは確かな手ごたえを感じたが、切られたユーバはニヤリと笑って消えた。

シグナム「これは、幻影！？」

なのは「シグナムさん！！」

なのはの声で我に返り殺気を感じた背後に振り向く。

そこには二人のユーバがいて、こちらに切りかかってきた。

シグナム「くっ！」

とつさにレヴァンティンで防ごうとしたが間に合わず、二人のユーバは一撃づつシグナムの胸に斬撃を刻みつけ、×の字の傷をつけた後、二人が重なり一人になる。

ドッ！

シグナムが膝をつき倒れる。倒れた側から、シグナムの血があふれ出てくる。

シグナム「う・・・うつつ、馬鹿な・・・実体をもった幻影だと・・・」

なのは「シグナムさん！」

ユーバ「ふん、弱すぎる。これでは切り応えがなさ過ぎる。かつてのベルカの騎士、

“烈火の将”も、平和ボケして腕が鈍ったか？」

ユーバはもはや興味を失った物を見るようにシグナムを見ながら近づいていきトドメを刺そうと剣を振り上げる。

ユーバ「これで終わりだ・・・！？」

とつじよユーバの周りに多数の桃色の魔力球が現れた。なのはの魔法、アクセルシュータである。

なのは「動かないで！！」

なのはは、ユーバに警告する。

ユーバ「さすが“エース・オブ・エース”僅かな時間でこれほどの魔力球を作るとは。

・・・だがおれの動きを封じるなら、魔力球ではなく、バインドにするべきだったな。」

なのは「なっ何を言って……は!？」

なのははとっさに殺気を感じた方にプロテクションを張った。

ガキッ

そこには双剣を振り下ろして、なのはに襲い掛かろうとし、自分の攻撃が防がれたユーバがいた。

ユーバ「いい反応だ……良く防いだな。だが、これはどうする!」

突如ユーバは三人に増え、残りのユーバもなのはに襲い掛かった。

ユーバ達の剣がなのはのプロテクションにぶつかると、防ぎきれずに碎かれ、剣がそのまま

なのはを切りつける。

なのは「うあ!」

なのははそのまま血を流しながら、倒れる。

シグナム「高町!」

シグナムが叫ぶ。

三人のユーバは一人になり、倒れてるなのはに話しかけた。

ユーバ「おしかったな。」

なのは「う……う……」

なのは何とか立ち上がり構える。  
プロテクションで威力がおちていたので何とか立ち上がることが出来た。

なのは（なんとか立てるけど、このままじゃ・・・）

なのは、倒れてるシグナムの方を見る、傷が深いのか立ち上がるこ  
とが出来ないでいる。

なのは（シグナムさんの傷、けっこう深そうだし、長引いたらまず  
い。何とか隙を突いてここから  
脱出しなくちゃ）

なのは「レージングハート！」

『アクセルシュータ』

レージングハートから電子音声が聞こえる。  
なのは再びアクセルシュータを放った。

ユーバ「むだだ、その魔力球ではおれの動きは捉えられない。」

だがアクセルシュータはユーバに向かわず、天井に向かっていった。

ユーバ「なに！」

アクセルシュータにより天井が崩壊する。

ユーバ「ちっ！」

ユーバは崩れた天井のガレキを避けるために回避行動を取る。

なのははその隙に、シグナムを肩に担ぎ、飛行魔法で飛んで逃げた。

なのは「シグナムさん大丈夫ですか！」

シグナム「高町……すまない。」

なのは「いいですよ、それよりここから脱出しますからしつかり？  
まっけていてください。」

なのはは建物の出口に向かって飛んでいき、建物の出口から外に出た。

なのは「とりあえず、通信可能圏まで飛んで行って……て、え！？」

なのはは驚愕する。建物を中心に結界が張られたおり、脱出できないのである。

ユーバ「無駄だ。今ここを中心に結界が張られている。脱出は不可能だ。」

後ろから声が聞こえ振り返ると、ユーバが歩いてこちらに近づいてきた。

なのは「いったいいつの間……」

なのはがユーバと対峙しつばやいてると。

「???「ユーバ……結界の設置は終わった」

突然声が出て、その方向に顔を向けると、漆黒の鎧と兜で身を包み、赤黒い片刃の剣を携えた人物がこちらに歩いてきた。

ユーバ「メデイウムか、ご苦労」

ユーバはメデイウムといった鎧兜の男に声をかけた。

なのは（もう一人の間……まずい）

なのははあせった。ユーバだけでも逃げ切れるわからないのに、敵がもう一人増えたのである。オマケに、こちらは動けなくなったシグナムをかかえている……状況は最悪だ。

ユーバ「さあ、オレに切られて潔く死ぬか？それとも……」

そう言いながら右手の剣を地面の刺して、開いた右手をなのはに向ける。

ユーバ「バラバラになって死ぬか！」

向けられた右手が怪しく光ると、なのは達の体が金縛りにあったかのように動かなくなり体が空に浮かびあがる。

なのは「うつつ!!?」

シグナム「ぐつつツ!!?」

ユーバ「闘魔傀儡<sup>とうまくわい</sup>掌<sup>て</sup>!!?」

なのは「うあああー!!」  
シグナム「ぐううううう!!」

ユーバ「コイツは昔、魔界に行った時に影みたいなやつが使っていたのを、見よう見まねで使えるようになった技でな、暗黒闘気によつて相手の全身の自由を奪う!・・これでもうお前らはオレの操り人形も同然!」

なのは「くううう」  
シグナム「く、くそっ」

ユーバ「あきらめ時だな・・!」

そういつてユーバが指を折ると、なのはとシグナムの手からデバイスが落ちる。

そして、左手の剣の切っ先をなのは達に向け止めを刺そうとする。

ユーバ「これで終わりだ!」

やられる!なのは達がそう思った瞬間、

???「手負いの小娘二人を追い詰めて油断する、その甘さが貴様の命取りだ!」

突然声が聞こえたと思うと、建物の壁が吹っ飛び、中から何者かが黒い刀でユーバに襲い掛かっていった。

???「黒騎士ユーバ!その首もらった!」

ガキッ

男の刀での突きを、ユーバは地面から引き抜いた剣と持っている剣で防いでいた。

ドッ！

傀儡掌が切れて地面に落ちるなのは達。

首だけを起こしユーバに切りかかってきた人物を見る。

なのは「うつ・・あの人はいったい・・・？」

ユーバ「牙突<sup>がとつ</sup>・・おまえか、特務捜査課・・斉藤<sup>さいとう</sup>夜天<sup>やてん</sup>！」

紺のバリヤージャケットを着、鋭い目を持った狼のような感じの男・・  
・・斉藤はユーバから離れ  
再び構えた。

その構えは異常で、左手一本で刀を持ち、左半身を下げ、右手を突き出し、身をかがめる構えである。

ユーバ「相変わらずの、馬鹿の一つ覚えの牙突か」

ユーバは斉藤に何か言うが、斉藤は相手にしない。  
しかし彼の刀から、斉藤の声とは別の声が聞こえた。

????「おい、馬鹿の一つ覚えと言われてるぞ？」

斉藤「黙っている星辰剣。」

星辰剣「ふむ」



斉藤に言われて星辰剣は押し黙った。

ユーバ「しかし貴様も馬鹿な男だ。貴様一人が来たところで状況がどうにかなるとでも思ったのか？」

斉藤「阿呆が、この俺が、敵地にわざわざ一人で来るとでも思ってたのか？」

ユーバ「なに!？」

????「その通りだ」

突然、メデイウムの後ろから声が聞こえ、メデイウムは振り向き剣を構えた。

ユーバ「貴様は……四乃森連矢<sup>しのもりれんや</sup>……」

白いコートとその中に忍装束のようなバリヤージャケットを身につけ、双剣をもった男、

四乃森連矢がそこに立っていた。

四乃森「……俺だけじゃない。」

その声に応えるように、建物の上に大柄の男が現れた。

その手には、巨大な日本刀をもち、赤い軍服のようなバリヤージャケットに身を包んでいた。

????「そこまでだユーバ!これ以上その者たちに手出しはさせん!」

ユーバ「ちつ、東郷大地……やつまで来たのか……」

ユーバはそう言うと、構えを解きメディウムに声を掛けた。

ユーバ「メディウム、引き上げるぞ。」

メディウム「……いいのか」

ユーバ「元々、ただの様子見だったからな。それに第97管轄外世界の担当は

黎真だ。やつのために、俺がやつらと戦ってやる義理はない。」

四乃森「……尻尾まいて逃げるきか。」

ユーバ「真の紋章の所持者3人を相手にするほど、オレも馬鹿じゃない。」

そう言って撤退しようとした。

斉藤「このまま逃げきれなくても思っているのか。」

ユーバ「思っていないさ。」

ユーバは懐から筒のような物を数本出すと、辺りに投げながら何かをつぶやいた。

ユーバ「デルパ！」

筒から数体の魔物が出てきた。赤茶色の巨大なリビングアーマー、かつての魔影軍団最強の鎧兵、デッド・アーマー。そして……

ドン！

踏みつける足で地響きを起こす巨体、数本の頭を持つドラゴン・・・  
ヒドラが出てきた。

ユーバ「超竜軍団のヴェルザーの所からこのデカブツを借りてきたから、貴様らはこれと遊んでいる。」

そう言うとメディウムが開いた転送魔方陣の中に、ユーバはメディウムもろとも消えていった。

ヒドラ「グオオオオオオツ」

やつらが残した魔物が襲い掛かる。

倒れこんだままの状態で今まで事態を見ていたなのはは、立ち上がるうとする。

なのは「ううっ・・・なんとかしないと・・・」

そう言っつて体に鞭を打ち立ち上がるが・・・しかし、

四乃森「・・・やめとけ、今のお前では無理だ。」

四乃森連矢が、いつの間にか近寄って声を掛けてきた。

なのは「けど、・・・」

なのはが何かを言おうとすると、斉藤がなのはに近づき話しかける。

斉藤「目の前でうるちよろされると目障りなんだ、ケガ人は引っ込んでろ阿呆が」

なのは「あ、阿呆!？」

なのは何か叫んだが、斉藤は“聴く耳持たず”といった感じで前に出た。

それに続くように四乃森も前に出る。

東郷「四乃森! 斉藤! 周りの雑魚は任せた。俺はデカイのをやる!」

四乃森「了解」

斉藤「了解」

そう言うと、二人はヒドラ以外の魔物の群れに向かって行った。

なのは「まっ、まっであなたたちだけじゃ・・・」

しかしなのはの言葉が聞こえてなかったのか斉藤は魔物の群れの前で構えを取る。

斉藤「悪・即・斬」

斉藤がそう言って牙突の構えを取ると

彼のデバイス、夜の紋章の化身、星辰剣が光を放ちそれが斉藤自身を包み込む。

斉藤は光を纏ったまま、牙突で突っ込んで行く。

斉藤「牙突！」

光となった斉藤の牙突を受けて、デッド・アーマーの群れは一瞬で物言わぬ鉄くずになった。

なのはは斉藤の強さに度肝を抜かれてた。

なのは（あのリビングアーマー、強い防御の魔力が掛かってたはずなのに・・・）

なのはは、続いて四乃森連矢の方に顔を向けた。

四乃森「・・・ゆくぞ・・・双月。」

双月『ハッ』

そういつて両手の双剣、デバイスの双月を逆手に持ち、振りかぶる。右手にある真の風の紋章と双剣がひかり輝き、風を発生させる。

四乃森の周りに風が集まり、それに流されるように残りのデッド・アーマーが集まってくる。

四乃森「おんみつおにわはしき隠密御庭番式、こたけにとうりゅうおつぎ小太刀二刀流奥義、かいてんけんぶろくれん回転剣舞六連！！」

四乃森が体を回転させ、発生した風の刃による斬激の六連が放たれる。

さながら竜巻のような風の刃は、風で集まったデッド・アーマーを切り刻む。

風が収まった時には、魔物の群れは物言わぬ鉄くずになっていた。

ドン！

ヒドラ「グオオオオオッ」

なのは次にヒドラと対峙している東郷大地に目を向けた。

なのは「いくらなんでもあんなの一人じゃ……」

そんななのはに四乃森が声をかける。

四乃森「心配はいらない……、課長はこの中のだれよりも強い。」

そう言つて、東郷大地の方へ視線を向けた。

なのはも続けて視線を戻した。

ヒドラ「グオオオオオッ」

ヒドラは口に炎の力をためて、炎のブレスで攻撃しようとする。

東郷「破山剣！モード式式！」

破山剣『承知！』

破山剣から声がすると、刀の鍔が左右に割れ、刀身が変化して巨大な剣に変形した。

東郷の右腕の真の土の紋章がひかり輝き、刀身に伝わっていく。

東郷「我が名は大地、東郷大地！我こそは、悪を断つ剣なり！！」

東郷が飛び上がると、ヒドラのブレスが発射されたのは、ほぼ同時だった。



くおまけコーナーく

ピ ピティと

ユ ユニの

二人 おまけコーナー

ピ は、いい、四回目になりましたこのおまけコーナー。  
司会進行役のピティです。

ユ 解説のユニです。

ピ さて今回は、本編に出てきた3人の新キャラについての解説  
をします。え〜と、まずは一番最初にユーバに攻撃を仕掛けた齊藤  
夜天うやてんです。

ユ 齊藤夜天さんは、真の紋章の一つ夜の紋章が具現化した星辰  
剣をもつ、牙突の使い手です。

ピ こいつさ〜、苗字が齊藤だから、るろ剣の齊藤一の子孫か何  
かなわけ？

ユ ええ、まあ・・・齊藤夜天は齊藤一の子孫に当たります。

ピ やっぱり。けどなんで齊藤の姓なの？齊藤一の子孫なら藤田  
の姓じゃないの？



ユ　　そ、そこは作者が、” 斉藤一の子孫なら藤田よりも斉藤の姓の方がわかりやすそうだから” だそうです。

ピ　なるほどね。たしかにそれは言ってる。・・・じゃあその件に関してはいいとして次の質問。斉藤が持つてる星辰剣の形が、幻想水滸伝に出てくる形と違って、日本刀に近形をしてるのはなぜなの？

ユ　それはですね、斉藤さんが一番最初に見つけた星辰剣はたしかに幻想水滸伝に出てくる形をしてました。けどその時の星辰剣は、ボロボロの状態で今にも壊れてしまいそうだった為、斉藤さんは星辰剣を修復してもらったようにデバイスマスターに頼み、その時に、剣の形が日本刀の形に変更されたのです。元の形のままだと牙突が打ちにくそうですしね。

ピ　たしかに、元の形のままだと牙突、打ちにくそうだもんね。んじゃ次、四乃森連矢について。

ユ　四乃森さんは、斉藤さんと同じで、四乃森蒼紫しのもりあおしの子孫、キラのイメージはちょっと紳士的な四乃森蒼紫と言う感じで作りました。あと設定では、藤宮アキさんの従兄妹と言う形になっています。

ピ　えっ！アキと従兄妹同士なの！？

ユ　はい、アキさんのお母様が、四乃森さんのお父様の妹に当たるようです。

ピ　なんか意外な所で繋がってるね。

ユ　ええ、あと四乃森さんには、京都の実家に妹さんがいるそう

です。あと使い魔を持っているそうなんですが、ここでは割合させてもらいます。

ピ　　そんじゃ最後は、出てきた早々ヒドラを真つ二つにした、とんでもないヤツ、  
東郷大地とうこうだいちについてなんだけど・・・コイツ、元キャラがなんなのかが丸わかりだね・・・。

ユ　　ええ、まあ・・・スパロボやっている人には丸わかりですよね・・・、作者いわく、”日本人にしたゼ○ガー・ゾ○ボ○ト”だそうです。

ピ　　ゼ○ガー・ゾ○ボ○トね・・・たしかに前口上といい、その通りだよな。

ユ　　作者は、斉藤と四乃森の上司にあたる人は、これぐらいケレシミがないと勤まらなそうなのでこういうキャラにしたそうです。ま、作者自身がゼ○ガー・ゾ○ボ○トがお気に入りキャラということもあるのですが・・・

ピ　　かなりのお気に入りだったみたいだったよね。第2次スパロボでゼ○ガー・ゾ○ボ○トが主人公キャラとして出てきた時、戦闘場面でバツクのBGM、”悪を断つ剣”が掛かりながら、例の前口上を口にして斬艦刀を手に振るったのを見た時、一発でファンになっちゃったぐらいだもんね。

ユ　　ええ、しかも攻撃では参式の斬艦刀ばかりを使って、そのシーンだけは必ず見るぐらいの徹底ぶりですからね。

ピ　　・・・ほとんど病気だね。

ユ　ま、まあ思い入れがあるキャラがあるのはいいことじゃない  
ですか。

ピ　だ、だよね！うん、・・・ということでも今回はいいまで。

ユ　それではみなさん！

二人　まったね〜

## 第6話 特務捜査課・前編（後書き）

今回は前編・後編に分かれます。

それにしても、シグナムが弱く書かれてるように思われていますがそこは突っ込まないでくれると助かります。それでは。

第7話 特務捜査課・後編（前書き）

どうも 剣 流星です。

最近作品を書く時間がなかなか取れなくて困っています。

しかし、がんばって執筆しました。

では第7話どうぞ。

## 第7話 特務捜査課・後編

### 第7話 特務捜査課・後編

はやて「なのはちゃん！シグナム！」  
フェイト「なのはー！！」

はやてとフェイトが二人に駆け寄る。  
その後に、ヴィータ、シヤマルらが続く。

あの後、ヒドラが倒れたせいなのか、結界が解けた。  
なのはは、通信が可能になったので、はやて達に連絡を入れた。  
通信を受けたはやて達は、すごく心配していたのか、通信に飛びつく感じで出てきた。

そして、自分たちが襲撃され負傷したと聞くと、飛び出すようにア  
ースラを出たと言う。

フェイト「なのは！ケガは？」  
はやて「なのはちゃんケガは？シグナムは！？」

斉藤「さわぐな！タヌキ娘、キツネ娘。イタチ娘のケガはたいしたことはない。」

壁にもたれながらタバコを吸っている男、斉藤夜天が叫んだ。

はやて「た、たぬき娘！？」

フエイト「キツネって・・・私のこと？」

なのは「なんで私がイタチ!？」

斉藤「うん？前にお前の資料を見たとき、イタチと一緒に写ってる写真が多かったからだが？」

なのは「・・・それってユーノくんのこと？」

フエイト「・・・たぶん。」

はやて「そんなことより、あんだだれや？初対面の人に対してずいぶん失礼やな？」

はやて斉藤に怪訝そうな顔で話しかけるが、斉藤はそんな事は気にしないという感じでタバコを吹かせ。

斉藤「そんな事はどうでもいい。」

はやて「どうでもって・・・。」

斉藤「それより、その緑のおんな!」

斉藤は後ろで二人の会話を聞いてたシャマルに話しかける。

シャマル「へっ、わ、わたしですか!？」

斉藤「そうだ、回復魔法が使えるな？」

シャマル「はっ、はい!」

斉藤「なら、さっさとそこに寝ているピンク女を治してやれ。四乃森が応急処置をしておいたから今すぐに命の危険はないが、治療は早い方がいい。」

シヤマル「!? たつ、たいへん」

シヤマルは四乃森の側で寝かされているシグナムの横に駆け寄り、クラールヴィントをつかつて、シグナムの治療に入る。その後ろではやてがシグナムを心配そうに見る。

四乃森「・・・心配ない。急所はかるうじて外れている。応急処置もほどこした。傷跡も残らん。」

四乃森が心配そうにしてるはやてを励まそうと話しかける。

はやて「えっ!? あ、はい!」

はやて（うわゝ、ごつつええ男やゝ。ちょっと好みかも。）

はやて「あっ、あの!」

四乃森「?」

はやて「シグナムに応急処置をしてくれたのはあなたですか? どうもありがとうございます。」

四乃森「いや、礼を言われるほどのことじゃない。」



はやて「それでも、礼を言わせてください。うちの家族を助けても  
るおたんやから。」

四乃森「家族？・・・そうか、そうだな。なら素直に受け取って  
おくとしよう。」

そう言つて四乃森ははやてに微笑んだ。

はやて「／＼／」

それを見たはやては顔を赤くした。思わずドキツとするような微笑  
である。

ヴィータ「・・・ところで、いったいお前らにもんだ？どうやら  
なのはやシグナムが助けられたみたいだけど。」

いままでみんなの後ろで見てたヴィータが斉藤、四乃森、東郷をみ  
て言い放つ。

なのは「あ、そういえば今まで慌てて聞くのを忘れてたけど、あな  
たたちはいったい・・・」

なのはが斉藤らに問いかけようとした時に、ユニの声がそれを遮つ  
た。

ユニ「警視庁、対魔術、対魔法特別捜査課・・・彼らはその人  
たちよ。」

ユニが歩きながらみんなに近づいていき、斉藤の横に腕を組んで立  
っている東郷に話しかけた。

ユニ「おひさしぶりです東郷さん。」

東郷「ひさしいな。変わりはないよだな。」

東郷はユニに返事をした。

ヴィータ「おっ、おい！そいつら知り合いなのか？」

ヴィータが疑問をユニにぶつけた。

ユニ「ええ、15年前、東郷さんと斉藤さんは、千尋さんや聖さんと一緒に戦った仲間なのです。」

なのは「えっ、という事は・・・」

フェイト「この人達も魔法が使えるの？」

ユニ「ええ、この人達は、警視庁が6年前の冬樹市で起こった事件を教訓に作った、魔術、魔法に関する事件を取り扱う専門の部署の人達なのです。」

ヴィータ「なっ、そんな物があつたのかよ。」

ユニ「はい、今までは魔術の事は協会に、魔法の事は管理局に任せていましたけど、それだと動き出すのに時間がかかり、被害が大きくなりやすいのです。現に6年前に起きた冬樹市の連続通り魔事件で、協会は魔術師が事を起こしていたと知っても隠蔽の方ばかりに力を裂き、事件解決になかなか動こうとしなかった。」

ザフィーラ「聞いた事がある。たしか聖杯とか言うロストロギアを、7人の魔術師が英霊と言う特別な使い魔を呼び出し、争そうと言うくだらん戦いだったな。その戦いのなかで、通り魔事件の犯人がその数合わせで英霊を呼び出す力を与えられたと言う。そして犯人はその英霊と共に殺人を繰り返し、犠牲者が十数人の裳およんだと言う。」

ヴィータ「なんだよそれ・・・それじゃその聖杯とか言う物を奪い合う、くだらねー魔術師達のゲームのせいで、関係ない人が何人も死んだってことかよ！ちっ、これだから魔術師ってのは嫌いなんだ！」

ヴィータが憤る。

ユニ「だから、このままではいけないと思い、聖時さんの叔父であるエルネストさんが警視庁の上層部に掛け合い、1年前組織したものが・・・」

東郷「われら特務捜査課と言うわけだ・・・。お初にお目に掛ける、わたしの名は東郷大地、特務捜査課の責任者をしている。そして向こうに居るのが部下の斉藤夜天と四乃森連矢だ。」

そう言つて東郷は斉藤と四乃森を紹介した。

はやて（へへ、このひと四乃森連矢さんと言うんか。）  
とはやては四乃森の名前を聞いてそんな事を思っていた。

斉藤「課長、<sup>ボス</sup>そんな事良りも、あれの後始末のことを考えた方がいいのでは？」

そう言つて斉藤は、親指で自分の後ろにある物体を指さした。

はやて「へっ、あれつてなんのことや？」

はやてはそう言つてはやては斉藤が指さした方を見てみた。

最初は物を近くで見てたのでこれがなんなのかわからなかつたが、少し離れてみて全体の形を把握して、それがなんのかが分かり、驚愕した。

はやて「なっ、なんなんやこれ!!」

それは、東郷が真つ二つにしたヒドラの死体だった。

ヴィータ「なっ、なんだよこりゃ……」

フェイト「竜？けど頭がいつぱいある……」

シヤマル「これ、竜種の中でも上位に入るヒドラよ！」

ザフィーラ「竜種の上位種であるヒドラを真つ二つにするとは、いったいだれが……」

少なくともSランク以上の実力がないと、こんな芸当できないはず……」

はやて達が驚いていると、

なのは「あっ、それ……そこにいる東郷さんがやったんだよ。」

はやて達「……え!?!」「」「」

ユニ以外の人達が驚く。

はやて「それ本当なん？」

なのは「うっうん。私達がやられそうになってた時、東郷さん達がきて助けてくれたの。」

で、そのヒドラは東郷さんが一撃で真っ二つにして倒しちゃったんだ。」

シャマル「いつ一撃で真っ二つってヒドラを!？」

ヴィータ「なんつー常識外れな戦闘力だよ……」

ヴィータは半分呆れた声で言った。

フェイト「それにしても良く無事だったね？」

なのは「にやはは、あんま無事じゃないけどね。」

なのはが苦笑いをする。

シグナム「しかし、東郷殿たちが来てくれなかったら、かなり危なかった。」

そういつて、シグナムが立ち上がるうとした。

シャマル「だめよシグナム！まだ治療中よ！」

そういつてシグナムの治療をしていたシャマルがシグナムを押しとどめた。

はやて「そんなに危なかったん？」

はやてはそう言ってなのはに聞く。

なのは「うん。現にシグナムさんと私を襲った黒い服装の男の人は特にすごくて、

わたしとシグナムさんがあつという間にやられちゃったし……」

なのはの言葉にフェイトが驚きながらなのはにたずねる。

フェイト「なのはとシグナムがあつという間について、本当なの？」

驚愕した声で言ったフェイトに治療を受けながらシグナムは応えた。

シグナム「ああ、あの男、ユーバとか言ったか……。まるで全身が殺気の塊のような男だった……。あれは危険だ……」

ヴィータ「シグナムにそこまで言わせるなんて……。そいつ何者なんだ？」

なのは「そういえば東郷さん達はあの人たちの事、何か知っているような感じでしたけど……」

はやて「知ってるんですか？」

はやては近くにいる四乃森に聞く。

四乃森「ああつ、知っている。だがその前に戦いの後始末をしなければな……」

ケガ人もいることだし。」

はやて「たっ、たしかに。」

四乃森ははやてにそう言いながらどこかへ通信を繋げる為、ウィンドを開いた。

ウィンドには黒髪の16〜17歳ぐらいの少女が出た。

???『はい、こちら特務捜査課。』

四乃森「ビッキーか、すまないがこの後始末と隠蔽工作の手配をたのむ。」

ビッキー『了解です。すぐに頼みます。それで連矢さん達はすぐに帰ってくるのですか?』

四乃森「いや、管理局側に我々の事を説明しなければならぬ。」

ビッキー『え〜、もう話すんですか?後日、ユニさんから正式に話すことになってるんじゃない?』

ウィンドの中のビッキーが困惑気味の声で言うと、

東郷「相手側が予定よりも早く管理局側に手を出してきたので、予定を繰り上げる。」

ビッキー『わかりました。あ、それとブリジットさんから連絡がありました。』

東郷「ブリジットから?」

ビッキー『はい。』

東郷「そうか・・・では、こちらの用件が済み次第会いに行く伝えておいてくれ」

ビッキー『はい、わかりました。それじゃ〜ジーンさんとレティシアさん二人と一緒に、皆さんの帰りを首をなが〜くして待つてます』

そうして通信は終わった。

四乃森「それではここは隠蔽工作の部隊に任せ、我々はケガ人を運ぶとしよう。」

ユニ「そうですね。それではみなさん一度アースラに戻りましょう。東郷さん達も一緒に。」

東郷「うむ。」

こうしてなのは達は、東郷達を引き連れてアースラに戻っていった。



管理局次元航行艦アースラのブリッチ。

そこにはケガで治療中のシグナム以外の主だったメンバーと特務捜査課の

東郷、斉藤、四乃森の三人がいた。

東郷「それでは改めて自己紹介をしよう。わたしの名は東郷大地だ。警視庁、対魔術、対魔法特殊事件捜査課、通称“特務捜査課”の責任者である。

そして後ろにいるのが部下の……」

斉藤「斉藤夜天。」

四乃森「四乃森連矢だ。」

二人がそれぞれ自己紹介をする。

東郷「我々はこの所頻発し始めた、魔術、魔法に関する事件を解決

する為に設立された特殊な部署で、魔術、魔法に関する事件では、超法規的に活動が許されている。」

クロノ「超法規的に・・・そんな物がいつの間に・・・。」

クロノがそう言って呟く。

東郷「この部署は極秘裏に設立が進んでいた。設立には管理局側のリンディー・ハラオン氏と来迎寺家のエルネスト・来迎寺を中心に助力をしてもらっていたので知らぬのも無理はない。」

クロノ「母さんがそんな事を・・・。」

四乃森「リンディー氏はやつらの現在の活動範囲が、第97管轄外世界を中心に広がっている事に気付き、中心地である第97管轄外世界で、コネや力がある者で構成した協力組織が必要と判断した。」

斉藤「そこで、以前から管理局側に協力していた俺たちや、俺たちと同じ真の紋章の持主と

その関係者を集めて編成した、それが・・・。」

なのは「特務捜査課・・・。」

斉藤の後を告ぐような形でなのはがポツリとしゃべる。

ヴィータ「って、ちょっとまって！いまとんでもない事をサラッと一言わなかつたか?!」

はやて「せや！たしか真の紋章の持主って・・・。」



いを跳ね除ける事が出来る・・・もつとも、それが出来ない者を紋章は宿主に選んだりはしないがな。」

斉藤達の言葉を聞き、なのは達はすこし安心した顔をした。

はやて「ほなら、三人は今の所、紋章に飲み込まれ、力を暴走させる心配がないつちゆうことやな？」

斉藤「当たり前だ。貴様らケツに卵の殻をつけたヒヨッコの精神力と一緒にするな、阿呆が。」

はやて「うゝ、また阿呆って言われたゝ。」

はやてがむくれ、それをシャマルがなだめる。

ザフィーラ「それで先ほどの質問に戻るのだが、あんた達三人は、シグナム達を襲った犯人を知っていると行ってたが？」

ザフィーラに言葉を聞き、なのは達は東郷達に向き直った。

東郷「・・・やつらは、かつて15年前の戦いでハルモニアを裏から操っていた者達・・・」

聖の故郷の世界を壊滅させようとした魔族の神、大魔王バーンの息子によって再生された

新たな魔王軍の手の者だ。」

はやて「まっ魔王軍!？」

ヴィータ「しかも聖時の親父さんの故郷を滅ぼそうとしたって・・・」

「

ヴィータが困惑気味な声でつぶやく。

「なのは「元々、聖さんが次元漂流者だったてことは知ってたけど・・・」

東郷「かつて聖の故郷の世界は、大魔王バーンの魔王軍により滅びの危機にさらされていた。

バーンの力は強大で、天界の神々でさえ敵わないほどの力を有していた。

人々は、ただ滅びの時を待っているだけの存在になっていた

しかし、聖の父、勇者ダイとその仲間達が立ち上がり、魔王軍に立ち向かったのだ。

長い戦いの末、ついに勇者ダイと仲間たちのおかげで、大魔王バーンを倒す事に成功したのだ。」

「はやて「聖さんが異世界を救った勇者の血を引いてたなんて・・・道理で強いわけや。」

ヴィータ「しかしよ、その一度滅びた魔王軍が復活して、なんでまた異世界で悪事を働いてるんだ？やつらの目的は、聖時の親父さんの故郷を滅ぼすことだったんじゃないのか？」

ヴィータが東郷に質問を投げかける。

斉藤「阿呆が、そんな事もわからんのか。組織のボスが代わったんなら、目的も変わるの当たり前だろうがチビすけ。」

ヴィータ「チ、チビすけ！？てっ、てんめく喧嘩売ってんのかコラ」。

斉藤「そんな無駄な事はせんよ、それにチビをチビと呼んで何が悪い？」

ヴィータ「コイツ、クロス！クロス！ブッコロス！！」

ヴィータが怒りくるって手に持っているグラーフアイゼンで斉藤に襲い掛かるうとした。

ユニ「落ち着いてヴィータさん！ああいう性格だから、

いちいち腹を立ててたらキリがないですよ。それにまだ話の途中で。」

ユニがヴィータを落ち着かせよとし、

ヴィータはしぶしぶとそれに従う。

東郷「続けるぞ。とにかく復活して奴らの目的ははっきりしない。

ただ、あちらこちらの世界で裏から人々を操って争い事を起こす事と真の紋章を集めている事だけはわかってる。」

フェイト「真の紋章を集めるって……それって」

ユニ「はい、15年前まであったハルモニアの目的と一緒にです。」

東郷「ハルモニアの目的は真の紋章を集める事だった。その目的のせいで、

魔王軍に利用されたのであろう……いずれ奴らも、我らの紋章を狙ってくるだろう。」

だがそれは同時にチャンスでもある。」

なのは「チャンス？」

東郷「そうだ、やつらは巧妙に自分達の姿を隠している。活動をす  
る時も、自分達の手の者を使わず、現地の人間を使ってくることに  
多い。だが真の紋章を狙うとなると現地の人間では手に余る。かな  
らず幹部クラスが出向いてくるそこを……。」

ヴィータ「叩く！ってことか。言わばおっさんたちは困ってことか  
」

ヴィータが得意げに答えた。

斉藤「ほう？ただの突撃馬鹿のチビだと思っていたが、少しは頭が  
回るみたいだな。ほめてやるぞ。」

ヴィータ「てめーはいちいち喧嘩売らなきゃ気がすまないのか！」

シヤマル「ヴィータちゃん、どーどー。」

ヴィータ「あたしは馬じゃない！」

ユニ「コホン！とにかく、少し早くなつてしまいますが、紋章の探  
索に管理局と特務捜査課との合同調査を提案したいのですが……よ  
ろしいでしょうか？特務捜査課にはすでに、

エルネスト・来迎寺氏から話が来ているはずですから、後は……。」

クロノ「管理局側しだいという事か……わかった。この話、上  
の方に掛け合ってみよう。」

また母さん達に負担を掛けるのは忍びないが……。」

東郷「すまん、礼を言おう。さすがスクライドの息子だけはある。

クロノ「!?父を知ってるんで?」

東郷の言葉を聞き、クロノが驚きの声を上げる。

東郷「むろん知っている。ヤツとは聖の紹介で出会った。よき友であつた……」

東郷の万感を込めた言葉を聞き、クロノはこの人と父が良き友人関係であつた事を知り少し嬉しくなつた。

クロノ「ありがとうございます。父の事を覚えておいてくれて……」

東郷「うむ、これからスクライドの分まで共に頑張ろう。」

クロノ「はい!」

クロノは亡き父の友人と共に肩を並べて仕事ができる事を少し嬉しく思い、

今回の事件の解決に向けて決意を新たにした。



くおまけく

なのは「ところではやてちゃん、さっきから四乃森さんと顔を合わせるたびに

顔を赤くしたりして、どうしたの?」

はやて「なっ、なんでもない!なんでもない!」

シヤマル「あら?もしかして・・・四乃森さんに一目ぼれでもしたの?」

フェイト「え、そうなの。」

はやて「／／／」

なのは「あれ、はやてちゃん顔真つ赤だよ?」

シヤマル「凶星みたいね。」

はやて「ちっ、ちがう!うち四乃森さんに一目ぼれなんてしてへん。」

なのは「はやてちゃん・・・顔を赤くして言っても説得力ないよ?」

はやて「////////////////////」

フェイト「あ、ますます赤くなった。」

なのは「まるでゆでダコみたい。」

四乃森「おい。」

なのは「え、あつ四乃森さん。」

はやて「えっ」

四乃森「八神の顔がやけに赤いが、熱でもあるのか？」

おもむろにはやてに近づき、はやての額に手を当て熱を測ろうとする四乃森。

はやてはその手から逃れるように一歩引く。

はやて「いつ、いや、な、なんでも・あ、ありませ〜~~~~~」

走り去って行くはやて。

なのは「はやてちゃん……走って逃げていつちやったね……」

フェイト「うん」

シャルル「はやてちゃん……かわいい!」

四乃森「？」

**第7話 特務捜査課・後編（後書き）**

ご意見・感想お待ちしております。

## 第8話 闇の集い（前書き）

どうも剣 流星です。

最近、感想蘭に感想が書かれていないので、

ちゃんと読んでもらっているのか不安になっているところでは第8話どうぞ。

## 第8話 闇の集い

### 第8話 闇の集い

次元の海に浮かぶ、羽を広げた鳥の形の移動要塞・新バーンパレス。その廊下を黒騎士ユーバは歩いていた。

先ほどまで第97管理外世界でエース・オブ・エース、高町なのはらと一戦交えてきた後だった。

一流の宮廷のような廊下を歩いていると、小柄な魔族の老人に声をかけられる。

「???」おや、黒騎士殿、第97管理外世界から戻っておいでで。」

ユーバ「ザボエラか、今日は定例の報告会だからな。サボると魔軍司令殿がうるさいからな。」

ザボエラ「キヒヒヒ、そうでしたな。ところで例のエース・オブ・エースと一戦交えてきたみたいですがどうでしたか？」

ユーバ「フン、あの程度の力では、俺らの妨げにもならん。あんな者が時空管理局のトップクラスなら管理局もたいしたことはない。」

ザボエラ「キヒヒヒ、左様で。」

二人は会話の後、そろって廊下を歩いていった。

大魔王の間……今現在この部屋に、新生魔王軍の六大軍団長が集結していた。

魔影騎士団団長・黒騎士ユーバを始め、

妖魔士団団長・妖魔司教ザボエラ。

覆面に武道着姿の男、百獣魔団団長・獣王シド。

巫女のような姿で白く長い髪の女性、幽鬼団団長・幽玄姫ヒミコ。

紫の髪の魔族風の剣士の男、超竜軍団団長・冥竜王ヴェルザー。

スーツ姿の男、鬼人兵団団長・鬼人黎真。

そして、黒と裏地が赤のマントと黒を基調とした貴族風の服装、白い仮面を身につけた

優男風のバンパイア、他の6人を圧倒、凌駕しうる気配をかもし出す魔軍司令ファウスト。

その7人は薄布の向こう側にある玉座に座る人物に対して頭をたれていた。

その人物、大魔王バーン？世が一同に話しかける。

バーン？世「一同大儀であった、表を上げい。」

ファウスト「ハッ！」

バーン？世「まずは各団長の報告を聞こう」

ファウスト「ハッ！まずは魔影騎士団団長、黒騎士・ユーバから」

ユーバ「ご命令道理に、管理局のトップクラスの実力者、エース・オブ・エースと一戦交え、実力を測り、そこから管理局の魔導師の実力を測りました。」

バーン？世「して、お前の見解ではやつらは我らの脅威になりえる存在か？」

ユーバ「あの程度の実力では脅威にもなりません。あれでは紋章の器にさえならない。」

バーン？世「そうか……では次。」

ファウスト「ハッ！では鬼人兵団団長、鬼人・黎真。」

黎真「……我々は第97管理外世界での協力者、魁音寺かいおんじグループの元、

紋章魔法用の紋章を改造し、使用する事による下位元神霊トライバルエントの量産化に成功しました。また、量産した下位元神霊トライバルエントの性能かねて、異世界にあつた

真の紋章の一つ、太陽の紋章の入手に向かい、これの入手に成功しました。」



バーン？世「そうか・・・ご苦労であった。で、量産化下位元神霊の性能はどうだ？使い物になるか？」

黎真「使い捨てとして使用するなら問題ありません。」

バーン？世「そうか・・・では次。」

ファウスト「ハッ！では妖魔士団団長・妖魔司教ザボエラ。」

ザボエラ「ハッ！我が右腕、ジェイル・スカリエッツィの報告によると、ガジェットの量産化は順調です。またガジェットを使つてのレリックの回収も始めました。」

バーン？世「そうか・・・戦闘機人、ナンバーズの開発状況は？」

ザボエラ「そちらも順調です。アルシエルにある第三の塔・ソル・クラスタのクラスタニアとアルキアのレーヴァテールの技術が大変参考になりました。」

バーン？世「ザボエラよ・・・よがアルキアに預けた娘子の様子は？」

ザボエラ「・・・レーヴァテール化の手術後から変わらず眠ったままの状態です。」

バーン？世「・・・そうか。」

ファウスト「・・・」

バーン？世「・・・ナンバーズの開発・・・急ぐのだぞ。では次！」

ファウスト「ハッ、幽鬼団団長・幽玄姫ヒミコ」

ヒミコ「我々幽鬼団はネノクニの半分を占拠しました。これで人間側にいるカグツチの持つ

真の火の紋章を手に入れるのに、そう時間は掛からないでしょう。」

バーン？世「ネノクニに反応があった他の紋章、輝く盾と黒き刃、そして真の雷の紋章の探索に関しては？」

ヒミコ「・・・申し訳ありません、いまだ発見には至らず、目下探索中です。」

バーン？世「そうか・・・引き続き調査と火の紋章の奪取に取り掛かれ。では次」

ファウスト「ハッ！百獣魔団団長、獣王シド。」

シド「ご命令道理に、ハルケギニアのガリア王国のジョゼフに協力し、敵対関係者の抹殺を継続しております。バーン様と魔軍指令殿のもくろみ道理なら、あの男はハルケギニアに更なる混乱を呼び込み、戦火を拡大させましょう。近いうちにバーン様に大量のマイナスエネルギーを献上できるようになりましょう。」

バーン？世「うむ、してそなたに頼んだロマリアにある円の紋章の所在に関しては？」

シド「バーン様のもくろみ道理、ロマリアの中枢にいる者のうちの誰かが宿していると思われます。」

バーン？世「引き続き調査を継続せよ・・・では次。」

ファウスト「ハッ！超竜軍団団長・冥竜王ヴェルザー。」

ヴェルザー「今のところ八つの世界で戦乱を起こし、発生したマイナスエネルギーの搾取に取り掛かりました。」

バーン「そうか・・・紋章と”門”の探索の方は？」

ヴェルザー「・・・いえ、いまだ両方共発見にはいたりません。」

バーン？世「引き続き継続せよ。マイナスエネルギーの搾取と真の紋章の収集、そして”門”の発見は我らが目的を達成する為には必要不可欠・・・今、我が軍にはユーバの八房の紋章、シドの獣の紋章、ヒミコのソウルイーター、ヴェルザーの竜王剣・霸王の紋章とザボエラの知識の紋章、黎真の罪と罰の紋章、ファウストの月の紋章・・・そして、バーンパレスのゲートに使っている表の門の紋章、つい先日手に入れた太陽の紋章と余の暗闇の紋章・魔剣アルハザードを含めて十・・・所在が判明している、土と風、火と夜、円と裏の門の紋章、そしていまだ所在が判明しない十三個の紋章、それらを探し出し手にするのだ！」

一同「・・・・・・・・・・」  
「全ては秩序に飲み込まれる世界を混沌に引きも戻すために！」  
「・・・・・・・・」

\*

定例報告を終え、あてがわれた部屋に向かう途中の廊下で、ザボエラと大魔王の間の外で待機していたジエイル・スカリエッティは歩いて部屋に向かっていた。

ザボエラ「ジエイルよ、例の娘の事バレてはおらんじやろうな？」

スカリエッティ「はい・・・娘もアルキアにある孤児院で、何も知らずに暮らしてます。」

ザボエラ「クラスタニアにある実験体の方は？」

スカリエッティ「アヤタネの報告ではおおむね予定通りに進んでいるそうです。」

ザボエラ「そうか・・・いいか、くれぐれもアルキアの実験体の正体を大魔王の馬鹿息子とファウストに悟られるなよ。」

スカリエッティ「はい、隠蔽は完璧です。」

ザボエラ「そうか・・・ああ、それとロマリアのマリアには定期的  
に研究の情報を渡しておけよ？」

今あやつに機嫌を損なわれると色々と面倒だからな。」

ザボエラは足を止めスカリエッティの方に体と顔を向ける。

ザボエラ「・・・いいか、あやつが持っている冥王の魂の欠片と108の魔星の魂を手にするまで、あやつと協力関係でいるのだ。ソル・クラスタにある実験体のデータと冥王の魂と魔星の魂・・・そして

箱舟を手になれば、大魔王が求めている約束の地の力や真の紋章などなくても、この世界をどうとでもすることできる力が手に入る・・・そう、ワシこそが世界の王にふさわしいのじゃ！キーヒヒヒッ」

ザボエラは高らかに笑いし、それをスカリエッティは無表情で見つめていた。

ひとしきり笑った後、ザボエラはスカリエッティに向かい、声をかけた。

ザボエラ「いいか、この計画を成功させるためにワシは、わざわざ管理局の最高評議会のほか共の依頼を受けてお前を作ったのだからな。」

スカリエッティ「わかっていますよ・・・創造者。」

\*

定例報告が終わった後、幽玄姫ヒミコはバーンパレスの自分に与えられた部屋に戻っていた。

「???」お帰りなさいませヒミコ様。」

黒いローブに身を包んだ長い髪の女性が声をかける。

ヒミコ「探女めへん・・・」

探女「・・・お疲れのようですね・・・」

探女はヒミコが疲れきっている顔を見て、身を案じた。

ヒミコ「だいじょうぶです・・・ありがとう探女」

探女「・・・やはり真の雷の紋章の所持者であるあの子の身を隠し通す事が、ヒミコ様の負担になっっているのでは？」

ヒミコ「探女・・・その事はいいのです。わたしもあなた同様、あの子を争いに巻き込みたくないだけなのですから・・・」

探女「・・・ヒミコ様・・・6年前、虚数空間に落ちて黄泉比良坂よもつひらなかに流れついた私達親娘を助けてもらい、娘であるあの子を真の雷の紋章を使って生き返らせ、さらにあの子に普通の生活までもさせてもらい感謝の言葉もありません。」

ヒミコ「別にそのことであなただが恩を感じる事はありません・・・わたくしはあの時、所有者の手を離れ、飛び立とうとする真の雷の紋章を何とか封じるために、たまたま近くにいたあなたの娘の体と魂を使つたにすぎません。」

探女「それでも、あの子が帰ってきてくれた事に変わりはありません・・・その恩に報いる為にも私は貴方についていく所存です。」

ヒミコその言葉を聞き嬉しい反面、申し訳ない思いに駆られた。

ヒミコ「探女・・・いいですよ・・・あなたも娘さんの一緒に日常の世界に戻っても・・・」

ヒミコの言葉に探女は首を横に振るう。

探女「お気持ちはありがたいのですが・・・私にはその資格はありません・・・」

わたしは自分の手でもう一人の娘とも言つべき存在のあの子を・・・

フェイトを深く傷つけてしまいました・・・その私がどうして娘のア  
リシアと平和に暮らせましよう?」

ヒミコ「探女・・・」

探女「だから私は自分の名を・・・プレシアを捨てたのです。今の私  
は幽鬼軍軍団長

ヒミコ様の部下の一人、探女です。」

探女は決意に満ちた目をヒミコに向けた。

ヒミコ「・・・わかりました、ならあなたの命と力、わたしが預か  
らせてもらいます。」

探女「ハッ、我が命と力はヒミコ様と共に!」

パインパレスの一室に探女の声が響いた。

〈おまけコーナー〉

ピ ピティと



ユ ユニの

二人 おまけコーナー

ピ はい、五回目になりましたこのおまけコーナー。  
司会進行役のピティです。

ユ 解説のユニです。

ピ 今回は魔王軍の各軍団の構成モンスターについてです。

ユ 現在魔王軍は、旧魔王軍に習って六つの軍団に分かれています。

ピ ではまず百獣魔団から。

ユ 百獣魔団はその名通り、おもに動物系、植物系、昆虫系のモンスターを有してます。モンスター中で一番なじみの深いスライム系のモンスターもここに入ってます。団長は獣王・シド。ターバンのような覆面を被った武道服姿で、その風体から格闘家だと思われま

ピ 次は幽鬼団だね。

ユ 幽鬼団は旧魔王軍にあった不死騎団とほぼ同じ構成で、悪霊やアンデット系のモンスターがそのほとんどが占めています。団長は、幽玄姫・ヒミコ。IZUMO2の敵キャラです。

ピ 次はまったく新しい軍団、鬼人兵団だね。

ユ 鬼人兵団は、悪魔系モンスターと元神霊もとみったま、下位元神霊トライバルエンドで構成されています。主に人間社会に入り込み人間を裏から操るのが主な任務です。団長は鬼人・黎真。黒神に出てくる敵キャラです。

ピ 次は妖魔師団だね。

ユ 妖魔師団は旧魔王軍の中で唯一生き残った軍団です。ですから軍団長も同じ妖魔司教・ザボエラです。

ピ こいつさくダイ大のなかでやられちゃったはずだよ。なんで生きてんの？

ユ それについてはいずれ語っていくのでここでは書きません。

ピ それじゃ次。魔影騎士団だね。

ピ 魔影騎士団は旧魔王軍の魔影軍団と同じで、リビングゲアーマー系や影系、ガストの様な雲系、そしてゴーレム系や人食いサーベルの様な魔剣系など、物がモンスター化したものが主です。団長は黒騎士・ユーバ。幻想水滸伝シリーズに出てきた敵キャラです。

ピ こいつが使っている分身つてもしかして紋章の力なの？

ユ ええ、紋章の力で、自分と同じ姿と力をもった分身を作る事が出来るみたいです。

ピ なんだか黒神のシュタイナーみたい……。

ユ たしかに似てますが、シュタイナーさんは4体が上限でした

が、黒騎士ユーバは作れる分身が最大で8体まで作れる事が出来ません。

ピ では次、魔王軍最強と言われている超竜軍団です。

ユ 超竜軍団はその名の通り、ドラゴン系やオロチ系などのモンスターで構成されています。団長は、ダイ大の中に出てきたあの冥竜王ヴェルザーです。

ピ たしか聖時の曾祖父にあたるバランスが昔倒して、さらに天界の神々に封印されたんじゃないかなかったの？

ユ ええ、たしかにその通りですが、大魔王バーン？世が真の紋章をつかって復活させたみたいなんです。

ピ へへ。それじゃ次、最後になるのは魔軍司令のファウストだね。

ユ このキャラに関してはあまりここで書くことが出来ません。・・・ただ登場作品のなかのどれかに出てきています。

ピ もし私が思っているヤツだったらコイツは魔王軍どころか、この作品最強のキャラだと思うよ？だってこいつまるでド○○ゴ○ボー○ンに出てくるキャラみたいに生身で星ぶっ壊してるもんね。

ユ た、たしかに・・・

ピ ……勝てんの？聖時達・・・

ユ そのあたりについてはだいじょうぶです。考え無しにキャラ

を登場させてませんから。

ピ　ま、戦うとしたらこの作品の終盤あたりだし、その頃には聖  
時もスツゴク強くなってると思うしね。だいじょうぶだと思つよ。  
それでは今回はここまで。

ユ　それではみなさん～

二人　まっ たね～

## 第8話 闇の集い（後書き）

敵側の構成はこんな感じで行こうと思います。

みなさんはどう思いますか？

ご意見・ご感想お待ちしております。

## おまけコーナーEX

おまけコーナーEX

ピ 「ピティと」

ユ 「ユニの」

二人 「「おまけコーナーEX」」

ピ 「はい、いきなりやって参りましたおまけコーナーEX。司会進行役のピティです。」

ユ 「解説のユニです。そして……」

ビツ 「は、い、今回からアシスタントをやるビツキーです」

ピ 「今回は新しいメンバーを入れて、再出発もかねての拡大版！」

ユ 「最後の方には重大発表もあるのでお見逃さないよ。」

ピ 「それでは早速はじめましょうか？」

ユ 「そうですね。」

ピ 「まず最初にこの作品のタイトルにもあったこの物語キー。真の紋章についてね。」

ビツ 「真の紋章ですか……」

ユ 「そう言えば、ビツキーさんは様々な真の紋章の持主の方と共に戦ってきたんですね？」

ビツ 「はい、解放軍のリーダーのテイルさん（幻想？主人公）、新同盟軍のリーダーのリオウさん（幻想？主人公）、新しい炎の運び手のリーダーのヒューゴさんに、クリスさん、ゲドさん、ササライさんに、群島諸国軍のリーダーのラズロさん（幻想？主人公）……」

ピ 「……ずいぶんいっぱい居るね……。」

ビツ 「はい 他にも竜洞騎士団のリーダーのヨシユアさんに、熊……じゃなかったビクトールさん、レックナートさんにそれから……」

ピ 「もういい！もういいから！！」

ユ 「すごい数ですね……さすが全シリーズほぼ皆勤賞のビツキーさんですね（汗）。」

ピ 「とにかく！この話のタイトルにもある真の紋章にあんたがよく関わり合ってるのはよくわかった。」

ビツ 「は、はい……」

ピ 「この話のタイトル……竜の騎士は主人公の聖時を表してるけど、真の紋章について「良くわからない」って人もいるんじゃないかな？」

ユ 「たしかにそうですね。原作である幻想水滸伝をやっている人意外の人には良くわからないでしょうね……」

ピ 「そこで今回のこの大拡張版のおまけコーナーで、それを大々的に説明しようと思います。」

ビッ 「なるほど」。それで私が呼ばれたんですね。」

ピ 「ま、それもあるんだけどね……」

ビッ 「？」

ピ 「とにかく！そもそも真の紋章とはなんなのか？そこからから語って行こうと思います。それじゃユ二！」

ユ 「はい。まずは幻想水滸伝の物語に語られる、創生の物語から語って行きましょう。」

## 創生の物語

27の真の紋章、生まれいずる

最初に”やみ”があった。

”やみ”は長い、長い時のほごまに生きていた。



”やみ”はあまりに長いあいださびしさの中で苦しんだために、  
ついに”なみだ”をおとした。

”なみだ”から二人の兄弟が生まれた。”剣”と”盾”である。

”剣”は全てを切り裂く事が出来ると言い

”盾”はいかなる物にも傷つけられないと答えた。

そして二人は戦うこととなった。

戦いは7日7晩続いた。

”剣”は”盾”を切り裂き、”たて”は”剣”を砕いた。

”剣”のかけらがふりそそぎ空となった。

”盾”のかけらがふりそそぎ大地となった。

戦いの火花が星となった。

そして”剣”と”盾”を飾っていた27の宝石が

”27の真の紋章”となり世界が動き始めたのである。

ユ 「・・・このように27の真の紋章は万物の礎であり、すべての紋章の源であり、世界のすべてのエネルギーの根源とされています。」

ピ 「ふえ〜、ずいぶんとスケールのデカイ話だこと。」

ビツ 「このお話は御伽として幻想水滸伝の世界で語り継がれている物です。普通の人は子供の時に話して貰った御伽ぐらいにしか思っ  
つてません。」

ユ 「この話が本当なのかは今のところわかりませんが、この話で語られたように、真の紋章にはこの世界の根源といっても言いぐ  
らいの力が宿っており、15年前の戦いでその力の強大さが次元世  
界にも知らさせます。」

ピ 「たしか、真の紋章の一つを宿した聖時のお父さん、かみやひじり神谷聖  
が中心的な人物として戦った戦い・・・管理局では通称”真の紋  
章事件”（この作品オリジナルの事件）として記録される事件だ  
よね。」

ビツ 「あ、その戦い、私も参加しました。」

ピ 「えっ！あんたも参加してたの？」

ビツ 「はい それとジーンさんや、あとユニさんもいましたよね  
？」

ユ 「ええ、この事件はハルモニア神聖国がいつまでも見つから  
ない所在不明の真の紋章が、ロストロギアとして外の世界にある事  
を知り、外の世界の協力者、大魔王バーン？世と共に、様々な世界

に進行したのが始まりです。」

ピ 「で、それに対抗したのが、聖時のお父さんの聖だったということなんだよね。」

ユ 「はい、そしてその戦いの終盤、神官長のヒクサクは”ある儀式”を強引に行った為、自分の紋章の円の紋章を暴走させてしまい、結果、ハルモニアがあった世界は滅びてしまい、全ての次元世界をまきこむ大規模な次元震が発生しそうになります。」

ピツ 「でも、聖さんが持っている真の紋章の一つ、光輝ひかりの紋章と時空じくうの紋章の力でそれを防いじやったんですね。」

ユ 「そううなんです。以来、管理局を含め、多くの世界では聖さんは英雄として語られることになったんですが・・・その話は置いていて、とにかく、真の紋章は一つだけでも大変な力を有してます。」

ピ 「たしかに・・・一つの世界が滅んじやったぐらいだもんね。」

ユ 「真の紋章には巨大な力の他にも様々な力があります。宿した者に不老の力を与えるのもその一つです。」

ピ 「つまり老けないって事だよね。リンディさんやエイミィがうらやましがるかも。」

ユ 「ピテイ、本人達の前で、そんな事言わないでよ。」

ピ 「わかってるよ。・・・私だってまだ死にたくないから・・・」

「

ビツ 「?、どういことですか?」

ピ 「あんた分らない訳?・・・ま、いいけど。・・・そういえばあんたも歳取らないね・・・なんで?」

ビツ 「え?・・・さあ?なんでなんですかね?」

ユ 「そういえばビツキーさんは真の紋章を持っている訳でもないのに歳を取りませんか?」

ビツ 「それを言えばジーンさんもですよ?」

二人 (ビクッ)ブルブルブルブル

ジーンの名を聞き震える二人。

ビツ 「?、どうしたんですか?」

ピ 「お、お願いその話はやめて・・・」

ユ 「う、うかつな事を言ったらジーンさんの”あれ”にまたやられる・・・」

ビツ 「? ”あれ”ってなんですか?」

二人 「「いつ・いやだ~~~~!思い出したくもない~~~~!」」

ピッ 「え？え？どうしたんですかお二人とも！」

・ ・ ・ ・ ・

（数分後）

ピ 「ふづふづふづ。」

ユ 「はあはあはあ。」

ピッ 「・・・お二人とも大丈夫ですか？」

ピ 「う、うん。」

ユ 「な、なんとか・・・」

ピッ 「あ、あの～お二人とジーンさんとの間に一体なにが？」

ユ 「ビツキーさん・・・世の中には知らない方が幸せな事もあるんですよ・・・」

ピ 「うん・・・命が惜しかったらこの件に関しては深く関わら

ない方が身のためだよ・・・」

ピツ 「は・・・はい。(・・・) 一体なにがあったんだろう・・・」

ユ 「オホン！・・・とにかく真の紋章には不老の力があるんです。また、通常の紋章とは異なり、一度宿すと特別な状況以外では外すことができず、強引な方法で紋章を外そうとすれば、想像しがたい苦痛におそわれ、激しい衰弱に見舞われます。ひどい時はそのまま、シヨック死したり、衰弱死してしまう時もあります。」

ピ 「つまり、一度紋章を宿してしまったなら、その紋章と一蓮托生という訳なんだね。」

ユ 「その通りです。紋章を宿した者は、内側からの紋章の力を押さえながら、紋章を狙う者たちから紋章を守っていかなくてはならないので、たいていの人は口クでもない人生しか送れないそうです。」

ピ 「やっかいだよね。一度宿すと取り外しが出来ない上、宿してる間も、紋章の力を暴走させないように制御したりして・・・紋章の中には呪いの力が大きい物あるから、わたしは進んで宿そうとは思わないね。」

ユ 「それがいいです。・・・さて真の紋章ですが全部で27個あり、作者はその全てを作品に出そうと思っています。今現在宿主が判明してる紋章は次の通りです。」

真の火の紋章・・・ネノクニのカグツチと言う方が宿しているそ

うです。

真の風の紋章・・・特務捜査課の四乃森連矢しのもりれんやが宿しています。

真の土の紋章・・・特務捜査課の東郷大地とうけいだいちが宿しています。

夜の紋章（星辰剣）・・・特務捜査課の斉藤夜天さいとうやてんが所持

生と死を司る紋章（ソウルイーター）・・・魔王軍の幽玄姫ヒミコが宿しています。

罪と罰の紋章・・・魔王軍の獅子神黎真ししがみれいしんが宿しています。

獣の紋章・・・魔王軍の獣王・シドが宿してる。

月の紋章・・・魔軍司令・ファウストが所持。

八房の紋章・・・魔王軍の黒騎士・ユーバが宿してる。

霸王の紋章・・・竜王剣として、剣に宿して冥竜王ヴェルザーが所持。

門の紋章（表）・・・今現在はバーンパレスの中枢のゲートに使われています。

門の紋章（裏）・・・レックナートさんが宿しているそうです。

円の紋章・・・ハルケギニアのロマリアの中枢にいる誰かが宿しているそうです。

太陽の紋章・・・今の所、魔王軍がシンダルの技術で作られた虚像に宿して所持してます。

ユ 「ここまでがこの作品で幻想水滸伝に出てくる真の紋章を宿している人たちです。そしてこの次のがこの作品オリジナルの真の紋章を宿している人たちです。」

知識の紋章・・・知識を司る紋章で、魔王軍の妖魔司教ザボエラが所持してます。

物質の紋章・・・聖時さんの叔父、エルネストさんが宿してるって言われてます。

暗闇の紋章（魔剣アルハザード）・・・大魔王バーン？世が剣に宿して所持しています。

光輝の紋章・・・聖時さんのお父さん、神谷聖さんがかつて宿してたそうです。

女神の紋章・・・聖時さんのお母さん、来迎寺千尋さんが宿してましたが、現在は行方不明です。

歌詩の紋章・・・聖時さんのお母さんの千尋さんのお姉さんで、エルネストさんの奥さんである千草さんが宿してましたが、千草さんが病死してから行方不明です。



時空の紋章……聖時さんのお父さん聖さんが剣に宿して使ってみました。現在は鳴海市にあるシンダルの遺跡に封印されています。

ユ 「以上が現在判明している紋章です。そして今後の予定でこれから出てくるキャラ、もしくは登場しているキャラが宿す予定の紋章がこれです。」

真の水の紋章……水を司る紋章で、現在登場しているキャラの誰かが宿す予定です。

真の雷の紋章……蘇ったプレシアの娘、アリシアが宿しているそうです。

竜の紋章……竜を統べる紋章で、これから登場するキャラが宿しているらしいです。

始まりの紋章（黒き刃の紋章）……これから登場するどれかの主人公格キャラが宿す予定です。

始まりの紋章（輝く盾の紋章）……これから登場するある作品の主人公が宿す予定です。

ユ 「以上が真の紋章と宿主の紹介でした。」

ピ 「へへ、結構いっぱい出てきてるね。」



ユ 「ズバリッ！」

二人 「ズバリッ？」

ユ 「読者さんに決めてもらおうと思います。」

二人 「はあ？」

ユ 「感想蘭に自分が考えたオリジナルの紋章とその効力、そしてそれを宿させたいキャラの名前を書いてください。ただし、この作品の紹介で書いてある登場作品の中からお願いします。なお、オリジナルのキャラを作って書く場合、そのキャラの詳細を詳しく書いてください。」

ピ 「結局、読者に丸投げかい！作者く！！！」

ビッ 「落ち着いてくださいピティさん！」

ユ 「なお締め切りは、作者が残り3つの紋章の枠を埋めた時点で終了です。」

ピ 「まったく、この作者は自分が読者に負担を負えるほど良い作品書けてると思ってるの？」

ビッ 「それは言わない方が良いんじゃないや・・・作者さん、結構打たれ弱いんですから・・・」

ユ 「とにかく、真の紋章のアイデア募集の件、皆さんよろしく願います。」

ピ 「他にも、ご意見・感想も随時受け付けていますので・・・」

ピッ 「どつぞよろしくお願いします。」

ピ 「さて、おまけコーナーEX長くなってきましたので、今回はこのまじとします。」

ピッ 「皆さん、これからもこの作品をよろしくお願いします。」

ユ 「それではみなさん」

三人 「「「まったね」「「「

## 第9話 裏山の遺跡と別荘（前書き）

どうも剣 流星です。

前回、募集したオリジナルの真の紋章と宿主なんですけど、さっそく応募があつてとても感謝してます。

しかし、だからですかね・・・自分の募集の時の説明が不十分で皆さんに

迷惑をおかけしたみたいなのでこの場でお詫び申し上げます。

募集の説明文は書き直したので、そちらを参考にしてください。

自分としては、せっかくくれたアイデアなのですが、登場作品の欄が1000文字

いっぱいに使つてあるので、これ以上の作品の追加ができません。

本当に申し訳ありません。

それでは第9話どうぞ。

## 第9話 裏山の遺跡と別荘

### 第9話 裏山の遺跡と別荘

次元航行艦アースラの転送ポート。ここに第162観測指定世界から帰還したなのは達がいた。

エイミィ『みんな、お疲れ様。』

アースラの通信司令エイミィ・リミエツタが通信でねぎらいの言葉をかける。

フェイト「エイミィもおつかれさま。」

エイミィ『みんなごめんね、紋章さがしと犯人さがし、さらに聖時さんの護衛まであるのにこっちの都合でロストロギアの護送してもらっちゃって』

なのは「いいですよ、それに紋章探しと犯人さがしは、もっぱら特務捜査課の人たちが中心になってやってるし、聖時さんの護衛はアルフさんがやってくれているから、多少手は空いてますよ。」

はやて「それに今回はうちらが出てきて正解やったと思うんで？ロストロギア・レリック、それを狙ってきたあのAMFをつかう未確認の機械兵器、うちら以外の管理局員だったら結構きつかったと思うんで？」

エイミー「たしかにね、あつ、レリックは保管庫に運んでおいて、封印を厳重に掛けるのを忘れないでね。それが終わったら、一度ブリッチに集合ね。」

はやて「了解や」

通信を終えて、なのは達はそのまま保管庫に向かった。

\*

くアースラ・ブリッチく

クロノ「護送隊とレリック、先ほど本艦に收容しました。」

カリム「そうですね、ご協力感謝します。」

アースラの艦長クロノは今、今回の任務の依頼人の  
聖王教会・教会騎士団の騎士 カリム・グラシアと通信していた。

クロノ「確保したレリックは厳重封印の上で自分が本局の研究施設まで運びます。」

カリム『ああ、その件なんです、こちらから一人警護員を送りました。ご迷惑でなければ一緒に運んでいただければ・・・』

クロノ「？ ああ・・・はい・・・。」

そうやってクロノは通信を終わらせた。それとほぼ同じくらいにブリッチの扉が開いてなのは達が入ってきた。

なのは達「……………」ただいま戻りましたー 「……………」

クロノ「おかえり」

エイミー「おつかれー」

二人がなのは達にねぎらいの言葉を掛けた。

はやて「ロストロギア・レリックの護送完了しました。」

はやてが一同を代表して敬礼をしながら護送完了の報告を行った。

クロノ「うん、ご苦労。」

はやて「ところで、何か話があるから皆を一度ブリッチに集めたんやろ？」

クロノ「ああ、実は君たちが第162観測指定世界に行く少し前に特務捜査課から情報が届いた。」

なのは「情報？」



クロノ「ああ、実はやつら魔王軍に協力しているこの世界の協力者が判明した。」

フエイト「え！解つたの？」

クロノ「ああ」

はやて「で、だれや、魔王なんか協力する、けつたくそ悪いやつは？」

クロノ「それが、結構厄介な連中なんだ・・・」

シグナム「厄介？」

クロノの歯切れの悪い言い方に、顔をしかめながらシグナムが言う。

クロノ「ああ、やつらの協力者は、あの魁音寺グループだ。」  
かいおんじ

シャマル「魁音寺グループってたしか・・・ここ数年で急激に勢力を伸ばし、世界有数の企業にのし上がったあの・・・」

ヴィータ「たしか千尋の実家の来迎寺グループと、タメを張れるぐらいの規模だったよな。」

シャマルとヴィータの二人が思い出すように、一般に知られている魁音寺グループについての主観を口にした。

ザフィーラ「魁音寺か・・・世界有数の一大企業では、政治、経済についてもかなりの影響力があるな・・・確かに厄介だ。」

クロノ「ああ、ザフィーラの言う通りだ。奴らは表向きは唯一の企業の上、企業があるのは管理外世界。だから管理局側は表立って奴らに対して行動を起こす事が出来ない。その上奴らは魔術協会に多額の寄付をしているらしい。」

シグナム「なるほど、魔術協会にとって、魁音寺グループはいわばスポンサー・・・そんな連中に

管理局がちよっかいを出せば、魔術協会が出てくる。管理局の上層部は魔術協会とはなるべくなら事を起こしたくは無いはず・・・下手をすると我々が動けなくなる可能性が出てくるな。」

シグナムの言葉になのは達が事態の深刻さに押し黙る。

なのは「こうなると表立っての行動は特務捜査課の人達にまかせるしかないね。」

クロノ「ああ、そこで第97管理外世界での行動は特務捜査課を中心にし、僕らは外の世界で動いているやつらの協力者を中心に対して動くと言う行動方針で行く。」

なのは達「……………はい!」「……………」

フェイト「あ、でもそうなると聖時の方はどうするの?」

フェイトは聖時の護衛はどうなるのかをクロノに聞く。

クロノ「それに関しては今まで道理、アルフにがんばってもらおう。」

フェイト「わかった。」

クロノ「ああ、それと例のデエルジについてユニから連絡があった。戸籍当で調べたが、デジェルと言う名の人間は第97管理外世界にはいないそうだ。・・・やはり彼は次元漂流者らしいな。」

フェイト「やっぱり。」

ヴィータ「ん？だれだデジェルって。」

ヴィータは聞きなれない名前を聞いたので問いかける。

なのは「前にフェイトちゃんが、聖時くんの家の裏山近くで倒れていた所を助けた人だよ。」

ヴィータ「へ〜、さっきの話からすると次元漂流者みたいだな。」

フェイト「うん、たぶんね。・・・もともと発見された場所があの裏山の近くだから、もしかしたらもって思ってたけどね。」

ヴィータ「確かに、あそこは封印してある物が物なだけに、山の中全体の次元境界線が時々不安定になるからな。」

そんなヴィータとフェイトのふたりの話を聞いてリーンが疑問を持ったのか、はやてに聞いてきた。

リーン「？ねえはやてちゃん。」

はやて「なんや？リーン。」

リーン「さっきヴィータちゃん言っていましたけど次元境界線が不安定になるって・・・聖時の家の裏山って何かあるんですか？裏山

って立ち入り禁止区域になっていて、入れないように塀なんかで囲ってますし、結界も張ってあります……。」

はやて「そっか、リーンは知らないんやっとな……ええか、あの山の中には今現在、管理局が唯一把握している真の紋章を封印できるシンダルの遺跡があるんや。」

リーン「えっ、真の紋章を封印できる遺跡が！」

はやて「そや、そしてその遺跡の中には、聖時のお父さん、聖さんが封印した真の紋章……時空の紋章が封印してあるや。」

リーン「そ、そんなものが封印してあるんですか……。」

はやて「そや、けどなこの遺跡に封印してある時空の紋章のせいさ、さっきヴィータが言ったように」

あの山一帯は次元境界線が時々不安定になるんや、だから時々他の世界の植物や物なんか

あの山に紛れ込むんやが……あそこの次元境界線は人や生き物なんかを通れるようにはなっていないはずなんやがな。」

リーン「へー、そうだったんですか……それにしても厄介ですねそれ……。」

ヴィータ「たしかにな、けど厄介なだけじゃないんだよなあそこ。」

リーン「?どういうことですか。」

ヴィータ「さっき次元境界線が不安定なせいで、他の世界の植物が紛れ込むって言ったよな?」

リン「はいです。」

ヴィータ「その紛れ込む植物の中に、時々あのB〇コー〇や、虹の〇なんかがあるんだ。」

リン「えっ、時々ユニ達から差し入れされてるあれ、裏山で取れてたんですか！」

ヴィータ「ああ！あれうまかったろ？あたい〇B〇ーン好きなんだよな。」

リン「リンは〇じの実です。」

はやて「そうか、二人はそれが、うちはク〇ム〇ツ〇ケも好きやけどな。」

なのは「あ、わたしも！」

シグナム「ほう、高町もか、実はわたしもだ。」

フェイト「わたしは〇じの実かな。」

シャマル「やっぱりそうですよね。ああっ、また食べたいですね。」

全員が食べた時の味を思い出したのかウツトリしまじめる。

クロノ「……コホン！そろそろ話を進めたいんだがいいかな？」

クロノの声にハツとなり全員我にかえる。

クロノ「え」と、彼、デジエルが次元漂流者なのが今回の件で明らかになった。しかも、どうやらただの一般人ではなさそうなんだ。彼の治療の際、彼をスキャンした所、彼からリンカーコアと魔力が検出された。しかも、魔力のランクが普段の状態でSSらしい。」

クロノの言った言葉に驚く一同。

シャマル「ちよつと、普段の状態でSSってあきらかに異常です！」

クロノ「ああ、しかも、フェイトが回収した彼の衣服についてた金色の金属の欠片も、あきらかに異常な物だった。」

なのは「異常な物？」

クロノの言葉に質問を投げかけるなのは。

クロノ「ああ、解析してみたんだが・・・何で出来ているのか殆ど解らないらしい。唯一、解析でわかった成分は、聖時の父親、聖さんが使っていたデバイスの元になった剣、真魔剛竜剣の構成物質オリハルコンだということだけだ。」

フェイト「え！たしかオリハルコンで、今の所発見された物は、真魔剛竜剣に使われている物だけだったよね？」

クロノ「そうだ・・・そんな物を持っていて、強大な魔力を持ち、しかも傷だらけで倒れているなんて、明らかに怪しいと思う。こちらとしては、そういった者を野放しにできない・・・そこで彼が退院したら、この事を話そうと思う。その役はフェイト、君にしても

らいたいのだが……」

フェイト「え、私が！」

フェイトが驚いた声で答える。

クロノ「なのは達に聞いたが、彼の見舞いに何度か顔を出してるそうじゃないか。」

フェイト「いや、それは……／＼／＼」

フェイトは少し顔を赤らめてうつむく。

はやて「ん〜、フェイトちゃんもしかして〜。」

はやてがからかうようにフェイトの顔をのぞく。

フェイト「ち、ちがうよ！そんなんじゃないよ！……ただ、あの人が時々、何かを思い出すようにしながらする悲しそうな顔がとても悲しくて……その悲しみがなんなのか解らないけど、できれば癒してあげたいと思って……」

なのは「フェイトちゃん……。」

悲しそうにデジエルの事を話すフェイトにやさしく声を掛けるのは。

クロノ「……フェイト、彼はまだ記憶が戻ってないんだっとな。

」

フエイト「？ええ」

クロノ「ならその事を言うタイミングは君に任せる。たのんだよ。」

フエイト「！はい。」

クロノ「それじゃ人を待たせているから、話はここまでとするよ。  
みんなお疲れさん。」

なのは達「「「「「「「はい！お疲れ様でした！」「」「」「」「」

\*

（アースラ艦内応接室）

ブリッチチから出たクロノは客が来ている応接室に足を運んだ。  
応接室の扉を開けると中で待っていた人物が声をかけてきた。



「????「よっクロノ君！」

クロノ「ヴェロツサ！騎士カリムが言ったのは君のことだったのか！」

応接室のソファアに座っているロングヘアーのスーツの男、査察官のヴェロツサ・アコースは人懐っこそうな顔でクロノに挨拶をした。

ヴェロツサ「久しぶりだね、先の調査行以来だ。」

クロノ「ああ、元気そうで何よりだ」

クロノはヴェロツサと握手をして、ソファアに座る。

クロノ「今日はどうした？義姉君あねぎみのお手伝いか」

ヴェロツサ「うん。カリムが君たちを心配してたから……ってのもあるんだけど、  
本当は、97管理外世界に、ある人を送り届けたその帰りにちょっと立ち寄ったよな物だよ。」

クロノ「人を送り届けた？」

ヴェロツサの言葉に疑問を感じ聞き返す。

ヴェロツサ「ああ、エルネスト氏の所にね。」

クロノ「ああ、聖時の叔父で、たしか彼も真の紋章の所有者だったな……いつたいどんな人を送り届けたんだい？」

ヴァロツサ「レディーブリジットと呼ばれている人だよ。最近、聖王教会に協力してくれるようになった組織の代表でね・・・ほら最近発見された第97管理外世界に良く似た世界が二つ発見されたじゃないか。」

クロノ「ああ、たしか二つとも聖さんの足跡をたどって発見したって言うあの・・・」

ヴェロツサ「そう、97-aと97-b。片方は、魔法の事を97管理外世界と同じく秘匿してる世界で、もう一つはヴァンパイヤという種族が住んでいて、その種族が月に移り住もうとしてる世界・・・」

僕が送り届けた人は、そのヴァンパイヤ達を束ねてる女性でね。たしか名前は・・・ブリジット。

ものすごい美人でね。スタイルも抜群！いや、眼福だったよ。」

クロノ「あ、あはははは・・・。」

クロノは苦笑いしながら、相変わらずだなと思っていた。

クロノ「・・・しかしヴァンパイヤを束ねる人が、なんで聖王教会に協力したり、97管理外世界に行ったりしてるんだ？」

ヴェロツサ「・・・彼女達ヴァンパイアは自分たちの世界に段々居場所がなくなってきたんだ。だから月に移り住もうとしてたんだけど、そこだっていつまでも居られる場所じゃない。彼女達の世界にいる人間たちが月面開発などをすれば、いずれ見つかる・・・だから彼女達は、月からさらに移住できる世界を探しやすくするため、こちら側に貸しを作っておきたいのさ・・・」

クロノ「なるほど……。」

ヴェロツサ「ちなみに、これ秘密なんだけど、今、君達が協力関係  
になっている特務捜査課の設立にも彼女、レディー・ブリジットが  
からんでいるんだ。どうやら彼女、あつちこつちに貸しを作ってい  
るみたいだ。」

クロノ「特務捜査課にも貸しを作っているとは……それはさすが  
に知らなかったな……。」

ヴェロツサ「……彼女、かなりの切れ者みたいだよ……ちよつと  
怖いね……。ま、そこがまた美人とあいまって彼女の魅力を引き立て  
るんだよね……。うーん、クールビューティー！」

クロノ「……。」

友人として付き合う人を間違えたか？とってしまったクロノだっ  
た……。

\*

山の中の大きな豪華な別荘・・・その中庭に彼、神谷聖時がいる。  
射撃で使うような的から数歩はなれた所に立ち、右手を的に向けて  
目をつぶって、意識を集中している。

聖時「・・・・・・・・ん」

右手に力が集まるのを感じ、その力を解き放つ。

聖時「んんん！<sup>メラ</sup>火炎呪文！」

ポン！

気の抜けたような音を出し、聖時の右手から人差し指大の火の玉が  
出てきて、そのまま  
地面にゆっくり落ちて消える。

聖時「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピティ「ピティちゃんキ〜ク！」

ドロッ！

ピティのキックが聖時の後頭部に突き刺さり、痛さのあまりに座り  
込む。

聖時「~~~~~（声にならない声）」

ピティ「気合が足りん！もう一度！」

聖時「~~~~~気合が・足りないって・・・お前な〜！口で言うだけですむ事だろ！いちいち蹴りを入れるな！」

ピティ「なに甘い事言ってるの！そんなだから魔法の一つも使う事が出来ないのよ！」

聖時「そんな精神論でどうこうできる物でもないだろう。・・・  
・・・はあ、・・・・・なんで魔法が使えなくなっただろうな〜。  
去年の今頃は初歩魔法である火炎呪文、閃熱呪文、  
爆裂呪文、凍結呪文、真空呪文、といくつかの補助系呪文は使えて  
たはずなんだよな〜。」

ピティ「そうなのよね〜、あんたは一応、この・・・。」

ピティは話しながら聖時の近くの岩の上に置いてある本の側まで飛んできた。

ピティ「アバンの書に載っている呪文は、一通り契約が済んでは  
ずだから、呪文が使えないわけ無いんだよね〜。」

ピティは腕を組みながら悩む。

聖時「・・・・・やっぱりあの時なにかあったのかな〜。」

ピティ「あの時って？」

聖時「ほら去年の10月頃、聖遼学園に受験の下見に行ったじゃないか。」

ピティ「ああ、あの時、たしか私が学園が珍しくて、あんたと別れて学園内を回っていたんだよね。そんで一通り回った後、あんたと合流しようと思ってあんたを探してたら、あんた倒れてたんだよね。」

聖時「そうそう、それからなんだよね。魔法がほとんど使えなくなったのは・・・。」

ピティ「そういえば、魔法が使えなくなったのとほぼ同時に、あなたの先読みみたいな能力がつかえるようになったんだよね。」

聖時「ああ、シグナムさんと剣の稽古なんかをしていると良くわかるんだけど、次にシグナムさんが

打ち込んでくる場所がなんとなくわかるんだ・・・それに相手が今、何を思っているのかを感じ取ることが出来るようになったし、気配なんかも敏感に感じ取れるようになったんだ。」

ピティ「へー、そんな事も出来るようになったんだ・・・まるでガ○ダ○に出てくる○ユータ○プみたいだね。」

聖時「○ユータ○プって、お前な・・・まっ、確かにそう言えなくも無いんだけどな。」

聖時はそういいながらその場を離れていこうとした。

ピティ「ちょっと、どこ行くの？」

聖時の背中に、ピティガ声をかける。

聖時「裏庭のかけの下！次の修行やるから、ピティには仕掛けてある装置を動かす役をやってもらうよ。」

ピティ「え、ちょっと待ってよ。」

聖時の後を追ってピティが飛んで付いて行った。

\*

別荘の裏庭にある崖、聖時はその下に立っていた。

聖時は左手の指にはめてある指輪に意識を手中させる。

すると、指輪が光、鞘に納まった刀に変わる。刀形のストレージデバイスである。

それを左手に持ち、右手で刀を鞘から抜いて、鞘を地面に落とす。

聖時「ピティ、いつでもいいぞ！」

聖時は崖の上にいるピティに合図をおくる。

ピティ「OK！いくわよ！」

そうやってピティは自分の近くにあるロープが結んである棒をひっぱる。

ロープの先には、岩が崩れないよう支えてある板の止め具に結んであり、それが

ピティにひっぱられた為にはずれ、岩が崖下にいる聖時めがけて転げ落ちていく。

聖時は転げ落ちてくる岩に向かって刀を振りかぶり立ち向かっていく。

聖時「アバン流刀殺法！大地斬！」

ズバババツ

聖時は自分に向かってくる岩を刀で切り裂く。

自分に向かってくる岩を全て切り裂くと、聖時の周りには刀で切り裂かれた岩が転がっていた。

ピティ「おみごと！どうやら大地斬はほぼマスターしたみたいだね。」

崖の上から飛んで聖時の側までピティがやってくる。



聖時「ああ、これで飛天の書を読んで身につけた飛天御剣流の技、

りゅうついでん  
龍槌閃

りゅうしょうせん  
龍翔閃、りゅうかんせん  
龍巻閃、そうりゅうせん  
双龍閃を入れて

身につけた技はこれで五つだ。」

得意げに話す聖時にピティが話しかける。

ピティ「……けど大地斬は一番初步の技、身につけた飛天御剣流の技も基本となる

技だけじゃない。」

聖時「う、……わ、わかってるよ。僕はまだ基本をマスターしたただけだって言うんだろ。……

確かにこんなんじゃない“あいつ”の強さに追いつけない……母さんと桃華を殺し、僕の左足を奪ったあの黒い鎧の男に！」

聖時は拳を握り締めて、そのことを思い出してるのかその表情に怒りが浮かぶ。

ピティ「聖時。……あつ、そうだ、そろそろ別荘（じつ）に入つて丸一日たつね。そろそろ出る準備をして外に出ようよ。」

聖時「え、ああ、もうそんなになるのか？じゃあそろそろ屋敷に行つて荷物を取つてこなくちゃな。」

そう言つて普段の顔に戻つた聖時は、ピティと屋敷に戻つて行つた。

屋敷に入り、屋敷の居間に置いてあるカバンを持ちそのまま、今度

は調合で使っている部屋に向かう。

ピティ「あれ、どこ行くの？」

玄関に向かわず、調合室に向かう聖時に、ピティは声をかける。

聖時「調合室。あそこに置いてある調合の練習で作った入浴剤を持って行くこうと思って。」

ピティ「えっ、なんで？」

聖時「せっかく作ったんだから、使ってみないとね。それに数が多  
いから、なのはさん達にもおすそ分けしようと思ってね。」

ピティ「なるほど、たしかに使わなきゃ意味ないよね。」

そう言って調合室に向かう聖時に、ピティは飛んで追いつく。

調合室の扉の前まで行き、扉を開け、中に入る。

部屋の中には調合で使う、さまざまな機器が置いてある。

聖時はテーブルの上に置いてある色とりどりの液が入ったビンを持  
ってたカバンの中にしまう。

ピティ「ねえ、聖時。この入浴剤の調合のレシピって、聖時のお父  
さんの部屋で見つけたやつだね。」

聖時「ああ、他のレシピやアバンの書、飛天の書、今僕が使ってい  
るデバイスらと一緒に見つけたんだ。たしか父さんが母さんと結婚  
する前に行った所、メタなんとかって言う所で使っている物のレシ

ピ「うっ、い、いいだろ、今は入ってないんだから・・・時効だよ時効。」

ピティ「へへメタなんとかね。」

ピティはそういいながら周りを見渡した。

調査で使う機器の他に、裏山で拾った色んな道具が所狭しと置いてある。

ピティ「こうやって見ると、結構色んな道具を拾ったね。魔力を回復させる指輪に、すばやさがる腕輪、使くとキズが回復する盾に振るうと雷が出てくる杖

魔力が回復する水が入った小瓶に、きれいな細工がほどこしてある玉・・・ほんとに色々あるね・・・これ例の抜け道から入った裏山で全部見つけたんだよね？」

ピティの問いかけに聖時は作業をしながら答える。

聖時「ああ、この別荘と一緒に、裏山で見つけたんだ。」

ピティ「見つけたのはいいんだけど、あそこって本来は立ち入り禁止なんだよね。」

ピティの言葉に、作業していた手が止まる。

聖時「うっ、い、いいだろ、今は入ってないんだから・・・時効だよ時効。」

そういつて作業を再開して、ビンを全てカバンにしまい込む。

聖時「よし、それじゃ戻ろうか。」

そう言つてカバンを担ぎ、部屋を出てる。それにピティが続く。

廊下を歩き、玄関を出る。

玄関の先には魔方阵があり、その中心に立つ。

すると魔方阵が光り、聖時とピティの体を包み、次の瞬間、聖時は鳴海にある自分の家の部屋にいた。

聖時の後ろでは手のひら大の大きさの水晶球があり、その中には先ほどまで居た別荘が中に入っていた。

聖時「ふうつ、無事戻つてこれたみたい。」

ピティ「しかし、これ本当に便利だね、こんな大きさなのにこの中に家が丸々一つ入ってるし、しかも持ち運び出来るんだもんね。しかも中の一日は外の一時間だから、忙しくて時間が取れない時でも、この中の入れば時間が作れる。ほんと、重宝するわよね。」

聖時「なにかと忙しい現代社会で、これを量産して売ったら飛ぶように売れるかもね。」

ピティ「たしかに、特に忙しい管理職の人なんか泣いて飛びつくよ。」

そんな風に話しながら持っているカバンを部屋に置き、ピティと一緒に台所に向かう。

そろそろ夕食の準備に掛からなければならぬ時間だった。

聖時「そろそろ、夕飯を作り始めないとユニが帰ってくる時間に間に合わないね。」

ピティ「今日は聖時が当番の日だったよね。ねえねえ、わたしク○

ムツケの網焼きがいい!

たしか冷蔵庫の中にあつたよね?」

聖時「なに言ってるんだ、それは昨日全部お前が食べちゃったろが。」

ピティ「あれ?そうだったけ?」

聖時はため息を吐きながら「ヤレヤレ」と口にしながら台所に面してる居間に向かう。

聖時「……………」

ピティ「ん、どうしたの?」

聖時の様子が変わるのでピティが声をかける。

聖時「いや、なんか悪い予感がするんだ。」

ピティ「悪い予感?」

聖時「ああ。」

ピティ「ふ〜ん、なんだろうね〜。」

そんな風にピティと話しながら居間の襖を開ける。するとそこに意外な人物が背をこちらに向けて座っていた。

聖時「あれ？なんでアルフがここに居るんだよ？」

ピティ「え！アルフ？・・・ほんとだ。」

聖時達の声が聞こえたのかアルフが、油の切れたロボットみたいな動きでこちらに首を回して顔を向けた。

アルフ「よ、よう。聖時……………」

聖時はアルフの様子が変わるのに気付いた。顔色は悪く、額から冷汗が滝のように流れている。

そのあまりにも異様な状態に聖時は少し戸惑いながら声をかける。

聖時「ど、どうしたんだ？なんか様子が変わりだけ……………」

そんな風に聖時が声を掛けている時、台所から聞きなれた声が聞こえてきた。

シャマル「あれ、聖時さん？もうお部屋からいらしてたんですか？ちょっと待っててくださいね」

もうすぐお夕飯出来ますからね」

聖時「えっ……………なんでシャマルさんが家……………」

聖時は疑問の声を上げる。その疑問にアルフが答える。

アルフ「何でもユニからなのは達に電話があつたんだって……………で、電話の内容はユニが今日は泊り込みの仕事になるから、聖時にその

事を伝えて欲しいって事だったんだって・・・」

聖時「え、・・・・・・・・なら直接僕の携帯に掛ければ済むはずなのに  
なんで・・・・・・・・」

聖時は疑問の声を再度あげる。

アルフ「・・・・最初はユニも聖時の携帯に電話を掛けたんだけど、  
聖時・・・・携帯の電源でも切ってたのかい？何度かけても電話に出  
なかつた上、家電の方にも掛けても反応がないから心配になって  
なのは達に電話してみたんだよ？」

聖時は「あっ」と思った。多分ユニが携帯に電話をかけていた時、  
自分たちが別荘に居た時だから  
携帯が通じなかつたんだなと思った。

聖時「それは分かったんだけど・・・・なんでアルフがここに居て、  
シヤマルさんが料理を作るといふ形になつたんだよ。」

アルフは淡々とその疑問に答える。

アルフ「ユニからの電話で、誰かが聖時の様子を見に行く事になつ  
たんだ・・・・そこでシヤマルが  
立候補、ついでに夕飯を作ろうといふ形になつたんだと・・・・あ  
たしはたまたま聖時の家の近くに居たから声をかけられて、そのま  
まなし崩しにシヤマルの夕飯を食べる事になつて・・・・・・・・」

聖時は気の毒そうにアルフを見る。しかし今は他の人の事より自分  
のことである。

シャマル「~~~~~」

鼻歌交じりで料理をするシャマル……今の聖時とアルフには地獄へのカウントダウンに聞こえる。

このままでは、自分は再びシャマルの料理を食べる事になる。この前の地獄のフルコース料理からようやく立ち直ったのに、ここで再び胃腸に壊滅的なダメージを受けるのは避けたい……。

そう思い立って聖時はアルフとピティに相談しようと思い、まず近くに居るピティに声をかけようとしたが……

聖時「?……あれ?ピティ?」

アルフ「ピティのヤツだったら、シャマルの声が台所から聞こえてきたのと同時に、あわてて逃げて行ったよ……」

聖時「へっ……あ、あいつ!即行で逃げやがったな~~~~~」

道理でさっきから静かだと思った。と聖時が思っていると台所からシャマルの声が聞こえてきた。

シャマル「お待たせしました。お夕飯できましたよ。」

改心の出来だったのか、笑顔で料理を盆に載せてシャマルが台所からやってくる。

聖時（し、しまったあ~~~~!逃げる機会を失ってしまった~~~~）

聖時は後悔したが時すでに遅く、テーブルに料理が並べられる。



聖時（し、しかたがない・・・腹を括ろっ・・・）

あきらめてアルフの横に座る。

どうやらアルフも諦めたらしく悲壮な顔になっている。

シャマル「さあ、どうぞ」

シャマルに進められ、目の前の料理の処理に取り掛かる。

どうやら今回はグラタンらしい。一見普通のグラタンに見える。

アルフ（なあ、まともそうな料理に見えるな・・・）

聖時（油断するな・・・こういう一見まともそうなのが厄介なんだ・・・）  
せーので食おうな？）

アルフ（・・・痛みは分かち合うのが友情ってもんだよね）

そう小声でアルフと会話す。・・・ある意味世界一固い友情かもしれない。  
ない。

・・・食った事のない人にはただの馬鹿にしか見えないが。

フォークでグラタンを恐る恐る口に運ぶ。

聖時（せー・・・）

アルフ（のっ！！）

……熱いのが幸いだっただのか、一瞬熱さで味が良くわからなかった。  
しかし……二口、三口とよく噛んでいくと、どう表現していいかわからない味が口一杯に  
広がる。

アルフ「シ……シャマル……何この水くさい甘さは」

聖時「……僕、スイカだと思う」

アルフ「……うわぁ……マジでスイカだ……見なよ聖時、緑と黒のストライプがチーズたっぷりって、なんで皮ごと入ってるの！  
？」

アルフが不気味な描写を口にしながら疑問をシャマルになげかける。

シャマル「スイカの皮ってお漬物にするとおいしんですって。」

得意げに話すシャマル。

アルフ「それは美味いけど、グラタンとは何の関係もないんじゃない？」  
「。」

聖時「と言うか、なんでこの時期にスイカなの？」

シャマル「今日買い物に行ったスーパーで「季節のお野菜の先取りコーナー」て言うのを  
見つけて、それでおいしそうなスイカを見かけたから……」

聖時「……思わず買ってきてしまったと……」

シャマル「そう言う事」

「  
アルフ「思わずで、季節外れのスイカなんて買ってこないでよ・・・」

シャマル「あつ、そうだデザート付けるの忘れてた！待ってて、今  
シャマルさん特製の・・・」

アルフ「いい、いいって！！」

聖時「僕もこれだけでお腹一杯だから！！」

これ以上食べるのが遅くなると増えそうなので、いそいで目の前の  
物体をかきこむ。

聖時（これ以上増やされてたまるか！！）

この後1時間かけてシャマルが作ったスイカグラタンを完食した。

シャマルの料理を食いなれてないアルフは、食べ終わった時は顔色  
がかなり悪かった。

・・・のちに、地獄のような食事だったとアルフは語ったと言う。

「おまけコーナー」

ピ 「ピティと」

ユ 「ユニの」

二人 「おまけコーナー」

ピ 「はい、おまけコーナーの時間です。司会進役のピティで  
す。」

ユ 「解説のユニです。」

ピ 「アシスタントのビッキーです。」

ピ 「さて今回からは私達三人の他に、登場作品の中からゲスト  
を呼んで行くつもりです。」

ピ 「ゲストを呼ぶ？」

ピ 「そう。話の流れから登場するのが、物語りの後半になるキヤラを活躍させたいので、その救済処置の為のゲスト召還です。・・・そしてそのためにあんたがいるの。」

ピ 「へ？わたしが？」

ピ 「そう。」

どこから取り出したコシヨウのビンを取り出してビッキーに近づく。ピテイ。

ピ 「あ、あの・・・そのコシヨウでなにを・・・」

ピ 「じつするの。」

ビッキーにコシヨウをふりかける。

ピ 「ハ・・・ハ・・・ツクシユン！」

パッ！

ドカッ！

なにか重たい物が上から落ちてくる音。

ル 「イタタタッ、もう！もうちょっとうまく召還しなさいよ！」

ピ 「はい。今回のゲストはゼロの使い魔のルイズです。」

ル 「え？あ、ああ・・・はじめまして。ルイズよ。」

ユ 「どうもルイズさん。はじめまして。」

ピ 「よろしくー!」

ビッ 「よろしくお願いします。」

ル 「よろしく・・・って、あのね!そのあなた!」

ビッ 「へっ、私ですか?」

ル 「そう!あなたね、人を呼び出すならもうちょっと丁寧にしなさいよ!」

ビッ 「えっ・・・ああ、すみません!」

ピ 「うわ、相変わらずの気位の高さ・・・けど、ルイズも人のこと言えないんじゃないの?」

ル 「?どついう意味よ。」

ピ 「原作での才人の呼び出し・・・」

ル 「うっ」

ピ 「あれだって、丁寧な呼び出しとは思えないよね。」

ル 「。うっうっうっ。」

ユ 「まあまあ。二人ともそこまですておきましょう。これ以

上は話が進みませんし。」

ピ 「そうね・・・それじゃ、まず今回の話を振り返って一言。」

ル 「えっ！えくと、努力は大事ってこと？」

ピ 「あゝ、それは言えるね。」

ユ 「聖時さん、魔法がうまく使えないから練習をしてみたいたいですね。」

ビツ 「魔法が使えなくて、影で特訓をするあたりは、ルイズさんも共感できるところがあるんじゃないんですか？」

ル 「まっ、たしかにそうよね。魔法がうまく使えない所とかは、私も思う所があるもんね。」

ユ 「お二人共、がんばって魔法が使えるようになると良いですね。」

ピ 「うん。応援するよ。」

ビツ 「がんばってください。」

ル 「えっ、う・・・うんありがと／＼／＼」

ピ 「えくとそれじゃ次、今回の補足は、本編に出てきたアバンの書と飛天の書についてだね。」

ル 「たしか聖時がこれを読んで、魔法や剣の技の修行をしてた

わね。」

ユ 「はい。聖時さんは最初、この二つの書物を読み解きながら修行をしていました。」

ピ 「そうそう、けどやっぱり技を覚えても、実戦で使えるようになるには、やっぱり技をかけられる相手がいる、模擬戦が必要になってきてから、シグナムに毎朝稽古してもらっているんだよね。」

ル 「へへ。たしかに稽古は相手がいるほうがいいもんね。一人じゃ限界もあるし。」

ユ 「たしかそうですね。・・・さてここからは聖時さんが修行で使っている書物の補足を一冊ごとにしていきたいと思います。・・・まずはアバンの書からです。」

ピ 「これってさへ、ダイ大に出てきたあのアバンの書のことなの?。」

ユ 「いいえ、実は本編に出てきているアバンの書は原作のダイ大の後、アバンが新たに書いたものだと言う設定です。その証拠にあのアバンの書には、アバンが破邪の洞窟で手に入れた破邪の秘法が記されています。」

ピ 「へへ、破邪の秘法がねへ。・・・たしかにあれを手に入れたのはバーンとの最終決戦のちょっと前だったもんね。」

ユ 「他にもこの新しいアバンの書には、ミナカトルやリリルーラ、ベタンやさらにストラッシュクロスなど、バーンとの戦いで



出てきた数々の呪文や技が新しく追加されています。」

ル 「へーミナカトルまであるの！……ちょっと私も見たくなってきた……」

ピ 「ちよつとやめてよ？いくらコモン・マジックが使えないからってこつちの魔法を使おうなんて……。あんたみたいな虚無の使い手がこつちの魔法を使おうとしたら、どんなケミカル反応が起きるか……。私はあんたの爆発に巻き込まれるのはゴメンよ！」

ル 「爆発って……人を火薬か爆弾みたいに言わないでよ！」

ピ 「あんたから爆発を取ったら、ツンデレしか残らないじゃない。い。」

ピ 「ピテイさん！それは違います！」

ピ 「へっ、ピツキー？」

ピ 「ルイズさんは爆発とツンデレだけじゃありません。」

ル 「ピツキー。そうよ！もっと言ってやって……」

ピ 「ルイズさんは爆発とツンデレの他にも……」

ピ 「他にも？」

ピ 「貧乳属性がります！」

ル 「そうそう……。ってオイ！だれが貧乳ですって……」

「!」

ユ 「ビッキーさん……それフォローになってませんよ……」

ル 「あんた……。覚悟は出来てるんでしょうね。」

ビツ 「え、えくと……とりあえず逃げます!」

ル 「待て〜コラ〜!」

ピ 「え〜と、とりあえず話を戻すか。とりあえず聖時はその中の初歩の所までしか習得してないんだよね。」

ユ 「聖時さんにはがんばって取得してもらわないといけませんね。」

ビツ 「二人共私達を置いて話を進めないでください。」

ル 「待てコラ〜〜!」

ピ 「向こうはしばらくほっとこう。さて次は、飛天の書についてだね。」

ユ 「飛天の書は、聖時さんのお父様、聖さんが神谷の実家の蔵の中から見つけた物で、その名が指すように、飛天御剣流の技が示されています。著者は神谷かみやけんじ剣路。」

ピ 「え、剣路が書いたって、なんで剣路が書けるの?」

ユ 「OVA、るろうに剣心・星霜編で剣路は、一時期、ひがせいでい比古清

十朗の元で修行をしていました。けど結局、修行の途中で東京に帰ってしまいました。ここからはオリジナル設定ですが、比古清十朗ひこせいじゅうろうは自分の代で飛天御剣流を終わりにするつもりでしたと、剣路はそれを惜しがり、自分が教えてもらった飛天御剣流の技と、それ以外の自分が教わっていない技を人から聞いたりしてこの書に書き残したのです。いつかこの力が必要になる日が来る事だろうと思って。」

ピ 「なるほど、だから神谷の家の蔵の中にあっただね。さて今回はここまで。」

ル 「くらえ〜〜〜、エクスポージョン!!」

ドカッ〜〜〜〜ン!!

ものすごい振動が辺りを包む。

ユ 「…………どうやら向こうも終わったみたいですね…………」

ピ 「大丈夫かな〜ビツキーのヤツ…………まっ、多分大丈夫ですよ。」

ユ 「多分…………。」

ピ 「いいの!それより締めという言葉!」

ユ 「あ、はいはい。それではみなさん!

二人 「まったね〜」

ビツ 「私をほっという締めないでくださ〜い!!」



## 第9話 裏山の遺跡と別荘（後書き）

今回つかったシャマルの料理ネタは、作者が昔やった  
ミッシング・パーツという推理ADVゲームのイベントが元です。

作者は、このゲームが好きで、最初の頃、この作品を  
構成で入れてみようかと思っていたものです。

さて、みなさんはこのネタは面白かったですでしょうか？

ご意見・感想おまちしております。

第10話 水瓶座（アクエリアス）と錬鉄（れんてつ）（前書き）

どうも剣 流星です。

募集した真の紋章について指摘があったので、  
おまけコーナーでその指摘について書きます。  
それでは第10話どうぞ

## 第10話 水瓶座（アクエリアス）と錬鉄（れんてつ）

### 第10話

アクエリアス  
れんてつ  
水瓶座と錬鉄

警視庁内の応接室・・・夜、この部屋で二人の人物が人を待っていた。

一人は黒を基調とした胸の開いたドレス風の服着た金髪のロングの女性で、

同姓が見ても美しいと思えるような女性である。

もう一人は、ゴーグルのようなサングラスをかけた金髪の男性。

茶色と黒を基調としたレザーのジャケットを着ている。

二人は互いにしゃべろうとせず、応接室は沈黙に包まれてた。

ガチャ

沈黙を破るように応接室に人が入ってきた。

特務捜査課・東郷大地である。

????「来たか、友よ。」

ゴーグルの男が大地に声をかける。

大地「久しぶりだな、エルネ「わたしはレイツェル・シュメイカー。ただの便利屋だ。」む…………。」

突然、友人のエルネストから「自分はレイツェル・シュメイカーだ。」と言われ、面食らう東郷大地。

レイツェル「すまんが、この姿の時はそう呼んでくれ。」

大地「・・・む・・・わかった。」

東郷大地は承知して応接室の二人の反対側に回る。

レイツェル「紹介しよう。こちらがレディー・ブリジット、我々の協力者だ。」

ブリジット「ブリジットだ、よろしくたのむ。」

あいさつと共に差し出された手を握り返しあいさつする。

東郷「特務捜査課、東郷大地だ。特務捜査課設立の折は尽力感謝する。」

ブリジット「なに、こちらにも思惑があつてやったことだ。それより、こちらが使わしたレイシアはどうだ？あれのことだから回りに迷惑ばかりかけている「だれが迷惑ばかりかけてるだ！！」」

いきなり応接室の扉を開けて片手にお茶の入ったお盆を持った、金髪の小柄な少女が現れた。

ブリジット「レイシアか、元気そうだな。」

レイシア「なにが「元気そうだな」よ！わたしが居ること、気配



で知っててわざと言ってたくせに！」

レティシアがブリジットに食って掛かっているのを観て、ため息をつきながら東郷大地が声をかける。

東郷「レティシア、盗み聞きは感心できんぞ。」

レティシア「盗み聞きじゃありません！接客用にお茶を持ってきたんです！」

そういいながらレティシアは、手に持っているお盆の上のお茶をテーブルの上に置いていく。

東郷「レティシアが入れたのか・・・ビッキーとジーンはどうした？」

テーブルにお茶を置き終えたレティシアに、東郷は他の女性員の事を聞く。

レティシア「二人共帰りましたよ・・・まっ、時間が時間ですからね。」

そうレティシアは答えた。・・・現在は夜の11時を回った頃、夜に活動するヴァンパイヤ以外の人はとくに家に帰っている時間である。

レティシア「それじゃ、私は書類整理と会計の仕事があるので失礼します。」

そう言ってレティシアは出て行った。

レティシアが出て行った扉を見て、レディー・ブリジットはつぶやくように言う。

ブリジット「・・・どうやらチャンと仕事をやっているみたいだな。」

東郷「彼女には助かっている。状況判断、臨機応変な対応・・・どれを取っても特務捜査課には欠かせない戦力になっている。」

ブリジット「当然だ・・・そのように仕込んだのだからな。なつてもらわないと此方が困る。」

レイツェル「彼女は、あなたの妹でしたね？」

レイツェルがブリジットにレティシアについて聞いてくる。

ブリジット「ま、そんなもんだ・・・それより本題に入りたいのだが。」

ブリジットの声に、二人は真剣な顔になる。

ブリジット「実はそちらからもらった真の紋章の魔力反応のデータを基に、此方でも真の紋章の在り処を調べてた所、この世界で奇妙な反応を発見した。」

レイツェル「奇妙な魔力反応？」

ブリジット「そうだ。真の紋章の魔力反応に良く似ているのだが、魔力反応がとても小さい上、

反応が現れたと思ったらすぐに消えてしまうのだ。最初の頃は誤反

応と思っていたが、  
出てくる反応の回数が多かったのでまさかと思ってな。」

東郷「しかし・・・すぐに消えてしまつとは・・・面妖な・・・」

ブリジット「たしかにな。しかも同じ場所で続けて反応が在り、しかもそこから動こうとしないのだ。」

ブリジットの言葉を聞きレイツエルが顔をしかめながら聞いてくる。

レイツェツ「その魔力反応があつた場所は？」

ブリジット「場所は・・・聖遼学園だ。」

レイツェル「聖遼学園だと！」

レイツェルが驚きの声を上げる。

東郷「レイツェル、たしか聖遼学園とはたしか・・・」

レイツェル「ああ、来迎寺グループが設立した学園だ。・・・たしか近年、あの学園では  
謎の意識不明者が度々出ている・・・レディー・ブリジット、その魔力反応はいつ頃から  
出始めた？」

ブリジット「たしか・・・去年の秋頃からだ。」

ブリジットの答えに眉間にシワを寄せながらレイツェルがつぶやく。

レイツエル「・・・意識不明者が出始めた頃と同じ時期だな・・・」

東郷「両方の事柄は、何かしらの繋がりがあるやもしれんな・・・  
たしかあの事件は  
フラレーンが請け負ってたな。」

東郷の言葉に反応して、ブリジットが問いかけてくる。

ブリジット「フラレーン？なんだそれは？」

レイツエル「フラレーンとはSE・・・シナプス・エンジニアリング・・・・他人の脳システムコネクに接続して操る技術の事で、フラレーンは来迎寺グループが設立した物で、SEの研究とその使い手を保護、育成し、特殊な事件などへの捜査協力をしている。いわば特務捜査課の下部組織みたいなものだ。」

ブリジット「ほう？そんな能力者がこの世界にはいるのか。」

レイツエル「ああ。しかしそのSE能力者でも事件の全貌を把握する事が出来なかったばかりか、犠牲者を出してしまう始末だ。」

ブリジット「犠牲者？」

ブリジットが顔をしかめて聞いてくる。

東郷「そういえば、フラレーンから最初に派遣された能力者が意識不明になってたな。彼女は今でも意識が戻らないそうだな。」

レイツエル「ああ、もしかしたら意識不明事件はまだ終わってない

のかも知れない。フラールレンから一人S Eを派遣しよう。」

東郷「そうだな、そうしてくれ。今、あそこには、聖時が通っている。もし、反応が真の紋章だったら、聖時が危険だ。護衛をしているアルフにも注意しておくよう言っておこう。」

ブリジット「聖時とはもしや、じゅうてい竜帝のかみやひじり神谷聖の息子の事か？」

東郷「知っているのか？」

ブリジット「ああ。次元世界を渡り歩けば、いやでも神谷聖の名を聞く。それで気になって調べてみのだ。」

レイツェル「なるほど。それで知ったのか。」

ブリジット「ああ。神谷聖の息子なら、真の紋章を受け継ぐ資質を持っていても不思議ではないな。」

レイツェル「ああ。だから今、あの反応が真の紋章であった場合、聖時が一番危険になる。」

ブリジット「なるほど。たしかにそうだな。」

東郷「レディー・ブリジット。情報の提供、感謝する。」

ブリジット「なに、かまわん。その分、これからもよしにな。」

東郷「ああ。」

そう言って三人は少し息を抜くために、目の前に置いてあるお茶に

手を伸ばし、一口飲んだ。  
お茶は少し冷めて、ぬるくなっていた。

\*

レディー・ブリジットが東郷大地と会っていた夜が開けた、次の日の午後。

神谷聖時は私服姿で、海鳴市の病院へ、才人、アキ、アルフと共に向かっていた。

前からアキと約束していた、デジエルの見舞いに向かう所である。

聖時「……なにもお前らまで来なくてもいいのに。」

聖時は才人、アルフに向かって言った。

才人「いいじゃないか。」

アルフ「どうせ暇だったしね。」

聖時「暇なやつら。」

そう言つて聖時はお見舞いの品の果物の詰め合わせを持ち直した。

アキ「そういえば、ピティとふたばはどうしたの？誘つたんでしょ？」

聖時「ああ、誘つただけけど、ふたばは用事があるからつて。」

才人「ふくん。じゃあピティは？あいつが聖時の側にいないなんて珍しいな。」

聖時「……この前、駅前めぐりで当たったWiiのスーパーマ○オにハマッて忙しいらしい。」

アルフ「ハア？スーパーマ○オにハマッてる？」

聖時「ああ。休みの今日は、朝からずっとぶっ通しでやってる。」

アルフはそれを聞いて呆れた声をあげる。

アルフ「あいつ……自分のマスターほつといてなにやってんだか……使い魔の自覚ないんか！」

才人「べつにいいじゃないか。うるさくなくて。オレはいいと思うぜ。」

才人の声を聞きため息を吐きながらアルフはつぶやくように言う。

アルフ「まっ、静かなのは同意するけど。」

そんな会話をしながら四人は病院へ向かった。

鳴海市の病院。その入り口の自動ドアをくぐって聖時達4人は、病院内に入る。

入ったすぐそこはホールになっていて、たくさんの待合用にイスが並べてある。

外来の患者なのか、何人かの人がイスに座り待っていた。

アキ「え〜と、デジェルさんの病室は確か4階だったはず・・・」

聖時「じゃあエレベーターで上がろう。」

アキ「エレベーターはこっちだよ。みんなついてきて。」

そう言っアキが先頭になって歩き始めた。



聖時達もそれに続く。

アキに続いて歩いて行くと、突然聞きなれた声を聞く。

聞きなれた声「ありがとうございます。」

声の方を向くと、ふたばがちょうど診察室から出てくるところを目撃した。

聖時「あれ？ふたば！」

聖時の声が聞こえたのか、ふたばが聖時たちの方を向く。

聖時はふたばに歩み寄る。

ふたば「あれ？聖時。どうしてここに？」

聖時「それはこっちの台詞。ふたばこそどうしてここに？」

ふたば「私は定期健診があったからここに……。」「

才人「定期健診？」

才人達も聖時に続いてふたばの側に行く。

ふたば「うん。わたし、前に大きな病気になって手術をうけたの。手術は成功したけど、その後も術後の経過を見なきゃならないから、定期的に病院に通ってるの。みんなこそどうして病院（ここ）に？」

聖時「ほら、今朝電話で言ってたじゃないか、デジエルさんのお見舞い。」「

ふたば「ああ。デジェルさんが入院してる病院でここだったのね。」

ふたばは納得したと言う様にうなずく。

アキ「そつだ！ねえふたば、これから時間ある？」

ふたば「え？ええ、あとはお会計を済ますだけだけど？」

アキ「ならそのあと、私達と一緒にデジェルさんのお見舞いに行ってもらえるかな？ほら入院中って結構退屈でしょ？だから一人でも多くの人がお見舞いに来てくれると嬉しいと思うから。」

ふたば「・・・たしかにそつだね。じゃあ、ちょっと待っててね。お会計済ましてくるから。」

そつ言つてふたばは会計に向かった。

\*

四階にある病室。

今ここに、一人の男が入院している。髪はロングでエメラルド色、整った顔立ちで、名をデジエル。この間、フェイトとアキが、聖時の家の裏山近くで、傷だらけで倒れていた所を発見された人物である。

その彼は、今困惑していた。

デジエル「テストロッサさん？気持ちは嬉しいんですが・・・後は自分でやりますんで・・・」

デジエルは今、自分が使っているベットの横で、リンゴを剥いている女性、フェイト・テストロッサ・ハラオンに向かって声をかける。

フェイト「だめですよ。デジエルさんは今、両手が使えないんですから。」

そう言いながらリンゴの皮を剥き終わり、リンゴを切って、一口サイズにする。

そして一口サイズに切ったリンゴを爪楊枝で刺し、デジエルに差し出す。

フェイト「はい あ〜ん」

デジエル「いい、いいですよ。自分で食べます。」

そういつてデジエルは包帯でがんじがらめになった手で、リンゴを掴もうとしたがうまくいかない。



あわててアキ達を呼び止めようとした二人。  
それからしばらく経って・・・

・・・  
フェイト「だから私がバランスを崩してそれで・・・」

聖時「はいはい。わかってますよ。」

フェイト「うゝ、その台詞、全然解ってない・・・」

あの後フェイトとデジエルは誤解を説こう説明するが、暖簾のうで押し状態で聖時達はニヤニヤしながらあいまいな返事をするだけだった。

そんなやり取りを見て、ハア〜と息を吐いたデジエルは、アキに声

をかけた。

デジエル「……それでアキ。そちらに居る人たちを紹介してくれないか。君のお友達かい？」

アキ「あ、はい。わたしのクラスメイトで友達の……」

聖時「神谷聖時です。」

才人「平賀才人です。」

ふたば「渡良瀬ふたばです。」

アルフ「アルフ・ハラオンだよ。」

デジエル「どうもデジエルです。」

デジエルは軽く頭をさげる。

聖時「あ、これお見舞いの品です。」

聖時はそう言って持ってきた果物の詰め合わせをデジエルに手渡した。

デジエル「これはわざわざ。」

そう言って聖時から果物の詰め合わせを受け取る。

聖時「しかし、元気そうでした。その様子じゃあ退院も早そうですね。前に見たときは死んでるんじゃないかと思っぐらいひどい

状態でしたからね。」

デジエル「うん？ひどい状態って・・・なんで知ってるんです？」

デジエルが不思議そうな顔を見ると、アキが応える。

アキ「聖時は倒れているデジエルさんを見てるんです。救急車を呼んだのも聖時なんですよ。」

アキの言葉を聞き、デジエルは納得したという顔をする。

デジエル「そうですか。お手数をおかけしたみたいで。」

デジエルは頭を下げる。

聖時「いいですよ。当たり前のことをしただけですから。」

そう言って聖時は言葉を返す。

ふたば「それにしても・・・。」

ふたばは病室を見回して言う。

ふたば「ずいぶん本がありますね。読書が趣味なんですか？」

デジエル「ええ、そうらしいですね。ま、入院生活は時間が有り余ってしまつもんですから、本を読むにはうってつけですからね。」

そういつてデジエルは微笑んだ。

アルフ「？そうらしいってどう言う事だい？」

アルフがデジエルに聞いてくる。

デジエル「ああ、どうやらわたしは記憶喪失らしい。そうらしいと答えたのも記憶がないからだ。」

それを聞いたアルフは気まずそうな顔をしてデジエルに謝る。

アルフ「ご、ごめんよ、デリカシーのない事を聞いて。」

デジエル「だいじょうぶですよ。気にしてませんから。」

そういつてデジエルは微笑んだ。

アキ「ところであれから何か思い出しましたか？」

アキの問いかけにデジエルは少し顔をしかめて言った。

デジエル「あれから名前以外、何か思い出せないかと思って思い返してみたんです。それで少しだけ思い出せたんです。」

デジエルの答えに反応して、アキが声を上げる。

アキ「え、何か思い出したんですか！」

デジエル「ああ、どうやら私が体験した思い出らしいのだが・・・それがとても不思議なものなんだ。」

フエイト「不思議な物？」



フェイトのつぶやきに、デジエルはうなずいて応える。

デジエル「ああ……周りから水の壁が押し迫ってきているんだ。私は金色に輝く鎧に身を包んでいて、目の前に、私に対峙するように、手に三又の矛を持って、鎧に身を包んだ髪の長い女性が中に浮いていたんだ。」

デジエルの話を聞きアキが不思議そうな顔をする。

アキ「なんだかずいぶん不思議な光景ですね……」

デジエル「ああ、しかもどうやら私はその矛を持った女性を知っているようなのだが……それが誰なのかが思い出せないんだ。」

デジエルが思い出せない事に苦しそうな顔を作った。

フェイトはそんなデジエルを心配そうにして声をかける。

フェイト「無理しないでください。傷だってまだ治りきっていないんですから。あせらずゆっくり思い出していきましょう?」

デジエル「そうですね……ありがとうございます。テストロッサさん。」

フェイト「い。いいえ／＼／＼／」

デジエルの向けた微笑に、顔を赤くするフェイト。

才人「……なあ、俺たち本当にお邪魔みたいだな。」

ふたば「え、ええ／＼／＼なんだか妬けちゃいますね。」

聖時「ああ、そうだね。僕達はそろそろお暇しようか？」

アルフ「そうだね。」

そう言つて聖時達は帰る準備をし始める。

デジエル「お、おい！」

フェイト「ちよつと！」

聖時達は病室の扉まで行き、デジエルとフェイトに向かって言つ。

聖時たち「くくくくくそれではごゆっくり」

そう言つて病室を出て戸を閉める。

フェイト「ちよつとまっ」

ピシヤ！

フェイトが何か言っているようだったが、それを最後まで聞かずに戸を閉めた。

聖時「さて、これからどうしようっ？」

アキたちの方を向いて聖時が問う。

ふたば「あつ、だったら冬木市の新都に行かない？私、そこにある

CDショップに用があるんだ。」

才人「へへ。新都か……ちょうどいいや、おれも欲しいCDがあるし。」

アキ「そうね……いいわ、私も付き合おう。」

聖時「僕もいいよ。」

アルフ「じゃああたしも付き合おうよ。」

聖時「それじゃ、決まりだね。」

そう言って、聖時達は歩き出した。

\*

冬木市の新都にあるCDショップ。

聖時たち電車で冬木市まで行き、駅から歩いてそこに向かった。

店内で聖時達は各々の好きなジャンルのコーナーにいた。

アキ「ねえ、ふたばってどんなCDを聞くの？」

アキがふたばに話しかけた。

ふたば「えっと・・・私は大抵のものなら何でも聞きますよ。」

ふたばはアキの質問に答えた。

才人「あ、ちなみに俺は・・・」

アルフ「あんたはアニソンだろ？」

才人「横から口出しすんな。そういうお前はどうかんだよ。」

アルフ「あたし？あたしは、音楽なんて腹の足しにならないもんには、ほとんど興味はないね。」

才人「えばって言うことか！」

ふたば「聖時は？」

聖時「僕？僕はクラシックなんかも聞くけど、やっぱり一番聞くのは・・・母さんが出したCDかな・・・」

ふたば「え！聖時のお母さん、CD出してるんですか？」

ふたばが驚きの声を上げ聖時に聞いてくる。

聖時「うん。母さん、結婚する前はピアニストとして活動していたんだ。しかも歌も上手で、歌って弾けるピアニストって言われてたんだ。」

聖時の答えにを聞いて、ふたばが聖時に質問してくる。

ふたば「あの……もしかして聖時のお母さんってあの来迎寺千尋きようじゆせんって名前じゃない？」

聖時「え、確かに母さんの名前は千尋で、旧姓は来迎寺だったけど？」

ふたば「やつぱり……すごい！聖時はあの天才ピアニストとして有名な、あの来迎寺千尋の息子だったんだ！」

ふたばが目を輝かせて聖時に興奮して話しかける。

アキ「ふたば、千尋さんの事知ってるの？」

ふたば「知ってるも何も、私、大ファンなんです！」

聖時「へ……へ……。母さんのファンだったんだ。」

ふたば「うん！私ね、小さいころ病気でずっと病院での寝たきりの生活だったの。入院中ってすることもないし、私の場合、病室からめったに出してもらえなくて……そんな私を思ってたのか、お母さんが来迎寺千尋のCDを買ってきてかけてくれたの。」

アルフ「へ〜、それでファンになったんだ。」

ふたば「うん！来迎寺千尋の演奏はとても精彩で美しく、そして、なにかこちらに訴えてくるような感じなの。」

アルフ「たしかにね、私は基本的には音楽は苦手だけど千尋の演奏と歌は好きだね。」

聖時「なんだアルフ、お前も母さんのファンなのか？」

アルフ「まあね。」

そう言っ得意そうな顔をするアルフ。

アキ「ちなみに、千尋さんの出したCDの中でどれが一番好き？」

アキがそう言っふたばに聞く。

ふたば「それはたぶん……。」

そういいながら、先ほどカウンターで取り寄せてもらっ買ったCDを出す。

ふたば「これ、来迎寺千尋がお姉さんの千草さんと一緒にコンサートで歌った最初で最後の曲。」

METAFALICA〜光溢れる大地へ〜だと思っ。」

聖時「え、METAFALICA？」

ふたば「うん。この曲はむかし、来迎寺千尋が外国に住んでる友達

の姉妹が詩っていた詩で、それをお姉さんの千草さんと一緒にコンサートで詩った曲なんだって。」

才人「へ〜。」

ふたば「私・・・この詩を聞いた時、感動して思わず泣いちゃった。この詩、コンサートで二人が詩う前に言ったの、「これは私の友人の姉妹が様々な苦悩、試練を越えて、大きな、大きな思いを育み、そして込めて謳った物です。私はこれを聞いたときの心の感動を、生涯忘れる事はないでしょう。私たちは、今からその詩を謳います。つたない私達ですが、その時私を感じた感動が、今から聞いてくれる人たちに、何分の一でも伝わったなら幸いです。」って、きっと二人が聞いた詩ってすごい詩だったんだろ〜ね〜。」

METAFALICAについて目を輝かせて話すふたばを見て、なんだかかわいいなと思う聖時だった。

アルフ「へ〜、そんなこと言ってたんだ。・・・あたしはこの曲聴いたことないから、聞き終わったら、私にも貸してよ。」

アキ「あ、私も!」

聖時「おいおい、二人共ちゃんとふたばが聞いた後にしろよ。」

アルフ「わかってるって。」

ふたば「聖時はいいの?」

ふたばは聖時に自分はいいのかと聞いてくる。

聖時「うん、それは聞いたことないけど、家のどこかで見かけたよに思うから、家の中をさがして聞いてみるよ。」

才人「あつ、もし見つかったら俺にもかしてくれよ?」

聖時「ああ。」

そんな風に話しながらその後、店の中を回っから店を出た。

店を出るとあたりは日が傾き、夕方になっていた。

聖時たちは話しながら駅に向かう。

聖時「しかし、ふたばが母さんのファンだったなんて、ちょっと驚いたよ。」

ふたば「わたしも。聖時のお母さんがあの来迎寺千尋だったなんて。」

才人「世の中広くて、意外と狭いもんだな。」

アルフ「まっただな。」

そいいいながら聖時はふたば達の方に顔を向けながらあるく。するとそのとき……

ドン!



聖時「あつ。」

聖時は通りの角から両手いっぱい荷物を持っている人とぶつかる。ぶつかった人は、持っていた荷物を落としてしりもちをついていた。どうやら聖時達と同じぐらいの年で、赤い髪の少年であった。

アルフ「大丈夫かい？聖時。」

聖時「うん、それよりも……すみません。大丈夫ですか？」

聖時は倒れてる赤い髪の少年に謝りながら手を差し出す。「

少年「いててつ、あ、ああ、大丈夫だ。こちらこそ前方不注意でぶつかってすまない。」

聖時「い、いいえ。」

そう言つて聖時は少年を引き起こした。

少年「しかし……それにしてもまあ……。」

そう言つて周りを見回す。

少年が持っていた荷物、食料品なのだろうか、それが当たりに散らばっている。

才人「あちゃ〜、荷物のいくつかはぶつかったショックでつぶれてるなこれ。」

聖時は散らばっている荷物を見てバツが悪そうな顔をする。

アキ「とりあえず無事な物から拾っていきましょう。」

アキがそう言っただけで散らばっている荷物を拾い始め、才人たちがそれに続く。

少年「あ、いいですよ、自分で拾いますから。」

聖時「いいえ、僕がぶつかってこうなっただけですから、僕がやりません。みんなもいいよ、後は僕がやっておくから。」

聖時の言葉に才人達は、答える。

才人「なに言ってるんだよ。」

ふたば「困った時はお互い様です。」

アキ「友達なんだから手伝うのは当たり前でしょ。」

アルフ「それにあまり拾うのに時間かけると、通る人たちの邪魔になるだろう?」

聖時「そうだね、なら早く拾おう。」

少年「すいません。ありがとうございます。」

少年は謝りながら感謝の言葉を言い、荷物を拾い始めた。

・  
・  
・

・ ・ ・ ・ ・  
数分後。

散らばった荷物を拾い終えた聖時達は、通行人の邪魔にならないように道の端に集まった。

少年「まいったな・・・買ってきた卵と牛乳は全滅だな・・・」

聖時「本当にすいません。・・・ぶつかってダメになった物は弁償しますんで。」

聖時は申し訳なさそうに言う。

少年「いや、こっちも前を見て名なかつたからお互い様だし、だから弁償はいいですよ。」

少年は聖時の申し出を断ろうとしたしかし・・・

聖時「いや、それじゃこちらの気がすみません。せめて代わりの物を僕が買ってきますんで。」

少年「いや、いいですよ。」

聖時「けど……」

アルフ「……あゝゝゝもつ、そんなんじゃないよ。そのあんた！」

アルフが少年の方を指さした。

少年「え、あ、はい。」

アルフの迫力にたじろぐ少年。

アルフ「聖時が弁償するって言ってるんだから素直に受け取っておきなよ！」

少年「いやでも……」

そんな時、アキが少年に言ってきた。

アキ「あの部外者である私たちが言うのもなんだけど、断りすぎるのもかえって相手に悪いですからここはおとなく申し出を受けた方がいいですよ？」

アキがそう言い、才人が続けていう。

才人「そうそう、聖時は一度こうなったらいじでも言葉を引っ込めないから、おとなしく受取っておく方が良いつて。」

少年はしばらく考え込んだ後、口を開いてこういった。

少年「ならお言葉に甘えさせてもらいます。」

聖時「なら早速、ダメになった物を買いなおそう。えくと、スーパーはどこだっけ？」

少年「あ、こっちですよ。」

そう言って少年が案内してくれるように歩き出したので、聖時達はそれについていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

それから少年の案内でスーパーに行った聖時達は、ダメになった食材を買いなおし、今は少年の家に向かって買った荷物を全員が分担して運んでいる所である。

最初は少年が悪いと言ってきたが、これだけの荷物を一人で運ぶとさっきのよな事になると言ったので、荷物を全員が持って行く事になった。

少年「なんだか悪いな。ダメになった食材を買いなおしてもらえばかりか、荷物まで運んでもらっちゃって。」

アルフ「いって、困った時はお互い様だろ？って言ってもあんたは納得できないみたいだね。」

アルフが困ったような声で言う。

聖時「……………」

聖時は押し黙ったまま考え事をしながら歩いていると、なにか閃いたのか、少年の方に顔を向ける。

聖時「ねえ、名前、なんて言うの？」

少年「へ？」

聖時「名前だよ、名前。」

少年はいきなりの質問に困惑したが、答える。

少年「士郎……衛宮士郎。」

聖時「衛宮士郎……僕は神谷聖時。」

士郎「神谷聖時？」

聖時「そう。神谷聖時。」

士朗「なぜ……?」

急に自己紹介をしたんだ?と言葉を繋げようとしたとき。

聖時「友達になろうって事。これからよろしくね。」

士朗「え?あ、ああ……」

士朗はまだ困惑したままだ。

聖時「さて、こうして僕と士朗は友達になったんだから。さっきの事で士朗があまり気に病む事はなくなったね?」

士朗「へ?なんで……」

聖時「だって僕と士朗は友達なんだから、助けるのは当たり前じゃないか。」

士朗はああ、そういうことか・・・と納得する。そして、先ほどまでつまらないことで気に病んでた自分が馬鹿らしくなってきた、士朗は、

士朗「ふふふふっ、はははははっ」

笑い始めた。

士朗はひとしきり笑うと、聖時に顔を向けて言った。

士朗「たっ、たしかに友達を助けるのは当たり前で、理由なんて必要ないよな。改めて、俺は衛宮士郎。士朗って呼んでくれ。」

そう言つて、士朗は荷物を持っていない手を差し出した。

聖時「神谷聖時。これからもよろしく。」

そう言つて聖時は、差し出した手を握り返した。

そんな二人を見て回りにいる才人たちは満面の笑顔を浮かべ、聖時に続いて自己紹介をしていった。

才人「おれ平賀才人。」

アキ「私、藤宮アキよろしく。」

ふたば「渡良瀬ふたばです。」

アルフ「アルフ・ハラオンだ。よろしく。」

それぞれが士朗と握手をしていった。

この日、聖時は新たな友と巡り合った。



「おまけコーナー」

ピ 「ピティと」

ユ 「ユニの」

二人 「おまけコーナー」

ピ 「やってまいりました、おまけコーナーの時間です。司会進行役のピティです。」

ユ 「解説のユニです。」

ピ 「（ブスツとした顔で）……アシスタントのピッキーです……」

ピ 「どうしたの？ピッキー。」

ピ 「"どうしたの？"じゃないですよ！前回、私をほっといてとっとと終わらせるんですもん……！」

ユ 「まあまあ、抑えて、抑えて。」

ピ 「機嫌直してよ。それよりもほら、お仕事お仕事！」

そう言ってロシヨウを取り出し、ビッキーにふりかける。

ピッ 「ハ・・・ハ・・・クシユン！」

パッ！

着物姿の男「ムッ！どうやら無事召還されたみたいだな。」

ピ 「はい！今回のゲストは、成層圏まで狙い撃てる、ガンダムマイスターのロックオン・じゃなくって、F a t eのアサシン・  
・佐々木小次郎です。」

小 「フム、よろしくたのむ。ところでその目麗しいお嬢さん。」

おもむろにユニの手を取る小次郎。

小 「よろしければこの後、それがしとお茶などいかがですか？」

ユ 「え？え・・・え」と。

ピ 「ピティちゃんキ〜ク！！！」

小 「グフツ！」

ピ 「出てきた早々、いきなりナンパなんてするな！それより今回の話を振り返っての一言！！！」

小次郎 「フ・・・フム、しいて言うなら・・・” 周りを良く見て行動をしろ” と言つところか。」

ピッ 「たしかにそうですね。」

ユ 「ええ、思わぬ所を人に見られたり、ぶつかったり・・・まさにその一言につきます。」

ピ 「まったくね。」

ピッ 「ところで前々回に募集した真の紋章のことですけど。」

ピ 「ああ、あれね。応募がいくつか来てたね。たしかその中原作の中にある真の紋章が一つ抜けてるって指摘があったね。」

小 「フム、ちゃんと調べもせず書こうとするからこの様な間抜けなことになるのだ。」

ピ 「いや、ちゃんと調べたんだよ。ゲーム本編はおろか、攻略書や小説、その上幻想水滸伝用のファンブックも使って書いたんだけど・・・」

ユ 「その資料のどこにもこの真の紋章について書かれてないんです。」

ピ 「作者もこの指摘を見てネットで検索して初めて知ったんです。」

ピッ 「ですからこの指摘をしてくれたレシオンさんにはとても感謝してるんですね。」

ピ 「」と云うわけで、作者に代わってお礼申し上げます。どうもありがとうございます。」

ユ 「それと、募集枠なのですが、3つと書きましたが2つに減らせてもらいます。」

ピッ 「枠は減りましたが、募集は引き続き行いますのでドンドンアイデアを書いてってください。」

小 「みなアイデア、待っておるぞ。」

ピ 「さて、今回はここまでとします。」

小 「フム、あまりしゃべれなかったがこれで良いのか？」

ピ 「ま、いいんじゃないの？それともボロボロになるまでやりたいの？」

小 「いや、やめておこう。ボロボロになるまでコキ使われるのは、どこの陰険魔女だけで十分だ。」

キャ 「だれが陰険魔女ですって〜!!」

ピ 「あ、キャスター。」

小 「な、なぜおぬしがここにいる!」

キャ 「そんな細かいことはどうでもいいの!・・・それより覚悟はできてる？」

魔力を手に集中し始めるキャスター。

小 「ま、までこんな所で、そんなもの放つたら大変なこと！」  
ピ 「あ、それだったら大丈夫。ここって結構頑丈にできてるから、たとえドルオーラを放つても壊れないぐらい頑丈だから。」

キャ 「・・・という訳らしいわよ?」

小 「あ・・・いや・・・」

キャ 「それじゃ・・・逝つところか」

小 「逝くのが不吉な字になっておるぞ〜〜〜!」

ドゴーン!

天高く吹き飛ばされる小次郎。

ピ 「た〜ま〜や〜!」

ユ 「ピテイ、花火ではないのよ。」

ピッ 「たしかに、あまり綺麗な物ではないですしね。」

ピ 「まっ、それは置いといて、それじゃ締め言葉いくよ〜。」

ユ 「ええ、それではみなさん」

三人 「まったね〜」

小 「せっしゅ・・・ゲストなのに・・・扱いがひどくないか?」

・  
・  
ガク。  
」

第10話 水瓶座（アクエリアス）と錬鉄（れんてつ）（後書き）

作中に出てきた歌のタイトル、

METAFALICA（光り溢れる大地へ）はアルトネリコ2のエンディングに流れる物で、作者がとても大好きな曲です。

皆さんもよかつたら聞いてみてください。

それでは。

## 中間発表

### 中間発表

ピ 「どうもピティです。募集したオリジナルの真の紋章ですが、募集した方から紋章が司っている力についての詳細が書かれてないことを指摘されたので、今回、募集枠の内の一つを埋める紋章が決まったので、その発表をかねて、ここに書こうと思います。」

### 真の紋章について

真の紋章とは通常の紋章より協力で、世界の根源と考えられていて、全部で27個あります。真の紋章自体は意思を持ってしているとされており、継承者が死亡した場合に次の継承者を見定め、相応しい者がいなければ、自ら封印することもあるという。真の紋章を宿した者は絶大な力と不老（不死ではない）の力が手に入るが、同時に紋章の呪いで苦しめられる。ただし、宿主が真の紋章によって認められると、呪いから解放される。

### 幻想水滸伝オリジナルの真の紋章

円の紋章・・・「秩序」と「停滞」を司る紋章でかつては神聖ハルモニアの神官長のヒクサクが宿してましたが、15年前の「真の紋章事件」での暴走はこの紋章が引き起こした。そのせいでヒクサクは死亡。現在は、行方不明です。未確認の情報では、ロマリアの中枢にいる人物の誰かが宿しているそうです。



獣の紋章・・・「殺戮」と「激昂」を司る紋章です。ハルモニアが15年前の事件で、儀式に使用しましたが、その後の暴走で、現在の宿主の魔王軍の獣王シドの手に渡りました。

真なる五行の紋章について・世界を構成する5つの要素を司る真の紋章の総称で、5つ全て集めると世界を滅ぼすほどの力を発揮するとされている。五つの紋章については次の通りです。

真なる火の紋章・・・紋章魔法の火系統の紋章の元とされている紋章で、かつては炎の運び手のリーダー、炎の英雄・ヒューゴ（幻想水滸伝？）が宿していたが、15年前の事件で、ネノクニに重症の状態で飛ばされたヒューゴを見つけたカグツチが現在、仮の宿主になっているそうです。

真なる水の紋章・・・かつてはクリス・ライトフェロー（幻想水滸伝？）が宿してましたが、15年前の事件以来、行方不明に。

真なる雷の紋章・・・かつては炎の英雄の補佐をしていたゲド（幻想水滸伝？）が宿していた物で、15年前の事件で、黄泉比良坂よみつひらさかに重症の状態で飛ばされたゲドの手から離れようとしていた所、魔王軍のヒミコの手により、プレセアの娘、アリシアに宿らされた。

真なる風の紋章・・・かつてレックナートの弟子のルックが宿してましたが、15年前の事件で儀式に使用されており、そのせいで現在のの宿主、四乃森連矢の元に跳び、四乃森連矢が宿主に選ばれま

した。

真なる土の紋章・・・ハルモニアの神官将ササライが宿してましたが、15年前の暴走で、重症を負い、現在の宿主、特務捜査課の東郷大地に託されました。

生と死を司る紋章ソウルイーター・・・名前のとおり「生」と「死」を司る紋章。宿主と親しい者の魂を喰らい、宿主の思惑とは関係なく戦乱を巻き起こす呪いを持つ。継承は継承者の意思で行われる。かつては、解放軍のリーダーであったテイル（幻想水滸伝？の主人公）が宿していたが、15年前の暴走で、テイルが死亡し、その手から離れた時に、魔王軍のヒミコの手に移ったとされている。

太陽の紋章・・・「正義」と「再生」を司る紋章。ファレナ女王国に代々受け継がれていた物で「夜の紋章」と対となる存在として生まれたが、「夜の紋章」に疎まれ、剣となった「夜の紋章」に絆を断ち切られている。この時、切られた絆の残滓から「太陽の紋章」を支える2つの紋「黎明の紋章」と「黄昏の紋章」が生まれたとされる。両方共、15年前の暴走で行方不明になっている。

「太陽の紋章」は真の紋章の中でも比較的強大な力を持つ紋章で、感情のを制御できなくなる呪いもつ。本来は「夜の紋章」がバランスを執る役割を持つが、絆が断ち切られてからは「黎明の紋章」と「黄昏の紋章」がそれぞれ制御と沈静の役割を担っている。現在は、魔王軍がシンダルの技術で作られた胸像に宿した状態で所持していますが、最近では、スカリエツティがラボで研究・解析してるとか？

月の紋章・・・「幻惑」と「狂気」を司る紋章。かつてはシエラ・ミケーネが所持していましたが、15年前の暴走で、シエラが消滅してしまつた所を、バーン？世が回収し、魔軍司令ファウストを助けるのに使用され、ファウストは復活。彼が宿主になる。本来なら宿主に精神異常を引き起こす呪いがありますが、ファウストはその強大な魔力と精神力でそれを押さえ込んでいるそうです。

覇王の紋章・・・「威圧」と「孤独」を司る紋章。赤月帝国初代皇帝クラナツハ・ルーグナーが、ハルモニアから独立して建国する際に入手。以後、ルーグナー家が代々竜王剣に宿して継承してきました。15年前の暴走で跳ばされそうになつた所をバーン？世が回収し、冥竜王ヴェルザー復活に使用。以後、ヴェルザーが所持しています。

始まりの紋章（輝く盾の紋章）（黒き刃の紋章）・・・「闘争」と「和睦」を司る紋章。創生の物語で生まれた「剣」と「盾」の兄弟に由来する。本来は1つの状態で真の紋章に数えられるが、「輝く盾の紋章」と「黒き刃の紋章」の二つに分かれている時は、創生の物語に倣い、近い2人が宿して争う事になる。また、2つに分かれてた状態では不老とならず、徐々に宿主の命を削る呪いを持つが、紋章に認められた場合は分かれた状態であっても呪いを受けることにはなくなる。15年前の暴走で、前の宿主、リオウ（幻想水滸伝？主人公）とジョウイ（幻想水滸伝）が死亡してその手を離れて以来、行方不明に。

罰の紋章・・・「償い」と「許し」を司る紋章。使用するたびに宿主の命をじわじわと削る呪いを持つているが、償いの期間が終わり、許しの期間に入ると呪いを受けることはなくなる。また、紋章には過去の宿主の記憶が残されている。宿主が死亡した際に、近くに

る者の中から継承者が選定される。

15年前の暴走で重症を負って跳ばされた、前の宿主ラズロ（幻想水滸伝）が魔王軍の獅子神黎真ししがみれいしんの側で息を引き取ったので、黎真が宿主となった。

門の紋章・・・表と裏に別れている紋章で、異世界との門を開く紋章。門の一族が代々守っていたが、ハルモニアの侵攻により一族が虐殺された時、生き残ったウインディとレックナートがそれぞれ表裏の「門の紋章」を継承している。赤月帝国滅亡（幻想水滸伝？）時にウインディと共に表の紋章が行方不明となっていたが、バーン？世が発見し、現在は、バーンパレスのゲートの中枢装置の核として使われている。なお「始まりの紋章」が2つにわかれている状態では不老にならなかったのに対し、「門の紋章」は表裏の片方のみで不老となる。

夜の紋章・・・「支配」と「休眠」を司る紋章。「太陽の紋章」と一対をなす存在として生まれたが、「太陽の紋章」の輝きを疎ましく思い、剣となってその絆を断ち切ってどこかへと去ったとされる。それ以来「星辰剣」として存在しており、「月の紋章」の影響下にある吸血鬼を倒す事が出来る唯一の手段であるとされている。意志を持つとされる紋章の中で唯一一人との会話が可能である。15年前の暴走で跳ばされて97管理外世界に来た時に、特務捜査課の齊藤さいと夜天うやてんに発見され、以後彼が所持している。なお、発見時、刀身が破損していた為、修復した際に刀の形状に変更された。

竜の紋章・・・異世界に住む竜を現界させる紋章。紋章の力がなければ全ての竜が死んでしまうため、代々竜洞騎士団団長が宿して守

り続けたが、現在は行方不明。

八房の紋章・・・ユーバが宿しているとされる紋章だが詳細は不明。

変化の紋章・・・「変革」を司る紋章。シンダル族が所有していたとされる。宿主は定住する事が出来ない呪いを持つ為、シンダル族は各地を転々としていたらしい。凄腕の紋章師が宿していると言われているが、詳細は不明になっている。

この作品オリジナルの真の紋章

光輝<sup>ひかり</sup>の紋章・・・「希望」と「勇気」を司る紋章。27の真の紋章のコントロールを司っているとされており、他の紋章とはワンランク上の力があるとされる。宿した者は、否応なく戦いを収める戦いに巻き込まれる呪いを持つ。戦いを収めた者の多くが宿していた為別名「英雄の紋章」とも呼ばれる。かつては神谷聖<sup>かみやひじり</sup>が宿していたが、6年前、彼と共に行方不明になる。

暗闇の紋章（魔剣アルハザード）・・・「負」と「混沌」を司る紋章。長い間、魔界で魔剣の姿で眠っていた所をバーン？世が発見したとされる。一節では、この剣が突き刺さって魔界が生まれたとされている。この剣に、大量のマイナスエネルギー（人の負の感情）を注ぐと、この剣の真の能力が開花される。どんな能力なのかは不明ではあるが、一節では、古の「約束の地」への「門」を開く鍵と

なる能力であるとされているが詳細は不明。

女神の紋章・・・「慈愛」と「守護」を司る紋章。宿す者は、女性限定とされる紋章である。その性質から、「光輝ひかりの紋章」を宿した者を側で支える女性が多く宿している。神谷聖かみやひじりの妻、千尋ちひろが宿していたが、2年前、彼女がテロで死亡した際に行方不明に。

歌詩うたの紋章・・・「歌」と「音楽」を司る紋章で、音の紋章やドレミの紋章はこれの眷属である。かつては来迎寺らいこうじ千草が宿していたが、彼女が病死した時に、行方不明に。

元素の紋章・・・五行の紋章をコントロールするために生み出されたとされる紋章で、これ自体にはたいした力はないが、組み合わせで一般の五行の紋章と一緒に宿すと、その紋章の力が真の五行の紋章並の力になる。現在は、エルネスト・ライコウジが宿している。

知識の紋章・・・「知恵」と「知識」を司っている紋章で、宿主が紋章に認められると、宿主に無限の知識「アカシックレコード」にアクセスする力を与えるとされる。現在は魔王軍の妖魔司教ザボエラが機械の力で、無理やり宿している。

ピ 「・・・以上、いかがだったでしょうか？次に応募された

アイデアで、新たに書き直した紋章があるので発表します。」

時空の紋章・・・「時」と「空間」を司っており、宿しただけであれば「同一空間における転移動」と「感知遮断」が出来る。が、真なる紋章が目覚めると「壁を超越しての次元移動（次元の壁を飛び越え、別次元の世界への行き来が出来る事）」と「完全遮断（気配や魔力等の遮りに加えて、自身の姿を見えないヴェールで見えなくする事）」が出来るようになる。また、時間を飛び越えて、過去や未来、平行世界にまで行けるようになる。

以前は、神谷聖かみやひじりが自分のインテリジェンスデバイス「レイジングソード」に宿して使用していたが、今はデバイスごと、鳴海にある神谷邸の裏山内にある「シンダルの遺跡」に封印してある。

ピ 「以上です。いかがでしょうか？このアイデアは月光閃花さんの次元の紋章が元になってます。

月光閃花さん、アイデアありがとうございます。さて次は、今回選ばれた一つ目の紋章の発表です。」

魔王の紋章・・・、「破壊」と「発展」を司る紋章。世界が停滞した時に世界を破壊する事により新たな文明の発展を促すために生み出された物で、自ら主に相応しいと思う者に移行続ける紋章。

かつては魔界の神と言われた大魔王バーン？世が、奇眼の中に宿して持っていたとされているが、現在は行方不明に。バーン？世が現

在一番欲している紋章。

ピ 「・・・と言うわけで、梓2つのうちひとつは魔王の紋章に  
きまりました。アイデアをくれたレシオンさんにはお礼申し上げます。  
す。どうもありがとうございます。もう一つの梓は残っているの  
でアイデアがある方はドンドン応募してください。ご応募待ってま  
す」



## 第11話 過去（前書き）

最新のコンプエース読みました。

まさか公式でリリなのとFateのコラボ作品が読める日が来るとは。

ま、それはさておき今回は少し短めのお話です。

第11話、ではどうぞ〜

## 第11話 過去

### 第11話 過去

朝、ジョギングで流した汗をシャワーで流して風呂場から出る。最近シグナムが急がしので朝の鍛錬が出来ない、聖時はその代わりにとジョギングをするようになった。今日はゴールデンウィークの初日。連休で学校が休みなので、今日はどの様にしてすごそうかと思案をしながら居間に向かうと、朝食を食べているスーツ姿のユニと出くわす。

ユニ 「あら聖時さん。先に頂いてます。」

聖時 「?ユニ。今日も仕事?」

聖時はユニがスーツ姿なので仕事があるのか聞く。

ユニ 「ええ、色々片付けなくてはならない案件がありますから。」

聖時 「休みなのに・・・大変だね総帥代行って。あの普段忙しいようなのはさん達でさえ、今日から旅行なのに・・・。」

そう言って、自分にあてがわれた席に着いて朝食を食べ始める。

ユニ 「聖時さん、所でピティはどうしたんですか?」

ユニの質問を聞き、聖時はやや呆れながら言う。

聖時 「まだ寝てる。昨夜、遅くまでWiiのスーパーマリオをやつてみたい。」

ユニはそれを聞き、やや呆れた顔をする。

ユニ 「まったく、あの子は……あ、そうそう、聖時さんに手紙が来てましたよ。」

そう言つて、ユニは聖時に手紙を差し出し、聖時は受け取る。

聖時 「手紙？だれからだろう……」

そう言いながら聖時は手紙の差出人を見る。

聖時 「あ、木乃香からだ……マメだなあいつも……」

ユニ 「木乃香さんからですか？」

聖時 「うん。」

そう言つて、聖時は手紙を見ながら差出人の事を思い浮かべる。

近衛木乃香……聖時の父、神谷聖の友人の娘で、聖時がまだ小さい時、妹の桃華と一緒に連れられて、長期休暇中に彼女の家で彼女とその友達の桜咲刹那と一緒に遊んだ仲である。休みが終わった後、妹の桃華とは文通を始めた。桃華が亡くなつてからは、聖時が代わりに文通相手をしている。

聖時「……最後に会ったのは、確か……母さんと桃華とっかの葬式の時だったな……」

最後に会った時の木乃香このかの事を思い出す。

聖時はケガで歩けなく、車椅子で、ユニに押ししてもらっている状態だった。

聖時はこの時、自分以上に悲しんでいる木乃香を見ている。

母親である千尋ちひろによくなつき、桃華とっか共仲が良かった木乃香このかの悲しみみようはかなりの物だった。

その後、持ち前のやさしい性格からか、一人になった聖時を思っ時々、近況を手紙で報告してくれるようになった。

そんな風に木乃香このかの事を思い返していると、ユニが朝食を食べ終わりに、食器を片付け始めた。

台所に食器を片付け終わると、荷物を持って玄関に向かおうとしながら聖時に話しかける。

ユニ「それでは聖時さん、行ってまいります。後片付け、おねがいしますね。」

聖時「ああ、まかせて。」

ユニ「ああ、それと今日、御祖父様の所に行くのを忘れないでください。」

聖時「わかってるよ。」

ユニ「それでは行ってきます。」

聖時「いってらっしゃい。」

そう言ってユニは出かけていった。

聖時は残りの朝食を食べ終わると食器を台所に運び、使った食器を洗う。

洗い終わると聖時は手紙を持って部屋に向かう。

途中、ゲームがある部屋で、爆睡しているピティを見て呆れながら部屋に入る。

部屋に入り、机のイスに腰掛け、ペーパーナイフで手紙の封を切り、中身の手紙に目を通す。

手紙の内容は、相変わらぬ近況報告と、こちらの事を気遣う言葉で埋められていた。

聖時 「へへ、お祖父さんが学園長をやっている学校に入ったんだ。あと・・・刹那との事はいいかわらずか・・・」

聖時はそう言いながら手紙を一通り目を通すと手紙をしまい、レターセットを取りだし、返事を書き始めた。

シグナムとの朝の鍛錬を始めた事、なのは達と朝途中まで一緒に登校する事、自分も祖父が理事長をつとめる学園に入った事。才人とアキとは相変わらずな事、新しい友、ふたば、アルフ、土郎が出来た事を書いていく。

そうこうして手紙を書き終わり、手紙を封筒に入れて、宛名と住所を描き終わった時、玄関のチャイムがなる。

聖時 「ん？だれだろう・・・」

そう言って聖時は玄関に向かう。

玄関に着き、戸を開ける。

聖時 「はいは〜いって、なんだ才人達じゃないか。」

玄関の戸を開けると、そこには才人、アキ、アルフ、そしてこの間知り合った士郎が立っていた。

才人 「よ！暇だったんで遊びに来たぞ。ついでに士郎も引っ張ってきた。」

そう言つて才人は四郎の方に顔を向けた。

士郎 「よう……。」

聖時 「才人、無理やり引っ張ってきたんじゃないだろうな？」

聖時は士郎が少し苦笑いしていたので聞いてきた。

才人 「そんなまさか、暇そうにしていたから連れてきたんだよ。」

そうなのかとアキの方に視線を向けると、アキがうなずいたので納得する。

聖時 「まっ、いいけど。しかしタイミングが悪いな……僕、これから来迎寺のお祖父ちゃんの所に行こうと思つていたんだけどな。」

アルフ 「あ、そうなのか。それはタイミングが悪かつたね。」

アルフが失敗したと言うような顔で言う。

才人「そうか………なあ、それ俺たちも着いて行ってもいいか？」

聖時「え！」

才人の提案に聖時は驚きの声を上げる。

アルフ「ちょっと、いくらなんでもそれは厚かましいんじゃないかい？」

アキ「そうよ、聖時に悪いわよ。」

士郎「部外者の俺たちがついていったら、相手にも悪いだろ？」

才人「なんだよ、お前たち、あの天下の来迎寺グループのお屋敷を見たいと思わないのか？」

士郎「……天下の来迎寺グループのお屋敷？」

アキ「あ、そうか、士郎は知らないんだったね、聖時のお母さんの千尋さんは来迎寺家の人だったの。」

アキの発言に、士郎が驚く。

士郎「え！聖時のお母さん、来迎寺の人だったのか？」

士郎の発言に、苦笑しながら聖時は答える。

聖時「うん、まあね・・・あとみんなが着いてくる事なんだけど、多分大丈夫だと思うからいいよ。」

アルフ「え、いいのかい？」

聖時「うん、今回僕が来迎寺の家に行くのは、お祖父ちゃんに会いに来る人が、僕と同じぐらいの子を連れて来てるんだ。で、お祖父ちゃん達が話している間、僕がその子の相手をして欲しいって頼まれてるんだ。だから相手をしてあげる人が多いと、相手も退屈しなくていいと思うから・・・」

士郎「なるほど、それで俺たちが一緒の方がいいと思ったからついて着てもいいと言ったのか。」

聖時「うん。僕としても、みんなが一緒だと助かるんだけど・・・」

アルフ「なるほど、そういう事だったら一緒に行くよ。」

アキ「うん。そうね」

士郎「ああ、俺もいいぞ。」

聖時「助かるよ。それじゃちょっと待ってて、今出掛ける準備をしてくるから。」

そう言っつて聖時は家の奥に引っ込んだ。

数分後、準備をした聖時が才人達の前に出てくる。

聖時「お待たせ、それじゃ行こうか？」



そう言っ出てしようとした所、才人が小声で話しかける。

才人「なあ、所で、ピティはどうしたんだ？」

聖時「ああ、まだ寝てるよ。昨夜遅くまでゲームしてたみたいだから。」

才人「なんだ、まだマ○オにハマってるのか。」

聖時「・・・うん、置手紙を置いて来たから大丈夫だと思うよ。」

才人「まっ、起きてこないあいつが悪いんだから置いてっても問題ないよな。」

あきれた声で才人は言った。

アルフ「ほら、なにやってるんだい。早く行こうよ。」

聖時「ああ、今行くよ!」

アルフの急かす声に應えるように、聖時は才人たちを案内するよう  
に、先を歩き始めた。

聖時「なあ、所で今日はふたばは一緒じゃないの？」

聖時の質問にアキが答える。

アキ「ああ、出てくる時にふたばの家に電話を掛けたんだけど、出  
掛けた後だったから。」

士郎「出掛けた後って・・・携帯に掛ければいいじゃないか。」

士郎の質問に、アルフが答える。

アルフ「あの子、携帯持ってないんだよ。」

士郎「へえ、今どき珍しいな。」

聖時「そうだね、あ、行きは電車を使うから、まずは駅に向かうよ。」

そう言って聖時達は駅に向かった。

来迎寺の客間、白い顎鬚を生やし、和服を着た威厳のある老人、この屋敷の主、来迎寺繁之らいこうじしげゆきがソファに座っていた。彼の右側のソファには、クロノ・ハラオン、そしてクロノと向き合うようにリンディ・ハラオンが座っており、繁之の向かいに黒い顎鬚を生やし、スーツ姿の威風堂々とした壮年の男、大斗コンツェルン総帥・大斗瑞親やまとみずちかが座っていた。今日はあの魁音寺グループへの対抗として大斗コンツェルンに協力を仰ぐために、繁之は今日の会合の場を設けた。

繁之「わざわざ遠い所からすまんな瑞親君」

瑞親「いいえ、若い頃にお世話になった繁之殿の頼みですから。」

繁之「そうか・・・あ、そうそう、紹介がまだだったな、そちらに送った資料で知っていると思うが、管理局のクロノ君とリンディ君だ。」

クロノ「はじめまして。」

リンディ「よろしく願います。」

二人は頭を下げ挨拶をする。

瑞親「うむ、こちらこそ。」

繁之「さて、それでは始めようとしようか。」

そう言つて話を始めたようとした時、瑞親がそれをさえぎつた。

瑞親「待ってください、その前に確かめたい事があります。」

繁之「ん、なんじゃ瑞親君。」

瑞親「先に送られた資料で、こちらにいる二人がどう言う者たちなのかは知っています。しかし・・・魔法や他の世界など、荒唐無稽なこんな事・・・すぐに信じると言われても・・・」

繁之「確かに、すぐに信じると言つても無理があるか・・・」

瑞親「そ、それに・・・繁之殿はこんな事を言うもの達を信じられるので？」

それを聞いた繁之はフツと笑つて言った。

繁之「・・・ああ。・・・それに、信じるも何も私の身内である妻やエルネスト君、そして聖君も同じような存在・・・他の世界から来た異邦人・・・次元漂流者だからな。」

その言葉を聞き、瑞親どころか、クロノやリンディーまでもが驚きの声をあげる。

リンディー「え！・・・聖君の事は知つてたけど・・・」

クロノ「まさか、エルネスト氏や……………」

瑞親「……………奥方までもがそうだと……………」

繁之は懐かしいそうな顔をしながら語る。

繁之「……………あれは、もう何十年前になるかな……………」

繁之は思い返すように昔の事を語り始めた。

繁之「あれはまだ・ワシが学生だった頃だ。ある日いつものように庭を散歩をしていたら、庭の木陰に倒れている一人の娘を見つけた。彼女書は衰弱していてな、ワシはすぐに彼女を屋敷に連れて行き、看病を下の者達に任せた。」

繁之は語りながらソファから立ち窓際に移動する。

繁之「彼女は程なくして目を覚ました。衰弱していた彼女が回復するにはしばらくかかったが、その間ワシは彼女に度々会っては話し相手になっていた。今思えば、彼女の他の者にはない不思議な感じや、時折謡う、不思議な魅力がある歌声……………それらにすでに魅了されていたのかもしれない。」

繁之は窓の外を見ながらなお語り続ける。

繁之「そうして、しばらくすごし、彼女が歩けるぐらい回復した時、ワシは彼女に聞いたのだ。「あなた一体何者なのか?」と、本来はもっと早くに聞かなければならない事だったが、ワシは彼女と過ごす時間が、あまりにも楽しく尊く思っていて、それを聞けばそれが

終わってしまったと思い、聞くことを先延ばしにしていたのだ。しかし、ワシは決心し、真相を聞いた。しかし、彼女の口から出た事は、ワシの創造を上回る物だった。・・・彼女は自分が置かれている状況から推理し、自分がこことは別の世界・アルシエルにあるソル・シエールと言う塔にある街、エル・エレミヤからきたと。そして自分がレーヴァテイルと言う種族の 純血種だと・・・。」

繁之は振り返り、クロノたちの方を見る。

クロノ「・・・そんな昔に、この世界に流れ着いた次元漂流者がいたなんて・・・。」

リンデイ「ええ、驚きね・・・だから私たちの事を聞いてもそんなに驚かなかったのね。」

瑞親「・・・しかし・・・。」

繁之「ま、過去に似たような事を言った人がいたおかげだから、そんなに驚かなかっただけだよ。」

瑞親「・・・しかし・・・よく信じられましたね・・・。」

繁之「・・・最初聞かされた時は、ワシも半信半疑だった。じゃが、彼女が見せてくれた詩魔法や彼女が持っていた高い知識や技術などは信じるに値する物だったし、なにより・・・。」

繁之はすこし照れながら言った。

繁之「ワシ自身が、すでにその時、彼女の事を好きになっていたのじゃからな。」

そう言つて微笑んだ。

繁之「ま、そんな訳で、後から流れ着いた、エルネスト君や、聖君・  
・そして君達の事を信じられたと言つ訳じゃ。」

瑞親「なるほど．．．そういうわけですか．．．しかし魔法とは．  
．」

なおも疑おうとしている瑞親に繁之は話す。

繁之「何を言っている．．．君はかつて一度、その魔法を目にし  
ているのだぞ？」

瑞親「な、なにを．．．．．」

瑞親は「そんなことあるはずがない」と言おうとしたが言葉につま  
つた。そう、瑞親は、その言葉を聞いて思い当たる事があつた。

繁之「君がトンネル崩落の事故で中に閉じ込められ、重症を負つた  
とき、君の傷を詩魔法で癒して救つたとワシの娘千尋は言つておつ  
たぞ。」

瑞親はそのときの事を思い出す。土砂に埋まり入り口と出口が埋ま  
り、さらに車の衝突で重症を追つた自分を、側で不思議な詩を謳い、  
自分の傷を治して命を救つてくれた、自分が生涯唯一人だけ愛した  
女性の事を思い浮かべる。

瑞親「．．．．．わかりました。あなた達の言う事を受け入れまし  
よう。」

その言葉を聞き、繁之は安堵の顔を浮かべた。

繁之「それでは、本題に入ろう・・・ワシらがこうして集まったのは、近年、急激勢力を広げて行った魁音寺グループについてじや。」

瑞親「魁音寺についてですか？」

繁之「そうじゃ、君はなぜ魁音寺がこんな短期間で大きくなったか疑問に思わないか？」

瑞親はその質問に考え込んだ後、答えた。

瑞親「それは、来迎寺グループのように新しい技術を続々と出したからなのでは？」

繁之「たしかにそれもあるかもしれない、わがグループがワシの妻がもたらした技術を使ってここまで大きくなるのもそれなりに時間が掛かった・・・しかし、魁音寺の急成長はそれを上回る異常な速度だ。」

そこに、いままで黙って聞いていたリンディが話してきた。

リンディ「我々、管理局は魁音寺があやしいと思った時から調査をしていました。たしかに、魁音寺は、かつての来迎寺グループのように外の世界の技術を取り込み、それを使って勢力を拡大してます。しかし、それでも、この異常な発展速度は説明する事が出来ない事が多すぎるんです。」



リンディに続くようにクロノも話し始めた。

クロノ「これは、やつらを調べて行くうちに解ったことなのですが、最近自分と同じ顔をした人間を見て、その数日の内にしんでしまうと言つ者が数多く出ていると言つのです。」

瑞親「自分と同じ顔を見た人間が？・・・なにかのくだらない都市伝説か偶然なのでは？」

クロノ「自分も最初はそう思ったのですが、調べていくうちにその者たちが魁音寺の手によって故意に合わせられている事が判明し、その多くの者が死亡しているのが判明しました。偶然にしてはあまりにも出来すぎてますし、数も多すぎます。」

クロノの答えに続くように繁之は自分の考えを言った。

繁之「クロノ君が言った事と、魁音寺が急激に勢力を伸ばし始めた次期がほぼ同じなのだ。これを偶然で片付けるにはあまりにも早計だとワシは思う。」

リンディ「彼らが我々、次元管理局が追っている次元犯罪者と協力関係なのは確実です。」

繁之「そんな者達がこの世界で勢力を伸ばしたらろくな事にならんだからワシは彼らに協力を申し入れたのじゃ。じゃが、やつらの力はいささか大きくなりすぎた。来迎寺だけでは力が足りない・・・そこで君たち、大斗コンツェルの力が必要なのじゃ。」

繁之の言葉を聞き、瑞親は考え込んだ。

瑞親「……………」

そうしてしばらく沈黙の時間が経った後、瑞親は答えた。

瑞親「……………わかりました。お力を貸しましょう。……………なに、昔世話になった繁之殿の頼みです。断れる訳ないじゃないですか。」

そう言って瑞親は繁之に微笑んで答える。

繁之「すまん。ありがとう瑞親君。」

繁之はそう言って瑞親の手を取った。

〈おまけコーナー〉

ピ「ピティと」

ユ「ユニの」

二人「おまけコーナー」

ピ「はいみんなのアイドル司会進行役のピティだよ」

ユ「解説のユニです。」

ビィ 「アシスタントのビッキーです。」

ピ 「さて早速、恒例になりつつあるゲスト召還と行きましようか？」

ビッキーにコシヨウを振り掛けるピティ。

ビッ 「ハ・・・ハ・・・ツクシユン」

パッ！

五 「ん、どうやら無事に着いたみたいだね。」

ピ 「今回のゲストは、戦うお医者さんで必殺技ではふんどし一丁になる、アルトネリコの光ひかりしんこう五条先生に来てもらいました。」

五 「こう言うことはあまりなれてないけど、精一杯やらせてもらうよ。」

ピ 「さて今回のお話を振り返っての一言をどうぞ。」

五 「ん〜そうだね〜。ゲームは程ほどに？」

ピ 「へ？」

ユ 「あ、たしかにそうですね。」

ピ 「ちょっと・・・なんでそうなるの!？」

五 「いやだつてキミ、前回からずっとゲームにハマッて不規則な生活をしてるんだろ？医者としてはそう言う生活は黙って見過ごす事は出来ないんだよ。」

ピツ 「先生もこう言っている事ですし、すこし自重した方がいいですよ?。」

ピ 「だ・・・だつてさ、ゲームを止めようと思つても、セーブできる時が、お城をクリアした後しか出来ないんだもん。そのくせ、お城の面てさ結構難しくて、せつかく行つても全滅してやり直し・・・そんなだから、止められるタイミングがつかめなくてさ。」

ユ 「ハイハイ。」

ピ 「う、なんでお城でしかセーブできないんだよ?!?!」

ピツ 「・・・これは・・・かなりのスーオーマオーオ中毒ですね・・・」

五 「たしかに・・・これはいけない兆候ですね・・・」

ユ 「・・・ピティ、ゲームはほどほどに、一日1時間とは言いませんが、もう少し自重してください。」

ピ 「け〜」

ユ 「言う事聞かないと、今度からピティの食事だけシャルマルさんの手作りにしてもらいますよ!」

ピ 「いっしょ!」

ユ 「最近、シャルルさんに、聖さんがメタ・ファルスで手に入れたお料理のレシピを渡しましたからお料理の斬新度が上がっているでしょうから、さぞかしすごいお料理が出てくるでしょうね。」

ピ 「ちょ……ちょっと！なんてもんシャルルに渡すの！！メタ・ファルスのお料理のレシピってあれでしょ、たしかヤキトリシエイクとかソーダインバーガーとか、イチコロマフィンとか、アイスクリーム丼とか……きわめつけが、アルトネリコ2のヒロインの名前が入った見た目も味もアレなやつと、かろくでもないのがほとんどでしょ?!」

ビツ 「うわ〜なんだか聞いてるだけで気分が悪くなりますね〜」

五 「そういえばココナが言ったな、あの料理は人間の食い物ではないと……話していた時の彼女……食べた時の事を思い出したのか、気分が悪るそうでしたよ……」

ピ 「う……そんな物が出来る料理のレシピを元に、シャルルが料理を作ったら……（ガタガタ・ブルブル）」

ユ 「……すこし早計でしたかね〜……」

ピ 「……まっ、それは置いて、今回の補足をお願いします。」

ユ 「え……ええ。さて今回はレーヴァテールについてです。今回の説明は、私よりも、専門の光五条先生にお願いします。」

五 「はい。レーヴァテールとは人工的に生み出された生命体で、姿形は人間の女性そのものです。詩に思いを込めて謳うことにより、

様々な力を発揮します。レーヴァテイルにはいくつかの種類があります。まずは、ゼロから作られた、この世に三体しかない”オリジン”。オリジンのクローンでもある”純血種”そして、純血種と人間のハーフである”第三世代”がおもな物です。」「

ユ 「ちなみに聖時さんのお母さん千尋さんと叔母の千草さんは、純血種であるお祖母様の娘ですから

第三世代ということですよ。」「

ピツ 「へへ、そうなんですか。でもそうすると、聖時さんもその”第三世代”というヤツなのですか?」「

五 「いくらレーヴァテイルの血を受け継いでも、男性は第三世代にはならないよ。レーヴァテイル質は女性にしか現れないから。」「

ピ 「へへそうなんだ。さて今回はここまでとします。」「

ユ 「先生、解説ありがとうございます。」「

五 「なになに、こちらもお楽しみくやらせてもらえました。」「

ピツ 「先生、これおみやげです。中身は翠屋のケーキです。」「

五 「これはわざわざありがとうございます。」「

ピ 「いえいえ、それじゃピツキー。」「

ピツ 「はい」

五 「それではみなさん、次は本編で会いましょう。」「

ビツ「んんん・・・えい！」

ヒュン！（ビッキーのテレポードで消える音）

ピ「いつちやたね・・・」

シャ「みなさん、おつかれさま。」

ピ「あれシャマル？なんでここに？」

シャ「それはビッキーちゃんか翠屋のケーキの入った包みを間違えて、わたしの料理の入った包みを持ってちゃったから届けに。」

三人「・・・」

シャ「ちなみに中身は、私がユニさんからもらった料理のレシピの一つ、シャロンド・ドロワを私なりにアレンジしたものよ。」

ピ「・・・よりもよって、レシピの中でも1・2を争うアレな料理、シャロンド・ドロワのシャマルバージョンとは・・・」

ビツ「先生・・・だいじょぶでしょうか・・・」

ユ「今はただ・・・無事を祈りましょう。」

シャ「？」





## 第11話 過去（後書き）

まことにすいませんが、次回から少し更新速度が落ちるかも知れません。

理由は、少し私生活が忙しくなりそうなので・  
本当に申し訳ありません。

第12話 INUMO(前書き)

どうも剣 流星です。

な、なんとか書き終えたのでアップします。

それでは第12話どうぞ。

## 第12話 IZUMO

### 第12話 IZUMO

来迎寺邸正面の門の前で聖時とアルフをの除く3人は屋敷の大きさや、敷地の広さを見て呆然とたたずんでいた。

士郎「……ここが来迎寺邸……」

アキ「庭……広いね……」

才人「屋敷……でかいな……」

聖時達が立っている門から屋敷まではかなりあり、植木が玄関までの道の両脇に並んで植えてある。庭のいたる所に花壇があり、四季取り取りの花が咲いていた。そして、ここから見てもその大きさが良くわかる屋敷……。

大きな屋敷など、見慣れていない三人は、その大きさに、ただただ呆然とするばかりであった。

アルフ「へへ、結構デカイね。」

聖時「アルフは他の三人と違ってあまり驚かないね。」

アルフ「ああ、アリサやすずかの屋敷に良く行っていたから、こう言うのに慣れてるだけだよ。」

聖時「ああ、二人の屋敷に行ったことあるんだ。」

アルフ「ああ。」

そう言つて、アルフと会話しながら聖時は門の横のインターホンのボタンを押した。

インターホンから音が鳴り、ほどなくして若い女性の声が、インターホンから聞こえてきた。

女性の声「はい。」

聖時「あ、その声、はるかさん？聖時です。」

はるか「え！聖時様！もういらしたんですか！？すぐにお迎えの者をそちらにいかせますので、もう少々お待ちください！」

そう言つてインターホンが切れる。

才人「……………聖時様……………だつて……………」

アルフ・士郎・アキ「……………」

聖時「い、いやだな、なにみんな黙つてるんだよ。」

アキ「だ、だつて……………ねえ……………」

そんな微妙な空気が流れている時、不意に門が開き始めた。そして門からメイド服を着て、メガネを掛けたインテリ風の女性が

出てきた。

女性「よくお越しく下さいました。聖時様」

女性は聖時に頭をたれ、あいさつしてきた。

聖時「おひさしぶりです。藍子あじこさん。」

藍子「はい、本当にお久しぶりで・・・最後にお会いしてから1年ですね・・・おおきくおなりになりましたね。」

聖時「そうかな？そんなに伸びてるようには思わないけど。あ、そうだ、今日は友達も連れてきたから。」

そう言つて、聖時は才人とたちの方に視線を向けた。

藍子「お友達・・・ですか？」

聖時「ああ。」

聖時はそう言つて藍子に才人たちを紹介し始めた。

聖時「紹介するよ、前に話した幼馴染の平賀才人と藤宮アキ、それとクラスメイトのアルフ・ハラオン、そして最近知り合った、衛宮士郎だよ。」

才人「どうも。」

アキ「は、はじめまして。」

士郎「こ、こんにちは。」

アルフ「どうも。」

次々と藍子に頭を下げながら挨拶をする才人達。

藍子「どうも、はじめまして。わたくしは来迎寺家のメイド長を務める佐々原藍子と申します。」

藍子が行儀よく挨拶をする。その姿からは、来迎寺家のメイド長を受け持つ威厳のような物がにじみ出していた。

藍子「それでは、聖時様参りましょう。」

聖時「うん。みんな！ついてきて、屋敷は広いから、はぐれないよ。うしっかりついてきて。」

才人「お、おう。」

藍子についてく聖時、それについていく才人達という形で屋敷に入る。

屋敷の門から玄関までは結構な距離がある。

玄関に着くまでの間、才人たちは、聖時について行きながら、周りをキョロキョロと見回していた。

士郎「……………すごい広さだな……………」

アキ「ええ、それに植えてある木や草花は、私達が知っている物から、知らない物までいっぱいあるわね……………」

士郎「ああ、それに所々にあるオブジェなんか、高そうな物ばかりだな。」

そんな風に会話していると、一向は玄関に着く。

玄関の扉も、この大きい屋敷とつりあう大きさのある扉だった。

藍子が玄関を開け、聖時達を玄関の中に通す。

中に入ると、そこはホールになっていて、上に通じる階段があり、周りには装飾品があちらこちらに飾ってあった。

藍子「・・・こちらです。」

そう言つて藍子は聖時達を先導するように歩き始める。

聖時達はその後について行く。

しばらく歩いてから、聖時は藍子に話しかけた。

聖時「ねえ、藍子さん。お祖父ちゃんに会いに来たお客さんが連れて来た、僕達と同じくらいの子って、もう来てるの？」

聖時の質問に藍子は、歩きながら答える。

藍子「ええ、剛様たけしとのお友達の方はすでにいらしています。今は、こちらの案内役の者の案内で、屋敷を見て回っております。」

聖時「え？お友達の方って？」

聖時は藍子の言った“お友達の方”と言う言葉に疑問を感じて聞き返した。

藍子「はい、剛様も、聖時様と同じようにお友達を連れて来られましたから……」

聖時「ああ、そうなんだ。こっちと同じなんだ。」

そんな会話をしながら歩いていると、来賓用の待合に使う部屋の扉の前に着く。

藍子「それではお友達の方はここでお待ちください。聖時様は私と一緒に繁之様の所に。」

聖時「うん、解った。みんなは此処で待ってて。」

才人「ああ、」

そう言って、聖時は才人達を残して、藍子と共に繁之の所に向かった。



一方、その頃、聖時達に置いてけぼりを食ったピティは、家で聖時が書いた置手紙を読みながら、聖時がピティのために作って置いて行ったおにぎりを食べながら文句を言っていた。

ピティ「まったく・・・モグモグ・・・私を・・・モグモグ・・・置いて・・・ムグムグ・・・行くなんて・・・」

・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・  
・・・

ピティ「ん！ガツガツ！モグモグ！」

喋ることをやめて食べる事に集中し始めるピティ。

・・・  
・・・  
・・・  
すいません、食べるのをやめてしゃべってください・・・  
・・・  
・・・  
話が進まないから・・・

ピティ「解ればいいのよ。」

そんな風にピティが作者？としゃべっていると、不意に家のインターホンが鳴った。

ピンポーン！

ピティ「んん！誰だろう？」

ピティは誰か来たのかを確かめようと、玄関側の窓を覗きに行った。ピティ自身は姿が普通の人には見えないので、誰かが来ても接客は出来ないため、だれが来たのかを確かめるだけにするつもりだった。窓から覗いて玄関に居る人を見る。

ピティ「あれ、ふたばだ。」

玄関には私服姿のふたばが立っていた。

ピティはふたばを迎え入れるため、玄関に向かった。

扉の鍵を開け、玄関の引き戸を開ける。

ピティ「いらっしやい！ふたば。」

ふたば「あれ、ピティ？」

ピティの出迎えに少し驚きながら返事をするふたば。

ピティ「聖時達と一緒に出かけたんじゃないかなかったんだ。」

ふたば「出かけたって・・・聖時いないの？」



そう言つて、ふたばは自分が持つてた携帯を見せる。

ピティ「あ、ほんとだ。」

ふたば「けどわたし、機械オンチだから使い方がいまいち解らなくて・・・だから同じ機種を持つている聖時に教えてもらおうと思つて来たんだけど・・・いなんいじゃ仕方がないね・・・」

ふたばは残念そうな声で言う。

そんな声を聞きながら何か考え始めるピティ。

ピティ「・・・・・・・・・・・・・・・・ねえ、ふたば。」

ふたば「？なにピティ。」

ピティ「これからヒマ？」

ふたば「？ええ、ヒマだけど・・・」

その言葉を聞くと、何かを思いついたような顔をするピティ。

ピティ「よし、ふたば！」

ふたば「え、な、なに？」

突然大きな声を出したピティに驚くふたば。

ピティ「いまから二人で、聖時のお祖父ちゃん家にいくよ！みんなを驚かしてやるう！」

ふたば「え！二人でって、わたしも？」

驚きながら答えるふたば。

ピティ「うん！」

ふたば「いきなり推しかけると悪いんじゃない？．．．それに行き方も分からないし．．．」

ピティ「だいじょうぶ、行き方ならわたしが知ってるから。」

ふたば「けど．．．」

ピティ「いいからホラ行くよ！」

そう言ってふたばの背中を押すピティ。

ふたば「わ、わかったよ。わかったから押さないで！」

ふたばはなかば強制的な形でピティと共に来迎寺邸へと向かった。

\*

来迎寺邸の一室、来迎寺繁之は、クロノ、リンディそして瑞親との話し合いを続けていた。

コンコン！

部屋の扉をノックする音が部屋に響く。

繁之「だれだ？」

繁之はノックをした相手に問いかけた。

藍子「藍子です。聖時様がおこしになられたのでお連れしました。」

繁之「そうか、では通せ。」

藍子「はい、では失礼します。」

そう言って藍子は扉を開き、中に聖時を通に招き入れるように脇に立つ。

藍子の横をすり抜けて、聖時は部屋に入る。

聖時「失礼します。」

挨拶をしながら部屋に入った聖時は、中に居る人物の中に、良く知っている人物の顔を見て驚く。

聖時「あれ、クロノさんとリンディさん？」

それは自分が昔からよくお世話になっているフェイトの兄のクロノとその母親、リンディだった。

クロノ「久しぶりだな。」

リンディ「元気そうね。」

聖時は二人が居るとは思わなかったので素直に驚き、祖父の繁之に問いかけた。

聖時「お祖父ちゃん、なんでクロノさんとリンディさんが来迎寺邸（こむけいじやう）にいるの？」

聖時の問いかけに、繁之は答えた。

繁之「ああ、二人はこの瑞親君と一緒に、今共同でやる仕事の話し合いに来ているのじゃ。それよりも、聖時。元気だったか？もっと近くによって顔を見せておくれ。」

繁之の言葉を聞いて近寄る聖時。

繁之「おお、元気そうだな。背も少し伸びたか？」

聖時「うん！……けど、本当に少しだけなんだよね……未だにクラスの並ぶ順番では前の方なんだよね……」

背の事を気にしてる聖時は、少し声のトーンを落として話す。

繁之「なぐに、成長期なのだから背などすぐに伸びるわ。わはははっ！」

そう言つて、繁之は聖時の頭を撫で始める。

聖時「……頭なでないですよ……小さい子供じゃないんだから……皆にも言ってるんだけど、どうしてみんな僕の頭をなでるんだらう。」

繁之「お、すまん、すまん。聖時の頭は撫で心地が良いからついな。」

聖時は、複雑そうな顔をしながら、この中で自分が知らない人……大斗瑞親やまとみすぢかの方に顔を向ける。

聖時「お祖父ちゃん、こちらの人は？」

繁之「おお、そうそう。紹介しよう、ワシの昔からの知人で、お前の両親……千尋と聖君の古い友人である大斗瑞親君だ。」

聖時「父さんと母さんの友人……じゃあ、僕に合わせたい知人の子供って……」

繁之「そう、彼の息子の剛君たけしの事だ。」



聖時「そうだったんだ。」

繁之は瑞親の方に顔を向けて、聖時を紹介し始めた。

繁之「瑞親君、これがワシの孫……千尋の息子の聖時だ。」

聖時「……どうも、神谷聖時です。」

繁之の紹介に続くように挨拶をする聖時。

瑞親「はじめまして。大斗やまとみすちか瑞親です。……しかし……話には聞いてたが、本当に千尋さん……お母さんによく似ている……」

聖時「あの……瑞親さんは、僕の両親の友人だったんですよ。……みんなからもよく言われてるんですが、そんなに似てますか？」

聖時の言葉を聞き、瑞親は少し懐かしそうな顔をしながら答えた。

瑞親「ああ、本当によく似ている。まるで昔の彼女を見ている気分だ。」

その言葉を聞き、聖時は少し複雑そうな顔をしながら答える。

聖時「そ……そうですか……」

母親に似ている、イコール女に見えると思っている聖時は少し凹む。そんな聖時に向かって、瑞親が声を掛けた。

瑞親「……聖時君、今回、私は息子の剛を連れてきている。君と同じぐらいの歳だ。この後、あいつと会って、仲良くしてもらえ  
るだろうか？」

瑞親の言葉に聖時は、凹みモードから立ち直りながら答える。

聖時「え、ええ。もちろんそのつもりです。」

聖時の言葉を聞いて、安心し、聖時に……

瑞親「……そうか、ではよろしく頼むよ。」

聖時「はい!」

そんなやり取りを見ていた繁之は、聖時に話しかける。

繁之「そろそろ、剛君達が屋敷を回り終える頃だからちょうどいい。  
聖時、ワシらはさっきまでしていた大事な話の続きをするから、剛  
君の相手を頼むぞ。」

聖時「はい、分かりました。」

繁之「ウム、頼んだぞ。・・藍子君!」

繁之の呼びかけに、入り口に控えていた藍子が返事をする。

藍子「はい、何でございましょう?」

繁之「聖時を剛君達が戻る客間に案内してやってくれ。」

藍子「かしこまりました。」

そう言って、藍子は聖時の側まで近寄る。

藍子「さ、聖時さま。」

聖時「うん。それじゃまた後で。」

繁之「ウム。」

聖時は繁之に挨拶をすると、藍子に連れられ、部屋を後にした。

\*

客間に残された才人達。

聖時が戻ってくるまでの間、才人達はメイドたちが用意した、お茶とお菓子を食べながら待っていた。

アルフ「このクッキー、おいしい」

クッキーをほお張りながらアルフが出されたクッキーの感想を言う。

士郎「この紅茶・・・とてもいい香りだ。きつといい葉を使ってるんだろうな・・・」

才人「士郎、そんなことわかるのか？」

士郎の口ぶりを聞いて才人が疑問に思った事を口にする。

士郎「ああ、こう見えても、料理にはちよつとうるさいんだ。」

才人「へへ、じゃあ、料理なんかも作れるのか？」

士郎「ああ、だいたい一通りの物は作れる。」

アキ「へへ、まるで聖時みたい。」

二人の会話を聞いて、アキが思った事を口にする。

士郎「え、聖時みたいって・・・聖時も料理作るのか？」

士郎がアキに聖時の事を聞いてくる。

アキ「ええ、聖時って両親が居ないから、料理なんかは自分で作るようにしてるの。」

一郎「……そうだったんだ……（オレと同じなんだ）」

そんな風に会話していると、藍子に連れられた聖時が戻ってくる。

聖時「みんな、お待たせ。ごめんね、待たせちゃって……退屈だった？」

聖時は才人達に近づきながら聞く。

才人「いや、そんなに退屈しなかったぞ。」

アルフ「ああ、出されたクッキーはおいしかったし……」

一郎「出された紅茶もおいしかった。」

アキ「うん、どっちも普段食べられない高級品だから、それを食べるだけでもいい時間をすごせるから、退屈はしなかったよ。」

聖時「そうか、よかった。あ、そうそう、例のお祖父ちゃんのお客さんの息子さんが屋敷の見学からもうすぐ戻ってくるって。」

才人「戻ってくるって、どこに？」

聖時「どうやらここに戻ってくるみたい。」

そんな風に会話していると、不意に客間の扉からノックがした。

聖時「はい。」

メイド「失礼します。」

扉をあけてメイドが入ってくる。

メイド「剛様たちが屋敷の見学からお戻りになりましたので、お連れしました。」

聖時「ありがとうございます。ここに通して。」

メイド「はい。」

そう言つてメイドは扉を開けて、中に連れてきた人達を招き入れる。入ってきた人たちは、男の子が二人の女の子が二人の4人だった。

男の子の方は、一人は落ち着いた感じの子で、もう一人は活発そうな感じだった。

女の子の方は、一人は、黒髪のロングのおとなしそうな子で、もう一人はツインテールの元気そうな子だった。

四人は部屋に入ってくると、聖時達の前までやってきた。落ち着いた感じの男の子が他の三人より一歩前に出て挨拶をする。

男の子「はじめまして大斗剛やまとたけしです。」

聖時「こちらこそはじめまして。神谷聖時です。話は瑞親さんから伺ってます。どうぞよろしく。」

聖時は自己紹介をされたので、自分も挨拶をして、自己紹介をする。

剛「あと、後ろに居るのが僕の友人の八岐猛やぎたけと白鳥琴乃しろとりこのさん、そしてその妹の明日香あすかちゃんです。」

猛「どうもよろしく。」

琴乃「よろしくお願いします。」

明日香「お願いします。」

三人がそれぞれ挨拶をしてくる。

聖時「よろしく。それじゃ、次は……」

才人「俺たちの番だな。どうも、平賀才人です。」

アキ「藤宮アキです。」

アルフ「アルフ・ハラオンだよ。」

士郎「衛宮士郎、よろしく。」

才人達が自己紹介をする。

剛「こちらこそよろしく。……しかし、聖時さん一人と聞いてましたが、まさかご友人も連れてくるとは……」

聖時は剛の言葉使いを聞き、剛に話しかけた。

聖時「あ〜と、剛だったよね？」

剛「え、はい……」

聖時「“さん”づけなんてしないでいいから、あと言葉も普通に。」

剛「し、しかし……天下の来迎寺グループの繁之氏のお孫さんにそんな……」

聖時「いいの！それに、僕達友達になるんだろ？」

剛「え……ええ。」

聖時「なら、敬語を使わないでくれ、そんな言葉使いされると肩がこつちやうだろ？」

剛「……ええ、じゃない！……ああ！……これでもいいか？聖時。」

聖時「ああ、それでいいよ剛。」

そんなやり取りを横で聞いてた猛が話しかけてきた。

猛「ふ〜。よかった、敬語で喋らなきゃならなかったら、堅苦しくて仕方がなかったよ。」

明日香「ほんと、ほんと」

琴乃「もう、明日香ったら。」



いままで緊張していた三人が、緊張を解いて笑い合い始めた。

聖時「さて、これからどうしようか？」

才人「なあ、だったら、これから出かけないか？」

アキ「そうね、このまま屋敷に居るのもよさそうだけど、琴乃さん達は屋敷を見て回ったんでしょ？」

士郎「そうだよな・・・だったらここに居てもつまらないだろうから、出かけた方がいいかもな。」

才人「それにここつて、俺たちが普段学校の通学に使っている駅口の反対側にあるんだろ？だったら、学園がある方に行けば、俺たちが街を案内できるな。」

才人の言葉を聞き、聖時が答える。

聖時「そうだな・・・なら、みんなで行ってみるか。学園が開いていれば、案内もできそうだしね。」

士郎「いいんじゃないか。俺も見てみたいし。・・・剛達もそれでもいいか？」

剛「俺はかまわない。猛たちはどうだ？」

猛「俺もかまわない。どの道、このゴールデンウィークに出かける用がなくて、剛についてきたオマケの俺たちだ・・・剛の決定に従うよ。」

琴乃「わたしもそれでいいです。」

明日香「お姉ちゃん達が良いならわたしも良いよ。」

聖時「それじゃ、出かけるって事でみんな異論ないよね?」

みんな「「「「「「「「「異論なし!」「」「」「」「」「」

アルフ「それじゃ、さっそく出かけようよ。」

聖時「ああ。」

そう返事をして聖時たちは出かける準備をし始めた。

一方、聖時達を追ってきたピティたちは、駅から出てきたところだった。

ふたば「へへ、普段通学で使っている駅の反対側に来迎寺邸があるんだ。」

ピティ「うん！え」と、まずは駅前の大通りを道なりに進んで。」

ふたば「道なりにね・・・うん、わかった。」

そう言っつてふたばは歩き出した。

ふたばは、普段来る事がない駅の反対側の町並みを少し珍しそうに見ながら歩く。

学園がある方の駅前と違い、こちら側はビルやペナントが入った雑居ビルが多く立ち並ぶビル街になっていた。

そんなビル街を見ながら歩いてみると、不意にビルの陰になっている路地裏から女の人の声と男怒鳴り声のような声が聞こえてきた。

????「キャアッ」

???。「手間掛けさせるんじゃない!」

ふたば「?」

ふたばは立ち止まり、声がしてきた路地裏を見る。

ピティ「?どうしたの。」

突然、足を止めたふたばを不思議に思ったピティはふたばに声をかける。

ふたば「……いま……向こうから女の人のような悲鳴が聞こえてきたような……」

ふたばは声が聞こえてきた路地裏を、指差しながら答える。

ピティ「え!……悲鳴?」

ふたば「うん……悲鳴」

ピティ「……何かの聞き違いじゃない?」

ふたば「ううん、たしかに聞こえた!」

そう答えると、ふたばは声がした方へ歩き出した。

ピティ「ちょ、ちょっと!ふたば!」

歩き出したふたばをあわてて追いかけるピティ。

路地裏を入って、正面の十字路を曲がってビルの裏を見る。  
そこには柄の悪そう男達が数人、女の人を囲むように立っていた。  
女の方は、ビルの壁に背をもたれながら右手で、左肩を押さえたい  
た。どうやらケガをしているみたいだ。

ふたば「あれは……」

ピティ「あいつら何やってるんだろ……」

二人は男たちから少しはなれて、様子を見始めた。

男たちの中の中心核の男、頭を金髪に染め、箒みたいにツンツンに  
した男が女の人に声をかける。

箒頭「まったく、自分の源流も知らないはぐれ元神霊もつみたまが、最強の獅し  
子神しがみの低位元神霊とらいはるえんじであるこの張様の手をわずらわせるんじゃないよ。

「  
そう言っ張と名乗った男は女に近寄って話しかけてきて来た。

女「！」

女の方は不意に張に殴りかかる。その拳のスピードは素人のふたば  
でもわかるくらい早かった。  
しかし……

張「おっと。」

その攻撃を難なく張はかわす。

張「ほ、まだ元気があるみたいだな・・・」

余裕の表情で言いながら構えている女の方を見る張。

張「さすが、腐っても元霊神と言ったところか・・・いいぜ、相手になってやるぜ。」

そう言っつて構える張。

女はそんな張は見据えて、構えながら対峙する。

しばらくにらみ合いが続くと、不意に女が張に襲いかつた。

その攻撃のスピードは速かったが、張はそれを難なくかわして、女の脇に迫る。

張「いい攻撃だ、俺以外の下位元神霊になら有効だったろうが・・・俺には通じない！」

女「！」

脇から聞こえてきた声に反応して、そちらの方に体を向けようとす  
るが、それよりも早く張の攻撃が入る。

ズドッ！

大きな音が回りに響く。

最初何が起きたのかふたば達にはわからなかった。

目を凝らして見ると、二人はとんでもない物を見た。

張の手刀が女の胸を貫いていたのである。

張「おっと、わりいわりい、つい力を出し過ぎちまった。」

そう言いながら、張は女の胸に突き刺さっている自分の腕を引き抜いた。

腕を引き抜かれた事により、女は倒れ、傷口から血が流れ、血の海を作る。

女は事切れていた。

張が倒れた女を見てニヤケながら言う。

張「やっぱり、たまに殺しをやっておかないと、腕が鈍るよな。」

そんな風に言っている張に周りの男の一人が言う。

男「張さん……いいんですか？命令は連れ戻すって事になってるんじゃない……」

張「いいんだよ！報告には“抵抗されたため、やむなく殺した”って事にすりゃあ、バレね〜って」

そんな風に会話をしている張達を見ていたふたば達は恐怖でいっぱいになっていた。

ピティ「な……なんなの……あいつら……」

ふたば「ひ……人殺し……」

ふたばは震えながら後去る。

そのとき、足を脇に積まれていた荷物に引っ掛け崩してしまう。

荷物が崩れる音が響き、その音で男たちがふたばたちの方へ顔を向ける。

男「オイ！見られたぞ！」

張「なに！」

男達の視線がこちらに集まるのを見てピティが叫ぶ。

ピティ「見つかった！逃げるよ！」

ふたば「え？」

思考が追いついてないふたばはピティの言葉をうまく理解できていなかった。

ピティ「なにポーツとしてるの！やつらに捕まるよ！」

ピティの怒鳴り声のような声を聞き、我に返ったふたばは、その場から走り去る。

張「逃がすな！」

張の声で周りにいた男たちは、一斉にふたばを追い始める。

張「まったく、殺しの所を見られるとは、今日はずいてないぜ……」

そう言いながら張は懐から携帯を出し、電話をかけ始める。  
コール音が数回し、相手が電話に出る。



張「俺だ・・・死体の処理を頼む・・・場所は・・・  
だ。それとまた後で処理を頼む死体が出るから準備をしておいてく  
れ。」

そう言っつて携帯切り、歩きながらふたば達を追って行った男たちの  
方へ歩き始めた。

くおまけコーナーく

ピ 「ピティと」

ユ 「ユニの」

二人 「おまけコーナー」

ピ 「はい、毎回恒例のおまけコーナーの時間です。司会進行役のピティです。」

ユ 「解説のユニです。」

ピッ 「アシスタントのビツキーです。」

ピ 「さて本編後半は怒涛の急展開！この先どうなる事やら・・・」

ピッ 「ピティさん追いかけてましたね、大丈夫なんですか？」

ピ 「ま、まあ・・・大丈夫でしょ？いきなり死亡フラグが立つわけではないし。」

ユ 「・・・わかりませんよ。何せ書いている作者が作者ですから・・・」

ピ 「こ・・・怖いこといわないでよー！・・・まったく・・・さて気を取り直して・・・恒例のゲスト召還・・・いつて見よー！」

コシヨウを取り出し、ビツキーにふりかける。

ピッ 「ハ・・・ハ・・・ツクシユン！」

パツ！

芹「あ！ここがおまけコーナーのスタジオだね。」

ピ「今回のゲストは、その歌声は悪魔のいびき声、超音波破壊兵器ソータオーウェーブ、料理の腕はシャル並みの、IZUMO2から大須芹おおすはるひです。」

バキッ！

ピ「あ、痛っ！」

芹「だれの歌声が悪魔のいびき声で超音波破壊兵器ですって！」

ピ「いきなり叩かないでよ！．．．それに本当の事じゃない、歌声にしる料理の腕にしる．．．」

芹「ちょっと、歌声はともかく．．．」

ピッ「あ、認めるんですね。」

芹「うっさい！とにかく、歌の事百歩譲るとして、わたしの料理の腕がシャルさん並つてのは聞き捨てならないわよ！わたしはあそこまで酷くないわよ！」

シャ「だ〜れ〜の料理の腕がヒドイですって？」

ピ「うわっ！」

ユ「シャルさん！」

ビッ「ど・どつして」にっ？」

シャ「聞き捨てならない事が聞こえてきたのでやってきたんです。」

満面の笑顔を浮かべるシャマル・・・しかし目は笑っていない・・・

芹「い・・・言っとくけどわたしは言葉を取り消さないわ・・・

」

シャ「あらそう？なら・・・意地でも取り消させるわ・・・芹さん！料理で勝負よ！」

芹「・・・面白いわ！受けて立つわよ！」

他の三人「「え〜〜〜！！」「」「」

シャ「ルールは簡単、制限時間内に料理を完成させて、審査員の人たちに食べてもらい判定をもらう・・・これでどう？」

芹「いいわよそれで！審査員はその三人にしてもらいましょう。」

ピ「え！ちょっと待って！」

ユ「勝手に決めないでください！」

ビッ「そつだよ！」

シャ「場所はこのスタジオの隣にある“料〇の鉄〇”で使われてい

るクッキングスタジオで！」

芹「じゃあそこで！」

ピ「二人とも人の話を聞きなさいよ！」

二人はピティ達の声に気付かず隣スタジオにらみ合いながら向かう。

ピ「……………行っちゃったね……………」

ピツ「たしか隣のスタジオ……………収録の準備してましたよね……………」

ユ「……………ええ。」

隣のスタジオから不意に悲鳴に似た声や、爆発音が聞こえ始める。

声「な、なんなんだあんた達は！急に料理を作り始めて、ってうぎや〜」

声「うわ〜、鍋から得体の知れないものが出てきた〜」

声「きゃ〜、プロデューサーが鍋から出てきた料理に食われた〜。」

三人「……………。」

ピ「……………き…聞かなかった事にしよう……………」

ユ「そんなワケには行かないでしょう。は〜、後で謝りに行かない

と……」

ピッ「これでは料〇の鉄〇の収録できませんよね……」

ピ「……ま、まあ今回はここまでとしておきましょう。」

ピッ「あの〜今回の解説は？」

ピ「いいの！」

ユ「それではみなさん」

三人「まったね〜」

ピッ「番組の収録・大丈夫だったかな〜」

ちなみにこの後、スタジオはしばらく使用不能になり収録が延期になったが、この料〇の鉄〇の番組のプロデューサー、転んでも、ただでは起きない人らしく、シャマル達の料理風景をこのときカメラに収めており、編集してコント番組“〇×料理人世界一決定戦”として放送。コント番組として高視聴率を出したとかどうとか……

## 第12話 IZUMO（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。それと  
募集したオ리지ナルの真の紋章の件ですが・・・  
残り一枠の応募が来ない・・・  
だ、大丈夫かな？この企画・・・  
とにかくアイデアはまだ募集してるんで、ドンドンアイデアを送っ  
てきてください。  
お待ちしております。

### 第13話 初の実戦（前書き）

今回は、主人公の聖時が初バトルをします。

戦闘描写を書くのが下手な作者ですが、精一杯がんばって書きました。

それでは、第13話どうぞ。



## 第13話 初の実戦

### 第13話 初の実戦

彼女、渡良瀬ふたばは走って逃げていた。

彼女の後ろからはガラの悪そうな男達が数人走って追いかけてくる。なぜ彼女が追われているかというと、来迎寺邸に向かう途中、路地裏から悲鳴が聞こえてきたのでその場所に向かった。そして、ビル街の裏道りのような場所で、数人の男たちを引き連れた頭の髪の毛を逆立てた髪型の男が、女の人を殺した場面に遭遇してしまった。男たちは、ふたばが殺しの場面を見ていた事に気付き、彼女を捕まえようと迫ってきたので、慌てて表通りに走って逃げた。しかし、男たちは諦めずに追ってきたのでさらに走って逃げて、現在にいたる。

人ごみを縫うように走るふたばは、追ってくる男たちを見るために後ろを振り返る。

そんな時、ふたばと同じように飛んで逃げているピティが叫んで言う。

ピティ「ふたば！前！」

ピティの声を聞き、慌てて正面を見るふたば。ふたばとピティの正面から数十メートル先に、後ろから迫って来ている男達の仲間が迫って来ていたのである。

後ろと正面から挟み撃ちにされたふたばは慌てて回りを見渡し、横道を見つける。

ふたばはそこに身を滑らせるようにその道に入って行き、そのふたばに続くようにピティが飛んで道に入る。ふたばはそのまま道なりに走って行き、横を飛んでいるピティに話しかける。

ふたば「もし、このまま捕まっちゃったら私達……」

ピティ「間違いなく口封じのために殺されるね。」

ピティの言葉を聞き、ふたばは先ほど見た殺人の場面が頭に浮かぶ。

ふたば（もし……やつらに捕まったら、先ほどの女の人の様に、私も……）

そう思った瞬間、言いようのない恐怖が自分を支配した。

ふたば（……イヤッ！殺されたくない！誰か……助けて！！）

ふたばは心の中で叫んだ。

\*

聖時「……」

アキ「どうしたの？」

聖時が急に立ち止ったので声をかけるアキ。

聖時「いや・・・だれかの・・・“助けて”、て声が聞こえたような気がして・・・」

アキ「え？私は聞こえなかったけど・・・」

そんな風に立ち止まって会話をしていると、先に行った才人達から声がかかる。

才人「おゝい！何やってるんだ。置いてくぞぞ。」

そんな風に、声をかけられたので、二人は才人達に合流する為に少し早足で歩く。

才人達に合流した聖時に、才人達が声をかける。

才人「なにやってるんだよ。」

聖時「わるいわるい。ちょっとボーツとしちゃった。」

琴乃「大丈夫ですか？」

琴乃が心配そうに声をかけてくる。

聖時「大丈夫、大丈夫。」

明日香「本当に大丈夫なの？聖時お兄ちゃん」

明日香も心配そうに声をかけてくる。

聖時「大丈夫だって。」

そう言いながら、笑顔で返す。

今、聖時達は猛達を連れて、この街を案内していた。

来迎寺邸を一通り見て回った猛達が屋敷の中にこれ以上居ても、退屈するだけだろうと言う事で、急遽聖時達は猛達に町を案内する事になった。

聖時「で……何の話だっけ？」

聖時は、自分が立ち止まってしまったために、中断した話を戻そうとみんなに話を聞く。

アルフ「だから、士郎や猛、剛達もあんと同じように剣術をしてるって話だよ。」

聖時「あ、そうだった。」

アルフの答えを聞き、思い出したかのようにうなずく聖時。

剛「しかし以外だったな……士郎はともかく、まさか聖時まで剣術をやってるなんて。」

猛「ああ。聖時は、剣術なんかとは無縁な感じがするもんね。」

士郎「だな、おれも意外だと思っよ。」

猛「なあ、今度、機会が合ったら手合わせしないか？」

剛「良いなそれ。」

士郎「そうだな、機会があればな。」

聖時「だね。」

そんな風に話していると、不意にアキが道路を挟んだ向こう側を見ながら言う。

アキ「あれ？」

聖時「どうしたの？」

聖時がアキにどうしたのか聞く。

アキ「あれ、ふたばじゃない？」

アキが道路を挟んだ反対側の歩道を指差す。

聖時達はアキが指さした方を見る。

そこにはピティを連れて必死な形相で走るふたばがいた。

そして、その二人を走って追いかける、ガラの悪い男たちがいた。

アルフ「なに……ふたば、あのガラの悪そうな連中に追われてるの？」

そんな風に話していると、ふたばは横道に入り、聖時達の視界から消えた。

剛「聖時……あの人、知り合いか？」

剛は、先ほど走って逃げていた女の子が聖時の知り合いか尋ねる。

しかし、なにか考え込んでいるのか、聖時は答えず、変わりに士郎が答える。

士郎「ああ、聖時達と同じ学園に通っているふたばだ。」

そう言っただけで答える士郎。

琴乃「なんだか追われてるみたいですけど……」

琴乃がつぶやくように言う。

そんな琴乃に明日香が話しかける。

明日香「ねえお姉ちゃん……さっきの人のそばに、妖精みたいな女の子が飛んでなかった？」

明日香の言った言葉に、アルフ、才人、アキが驚く。

琴乃「え、ええ……見えたけど……」

猛「琴乃も見えたのか？俺も見えたけど……剛は？」

剛「俺も見えた……最初は目の錯覚かと思ったけど……」

剛達の言葉に続くように士郎も言う。

士郎「……多分……錯覚や幻の類ではないと思う……俺も見えたから……」

士郎がそう言い始めると、聖時の側にいるアキが聖時に小さい声で話しかける。

アキ（聖時・・・ちよつとマズいんじゃない・・・）

しかし、アキの声に応えようとせず、次の瞬間、ふたばを追うように走り始めた。

アキ「ちよつと、聖時！」

アキが走り始めた聖時に叫ぶ。

聖時「なんか悪い予感がするんだ！僕はそのままふたばを追うから！」

そう言っつてそのまま走る聖時。

アキ「ちよつと！追っつて、どう言っつ事！」

しかし、その声に応えることなく、聖時は走り去ってしまた。

才人「・・・どうしたんだ？聖時のヤツ・・・」

つぶやくように言っつた才人の声に、アルフが答える。

アルフ「何言っつてるんだい！さっきのふたばの様子、尋常じゃなかつただろ？それに、ふたばを追つてた妙な連中・・・きつとふたばは何らかのトラブルに巻き込まれたんじゃないかい？」

アルフの言葉にハツとなった才人達はふたばを心配し始める。

アキ「・・・だから聖時、急にふたばの後を追っていったのね。」

才人「ふたば・・・大丈夫かな・・・」

そんな風に言っている才人の側で、士郎が全員に話しかけるように言う。

士郎「・・・よし、俺も追う。聖時だけじゃ心配だから。」

士郎はそう言って走り始めた。

アルフ「ちよつとまって！あたしも行くよ。」

そう言って士郎に続くように、アルフも走る。

猛「・・・剛！」

剛「ああ、俺たちも行くこう。」

そう言って猛達も走り始めた。

才人「お、おい！お前たちこの街はじめてなんだろ？迷子になるぞ！・・・ああああ、もう！」

才人は仕方がないと言つような感じで、猛達が迷子にならないようにするためのフォローに走る。

アキ「ちよつと待って！私たちはどうすれば言いのよ！」



走り去っていく才人達にアキが叫ぶ。

琴乃「アキさん・・・私たちも行きましょ。」

明日香「うん、行こう？アキお姉ちゃん！」

そんな二人の言葉を聞き、アキが答える。

アキ「・・・しかたがないわね・・・良いわ、みんなを追いましょ！」

そう言ってアキ達も走り始めた。

\*

ビル街の路地裏を走って逃げるふたば。  
しかし、その足も次に入った道の先で止まる。

ふたば「え？・・・行き止まり？」

ふたばが入った路地は、しばらく進むとビルに囲まれた少し開けた場所になっており、道はそこで終わっていた。

ふたばは慌てて来た道を戻ろうとしたが、来た道からは追ってきた男たちがすでに迫ってきている。

ふたばはどこかに抜け道はないか突き当たりまで行き、周りを見渡すがそんな物はなく、とうとう男達4、5人に追いつかれた。

男「鬼ごっこはお終いだぜ。」

そう言いながら男達はふたばを囲むように近づく。

ふたば「い・・・いやっ！こないで！」

ふたばは叫びながら後ずさるが、すぐに壁に当たる。

逃げ場のなくなったふたばは恐怖にすくみ、震える。

そんなふたばの前にピティが立ちふさがり叫ぶ。

ピティ「お前ら！ふたばに手をだすな！」

自分の姿は相手に見えないだろうが、ふたばを庇おうと小さな体で立ちふさがり、声を張り上げる。

ピティは相手に見えないのだから、こんな行為は無駄だと思いなが

らも立ちふさがり続ける。当然、相手はなんの反応も見せないだろうと思っていたが、相手は予想外の反応を見せる。

男「な・・・なんだ？このちっこいの？」

男「よ・・・妖精？」

ピティ「え？」

予想外の男達の反応にピティは驚いた顔をするが、すぐに気を引き締めて、再び叫ぶ。

ピティ「もう一度言うよ！ふたばに手をだすな！！」

ピティの叫びに男達は、しばらく唾然としていたが、次の瞬間笑い始めた。

男「ぎゃははははは、それで庇ってるつもりかよ？」

男「そんなちっこい体で、なにが出来るんだよ？バカじゃねえの？」

男たちは立ち塞がるピティを見て、馬鹿にしはじめた。

ピティ「な、なによ！ふたばに手を出したら許さないんだからね！」

男「ほお・・・どう許さないんだよ・・・ええ！」

男はピティに近づきながら次の瞬間、飛んでたピティを腕で叩き落とした。

バシッ！

「ピティ」「うわっ！」

地面に叩きつけられ、ピティは痛みにつめき声を上げる。

「ピティ」「う……うっうっうっ！」

ふたば「ピティ！」

地面に叩きつけられたピティに近寄ろうとするふたば。しかし……

男「おっと。」

近づく前に男達の中の一人に腕を捕まえられ、片手で捻りあげられる。

ふたば「アアッ！」

男「さて……アレがなんなのか聞きたいところだが、あまり時間をかけると俺たちが張さんに殺されちまうからな……悪く思うなよ。」

そう言っつて男はもう片方の手でふたばの口を塞ぎ、仲間に合図を送る。

合図をもらった男は、懐から銀色に光るナイフを取り出す。

ふたばは口を塞がれながらそれを見て、驚愕する。

ふたば「んんんんんんん！」

男「じゃあな。恨むんだつたら運のない自分を恨みな！」

男のナイフが迫ってくる。

ふたば（だれか・・・だれか助けて・・・助けて・・・聖時！）

男がナイフをふたばに刺そうとする瞬間。

聖時「うおおおおおおおっ」

どこからか叫び声が聞こえたかと思うと次の瞬間、ふたばを抑えていた男が吹き飛ぶ。

男は顔の横に聖時のキックを食らって吹き飛んだのだ。

男を蹴り飛ばした聖時は着地して、そのままふたばの前に立ち塞がるように立つ。

その手には、ここに来る途中で拾った鉄パイプを握り締めていた。

聖時「大丈夫？ふたば。」

聖時を見てふたばは少し驚いた顔をしながらうなづく。

聖時はそれをみて少し安心し、次にピティの方を見る。

聖時「・・・ピティ、大丈夫か？」

聖時の声に反応し、ピティが応える。

ピティ「あ・・・あんまり大丈夫じゃないけど・・・とりあえず・・・

生きてるよ……」

聖時「……そうか……ちょっと待ってて、すぐに終わらせるから。」

そう言つて、聖時は男達を見据える。

そんな聖時を見て、男たちは聖時に向かって叫ぶ。

男「なんだテメエ！」

男「このガキ！なめたマネしやがって！！」

男「すぐに終わらせるであ〜。」

聖時「ああ、そうだ。聞け！病院通いがやなヤツはここから去れ！」

聖時は男達に向かって警告をする。

男「生意気なガキだ。」

男「ヘツ、ケガ人なんざでねえよ。出るのは死人……てめえ一人だ！」

そう言つて男の一人がナイフを持って聖時に襲い掛かり、それに続くように他の男たちもナイフを持って襲い掛かる。

ふたばは“危ない！”と思つた。しかし、次の瞬間ふたばは信じられない物を見た。

聖時「おおおおおおおおおっ！！」

聖時は叫び声と共に、襲い掛かってきた男達二人に向かって鉄パイプを振るい吹き飛ばした。

聖時一（・・・いける！）

聖時は心の中でそう思った。

聖時は最初、戦闘に対する恐怖で体が硬くなり、うまく動けなくなるか心配していた。

しかし、いざ動いてみると硬くなる事はなく、それどころか相手の動きが遅く感じ、次にどのよう動くのかが手に取るように解る。

相手の動きを先読みし、そこから導く最小の動きで最大の力を出し、相手を倒せる軌道に鉄パイプを振るい、吹き飛ばす。

二人・・・三人と次々に男達を倒していく聖時。

ふたばはそれを信じられない物を見たような顔で見ている。

男「調子に乗るなよ！小僧！！」

ふたばはハツとなって声の方を見る。

そこには先ほど、聖時の蹴りで吹き飛ばされた男が、どこからか拾ってきた鉄パイプを持って聖時に襲い掛かってきていた。

男は上段に構え、鉄パイプを振り下ろすような形で襲いかかってくる。

だがそれが聖時に届くことはなかった。

聖時は男が鉄パイプを振るう前にジャンプして跳び、相手の頭上に飛んでいた。

男「!？」

男は急に視界から聖時がいなくなったため、まるで消えたように見えた。

聖時「こつちだ。」

聖時の声でそちらに顔を向ける。そこにはすでに持っている得物を振り上げて、襲い掛かる体勢になっている聖時がいた。

聖時「飛天御剣流・龍槌閃ひてんみつるぎりゅう！！」

聖時の一撃が、男の頭上に炸裂する。

男は聖時の一撃の威力で頭から地面に突っ込むような形で倒れる。

聖時が着地すると同時に、聖時の背後で男が倒れる音が響く。

聖時「しばらくそのまま、反省してろ。」

そう言い放つ聖時。

聖時はそのまま歩いてふたばに近づく。

聖時「ふたば・・・大丈夫だった？ケガはない？」

ふたばは聖時の声で我に返りる。

ふたば「・・・え、ええ・・・・・・聖時・・・・・・なんで」

ここに居るの？と聞こうとするふたば。

聖時「・・・才人達と一緒に街中を回ってたら、ふたばがピティを連れて妙な連中から逃げ回っていたのを見かけたから、心配になっ



て追ってきたんだ。」

聖時は自分がここに来るまでの状況を簡潔に説明した。

ピティ「まったく・・・追い回されてるの見てたんならもっと早くに来なさいよ。」

ピティはよるめきながら立とうとする。

そんなピティを見て側に駆け寄り、ピティを抱き上げるふたば。

ふたば「ピティ・・・ごめんね・・・そして・・・庇ってくれてありがとう。」

ふたばは腕の中に居るピティにお礼を言う。

ピティ「いいよべつに、それにあんまりやくに立たなかったし・・・」

ふたば「ううん、そんな事ないよ。」

ふたばは涙交じりの顔で、微笑みながらピティに言う。

ふたば「聖時もありがとう。もし・・・聖時が着てくれなかったら、わたし・・・」

そう言ってふたばは押し黙った。

聖時「・・・ねえふたば、こいつら・・・なんでふたば達を追い回してたの？それに、さっきの様子だとピティの姿が見えてたみた

いだけど・・・」

聖時の疑問にふたばは答えようとした。

ふたば「あ、それは・・・」お、いたいた、捜したぞ聖時」「

突然現れた士郎の声でふたばの音がさえぎられる。

ふたばは声の方を見て言う。

ふたば「士郎君？それにアルフ？」

聖時「追ってきてたのか？」

聖時の問いかけに士郎が答える。

アルフ「ああ、あんただけじゃ心配だからね。」

そう答えながら聖時達に近づく士郎とアルフ。そして士郎とアルフの後ろから猛、剛、才人が次々と追いついてくる。

猛「士郎！」

剛「やっと追いついた。」

才人「はあ、はあ、はあ・・・お前ら足・・・速すぎ・・・」

才人は息を切らしながら話しかける。

聖時「猛達まで追ってきてたのか・・・」

剛「まあな。」

聖時「ところで、琴乃や明日香ちゃんはどうしたんだ？」

才人「・・・たぶん、アキが面倒見てるとおも「ああ、いたいた。」

才人の声を遮るように、今度はアキが琴乃と明日香を連れてきていた。

琴乃「・・・なんです・・・この惨状は・・・」

明日香「これ・・・全部聖時お兄ちゃん達がやっつけたの？」

琴乃と明日香が回りに倒れている男たちを見て言う。

士郎「ああ、・・・もっとも俺たちは、何もしていないけどね・・・俺たちが着いた時には、こいつらすでに伸びてたから。」

士郎の言葉を聞き、明日香が驚く。

明日香「ええ〜！それじゃこれ、全部聖時お兄ちゃんが一人でやったの〜！」

明日香の声に聖時は少し照れながら答える。

聖時「ま・・・まあね・・・それよりふたば・・・こいつらは一体何者なの？」

聖時の問いかけに、ふたばは顔を曇らせながら答える。

ふたば「あいつらが何者なのかは知らない・・・ただ、あいつ等は、殺しの現場を目撃した私を口封じのために殺そうとしたらしいの・・・」

ふたばの言葉を聞いて、聖時達は驚愕する。

アルフ「な・・・殺しの現場を目撃したって・・・」

アキ「そ・・・それ本当なの？」

ふたば「・・・うん・・・私・・・聖時のお祖父ちゃんの家に向かったみんなに合流しようと駅前のビル街を歩いてたの・・・そして路地裏の方から悲鳴みたいな声が聞こえて見に行ったら、数人の男の人が女の人を囲んでいて、その中のリーダー格みたいな人が、突然女の人を殺したの・・・私・・・怖くなって逃げただけど・・・」

士郎「相手側はすでに、ふたばが殺しの現場を見ていた事に気付いて、それで口封じの為に・・・」

アルフ「追いかけて、消そうとしていた・・・と言う訳か・・・。」

アルフの言葉にうなづくふたば。

才人「・・・と・・・とにかく・・・警察に連絡しよう！」

才人はそう言うと、自分の携帯を出して警察に連絡しようとした。  
すると・・・

????「困るな、そんなことされると面倒になるんだがな。」

突然、声が響くと同時に、才人の携帯が白く光る帯のような物に切り裂かれて破壊される。

才人「うああ！」

突然、携帯が破壊され驚く才人。

張「命が惜しかったら、警察を呼ぶなんて白けたマネはするなよ。」

この場所に通じる唯一の道を封鎖するように、二人の男を引き連れた張が現れる。

聖時「だれだ、おまえ！」

ふたば「あ・・・あの人・・・あの人が、さっき言った人殺しの人よ！」

聖時達「！」

ふたばの言葉を聞き、全員が驚き琴乃と明日香、アキはふたばの側に行き、土郎、猛、剛、アルフはそんなふたば達を庇うように立つ。才人は携帯を壊されたショックで呆然とし・・・そして聖時はそんな全員を庇うように、張との間に立って、持っている鉄パイプを構えながら叫ぶ。

聖時「あんた・・・何者だ!・・・なんでこんな事するんだ。」

聖時の言葉に張は答える。

張「そんなの決まってるじゃないか。殺しの場面を見られたなら、その相手を消すのは常識だろ？ましてや警察なんかが出てきたら何かとめんどくさくなるしな。」

張は悪びれもせずと言う。

張「しかし・・・最初は殺しを見られて”ついてない”と思っていたが・・・まさかこんな生きの良い獲物に会うことが出来るとは・・・俺は運がいい。」

聖時「い・・・生きの良い？」

張「最近、逃げるだけの獲物には飽き飽きしていたんだ。やっぱり狩は相手に噛み付くぐらいの生きがなくなっただけ。」

張は聖時を見て、舌なめずりをする。

聖時「・・・僕は・・・あなたの狩の獲物という事か・・・けど、僕はあなたに狩られるつもりはない！」

聖時は構えなおして、相手を睨み付ける。

張「いいね、狩がいがあるようだ。」

張も構えを取り、聖時と対峙する。

聖時「(さっきのやつらとは格が違いそうだ・・・油断はできない！)」

聖時は相手から感じ取る殺気などから、かなり出来る男だと感じ取り、気合を入れなおして相手との戦いに集中し始めた。

くおまけコーナーく

ピピピティと  
「」

ユ「ユニの」

二人「「おまけコナ」」

ピ「はい、今本編でケガして動けなってるけど、ここでは元気いっぱいで行く、司会進行役のピティです。」

ユ「（すこし暗そうに）最近、ドンドン出番が少なくなっているユニです。」

ピ「あ、落ち込まないでくださいよ。アシスタントのビッキーです。」

ピ「ユニく、落ち込まないですよ。ユニなんてまだまだ出番多いんじゃない。」

ピ「そうですね。私なんてほとんどないんですから……  
・出た回数も一回だけですし……」

ユ「あ……お……落ちこまないで、そのうち出番増えるかもしれないじゃない。」

ピ「そ……そうだよ！まだまだこれからなんだから。」

ピ「……そ……そうですね……」

ピ「うんうん、それじゃ恒例のゲスト召還、行ってみよう。」

ビッキーにコシヨウをふりかける。



ピッ「ハ・・・ハ・・・ックシユン！」

パッ！

ピ「さて今回は、前回のゲストと同じ作品、IZUMO2から北河きたが麻衣わまいさんに来てもらいました。」

麻「どうもよろしく・・・けどいいの？私、自慢じゃないけど、こつ言つのあまり得意じゃないわよ？」

ピ「あ、いいの。前は芹を呼んだおかげで、補足が出来なかったから今回は前回出来なかった補足をメインにやっていくから。そう言つのは得意でしょ？」

麻「まあ・・・」

ピ「なら、なにも問題ないね、では次に行くよ。今回の本編を振り返つての一言をどうぞ。」

麻「え〜っと・・・主人公、初バトル！って感じかしら？」

ピ「たしかにそうだね〜。」

ユ「今まで、ほとんど戦闘場面なかったですし・・・」

ピ「あつたとしても、主人公とは全然関係ない場所で起きてましたしね〜。」

ピ「だから今まで、主人公でありながら、聖時の実力はよくわかっ

てなかったのよね。」

ユ「だから今回から始まった戦闘では、聖時さんの実力がいよいよ判明すると言う訳ですね。」

ピ「そうそう、だから次回もこのままバトル中心の話になる予定だから、楽しみにしててください。」

麻「・・・けど、この作者の構成力で、うまく戦闘描写を書くことができるの?。」

三人「「「「・・・」」」」

ピ「ま・・・まあ、がんばってもらおうという事で。さて次は、前回出来なかった補足といきましょう。」

麻「えっと、今回は私たちが出ている作品・・・IZUMO2についてです。」

ユ「IZUMO2は猛き剣の閃記とは、2004年にパソコンで発売された、伝奇をテーマにしたロールプレイングゲーム「IZUMO」の続編。プレイヤーは、「私立出雲学園」に通う主人公の高校生「八岐猛」となり、突然襲われた大地震の直後に、廃墟と化し、魔物の巣窟となってしまった学園から、幼なじみやその妹、同級生たちと力を合わせて脱出を目指します。学園内は、3Dフィールドとなっており、さまざまなマップを移動し、キャラクターたちと会話をするアドベンチャーパートと、敵とターン制のバトル行う戦闘パートをこなしながら、ストーリーを進めていきます。アドベンチャーパートでは、会話の途中に現れる選択によって女の子の好感度に変化。また、戦闘パートは、前列3人、後列3人の6人パーティ

制となっており、すべてのキャラクターに設定されている属性による相性「五行システム」や、装備を強化する「勾玉システム」といった要素が盛り込まれています。また、2006年4月27日にはPS2にコンシューマが移植作品を出しており、2006年4月28日には続編のIZUMO2 学園狂想曲が発売。2008年1月31日にはPS2へ同作品の移植作品が発売。2005年四月にはアニメも放送され、その先駆けとして2004年から2005年の間に原作の原画を担当した山本和枝による漫画版がコンプティークで連載されました。」

ピ「長々しい説明、ご苦労様。」

麻「私たちの作品をよくまとめてあり、とても良い説明だと思います。」

ユ「ありがとう。」

ピ「さて今回はここまでとします。麻衣、ゲスト出演お疲れ様。」

麻「いいえ、これぐらいいたしたことないから。」

ピ「それじゃあ、次は本編で会いましょう。」

麻「ええ、楽しみに待ってるわ。」

ピ「それじゃあ、ビッキー。」

ピッ「はい！んんんん、えいっ！」

パッ！

ピ「さてゲストも返したし、後は締めだけね。」

ビツ「今回は、何事もなく終わりそうだね。」

ユ「ええ、そうですね。……もつとも私は前回の事で、これから関係各局に謝りに行かなければならないんですけどね。……このコーナーの代表としてね。……」

ピ「あ……ははは……がんばってね……」

ユ「……」

ピ「と……とにかく締めに……」

ユ「そうね……それではみなさん」

三人「まったね〜」

ユ「……ハア〜……胃が痛い……」

### 第13話 初の実戦（後書き）

次話も戦闘がメインの話になります。  
どうぞお楽しみに。

第14話 VS(バーサス)(前書き)

どうも剣 流星です。

どうにか書き終えたのでアップします。

それでは第14話どうぞ。

## 第14話 VS（バーサス）

### 第14話

バーサス  
VS

ビル街の路地裏・・・今ここで聖時はふたばを追ってきた男達のリーダー格の男と対峙している。その聖時の後ろにはアルフと土郎が立ち、その後ろに猛と剛、そしてさらにその後ろにはふたばとその腕にのちに抱き上げられているピティ、そしてそれに寄り添うような形で、アキと琴乃、明日香がいて、そこから少し離れたところに才人が立ってその光景を目にしていおり、そこからだいたい離れた場所で張の手下の男二人が事の成り行きを見ていた。

聖時の後ろ、アルフは聖時と対峙している男・・・張を見て冷や汗を流していた。

アルフは張が発している気のような物を感じ取り、この男が只者じゃない事を感じ取っていた。

アルフ（・・・・・・まずいね・・・この男・・・今の聖時じゃ荷が重いよ・・・・・・正体がバレるけど、いざとなればあたしが出るしかないか・・・・）

そんな風に考えていると、隣に居る土郎が、今にも飛び出そうとしている感じだったので、アルフはそんな土郎に釘を刺すために声をかける。

アルフ「・・・土郎、飛び出して聖時の加勢をしようなんて思んじ

やないよ。」

アルフの言った言葉に、一瞬驚いた顔をする士郎。

士郎「……………なんでわかつたんだよ……」

アルフ「あんたがそんな風な顔をしてるからだよ。」

士郎「……………止めても無駄だぞ。俺は……聖時の加勢をする！」

士郎は険しい顔でアルフに言い放つ。

アルフ「止めときな。今出て行ったら、対峙している聖時の邪魔になるよ。」

アルフの言葉を聞き、士郎はアルフの言っている言葉ももつともだと思つ。

今、聖時と男は一触即発の状態、ここで外野の人間が要らぬことすると、聖時の妨げになるかもしれない。

そう思つた士郎は何も出来ない自分が悔しくなり、拳を痛めんばかりに強く握つた。

そんな状態の時、聖時と対峙している張が聖時に言い放つた。

張「俺は最近、少し物足りなさを感じていたんだ。狩る元神霊、元神霊……………みんな逃げるだけで、俺の狩りの獲物としては十分だった……………」



張はつまらなそうな顔で、これまでの事を話す。

張「俺としては狩りの獲物は、やはり俺に噛み付くぐらいの生きがあるやつで無いと張りが無い・・・しかし、今まではそう言ったヤツが現れなかった・・・しかし！」

張は一旦間を空けた、そして次の瞬間とても面白そうな物を見つけたような顔をして話し始める。

張「はっはははははっ、今日、その生きのいい、殺し甲斐があるやつが現れた！くくくくくくつ、おい小僧！簡単には殺されるなよ？俺をなるべく長く楽しませるんだぞ！」

張はそう言っつて再び笑い始めた。聖時はそれが理解できないという顔を一瞬すると、次の瞬間厳しい顔をして張に言い放つ。

聖時「・・・あにく・・・お前の悪趣味な趣味に付き合っつもりはない！」

張「いいね、その意気、その意気・・・それがいつまで続くかな！」

張はそう言っつて聖時に手刀で突き殺そうと、繰り出す。

聖時はそれを身をひねってかわし、その反動を殺さず、そのまま利用し、張の背後に回りこみ、持っていた鉄パイプを張の背中に叩き込む。

聖時「ひてんみつるぎりゅう飛天御剣流、りゅうつかんせん龍巻閃！」

聖時の技を喰らい、倒れこむ張。

聖時はそれを振り向いて見つめる。

才人「……やったのか？」

才人の声が辺りに響く。

聖時もこれでおしまいだと思ったが、次の瞬間、辺りに張の笑い声が響く。

張「くつくくくくくくくくくくつ、やはりいいな、お前。」

張は楽しげな顔をしながら立ち上がった。

聖時「き……効いてない？」

聖時の疑問に答えるように張が言う。

張「いや、たしかに少しは効いたが……あいにく、俺はトライバルエ下位元神靈ントでね……」

聖時「トライバルエ下位元神靈？」

張「ああそうさ。トライバルエ下位元神靈は普通の人間よりも頑丈で、力も強く、速い。そしてなにより……」

張はそついいながら構える。心なしか、張の右腕が光って見える。

張「トライバルエ下位元神靈は曲りなりにも、イクシード超越技が使えるんだよ！」

そついうと、張の右腕が光り輝きだす。

張「超越技！イクシード薄刃斬光！はくしんざんこう！」

張は光りだした右腕を振るう。腕から出た白く光る平べったい帯状の物が、鞭のように聖時に襲い掛かる。

聖時「クツ！」

聖時はそれをかわす。

張「よくかわした！だがそれで安心するな！」

張は光つてる腕を小さく振るい斬薄刃光はくしんざんこうを操作する。

斬薄刃光はその操作で軌道が変化して、今度は聖時の背後から、聖時を貫こうと襲い掛かってくる。

聖時「！」

聖時はそれを感じ取り、持っている鉄パイプで防ごうとするが、鉄パイプは切り落とされ、斬薄刃光はくしんざんこうは聖時の右太腿を切り裂く。

聖時「グッ！」

聖時は痛みで顔をゆがませる。

張「狙いバツチりだな。これでチョコマカ動き回れんだろう。」

聖時は切り裂かれた太腿を押さえながら、張を見据える。

アルフ「まずい……あの足じゃあ……あの変幻自在の動きをかわしきれない。」

アルフは顔を青くしながら言う。

士郎はそれを見て、張へ飛びかかろうとするが、その士郎の肩を剛が掴んで止める。

剛「士郎……なにするつもりだ？」

士郎は剛に向かって、険しい顔をしながら言う。

士郎「決まってるだろう！聖時に加勢するんだ！」

剛「やめとけ！さっきの動き見ただろう？……俺たちなんかじゃ行っただって足手まといになるだけだ！」

士郎「けど！」

そんな言い合いをしている二人の前の地面が削れる。張の斬光薄刃はくしんせんとうが地面を削ったのだ。

士郎・剛「……………」

二人は青い顔をして黙り込んで張の方を見る。

張「ギャラリィは黙ってそこで見ていろ！そこから一步でも動いて邪魔をしたら、順番を変えて今すぐに解体してやるからな！」

張の殺気に当てられ、士郎どころかアルフも押し黙り、動かなくな

る。

張「さうて。」

張は動かなくなつた士郎達を見た後、聖時に向き直る。

張「それじゃあ・・・続きといこうか？これから先は出し惜しみしてると、死ぬ事になるぞ？」

聖時「？」

張「・・・お前・・・魔術師か、魔導師だろう？・・・お前から感じるテラは魔力を帯びた者と同じ特徴がある。」

聖時「！」

聖時は驚愕した顔をする。

聖時（こいつ・・・俺が魔力を持っている事に気付いてる！）

聖時は驚きながらも張を見据える。

張「出し惜しみせず、デバイスなり、魔術なりを使ってこいよ？それとも・・・」

張はこちらを見ている士郎達を見て言う。

張「誰かが死なないと、現状がわからないか？」

張はニヤ／＼とした顔で士郎達を見る。

聖時はそれを聞いて、頭の中にかつて見た惨劇の記憶が蘇る。

聖時（空港・・・そこで自分を庇って切り裂かれる母さん・・・同じように友達である才人を庇って倒れる妹の桃華とうか・・・また・・・あの時のように、自分の目の前で母さんや桃華のように、人が・・・自分の大切な人たちが死ぬ？・・・）

そう思った瞬間、聖時の中の何かが膨れ上がり、外に吐き出される。

聖時は右手を突き出し、張に向ける。

聖時「火炎呪文！」

聖時は火炎呪文メラで張を攻撃する。

いつもと違い、火炎球は張へとまっすぐに飛んで行く。しかし、張はそれを斬薄刃光はくしんざんこうで防ぐ。

張は聖時の方に向き直る。

聖時はそんな張に、鋭い殺気を叩きつけながら叫ぶ。

聖時「士郎達に手を出すな！指一本でも出してみる！ただじゃすまないからな！！」

張に向かって怒り顔で吼えるように怒鳴りながら、左手に付けてある指輪のデバイスを刀の姿に戻し、それを抜く。

そして、そんな聖時を見て張は満足そうな顔で言い放つ。

張「なんだ、そんなツラもできるんじゃないか。出し惜しみして人が悪いな。」

そんな事をいいながら構える張。

張「殺す人間の後がつかえてるし、そろそろクライマックスと行くか。」

そう言つて張は再び、はくしんざんこう斬薄刃光を放つ。

聖時はそれをかわそうとするが、太腿のキズで動きが鈍り、転げるような感じでかわす。

しかし、張はそんな聖時にさらに追い討ちをかける。

聖時はそれをさらに転げるようにか続ける。

何回かの攻撃の後、張ははくしんざんこう斬薄刃光を引き戻す。

張「……………気に入らないな……………その目。」

張は絶体絶命の状況でも、張を見据えるような目をみて腹を立てる。

張「状況……わかってるのか？絶対絶命のピンチなんだぜ？それなのに、お前からは、そこにいるガキ共を守ろうと言う気概しか感じ取れない……………他人の事気にしてる場合じゃないだろ。もつと相手を食い殺す、獣の様な気概で来い！……………そうでなくちゃおもしろくない。」

張が聖時に向かって言い放つが、聖時は息を整えながら、張が言った事を無視するような感じで何かを言う。

聖時「ハア……………ハア……………ハア……………守るんだ……………僕は……………もうあの頃のような、何も出来ない小さな子供じゃない……………」

守るんだ……そのために、この二年間頑張ってきたんだ！」

そんな聖時の言葉を聞き、張はハアとため息を漏らしながら言う。

張「……まだ状況がわかってないみたいだな……俺は獣のような殺気のコモった剣と斬り合いをしたいんだ……そんな他人を庇うなんて気の抜けた剣じゃ……白けてしまう。」

張は再びため息を再び吐くと、聖時に向かって言う。

張「いいぜ！そっちがその気なら、俺は意地でもさつき俺に見せた殺気を帯びた目にしてやる……そうだな……たとえば、そこにいるガキ共をバラバラに解体するってのはどうかな？」

そう言って張は士郎達の方に向く。

アルフ「！」

アルフは張がこちらに狙いを変えてきたことを感じ取り、後ろにいるふたば達を庇うようにしながら構える。

張が斬薄刃光はくじんこうを放とうを腕を振り上げると聖時のほうから雄たけびのような声が聞こえた。

聖時「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
お！ー！」

聖時はデバイスの刀を構えながら、張に突っ込む。

張「いい殺気だ！だがこれで終わりだ！」



張は士郎達に向けた光（斬薄刃はくじんざんこう）をそのまま聖時に向かつて放つ。

聖時はそれを張に向かつて飛びながらかわす。

張「もらった！」

張は斬薄刃光はくじんざんこうを操作し、今度は背後から串刺しするようにする。

聖時は空中にいたのでこれをかわすことは出来ないと思っただ。しかし……

聖時「おおおおお！」

聖時は額に紋章のような物が浮かび上がらせ、後ろから来た斬薄刃はくじんざんこう光を身をひねってかわす。

張（な……なんだあの超反応は？それにあの紋章は？）

張の顔が驚愕する。

聖時「飛天御剣流龍巻閃・旋ひてんみつるぎりゆうりゆうつかんせん つむじ！！」

聖時はひねった回転力を利用しながら、張に龍巻閃・旋りゆうつかんせん つむじを叩き込む。

ドッ！

聖時の一撃を喰らい、張は倒れる。

そんな張を見ながら肩ひざを付き、息を整える聖時。

聖時「ハア、ハア、ハア」

そんな聖時と倒れた張を見ていた張の手下の二人は、張を倒した聖時を見て逃げ出して行った。

そんなやり取りを見て、アキがつぶやく。

アキ「・・・終わったの？」

アキ達は周りを見渡す。

周りには自分たち以外は、聖時に伸された男たちが倒れてるだけである。

当面の危機が去った事を感じ取ると、アキ達は緊張を解いた。

才人「ハア~~~~、助かった~~~~。」

才人の声が当たりに響く。

そんな才人の声が響くのと同時に、今まで状況を見ていただけだったふたばが、ケガをして肩膝を付いている聖時に駆け寄る。

ふたば「聖時！」

そんなふたばの声に反応して、土郎達も聖時に駆け寄る。そして、それを見ながらピティはこの後のみんなにする状況説明をどうするかと、考えていた。

「おまけコーナー」

「ピピティと」

「ユニの」

「二人「おまけコーナー」」

「ピは、いやってまいりましたおまけコーナーの時間です。司会進行役のピティだよ。」

「ユニ解説のユニです。」

ビツ「アシスタントのビツキーです。そして……」

聖「今回だけのアシスタント2号の聖時です。ってなんで今回だけ僕をアシスタントにするんだよ？……なんか嫌な予感しかないんだけど。」

ビツ「気のせいじゃない。ま、そんな事より恒例のゲスト召還行ってみよう。コシヨウ、パツ、パツと」

ビツ「ハツ……ハツ……ツクシユン！」

パツ！

ピ「召還成功。今回のゲストは、料理の腕はシャル並みで世間知らずの黒神のクロです。」

ク「世間知らずじゃありません！……ま、とにかく、みなさんよろしく願います。」

ピ「さて、今回の話を振り返っての一言をどうぞ。」

ク「え〜と……主人公パワー炸裂？かな……」

ユ「まあ……たしかにそうですね……聖時さんの力の一端が垣間見れたわけですね……」

ク「そうですね。それにしてもあの張とか言う下位元神霊トライバルエンド、元神霊もとみつたまのテラを結構取り込んでましたから、下位元神霊と言えど、かなりの力を持ってました。それを初の実戦で破るなんてすごいです。」

ピッ「そうですね。聖時さんカッコよかったですよ。」

聖「あ・・ありがとう／＼／＼」

ピ「はいはい、照れてないで、今回の補足行くよ。今回は聖時が戦った、トライバルエンド下位元神霊やクロが出てくる作品、黒神の事に付いてだよ。」  
ユ「くるがみ黒神は、2004年冬より「ヤングガンガン」(スクウェア・エニックス)に連載されている漫画です。原作は林達永イム・ダリョン、作画は朴晟佑パク・シユウ。脚本協力として川美我チョン・ミヤが参加(第22話から)。新伝奇を謳ったアクション漫画です。8巻までの累計発行部数は93万部を超えております。2009年1月から2009年6月までテレビアニメが放送された。ただしストーリーや設定などに若干の変更点があり、この作品では完結したアニメ版の方のストーリーを中心にやっていくみたいです。」

ピ「相変わらずの長い説明、ご苦労さん。さて普段だったら補足の後、このまま終わらせる形だけど、今回はゲストのクロに用がある人がいるみたいだから呼ぶよ。」

ク「え、クロに用がある人ですか？」

ピ「うん。」

聖「だれなんだ。ピティ？」

シャ「それはわたしよ。」

聖「ゲッ、シャマルさん。」

シャ「なに聖時くん、さっきの“ゲッ”は。」

聖「あ、いや……その……」

シャ「まっいいわ、それよりも、私が今回用があるのはクロちゃんの方よ。」

ク「はい、なんの用ですか？」

シャ「クロちゃん……あなた私たちが今度作る“料理研究会”に入らない？」

ク「へ？」

聖「なんですかその料理研究会ってのは？」

シャ「わたしね……前料理バトルをした芹さんと話し合ったの……このまま個人で料理の腕を磨いても、料理の腕は上がらないんじゃないかと……そこで同じように料理の腕で悩んでいる人たちを集めて料理の勉強をしようと思ったの。ほら“三人よれば文殊の知恵”って言うじゃない。」

ユ「え、ええ、たしかに言いますけど……」

ピッ「……ちなみに後、どんな人を誘うんですか？」

シャ「え」と、まず芹さんでしょ。」

ピ「ゲッ……芹を！」

ユ「芹さんって……シャマルさん並腕の人を誘う時点で、すで

に間違っていると思いますが……」

シャ「後、このクロちゃんでしょ。」

ピ「クロって……たしか料理の腕……かなり壊滅的だった気がするんだけど……」

ユ「ええ、たしか黒神の公式ガイドブックの巻末特別編マンガで、クロの料理を食べたナム（黒神登場キャラ、本編未登場）がたった一口で気絶するぐらいの腕です。」

シャ「あと“アルトネリコ2”からレーヴァテイルの3人……ルカさんにクローシエさん、ジャクリさんの三人。」

ピ「え……あの三人ってたしかあの前に他の作品の作者さんに送った料理のレシピの元祖を作った人ただよね。」

ユ「……ええ、たしかそうでしたね……。」

シャ「あと……特別に本来なら設定だけで登場しない“るろうに剣心”から、かみやかおる神谷薫さんと呼ばうと思うの。」

ピ「か……神谷薫ってたしか……」

聖「ああ、家のご先祖さまで、たしか料理の腕は……」

ピ「たしか同じ作品に出ていた左之助が、その料理を口にしただけで、毒だと勘違いするぐらいの腕でしたね……」

ピ「どいつもこいつも、料理の腕がからきしの、デストロイ料理人

じゃないの！」

聖「なんかスツゴク嫌な予感がしてきた。」

シャ「あ、そうだ！あと他のクロス作品に出てる人なんだけど、彼女の事も誘ってみようかしら。」

ピ「あの・・・それってもしかして・・・名前の最初に“リ”が付く人のことじゃ・・・」

シャ「え、そうよ。良く知ってるわね。」

四人「「「「・・・」」」」

ピ「あたし・・・なんだかこの世の終わりが来るようなイメージが頭の中に浮かんだよ・・・」

聖「・・・奇遇だな・・・僕もそのイメージが浮かんだよ・・・」

ビツ「・・・イメージと言うか・・・実際そうなくてもおかしくないと思いますけど・・・」

ユ「・・・今言ったメンバーで作った料理って・・・（ガクガク、ブルブル、）怖すぎて想像できません。」

シャ「あ、そうだ！今回、聖時君がここに出るって聞いて、お祝いの料理を持ってきたの。」

シャマルは異様な臭いを放つ料理を二つ差し出す。



ピ「な……なにこの臭い……」

ユ「た……たまらない……」

ビツ「し……死ぬ……」

シャ「この前私の友人と協力して作った料理を、今度は芹さんと一緒に改良して料理したの。名前は“混ぜるな危険バージョン2”と“バルバトスープ?世”よ。」

聖「あの〜このスープ、中から声が聞こえてくるんですけど……  
「ぶるうあああああ」って」

ピ「なんだか前に作者が食べた時より聞こえてくる声の大きさが、  
心なしか大きくなってるとるような……」

ユ「しかも、スープの中から何かの目が、こっちを睨んでるように  
も見えるんですけど……」

ビツ「……というか、わたしにはこのスープ自体が生きてるよう  
に見えるんですけど……」

聖「……これを食べてか?それは僕に死ねって事ですか?」

ピ「大丈夫、たとえ死んでも、あの腐れ作者を生き返らせたあの“  
ジャクリディナーセカンドの改良版”ジャクリディナーサード“が  
あるから!」

聖「そんな物で生き返らなきゃならないの?世界樹の葉とかないの  
?」



ビツ「（涙目になりながら）がんばって下さい聖時さん。どうか死なないで。」

シャ「うふふふつ、聖時くんは本当にわたしの料理を美味しく食べてくれるわね。作りがいがあるわ」

三人「……………」

芹「シャマルさん。」

シャ「あら、芹さん。」

芹「そろそろ、メンバー集めに出發しますよ。」

シャ「え、もうなの？」

芹「ええ。」

シャ「そっか、それじゃ私達はそろそろ行きます。クロちゃん一緒に行きましょう。」

ク「はい、メンバー集めて料理の腕を磨き、啓太さんにクロの料理、食べてもらおうんです。」

シャ「その意気よ。それじゃ聖時さん、ちゃんとお料理食べてくださいね。あとで感想聞きに来ますんで。それじゃあ。」

芹とクロを連れてスタジオを出て行くシャマル。そして三人が出て行ったとほぼ同時に聖時が料理を食べ終える。

聖時「じゅ……じゅちそう……さま……でした……」

バタツ！

ユ「聖時さん！」

腕を取り脈を計る。

ユ「……………臨終です……………」

チーン

ピ「つてばかな事やってないで、とつとこの“ジャクリディナー  
ソード”を口にねじ込むわよ」

聖時の口を無理やり開けて、ジャクリディナーソードをねじ込む。

聖「……………！」

突然目をカッと開く聖時。

聖「ぎゃああああああああああああああああ！！」

バタツ！

ピ「あっ、また倒れちゃった。」

ユ「……………とりあえず一命は取り留めたみたいですね。」

ピツ「……みたいですね……それにしてもシャマルさん……まさか本当に他の作品にまで行ってメンバー集めるんでしょうか？」

ピ「かも知れないわね……。」

ユ「山田花太郎さん……もし読んでいたら、そちらに料理研究会の人たちが勧誘に行くかもしれません……もしかしたらその時、料理を作るかもしれないから、今この場で謝罪します。すいません……あとで回復アイテム”復活の杖”（死者復活呪文ザオラルの効果があるドラクエのアイテム）を送るので使ってください。」

ピ「……なんだか屍の山が出来そうだね……。」

ピツ「そんなまさか……。」

三人「……」「……」「……」

ピ「と……とにかく今回はこれまで。」

ユ「それではみなさん」

三人「まったね〜」

ユ「……あとで料理研究会に対する対策本部を立ち上げなくちゃ……。」

第14話 VS（バーサス）（後書き）

シヤマル率いるデストロイ料理人の集団料理研究会・・・  
この先、一体どんな騒動を巻き起こすのか・・・  
とりあえず、死人を出さないようにして行こうと思います。  
・・・大丈夫かな・・・俺・・・

第15話 風の過去と水瓶座（アクエリアス）の始動（前書き）

すいません。

リアルが忙しくて、更新が遅れました。

本当にすいません。

では第15話です。

## 第15話 風の過去と水瓶座（アクエリウス）の始動

第15話 風の過去と水瓶座アクエリウスの始動

ゴールデンウィークから数日後の、聖時の別荘の中庭。  
ここで聖時は、いつも通りの魔法の修行をしていた。

少し前にある的に向かって手を出し、魔力を手に集中させて呪文を唱える。

聖時「火炎呪文！」

ポン！

聖時の手から、指先大の火の玉が出て、そのまま地面に落ちる。

聖時「……………また失敗か……………」

ピティ「ピティちゃん、キ〜ク！」

聖時「グフツ！」

ピティのキックが聖時の横顔に突き刺さる。

ピティ「集中力が足りない!!!」



ピティにけられた横顔をさすりながら聖時は、側をふわふわ飛んでいるピティに言う。

聖時「だから、なんで蹴りを入れるんだ！」

ピティ「愛のムチよ！」

聖時「なにが愛のムチだ！」

ピティ「なに文句言ってるの！聖時のことを思ってやってるんじゃない！」

???「まあまあ、二人とも落ち着けよ。」

中庭の入り口から二人に近づいてくる人物に声に気付き、そちらに顔を向ける。

ピティ「土郎じゃない。」

聖時「土郎。呪文の契約はうまくいったか？」

聖時は近づいてくる土郎に先ほどまでしていた、呪文の契約についての成果を聞いてくる。

土郎「うーん、それがな……うまく契約できた呪文は、3つだけなんだ。」

土郎は肩を落としながら落ち込んだ顔で言った。

聖時「え……三つだけ?……土郎、ちなみに聞くけど、

契約を結ぼうとした呪文は何個？」

士郎「……………15口ほど……………」

それを聞いたピティは驚いた声で言った。

ピティ「え！それだけの契約をやったのに、成功したのが3つ！」

士郎「ああ……………はあく、魔術の方は“強化”しか使えないけど、魔法の方だったらもしかしたら……………と思っただけだな。」

そう言っつて少し落ち込み気味の士郎に聖時が声をかける。

聖時「……………ねえ士郎、契約に成功した呪文つて何？」

士郎「え、守備力増呪文と攻撃力倍増呪文と加速呪文だけ……………」

聖時「それ、唱えて、ちゃんと発動した？」

士郎「ああ、契約後、使えるようになってるか確かめる為に唱えてみてが、ちゃんと発動したぞ。」

聖時「ならいいじゃない。僕なんか、契約は成功したけど、魔法のその殆どがうまく使う事が出来なくて、失敗ばかりなんだから……………なんか自分で言っつて、悲しくなってきた……………」

今度は聖時が肩を落として落ち込む。

士郎「き……………気を落とすなよ、この前ちゃんと使う事が出来ただから、ちゃんと使えるようになるよ、な！」

落ち込んだ聖時に、今度は士郎が励ます。

聖時「ああ……ありがとう。」

聖時は士郎の言葉を聞き、少し元気を取り戻す。

士郎「……しかし、あの事件の後、聖時に魔法の事や別荘の事を聞いてから数日……教えてもらった別荘のおかげで、鍛錬の間を多く使う事が出来て、正直言つて助かつてるよ。」

そう、聖時はあの事件……トライバルエンド下位元神霊の張との戦いの後、剛達を初めとする、あの場に居た全員に魔法の事と別荘の事を話した。

張との戦いの後、剛たちはまず警察に連絡しようとしたが、聖時はその時、自分たちの名前は伏せて、匿名希望でこの場所だけを教えるように言った。

次に聖時の傷を見てもらうため医者に行こうと、ふたば達が言ってきたが、聖時はこれを拒否、自分で治療するといい、士郎に肩を貸してもらいながら家に向かつてもらうことにした。

この時、聖時は見られた魔法の事や、デバイスの事を説明する為に、その場に居る全員についてきてもらった。聖時は普段から、緊急ように持っているキメラの翼で全員を家まで運び、自分の部屋にある別荘まで通した。そこで、回復アイテムで、ケガがある自分とピテイを治療してから、説明に入った。自分が2年前の空港爆破のテロで、爆破をやった犯人らしき人物に母や妹を目の前で殺され、自分の無力を呪ったこと。そのために強くなろうとした事、行方不明になった父の部屋でこのデバイスとアバンの書と飛天の書を見つけたこと、それらを読みながら、裏山で見つけたこの別荘で修行を始めたこと。別荘での1日は、外の一時間である事、そしてユニやなの

は達にこの事を知られないようにしてる事などを話した。

聖時はみんなに話をした時のことを思い返す。

〈事件直後の別荘〉

聖時は猛たちを初めとする全員に話をした。  
話した後、その場は沈黙が支配していた。

猛「使い魔って……」

剛「魔力をもっている人にしか見えないうって……」

琴乃「それが見えるって事は……」

明日香「私たちにも魔力があるんだ……」

アキ「魔法って……」

ふたば「その鍛錬を別荘で……」

才人「……」

士郎「……魔法か……」

アルフ「……」

それぞれが聖時の話した話を聞いて、言葉を漏らしていた。

そんな中、アルフが聖時に聞いてきた。

アルフ「ねえ聖時、あんたがなのは達はこの事を話してないのは、鍛錬の目的が、敵討ちだからなんじゃないかい？」

アルフは厳しい目つきで、聖時に質問してきた。

アルフ「さつき空港テロの犯人の事を話していた時、あんたから凄まじい殺気を感じたんだ。あんな殺気を放ちながら人の事を話をする人が力を求めるのは、十中八九、敵討ちだろ？」

アルフの言葉を聞いて、聖時は押し黙った。

アルフ「聖時、あんたが敵討ちのために力を求めて鍛錬してるんだったら・・・悪いけどこの事をなのは達に話して、無理やりにでも止めるよ。」

アルフの言葉を聞き、しばらく考え込んだあと、聖時は口を開いた。

聖時「・・・正直に言うと、母さんと桃華を殺したテロリストは許せない・・・鍛錬してるのも、敵討ちをしたいからと言う気持ちがあるからなのかもしれない・・・けど、何より一番強い気持ちは、あの時、震えて何も出来なかった自分が許せないと言う気持ちなんだ・・・だから僕は強くなるうとしたんだ！・・・  
・強くなって、今度こそ誰かを守り、救えるようにな人になるために！」

聖時は今言った言葉が嘘ではないと言わんばかりの強い瞳で、アルフを見た。

アルフはしばらく、聖時の目を見た後、ヤレヤレと言わんばかりの態度を取って聖時に話しかけた。

アルフ「……………わかったよ。今のあなたの言葉と瞳を信じて、この事は黙っといてやるよ。」

聖「アルフ……………」

アルフ「けど良いかい、もしあんたが力を間違った使い方を使用ものなら、今度こそ、なのは達に言っただけでも、止めさせるからね。」

聖時「ああ。」

聖時はアルフの言葉に力強く返事をした。

ふたば「大丈夫だよ、アルフ。」

二人の会話を今まで聞いてたふたばが話しかけてきた。

ふたば「聖時はきつと力を正しい事に使ってくれるよ。今日、私を助けてくれたように。だから大丈夫だよ、きつと。」

ふたばは微笑みながらアルフに言った。

アルフ「……………ああ、そうだね。」

アルフもそう言いながらふたばに微笑むと、今度は聖時に向けてこう言った。

アルフ「ふたばがこうまで言ったんだから、あんたはこの言葉を裏切るんじゃないよ!」

聖時「ああ、もちろんだよ!」

聖時は力強く返事した。すると、今までただ聞いていた猛たちが、聖時に次々話しかけてきた。

猛「聖時・・・今、正直言うと、まだ頭の中が混乱して、うまくまとめる事が出来ないけど、聖時たちの話を聞いて、とりあえずこの事に関しては聖時達を信じて、秘密にしとくようにしようと思った。だから俺はこの事を秘密にするよ。」

剛「俺もだ、最初は胡散臭いと思っていただけ、ふたばさんが聖時のことを信じてる気持ちだが、こちらにも伝わってきた・・・人にかつまで信用されてるんだったら、俺も信じてみようと思う。だからこの事は、俺も信じて黙ってる事に決めた。」

琴乃「私も信じてこの事は秘密にしておきます。私も聖時さんは悪い人には見えませんし、騙してる様にも見えませんから。」

明日香「私も秘密にしといてあげる。聖時お兄ちゃん悪い人には見えないし、それに・・・魔法なんてかつこいいじゃない」

アキ「私は・・・正直言うと、今までこんな事を幼馴染の私に隠して黙っていた事に少し腹が立ってるの。でも、今回、正直に話してくれたから今まで通り、ピティの件を含めて、黙っておいてあげる・・・二人とも、それでいいよね。」

そう言つてアキはふたばとアルフに話を振る。

ふたば「うん」

アルフ「ああ。」

そう言つて二人は返事をした。

聖時はそうして、才人以外の方が返事をしてくれたので、次に才人の方に顔を向けた。

才人は複雑そうな顔で、押しだまっていた。

聖時「才人……………」

聖時は才人に声をかける。

才人「……………」

才人はしばらく黙つたままだったが、しばらくして口を開いて話始めた。

才人「……………なあ、聖時……………お前は、あの事件から2年間……………その事から逃げずに、ずっと頑張つて立ち向かつていたんだな……………俺……………正直に言つと事件の事から逃げずにいたお前がうらやましいよ……………俺は……………今でもあの事に関しては、自分は何の力のない子供だったから、何も出来ないのは仕方がない、力がないから仕方がないつて、ずっと言い訳して2年間……………何もしてこなかったんだ……………」

聖時「才人……………」



才人「大丈夫、この事はピティの件も含めて秘密にしといてやるよ。」

才人は複雑そうな顔を聖時に向けて言った。

聖時「・・・・・・・・・・・・・・・・」

この後、士郎が、「聖時が秘密を告白したのに自分だけ黙ってるのは不公平だよな」と言っつて、魔術のことや、自分が魔術使いだと言うことを、聖時達に告白した。

その事に、聖時達は驚いていたが、才人は最後まで複雑そうな暗い顔をしていた。

聖時は回想を終え、才人がなぜあんな顔をしていたのか思索し始めた。

聖時一（才人・・・・なんで、最後まであんな暗い顔してたんだろっ？）

そんな風に考えてると、士郎が声をかけてくる。

士郎「聖時・・・どうしたんだ？」

士郎の声でハツとなり、思考を中断する。

聖時「あ、いや・・・なんでもない。」

士郎「？」

聖時「それより、今日も猛達、来てるのか。」

聖時は、思考を切り替え、猛達の事を士郎に聞いた。

士郎「ああ、お前が明日香ちゃんにあげた、瞬間移動呪文ルイラが込められているあの・・・風の帽子”を使って出雲から来てるよ。今度は、別荘内にゲーム機を持ち込んで、みんなでゲームをやってるよ。」

聖時はそれを聞いて、少し呆れた顔で言った。

聖時「ゲームって・・・ここは遊び場じゃないんだけどな」

士郎「まあ良いじゃないか、ここでは時間的ゆとりが作れるんだから、外で忙しすぎて遊ぶことが出来ない剛や、家事や通院をしている琴乃には、遊び場としてはちょうど良いんじゃないか？」

ピティ「固い事、言わない、言わない。にぎやかでいいじゃない。」

聖時「・・・ま、たしかににぎやかでいいね。・・・みんなは居間に？」

士郎「ああ、そうだけど。」

聖時「じゃあ、少し顔を出してくるよ。」

士郎「待ってくれ、俺も行く。」

そう言つて、歩き始めた聖時に追いつき、二人は猛達が集まっているであろう別荘内の居間に向かった。

別荘内に入り、居間へと歩いて行くと、二人の耳に居間に居る猛達の声が聞こえてきた。

猛「だ〜、キ〇グボ〇ビーに取り付かれた〜！」

明日香「やった〜、目的地に一番乗り〜」

ゲームをやつてる猛たちの声を聞きながら、聖時は居間の扉前に着き、扉を開ける。

中は、カーペットが敷き詰められ、大きなテレビ画面の前でクツシヨンに腰かけながらゲームをやっている猛、明日香、才人、アキ、そんな4人の後ろにあるソファアに腰をかけながらそれを見ている剛、そして、同じくソファアに腰かけながら、テーブルを持ち込んだクツキーとお茶を広げて話している琴乃とふたばが居た。

聖時「なんだ、ふたば達も来てたんだ。」

聖時の声を聞いて、猛たちが聖時の方を向く。

猛「お、聖時。おじゃましてるぜ〜。」

剛「すまん、また大勢で押しかけてきて。」

琴乃「聖時さん、お邪魔してます。」

明日香「聖時お兄ちゃん また来ちゃった」

ふたば「聖時、お邪魔してるね。」

アキ「聖時、悪いわね、また来ちゃって。」

才人「よお聖時、また来たぜ。」

聖時は才人の顔を見た。そこには、この前のような暗い顔はなかった。

聖時はそれに安堵し、みんなに話しかけた。

聖時「いらっしやいみんな。」

そう聖時が言っている側で、ピティが周りを見て、アルフがいない事に気づき、みんなに聞いた。

ピティ「あれ、アルフは今日は居ないの？」

ふたば「え、アルフ？」

士郎「そう言えば、今日は見かけてないな。」

アキ「アルフだったら今日はフェイトさん達と出かける用事があるって言ってたよ。」

聖時「ああ、用事がるのか。」

聖時はどんな用事なのかと考えながら、ふたばの隣に座り、ピティはテーブルに着地、士郎は剛の隣に座った。

ピティ「あ、クッキー」

ピティがテーブルに広げてあるクッキーを見て言う

聖時「見た所、手作りみたいだけど、だれが作ったの？」

ふたば「えっと、実はさつき台所を借りて、私と琴乃さんと二人で作ったの。」

琴乃「ええ、よかつたら三人共どうぞ。」

琴乃は聖時とピティ、士郎に作ったクッキーを進めた。

聖時「それじゃ……」

士郎「お言葉に甘えて。」

ピティ「いただきます」

そう言いながら、三人はクッキーを口にした。

ピティ「美味しい」

聖時「……………うん、美味しいよ。」

士郎「ああ。」

聖時の言葉を聞き、ふたばが顔を綻ばせる。

ふたば「本当？よかった」

琴乃「よかったね、ふたばさん。」

ふたば「うん」

そう言っつてうなずくふたば。

それを見て、嬉しそうな顔をする琴乃。

猛「だ〜、借金が10億越えた〜！」

突然、猛の声がしたので、全員がそちらに顔を向けた。

剛「こりゃ、猛の最下位決定だな。」

士郎「猛は冒険しすぎる傾向があるからな〜」

ピティ「猛、へたすぎ〜。」

琴乃「猛さんたら。」

そんな風に全員がゲームをしている猛たちの方に視線を向けると、隣にいるふたばが聖時に話しかけてきた。

ふたば「聖時。」

聖時「ん、なに。」

話しかけてきたふたばの方を見る聖時。



聖時はテレテ少し視線をそむける。

ふたば「ラキの時もそう、助けを求めた時に現れた・・・聖時、私にとつて聖時は私を守ってくれる騎士ナイトだよ。／＼／＼／＼／＼／＼」

聖時「ふ・・・ふたば。／＼／＼／＼／＼」

二人は顔を赤らめながら、互いを見つめていたが次の瞬間、ピティの声が二人にかけられる。

ピティ「あの〜、そう言う事は、二人っきりの時にしようね〜。」

聖時「うわ!」

ふたば「きゃあ!」

聖時はピティの声に驚き、周りを見る。

ピティをはじめ、みんながニヤニヤ笑いながらこちらを見ていた。

猛「やれやれ、お暑い事で。」

剛「猛、からかうのはよせ。」

琴乃「／＼／＼／＼／＼／＼／＼」

明日香「ヒュー、ヒュー、お暑いよ二人とも。」

士郎「・・・まあ、恋愛は個人の自由だが、場所を考えて欲しいな〜。」



アキ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

才人「いや、いいね。うらやましいぞ。聖時。」

ふたば「ノノノノノノノノノノ」

聖時「あ、いや・・・・その・・・・」

聖時は話題を逸らして、何とかこの場を凌ごうとした。

聖時「あ、そうだ、アルフのやつが居ないなんて、珍しいよな。」

フェイトさんと出かける用事があるとか言ってたけど、なにかな。」

聖時はわざとらしく別の話をし始める。

ピティ「あ、誤魔化した。」

聖時「うるさい！」

ピティ「ま、いいけどね、それにしてもアルフの用事ってなんだっ  
たんだろう。」

そんな風に、ピティが言うと、黙っていたアキが思い出すように言  
った。

アキ「もしかしたら、デジエルさんの事かな？」

聖時「え、デジエルさん？」

アキ「うん、デジエルさん、ケガの治りが思った以上に早くて、予

定より早く退院できたの。」

聖時「へえ、デジエルさん、退院したんだ。」

アキ「うん、それでね、この前、フエイトさんがデジエルさんに話していたことを聞いたの。「退院したら話す事がある」って。」

聖時「なんだろうな、話って」

聖時はその事に関して思索しながら、何も無い空間に視線を投げた。

ここは次元の海に浮かぶ時空管理局本部。

この休憩所でアルフは悩んでいた。

悩みの原因は聖時のことである。

アルフは聖時が魔法の事柄に近づき、真の紋章に接触する危険性をなくすために聖時の監視兼護衛をしていたのであるが、この間の事件で聖時がすでに魔法を覚え、こちら側に片足を突っ込んでいる事を知った。さらに、アルフはその事をなのは達に秘密にするよう聖時達に約束したのである。

アルフは聖時が自分たちを信頼して話してくれたので、無下にすることだ出来ずに対約束をしてしまった。だが、そうすると自分に課せられた任務の報告を偽らなければならない。つまり、ウソを付かなければならないのである。長い付き合いになるなは達、そしてなにより、自分の主のフェイトを騙すのはとても心苦しい。しかし、だからと言ってありのままを報告をすると、聖時の信頼を裏切る事になる。

一応、アルフは聖時が使い魔のピティの存在をふたばや猛達にバレたので、その事を話して、秘密にしてもらおう事を言い、ふたば達はその事を了承した事だけは報告したが、それ以外の事に関しては話していない。

アルフはフェイトに話すか、聖時の信頼を裏切らないか、その事が

頭の中でぐるぐる回っていた。

そんな風に悩んでいたアルフに、アルフを探していたフェイトが話かけてきた。

フェイト「あ、居た居た、アルフ、こんな所に居たんだ。」

アルフ「フェイト。」

声をかけてきたフェイトに視線を向けるアルフ。

フェイト「もうすぐ、デジエルさんとシグナムの模擬戦、始まるよ。」

アルフ「あ、もうそんな時間なんだ。」

アルフは自分がだいぶここで悩んでいたんだなと思った。

今日はデジエルのデバイスの出来具合を見るための模擬戦を行う日である。

デジエルが退院した日、フェイトはデジエルにクロノから託された、魔法に関しての事の説明をした。デジエルはそれを聞いても、大して驚きもせずに話を聞き終えた。

フェイト「……なんだかあまり驚きませんね。普通は少しは驚いたりするんですけど。」

フェイトの言葉にデジエルはフツとした顔をして話した。

デジエル「普通はそうなんでしょうけどね……しかし、自分

はそれを聞いて、「ああ、やっぱりそうなんだ」と妙に納得しました。」

フェイト「納得した？」

フェイトはデジエルに聞き返した。

デジエル「自分はこの入院中に、無くした記憶を思い出そうとしました。そして、断片的にはありますが、いくつか思い出した記憶があります。」

フェイト「思い出した記憶？」

デジエル「ええ、その記憶は、殆どが戦いの記憶で、自分は人間離れした力を使い、戦っていたんです。」

フェイト「戦いの記憶・・・」

フェイトはそれを聞き、この人は何者だろうかと思いついた。少なくとも戦いの記憶を持っているのであるから、一般人ではないのだろうと思った。

デシエル「人間離れした力を使つての戦いの記憶・・・そんな物を持つてるんですから、自分は一般人ではないのでしょうか。ですから、先ほどの話を大して驚かずに聞けたのです。」

フェイト「そうだったんですか。」

フェイトは納得した声を上げた。

デジエル「フェイトさん……私にあなた方のやっている事の手伝いをさせてもらえないでしょうか？」

フェイト「え？」

デシエル「わたしのが思い出した記憶の殆どは戦いの記憶です。ですから自分の記憶を取り戻す鍵は、それに近い環境にあると思うのです。それに、わたしにもその魔法の力があるんですよ？ですから……」

デジエルの言葉を聞いてフェイトはしばらく考え込んだ後、デジエルに答えた。

フェイト「……わかりました。私の知り合いの、上の人に直接掛け合ってみます。」

デジエル「ありがとうございます。」

この後、フェイトは義理の兄であるクロノや、義理の母のリンディにこのことを話した。

元々、デジエルの魔力ランクからして、野放しに出来ないと思っていた矢先だったので、彼からのこの申し出はありがたかったし、何より、万年人手不足の管理局としては、デジエルのような素質のある人物は、喉から手が出るほど欲しい人材だったため、話はすんなり通った。

そして彼専用のデバイスが急遽作られ、今日その試運転をするのである。

そんな事を思い出しながら、アルフはフェイトに着いて訓練室に向かった。

\*

一方、アルフが居た休憩所とは別の休憩所では、特務捜査課の四乃森連矢が、自分の鳥形の使い魔、ウィンダムと共に休んでいた。

連矢は休憩所の椅子に座り、肩にウィンダムを止まらせながら自分宛に来ていた手紙を読んでいた。

そんな連矢の所に、連矢を探していたはやてが現れる。

はやて「あ、居た居た、連矢さんこんな所におつたんですか。」

連矢「はやてか。」

はやて「もうすぐデジェルさんとシグナムの模擬戦が始まるんで呼びに来ました。」

連矢「そうか、もうそんな時間か。」

連矢はずいぶん手紙を読むのに夢中になっていたみたいだなと思った。

はやて「手紙を読んでたんですか？」

はやてが連矢が持っている手紙を見て言った。

連矢「ああ、俺が保護者兼後継人となった友人の妹からの手紙だ。」

はやて「友人の妹？」

連矢「ああ、以前、俺は管理局の首都航空隊に研修のために居た事がある。その時一緒に仕事をしていた友人の妹だ。」

はやて「え、航空隊に居た事があるんですか?!」

連矢「ああ、短い期間だったかな。」

それを聞いたあとははやてはふと疑問に思った事を口にした。

はやて「けどなんでその友人の妹さんの・・・後継人はともかく、なんで保護者までしてるんですか？」

普通は親か、その兄がやる物なのではと思った。



連矢「……………彼女には親、親戚が居ないんだ。」

はやて「え？けどお兄さんがおるって……………」

はやてがそう言うと、連矢は悲しそうな顔ではやてに告げた。

連矢「……………彼女の兄は、俺と組んでの任務中に、俺の目の前で犯人にやられて殉職したんだ。」

はやて「あ……………すみません……………余計なこと聞いてみただけ……………」

はやては聞いてはいけない事を聞いたと思い、押し黙った。

連矢「いや、いい……………俺が彼女の保護者兼後継人をやったのは、あいつを助ける事ができなかった罪滅ぼしと、あいつの遺言だからだ。」

連矢は思い返す、自分が首都航空隊と一緒に仕事をしていた人物、ティード・ランスターのことを。

彼、ティードとは、連矢が首都航空隊に研修でいた時にコンビを組んでいた間柄であった。

ミッドチルダに来たばかりで右も左もわからない連矢に、ティードは何かと世話を焼いてくれた。歳も同じぐらいで、気も合ったのかお互いにすぐに打ち解けた。時には、自分の家に連矢を呼び、妹のティアナと一緒に食事を何回かもした。そんな風に研修期間を過ごし、研修期間が残りわずかになった時、それが起きた。

その日、二人は哨戒任務をこなしていた。連矢は研修が終わった後、今度は仕事抜きで、故郷の京都に、妹のティアナと一緒に来てくれ

と話し、ティードは必ず行くと約束した。そんな時、部隊本部から通信が入り、自分たちの方に逃亡中の犯人が逃げていると連絡が入ったので、二人はそちらに向かった。

二人は通信で知らされた、犯人の逃走航路に着き、犯人を待ち伏せした。

しばらくして、犯人らしき人物が現れた。その犯人は黒い服装で、黒い帽子の金髪の男で、両手に剣を持っていた。

ティードは犯人に対して警告をしたが、犯人は問答無用にこちらに襲い掛かってきた。

連矢は前に出て犯人を迎え撃ち、ティードが後ろで、射撃で援護すると言う、二人がコンビを組んでから使い続ける戦法で戦った。最初はこちらが有利に事を進められ、相手を追い詰めることができた。

だが、追い詰められた犯人は突然右腕を掲げると、手の甲にある模様が浮かび上がり、そこから黒い八本の蜘蛛のような足が現れ、二人に襲い掛かってきた。

連矢はあれが自分も宿している真の風の紋章と同じ物、真の紋章だと感じ取り、自分の持っている風の紋章で相殺しようとして、紋章の力を解放した。

最初は均衡していたが除々に押されて行き、ついには破られて二人は紋章の力で吹き飛ばされた。

地面に倒れて動けなくなつた連矢に犯人は近づいてきた。

犯人「まさか、こんな所で真の紋章の宿主に出会えるとは思ってもよらなかつたな。だが、相手が悪かつたな。悪いが貴様の紋章、もらつていくぜ。」

そう言つて犯人は薄乳色の何かが詰まつた球形の物をどこからか取り出した後、連矢に止めを刺そうと、剣を振り上げた。

「やられる！」そう思った時、ティードの魔力弾が犯人に当たり、

犯人は連矢から離れて、魔力弾で自分を撃ったティードの方に視線を向けると、撃たれた事に逆上し、ものすごい殺気を発してティードに突っ込んで行った。ティードその殺気に当てられ、魔力弾での迎撃が遅れたため、懐に入られる。連矢は「にげる！」と叫ぶが、その声もむなしく響き、ティードは犯人に切られて倒れた。犯人はティードの血の付いた剣を振るって剣の血を払うと、今度は連矢の方に向かってきた。何とか立って構えよとしたが、墜落のシヨクが紋章の攻撃を受けてのダメージか、体がうまく動かなかった。

このままでは、「自分もやられる！」そう思った時、増援が駆けつけてきた。犯人はそれを見て逃げていった。

連矢はフラフラになりながらも立ち上がり、倒れたティードの側に近寄り、ティードの体を抱き起こした。

ティードは事切れる寸前で、かすれた声で、連矢に最後の言葉を言った。「妹を頼む。」と。

その後、犯人は陸士部隊の協力の元に、取り押さえられたと言われているが、犯人はその後、再び逃げたと言うことが解ったが、真相は闇に葬られ、犯人を逃がした事をウヤムヤにするために、一部の上層部の者が事件の責任を死んだティードのせいにした。連矢はもちろんこの事に関して異議を申し立てたが聞いてもらえず、兄が役立たず呼ばれた事を聞いた妹のティアナがひどく傷付いたと言う。そして・・・逃げた犯人は、今だ逃亡中である事、・・・連矢はその犯人がああ魔王軍の黒騎士ユーバであることを突き止めた。・・・むろん、この事はティアナには、知らせてなく、犯人はちゃんと捕まっていると思っっている。

連矢「俺は、今度こそ俺の手であいつを倒して捕まえる。そしてティードにかかった汚名が間違いだと言うことを示す。それが死んだティードへの手向けだと思っっている。」

連矢は、はやてに思い返した事を話した。

はやて「……………」

はやてはとても悲しそうな顔をした。

はやては、なぜ自分が彼に惹かれたのか、わかった気がした。

自分の大切な人が蔑まれ、それを聞きながらも、必死にそれを払拭しようとしている所など、自分と似ていたのである。

自分も大切な家族であるシグナム達が、一部の上層部の人間に犯罪者呼ばわりされ、陰口をささやかされている。そして、自分は、それを聞きながらも、必死にがんばって来たのである。

はやて「……………なんで……私に、この事を？」

連矢「さあ……………なんでだろうな……………もしかしたら、お前に自分と同じ何かを感じたからなのかもしれないな。」

連矢はそう言って、はやてに微笑んだ。

はやて「あつ／＼／＼／＼／＼／＼／」

はやてはそんな連矢の微笑みに魅入った。

????「ご主人様、そろそろ模擬戦が始まるのでは？」

突然発せられた声にハツとなり、声の主の方に顔を向けた。

声は連矢の肩に止まっていた、鷹ぐらいの大きさで、羽根が緑色した鳥が言った。

はやて「え……………あの、連矢さん、この肩に止まっている鳥

は？」

連矢「ああ、そう言えばまだ自己紹介してなかったな、俺の使い魔のウィングダムだ。」

ウィングダム「はじめまして、ご主人様からはやて様の事は聞いております。使い魔のウィングダムと申します。以後お見知りおきを。」

ウィングダムは丁寧な言葉で、はやてに挨拶をする。

はやて「あ、どうもよろしくお願いします。」

ウィングダム「いえいえ、こちらこそよろしくお願いいたします。．．所でご主人様、時間はよろしいのでしょうか？模擬戦が始まってしまうのでは？」

はやて「あ、そうや、もうすぐ模擬戦が始まるから、連矢さんをを迎えに来たんだった！すっかり忘れてたわ。」

連矢「そうか、それでは急ぐとしよう。」

はやて「ええ。」

はやてはそう返事をした後、二人は急ぎ足で訓練室に駆け足で向かった。

はやては連矢を見ながら、この人の事もっと知りたいを思った。

「おまけコーナー」

ピ「ピティと」

ユ「ユニの」

二人「「おまけコーナー」」

ピ「はい、毎度おなじみのおまけコーナーの時間だよ 司会進行  
役のピティです」

ユ「解説のユニです。」

ピ「アシスタントのピッキーです。」

ピ「さて、今回は、本編の方を詰めすぎたみたいなので、おまけコ

「ナーを少し短くします。と言つ訳で、早速のゲスト召還。コシヨウ、パツ、パツ、パツと。」

ピ「ハ……ハ……ハ……ックシユン！」

パツ！

ピ「召還成功！さて、今回のゲストは、聖闘士星矢・THE LO  
ST CANVAS・冥王神話から牡羊座アリエスの黄金聖闘士シオンの登  
場です。」

シ「どうも、はじめまして。こう言つ場には慣れてないが、精一杯  
努めさせてもらつよ。」

ユ「まあまあ、そんなに固く考えないで、気楽にやってください。」

ピ「そうそう、これは一応、おまけのコーナーなんだから。さて、  
それじゃ、今回の本編を振り返つての一言をどうぞ。」

シ「そうだな……風の知られざる、悲痛な過去……と言つ  
た所かな。」

ピ「おおー！」

ピ「詩的で、カッコイイです。」

ユ「シオンさんは詩人ですね。」

シ「そ、そうでしょうか。」

ピツ「謙遜するところもまたカッコイイです。」

ピ「はいはい、そこまでしておく。さて次は、補足といきましょうか。」

ユ「今回は、本編に出ている、デジエルさんや、このシオンさんが出ている聖闘士星矢・THE LOST CANVAS・冥王神話についてです。」

シ「今回は、自分が出ている作品のことなので、わたしが説明します。では、聖闘士星矢 冥王神話は、車田正美原作の『聖闘士星矢』シリーズのひとつ。掲載誌は『週刊少年チャンピオン』（秋田書店）。本作は原作者本人が執筆する前作の続編『NEXT DIMENSION 冥王神話（ネクスト デイメンション）』と手代木史織が描く、『THE LOST CANVAS 冥王神話（ザ ロスト キャンバス）』の2作が存在します。『LC冥王神話』は、発表当初は『ND冥王神話』と登場人物が同一と発表されていたものの、実際には一部の登場人物や設定を除き独自の展開を歩んでいます。手代木の著作の中では3巻以上の単行本が発行された初の作品であり、2009年3月に単行本が12巻まで刊行された時点で累計120万部を突破するセールスを記録しました。本作品のドラマ性が新たな読者を獲得することで、この作品を通じて、原作である『聖闘士星矢』の新たなファンも増加するという相乗効果も生み出されています。さらに、2009年にはアニメ化も発表されました。」

ピ「長い説明、ごくりうさまです。」

シ「こんなもんでいいでしょうか？」



ユ「バツチリです。」

ピ「さて、今回は、ここまで。いや、今回は何事もなく終わりその遺跡の臭いがする〜！」うにないみたいだね〜。」

バン！（スタジオの扉を開ける音）

リ「こ〜こ〜か〜〜！」

芹「リフィルさん！落ち着いて！」

ピ「へ？芹とリフィル?!」

芹「あ、ピティ！」

ピ「ちょっと、芹はともかく、なんで、他の作品、リリかるなのは君と響きあう物語〜に出てくるリフィルがここにいるの!?!」

芹「あ、それはね、リフィルさんも料理研究会に入る事になったので、さっきまでこの建物の中にある調理室で、料理研究会のメンバーみんなと一緒に今日のゲストさんに渡すお土産のお料理を作ったの。」

ピ「ゲツ！あんたら自分の料理をまたお土産として渡すつもりだったの?!また犠牲者を出す気!」

シ「?」

芹「なに、そのまた犠牲者を出すってのは!っどそれどころじゃないんだった。リフィルさん落ち着いて。」

リ「これが！わたしが嗅ぎ取った遺跡の臭いの元は。」

シ「は？」

シオンの着ている黄金聖衣ゴルドクロスを遺跡モードの目で見るリフィル。

リ「一見金の様に見えるが、金ではないな！金よりもはるかに強固な貴重金属レアメタルで出来てるな！それに、この鎧についてる角のような飾り！これは、この鎧が他の形体を執る事が出来る証拠！それに、この鎧からはなにやら意志のような物を感じ取れる！どうやらこれは、失われた古代の技術で出来てるみたいだな！あゝ素晴らしい！！」

シ「あの・・・この人はどうしたんですか？」

ピ「あゝ、リフィルは遺跡マニアで、遺跡なんかを見るとなにやら変なスイッチが入っちゃってこうなっちゃうの。今回はシオンの黄金聖衣ゴルドクロスに反応したみたい。」

シ「はあ！黄金聖衣ゴルドクロスは遺跡やそこから発掘される発掘物ではないんだが。」

ピ「ものすごく古い物には違いないじゃない。同じ様な物だよ。」

シ「たしかに古い物だが・・・」

リ「さて、今度は、中を調べるとしでしょうか。」

手の指をワキワキと怪しく動かしながら、シオンに近づくりフィル。

シ「な……なにを……」

怪しい動きと、普通じゃない目つきにあとずさるシオン。

リ「なぐに、ちょっと脱いでもらうのよ。」

シ「へ?!」

リ「だいじょうぶ、痛くはしないから。」

シ「い……いや、痛いって……」

リ「良いでわないか、良いでわないか、見たって減る物じゃあるまいし。」

シ「いや、減る物って……」

ピ「……はたから見てると、美青年に襲い掛かるうとして  
いる痴女にしか見えないね。」

リ「さあ、お前ゴールドクロス(黄金聖衣の事)の全てを私に見せるのだ……!」

シ「う……せ……戦略的撤退!」

ピ「あ、逃げた。」

リ「にぐがぐすくか……!」

芹「あゝあ、リフィルさんも後を追って行っちゃった。」

ユ「……なんだかそのまま、サングチュアリ聖域まで追っていきそうな勢いですね。」

ピ「リフィルがサングチュアリ聖域に行ったら、それこそ狂喜乱舞しちゃうよ。」

ビ「というか、テンション上がりすぎて、血管が切れちゃうんじゃないですかね。」

ピ「かもね。さて、それじゃ、いつもの締め、行くよ。」

ユ「それではみなさん」

三人「まったね」

第15話 風の過去と水瓶座（アクエリアス）の始動（後書き）

リフィルの召還、山田花太郎さんありがとうございます。

もし、そちらでゲスト召還をするなら、うちの子たちをお返しとして使ってください。

## 第16話 炎VS氷（前書き）

すみません。旅行に行っていて、更新が遅れました。  
本当にすみません。  
では第16話どうぞ。

## 第16話 炎VS氷

### 第16話 炎VS氷

警視庁にある特務捜査課のオフィス、その一画でレティシアは書類整理をしていた。

レティシア「は、デバイスが張ってくれるフィールド魔法のおかげで、昼間でも活動できるようになったけど、やっぱり昼間は体が重いわね。」

書類整理をしながら、体が重い事をボヤクレティシアの側で、同じように書類整理をしているビッキーがレティシアのボヤキの声にこえる。

ビッキー「ヴァンパイアの血を引いているレティシアには、昼の活動はやっぱりキツイ？」

レティシア「まあね。」

そんな風に話している二人に、ロングの銀髪で胸元が開いたスーツに身を包んだ女性が声を掛ける。

女性「二人とも、手が止まってるわよ。」

ビッキー「え、あ……すみません、ジーンさん。」

レティシア「すぐにやります。」

ジーンにたしなめられ、作業を再開する二人。

そんな時、特務捜査課のオフィスに誰かが入ってきた。

東郷「戻ったぞ。」

ジーン「あ、おかえりなさい。」

レティシア「おかえりなさい課長<sup>ホス</sup>。」

ビッキー「おかえりなさい。定例会はどうでしたか？」

ビッキーは先ほどまで東郷が出ていた定例会の事を聞く。

東郷「とりわけ目立った事はなかった。ただ……」

レティシア「ただ？」

東郷「こちらに対して攻撃的な事を言う者が何人かいた……おそらく魁音寺側に付いたもの達であろう。」

レティシア「魁音寺……最近力を付け始めてとは思ってましたけど……まさか警察関係にまで影響を及ぼすほどまで力を付けてきてたとは……」



東郷「うむ、これからは気よつけなくてはな……ところどころの間、匿名の通報で捕まえた下位元神霊トライバルエンドの取調べはどうした・？」

東郷の問いに、近くにいたジーンが答える。

ジーン「今はマニゴルドとカルディアが取り調べをしています。」

ジーンの答えを聞いて、レティシアがギョツとして、慌てた声で話す。

レティシア「え！？あの二人が取り調べ！？ちよつと大丈夫なんですか？！」

ジーン「大丈夫よ。一応、フォローの為に、アスミタに取調室の外に待機してもらってるから。」

それを聞いたレティシアは安堵した。

レティシア「ホッ、なら安心ですね。」

そんな風に話していると、取調べをしていた3人が部屋に入ってくる。

アスミタ「取調べ終わりました。」

マニゴルド「あ、かったるい。」

カルディア「まったく面倒な……拷問してはかせれば手っ取り早いだろうに……」

スーツをきちんと着こなした金髪の長髪で、目を閉じているアスミ

タ。  
スタジャンを着て、かつたるそうにしているマニゴルド。  
先ほど物騒な事を言っていた癖毛の長髪で、スーツを着崩して着ているカルディア。

それぞれ特徴のある人物が、取調室から戻ってきた。

東郷「ご苦労。それでどうだった。」

マニゴルド「どうやらあの下位元神霊<sup>トライバルエント</sup>、殺しをやっている所を見られて、その目撃者を消そうとして、逃げる目撃者を追い回していたみたいで。」

アスミタ「聞き込みで、ちょうどどの頃、数人の男が中学生ぐらいの少女を追い掛け回しているのを何人かの人物が目撃していますから、たぶん間違いないでしょう。」

マニゴルドの話に、アスミタが補足をつけて話した。

東郷「そうか・・・で、その少女の身元は？」

アスミタ「いいえ、つかめてません。」

東郷「下位元神霊<sup>トライバルエント</sup>達を倒した人物については？やつらが発見された時、何者かと交戦し、倒された状態だったと聞く。」

東郷がそれを聞くと、カルディアがあきれたような顔で答える。

カルディア「それがあいつら、子供に倒された<sup>ガキ</sup>って言うてるんですよ。」

東郷「子供ガキに？」

マニゴルド「ええ、まったく、夢でも見てたんじゃないかっての。」

マニゴルドがあきれたような顔で言う。

レティシア「子供ガキにやられた？そんなわけないじゃない。あんたたち、なめられてるんじゃないの？だからからかわれるのよ。まったく、これだから戦闘しか能のない戦闘馬鹿は困るのよ。」

マニゴルド「な、」

カルディア「なんだと！」

二人「こいつと一緒にするな！俺はそんなんじゃない！！」「」

二人の声が綺麗に重なり、ハモる。

二人は互いの顔を見て声が重なった事に怒り、また互いに怒り出す。

二人「ハモってんじゃねー！！」「」

またハモる二人。

レティシア「いやゝ息ぴったりね。やっぱり馬鹿同士だと、息もぴったり合うもんなんだね。」

カルディア「なんだと！」

マニゴルド「チビガキのお前に言われたくないわ！」

レティシア「なんですって！この馬鹿コンビ！半年前に入ったばかりの新人りの分際で！」

マニゴルド「えらそうに言うな！てめえだって1年前に入ったばかりで、俺等と代わらないだろうが！それに俺たちが特務捜査課（こく）にいるのは、元の世界に戻るすべを見つけてもらえるまでの間だ。」

カルディア「そうだ！だから必要以上の馴れ合いはしない！その所、勘違いするな！」

レティシア「なんですって！あんた達には、拾ってもらった恩を返そうって気持ちはないの！」

カルディア「それを返すのは課長（ホス）であって、お前じゃないだろう！」

レティシア「あんたらね〜！だいたい「うるさいぞ阿呆共（アホウ）。」って

レティシアとマニゴルド、カルディアの言い合いを遮るように、斉藤夜天が声を出す。

アスミタ「夜天か。」

アスミタが部屋に入ってきた斉藤（ホス）に声をかける。

斉藤「少しは静かに出来ないのか。この阿呆共は。」

マニゴルド「なんだと！」

カルディア「だれが阿呆だ！」

レティシア「そうよ!」

斉藤の発言に怒る三人。

斉藤「うるさいぞ。ちびすけ。」

レティシア「ち……ちびすけ!レディに向かって、なんて口の聞き方すんのよ!」

斉藤「そういうセリフはもう少し身長を伸ばしてから言っただな。」

レティシア「な!」

レティシアは気にしている事を言われ、怒りのボルテージを上昇させる。

それを見ているカルディア達は、ザマミロと言う顔をするが……

斉藤「そっちの阿呆二人もだ。」

カルディア「なっ!」

マニゴルド「てめ〜」

斉藤「文句を言うんだったら、甲殻類、節足動物から進化して、哺乳類になってから言っただな。」

カルディア達「うが~~~~!」

怒りに震えるカルディア達。

東郷「そこまでにしておけ。それより斉藤、お前が持っている書類は例の調査の件の報告だな。」

東郷は斉藤が持っている書類を見て言う。

斉藤「ええ。」

そう言つて、書類を東郷に渡す。

東郷「・・・・・・・・・・・・・・・・」

斉藤から渡された書類に目を通す東郷。

東郷「・・・・・・・・・・なるほど・・・・・・・・よし、この事を管理局側の協力者に伝える。くれぐれも、上の方に情報が行かないようにしろ。管理局にいる四乃森に連絡を入れるのも忘れるな。」

斉藤「了解。」

ここは、管理局本部の訓練室を視聴するモニター室。  
今ここには、なのは、フェイト、アルフ、ヴィータ、リンフォー  
ス？、そして、デバイスマスターのマリエル・アテンザがいた。  
全員、訓練室内で対峙して立っているデジェルとシグナムを見てい  
る。

そこに挨拶をしながら、はやてが連矢と連矢の使い魔・ウインダム  
と一緒に入ってきた。

はやて「すみません、遅くなりました。」

連矢「すまん、遅れた。」

全員が一度視線をはやて達に向ける。

リン「あ、はやてちゃん。」

はやて「もう始まってしもおた？」

ヴィータ「いや、これからだよ。」

そう言って答えるヴィータの声に安堵するはやて。

ウィングダム「どうやら、なんとか間に合ったみたいで。」

なのは「？」

フェイト「え？」

リン「な！」

ヴィータ「な……なんだこの鳥？」

なのは達は連矢の使い魔、ウィングダムをみて驚く。

はやて「あ、みんなもうちと同じで、はじめて会ったんやな。」

みんなの視線に気付き、連矢が自分の使い魔を紹介する。

連矢「俺の使い魔のウィングダムだ。よろしく頼む。」

ウィングダム「はじめましてみなさん、ウィングダムと言います。これからよろしくお願いします。」

ウィングダムの丁寧な挨拶を聞き、みな“礼儀正しいな”と思いつつそれぞれ挨拶をする。

なのは「高町なのはです。四乃森さんが使い魔を持ってたなんて、驚きましたよ。」

フェイト「フェイト・T・ハラオンです。こちらこそよろしく。」



リーン「リーンです。よろしく願いしますね、ウインダム。」

ヴィータ「ヴィータだ。よろしくな。」

それぞれが挨拶をしていると、マリエル・アテンザがみんなに声をかける。

マリエル「みんな、挨拶はすんだ？シグナムたちの方は準備が整ったみたいだから、そろそろ始めるよ？」

はやて「え・あ、はい。」

はやてはそう言って訓練室の方が映ってるモニターに顔を向け、他の人たちもそれに続くように顔を向ける。

マリエルはマイクに向かって、訓練室にいる二人に声をかける。

マリエル『二人とも準備はいい？』

シグナム「こちらはいつでもいい。」

バリアジャケットに身をつつんだシグナムが言う。

マリエル『デジエルさん、セットアップの仕方は解りますね。』

デジエル「ええ、先ほどの説明でわかりました。」

デシエルは自分の右手に装備されている籠手型のデバイスを見て言った。

その形は、かつて彼が使用していた水瓶座アクエリアスの黄金聖衣ゴールドクロスの籠手の形と

同じ形をしていて、色は白、手の甲の部分にデバイスのコアの青いクリスタルが埋め込まれている。

マリエル『ではセットアップを、それと同時に模擬戦開始です。』

デジエル「わかりました。では………アクエリアス！」

アクエリアス『スタンバイ、レディ』

アクエリアスから機会音声の音が発せられる。

デジエル「セットアップ！」

デジエルはアクエリアスに指示を出し、セットアップをする。

彼の体を、バリアジャケットが覆い、次の瞬間、デジエルはバリアジャケット姿になる。

彼のバリアジャケットは、彼が<sup>ゴールドセイント</sup>黄金聖闘士だった時に着ていた<sup>アクエリ</sup>水瓶<sup>アス</sup>の黄金聖衣の形に似ており、色はデバイスと同じ白、水色のマントが付いた形である。

マリエル『では、模擬戦開始！』

マリエルの声で互いデジエルとシグナムは間合いを取り構える。

シグナム「フフ、さて、どれほどの実力が見せてもらおう。」

デジエル「お手柔らかに。」

二人は構えたまま、しばらくにらみ合う。

シグナム「……こないのか？……なら……こちらから行くぞ！」

そう言って、シグナムがレヴァンティンで斬りかかってきた。

デジエル「！」

デジエルはそれをバックステップでかわすが、シグナムはさらにそこから追撃をして、斬りかかる。

シグナム「ハアアアアア！」

息をつかさぬシグナムの連続攻撃をギリギリでかわし続けるデジエル。

シグナム「どうした！かわすだけでは勝てんぞ！」

デジエル「クッ！（やはりあの剣をどうにかしなくては）」

デジエルは右腕に凍気を集めながら、シグナムから大きく離れる。

シグナムは離れたデジエルを追撃するために間合いを詰めようとしたが、

デジエル「ハアアアアアアア！」

デジエルの周りに雪の結晶のような物が浮かび上がり始めたので、警戒して足を止める。

シグナム「こ……これは……?」

デジエル「美しいだろう……北国の方では、雪が結晶となつて降る現象がある。北国に住む者はこの現象をこつ呼ぶ!」

デジエルは右手に集まった凍気をシグナムに向けて解き放つ。

デジエル「ダイヤモンドダスト!」

凍気が吹雪となつてシグナムに襲い掛かる。

シグナム「クッ!」

シグナムはとつさにレヴァンティンでガードするが、冷気でみるみるレヴァンティンが凍りつく。

ダイヤモンドダストが止まった時には、レヴァンティンはシグナムの腕ごと凍りついていた。

デジエル「これでその剣はもう使い物にならない。」

デジエルはシグナムのレヴァンティンを見ながら言う。

シグナム「フツ……どうかな?……レヴァンティン!カードリッジロード!」

レヴァンティン「イエッサー。」

レヴァンティンから電子音声で声がして、カートリッジがロードされる。

するとレヴァンティンから炎が発生し、包んでいた氷を溶かした。

デジエル「な!?!」

それを見たデジエルが驚く。

シグナム「私とレヴァンティンの炎は、この程度の凍気では抑えられないぞ。」

デジエル「なるほど、一筋縄ではいかないらしいな。」

デジエルはそう言いながら再び構えた。

シグナム「ふふ、久々に心躍る闘いだ。」

シグナムもそういいながら、嬉しそうな顔をし、鞘にレヴァンティンを収めながら抜刀の構えを取る。

シグナム「では第二幕と行こうか!レヴァンティン!」

レヴァンティン『イエッサー』

レヴァンティンから再び電子音声がし、カートリッジが再びロードされる。

シグナムの足元に魔方阵が出て、すさまじい魔力がシグナムを覆う。

デジエル「ムウ、すさまじい力だ。ならばこちらも!」

そう言ってデジエルも足元に魔法陣を展開する。その魔法陣はベルカ式でもミッド式でもない物で、そこに書かれている文字は、かつ

て十二宮で彼が守護していた宝瓶宮の入り口に書かれていた、彼の守護星座である水瓶座のマークが浮かび上がっていた。デジエルは凍気を発しながら力を高める。

デジエル「ハアアアアア！」

二人が発する力が力場を作り、ぶつかり合う。

シグナム「飛龍……一閃！」

シグナムが飛龍一閃を放つ。  
炎を纏った鞭状のレヴァンティンがデジエルに襲い掛かる。

デジエル「オーロラ・サンダー・アタックツツツ！！！」

デジエルは全身からあふれるような凍気を両手を組んだ打ち下ろしの一撃と共に放つ。

シグナムが放った炎と、デジエルが放った凍気がぶつかり、訓練室全体をつつむような巨大な爆発が起こった。

なのは「キャー！」

ヴィータ「うわー！」

訓練室を見ていたなのは達は爆発で起きた衝撃でバランスを崩し倒れる。

アルフ「な……なんなんだい、今の爆発は？」

はやて「み・・・みんな大丈夫？」

はやては体を起こしながら全員に声をかける。

フェイト「な・・・なんとか。」

連矢「こっちは無事だ。」

リーン「リーンもです。」

ウイングダム「こちらは無事です。」

マリエル「あいたたた、ちょっと腰を打ったけど、無事よ。」

ヴィータ「い・・・一体なにが起きたんだ？」

ヴィータは頭をさすりながら言う。

ウイングダム「おそらく水蒸気爆発が起きたのでしよう。」

リーン「水蒸気爆発？」

ウイングダムの言葉に、リーンが聞き返す。

ウイングダム「デジエル殿の凍気が、シグナム殿の炎で瞬時に気化したために爆発がおきたのでしよう。」

ヴィータ「気化って・・・蒸発?!それだけでこんな大爆発が起きるのかよ?!」

ウィングダム「爆発の大きさは双方の魔力がそれだけ大きかったという事です。」

フェイト「デジエルさん大丈夫なのかな。」

フェイトが心配しながら訓練室の方を見る。

訓練室内は、ものすごい水蒸気が立ち込めていて中が見えない状態だった。

デジエル「く……一体なにが……。」

デジエルは倒れた体を起こしながら立ち上がる。  
すると、デシエルのすこし前に、同じように頭を振りながら、体上がるシグナムがいた。

シグナム「くっ……ものすごい爆発だった。」

デジエル「シグナム！」

デシエルはシグナムを見て瞬時に構える。

シグナム「！？デジエル！」

シグナムもデジエルの声を聞き構えを取った。

デジエル「結構な威力の技だったな。」

シグナム「お前の技もな。」



二人は互いの技の威力を褒めながら構える。

シグナム「さて・・・第三幕と行くのか！」

デジエル「ああ。」

そう言つて互いが相手に飛びかかるうとした時、二人を止める声が当たりに響く。

はやて「そこまでや！二人とも！！」

シグナム「な・・・主、はやて?!」

デジエル「な・・・なんだ?!」

はやて「まったく、模擬戦で訓練室を壊すなんて、なに考えてるんや!!いくら模擬戦って言つても加減つてもんがあるやろ!!少しは手加減しいや!!」

はやての声を聞いて、二人は周りを見渡す。

水蒸気が晴れて訓練室の中が見えるようになる。

中は、さっきの爆発でボロボロの状態だった。

デジエル「あ・・・。。。」

シグナム「・・・すこし力を出しすぎたか？」

はやて「二人とも覚悟はええか?た~~~~~ぷりとお説教したるさかいな~~~~!!」

二人「……………」

\*

その後、訓練室が使い物にならなくなったので模擬戦は中止になった。  
元々はデジエルのデバイスのテストが目的だったが、その点の関し  
てのデータは取れてたので、とりあえずの目的は達せられた。

そして今、訓練室を破壊した二人は本局のとある一室で……

連矢「……と言っ訳だ。いいか！そもそも二人は……」

連矢とウィンダムに説教されてた。

シグナム「……」

デジエル「……」

二人は正座させられ、その正面に連矢が立つて説教をし、傍らにいるウィンダムがそれを支援する形で、数時間続いていた。しかも、連矢が疲ればウィンダムが代わりに説教をし、ウィンダムが疲れば連矢が代わりに説教をすると言っ無限連鎖が続いていた。

それを部屋の外から見て、なのは達は気の毒そうに二人を見ていた。

なのは「あれから数時間……まだ続けているね……」

ヴィータ「ハハハ……まるで説教の永久機関だな……」

フェイト「連矢さんて説教魔だったんだね……」

そんな風になのは達は話していた。最初は、なのはが例の「お話をしようとしていたが、“説教なら自分が”と連矢とウィンダム言うので、譲ったのである。

ちなみにマリエルは模擬戦で得たデータをまとめる為に技術部に戻

り、アルフは聖時の見張りがあるので早々に97管理外世界に戻り、はやては訓練室の破壊に対しての報告を兼ねたお詫びをしに行った。リーン「それにしてもデジエルさんが魔力変換資質者だったなんて驚きです。」

ヴィータ「ああ、しかもレアの部類にはいる「凍結」だとはな。」

フェイト「魔力変換資質者は、その多くが炎か電気だから、「凍結」のスキルは珍しいんだよね。」

リーン「ところで気になったんですけど、デジエルさんの足元に浮かんだ魔方陣、あれ見たこともない物でしたね。」

なのは「うん。ベルカ式でもミッド式でもない物だったね。新しい物という事かな?」

フェイト「うん、そうかもね。」

そんな風に話していると、少しやつれたはやてがやってきた。

はやて「た……ただいま〜。」

なのは「は……はやてちゃん?」

フェイト「だ……だいじょうぶ?」

はやて「これが……だいじょうぶに見える?」

はやては少し顔を引きつらせながら言っ。



ヴィータ「ああ、そうだよ。しかし、交代しながらの説教だろう？二人ともかなり説教が長いタイプみたいだから、少しシグナム達が気の毒だな。」

そんな会話をしていると、シグナム達が部屋から出てきた。

フェイト「あ、連矢さん。終わっただんですか？」

連矢「ああ、一応な。とりあえず一時休憩だ。」

フェイト「一時休憩？」

フェイトは連矢が一時休憩と言っ言葉に疑問を感じる。

ヴィータ「お、い、二人とも、大丈夫か？」

ヴィータが二人の目の前に手を振るが反応がない。二人の顔には生氣がなかった。

はやて「こらあかんわ、二人とも目が死んでる……………この分ならうちが説教しなくても大丈夫見たいやな。っとそっやっ  
た、みんな！特務捜査課から仕事の依頼やで。」

はやてが、先ほどクロノから言われた仕事の事をみんなに話す。

シグナム「特務捜査課からの……………」

デジエル「仕事？」

二人は仕事だと聞くと、瞬時に立ち直り聞く。

リン「あ、もう立ち直りました。さすがプロと言ったところですよ。」

シグナム「主はやて、特務捜査課からの依頼とはもしや？」

はやて「そや、真の紋章がらみや。」

なのは「やつぱり・・・それで？」

はやて「この前、スクライヤの人たちが見つけた真の紋章が封印されてた遺跡があった世界があるやろ？」

フェイト「うん。たしか魔王軍の連中が真の紋章を持って行っちゃたんだよね。」

はやて「そや、で、じつはその世界から持ち去られた真の紋章と似たような反応が出た事を特務捜査課のエージェントが見つけたらしいんや。」

ヴィータ「似たような反応って・・・まさか持ち去られた紋章が実はその世界にまだあったってことか？」

はやて「それは解らん。せやから、その調査を含めてうちらが行く事になったんや。今回は、特務捜査課からここにいる連矢さんの他に何人かの人がかかるみたいや。それから遺跡の調査もせなあかんかもしれないから、今回はユーノも一緒に行く事になった。」

なのは「え！？ユーノ君も？」

はやて「せや。と言うわけでみんな今から出撃や！ただし！シグナムは居残りや。」

シグナム「なっ、なぜです！」

はやて「さっき壊した訓練室の始末書あるやろ？それが終わったら、壊れた訓練室の後片付けがあるやんか。だからや。」

はやては顔をヒクつかせながら言う。

はやて「あ、でもデジエルさんは今回はうちらと一緒に出撃や。」

デシエル「あ、はい。」

シグナム「な！なぜです?!」

シグナムが不満そうな顔で言う。

はやて「特務捜査課からの依頼で、デジエルさんもつれた来て欲しいんやと。悪いんやけど一人で始末書と後片付けやってな。」

シグナム「……………わ……………解りました。」

シグナムは少し不満そうな顔をしながら言う。

はやて「それじゃ、みんな行くで。」

そう言うてはやてが歩き出し、それに全員が続く。



ヴィータ「そんなじゃなシグナム、始末書、ちゃんと書いとけよ？」

ヴィータは少し意地が悪い顔をしながらシグナムに言う。

フェイト「がんばってシグナム。」

なのは「がんばってください。」

リン「シグナム、ファイトです。」

デジエル「……………すまない、戻ってきたら手伝う……………」

シグナム「……………ああ、たのむ……………」

シグナムは力なく返事をする。

そして最後に、連矢がウインダムと共に続こうとした時、シグナムに思い出したようにある言葉を言う。

連矢「そうだ、戻ってきたらデジエルと共に、説教の続きをするぞ。」

シグナム「ハアツ？」

シグナムは今、自分が聞いた言葉が信じられないと言う顔する。

連矢「あれしきの説教では足りん。だから、帰ってきてから続きをするので、それまでに始末書と後片付けを終わらしておくんだぞ。」

そう言って連矢は歩いていった。

あとに残されたシグナムは、顔を青くしてポーズをとっていた。

「おまけコーナー」

「ピ」ピティと〜

ユ「……………」

ピ「え?! ちょっとユニ!」

ユ「えっ、なに?」

ピ「“なに”じゃないの！新聞読んでないでよ！」

ビツ「本番始まってますよ。」

ユ「え！ご……ごめんなさい！」

ピ「も……それじゃ改めて、ピティと〜」

ユ「ユニの」

二人「おまけコーナー」

ピ「はい、毎度お馴染みのおまけコーナーです。司会進行役のピティです。」

ユ「解説のユニです。」

ビツ「アシスタントのビツキーです。」

ピ「ところでユニ、さっきから熱心に新聞を読んでいたみたいけど、なにか面白い記事でもあったの？」

ユ「ハア〜、面白いかどうかはともかく、目を引く記事ならあるわよ。」

ピ「へ〜、どれどれ、「某月某日、鳴海市内の住宅街で謎の集団食中毒発生。市民病院に入院している患者は、「料理研究会と名乗る集団からもらった料理を食べたら急に意識が遠くなった」と話している。地元署ではこの料理研究会と言う集団の行方を追っているが、

目撃証言などは今のところ得られていない。「って………これ………」

ユ「………多分間違いないと思う………」

ピ「………とうとう一般人にも犠牲者が。」

ユ「ハア~~~~~。頭痛い………」

ピ「ハ・ハハ、まあ、死人が出てない分、まだましでしょ？」

ユ「……ええ、けどこれ以上犠牲者を出さないようにする為にも、早急に味見係の人員を増やさないと。」

ピ「味見係の人が少なくなったから、今回みたいな事が起きたみたいですからね。」

ピ「そうだね。一刻も早く、味見係と言う名の生贄を捜さなくちゃね。……さて、それじゃ、気持ちを入れ替えて、毎回恒例のゲスト召還、行ってみよう！コシヨウ、パツ、パツ、パツ、と。」

ピ「ハ……ハ………ツクシユン！」

パツ！

ピ「召還成功！さて今回は、リリカルなのはStrikersから、スバルとティアナの二人に来てもらいました。」

ス「どうも。」

テ「よろしくおねがいます。」

ピ「さてと、ティアナは前回の話で名前が出てきたね。原作と違い、連矢が兄代わりのようなポジションについてるんだよね。」

テ「はい。連矢兄さんには、兄さん………ティータ兄さんが生きていた頃からの付き合いで、私もずいぶん可愛がられたんです。今では連矢兄さんは私のもう一人の兄さんみたいなもんです。」

ス「へへ、もう一人の兄さんか。ティアにとっては、連矢さんはもはや家族も同然なんだね。」

テ「まあね。あ、それもあるからか、連矢兄さんの従兄妹にあたるアキを通して、主人公である聖時や、もう一人の幼馴染である才人とは子供の頃に一緒に遊んだ仲になってるんです。」

ピ「へへ、そうなんだ。あ、ではそろそろ、今回の話を振り返っての一言をどうぞ。」

ス「え！一言？うん。」

テ「そうですね、”何事も程ほどが一番”と言う所ですかね。」

ピ「それ、当たってますね。今回の話では、シグナムさんとデジエルさんがやりすぎて、訓練室壊しちゃいましたしね。」

ユ「そうですね。しかもその後、連矢さんとウィンダムの間……い説教を受けてましたしね。」

テ「あれ、結構大変なんだよね。説教の長い二人が交代しながら説

教するから、終わりが見えなくらいに長いよね。」

ス「ティア、なんか詳しいけど、連矢さんの説教受けた事あるの？」

テ「……ええ。（遠い目をする）。」

ス「……なんか触れない方が良いみたいだね。」

ピ「そ……そうだね。それじゃ、今回の補足に入るよ。」

ユ「今回は、本編にも出てきた魔力変換資質についてです。このお話についてはティアナさんにもしてもらいます。」

テ「はい、では魔力変換資質について話します。そもそも魔力変換資質とは、ごく稀に現れる、魔力のエネルギー変換を無意識に行うことができる事を指しています。そしてそれを行える術者は、総じて純粋魔力の大量放出を不得意とする傾向があります。純粋魔力の放出は、一般の術者がエネルギー変換に要するのと同じくらいそれ以上のリソースが必要になる事が多いみたいです。変換資質者の中では「炎」と「電気」資質の保持者は比較的多く存在します。前者はシグナム副隊長、後者はフェイト隊長やエリオに当てはまりませんね。そして「凍結」はレアの部類に入ります。これは今回のお話に出てきた、デジェルさんに当てはまりますね。そして、これらの術者は、自らの変換資質に適合した魔法を学んでゆくことで効率の良い魔法習得や魔法効果の向上を得ることが出来ます。」

ユ「はい、補足ありがとうございます。」

テ「こんなんで良かったですか？」

ピ「バッチリだよ。詳しく説明できてると思うよ。」

ス「ティアは座学の成績良かったもんね。さすがティア！」

テ「ハハ、まあね、座学には自信あるからね。」

ピ「さて今回はここまでとします。はやく終わりにしないと、また余計なトラブルが起きそうだしね。」

ビツ「・・・それ、もう遅いみたいですよ?」

ピ「へっ?」

シャ「あ、居た居た。スバル、ティアナ！」

ス「あれ? シャマルさん、どうしたんですか?」

シャ「いやね、二人にお土産を渡そうと思って、持ってきたの。」

テ「お土産・・・ですか?」

シャ「そう、お土産。私が作った料理研究会のメンバーで作ったお料理よ。」

テ「え!」

ス「うわゝ、ありがとございます。中身はなんですか?」

シャ「中身はアイスクリーム丼よ。」

テ「ア．．．アイスクリーム丼？」

アイスクリーム丼．．．炊き立てのご飯をアイスの中に入れて、シャーベット状にしてある物。アイスの中にあるご飯がやけに目立ち、それがさらに食欲を損なわせる一品。

ピ「．．．．．」

ユ「．．．．．」

ビツ「．．．．．」

ス「へ、珍しい料理ですね。」

テ「あ．．あんだこれを珍しいの一言で済ますの!？」

ス「?そうだけど．．確かに珍しい外観だけど、食べると以外に美味しいかも。」

シャ「そうよ、これは美味しい物だけを入れたら、美味しい物が出る。というコンセプトの元作られた料理なの。」

ピ「．．．．．なにか間違ってるように思えるのは私だけかな？」

ユ「．．．いいえ、そう思っているのはあなただけじゃないわ。」

ビツ「．．．ええ。」

シャ「おいしいことは保障済みよ。この前、町で道行く人に試食してもらったら、あまり美味しさにみんな気絶してたから。」

ピ「あの食中毒事件はやっぱりあんたらのしわざか!?!」



シャ「？」

ス「……シャマルさん、美味しいものだけを入れたら、美味しいものが出来る……目からうろこな独創的な発想です！確かにそうですね！」

シャ「うふふふ、ありがとう。あ、そうだ、スバルも料理研究会に入ってみない？」

ス「え、良いんですか？」

シャ「もちろん。」

ス「じゃあ、お願いします。」

テ「え！ちよつとスバル！」

ス「……実は私、お母さんみたいに料理も出来るようになりたいと思っていました。でも、今の私の料理の腕では、お母さんの料理の腕にはかないません。ですから、料理の腕を上げたいと思っていました。……」

シャ「なら、良かったわね。やる気のある子は大歓迎よ。一緒に料理の道を究めましょう。」

ス「はい！」

ピロリン スバルのデストロイ料理人化フラグが立ちました。

「シャ「それじゃあ、さっそく他のメンバーの人たちに紹介するわね。」

ス「はい！」

テ「あ、ちよつとスバル！」

ピ「……………行っちゃったね。」

ユ「料理の腕を上げるためって……………逆に下がると思っんですけど……………」

ビツ「はあ〜スバルさん料理の腕は人並みにはあったから、なんだかもつたいたい感じがしますね……………」

ピ「そうだね……………あ、そうだ、ティアナ、お土産のアイスクリーム丼、ちゃんと持って帰って食べなさいよ。」

テ「え！これ一人で食べるんですか！？」

ピ「そうだよ、だってスバルはシャマルと一緒に行っちゃったじゃない。」

テ「あ……………」

ピ「ま、死なないうががんばってね。さて、では今回はここまで。」

ユ「それでは皆さん」

三人「……………待ったね……………」

テ「……………ハア、これを一人で……………」

## 第16話 炎VS氷（後書き）

さて今回から聖闘士星矢RLのキャラであるマニゴルドが出てきました。

マニゴルドは自分が好きなキャラなので、これからもちよくちよく出して、活躍させたいのですが、自分の文才でそれが出来るか疑問に思うところです。

なんとか活躍させたいな。

第17話 黎明と黄昏（前編）（前書き）

どうも剣 流星です。

今回は短めです。

それでは第17話どうぞ。

## 第17話 黎明と黄昏（前編）

第17話 黎明と黄昏（前編）

次元の海に浮かぶ新・バーンパレス。

この中枢、大魔王の間で、大魔王バーン？世に魔軍司令ファウス  
トが謁見している最中である。

バーン？世「黎明の紋章と黄昏の紋章が見つかったと？」

バーン？世はファウストから黎明の紋章と黄昏の紋章発見の報告を  
受けていた。

ファウスト「はい、やはりこちらが睨んだ通り、太陽の紋章が発見  
された世界にあったようです。

また、管理局と特務捜査課もこちらと同じような情報を手に入れた  
みたいなので、やつらが回収に現れるかもしれません。ガジェット  
では心持たないので、ユーバとメデイウムを向かわせることにしま  
す。」

バーン？世「うむ。」

ファウスト「それと・・・ザボエラからの申し立てで、やつの協  
力者数人を一緒に向かわせて欲しいそうです。」

バーン？世「協力者？たしか杳馬（みよま）とか言うやからだったな。」

ファウスト「はい、何でも、自分たちと因縁のある者が特務捜査課に居るので、挨拶したいと……。」

バーン？世「……よかろう。言う通りにしてやれ。うまくすれば、奴らのしつぽを掴めるやも知れんからな。」

ファウスト「仰せのままに。」

\*

観測指定世界。

なのは達は、紋章の反応があった遺跡の前にバリアジャケット姿で

居た。

なのは「ここが反応があつた遺跡なの？」

フェイト「うん、エイミィからもらった情報によるとここみたい。」

そういいながら、フェイトは目の前にある遺跡に目を向ける。

その遺跡は、二つの神殿がぶつかって半分崩れたような感じの遺跡である。

ユーノ「・・・やはり元からこの世界にあつた遺跡じゃないみたいだね。」

はやて「元からこの世界にあつた遺跡じゃない？」

ユーノ「うん、この世界の他の遺跡と比べてみて、建築様式がまったく違うんだ。おそらく、前にスクライヤの皆が見つけた遺跡と同じで、次元転移してこの世界に流れ着いたみたいだ。」

デジェル「なるほど・・・それでこんな形をしてるのか。」

ウインダム「転移した時に二つの神殿がぶつかってこんな形なつたのでしょうか。」

そんな風に、ユーノが話しているとヴィータが何かに気付いたのか、グラーファイゼンを構えながら言い放つ。

ヴィータ「・・・！気をつけるお前等！囲まれてるぞ！」

ヴィータがそう言うのと同時に回りの岩場や遺跡の残骸から、ガジ



エットがなのは達を取り囲むように現れた。

リーン「いつの間に!?!」

なのは「結構な数だよ!みんな気をつけて!」

フェイト「デジエルさん!ガジェットはAMFを持っていますから、通常の魔法は効きませんから注意してください。」

デジエル「解りました。」

はやて「リーン、いくで。」

リーン「はいです!」

二人「ユニゾン・インッ!」

はやてがリーンとユニゾンしてかまえる。

連矢「ガジェットか……初めて戦うな……。」

ウィングダム「ご主人様、お気おつけください。」

なのは「ユーノくんは下がって。」

ユーノ「いや、僕もやるよ。結構数があるしね。」

それぞれが構えてガジェットを迎えてると、ガジェットが一斉に攻撃してきた。

ユーノ「クッ！」

ユーノがとっさに全員をつつむ防御魔法で攻撃を防ぐ。

はやて「今や！」

リーン「フリーレン・フェッセルン！」

はやてとリーンが間髪を入れずにガジエットの動きを止める。

はやて「なのはちゃん！フェイトちゃん！」

なのは「うん！スターダスト……」

フェイト「サンダー……」

なのは「フェイト」「フォールツ！」

二人の魔法が大量のガジエットをのみこむ。

ヴィータ「おっ、二人ともやるな！こっちも負けてられないな。いくぞー！アイゼン！」

グラーフアイゼン『イエッサー。』

ヴィータが手にした鉄球をバラまく。

グラーフアイゼン『シュワルベフリーゲン』

ヴィータ「おおおおおおおっ！」

ウィータがシュワルベフリーゲンでガジェットを複数攻撃する。

連矢「なるほど。発生効果で攻撃をするのか・・・ならばウィンダム！」

ウィンダム「はっ！おまかせください！」

連矢が手をかざすと、目の前に魔方陣が展開する。そこにウィンダムが突っ込んで行く。

ウィンダム・連矢「風牙一閃！！」

魔方陣を突き抜けて出てきたウィンダムは緑色の光を纏って、ものすごい加速でガジェットの上空を飛行した。

ウィンダムは加速で起きた衝撃波で半分近くのカジェットを攻撃して消して行く。

デジエル「なるほど・・・ああするののか。ならばこちらも！」

デシエルは凍気を集中させ始める。

デジエル「ハアアアアアアアアア！」

集めた凍気を拳に乗せて打ち出す。

デジエル「ホーロドニー・スメルチ！」

デジエルの凍気が竜巻となってガジェットの上空に巨大な氷の塊を作る。

その氷はそのまま落下して残りのガジェットを押しつぶす。

フエイト「全滅……すごいですね。二人ともガジェット戦は初めてなのに。」

連矢「なに、これくらい出来ないの特務ではやっていけないからな。」

デジエル「私は皆さんのやり方をまねしただけですよ。」

そんな風に話していると、突然強烈な殺気が全員を襲った。

ヴィータ「なっ!」

はやて「なに?!この強烈な殺気!」

全員が周りを警戒すると、不意に二人分の声が響いてきた

???「だから言ったでしょ?こちら側の世界にもアテナの聖闘士セイントが来てるって。」

???「ああ……まさか本当に前聖戦の黄金聖闘士ゴールドセイントがいるとはな……」

ヴィータ「だ、だれだ!」

声のする方を見ると、黒い宝石の様な輝きを放つ鎧に身をつつんだ男とタキシードにハット帽、鎧と同じような黒い輝きを放つ仮面をした男が現れた。

「????」はじめましてかな？管理局の魔導師の皆さん、そして……」

タキシードの男の後を継ぐように、もう一人の鎧姿の男が話す。

「????」ひさしいな……アクエリアス水瓶座のゴールドセイント黄金聖闘士よ。」

鎧の男は、デジエルを見ながら話かけてきた。

なのは「え……ひさしいって。」

フェイト「あの人……デジエルさんの事を知ってる？」

デジエル「な……何者だ！私のことを知ってるのか?!」

デジエルは自分の事を知っているようなそぶりな事を言う男に食って掛かる。

それを聞いた鎧の男は少し訝しげてデジエルに話しかけてくる。

「????」……きさま、まさかこの俺を忘れたと言うのか？」

デジエル「私は記憶喪失だ！自分が何者なのか分からないんだ！」

「????」記憶……喪失だと？」

鎧の男がつぶやく。

「????」あはははははっ、いいね。記憶喪失とはまた面白くなってきた！あんたは俺好みの役者になってくれるな！くるくるくるくるくる、マールブルに混ぜってく舞台の上で踊る役者に！」

タキシードを着た男が薄ら寒い笑いをしながら言った。

「???」記憶喪失なのか・・・なら！もう一度貴様に教えてやる！」

鎧の男の力が体から噴出してくる。

「グイータ「クツ！」

なのは「うつつ！」

噴出された力でバランスを崩しそうになるのは達。

「???」俺は、冥王ハーデス様に仕える108の冥闘士<sup>スペクター</sup>を束ねる三

巨頭の一人！天猛星・ワイバーンのラダマンティスだ！」

「???」そして俺は天魁星・メフィストフェレスの杵馬<sup>よじま</sup>だ。」

**第17話 黎明と黄昏（前編）（後書き）**

今回は、おまけコーナーはお休みです。

第18話黎明と黄昏（中編）（前書き）

どうも剣 流星です。

更新速度を重視したら本編が少し短くなってしまいました。すいません。

ですから今回もおまけコーナーはお休みです。

次回の後編では書きますのでご了承ください。  
それでは第18話どうぞ。



## 第18話黎明と黄昏（中編）

### 第18話黎明と黄昏（中篇）

観測指定世界。

紋章の反応があつた地点から数キロの地点。

その地点を飛行魔法で飛んでいる者がいた。特務捜査課のアスミタ・

マニゴルド・カルディアの三人である。

三人はそれぞれ、かつて自分がまどつていた黄金聖衣ゴールドクロスの形をしたバリアジャケットを着て、紋章の反応があつた地点へと向かつていた。

アスミタ「！」

マニゴルド「どうしたアスミタ？」

アスミタ「……これは……魔力？いや、ちがう。これは小宇宙コスモだ！」

アスミタは突如現れた巨大な小宇宙コスモを感じ取っていた。

カルディア「どうしたんだよ、本当に。」

アスミタ「お前たち、感じないのか？紋章の反応があつた地点から巨大な小宇宙コスモが現れたのを。」

カルディア「小宇宙だと？」

アスマタに言われ、小宇宙を探るカルディア。

マニゴルド「まさか小宇宙がこんな所にあるわけがないだろう？」

そう言いながら、マニゴルドも小宇宙を探り始める。

マニゴルド「……これは魔力？……いや小宇宙か？クソツ、魔力の感じ方が小宇宙と似てるから、区別が付きにくい！」

アスマタ「区別が付きにくいのは仕方がない。魔力は小宇宙の一部だからな。小宇宙を呪文や道具で扱いやすいくらいまでレベルを下げた物、それが魔力。」

カルディア「そうだったな。小宇宙は習得も扱い方も難しいが、魔力は扱いやすいし、小宇宙よりも応用が利きやすい。俺たちも普段は扱いがしやすい魔力を使っているくらいだからな。」

マニゴルド「おい、おしゃべりしてる暇はないぞ。急がないと、先に行っている管理局の嬢ちゃんたちがやばい事になる。」

アスマタ「そうだな。では急ぐぞ！！」

そう言ってアスマタが飛行魔法の速度を上げて飛んで行き、他の二人も続くようにスピードを上げて付いて行った。

\*

紋章の反応があつた遺跡前。  
そこでなのは達は、ラダマンティスと杳馬やうまと名乗る物たちと対峙して  
いた。

なのは「冥王ハーデス？」

フエイト「スペクター冥闘士？」

はやて「なんのことや？」

ヴィータ「……紋章の反応があつたここにいると言ふ事は、  
お前等も魔王軍か!？」

ヴィータはラダマンティス達に向かって、声を張り上げた。

ラダマンティス「いや、違う。我々は魔王軍と協力関係である別組織の者だ。」

杓馬「そうそう、そして俺たちがここに来たのは紋章が目当てじゃなく、俺たち冥闘士スペクターの宿敵である、アテナの聖闘士最強の黄金聖闘士セントの一人である人物がここに来るって情報が入ったからその顔を見に来たんだ。」

ラダマンティス「しかし、まさかその聖闘士がきさまだったとはな、黄金聖闘士ゴールドセイント・水瓶座のデジエル!!」

ラダマンティスはものすごい殺気をデシエルに向けて放つ。

デシエル「クツ!!」

ラダマンティス「手を出すなよ杓馬!さて、前聖戦できさまと蠍座スコーピオンに不覚を取った借り、ここで返してくれる!!」

ラダマンティスは翼竜の咆哮のような声を上げながらデジエルに向かって跳躍する。

ラダマンティス「食らえ!!翼竜の轟きを!!!!」

ラダマンティスがデジエルに突撃する。

ラダマンティス「グリーディングロア!!!!」

デジエル「うわっ！」

連矢「ぐっ！」

なのは「きゃあ！」

ヴィータ「グッ！」

フェイト「うっっ！」

ユーノ「うわっ！」

はやて「ああっ！」

リン「キヤアッ！」

ドカッ！！

ラダマンティスの技はデジエルばかりか、その近くにいたなのはたちまでも吹き飛ばし、遺跡の壁に叩きつけた。

デジエル「な・・なんて威力の技だ。」

ラダマンティス「フン！堪えたか！そうでなくてはつまらんからな！」

ヴィータはラダマンティスを見据えながらヨロヨロと立ち上がる。

ヴィータ「なのは！あたい達がこいつらを押さえるから、ユーノを連れて先に遺跡の中の紋章を取りに行け！！！」

なのは「え?!でも!」

ヴィータ「いいから行くんだ!悔しいけど、今のあたい達じゃこいつらにはかなわない。精々足止めぐらが精一杯だ。だから、紋章を取ったらそのままここから撤退する!」

はやて「その通りやな。うちらじゃあいつらにかなわんのは、さっき食らった技で嫌と言うほどわかる。ならここは早々に撤退するのが吉や。」

フェイト「そう言う訳だからなのは達は紋章を取ってきて!」

連矢「頼むぞ。高町、スクライヤ。」

連矢たちはなのは達が紋章を持ってくるまでの間、ラダマンティス達を足止めする為に立ち塞がる。

ヴィータ「いけ!なのは!紋章を取ってくるんだ!」

???「おっと、それは困るな!」

突然声がしたと思うと、遺跡の近くにある岩の陰から突然誰かが飛び出してなのはに切りかかる。

なのは「!」

突然の新手の襲撃に対応が遅れるなのは。

しかし、新手の敵の攻撃は、なのはには届かなかった。

ユーバ「フン!気付いてたか。」

連矢「やはりさっきから感じてた気配はきさまだったか！黒騎士ユーバ！！」

ユーバの剣は連矢の小太刀二刀流で防がれてた。

ユーバは自分の攻撃を防いだ連矢から距離を置き、連矢と対峙する。

そして、ユーバの後ろから今度は、全身を黒い鎧に身を包んだ人物、メデイウムが現れた。

なのは「あなた達はたしかこの前現れた、魔王軍の黒騎士・ユーバと……」

メデイウム「魔王軍親衛隊隊長……魔剣士メデイウムだ。」

ユーバ「また会ったな、エースオブエース。」

なのは「クツ！」

なのはの脳裏に、この前のユーバとの戦闘の記憶が蘇る。ユーバに一撃も入れられずに敗れた時の事が。

なのは（まずい……あのラダマンティスとか言う人だけでも大変なのに、魔王軍まで……）

連矢「いけ！高町、スクライヤ！ユーバは俺が抑える。」

フェイト「いいから行ってなのは！はやく行って紋章を！」

はやて「二人が紋章をやく持つてきてくれるならその分早くここから撤退できる。」

ヴィータ「つまり、二人が早く紋章を持つてきてくれればその分あたしたちが早く安全になるってことだ。だから早く行け！」

ヴィータ達がなのは達を急かす。

ユーノ「なのは！」

なのは「……わかった。みんな気をつけて！」

なのはとユーノが遺跡内部に突入する。

ユーバ「行かせるか！」

連矢「おっと。」

ユーバがなのは達の後を追おうとした所、連矢が立ち塞がる。

連矢「お前の相手はこの俺だ！ティータの敵かたき！今日こそ撃つてやる  
！！」

ユーバ「フン！しつこい男だ！」

フェイト「なのは達は追わせない！」

フェイトはメデイウムの前に立ち、対峙する。

メデイウム「……………」



はやて「そつや、ここはうちらが死守する。」

ヴィータ「そうだ！」

はやてがヴィータと共に、杳馬前に立ち塞がる。

杳馬「おゝおゝ、さつそく舞台の上をグルグル回ってくれるね。」

やはり舞台は役者が回してくれないと面白くない。」

ラダマンティス「フン！紋章などに興味はない。今、俺がここに居るのは、貴様に借りを返す為だ！水瓶座アクエリアス！！！」

デジエル「お前の相手は私だ！来い！！！」

\*

遺跡内部。

中に突入したなのは達は遺跡内の中心にある紋章を設置してある大広間に入った。

大広間内は至る所が崩れていて、崩れた場所から外の光が差し込んでいた。

なのは「ここに紋章があるの？」

ユ一ノ「うん、構造上確かにここにあるはずなんだ。」

二人は内部を見回した。

すると中央付近、崩れた台のガレキに半分埋もれてる二体の胸像があった。

なのは「あれは！」

なのはは、ガレキに埋まっている胸像を見つけたのでそれに近づいた。

ユ一ノ「待つてなのは！うかつに近づいたらだめだ！」

なのは「え？」

なのはがユーノの声で振り向くと、突然ガレキに埋まっていた二体の胸像がオレンジと青白い光りがあたりを包んでいく。光りは胸像の胸にある紋章から放たれてくる。

ユーノ「うっ！」

なのは「な、なに?!」

強い光で思わず目をつぶる二人。

光りは二人の右手と左手に集束していく。

二人は、それぞれの手の甲に何かが集まってくるのを感じ取っていた。

やがて光りが完全に収まると二人は違和感を手の甲に感じたのでそれぞれの手を見た。

なのは「こ……これは？」

なのはは自分の左手の甲を見た。

そこにはオレンジ色の光を薄っすらとは放つ紋章が宿っていた。

ユーノ「まさか……この遺跡にあった紋章？」

ユーノは自分の右手の甲を見て言った。

そこには、青い光を薄っすらとは放つ紋章が宿っていた。

なのは「私たち……もしかして宿主に選ばれたの？」

ユーノ「みたいだね……」

そんな風に互いの紋章と顔を見ながら話していると背後から声が聞こえてきた。

「????」まさか、黎明の紋章と黄昏の紋章がこのような者たちを選ぶとは……。」

なのは「だれ！」

なのはとユーノは声に驚き、反射的に振り返る。そこには黒いローブを身にまとった女性がいた。

「????」私はゼラセ。太陽の紋章を見守る者。」

なのは「太陽の紋章を見守る者？」

ゼラセ「あなたたちは黎明の紋章と黄昏の紋章に選ばれたのです。」

ユーノ「紋章に選ばれた？」

ゼラセ「そうです。黎明の紋章と黄昏の紋章は、太陽の紋章のバランスを司る紋章です。……いいですかあなた達は紋章選ばれた。ですからそれに応えなければなりません。もし応えなければ……。」

ゼラセは鋭い視線で二人を射抜きながら言い放つ。

ゼラセ「私があな達を殺します。紋章を解き放ち、もっと相応しい者に渡す為に……。」

それを言うとゼラセは踵を返して大広間から出た。

なのは「待つて！紋章に応えるってなに?!」

なのはゼラセの後を追うように大広間を出たが、大広間の外にはすでにゼラセの姿はどこにもなかった。

## 第18話黎明と黄昏（中編）（後書き）

前回から登場してきた杵馬は本編のいたるところで出てきては、色々と裏でやる役割のキャラで行こうと思います。

裏で糸を引くキャラとしては最適なのですが、原作の方ではいまだに健在なキャラなので扱いに注意して行きたいと思います。

第19話 黎明と黄昏（後編）（前書き）

どうも剣 流星です。

なんか詰め込みすぎて、後編だけが異様に長くなってしまいました。

それでは第19話どうぞ。

## 第19話 黎明と黄昏（後編）

第19話黎明と黄昏（後編）

遺跡の外。ここでは、フェイト達とラダマンティス達が激しい戦いを繰り広げていた。

ヴィータ「このおおおおおっ!!！」

杓馬「おっと、危ない危ない。」

ヴィータはグラーファイゼンで杓馬に攻撃を仕掛けるが、杓馬はそれを余裕でかわしていく。

ヴィータ「ちょこまかちょこまかとかわしやがって!!いい加減に当たれよ!!！」

杓馬「いや、それ当たると痛そうだから、当たってやるわけにはいかないんだよね。」

杓馬は軽口を叩きながら、ヴィータの攻撃をかわす。

ヴィータ「当たれえええ!!！」

ヴィータはなおも攻撃をする。その時、後ろに控えていたはやてが



杳馬に攻撃を仕掛ける。

はやて「ヴィータ！下がって！」

はやての声でさがるヴィータ。

はやて「ブリューナク！！」

はやての魔法が杳馬を攻撃する。が、杳馬が腕を振ると、はやての攻撃がまるで時間が止まってしまったように停止してしまう。

はやて「またや……あの、時間でも止めてるの？」

杳馬「時よ留まれ、お前は美しい！……なーんてさ、嘘だと思わないか？」

はやて「？」

杳馬「だってさー、つまないだろう？右にも左にも回らない時計の針なんて。時計はくるくる踊らせてなんぼだろう？……そう思わないか？夜天の最後の主さん！」

はやて「な、なにを……」

杳馬「かつてはベルカで多くの敵を葬り、時には国さえも滅ぼした闇の書の騎士達。」

ヴィータ「……………」

杳馬「そして、そんな騎士達と共に闇の書の人格である祝福の風を

殺して自分だけ助かる主の少女。」

はやて「!!」

ヴィータ「て、てめ〜!!」

杳馬は薄笑いを浮かべながらはやて達の方を見る。

杳馬「かわいそうだよね〜祝福の風ちゃん。主の為にがんばってきたのに、主にも今まで一緒にがんばってきた仲間の騎士達にも見捨てられてさ〜。騎士達は今でも、優しい主の下でぬくぬくとやってくるのに、祝福の風ちゃんは名前だけ貰って捨て駒のように切り捨てられる。」

はやて「き・・・切り捨てて・・・ちがう!うちはリーンフォー  
スを捨て駒だなんて思ってへん!!」

はやては声を張り上げて杳馬の言ったことを否定した。

杳馬「でも結果的に切り捨てたんじゃないか。いいね〜、そんな祝福の風ちゃんを犠牲にして生き残り、自分は生を謳歌する。最高だよ〜夜天の書の最後の主ちゃん」

ヴィータ「いい加減にしろよ!!てめめめめめめめめめめ!!」

ヴィータが怒り心頭になって杳馬に襲い掛かる。

はやて「ヴィータ!!」

杵馬「おっと！」

ヴィータはグラーフアイゼンをめちゃくちゃに振り回しながら杵馬を攻撃する。

杵馬「はははははっ！いいね！言った側からぐるぐる回ってさ、そんな君達がこれからの戦いの渦を作ってく。うれしいね、綺麗なマールで」

ヴィータ「黙れっよ！！てめめめめめっ！！！」

ヴィータがさらにヒートアップする。

連矢「ヴィータ！一人で突っ込みすぎだ！！熱くなるな！！！」

連矢は熱くなっているヴィータに声を上げる。

ユーバ「他人の心配をしている場合か？」

ウィングダム「ご主人様！」

連矢「！」

ウィングダムの忠告でユーバの双剣に気付く連矢。

連矢は両手に持つてる小太刀形のデバイス・双月で攻撃を防ぐ。

連矢「ユーバ！！！」

ユーバ「どうした？今にも他の者達の助けに行きたいみたいだな？」

まつ、無理もないか。このままではあの時のように、お前はまた・・・仲間を目の前で亡くす事になるからな。そう・・・あのティードとか言う管理局の魔導師のように!!」

連矢「きさまっ!!」

連矢は右手の小太刀の柄尻を左手の小太刀の切っ先で打ち出す姿勢をとる。

連矢「小太刀二刀流・陰陽撥士!!」

左手の小太刀の切っ先で右手の小太刀の柄尻を打ち出し、その陰に隠れるように左手の小太刀も打ち出す。

ユーバ「フツ!!」

ユーバは一刀目の小太刀を右手の剣で打ち落とし、一刀目の影に隠れて飛んできた二刀目を左手の剣で打ち落とす。

ユーバ「バカめ!みずから武器を捨てるなどと・・・」

ユーバは武器を無くした連矢に、武器を捨てた行為を愚かだと言おうとしたが、その時にはすでに連矢が懐に入り、ユーバの顔に蹴りを入れてた。

ユーバ「グウツ!!」

連矢の蹴りで吹っ飛ぶユーバ。

連矢「ティードの事を言っただけを怒らせて隙を突くつもりだったよ

うだが当てが外れたな。・・・そんな挑発で俺が我を忘れるとでも思ったか？」

連矢は自分のデバイスを拾いながらユーバに近づいて言った。

ユーバ「なるほど・・・あの時様な青二才ではないと言う訳か。」

連矢「そうだ。貴様は俺がいる限り紋章に近づくことはできない。」

ユーバ「たしかに、お前相手ではいくらなんでも突破するのに時間が掛かる。このままでは俺は紋章に近づけない。だが他の者たちはどうか？」

ユーバが他の戦いを見る。

他の戦いはあきらかに、連矢達側が不利になっている。

メデイウムの相手をしているフェイトはメデイウムに何度か攻撃を当ててるが、そのどれもがメデイウムに殆ど効いてない。

ラダマンティスの相手をしているデジエルは、力が均衡しているのか、相手の攻撃は何かかわせるが、向こうもデジエルの攻撃をかわしているので有効打に欠けた戦いになっている。

ユーバ「デジエルとか言うやつ以外はかなり危ないぞ。そもそも、管理局の小娘共では相手になる所か、足止めも難しいな。・・・このままではあの小娘共・・・死ぬぞ？助けないのか？」

ウィンダム「不味いですねご主人様・・・」

連矢「ぐっ！」

連矢は言葉に詰まった。確かにこのままでははやて達は危ない。か  
とって、ユーバの相手をしている自分は動く事ができない。ラダ  
マンティスの相手をしているデジェルも同じだ。  
連矢が思考しているとユーバがなおも言ってくる。

ユーバ「あの小娘共が死んで、手が開いたメディウムや杓馬と共に  
貴様を討つのもいいが、それだと時間が掛かる。だから・・・」

ユーバはそう言うと、杓馬に声を張り上げて話かけた。

ユーバ「おい杓馬！」

ユーバに話しかけられユーバの方を向ける杓馬。

杓馬「うん？なんだい？ユーバの旦那。」

ユーバ「いつまで遊んでいるんだ？！お前の技ならここにいるやつ  
等全員を片付けられるだろう？！」

杓馬「ええ、まあ・・・」

ユーバ「ならとつと片付ける！」

杓馬「え？！・・・俺、こちらのお嬢さん方ともう少し踊ってい  
たいんですけどね。」

そう言いながら、杓馬ははやてとヴィータを見る。

ユーバ「いいからやれ！それとも、もたもたしてて紋章の回収に失敗してしまったとお前等の上に報告しようか?!」

杓馬「ウツ!・・・わかりましたよ。ではユーバの旦那達もラダマンティス様も俺の後ろに下がってくださいな。」

そう言うとメデイウムとユーバは杓馬の後ろに下がる。

ラダマンティスも下がろうとするが、その前に杓馬に話しかける。

ラダマンティス「杓馬。アクエリアス水瓶座を殺すなよ。やつは俺の獲物だ!」

杓馬「心得ておりますよ。」

ユーバ「四乃森のヤツも殺すな。やつを持っている真の風の紋章にはまだまだ用があるからな。」

杓馬「解ってますって。」

そう言いながら、杓馬はヴィータやフェイトの前に出る。

ヴィータ「・・・なんだ?何をするつもりだ?」

杓馬「さてお嬢さん方、俺としてはもう少しあなた方と踊っていたんですが、先を急がなくちゃならないんで、お嬢さん方の時間ステージは閉幕だ。」

杓馬のすぐ後ろに渦ができる。

杓馬「マーベラスルーム!!--!」

ヴィータ「な、なんだこれ?!」

フェイト「体が?!」

はやて「粒子状に……」

リン『渦に消えて行く!!!』

杳馬「その先は時間も物質もない世界……入れば量子レベルで分解され、その世界にバラまかれる……魂まで分解されちまいな!!!」

ヴィータ「う……うわあああああ!!!」

ヴィータ、フェイト、はやて、リン達の体が粒子状になつ、徐々に消えていく。

フェイト「まずい!このままじゃ!」

はやて「なんとかせな!」

リン『けど……どうすれば……』

4人の体がじわじわと消えてく。

連矢「はやて!」

デジエル「フェイトさん!」

連矢とデジエルははやて達のところに向かおうとするが、杳馬の作



る渦が邪魔して近づけない。

杳馬「さあ終わりだ!!」

そう言つてが杳馬マーベラスルームにさらに力を加えようとした時、何者かの声が響いた。

カルディア「おいおい、せっかく来たのにもう終わりにするのか？」

杳馬は聞こえてきた声にハツとなり回りを見回すが、次の瞬間体に激痛が走った。

杳馬「グッ！」

杳馬の体にはいつのまにか針で刺したような傷跡が付いていた。

カルディア「スカーレットニードル……どうだ、真紅の針の威力は？」

いつの間にか杳馬の側にカルディアが立っていた。

カルディアのスカーレットニードルを食らつてか、杳馬が作り上げたマーベラスルームは消えていた。

杳馬「お……お前は……？」

ラダマンティス「スコピオン蠍座!!」

カルディア「よう翼竜ワイバーン、久しぶりだな。」

ラダマンティス「貴様まで異世界イタに来ていたとは！」

マニゴルド「蠍座スコルピオンだけじゃないぜ！」

ラダマンティスが声のした方を向く。

フェイト達の側に、いつの間にかマニゴルドとアスミタが立っていた。

ラダマンティス「貴様等は?!」

アスミタ「お前達冥闘士の宿敵であるアテナの聖闘士セイントだ。私は、乙女座ルゴのアスミタ。」

マニゴルド「蟹座キャンサーのマニゴルドだ。」

ラダマンティス「乙女座バルゴに蟹座キャンサーだと?!」

杓馬「これで水瓶座アクエリアスを入れて前聖戦の黄金聖闘士ゴールドセイントが4人か……ちよつと不味いんじゃないんですか？」

アスミタ「?（前聖戦?）」

ラダマンティス「フン!どれだけ聖闘士セイントが来ようが、やる事は変わらん!前聖戦

の借りを返すだけだ!」

ラダマンティスはそう言うとカルディア達の方に体を向け、構えを取る。

カルディア「ほう？やるか！」

ラダマンティス「アトランティスで貴様に敗れた屈辱、ここで晴らしてくれる！！」

カルディア「いい気概だ。あの時のようにまた俺を熱くさせてくれよな、ワイバーン翼竜！！！」

カルディアも構えてラダマンティスと対峙するが、その時アスミタの声が二人にかかる。

アスミタ「待て、カルディア！」

カルディア「あん？」

カルディアは声をかけたアスミタの方に顔を向けた。

カルディア「なんだアスミタ？邪魔するなよ。」

アスミタ「戦う事自体は止めん。ただしワイバーン翼竜に聞きたい事があるだけだ。」

アスミタはラダマンティスの方に体を向けた。

ラダマンティス「聞きたい事だと？何が聞きたいバルゴ乙女座。」

アスミタ「さつきそのメフィストフェレスが私たちの事を“前聖戦のゴルドセント黄金闘士”と言った。お前自身もカルディアと戦った事を“前聖戦で”と言った・・・まるで私たちが戦った聖戦が終わり、さらにその後にも聖戦が合ったような口調だ。それは一体どう言う事

なのだ？」

ラダマンティス「……なるほど、その事についてか。」

ラダマンティスは納得したような顔をする。

マニゴルド「どう言う事だアスミタ？」

マニゴルドはアスミタに質問の意味を聞いてくる。

アスミタ「解らないのかマニゴルド。彼等は私たちの事を“前聖戦の黄金聖闘士”<sup>ゴールドセイント</sup>と言ったのだ。普通はただの黄金聖闘士<sup>ゴールドセイント</sup>と言えはいのに、そう言ったのだ。まるで私たちがいなくなつた後聖戦が終わり、さらにその後、我々の後を継いだ黄金聖闘士<sup>ゴールドセイント</sup>が現れ、そのも<sup>の</sup>達と冥王軍との聖戦が再び開かれたような口調だ。」

マニゴルド「そう言えばそうだな。確かに変だな。」

マニゴルドもアスミタの質問で疑問を感じ、ラダマンティスの方に体を向ける。

ラダマンティス「フ……良いだろう、冥土の土産に教えてやるう。」

ラダマンティスは構えを説いて話し始める。

ラダマンティス「……乙女座<sup>バルゴ</sup>の言っている事は概ね合っている。」

マニゴルド「なに？合っているだと?!」

ラダマンティス「そうだ。貴様等は、ただこの異世界に飛ばされた  
と思っ  
ているみたいだがそうではない。貴様等は世界の壁を飛び越  
えた時、時間の壁も飛び越えたのだ！」

三人「……な……なんだと?!」「」

ラダマンティス「……あの戦い……貴様らと戦った聖戦では、  
我々冥王軍はアテナ軍に敗北した……そして我々は再び封印され、  
二百数十年の時をすごした。そしてアテナの封印の効果が薄れ、我  
々は再び蘇ったのだ！」

マニゴルド「俺たちが居なくなつた後に……」

カルディア「聖戦は俺たち側の勝利で終わったのか……」

アスマタ「そして再び封印された冥王軍が蘇り、聖戦が再び起こつ  
た。という事なのか……」

ラダマンティス「そう、そして我々は再び今代のアテナ軍に戦いを  
挑んだが、今代のアテナは我等の隙を突き、冥界に聖闘士共と赴き、  
ついにはハーデス様の真の肉体が置かれているエリシオンにまで乗  
り込んで直接戦いを挑んだのだ！」

アスマタ「なつ！エリシオンに乗り込んだだと?!」

マニゴルド「す……すげーな……」

ラダマンティス「エリシオンの戦いでアテナと聖闘士共は双子神を  
倒し、ついにはハーデス様を撃つた……我々はまたしても破れ、

ハーデス様はその時に受けたアテナの一撃で魂に傷を負ってしまった。」

カルディア「……………」

ラダマンティス「セイント聖闘士共に破れ、瀕死の重傷を負った双子神はハーデス様を何とか助けようと側に近づいた時、双子神に語りかける者が現れたのだ……」  
「ハーデス様を助けるすべを知っている」と……」

アスマタ「な……なに?!」

カルディア「ハーデスを助けるすべがあるだと?」

ラダマンティス「双子神はその者の言葉を聞き、その者の世界であるこの異世界へ我々冥闘士スペクターの魂と共に訪れたのだ。」

連矢「なるほど……魔王軍に協力している組織はその冥王軍に協力しているヤツの組織だということか。」

今まで黙って話を聞いていた連矢が、魔王軍に協力している第三者の事を推理して言った。

ラダマンティス「その通りだ。その者の協力のおかげで、我々冥闘士スペクターは復活する事ができた。今はまだ復活した者の数は少ないが、必ず我々全員復活し、ハーデス様の復活を成し遂げてみせる!!そのため、我々の邪魔になりそうな貴様らをこの場で叩いておく!!」

ラダマンティスは話し終わると、再び構えを取った。

アスマタ「クツ！」

アスマタ達も構えを取ろうとしたとき、遺跡からなのは達が出てきた。

なのは「みんな大丈夫?!」

ユーノ「遅くなってごめん！」

フェイト「なのは！」

はやて「ユーノ君！」

遺跡から出てきた二人を見てフェイト達は駆け寄った。

ヴィータ「二人とも紋章は回収できたのか？」

ヴィータがなのは達に紋章の事について聞いてくる。

なのは「え?!あ・・・いや・・・その・・・」

ユーノ「なんと言うか・・・」

なのはとユーノは顔を見合わせる。

ヴィータ「？」

はやて「どうしたん二人とも？」

フェイト「まさか紋章を回収出来なかったの?!」

なのは「いや、いちよう回収はできたんだけど……」

そついいながらなのはとユーノはそれぞれの右腕と左腕の甲をみんなに見えるように差し出す。

フェイト「なっ！」

はやて「紋章が！」

ヴィータ「二人の腕に！」

なのはの左腕の甲にはオレンジ色の光りを放つ黄昏の紋章が、ユーノの右腕には青白い光りを放つ黎明の紋章が宿っていた。

連矢「……どうやら紋章が二人を選んだようだな。」

フェイト達の後ろでやり取りを見ていた連矢がつぶやいた。

はやて「紋章が二人を選んだ？」

連矢「ああ、二人は紋章の意思に選ばれ、宿主になったのだ。」

なのは「やっぱり……私たちは選ばれたんですね？」

連矢「ああ。」

ユーノ「……」

そんななのは達のやり取りを見ていたメデイウムは持っていた剣を



鞘に収めた。

メディウム「引き上げるぞユーバ。」

ユーバ「・・・そうだな、こちらは本来紋章が宿っていた胸像を回収するつもりでできたから、宿主から紋章を回収するために必要な封印球を準備してないからな。」

そう言いながらユーバも剣を収める。

杓馬「おや？旦那方は引き上げるんで？」

ユーバ「ああ、紋章は今のままでは回収できないからな。下手に宿主を殺して紋章が行方不明になったらさらに面倒な事になるからな。」

メディウム「我々は引き上げるが、お前たちはどうする？」

メディウムはカルディア達と対峙しているラダマンティスに話を振る。

ラダマンティス「しれた事！後光の憂いを断つ為にも、邪魔者であるこいつらをこの場でみな殺しに「引き上げるのだ！ラダマンティス！」っ・・・」

ラダマンティスの頭に響くように声が伝わる。

????（引き上げるのだラダマンティス。）

ラダマンティス（お言葉ではございますがヒュプノス様、今この場

でこいつ等を叩いておかなくては後々の災いになります。」

ヒュプノス（ラダマンティスよ。いかにお前でもゴールドセイント黄金聖闘士4人も相手にするのはさすがにきついであろう。・・・それにやつ等には魔王軍と潰し合ってもらわなくてはならない。其れまではこちらの戦力は温存しなくてはならない。）

ラダマンティス（しかし！）

ヒュプノス（すべてはハーデス様復活の為だ。）

ラダマンティス（！）

カルディア「おいどうした?!急に黙り込んで?」

カルディアは急に黙り込んだラダマンティスに話しかける。

ラダマンティス「・・・・・・・・我々も引き上げるぞ杓馬。」

そう言っただけ構えを解き、踵を引き返すラダマンティス。

杓馬「ああやつぱり引き上げるんで?」

それに続くように杓馬も行く。

カルディア「おい待てよ!このまま逃げるつもりか?」

カルディアは背中を向けたラダマンティスに話しかける。

ラダマンティス「・・・・・・・・今回の目的は貴様等の顔を見ることだ。」

だから、この勝負は預けておくぞ蠍座。スコルピオン」

そう言つてラダマンティスは目の前に転送用の魔方陣を開くとそこに入つていった。

杳馬「それじゃあ俺もこれで、次はもつと楽しい踊りを踊ってもらいますからね、夜天の主ちゃん」

はやて「なっ！」

ヴィータ「てめ！」

杳馬「管理局のエースちゃんにも今度、素敵な贈り物をしてあげよう」

なのは「え？」

杳馬「それではみなさんごきげんよう。」

杳馬は仮面の下で薄ら笑いを浮かべながら帽子を取つて仰々しく挨拶をすると、自分も魔方陣の中に入つて行つた。

ユーバ「四乃森・・・決着は次に持ち越したな。」

連矢「次で必ず、貴様の首を取る！」

ユーバ「せいぜい足掻くんだな。」

そう言うと、ユーバも魔方陣の中に入つて消えていき、メデイウムもそれに続くように入つた後、魔方陣は消えた。

デジエル「……行つたか。」

はやて「ハア、どうにか助かった見たいやな。」

フェイト「だね。」

そんな風にフェイトたちが気を抜いてると、カルディアがデジエルに話しかけてきた。

カルディア「ようデジエル。久しぶりだな。」

デジエル「……君はだれだ？わたしの事を知っているのか？」

カルディア「……どうやら報告にあつた通り、本当に記憶がないみたいだな。」

デジエル「？」

そんな風に会話をしているカルディアになのはが話しかけてきた。

なのは「あの……あなた達は一体？」

なのははカルディア達のことについて聞いてみた。

カルディア「俺たちは特務捜査課のもんだ。」

なのは「え？特務捜査課の人たちなんですか？」

なのははそう言つと、同じ特務捜査課の連矢の方を見た。

連矢「ああ、彼等は俺とおなじ特務捜査課の者であり、そして・・・  
デジエルと同じ世界出身の者達でもある。」

フェイト「え！デジエルさんと同じ世界出身の人なんですか？！」

連矢「ああ。」

はやて「そつか・・・だからデジエルさんの事を知つとつたんやな。」

ヴィータ「だな、同じ世界出身なら知つてもおかしくないからな。」

そんな風にはやて達が話しているとデジエルは不意にカルディアの肩をつかんで揺らしながら話しかけてきた。

デジエル「私のことを知っているんだな？！なら教えてくれ！わたしはどこのだれで、一体何者なんだ？！」

カルディア「お・・・おい落ち着けよ。」

カルディアは自分が見たことないような顔で聞いてくるデジエルに驚く。

アスミタ「落ち着きなさいデジエル。あなたが何者なのかは後でちやんと話しますから、今はこの場を離れましょう。」

連矢「そうだな。またユーバ達が引き返してくるかもしれないし、

まもなくジーンを乗せたアースラがこの世界に来る。転送可能なポイントまで移動しよう。」

はやて「そのほうがええな。話すのもここよりアースラ内の方がいいしな。」

フェイト「うん、そうだね。デジエルさんもそれでいいよね？」

デジエル「・・・そうですね・・・解りました、そうします。」

なのは「じゃあみんな移動しようか。」

そうやってなのは達は転移可能なポイントに移動し始めた。

そんななのは達を遺跡の上で見ているものがいた。ゼラセである。彼女の体は所々が透けていて、今にも消えそうな状態である。

ゼラセ「・・・最後に黎明と黄昏の紋章の宿主を見届ける事ができました・・・この身に残されている時間もこれで終わり・・・  
・後はわが紋章・・・星の紋章の後継者に託しましょう。頼みましたよ・・・わが後継者・・・メルル・・・」

そう言ってゼラセはこの世から消えていった。

\*

アースラ内にある会議室。

そこでなのはとユーノは紋章士であるジーンに自分達の紋章を見てもらっていた。

ジーン「やはりこれは黄昏の紋章と黎明の紋章ね」

フェイト「黄昏の紋章と……」

はやて「黎明の紋章……」

ジーン「そう、なのはさんが宿してるのが黄昏の紋章、ユーノさんが宿してるのが黎明の紋章と言うの。二つは太陽の紋章の力のバランスを取るために生まれた紋章で、太陽の紋章の眷属でありながら、真の紋章に近い力を持っているの。」

なのは「太陽の紋章の眷属……」

ユーノ「という事は、これは真の紋章ではないんですね？」

ジーン「ええ、真の紋章に近い力を持ち、この世に二つとないものだけだ。真の紋章じゃないわ。」

はやて「そうなんか、よかったわ。もしこれが真の紋章なら、なのはちゃんもユーノ君もこれから真の紋章のせいで苦労する事になる事になるから、正直、真の紋章でなくてほっとしたわ。」

ヴィータ「ホントだぜ。」

はやてとヴィータはなのは達が宿した紋章が真の紋章でない事に安堵した。

ジーン「たしかに二人の紋章は真の紋章じゃないけど、まったく宿主たちに影響がないとも言えないの。」

なのは「え？」

ユーノ「それ……どういう事なんですか？」

ジーン「二人の宿した紋章は、太陽の紋章の力のバランスを司る物なの。だからもし、太陽の紋章の力のバランスが崩れた時、紋章は宿主に力のバランスを取るよう仕向けるの。それに、黄昏の紋章は力を使いすぎると、宿主の命を削る性質があるから、力を使う時には十分注意してね。」



ヴィータ「な……命を削る性質だつて?!」

はやて「そんな物騒な物なんですか?」

ユーノ「外す事はできないんですか?」

なのはの身を案じ、外す方法を聞くユーノ。

ジーン「そうね……紋章が宿っていた胸像が無事なら何とかなつたかもしれないけど、あなた達から聞いた胸像の状態だと、とてもじゃないけど胸像に再び戻す事は難しいと思うの。」

ユーノ「そうですか……」

落胆するユーノ。

なのは「大丈夫だよユーノ君。用は紋章を使わなければ良いんでしょ?なら使わなければ良いじゃない。」

なのははユーノに笑顔で言う。

ユーノ「確かにそうだけど……ならなのは、たとえばどんな時でも紋章は決して使わないと約束してくれるかい?」

なのは「え?約束?」

ユーノ「うん、約束。なのはは時々無茶な事をするから心配なんだ。だから僕はなのはがいつもの無茶で紋章を使わないか心配なんだ。」

なのは「ユーノ君……わかった、紋章は絶対に使わないよ。」

約束する。」

ユ一ノ「絶対だよ。」

なのは「うん。」

\*

アースラの休憩所。そこにデジエルは一人過去の事に付いて悩んでいた。  
先ほどまで、カルディア達から自分の過去について聞いていたのだが、まるで他人の事を聞いているみたいでピンの来なかったのである。

デジエル「…………自分の過去か…………。」

フェイト「デジエルさん…………。」

いつの間にかフェイトが側にまで来ていた。

デジエル「フェイトさん」

フェイト「デシエルさん、昔の事について聞けたんですか？」

デジエル「ええ、聞けましたよ。わたしが異世界で女神アテナに仕える最強の黄金聖闘士ゴールドセイントの一人、水瓶座だアクエリアスということ。そしてわたしはその聖闘士セイントとしての任務の最中に行方不明になったと言ったことも聞きましたか…………。」

フェイト「？」

デジエル「全然ピンと来ないんです。過去の事を聞いても思い出すどころか、まるで他人の事を話してもらっているみたいなんです…………。」

フェイト「デジエルさん…………。」

デジエルは思い出せない過去の事で少し落ち込み気味になっていた。フェイトは何とか励まそうと言葉を捜して話しかけた。

フェイト「大丈夫ですよ！きっと戻りますって。わたしも記憶が戻るよう手助けしますから。」

デジエル「フェイトさん……」

フェイト「わたしだけじゃない、なのはやはやて達もいます。みんなも力を貸してくれますよ。」

デシエル「フェイトさん……ありがとう。」

デシエルは笑顔をフェイトに返した。

フェイト「い……いえ／＼／＼／＼／＼」

自分の過去はまだ戻らない……だが彼女たちが協力してくれると聞いた時、先ほどまで感じていた過去がない事に対しての焦燥感がいぶ薄らいだデジエルだった。

おまけコーナー

チャ〜ラ　チャ〜ラ　チャ〜ラ　チャーチャーチャー　（料理の○人のOPPの曲）

ピ「私の記憶が確かなら、このおまけコーナーは今回で15回（EX・中間発表含む）になるであろう。」

ユ「ピティ。」

ピ「そこで今回はスペシャル企画として、シャマル率いる料理研究会の研究発表をスペシャルゲストを交えてやっていこうと思います。」

ユ「ピティったら！」

ピ「え？なにユニ。」

ユ「“なに？”じゃないの！なに勝手にOPP変えてるの！」

ピ「いや〜毎回同じだと芸がないから、たまにはいいかな〜と思って。」

ユ「勝手な事しないの！」

ピツ「まあまあ、二人とも。それよりも早く進めましょうよ。今回のスペシャルゲストさんが待ちわびてますから。」

ピ「そうだったね。それじゃ今回のスペシャルゲストの召還いっくよ。コショウパツパツと。」

ピツ「ハ……ハ……ツクシユン……！」

パツ！

ユ「今回は山田花太郎さん作品“リリカルなのは君と響きあう物語”からの特別ゲスト、ロイドとゼロスの二人に来てもらいました。」

ロ「おい！なんで俺たちイスに鎖で縛られた状態で召還されんだ？！」

ゼ「そうだぜ！俺様たちゲストでしょう?!この扱いはひどいんじゃないの?!」

ピ「ゲストって言ってもゲストという名の生贄だし。」

ゼ「今生贄って言わなかった?!」

ピ「それに、縛らないと逃げるでしょ?」

ロ「当たり前だ！料理研究会の料理を食べさせられるんじゃ、だれ

だつて逃げ出す！」

ユ「まあまあ、大丈夫ですよ。」

ロ「へ？大丈夫つて……」

ゼ「何がどう大丈夫なの？」

ユ「はい たとえ二人が料理を食べて“あっち”に行つても、そこから二人を連れて帰つてもらつたために、あつちの入り口である黄泉よも比良坂つひらまかを行き来する事ができる。蟹座キャンサーのマニゴールドさんが待機してるから、遠慮なく逝つてきてください」

二人「逝く事前提かよ！！」

ピツ「みなさん、お料理の準備ができたようですよ。シヤマルさんが今もつて来ますから」

ピ「それじゃさっそくシヤマルさんと呼んでみましょうか？」

二人「いや！呼ぶな！！」

ピ「シヤマルさん、どうぞ」

シヤ「はいはい、料理研究会会長のシヤマルです。今回は料理研究会のメンバーの総力を集めて作った傑作の料理です。」

ロ「総力を集めての傑作つて……」

ゼ「どんだけ威力があるのよ！！」

ピ「ちなみに今回の料理はどういう料理なの？」

シャ「それはズバリ、」

ピ「ズバリ？」

シャ「究極のスープ……死ぬほど美味しいスープ、その名も“せきし積戸きめいかい気冥界波スープです。」

ロ・ゼ「名前からして不吉だ〜!!!」

シャ「それじゃあ早速試食してもらいましょうか」

ピツ「それじゃあ、私がお手伝いします。お二人共、はい、あ〜ん」

ロ「いや、いいって、いいって、いい……ぐりぐりぐり（無理やり口にスープを流し込まれる）」

ゼ「ロイド!……って今度は俺様?!」

ピツ「はい、あ〜ん」

ゼ「いい、いいって食べさせなくって、いいって……ぐりぐりお（無理やり口にスープを流し込む音）」

ピツ「ふ〜、任務完了。」

ピクピクツ（白目をむいて意識を無くす二人）



シャ「今二人は、美味しいあまり、“あっち”に行ってる最中ね。」

ピ「美味しいあまりにね。」

ユ「……不味いあまりの間違いだと思っただけですけどね。」

ピ「と……とにかく黄泉比良坂よみひらなかで待機しているマニゴールドさんに連絡を入れましょう。」

ピ「そうね、もしもマニゴールド？」

マ「あ？なんだ？」

ピ「今そっちにロイドとゼロスの二人が逝ったから回収お願いできる？」

マ「二人だ？それってよく、黄泉比良坂よみひらなかの死界の穴に真っ先に飛んで行って穴に飛び込んだ二人か？だったら回収は無理だぜ。死界の穴の下までは俺はいけないから無理だからな。」

ピ「え！無理なの？！」

マ「ああ、あの穴の先は、本当のあの世だから、俺でも手が出せない。」

三人「……………」

マ「とにかく俺には無理だ。じゃあな。」

プツン！（通信切れる音）

ピ「……………どうしようか？」

ユ「アスミタさんに協力を仰ぎましょう……………」

ビツ「そうですね……………あの人は死なずにあの世を行き来できる人ですからね……………」

ユ「早速連絡しましょう。」

その頃の三途の川の川岸

ゼ「お〜いロイド〜こっちに来いよ〜。」

ロ「おいゼロス！いつの間に川岸の向こうに行ったんだよ！そっち行っちゃ不味いつて！」

ゼ「いや〜それがさ〜結構居心地が良いんだわこれが〜。だからお前も来いよ〜」

ロ「……………本当か？本当に居心地が良いのか？」

ゼ「本当、本当、本当に……………イゴコチガイゾ〜（悪霊化した様な声）」

ロ「さよならゼロス。お前の事は忘れない。」

ゼ「ニ〜ガ〜ス〜カ〜〜!!」

ロ「嫌だ〜!俺は生きるんだ〜〜!!」

その後、アスミタが迎えに来るまで、ロイドは悪霊化したゼロスに延々と追い回されてたという。

ピ「いや〜さすがシャマルの料理だね〜。」

ユ「食べた途端にあの世に直行ですからね〜。」

ビツ「即死効果のある料理って……。」

ピ「ま、とにかく危険物の処理は済んだんだし、良いじゃない。」

ビツ「あ〜〜それなんですけど……。」

ピ「?なにがあるの?」

ビツ「実はシャマルさんにロイドさん達のお土産にと、今回の料理をもう一人分渡されたんです。」

ピ「え?!」

ユ「……………」



第19話 黎明と黄昏（後編）（後書き）

山田花太郎さん、ロイドとゼロスの召還ありがとうございました。

第20話 天秤座（ライブラ）（前編）（前書き）

どうも剣 流星です。

今回は前編後編に分かれてのお話です。

基本的には前・後編に分かれている話の場合、おまけコーナーは後編に載せるような形にしていきます。

楽しみにしている方、スイマセン。

それでは第20話どうぞ。

## 第20話 天秤座（ライブラ）（前編）

第20話 天秤座（ライブラ）（前編）

暗き闇の底の底、死の国・冥界。

その最終地である嘆きの壁の前にその男はいた。

黄金の鎧を身に纏い、同じような黄金の鎧を身に纏った11人の仲間と共に嘆きの壁を見据えていた。

彼の側には白い鎧と桃色の鎧を身にまとった少年2人がいた。

男「さあ、わかったら早くこの場を去れ!!」

男は少年二人に話しかけた。

桃色の鎧の少年「ろ・・・老師・・・」

白い鎧の少年「わ・・・わかりました。オレたちは必ずエリシオンまで行ってみせます。そしてこの聖衣クロスを必ずやアテナに・・・」

そう言つて二人はその場を離れた。

その時・・・黄金の鎧を着た十二人がふと微笑んだ。

まるで二人の少年たちの兄のように・・・。

そう・・・かれらは神話の時代から共に戦ってきた兄弟だったのだ。  
・

その兄弟たちに今さよならを告げる時が来た・・・

さらば熱き血潮の戦士たち・・・

さらば黄金の聖闘士たちよ・・・

黄金の鎧の男たち『いくぞ！！地上の愛と正義のために！！命と魂のすべてをそそぎこんで！！今こそ燃える黄金の小宇宙よ！！』

黄金の鎧の男たちの中心で弓矢を構えている男に黄金の力が集まる。

黄金の鎧の男たち『この暗黒の世界に・・・一条の光明を！！！！』

中心の男が黄金の力を集めた矢を放つ。

矢は激しい光を放ちながら壁に当たり、さらに激しい光を放ち辺りを包む。

男は光りに飲み込まれていきながら、自分の最後を感じとっていた。

これでいい・・・役目は終わった・・・そう思い、彼の意識は徐々に消えていった。

薄れいく意識の中で彼が最後に見たのは、彼の愛弟子が自分が敬愛す女神と仲間たちと共に冥王を討った姿だった。

それはこの戦いの結末なのか・・・それともただの幻なのかはわか



らない。

ただ彼はそれを見て満足そうな顔をして己の意識を手放した。

こうして彼はこの世界から消え去った。

\*

ここは聖時の別荘の居間。ここで聖時達は、ふたばと琴乃が焼いた

クッキーをいつものメンバーと共に似食べていた。

ピ「そうだ！裏山に行こう！！」

聖時「……は？」

突如声を上げたピティの言葉に間の抜けた声を上げる聖時。

ふたば「えつと……」〇？」

才人「なんだよいきなり“そうだ京都に行こう”的な事を言って。」

アキ「どうしたの一体？」

聖時達は食べている手を止めて、ピティに突然の発言について聞いてみた。

ピティ「いやね、この前あの張とか言うやつにやられた傷を直す為に、世界樹の雫や回復薬を使っちゃったじゃない。」

猛「そう言えばそうだったな。」

アルフ「ああ、ピティや聖時だけじゃなく、一見傷がなさそうなたばでも、結構服の下は蒼痣だらけだったからね……で？」

ピティ「うん、それで使って無くなった分の補充をする為にも、裏山に行って回復アイテムの補充をしようと思うんだ。なにかあった時に困るといけないし。」

剛「確かにそうだな。またいつあんな事があるかもしれないしな。」

士郎「そうだな。用意しておくに越した事はないな。」

ピティ「そうですね。聖時もそう思うよね?」

聖時「……………確かにそうだな。」

ピティ「でしょう。」

聖時「で、本音は?」

ピティ「もう一度虹の○が食べたい。」

聖時「……………やっぱり、そんなことだろうと思った。」

聖時はピティの発言にあきれた顔をした。

ピティ「だって食べたいんだもん!」

聖時「“食べたいんだもん!”って……………」

才人「ものの見事な身勝手な理由だな。」

アキ「ま、無理ないけど。虹の○、美味しいもんね。」

そんな風に話していると、明日香が質問をしてきた。

明日香「ねえ聖時おにちゃん、虹の○ってなに?」

聖時「あ、そっか、明日香ちゃん達は食べた事ないんだっけ。」

猛「なんだそれ？食い物なのか？」

才人「ああ、木の実のような物だよ。」

猛の質問に才人が答える。

アキ「この神谷邸の裏にある山の中で、まれに落ちてる事があるの。食べられるんだけど、これがものすごく美味しいの。」

アキの答えを聞き、明日香が物欲しそうな顔をする。

明日香「へえ、ものすごく美味しいんだ……ねえ！私もそれ食べたい！」

聖時「へ？」

明日香「食べたいよ、聖時お兄ちゃん！」

聖時「いやね、裏山は普段は立ち入り禁止だから入っちゃダメなんだけど……」

才人「いいじゃんか、ちょっと前までお前、黙ってよく入ってたじゃないか。」

聖時「けどなー。」

明日香「猛お兄ちゃん達も食べてみたいでしょ？」

明日香が猛に話しを振った。

猛「そうだな、俺も食べてみたいな。それに裏山って変わったアイテムが落ちてるんだよな。俺、それも見てみたいから、裏山に行くのには賛成だな。剛と士郎は？」

剛「俺もその実も食べてみたいし、アイテムにも興味あるから賛成・かな？」

士郎「俺は反対なんだけど、個人的にはその虹の○が気になるから中立的な気分かな。」

聖時「ふたば達は？」

ふたば「私は反対。危険だから立ち入り禁止なんだから入らない方がいいと思う。」

才人「俺は賛成。虹の○食べたいから。」

アキ「私は反対。」

アルフ「私も反対だな。理由はふたばと同じ。」

聖時「琴乃は？」

琴乃「私は反対です。危ない所に進んで入ること無いと思います。」

聖時「賛成4、反対4、中立1か・・・さーてどうしようかな。」

聖時は全員の話聞いて思案した。

ピティ「ねえ、行こうよ。」

ふたば「ダメです。危険です。」

聖時「うん。」

意見が真つ二つに分かれる。

士郎「聖時の意見は？」

聖時「僕？僕としては虹の○うんぬんはともかく、回復アイテムが少なくなつたから補充はしておこうと思つていたんだ。」

ピティ「なら行こうよ。」

ふたば「ダメ！聖時一人で入ったら危ないよ！前はよく行つてたつて言つてたけど、最近言つてないんでしょ？だつたら危ないよ。」

猛「なあ、ふたばは聖時一人で行つたら危険だから行かせられないんだろ？」

ふたば「？ええ。」

猛「だつたら……」

\*

今聖時は裏山の中にいた。アルフと士郎の二人と共に。

なぜこうなったかと言うと、猛が一人で行くから危ないと言うことをふたばが言っていたので、サポーターとして聖時に二人付けければ大丈夫だと言って話の流れで強引にまとめた。

アルフ「しかし、一見どこにもある普通の森にしか見えないんだよね。」

アルフが聖時の後をついていきながら周りを見ていった。

聖時「確かに一見だたの森に見えるけど、時々変な植物や物なんかがあったりするから油断しないで。」

「  
士郎「ああ、しかし・・・ここに来るまで結構色んな物を拾ったな。」

士郎は自分が今持っている、拾った物を見ながら言った。

アルフ「えっと、たしか拾った物は薬草とキメラの翼、それとひのきの棒と祝福の杖？だっただけ？」

聖時「ああ、祝福の杖を拾えたのは良かったよ。たしか父さんの部屋にあったアイテム図鑑によると、それは傷を癒す力のある杖なんだ。」

アルフ「へへ、回復アイテムの代わりになるね。」

士郎「そうだな、けど拾う際には十分注意しないとな。」

アルフ「そうだね、さっきみたいに人食い箱だったら洒落にならなからね。」

そんな風に話しながらある程度進むと、前方に少し森が開けた場所が見えてきた。

聖時「あれ？あれって・・・」

士郎「どうした聖時？」



聖時は前方の開けた場所に大きい木の実のような物が落ちて  
いるのを発見し、それに近づいた。

聖時「やっぱりの実だ。」

アルフ「え、虹の 見つかったの?!」

士郎「ホントか?!」

聖時に続くようにアルフと士郎も近づく。

聖時「ああ、しかも側に世界樹の雫まで一緒に落ちてたよ。」

聖時は一緒に落ちてた世界樹の雫を拾って見せた。

アルフ「やったじゃない。」

士郎「一石二鳥だな。」

聖時「ああ、このポイントは結構こう言ったアイテムが比較的落ちて  
る場所なんだけど、それでも世界樹の雫なんかはなかなか落ちて  
ないから、結構ラッキーだったよ。」

士郎「ああ、そうだな。」

アルフ「さて、実も世界樹の雫も見つかったし、さっさと戻るかい。」

聖時「そうだね。早く戻って 実を皆で食べよう。」

士郎「そうだな。」

そう言いながら聖時達が世界樹の雫と虹の をもって今来た道を引き返そうとしたとき、実が落ちてた場所から突然何かにひびが入ったような音がする。

聖時「な、なんだ?!」

アルフ「何の音だい?!」

士郎「これは?!」

聖時達は音がした方向を見る。するとそこには空間の一部分を切り抜いたように漆黒の空間がそこにあつた。

聖時「なんだあれ?!」

アルフ「あれは! (空間の亀裂!)」

漆黒の空間は大体1メートルぐらいで、その場に浮かんでいた。

聖時は空間の中を目を凝らして見る。

聖時「おい! なにかこっちに来るぞ」

聖時は空間の中から何かがちら側に来るのを見た。

士郎「おい、何かってなんだよ?!」

聖時「わかんないよ!」

アルフ「来るよ！」

アルフの言葉で二人は空間のある方を再び見た。

空間の中の“何か”は徐々に大きくなり、やがてこちら側に出てきた。

聖時「あれは……」

アルフ「人だ！」

空間から現れたのは20代ぐらいの男で上半身裸、背中に虎の刺青のような物していて、至る所にケガをしていた。

男が空間から出てくるとそのまま地面に倒れこみ、空間はその口を閉じた。

聖時「……」

聖時は警戒しながら倒れている男に近づき、男の側に屈む。

アルフ「聖時……そいつ生きてるのかい？」

聖時は男の脈を計る。

聖時「……大丈夫、生きてるよ。」

士郎「……そっか、生きてるのか。」

士郎とアルフは胸をなでおろした。

アルフ「それでどうするんだい？コイツ。」

聖時「・・・ケガもしてるみたいだし、このままにしておけないから、とりあえず家に連れて行こうと思うんだ。」

アルフ「それがいいね。」

士郎「病院には連れて行かないのか？治療するんだつたらその方がいいと思うんだけど。」

聖時「病院に連れて行くって言っただって、ケガの事やこの人の事どう説明するんだよ。立ち入り禁止の裏山の中で、変な空間から出てきたって言うのか？」

アルフ「そんな事話したら、あたし達の方が頭のどっかが悪いんじゃないかって思われて、あたしらまで入院する羽目になるよ。」

聖時「ケガの方はさっき拾った祝福の杖で治せる範囲の怪我みたいだから大丈夫だよ。」

士郎「そうなのか？」

聖時「ああ、士郎、杖貸して。」

士郎「ああ。」

士郎は先ほど拾った杖を聖時に渡す。

聖時「祝福の杖よ……この者に祝福の奇跡を……」

聖時は杖に呼びかけながら倒れている男に向かって杖を振るった。

杖から光りが降りそそぎ、傷がみるみる塞がっていった。

士郎「すごい……これが杖の力か……」

士郎は杖の力に驚く。

聖時「これで傷の方はいい、後は運ぶだけ、二人とも手伝って。」

士郎「ああ。」

アルフ「わかったよ。」

聖時は士郎とアルフ、三人で倒れていた男を籠にある神谷邸に運んで行った。

\*

ここは聖時の別荘の内の客間。ここのベットに聖時達が裏山で倒れていた男が寝かされていた。

その周りに聖時達が集まって男の事について話し合っていた。

聖時「……とりあえず運んで寝かせたけど、この後どうしようか？」

剛「どうしようも何も、この人の意識が戻らないとどうしようもないんじゃないか？」

琴乃「たしかにそうですね。この人がどこの誰なのかもわからないんですからどうしようもないですよね。」

ピティ「そうですね。」

男「う……うん。」

聖時達が話していると、男が寝ている方から声が聞こえる。  
聖時達は男が意識を取り戻したのかと思い、全員が様子を見る為に近づく。

男「う……ここは……」

男は目をゆっくり開けながら、寝ている状態で首だけを動かして周りを見る。

明日香「あ、聖時お兄ちゃん、気がついたみたいだよ。」

聖時「大丈夫ですか？僕の言葉わかりますか？」

聖時は男の意識がハッキリしてるのか確認する為に話しかけた。

男「あ、ああ……ここは一体？お主は？」

男は聖時に質問しながら上半身を起こした。

聖時「僕の別荘です。僕の名前は神谷聖時。あなたは山の中にある黒い歪みみたいな物から出てきたんですよ。」

男「黒い歪み？……ワシがそこから出てきたと？」

聖時「はい。」

男は聖時の返事を聞くとしばらく思索でもするよつな顔をする。

男（どういうことだ？ワシは確か、冥界の嘆きの壁の前に居たはず・・・だがここはどうも冥界には見えないし、こやつらも冥界の住人や冥闘士には見えない）

そんな風に男が思索していると、アルフが聖時の後ろから男に話しかけた。

アルフ「お取り込み中申し訳ないんだけど・・・」

男「うん？なんじゃ？」

アルフ「あたしはアルフつてもんだけど、あんた名前は？」

男「うん？おお、そう言えば名乗ってなかったな。ワシの名前は童虎ウコという。」

童虎と名乗った男は頭を下げ礼を言った。

ふたば「童虎さんですか・・・私は渡良瀬ふたばと言います。」

才人「俺は平賀才人。」

アキ「藤宮アキです。」

士郎「衛宮士郎だ。」

猛「八岐猛。」

剛「大斗剛です。」



琴乃「白鳥琴乃しらとりことねです。」

明日香「妹の明日香です。」

才人達がそれぞれ自己紹介をする。

童虎「ふたばにアキ、士郎に猛、剛、琴乃と明日香か、どうも世話をかけたみたいだな。」

琴乃「い・いえ。私たちはたいした事してません。殆ど聖時さんがやりましたから。」

童虎「そうなのか？では改めて礼を言うぞ聖時。」

聖時「い、いいえ、当然の事をしたままでですよ。……ところで童虎さんはどうやら中国の人みたいですけど、どうして黒い歪みみたいな物から出てきたんです？」

聖時は童虎に向けてなぜ歪みから出てきたのかを聞いてみた。

童虎「その前に、おぬし等は日本人みたいだが、ここは日本なのか？」

聖時「え？ええ。そうですけど……」

童虎「ならスマンがグライド財団に連絡を取って欲しいんじゃないか？」

聖時「は？グライド財団？」

才人「なんだそれ？剛、聞いたことあるか？」

剛「いや、聞いたことないな・・・俺は結構財団や財閥と言ったそつち関連の事については結構詳しいんだが、グラードなんて名前の財団なんて聞いたことがない。」

童虎「聞いた事がないじゃと？あの日本有数のグラード財団じゃぞ。つい最近、ギャラクシーウォーズ銀河戦争とか言う格闘技の催し物の主催をやって新聞などの紙面に載ったはずじゃが？」

聖時達は互いに顔を見合わせて首を横に振る。

童虎（どういうことじゃ？ここはまず地上のはずなのは間違いない。しかしグラード財団や、最近話題に取り上げられたギャラクシーウォーズ銀河戦争の事まで知らないとは一体？）

童虎は再び思索し始めると、アルフが童虎に話しかけてきた。

アルフ「なあ、童虎って言ってたっけ？なんかお互いの情報のズレがあるみたいだから、まずはお互いの情報を提示しあおうじゃないかい？」

童虎「・・・そうじゃな、確かにその方がいいな。」

童虎と聖時達は互いの持っている情報を交換し合い、そのズレを捜し合った。

\*

聖時「………グライド財団、セイント聖闘士、アテナ、大洪水、ポ  
セイドン、冥界、ハーデス、グレイテストエクリプス……どれも  
信じられないものばかりだ。」

聖時達は先ほど童虎から聞かされた事を聞いて信じられないという  
顔をした。

童虎「ワシの方こそ驚いたぞ。魔術に魔法、それに使い魔など、と  
て信じられないが、こうして使い魔その物を見ると信じるしかない

な・・・」

ピティ「でしょ？私の姿を見てまだ使い魔のことを信じられないのなら、そんなヤツはよっほどの石頭かバカよ。」

ピティはそう言いながら童虎の前を飛び回る。

ピティの姿が見えるようなので、どうやら童虎は魔力があるみたいだと聖時は思った。

アルフ「しかしこうやって情報を交換すると、お互いの情報にズレがある事に気がついたんだけど・・・どうやら童虎、あんたこの世界の人間じゃないね。」

聖時「え？この世界の人間じゃない?!」

ピティ「それどう言う事？」

聖時達はアルフの言葉に驚く。

童虎「うむ、やはりそうとしか思えないな・・・どうやらワシはこの世界ととてもよく似ている世界・・・俗に言う平行世界から来たみたいじゃな。」

ふたば「平行世界ってあのよくSFなんかに出てくるあの?」

聖時「ああ、多分それで間違えないと思う。世界の進む選択で、もし別の選択を選んでいたらと言うifの世界・・・それが平行世界。」

「

アキ「つまり童虎さんはその平行世界から来たって事なの？」

アルフ「ああ、それならお互いの言っている事がかみ合わないのもうなずけるよ。．．．それで、あんたこの、どうするんだい？」

聖時「え？どうするって．．．」

童虎「それなんだが．．．できれば元の世界に戻りたい。．．．おぬし等、ワシが元の世界に戻る方法に宛てかなにかないか？」

聖時「．．．いいえ、童虎さんの世界に行ける方法も知りませんし、宛もありません．．．」

童虎「．．．そうか。」

童虎が落胆したような顔をする。

聖時「あ．．．あの．．．元の世界に戻る方法、僕の方でも探してみますから、今はとりあえず体を直す事に専念してください。目に見える傷やケガは直しましたが、まだ完全に治ったわけじゃないんですから。」

童虎「そうだな．．．まずは体を治す事に専念しよう。スマンがしばらく厄介になるぞ。」

聖時「いえ、お気になさらないでください。」

童虎はまだ痛む体を横にしながら再びまぶたを閉じて眠りに付いた。

（後編）  
（）

第20話 天秤座（ライブラ）（前編）（後書き）

最近リアルが忙しすぎてなかなか執筆の時間が取れませんので、もしかしたら更新が今後少し遅くなるかもしれませんが、本当にスイマセン。

第21話 天秤座（ライブラ）（後編）（前書き）

どうも剣 流星です。

今回のおまけコーナーで全体の話の流れについて書きます。  
それでは第21話をどうぞ。



## 第21話 天秤座（ライブラ）（後編）

### 第21話 天秤座<sup>ライブラ</sup>（後編）

ケガをした童虎を別荘に連れ帰って、別荘内時間で数日後の別荘の居間。今ここに才人、猛、剛、明日香、アルフの4人が集まっていた。四人は居間にあるソファーに座り話し合いをしていた。内容は童虎の今後の事についてである。

童虎のケガはもう殆ど治ったので、別荘の外での生活をさせようと言うことになり、童虎に外で生活できるようにするにはどうしたらよいかの意見を出し合っていた。しかし、アルフは他の人達の話聞きながら別のことを考えていた。

アルフ（まいったな。童虎は多分デジエル達と同じ世界の人なんだろうけど、この事をフェイト達に話すと、今まで黙っていた聖時達の事まで話さなきゃならなくなるんだよね。かと言ってこのまま黙っている訳にはいかないしね。ハア）

アルフはフェイトに黙っている事が増えた事に対して気が重くなり深いため息をついた。

明日香「？アルフお姉ちゃんどうしたの？深いため息なんてついて

ー

アルフ「え？！いい、いやなんでもないよ！」

明日香「？そう。」

明日香が疑問に思いながらもアルフの返事を聞いて引き下がる。

才人「おいアルフ、ちゃんと話聞いてたのか？」

アルフ「も・もちろん聞いてたよ。たしか童虎を猛の父親の知り合いつて事にして、武者修行で中国から来たつて設定にするんだろ？そして、途中で路銀がなくなつたから、それを稼ぐため聖時の家の庭師として神谷家で住み込みで働けるようユ二に話を通す事にしたつて。」

剛「ちゃんと聞いていたみたいだな。それじゃあこの事を童虎さんに話すつてことでいいよな。」

猛「聖時が良いつて言うならいいと思うぞ。」

明日香「私も。」

才人「俺もそれでいいと思う。聖時の家つて平屋建ての日本家屋で、しかも江戸時代の武家屋敷並みに広いから、掃除や庭の手入れが大変だつて聖時言つてたから、ちようどいいんじゃないか？」

アルフ「そうだね・・・私も良いと思うよ。けど・・・良いのかい？ここに居ない連中の意見を聞かなくて？そもそも他の連中はどこに行ったのさ？」

剛「士郎は聖時から調合室を借りて、また機械いじりや調合やつてるよ。」

アルフ「よくやるね〜士郎も。」

明日香「お姉ちゃんたちは今お昼ごはんの準備してるよ。」

アルフ「え、お昼？もうそんな時間だったのかい。そう言えばお腹がすいたね〜。」

アルフは自分が空腹なのを感じないぐらいに悩んでいたのだなと思  
い、空腹のお腹み手を当てながら思った。

剛「聖時とピティは鍛錬してるよ。なんか最近シグナムさんとの  
手合わせがないからの確に指導してくれる人がいなくて困ってるっ  
てボヤいてたぞ。」

アルフ「そう言えば、シグナムが忙しいから、ここ最近手合わせが  
できないって言ってたね……。けどこれはいい機会だとあたしは  
思うよ。」

剛「どういうことだ？」

アルフ「聖時がこれ以上強くなるには魔法の事などを含めてやって  
いかなきゃならないから、聖時が魔法を使う事をシグナムに秘密に  
している以上、シグナムにこれ以上支持しても先には進めないよ。  
これを気に聖時はちゃんとした師を持った方が良いとあたしは思う  
よ。」

剛「……確かにそうだな。」

剛はアルフの言うことに感心して、ウンウンとうなずいた。

琴乃「みなさ〜ん、お昼ができましたよ〜」

話が切れたちようどいい時に、琴乃、ふたば、アキの三人がお昼ご飯をお盆に載せて居間に入ってきた。

ふたば「今日は新しい料理のレシピを手に入れたのでそれにしました。」

才人「へ〜、どんな料理だ？」

才人がお盆に載っている料理を見ながら聞く。

ふたば「ニンニクスパゲティーです。」

アルフ「へ〜、ニンニクスパゲティーかい。なるほど、さっきから漂ってくる香りは、ニンニクだったのかい。単純だけどおいしそうだね。」

明日香「本当、おいしそう〜。」

スパゲティーから漂ってくるニンニクの香りが食欲をかきたて、ますますスパゲティーがおいしそうに見える。

ふたば「ニンニクは焦げやすい素材ですから、焦がさずに調理するのに結構神経使いました。仕上げに、バジリコを入れています。バジリコはニンニクと相性が良いですから、ニンニクの香りが引き立たつんです。」

ふたばはそう言いながら、料理をテーブルに並べていく。

ふたば「あれ？そう言えば、聖時とピティ、士郎君は？」

ふたばはこの場に居ない人物達の事を才人達に聞く。

才人「士郎は調査をやってるよ。また変な機械を調査して、この前みたいに別荘を壊さなきゃいいけどな。」

才人はこの前士郎が調査した装置、新しい冷房装置の事を思い出す。

猛「たしか冷気を発生させその周辺を冷やす装置だったよな。」

剛「ああ、しかも強力すぎて、上空に直径15センチほどの電を発生させるんだもんね。」

ふたば「当たり所が悪ければ死んじゃいますよね。」

才人「だよな。あと聖時達は裏庭の林で鍛錬だそうだ。」

ふたば「裏庭ですか・・・私、お昼だっけ呼んできますね。」

琴乃「そうですか？では私は士郎さんと呼んできますね。」

アキ「それじゃあ、私は童虎さんと呼んできますね。」

猛「そうか、じゃあ頼むわ。」

ふたば「はい。」

そう返事をしながら、ふたば達は居間を出て行った。

\*

別荘の裏庭にある林の中。

聖時はそのなかで、刀型のストレージデバイスを構えて立っていた。

聖時「いいぞ、ピティ。やってくれ！」

聖時は自分から離れている場所にいるピティに合図を送る。

ピティ「オツケー。」

ピティはそうついいながら林内に仕掛けてを動かした。

すると聖時の周りから木の矢が無数飛んできて襲いかかる。

聖時はそれを飛天御剣流の先読みと能力の先読みでかわして行き、かわしきれない物はデバイスで弾く。

そうやって聖時は飛んでくる矢をすべてかわしていく。

やがて飛来した矢をすべてかわした聖時はデバイスを鞘に収めて呼吸を整え始めた。

聖時「・・・・・・・・・・」

ピティ「おみごとー！」

仕掛けを動かしたピティが飛んでくる。

聖時「・・・・・・・・・・」

ピティ「？とうしたの聖時？」

浮かない顔をする聖時を見てピティが声をかけた。

聖時「いや・・・・・・・・こんな修行じゃダメだと思ってね・・・・・・・・。」

ピティ「え、どうして？」

聖時「これは所詮仕掛け、飛んでくる矢の場所なんかは決められているから、実戦での攻撃のような柔軟な攻撃方法が出せない。」

ピティ「え、それってつまり・・・・・・・・」

聖時「ああ、これじゃあシグナムさんとやっている手合わせみたい

な鍛錬の代わりには程遠い。」

聖時はシグナムとの手合わせを思い浮かべた。

シグナムとの手合わせは、こう言った一人でやる鍛錬のどれよりも  
実戦に近いものが有った。

現に、張との闘いで、聖時が張の攻撃をある程度かわす事ができた  
のは、シグナムとの手合わせをしていたからである。

ピティ「うん、やっぱり一人でやる鍛錬ではここいらが限界かも  
ね。」

聖時「うん・・・やはり、これからは誰かに師事してもらわない  
と、難しいかもね。」

聖時はピティと一緒に悩む。するとどこからともなく二人に声をか  
ける者が現れた。

童虎「ほほう。面白そうな事をやってるな。」

聖時・ピティ「え?!」「」

二人は声がした方に顔を向ける。

童虎「よう!」

そこには手を上げながらこちらに近づいてくる童虎がいた。

童虎「少し見せてもらったが、なかなかの動きだったな・・・だ  
がおぬし自体はあまり満足していないみたいだな。」



聖時「え?!」

聖時は今、自分が悩んでいた事を言われ、一瞬驚く。

ピティ「よく分かったわね。」

ピティが感心しながら童虎に聞く。

童虎「なに、今のお前の顔を見れば誰でもわかる。で、なぜそんな浮かない顔をするのだ?よければ話してみる。」

聖時「……………実は……………」

聖時は自分が今、鍛錬で悩んでいる事に関しての事を童虎に話した。童虎は聖時の話に頷きながら黙って聞いた。

童虎「……………なるほど。つまりお主は一人でやる鍛錬に限界を感じ、自分の的確に指導してくれる、師のような人物が欲しいと言っただな。」

聖時「……………はい、しかし自分にそれをしてくれる人物の心当たりがなくて困ってるんです。」

童虎「なるほどな……………よし、ならその役、ワシがやってやる。世話になってる恩もあるしな。」

聖時「え?!」

聖時は童虎が言った言葉に驚く。

ピティ「な……ちよつとあんたできるの？あんたから話を聞く限り、あんたたち聖闘士セイントは素手で戦うのが基本でしょ？聖時のような剣を使う人の指導なんて出来るの？」

ピティが童虎が言った事に対しての疑問をぶつけた。

童虎「そのことなら心配ない。ワシの守護星座、天秤座はのう、8の聖闘士セイントの中でも唯一武器を使う事が許されているんじや。じゃからワシが纏っていた天秤座黄金聖衣には12の武器が付いており、本当に必要と判断した時にこれを使うことが出来るんじや。」

ピティ「つまり童虎は、聖闘士セイントの中でも武器を使う事が出来る聖闘士セイントだつて事なわけなの？」

童虎「ま、そう言う事じや。だからお主の剣についても見てやれることが出来るし、手合わせをしてやる事も出来る。」

童虎は聖時に向けてそう言い放つ。

聖時「ほ……本当ですか！？ならお願いします。自分にどうか指導をしてください！！」

聖時は童虎に頭を下げお願いする。

童虎「別にかまわんど。だが……」

聖時「？」

童虎「なぜそうまでして強くなりたいんだ？」

童虎の言葉に聖時は少し悩んだ後に答えた。

聖時「正直・・・最初は敵討ちだったんです。僕の母と妹はテロリストに殺されたのでその敵討ちと言うのが大きかったんですが、この前、ふたば達を守るために剣を振るって守った時、分かったんです。僕が本当に強くなりたかった理由は、自分の手で大切な物を守るようになるにたかつたからなんです。あの時のように何も出来なままでいる自分のままだったのが嫌で・・・だから強くなるうとしたんだって・・・」

聖時の言葉を聞き、童虎は満足そうな顔をした。

童虎「合格だ。聖時、今からワシがこの世界を離れるまでの間、お主の師になってやるう。」

聖時はその言葉を聞き、とても嬉しそうな顔をした。

聖時「あ・・・ありがとうございます！これからよろしくお願いします！童虎先生！」

童虎「せ・・・先生？」

聖時「はい！」

童虎「・・・まっ、いいか。」

童虎がそんな風につぶやいた時、遠くからふたばの声がした。

ふたば「聖時〜！ピティ〜！」

ピティ「あれ？ふたばだ。」

聖時「おゝい！ふたば、ここだよー！」

聖時は遠くにいるふたばに声をかける。

ふたば「あ、聖時。そこにいたんだ。」

走り寄ってくるふたば。

ピティ「どうしたの？」

ふたば「お昼だから二人を呼びに来ただけだ。童虎さんも一緒だったんだ。」

童虎「お、もうそんな時間だったか。」

聖時「それじゃあ、お昼にしましょ先生。」

ふたば「？先生って？」

聖時の童虎に対する呼び方に疑問符を浮かべるふたば。

聖時「あ、それはね……。」

聖時はふたばに説明しながら別荘に向かって歩き始めた。

そんな二人を見ながら、童虎は二人の背中を向こうにいる愛弟子と、自分が面倒をみた少女の後姿とダブって見えた。

童虎はその事にフツと笑いピティを促して自分も別荘に向かって歩き始めた。

「おまけコーナー」

「ピティと」

「ユユニの」

二人「おまけ「ダイガー道場」!!」

「タ」さてやってきたお茶の間の憩いの時間、タイガー道場だ」

「イ」どうも！弟子1号のイリヤだよ」。

「タ」さて、今回からはおまけコーナーに変わってこのタイガー道場が……」

「ピティ」ピティちゃん……イナズマキ」

ドゴツ!!

タ「おべろ!!」

ピ「ゲスト召還もまだなのに、いきなり出てきておまけコーナーを乗っ取ったあげく、さらにタイトルまで変えるな!!」

タ「フツ・・・なかなかいいキックだったぜ。(男前な顔で言う)」

ピ「なにがいいキックだ!!」

ユ「え〜と、とりあえずおまけコーナーの時間です。今回のゲストはFateから藤村先生ことタイガーと弟子1号のイリヤさんに来てもらいました。」

タ「どうも藤村大河です。」

イ「改めて、弟子1号のイリヤだよ〜。」

ピ「あの〜所でなんでおまけコーナーを乗っ取るうとしたんですか?」

タ「フツ、それはズバリ・・・」

ピ「それはズバリ?」

タ「出番が欲しかったからだ〜!!」

ピ「」で・・・出番?」

タ「そう、出番！本編では土郎はもう出てレギュラー化してるのに、私の出番が一向にこないじゃない！だから出番を作り増やす為に、このおまけコーナーを乗っ取ることにしたの。」

ユ「で・・・出番を増やす為にとって・・・」

タ「出番がないのって結構しんどいのよ！」

イ「そっだそっだ！」

ピ「だからってここを乗っ取るうとするな！おまけコーナーは渡さない！！！」

タ「ふっ、おまけコーナーの元祖とも言っべきタイガー道場の道場主である私に勝てるかしら？」

ピ「・・・超えてみせる・・・そして守り抜く！！！」

イ「フレ〜フレ〜し・しよ・お！！！」

ビツ「・・・なんだか効果音でゴゴゴゴツって言葉が付きそうなフィンキですね・・・」

ユ「・・・と、とりあえず、あの三人はほっというて進めましょう。」

ビツ「そ・・・そっですね。」

ユ「え〜、今回の補足は本編のお話の全体の流れについて話そうと思います。」

ビツ「全体の流れって・・・なんでまたこのタイミングでやるの?」

ユ「それは今回の話で、一様の区切りが付いてんです。で、次から各作品の原作に沿った話になるからです。」

ビツ「へ〜。」

ユ「それで、全体の話の流れは次の通りになっています。」

Lの季節2編

黒神編

ネギま編

アルトネリコ3編

IZUMO2編

Fate編

ゼロの使い魔編

リリカルなのはStrikers編

最終決戦編



ユ「以上の流れでいきます。」

ビツ「へへ、結構ありますね。」

ユ「ええ、結構ありますけど、作者さんはちゃんと最後までやるつもりみたいですよ。」

ビツ「がんばって欲しいですね。」

ユ「ええ、それでは今回はここまでとしましょう。」

ビツ「え？終わりにするんですか？！あの三人をほっといたままで良いんですか？」

タ「なんという力を持つてる子なのピティ。だが……ヤラせはせん！ヤラせはせんぞ……！！！」

ピ「クツ！なんてプレッシャーなの！けど……私には守りたい世界おまけコーナーがあるんだ……！！！」

イ「フレ〜、フレ〜、し・しよ・お……！！！」

ユ・ビツ「……………」

ビツ「確かに……ほっといた方がいいですね。」

ユ「ええ。じゃあ、締めと行きましょう。それでは皆さん」

ユ・ビツ「待ったネ」

タ「ま……まさか……このワタシがこんな小娘に~~~~~  
「!~!~!」

「!~!~!」

イ「師匠~~~~~!~!」

ユ「……いい加減に終わらせてください。」

第21話 天秤座（ライブラ）（後編）（後書き）

次の話を書く前に、特別編の話を書きます。

特別編1 クロノ・ハラオンのとある休日（前書き）

どうも剣 流星です。

この前、物置を整理して出てきた某アンソロジー本を読んで思いついたお話です。

はつきり言って、クロノの壊れ方がひどいです。クロノファンの方ごめんなさい。

では特別編どうぞ。

## 特別編1 クロノ・ハラオンのとある休日

特別編1 クロノ・ハラオンのとある休日

クロノ・ハラオン。次航行艦アースラの艦長で、リリカルなのは（無印）から出ているキャラではある。だが、続編の作品が出てくるたびに影が薄くなり、最新作では殆ど出番が無いと言う影の薄いキャラである。

クロノ「こらこら！誰が影が薄いキャラだって！！」

ナレーションにツッコまないでください。それと本当の事じゃないですか。

クロノ「ウツ！」

とにかくこのお話は、そんな影がうすいクロノにスポットを当てた、彼のとある休日の出来事である。

7月上旬のある日の朝のハラオン家。

彼、クロノ・ハラオンは母親であるリンディと朝食をとっていた。

クロノは今、休暇中である。

偶の休暇なので、本来は婚約者であるエイミィと過ごすところであ



今日のノルマ・ダンベル10キロ

クロノは先ほどの事を忘れるよう、今日のノルマであるダンベル10キロでの筋トレを始める。

クロノ「ほっ！ほっ！ほっ！（煩惱退散！煩惱退散！）」

そんな風にして筋トレをして数時間後、母親であるリンディがテーブルに置いてあるある物に気付く。

リンディ「あら？フェイトったらお弁当忘れて行ったみたい。」

リンディの声でクロノも筋トレをやめてテーブルを見る。

そこには確かにフェイトのお弁当が置いてあった。

クロノ「珍しいな・・・フェイトが忘れ物をするなんて・・・」

リンディ「ねえクロノ、これ届けてきてくれる？私はこれから用事で出けなきゃならないから。」

クロノ「わかったよ・・・届けてあげますか。」

クロノはそう言って弁当を持つと聖祥大付属中学校へ行った。

聖祥大付属中学校の校門。

クロノは学校内に入り、校舎へと行こうとしたところ、聞き覚えのある声に呼び止められる。

はやて「あつね、クロノ君やないか。」

クロノ「?はやて。」

はやては手にスケッチブックを持ってクロノに近寄ってきた。

はやて「どうして学校「に?。」

クロノ「そう言う君こそどうしたんだ?まだ授業中のはずだろう?。」

はやて「今は美術で、スケッチをしているところなんや。」

クロノ「そうか・・・そうだ、フェイトは今の時間は・・・」

はやて「?フェイトちゃんやったら確か今の時間は体育やったと思うんやけど・・・」

クロノ「体育か・・・」

クロノはフェイトが体操着姿で運動をしている所を想像する。しかもなぜかフェイトはブルマ姿・・・。

クロノ「・・・」 (妄想中)

はやて「?。」

クロノ「・・・」 (妄想中)

はやて「ク・・・クロノ・・・君?。」

クロノ「・・・」 (萌え) ハッ!」



今日のノルマ（追加）テツポウ100回

ドストドストドストドストドストス！！

クロノはいきなり近くの木に張り手を突き始めた。

クロノ（煩惱退散！煩惱退散！）

はやて「ちょ……ク……クロノ君どーしたのっ！」

クロノ「ハア、ハア、ハア……いや……フェイトに弁当を届けに来ただけだ。」

クロノは息を整えながらはやてにココに来た理由を言う。

はやて「いや……そうじゃなくて……そーなんか……」

クロノ「はやて、すまないが君の手からフェイトに渡してもらえないか。」

クロノはそう言うてはやてに持ってきた弁当を渡した。

はやて「別にいいけど……直接渡してあげないん？」

クロノ「……いや、今会おうとノルマが増えそうだな。」

はやて「ハア？ノルマ？」

クロノ「ああ。」



・・・  
「

\*

所変わって、聖遼学園の屋上、時間はちょうど昼休み。

そこで聖時はいつものメンバーに自分の作ったお弁当を振舞っていた。

アルフ「いや、聖時のお弁当はいつ食べてもおいしいね。」

ピティ「うんうん」

才人「本当だよ。」

アキ「うん、美味しい。聖時、また料理の腕を上げたね。」

ふたば（本当だ・・・私の作ったの物よりも、さらに美味しくなってる・・・ちょっとくやし・・・）

聖時「いや、それほどでも。」

そんな風に話している聖時たちの耳にどこからか聞き覚えのある声が聞こえてくる。

クロノ「うおおおおおおお！煩惱退散！煩惱退散！」

聖時「な・・・なんだ？」

才人「おい！正門の外を見てみるよ！」

才人の声で聖時達は一斉に正門の外側を見る。

クロノ「うおおおおお！煩惱退散！煩惱退散！」

そこには鉄下駄を履きながら、タイヤを引きずり、走りながら「煩惱退散！煩惱退散！」と叫んでいるクロノが居た。

アルフ「あれ・・・クロノじゃないかい？」

アキ「本当だ。」

才人「クロノさん・・・またやってるのか・・・」

ふたば「？知り合い？」

ピティ「あ、そっか、ふたばは知らないんだっけ？」

聖時「クロノさんはフェイトさんの義理のお兄さん。時々ああして、「煩惱退散！煩惱退散！」と叫びながら走り回る事があるんだ。」

ふたば「煩惱退散？」

聖時「うん、どういう意味で言ってるのかは解らないけど、前はなのはさんのお兄さんである恭也さんも時々一緒になって叫びながら走り回っていたけどね。」

ふたば「……………どう言う意味で言ってるんだろうね。」

聖時「……………うん。」

数時間後の日も沈みかけた夕刻頃のハラオン家の玄関。クロノは鉄下駄+タイヤ引きの走りこみから帰ってきていた。

クロノ「ハア、ハア、ハア、ようやく……………落ち着いた……………結構しんどかったな……………疲れたし、夕食前にシャワーでも浴びよう。」

そう言いながらクロノは疲れた体を引きずるように風呂場の脱衣所



クロノ「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

マンション屋上・・・そこには杖の素振りを一心不乱にするクロノの姿があつた。

クロノ「煩惱退さ~~~~~~~~ん!!!」

・・・見てて、こちらでも段々心配になってきました。大丈夫かな・・・

数時間後のハラオン家。

疲労困憊になったクロノが素振りから帰ってきていた。

「ハア、ハア、ハア・・・今日はもう寝よう。さすがにもう体が動かない・・・」

そう言つてクロノが自分の部屋に向かう途中、リビングのテーブルの上で自分の腕を枕代わりにして寝ているフェイトを見つけた。

クロノ「・・・フウ・・・まったく・・・こんな所で寝たら風邪を引くだろうに・・・」

クロノはそう言つて、寝ているフェイトに近寄る。その時・・・

フエイト「…………ムニヤ…………お兄……………ちゃん……………」

クロノ「！」

あどけない寝顔でのフエイトの一言に動きを止めるクロノ。

クロノ「う……………うおおおおおおおおお!!!!」

ボタン！

クロノは叫びながら勢いよく扉を開けて、外へ出て行った。

その夜……………一晩中山の中に籠もって、体を動かさまくるクロノが居たと言う……………

休暇明けのアースラのブリッチ……………。

その艦長席で疲れ果てたクロノが席に座っていた。

エイミー「クロノ君……………休暇明けなのに、なんで休暇前より疲れたような顔をしてるの？」

クロノ「いや……………ちょっとな……………少し自重しないと体が持たないな……………」



エイミィ「は？自重？」

クロノ「いや……………なんでもない。」

エイミィ「？」

こうしてクロノの休暇は終わる。ここ最近は日常生活でフェイトに会いに行くと、殆どこの調子であると言っ。

おまけ

なお余談ではあるがリビングでのフェイトの寝言の正確な内容は次の通りである。

フェイト「ムニヤ……………お兄……………ちゃん……………私とデジェルさんとの中を認めて……………」

……………微妙にクロノが報われていない内容だった。

おわり

特別編1 クロノ・ハラオンのとある休日（後書き）

特別編どうだったでしょうか？

感想・ご意見お待ちしています。

**第22話 事件の始まりの日（前編）（前書き）**

どうも剣 流星です。

今回の話はすこしギャグ色が強いです。

おまけに少し聖時が壊れ気味・・・大丈夫かな？  
ま、そんなんで第22話、どうぞ。

## 第22話 事件の始まりの日（前編）

第22話 事件の始まりの日（前編）

夜のネオンが瞬くとあるビル街の一角、そこにある魁音寺グループが所有するビルの最上階のオフィスで、新魔王軍の六將軍の一人、鬼人・黎真が魔軍司令ファウストと通信をしていた。

黎神「真の紋章の反応がこの第97管理外世界に？」

ファウスト「そうだ、反応は微弱で一瞬ではあるが間違いない。」

黎真「そうですか・・・で、その反応はこの世界のどこに？」

ファウスト「反応があった場所は日本にある学園の一つ・・・聖遼学園だ。」

黎真「聖遼・・・ですか？たしかあそこは・・・」

ファウスト「そうだ、あそこは最近、次元世界にも勢力を伸ばしてきたあの来迎寺グループが経営している学園だ。」

黎真「となると、来迎寺が全面的にバックアップしている特務捜査

課もこの事を知っている可能性が高いですね。」

ファウスト『その通りだ。だが我々はそれでもやつ等より先に紋章を手に入れたい。そこで……』

黎真「分かってます。だからこそ、この世界を任されている私に白羽の矢が立ったのでしょう?」

ファウスト『……やってくれるか?』

黎真「お任せを……すべては秩序に飲み込まれる世界を混沌に引き戻すために。」

ファウスト『……期待してるぞ。』

そう言つてファウストからの通信は切れた。

黎真「ふう〜」

黎神は通信が切れると同時に長く息を吐いた。すると同時に部屋の扉を何者かがノックした。

コンコン!

黎真「入れ。」

????「失礼します。」

部屋の扉を開けて、眼鏡を掛け、クセ毛のあるスーツ姿の人物が入ってきた。

黎真「蔵木か？」

蔵木「はい、書類をお持ちしました。」

黎真「ご苦労。」

そう言つて黎真は蔵木から書類を受け取る。

蔵木「先ほど、部屋から会話する声が聞こえてきましたが？」

黎真「ああ、魔軍司令殿からの通信だ。この世界のとある学園に真の紋章の反応があつたそうだ。」

蔵木「真の紋章が？」

黎真「そうだ。で、その紋章の発見、回収の命を受けた。」

蔵木「そうでしたか・・・それで紋章があつた学園とは？」

黎真「来迎寺グループが経営するあの聖遼学園だ。」

蔵木「聖遼・・・ですか？たしかあそこには、比ひよ？つ様配下トライバの低位元ルエン神霊トが教師をしているはずですよ。」

黎真「そうか・・・ならその者に真の紋章の探索をしてもらおう。」

蔵木「了解しました。」

黎真「ただし、あくまで探索だけにとどめておけ。見つけても紋章

には手を出すな。」

蔵木「回収しないのですか？」

黎真「ああ、これはわたしのカンだが……この紋章は我々がどうこうできるものじゃないような気がするのだ。だから……」

蔵木「直接には手を出さないと？」

黎真「そう言う事だ。」

蔵木「わかりました。発見だけに止めておくと伝えておきます。」

そう言うって蔵木は部屋から出て行った。

蔵木が出て行った部屋の中で黎真は椅子から立ち上がり、外の夜景を見ながらつぶやいた。

黎真「魔軍司令殿からの通信が来る前からわたしは聖遼学園にある真の紋章の事を感じ取っていた……もし、わたしの思った物だとしたら……それは6年前に冬木市で行方不明になった……」

そうつぶやいた後、黎真はそのまま夜景を見続けるのだった。

朝の神谷家。

ピティが今だ夢の中にいる時間帯である早朝。

聖時はジャージに着替えてランニングに行くために玄関へと向かった。

童虎「おお聖時、おはよう。」

聖時「あ、おはようございます、童虎先生。」

聖時は部屋から出てきた童虎に挨拶をした。

童虎がケガを別荘で治した後、聖時は猛達と話し合った内容で童虎が中国から来た猛の父親の知り合いだとユニに紹介した。そして途中で路銀が尽きたと言う内容で、家の庭師として住み込みで働かせてあげて欲しいと聖時とピティはユニに頼み込んだのである。

最初は渋っていたユニだが、聖時が童虎もピティの姿が見える事、その事を黙っていてくれる事を約束してくれた事を話したら、OKを出してくれた。



元々神谷家は、敷地が広いのに住んでいるのは聖時達三人なので、掃除や手入れは屋敷内だけで手一杯な状態であった。なので、同じような広さがある庭までは手が回らず、今では荒れ放題である。ユ二としてはいい加減に庭の事を何とかしたい所だったので、童虎が庭師として働いてくれるのはとても有難かった。まして、ピティの存在を知りながらも、それを黙っていてくれると言うのであれば文句を付ける所か、逆にこちらが頼み込みたい所であった。

そんな訳で、今や童虎は神谷家に住み込みで働く庭師としてココに住んでいるのである。

聖時はそんな風に童虎をユ二に紹介した時の事を思い浮かべながら、童虎に話しかける。

聖時「先生はこれから庭に？」

童虎「ああ、朝食の前に少し仕事を片付けておこうと思ってな。ワシは一応この家の庭師としてココにいるからな。ところで聖時、昨夜はユ二の帰りが遅かったようだが・・・」

聖時「ああ、ユ二は昨夜、付き合いで飲み会に行ってたから帰りが遅かったと思うんです。・・・また記憶がなくなるまで飲んで、変なお土産を持って帰ってこなければいいんですけどね。」

童虎「変な土産？」

聖時「ええ。」

童虎「なんだそれは？」

聖時「それはですね・・・」

聖時は童虎と一緒に玄関に向かいながら童虎にユニのお土産について話そうとしていた。その時、玄関の床で帰宅した状態のまま寝かけているユニを発見した。

ス〜ス〜と寝息を立てたユニは、着ていたスーツは所々乱れており、しかもご丁寧<sup>ご</sup>にユニの側には「ご迷惑をおかけします」という内容が書かれている看板が立てかけてあった。

童虎「聖時……この看板は確か、工事現場などによく立てかけてある看板じゃないか？」

聖時「……多分そうです……どうやらユニがまた酔っ払っ  
てもって帰ってきたみたいです……」

童虎「は？ “また” と言うことは、前にもこんな事があったのか？」

聖時「ええ、ユニはある程度アルコールが入ると記憶がなくなるんです。しかも帰るとき、こう言った物を持って帰るクセがあるんですよ……」

童虎「はた迷惑なクセだな。」

聖時「はい……一様持って帰ってきた物はなるべく元の場所に戻してるんですけど、中には何処から持ってきたのかわからない物もあるんです。そう言った物は返す事が出来ないから、庭に置きっぱなしになってるんです。」

童虎「なるほど……庭のあっちこっちに置いてある看板やらなにやらは、そう言った物だったのか。」

童虎は庭に置いてある、用途不明の物達の事についての経緯を聞いて納得した。

聖時「それじゃ僕はユニを部屋に寝かせに行きます。幸いユニは今日はお休みですからね。」

童虎「そうか、ではワシはこのまま庭に向かうとする。」

聖時「はい。」

そう言って聖時はユニを部屋に連れて行き、童虎は庭へと向かった。

\*

聖時がいつも使う通学路。

その道を彼女、渡良瀬ふたばは聖遼学園高等部の制服を着たショートカットの女子と歩いていった。

ふたば「いつもより遅い時間になっちゃったね理佐お姉ちゃん。」

理佐「いいんじゃないの？これぐらいの時間の方が朝、ゆっくり出来て、私としてはいいと思うけど？」

そんな風に二人が話していると、聞き覚えのある声がふたばを呼び止めた。

聖時「あれ？おゝい、ふたば〜！」

ふたば「え？」

声を聞き、そちらの方に振り向くと、そこにはピティを連れた聖時がこちらに手を振りながら近づいてきた。

ふたば「聖時?!何でココに?」

聖時に気がつき話しかけてくるふたば。ちなみにピティはふたばの側にいる高等部の制服の女子に気がつかれないようにするために黙っている。

聖時「なんでも何も、この道は僕が普段から通学路として使っている道なんだけど?」

ふたば「え?!じゃあ、いつも聖時はこの道を使ってるの?!」

聖時「うん、そうだけど……ふたばこそどうしてこの道?」

ふたば「私もいつもこの道を使っているの。時間帯はもう少し早いんだけど。」

聖時「へー、そうなんだ。時間帯がズレてたから今まで会わなかったんだね。」

ふたば「そうみたいだね。」

そんな風に二人が話していると、ふたばの側にいた聖遼の高等部の制服を着たシヨートカットの女子生徒がふたばに話しかけてきた。

理佐「ねえ、ふたば、そろそろ私のことも紹介してくれないかな？」

理佐の言葉にハツとなり慌てて答えるふたば。

ふたば「あー！ごめんね理佐お姉ちゃん。」

ふたばは理佐に謝った後、聖時に理沙の事を紹介し始めた。

ふたば「紹介するね、この人は山田理佐先輩。やまだりさ聖遼の高等部の1年生で、私の家の隣に住んでいる幼馴染のお姉ちゃんなんだ。」

理佐「高等部1年の山田理佐よ。君がふたばがいつも話してる聖時君だね。」

聖時「え？ふたばがいつも話してる？」

理佐「そう、いつもいつも」「今日、聖時がね、今日、聖時がね」「って、もう毎日あなたの事を話すのよ。」

ふたば「り、理佐お姉ちゃん！／＼／＼／＼／＼／」

ふたばが真っ赤になりながら大きな声で理佐に言う。

理佐「あはは、ごめんごめん。」

ふたば「もう！はやく行こう聖時！」

聖時「う、うん。」

理佐「あ、待ってよ！」

歩き出したふたばに並んで歩く聖時。その後ろについてく歩く理佐。そんな風にしばらく歩いた所で聖時が思い出したように口を開いた。

聖時「あ、そうそう、もう少し歩いた所でアルフやなのはさん達とも合流するから。」

ふたば「え、この先でアルフと合流するの？」

聖時「うん、いつもこの位の時間帯にアルフもなのはさんフェイトさん達と一緒に登校しているんだ。」

ふたば「フェイトさんて・・・たしかアルフのいとこの人だったよね？」

聖時「うん、それでなのはさんはフェイトさんの幼馴染なんだ。いつも一緒に登校してるんだ。」

ふたば「へ〜。私と理佐お姉ちゃんみたいだね。」

理佐「そうね。」

そんな風に歩いていると前方に歩いているなのは達を見つけた。

聖時「あ、みなさ〜ん、おはようございま〜す。」

聖時の声を聞き、一斉に聖時の方へ振り向くのは達。

なのは「あ、聖時君だ。」

はやて「ホンマや。」

フェイト「うん、けど……………」

アリサ「一緒に居る子達……………」

すずか「誰でしょうね?」

聖時と一緒に居る見慣れない子を見て、首を傾げるのは達。

アルフ「あれは……………ふたば?」

フェイト「え?アルフ知ってるの?」

アルフ「うん、中等部の制服を着てる方はね。ほら前に話したクラスメイトだよ。」

フェイト「ああ、あの子が。」

アルフの回答で納得するフェイト。

なのは「へへあの子が・・・けどじゃあもう一人は誰だろう?」

アルフ「さあ・・・あたしは知らないね・・・。」

そんな風に話していると、聖時達がなのは達に追いつく。

ふたば「おはよう、アルフ。」

アルフ「おはようふたば。今日は聖時と一緒にだったみたいだけど、どうしたんだい?」

ふたば「聖時がいつも使っている道、私も通学で使っていたの。ただ私は時間帯が聖時よりも早かったから今まで会わなかったの。」

アルフ「へへ、そうだったのかい。それじゃあ、今度からこの時間帯に登校しなよ。そうしたら一緒に登校できるだろう?」

聖時「僕もそれが良いと思うよ。」

ふたば「うん・・・理佐お姉ちゃんは どう思う?」

ふたばの側で話を聞いてた理佐に意見を聞く。

理佐「ふたばの好きにしなよ。私はふたばが選んだ時間帯に合わせてるから。」

ふたば「そっか、理佐お姉ちゃんが言うなら、今度からは私もこの



時間帯にするよ。」

聖時「本当？それじゃあ今度からは一緒に登校できるね。」

ふたば「うん」

そう言っつて聖時の言葉にうなずくふたば。  
そんな二人に声がかけられる。

はやて「あの〜、もしも〜し、二人だけの空間を作らんといてくれる〜。」

聖時・ふたば「「うわ！・キャア！」」

いきなり声をかけられて驚く二人。

聖時「は……はやてさん、いきなり声をかけて驚かせないでください。」

はやて「ごめんごめん。と、それよりそっちの子達をうちに紹介してくれへん？」

聖時「そうだね……それじゃあ紹介するよ。まずこっちに居るのが同じクラスの渡良瀬ふたば。」

ふたば「よろしくお願いします。」

聖時「それで、こっちに居るのがうちの高等部一年に居る、ふたばの幼馴染の山田理佐先輩です。」

理佐「どうもよろしくね」

聖時の紹介の後、なのは達に挨拶をする二人。

聖時「それで、ふたば、先輩、こっちに居るのが小さい頃から何かと面倒を見てもらっていた人たちで、高町なのはさん、フェイト・T・ハラオンさん、八神はやてさん、アリサ・バニングスさん、月村すずかさん、そして、フェイトさんのいとこのアルフです。」

なのは「はじめまして。」

フェイト「どうも。」

はやて「よろしくや。」

アリサ「よろしくね。」

すずか「よろしくお願いします。」

それぞれがふたば達に挨拶をする。

はやて「しかし・・・」

はやてはふたばの方を見る。

ふたば「？」

はやて「聖時もすみに置けんな、こんな可愛い子ガールフレンドが居るなんて。」

聖時「え?! い・・・いや////////////////」

ふたば「か・・・かわいいって////////////////」

はやての言葉で赤くなる二人。

理佐「おやく、二人共にな赤くなってるのかな?。」

聖時「かつ・・・からかわないでください!」

理佐「なははは、ごめんごめん。」

聖時「はやてさんも!」

はやて「ごめんごめん。あ、そうや、聖時。」

聖時「うん?」

はやて「実は頼みがあるんやが・・・」

聖時「頼み?」

はやて「せや、実はもうすぐウチらの学校で文化祭があるやろ?そこで演劇部が「断ります!」・・・まだ全部言っていないんやが・・・」

はやてが用件を言い終わる前に即行で断る聖時。

聖時「全部言い終わらなくてもわかるよ! どうせ演劇部がまた去年みたいに助っ人として出て欲しいっていつてゐるんでしょ?」

はやて「そ……その通りや……」

聖時「悪いけど断るよ。去年のアレ一回きりって約束でしょ？……  
……それにまたそんなことしたらせつかく沈静化したあの変態  
連中がまた動き出すでしょ？」

はやて「たしかに動き出すな。」

聖時「だから断るの！大体去年のアレのせいで……僕は……  
僕は……うっうっう……」

何かを思い出すように遠くを見つめていた聖時は悲しいことでも思  
い出したのか泣き始めた。

ふたば「せ……聖時？」

理佐「い……いったいどうしたの？」

突然泣き始めた聖時に驚く二人。

アリサ「あ……あははははっ……」

すずか「どつやら“あのこと”がすっかり心の傷になってるみたい  
ね……」

ふたば「？“あのこと”ってなんですか？」

疑問に思ったふたばがなのは達に“あのこと”について聞く。

すずか「えつとね、聖時君は去年、うちの学校の文化祭の準備の手伝いをしてくれたの。で、中でも特に演劇部の出し物の準備をよく手伝ってたの。」

ふたば「演劇部の手伝い……」

すずか「そう、で聖時くんが手伝いをしているとき、ヒロイン役の子が怪我をして演技できなくなってしまったの。代役を立てようにもセリフ等を覚える時間がなかったんだけど、聖時くんが準備の手伝いをしている傍ら、稽古をよく見ていたからセリフをよく覚えてたらしい事がわかったの。」

ふたば「そ……そうなんで……」

ふたばは話を聞いて、なんだか話の流れがおかしな方向に流れているな〜と思い始めた。

すずか「で、このまま劇を中止するぐらいなら、いつそ聖時くんに女装して代役をやってもらって話になったの。」

ふたば「せ……聖時が女装!?!」

ふたばは最初信じられないと思った。が聖時の女装姿がどんな物なのかを想像して……

ふたば（……………案外有りかも……………）  
／／（

と思った。

すずか「で、聖時くんが「一回きり!」って約束で代役を引き受けたんだけど、これが大盛況だったの。」

ふたば「大盛況?!」

すずか「うん 聖時君の女装姿でのヒロインがものすごく似合っていて、それを聞いた人たちが演劇部の出し物に殺到、大好評のうちに文化祭は終わっただけけど……」

ふたば「?」

ふたばは急に歯切れが悪くなったすずかを見て?マークを頭に浮かべる。

すずか「それからしばらくの間、聖時くん家に、男の人からのラブレターや贈り物が大量に贈られたり、変な人たちに付きまとわれたり、拳銃の果てにストーキングまでされたりで大変だったの。」

ふたば「ス……ストーキングって……」

すずかの言葉にふたばは引きつった顔をしながらつぶやいた。

すずか「しかもそのストーキングをしたのがはやてちゃんのクラスメイトの男子で、ストーキングだけじゃ飽き足らず聖時くんに強引に迫って……」

ふたば「……強引にせまった?!」

すずか「うん……それで聖時君は「うわわわわわあ!」って」

過去のトラウマを思い出し泣いていた聖時が突然奇声を発してすずかの話を中断する。

聖時「すずかさん！！ふたばになにを話しているんですか?!」

すずか「何って、聖時君と伊達君の事を「うあああああ!!」  
「  
またも奇声を発する聖時。

聖時「あいつの名前を言わないで!!悪夢が蘇る!!」

ふたば「あ・・・悪夢って・・・」

すずか「ああ、それはね「言っなああああああ!!」  
「

聖時がまたしても奇声を発する。

聖時「頼みますから言わないで!あの変態・・・伊達<sup>だてゆきひこ</sup>幸彦の事は  
!!」

????「呼んだかい?」

聖時達『うわあああああ?!!』

突然聖時達の後ろから声がかげられる。

全員が振り向くと、そこには聖祥の中等部の制服に身を包み、手に  
白い手袋をしたジャーニーズ系の顔をした男が立っていた。

はやて「あれ?伊達君やないか。」

なのは「本当だ。」

伊達「やあ、高町君に八神君。清々しい朝だね。」

伊達といわれた男はキザなポーズを取りながら挨拶をしてくる。

聖時「な・・・なんでお前がココに居るんだよ!!」

伊達「なに、今日はたまたま朝こちらに用があつたんでね。しかし・・・まさか・・・聖時くん!君に会えるとは、何たる偶然!!」

伊達はかつこつけながら聖時に近寄る。

聖時「く・・・くるな!よるな!」

聖時は後ずさりながら叫ぶ。

伊達「恥ずかしがる事ないじゃないか!キミと僕は熱い口付けをした中じゃないか!!」

ふたば・理佐「熱い口付け?!」

ふたばと理佐が大声を出して驚く。

ふたば「せ・・・聖時・・・まさかそう言う趣味があるの?!」

聖時「ちがうちがう!!僕はそう言う趣味はない!!あれはコイツがいきなり迫ってきて、無理やりしたんだ。」

伊達「無理やりだなんて、キミは相変わらず照れ屋だね。」

聖時「誰が照れ屋だ!!いきなり」一目惚れなんです!この伊達幸だてゆきひこ



彦！今まで数々の出会いがありました、こんなに胸が高鳴る出会いはなかった！」とか言っついていきなり！いきなり……うっうっうっうっ……」

言葉がつまり、また泣き出す聖時。

伊達「そうか……そんなに泣くほど嬉しいなんて。」

聖時「嬉しくて泣いてるんじゃないわ！悲しくて泣いてるんだ！！」

伊達「まっ、それは置いといて。」

聖時「置いとくな！！」

伊達「さあ！再会の抱擁を交わそうじゃないか！」

聖時「うっ……うわああああああっ！！」

聖時は全速力でその場を走って逃げ出す。  
それを追う伊達。

伊達「抱擁するだけで逃げるなんて、ウブだね。けど逃がさないよ」

聖時「来るな！寄るな！変態！○× & !!!」 聞くに耐えない罵詈雑言

伊達「ひ……酷い！もっと言って」

聖時「うああああ！なんで悪口言われて元気になってるんだ！！」

伊達「聖時くん」

聖時「くるなああああああ!!」

逃げる聖時、それを追う伊達。二人はそのまま走り去って行った。

ふたば達『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ふたば「あ・・・・・・・・先ほどの伊達って人って・・・・・・・・」

はやて「うん。ウチのクラスメイトで、見たとおりゲイでマゾな  
や。」

理佐「ゲ・・・・ゲイでマゾって・・・・・・・・」

アリサ「毎回見てて思うんだけど、本当に救いようのないやつだよ  
ね伊達くんって・・・・・・・・」

アルフ「黙ってれば結構いい男なのにね。」

フェイト「伊達君、しばらく親の都合で海外に行ってたから、ひさ  
びさに聖時くんに会ったからテンション上がったね・・・・・・・・」

なのは「にやはははは・・・・・・・・聖時くん無事に逃げ切れるかな？」

すずか「どうでしょ？伊達くん・・・・・・・・かなり張り切ってるから逃げ  
切れないかも・・・・・・・・」

一同『・・・・・・・・・・・・・・・・』

アルフ「と……とりあえず追いかけようか？」

ふたば「そ……そうだね……」

ふたばの声に反応して、聖時の後を追って歩き出すのは違。こうして聖時にとって、とても疲れる朝になったのであった。

（中篇へ続く）

**第22話 事件の始まりの日(前編) (後書き)**

第22話 どうだったのでしょうか？

ちなみに今回初めて出てくるキャラのうち、蔵木と山田理佐は黒神のアニメ、オリジナルのキャラです。

第23話 事件の事件の始まりの日（中篇）（前書き）

どうも剣 流星です。

今回のお話は前・後編の2部にするつもりでしたが、話の都合上3部に分けることにします。本当にスイマセン。

では第23話、どうぞ。

## 第23話 事件の事件の始まりの日（中篇）

第23話 事件の始まりの日（中篇）

ここは聖遼学園高等部、2-A。

その教室の一番後ろの席に彼は居た。

河瀬裕也。かわせゆうや藤宮アキの従兄である。

彼は担任が出席を取る声を聞きながら窓の外を見ていた。

担任「梅田、江口、河瀬……河瀬。」

彼は窓の外に、猫が横切ったような気がしたので外を見ていたのである。

しかし、そんなわけがない。なぜならこの教室は2階にあるのである。

その猫が空でも飛ばない限り、窓の外を横切れるわけがない。

彼は気のせいだと思い教室の中に視線を戻した。

担任「河瀬裕也。オレの声は教室のいつちゃん後ろには届いてないのかー？」

担任の声に気付き返事をする。

河瀬「はいはい。」

担任「どうしたばーとして？気分でも悪いのか？」

河瀬「いえ、気のせいです。元気っすよ。」

担任「そうか、まあ元気で何よりだ。こんな状況だ、気分が悪かったらすぐに言えよな。」

河瀬「はいはい、わかってますよ。」

そうやって担任は出席を続ける。

彼は先ほど担任が朝一番で言ったこんな状況についての事を思い返した。

朝、教室に入ってきた担任が一番最初に言った言葉・・・昨日、この学園の生徒数人が学園内の敷地で倒れているのが発見されたという事だった。

倒れた生徒は今も意識が戻らず、入院しているそうだ。

そんな風に思い返していると突然視界の隅に猫が現れる。

猫「・・・・・・・・探せ・・・・・・・・」

また猫だ・・・・・・・・。

しかも今度は喋る猫かと彼は思った。

河瀬（探せ？だつて？）

彼は教室内を見回したが、猫の姿はどこにもなかった。

河瀬（疲れてるのか、オレ・・・）

そんな風に思っていると担任の出席の確認が終わる。

担任「よし、全員いるな。それじゃあさっき言った意識不明者に関してだが……」

意識不明事件……

去年、10人前後の人間が倒れ、数日間意識不明に陥るものの、全員が同じタイミングで目覚めると言うことがあった。

病気ではないのかと言われ、行政機関が動いているが、今だに原因は不明。

しかし、罹患者は目覚めた後は以前よりも健康になっていると言う。彼や聖時もその一人である。

担任「……だから河瀬」

担任の教師が突然彼を指名する。

河瀬「はい？」

担任「気分が悪くなったりしたら、すぐに保険の先生に相談するんだぞ？」

河瀬「わかりました。でも突発性の病気なんですよね？」

担任「《そうだ》……」

彼は担任の言葉が《嘘》だと見破る。

河瀬（だが、何に対しての嘘だ？）

彼はそのことに関しての思考を張り巡らせる。



突発性っていうのが嘘なのか、病気っていうのが嘘か……  
そこまでは彼の『特技』では見破る事ができなかった。

担任「他に質問はないな？それでは諸君、今日も良い一日を過ごしてくれ」

そう言っただけで担任は教室を出て行った。

朝のHRが終わると、彼のクラスメイトで友人の夏原修一が近づいてきた。

夏原「よお、相変わらず呆けてんな。女のことでも考えていたか？」

河瀬「うっせーな。」

夏原「コウノのことでも考えていたんじゃないか？どうなんだよ？」

河瀬「ん？コウノって？」

夏原「だから、それはオレが聞きたいんだよ」

河瀬「突然コウノって言われてもな……誰かと勘違いしてるんじゃないか？」

夏原「おまえ……ふられたショックで記憶がすっ飛んだのか？」

河瀬（ふられた？……コウノってのは人名か？）

彼はそのコウノと言う人物に関しての事を思い出そうと、記憶を手繰ってみた。

だが、そう言う名の人物に関しての心当たりがまるでない。

しかし、記憶の奥底のどこかで引っかかるような、そんな響きを持つていた。

河瀬「……いや、コウノって言われても、本当に分かんない、そのコウノって人に何かしたか？」

夏原「おまえ……オレをからかっているのか？」

河瀬（それはこっちのセリフだ！）

夏原「コウノだよ、コウノ。おまえが気にしてた子の名前じゃないかよ。やけに入れ込んで、オレにいろいろ訊ねてきただろ？」

河瀬「誰が？」

夏原「Youが」

河瀬「オレが……？」

夏原「呆けっぷりに磨きがかかってきたな」

河瀬（いやまて。まったく記憶に無いぞ。修一の言葉も《嘘》じゃないようだ……どういふ事だ？）

河瀬「……いや。おまえの勘違いだ。」

夏原「んなわけあるか！……ああ、なるほどね……」

河瀬「なんだよ・・・？」

夏原「まだ何もしてないから、言いくいってわけだな？」

河瀬「は？」

夏原「わーったわーった、おまえの性格じゃあ、そうだろうな！。でもせめて、進展があったら教えてくれよな」

そう夏原が言うと辺りにチャイムが鳴り響く。

キンコーンカーンコーン

夏原「あつ、やべえ、単語テストの暗記しねーと！」

河瀬「ちょ、ちょいまって！」

夏原「おまえが照れてるのは分かった、って。この話はまたな」

そう言つて夏原は自分の席に戻つていった。

・・・コウノ・・・

彼は何度も思い出そうとするが、やはり知らない名前だと言つ事に行き着く。

だが、これは一時限目の単語の小テストなんかよりもずっと重要な事だと、彼は直感で感じ取っていた。すると視界の隅に動く影があった。

黒猫「・・・探せ・・・キーボード鍵を探せ・・・」

河瀬（また猫の幻影……）

猫はニヤニヤ笑いながら消えていった。

知らない名前、知らない記憶……

そして猫の幻影……。

自分はどうかしてしまったのか？と彼は思った。

\*

所変わってここは中等部にある聖時の教室。時刻は昼休み。  
そこで聖時は教室の自分の席で突っ伏してた。

ピティ「……聖時……元気ないけど大丈夫？」

ピティが心配そうに声をかける。

聖時「あ・・・ああ、なんとか・・・今朝のダメージがまだ抜け切らないだけだよ・・・」

聖時は朝、学校に向かう途中で、聖時の天敵とも言う伊達幸彦に出会ってしまったのである。

聖時は伊達から逃げ回り、学校の登校時間ギリギリまで全力疾走で走り回っていたのである。

聖時「はあく、ヤツの気持ち悪さと全力疾走した疲労で、まだ調子が悪い・・・」

ピティ「まったく、あいつには困ったものだね。」

そんな風に話していると、アキやアルフ達が聖時達に声をかけてきた。

アルフ「ほら聖時、いつまでもくたばってないで行くよ。」

聖時「へ？行くって？」

アキ「何言ってるの、今日のお昼休み、みんなで屋上でお昼を食べようって言ってたじゃない。」

聖時「あ、そうだった。」

才人「おいおい、忘れるなよ。誰か一人欠けても今日の昼飯にはありつけないんだからな。」

聖時「分かってるって。」

そう言つて聖時は机の横にかけてある荷物を手に取り、席から立ち上がる。

聖時「それじゃあ行きますか？」

アキ「あ、聖時、これもつて行つてて。」

そう言つてアキは聖時に自分が持つてるークラ ボックスを渡す。

聖時「朝も見て気になつてたけど、この中に例の物が？」

アキ「うん、だからこれを持って先に行つていて欲しいの。私は従兄の裕也さんと呼んでくるから。」

聖時「従兄？」

アキ「うん。ほら今日のお昼は量が多いでしょ？私達だけじゃあお昼休み中に食べきれないと思うから呼んでこようと思つて。」

聖時「ああ、なるほど。」

アルフ「ちなみにふたばも、朝会つた理佐先輩に声をかけるつて言つて、さつき出て行つたよ。」

聖時「へへ、先輩も来るんだ。」

そんな風に聖時が言つと才人が全員に声をかける。

才人「ほらみんな、早いとこ屋上行つて飯の支度しようぜ。時間がなくなつちゃうぞ。」

聖時「そうだね。それじゃあみんな行くかうか。」

そう言って聖時は屋上へと向かった。

\*

再び変わってここは高等部の2・Aの教室。

河瀬裕也は夏原にコウノの事を聞こうと、夏原を探していた。しかし、教室内を見渡しても夏原はすでに居なくなっていた。

河瀬（・・・どこ行ったんだ？）

そんな風に思っていると、河瀬は不意に声をかけられた。

????「おい、河瀬。」

声をかけられた方を見ると、河瀬のクラスメイト奈々瀬駒子が居た。

奈々瀬「おまえにお客だ。」

そういつて奈々瀬は教室の入り口を親指で指した。

教室の入り口には中等部の制服を着た河瀬のイトコのアキが居た。

奈々瀬「なんだ、あんな可愛い彼女をいつの間につつたんだい？」

河瀬「ちげーよ、イトコだよ。今日、あいつの友達と一緒に昼飯を食べる約束してたんだよ。」

そういつて河瀬は入り口に居るアキに近づいた。

河瀬「わりーな、迎えに来てもらって。」

アキ「いいって、それよりも早く行こう？食べる時間なくなっちゃうよ。」

河瀬「そうだな。」

そういつて河瀬はアキと一緒に屋上へと向かった。

\*



屋上。そこで聖時達はレジャーシートを広げて昼食を食べる準備をしていた。

そんな所にアキが河瀬を連れて来た。

アキ「みんなお待ち。」

アルフ「お、来たね。」

アルフがそう言った後、全員がアキ達の方を見た。

聖時「アキ、その人が？」

聖時はアキが連れてきた高等部の制服を着た人をさして言った。

アキ「うん、そう。私の従兄の河瀬裕也さん。」

河瀬「河瀬裕也だ。よろしくな。」

聖時「神谷聖時です。よろしくお願いします。」

才人「平賀才人です。」

アルフ「アルフ・ハラオンだよ。よろしくな、先輩。」

アキ「あと渡良瀬ふたばって子が居るんだけど……ふたばは？」

聖時「ふたばは理佐先輩を呼びに行ったまま、まだ戻ってないよ？」

アキ「遅いわね？どうしたのかしら？」

そう言っていると、屋上入り口の扉が開き、中からふたばが高等部の制服を着た男女を連れて現れた。

聖時「ふたば！こっちこっち！」

聖時が声を上げてふたばを呼ぶ。

ふたば「ごめん、遅くなって。」

聖時「いや、いいよ。これから始める所だから。それより、後ろにいる人は？」

聖時はふたばの後ろにいる高等部の男子生徒をさしていった。すると、側に居た理佐が男子生徒について説明し始めた。

理佐「コイツの名前は伊吹慶太<sup>いぶきけいた</sup>。私のクラスメイトなんだ。今日お昼忘れたみたいだから連れてきたんだ。」

伊吹「ど・・・どうも。．．．あの〜迷惑だったかな？」

アキ「大丈夫ですよ。結構たくさんありますから。それよりさっさと準備しちやいましょう。」

才人「そうだな。」

才人はそう言っていると、自分が持ってきたバックから何かを出し、レジヤースートの真ん中に置いた。

河瀬「へ？ガスコンロ？」

才人が出した物は家庭用の携帯用ガスコンロ。

アルフ「それじゃあ次はあたし。」

そう言つてアルフは持っているバツクから土鍋を取り出しガスコンロにかける。

理佐「今度は土鍋？」

ふたば「それじゃあこんどは私達ね。」

聖時「ああ。」

ピティ（うんうん）

そう言つて、今度はふたばがバツクから取り皿とはしを取り出し、聖時は鉄とタレの入ったペットボトルを取り出す。そして聖時はペツトボトルのタレを土鍋に入れて、ガスコンロに火をつけた。

聖時「準備万端だよ。」

アキ「それじゃあ始めましょうか？」

そう言つてアキは聖時に運んでもらつたクラーボックスを開ける。中からはなんと！タラバガニ丸ごと一匹が出てきた。

伊吹「はあ？！カ・・・カニ？！」

アキはタラバガニを土鍋に入れ煮始め、聖時達いつものメンバーはそれぞれの取り皿とはしを取り、鍋を囲むように座る。

ピティ（うわゝ美味しそう）

聖時の肩でピティが理佐達に聞こえない様につぶやく。

河瀬「……………昼からカニとは、ずいぶん豪勢だな……………」

そういいながら河瀬も鍋を取り囲むように座る。

理佐「……………座ろっか伊吹。」

伊吹「う……………うん。」

そう言つて理佐と伊吹も座った。

その後、カニが煮えるまでの間、聖時達はお互いの事を自己紹介したり、たわいのない話をしたりしていた。

そんな話をしている時、不意に理佐が全員に話を振ってきた。

理佐「ねえ、そういえばみんな、今朝、先生達から意識不明者が出た事聞いた？」

聖時「え、ええ……………まあ。」

才人「そう言えばそんな話してたな。」

河瀬「それがどうしたんだ？」

理佐「実は今日、午前中の休み時間にクラスの子がその意識不明者が実は人為的な物だつて話してたの。」

アルフ「意識不明事件が人為的？なにを根拠に言ってるんだか・・・」

ふたば「その人はどうして意識不明事件が人為的な物だつて言ってるんだろっ？」

理佐「私もその事を聞いたの。そしたらその子、意識不明者の発見者だったの。そして意識不明者が倒れてる現場から、何者かが立ち去ったのを見たつて言ってるのよ。」

聖時「何者かが立ち去った？」

理佐「そう、そしてその立ち去った人物の服装の特徴が、なんと高等部の階段の踊り場に飾つてある絵の女の子の制服と瓜二つだったと言つのよ。」

アキ「絵の女の子と瓜二つ?!」

伊吹「たしかあの絵の女の子が着ている制服は、この近辺はおるか、日本全国にも同じような制服はないつて話だったな・・・」

理佐「そう、あの絵の女の子と同じ制服はこの世にはないの。だから、もしかしたらこの意識不明事件は絵の女の子が抜け出して、生徒達を襲ってるんじゃないかって話なの」

理佐は楽しそうに話すが、そう言った怪談話が苦手なふたばは顔面蒼白になり、ぶるぶる震えていた。

ふたば「うっうっうっうっうっ、理佐お姉ちゃんの意地悪！私がそう言

った話、苦手なの知ってて話すんだから。」

恨みがましそうな目で理佐を睨むふたば。

理佐「あははははっごめんごめん。」

ふたば「もう！」

理佐「でもさ、そんなに怖いんなら、隣に居る聖時くんを抱きつけばいいじゃない。」

ふたば「え、ええええ！？／＼／＼／＼／＼」

顔を赤くして驚くふたば。

アキ「……………」

聖時「だっ抱きつくって／＼／＼／＼」

抱きつくという単語に、聖時も顔を赤くする。

理佐「あれ？聖時くんまで赤くなって、どうしたの？今日はそんなに暑かったっけ？」

ふたば「もう！理佐お姉ちゃん！」

聖時「理佐先輩！」

聖時とふたばが同時に理佐叫ぶ。

理佐「あははははっ、ごめんごめん。それよりそろそろカニ、いい

んじゃない？」

アキ「あ、本当だ。それじゃあみんな、いただきますよ。」

聖時「ああ。」

ピティ（カニ カニ）

こうして聖時達は食事 시작했다。  
ちなみにタラバカニはとても美味しく、ものの数分でなくなったと  
言う。

（後編へ）

### 第23話 事件の事件の始まりの日（中篇）（後書き）

今回からLの季節の序盤の話が出てきました。

この後からはドンドン話を絡めて行きたいと思います。

それと今回出てきたキャラ、伊吹慶太は黒神の主人公（アニメの方）です。

このあとしばらくは出番はありませんが、次の話の黒神への伏線です。



**第24話 事件の始まりの日（後編）（前書き）**

どうも剣 流星です。

さて今回のおまけコーナーは真の紋章の応募についての話です。

それと本編では聖時が新しい能力に目覚めます。

それでは第24話をどうぞ

## 第24話 事件の始まりの日（後編）

第24話 事件の始まりの日（後編）

中等部の聖時の教室。

聖時はそこで、帰りの支度をしていた。

聖時「さて、帰るとしますか。」

そう言っつて聖時は席から立った。

ふたば「あ、聖時。今日、私と才くんは当番の仕事でこれから先生の手伝いをしなきゃならないから、先に帰っつて。」

聖時「うん、分かった。それじゃあ、アキとアルフと一緒に帰るか。」

そう言っつて聖時はアルフ達の方に顔を向ける。

アキ「あ、聖時。私も今日は一緒には行けないよ。今日はこれから帰っつて、日舞のお稽古があるから、急いで帰らなきゃいけないの。」

アルフ「私もパス。今日はフェイトに用事があるから、早く帰っつてきてくれっつて言われてるんだ。」

聖時「そっか、それじゃあ今日はピティと二人で帰るよ。」

ピティ「そうだね。」

才人「悪いな、聖時。」

聖時「いいって、それじゃあまた明日。」

才人「おお。」

そう言って聖時は教室を出て行った。

\*

時同じくして、ここは高等部の2・Aの教室。

河瀬裕也は夏原からコウノの事を聞こうとしていたがタイミング無く、いつの間にか放課後になっていた。

放課後こそチャンスなのに、当の夏原の姿はすでに教室の中にはなかった。

裕也は仕方がないと思い、物理のレポートを書くために図書室に向かった。

人もまばらな放課後の図書室。

裕也は中に2、3人しか居ない図書室に足を踏み入れると、カウンターに居る図書委員の女子生徒に物理の参考書の場所を聞く。

裕也「あの、すみません、物理の参考書ってありますかね？」

図書委員「あ、貸し出しですか？」

裕也「え？いえ、物理の参考書がどこにあるかだけ、聞きたかったんですが……」

図書委員「あ、ごめんなさい、3列目の書架の、向かって左側……  
……星……あの髪の毛の長い子がいるところですよ」

裕也は図書委員に軽くお辞儀をすると、言われた書架に向かって歩いた。

目的の場所にはすでに先客が居た。先ほど図書委員が言っていた髪の毛の長い女子だった。

どうやら三年生のようだ。

裕也はこんな美人の先輩が居たのかと思いながら彼女を見ていた。

裕也（美人だな〜とそんなことよりも、今はレポートだ。）

裕也は今おもった事を振り払い物理の本を探す。

そうして探していると、不意に視線を感じ、そちらを見た。

視線の主は、先ほどの髪の長い女子の先輩だった。

その視線はとても深い視線で、顔は努めて無表情。しかしどこか悲しさを一身に背負っているような、そんな表情をしていた。

裕也（・・・オレ、髪の長い先輩に、何かしたっけ？）

そんな事を思っていると、不意にその先輩に声をかけられる。

髪の長い先輩「本を探しているのですか？」

裕也「あ、はい、でももうありましたので、失礼します」

髪の長い先輩「・・・・・・」

裕也は目の前にいる女子の先輩から発せられる空気から、佇まいの悪さをかんじ取り、棚から参考書を抜き取ってその場を後にした。

そして、6人がけのテーブルに座り、レポートを書く準備をし、参考書をパラパラとめくる。

しかし、参考書のどこを開けばいいのか皆目見当がつかずにいた。

物理のレポートの課題は「もしも地球が空洞だったら、地表および地球内部はどのような状態になるのか、力学的に考察せよ」という物だった。

裕也はとりあえず、「もしも地球が空洞だったら」とノートに書いてから、自分のフトモモをトントンと叩きながら考え始めた。する

と背後から声をかけられた。

「????」内部はどの場所でも無重量状態になります。」

裕也「え、なんで……って!」

「????」図書室では静かにしましょう。」

声を上げようとしたところを寸で飲み込み、裕也は背後を振り返った。

裕也「髪の毛長い先輩……」

髪の毛長い先輩「3・D、星原百合ほしはらひるぎです。河瀬さん、隣、よろしいですか?」

裕也「えっ?!」

星原「答えてください……」

裕也「あ、はい、まあ、どうぞ、星原さん……」

と、言いつつも裕也は少しイヤだった。

人がまばらな図書館で、他にもたくさん席が空いている。

そんな中、髪の毛長い美人な先輩が隣に座ると、まるでカップルのように見えてしまうのでイヤだった。

裕也（星原さん……他の人の視線……気にならないのかな?）

そんな風に裕也が思っていると、隣にいる星原百合はお構いなしに

話しかけてくる。

星原「図書室にはしばしば訪れるのですか？」

裕也（マイペースな人だな）

そんな風に思いながら、裕也は先ほど自分の名前を知ってた事について疑問に思い、質問する。

裕也「・・・その前に、なんでオレの名前を知っているんですか？」

星原「知っていたら困りますか？」

裕也「困りはしますが・・・そりゃ気になりますよ」

星原「私のことが気になりますか？」

裕也「え、いや、そういう意味じゃなくて・・・あれ、そういう意味でいいのか。」

裕也「それよりも、ちょっと離れませんか？ヘンな噂が立つと迷惑でしょうし、せめて反対側の席に移動して・・・」

星原「動かないで。」

ピシッ！

彼女の言葉が発せられると同時に裕也の周りの世界が凍りついた。いや、正確には“裕也自身が”凍りついた。

裕也（う……動けない……まるでさっき言った言葉で動けなくされたみたいだ……）

裕也（催眠術か？）

裕也はそう考えると納得でき、驚きが消えつせる。

そんな時、例の猫が視界の片隅に現れる。

猫「やっとオレが……」

星原「あなたは黙っていて」

猫「ちっ。」

猫はそう言つとそのまま視界から消える。

星原「河瀬さん……大丈夫だから、じっとしててください……」

そう言つて星原百合は動けない裕也の視界に入ってきた。

すると彼女は裕也のポケットに手を入れると中から七角形の形をしたペンダントを取り出した。

裕也（？なんだ……これ……なんでこんなものがオレのポケットのなかに？）

裕也は彼女が自分のポケットから取り出した物を見て驚く。

彼自身はそのペンダントにまったく身に覚えがないのである。

そもそもポケットに入っていたことにさえ気がつかなかったのである。



星原「やっぱり・・・あなただったんですね・・・河瀬さん・・・これを使いましたか？」

彼女は質問してくる。しかし、使うどころか裕也はそれがポケットに入っていたことにさえ気がつかなかつので、使ったのかどうかに関しても言えば使わなかったと言える。

裕也「・・・・・・・・・・・・・・・・」

星原「もう喋れるはずですよ。」

そう言われ、喋ろうとする。

裕也「あ、本当だ。っていうか、これなんですか？催眠術？」

裕也は自分が今かかっている状況に関して聞く。

星原「そうだと思ってもらって構いません。でも答えて・・・七角ペンダントは・・・使いましたか？」

裕也「使ったも何も・・・今初めて見ましたし、なんでオレのポケットにそんなものがあるのかわからないんですよ・・・で、さっきの猫は？」

裕也は先ほど自分の視界に入ってきた猫に関して聞く。しかし、彼女はそれに答えずつぶやく。

星原「自覚も・・・記憶も無いのですね・・・・・・・・」

裕也「どう言う事ですか？」

星原「猫なんて居ません。じゃあこのペンダント、もらってもいいですか？」

裕也「いいですよ？そもそも覚えがないんですよ、そんな物持っていた覚えが……それよりも、猫と話してませんでしたか？」「あなたは黙ってて」「って」

星原「あれは……河瀬さんに言ってたんです……ペンダント、もらっていきますね……無駄でしょうけど……」

裕也「よく分からないんですが、そろそろ動かないとこのまま固まりそうですよ。」

星原「もう動けるはずですよ」

彼女そう言ったので裕也は体を動かしてみる。

裕也「え……あれ？本当だ……」

裕也は自分の体が動かし確かめる。

星原「では、貰っていきます。」

裕也「星原さんのなんですか、それ？」

星原「いいえ……。でも、本来の持主は、良く知っていますから」

裕也「あ、そうなんだ。じゃあ、返しておいて貰えますか？なんでオレが持っていたのか分からないけど、ごめんなさい、って」

星原「無駄でしょうけど……努力します」

そう言って彼女は裕也の側からはなれ、そのまま図書室から出て行くこととした。

裕也「あ、ちょっと……！」

裕也は彼女に声をかけるが止まらず、図書室から出て行った。

裕也「なんだっただ……」

裕也は呼び止めた姿勢のまま固まって、そう呟いた。

\*

ここは校庭のはずれにある物置の前。  
そこに二人の生徒と教師が居た。

教師「すまないね。助かったよ。」

そう言つて、教師の坪田は自分を手伝つた生徒二人に礼を言う。

ふたば「いえ。」

才人「これも当番の仕事ですから。」

二人はそう返事をした。

二人は日直当番として、先生の探し物の手伝いを今までしていた。

坪田「それじゃあ、後はやっておくから、キミたちはもう帰っていいよ。」

ふたば「あ、はい。」

才人「やっと終わりか。ふたば、帰ろつか。」

疲れたような声でふたばに声をかける才人。

ふたば「そうだね、でもその前に教室にカバンを取りに行かなくちやね。」

才人「そうだったな。」

ふたば「それじゃあ、先生、さようなら。」

坪田「ああ、気をつけて帰れよ。」

才人「はい。」

そう才人は言いながら教室に向かい、ふたばはその後に続く。  
そんな二人を物陰から見ている者が居た。

???「よし、今日はあの二人にしよう。」

\*

ここは図書室前の廊下、先ほど裕也から七角ペンダントを買った星原百合が図書室から出てくるところだった。  
彼女は廊下に出ると、自分の手の中にあるペンダントを見る。

星原「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女は手の中にあるペンダントを何処か悲痛な顔で見ている。  
そんな時、廊下の向こう側から誰かが会話しながら近づいてくるのが聞こえた。

彼女はペンダントをポケットにしまうと、そこから立ち去ろうとした。しかし、こちらに歩いてくる人物達を見て動きを止めた。

聖時「しかし、本当にピティと二人だけで帰るのはひさしぶりだな。」

ピティ「と言うか、中学に入って初めてじゃない？」

聖時「そう言えばそうだね。」

そんな風にたわいのない話をしながら歩いている聖時。

そんな二人をまるで信じられない物を見たような顔で星原百合は見ていた。

星原「あの、ちょっと言いですか？」

聖時「？はい。」

聖時は彼女に声をかけられ止まる。

いきなり高等部の先輩に声をかけられたので、少し困惑する聖時。

星原「・・・・・・・・・・・・・・・・」

聖時「あ・・・・・・・・あの〜何か用で？」

聖時はこちらを見つめる先輩に質問する。

すると聖時は彼女の視線が自分に向いてなく、自分の少し横に向いてる事に気付く。

彼女の視線・・・そこには普通の人には見えないピティが居る。

聖時（・・・まさか・・・）

聖時は彼女はもしかしたらピティの事が見えているのでは？と思い始めた。

ピティもそう感じ取ったのか、目配せで聖時にそう言う。

星原「少し話があります。よろしいでしょうか？」

聖時「は・・・話・・・ですか？」

星原「はい、あなたが連れてくるその小さい妖精についてです。」

聖時・ピティ「！」「」

聖時とピティは声を出さずに驚く。

ピティ（この人、やっぱり私の姿が見えるんだ！）

聖時（ああ。）

二人は小声で話し合う。

星原「・・・場所を変えましょう。ここでは少し目立ちますから・・・」

そう言って彼女は歩き出す。

ピティ「……………どうする？」

聖時「どうするも何も……………行くしかないじゃないか。」

ピティ「だね。」

そう言って聖時達は彼女の後を追った。

\*

高等部校舎の屋上。

その入り口のドアを開けて、星原百合は屋上に入ってきた。それに続くように聖時達も屋上に入る。

星原はそのまま歩いて屋上の端の柵まで行く。

聖時も歩いて付いて行き、彼女の2〜3歩前で止まる。



星原は屋上の柵の外をしばらく見つめた後、聖時の方へと体ごと振り向く。

ちよつと星原が柵に背を向けて、聖時と対峙するような形になる。

聖時「あ……あの、それで話とは？」

沈黙を破るかのように聖時が話を切り出す。

星原「先ほど言ったあなたの横に居る妖精についてです。」

聖時「……やっぱり。」

ピティ「あんた、私の姿が見えるの？」

聖時「と言う事は、アキやふたば達と同じ、魔力持ちって事か……

」

聖時がそう言うと、星原百合は口を開いて聖時に話しかけた。

星原「あなたは、中等部の生徒ですね？」

聖時「？はい。そうですが……」

星原「……覚えていますか？以前、この場所で私と会った事を。」

」

ピティ「え？」

聖時（会った事？）

そう言われて思い出そうとする聖時。

すると、聖時は今学期の初日、学園内を見て回った時、この場所に  
来た事を思い出す。

そして、その時に今日の前にいる先輩と出会った事を思い出した。

聖時「あゝ、はいは、思い出しました。確か今学期の初日の放課後、  
この場所で会いましたね。」

ピティ「ああ、あの時の。」

ピティも思い出したかのような顔をして言った。

聖時「それで、あの時の先輩が何か用・・・動かないで・・・  
？」

突如彼女の言った言葉を聞くと、聖時の体は動かなくなる。

聖時（な・・・なんだ？体が?!）

聖時がそう思っていると、星原百合は動けなくなった聖時に近づく。

聖時「な・・・何をしたんです！僕に！」

聖時は敵意を向けながら星原に言い放つ。

星原「大丈夫です。手荒なマネはしません。」

そう言っただけで彼女は聖時のすぐ側まで来た。  
するとそこにピティが聖時に声をかける。

ピティ「聖時どうしたの？まるで石膏像みたいに固まって?!」

星原「え?!」

聖時にかげられた声を聞き、彼女は驚く。

星原「なんであなたは接続した私たちに声をかけることができるんですか?!」

まるでその事が異常であるかのような言い方をする星原百合。

星原（なぜ……まさかこの子のエルフィン？でもあれは、本人の無意識を切り取り脳の中に住まわせる物、ニューロマンシーを遣う者をサポートする義人格アシスタント……言わば幻、実体は無いはず……でもこの子は実態がある……）

彼女が困惑しているとピティが彼女に声を張り上げて怒鳴る。

ピティ「ちよつとあんた！聖時になにしたの！」

星原「……落ち着いて、少しあなたの記憶を覗かせてもらっただけです。」

聖時「記憶を覗く？」

星原「ええ、あなたが意識不明事件の犯人ではないかどうかを知る為に。」

聖時「意識不明事件の犯人?!」

聖時がそう言ってるそばで、彼女はなにやら呪文のような物を唱える。  
すると聖時の目の前に聖時が今まで見てきた風景などがテレビの画面のように出てくる。

聖時「なっ?!これは?!」

ピティ「なにこれ?!」

聖時とピティは目の前で起きている事に驚く。  
そんな二人などお構いなしに作業を進める星原百合。

星原「……まさか、こちらの世界にも魔法があるなんて……  
それに魔力を持つ者しか見えない使い魔……」

星原百合は聖時の記憶を見て、聖時の側に居るピティがどういう存在なのか、聖時がどうという人物で、なぜピティのような存在を連れてくるのかを知った。

星原「……なるほど……そう言うことでしたか……あなたは犯人どころか、去年の意識不明事件の被害者だったんですね。」

星原百合は自分が見ていた聖時の記憶を映していたパネルのような物をと閉じながら、聖時に言った。

聖時「あゝ、なにがなにやら分からないんですけど……」

ピティ「ちょっと、ちゃんと説明しなさいよ!」

彼女にむかって聖時達は説明を求めた。

星原「・・・そうですね・・・説明は必要ですね・・・わかりました。話せる範囲でよければ話します。こちらもあるあなたの記憶を勝手に覗きましたから、そのお詫びとして。」

そう言っただけで彼女は話始めた。

それで分かった事は、彼女の使っている力は魔力を使って相手の脳に接続して、相手の記憶を見たり、消去したりする魔法だという事、彼女が去年の意識不明事件を解決した人物である事、そして、今再び意識不明事件が起き、その犯人を追っている事を話した。

聖時「意識不明事件・・・やっぱりこれは病気じゃなかったんだ。」

ピティ「で、聖時に接続したのは、私みたいな怪しい物を連れてくるから犯人じゃないかって思ったからって事なのね。」

星原「はい。」

ピティ「そう、それでさっき聖時の記憶を見て、疑いは晴れたんですよ？まったく、聖時を犯人扱いするなんて、忌々しい。」

聖時「まーまーピティ。疑いは晴れたんだから。疑われた本人よりも怒らないの。」

ピティ「わかったわよ。」

星原「本当にすいません。お詫びとして、あなたの中の能力の流れと魔力の流れの乱れを直して起きました。」

聖時「流れの乱れ？」

星原「はい、先ほどのスキャンでわかったことなのですが、去年の意識不明事件で、あなたは2つの新しい能力に目覚めていたんです。ですがそれが不完全な形で目覚めた為、あなたの中の魔力の流れが乱れてしまい、魔力がうまく使えなくなっていました。」

聖時「え?!それじゃあ去年から魔法がうまく使えないになっていたのは……」

星原「はい、能力の不完全な目覚めのせいだったということです。しかし、それも私が直しておいたので、もう魔法がちゃんと使えるようになってはいます。」

聖時「そっか……また魔法がちゃんと使えるように。」

聖時はまた魔法がちゃんと使えるようになったと知り、うれしさがこみ上げてきた。

ピティ「よかったね、聖時。」

聖時「ああ。あ、所でさつき僕に新しい能力が目覚めてるって言ってましたけど、それってなんですか？」

星原「能力ですか?そうですね、まず1つは直感能力の向上です。」

聖時「直感能力の向上か……」

ピティ「事件の後から聖時のカンが鋭くなったのは目覚めた能力の

せいだったんだね。」

星原「はい、そしてもう一つは魔力を使って人の精神を掌握する能力・・・ニューロマンシーです。」

ピティ「それって、今あんたが聖時にかけてるこれの事？」

ピティは聖時がいまだに体が動けなくなっている状態の事なのかと言った。

星原「はい、ニューロマンシーは幾重のも張られた心の壁を取り払い、心に直接干渉できる能力です。しかし、その発動にはいくつかの条件があります。詳しい事は先ほどあなたの中に入れておいたので検索して見てください。」

聖時「検索？」

星原「はい、私がさっきあなたにやったことです。やり方は、あなたの使い魔に尋ねてください。」

聖時「ピティに？」

星原「はい、あなたの使い魔は、ニューロマンシーの使い手をサポートする擬似人格アシスタントのエルフィンの能力をかねてます。」

ピティ「そうなの？」

星原「はい、現にさっき私が彼に与えたニューロマンシーの情報を取り出す事が出来るはずです。」

ピティ「そんなこと出来るはずが……」

ピティはそう言おうとするが、先ほどから自分の中に今まで感じられなかった感覚が出来ていることに気がつき顔をしかめる。

ピティ「……あれ、分かる……なんだか分からないけど、ニューロマンシーについての情報がわかるよ。」

聖時「本当？」

ピティ「うん。この知識があればニューロマンシーを使うことが出来るよ！」

聖時「そうなんだ。……あ、え」と。

聖時は星原百合に対してお礼を言おうとして、自分が彼女の名前を知らない事に気付く。

星原「3・D、星原百合です。」

聖時「あ、星原先輩ですか……では星原先輩、ありがとうございます。体の中の魔力の流れを整えてもらえばかりか、新しい能力の事まで教えてもらって。」

星原「礼には及びません。これは、私がおなたを犯人呼ばわりしてしまった事に対しての謝罪も込めてありますから。」

聖時「あ、はい。」

星原「ただし、ニューロマンシーの取り扱いには十分注意してください」



さい。この能力は相手の心を掌握してしまう物なので、むやみやたらに使ったり、相手のプライバシーを覗いたりしないでください。」

聖時「あ、はい。」

星原「ま、もつともあなたはそんなことはしない人間だと、先ほど見た記憶で分かりましたけど。」

聖時「あ、・・・はい！」

聖時は星原が自分を信頼してくれているのだと思い、その思いを裏切らないようするために、能力を正しく使おうと思った。

星原「それでは接続を切ります。」

そう彼女が言うと聖時の体の感覚が元に戻る。

聖時「！」

聖時は急に感覚が戻った事に驚き、体を多少フラフラさせる。

ピティ「大丈夫？」

聖時「ああ、ちょっとクラクラッとしただけだよ。」

星原「初めてニューロマンシーを受けた人はそうなります。ですがすぐに治るので心配ありません。」

聖時「あ、はい・・・。」

聖時はクラクラする頭を抑えながら言った。

星原「それでは私はこれで。」

そう言っつて星原百合は屋上から出て行こうとした。

聖時「あ……………」

そんな星原百合の背中に聖時は声をかける。

星原「？なにか？」

聖時「魔法を再び使えるようにしてくれたありがとうございます！」

聖時はそう言っつて頭を下げる。

星原百合はそれを見て少し微笑み屋上を後にした。

聖時「……………僕らも帰ろうか？」

ピティ「うん、そうだね。」

そう言っつて聖時達も屋上を後にした。

屋上を出て、階段を下り、玄関にある自分の下駄箱で靴に履き替える。

そしてピティと話しながら校庭の端を歩いて校門へと向かった。

そのとき校庭の方から誰かの名前を呼ぶ、悲鳴に近い声を聞いた。

????「才人君！才人君！！」

聖時「!この声・・・ふたば?」

その声はふたばの物だった。しかし、その声からは何か尋常じゃない感じがした。

ピティ「行ってみよう!」

聖時「ああ!」

聖時はピティの声に頷き、声がした方へと向かった。

そして聖時がそこで見たものは・・・

必死な声で才人に呼びかけるふたばと・・・

そして・・・

意識を無くして倒れてる才人だった・・・

《つづく》

おまけコーナー

ピ「ピティと」

ユ「ユニの」

二人「「おまけコーナー」」

ピ「はい、毎度お馴染みのおまけコーナー。司会進行役のピティだよ」

ユ「解説のユニです。」

ピ「アシスタントのビックキーです。」

ピ「さて今回は、前々から募集していた真の紋章の事についてです。」

ビツ「あゝ、あれですか。たしかオリジナルの真の紋章のアイデアを募集してたんですよね。」

ユ「ええ、応募枠は二つで、そのうち一つは決まったんですけど……。」

ピ「残り一つのアイディアがこないんだよね。」

ビツ「もう忘れ去られてるんじゃないんですか？」

ピ「あ……あり得そう……。」

ユ「と……とにかく、さすがにあと一つの紋章をいい加減に決めないといけませんから、ここで締切日を作りたいと思います。」

ピ「あと、応募の内容を少し変えます。以前は真の紋章のアイデアとそれを宿らせるキャラだったけど、今回は宿らせるキャラを提示するから、そのキャラに宿らせる真の紋章を募集って形にするよ。」

ビツ「へへ、紋章を宿らせるキャラを……で、そのキャラは一体誰なんですか？」

ユ「宿らせるキャラは現在、本編に登場済みの人で、この作品の登場作品の主人公の一人です。」

ビツ「え！？誰なんです?!」

ピ「え〜と、Fateの主人公の衛宮士郎だって。」

ビツ「え!?! 士郎さん?!」

ピ「うん。」

ユ「なるほど・・・現在、聖時さんに近いキャラで、男の方の殆どの方は確か真の紋章の・・・」

ピ「ストップ!! ネタバレ厳禁!!」

ユ「あ!?! ..ごめんなさい!」

ピ「まったく危ないな〜」

ビツ「まあまあ、それより、このアイデアの締め切りはいつにするんですか?」

ピ「え〜、それはたしか・・・7月10日が締め切りになってるね。」

ユ「7月の10日ですね。」

ビツ「いっぱいアイデア来るといいですね。」

ピ「まあね。」

ユ「あ、それと、もし真の紋章の事が知りたいなら「中間発表」の所に書いてありますから、そちらを参考にしてください。」

ピ「それじゃあ、今回はこの入んで。」

ユ「みなぎくん」

三人「「「まったね」「」「」

第24話 事件の始まりの日（後編）（後書き）

真の紋章のアイデアだけでなく、感想等も随時受け付けています。



## 第25話 事件調査開始（前書き）

どうも、剣 流星です。

前回募集をかけたアイデア発表を今回のおまけコーナーで発表します。

それでは第25話どうぞ。

## 第25話 事件調査開始

### 第25話 事件調査開始

ここは次元の狭間。

そこに黒い、少女の影のような物が居た。そしてその側には冥界の宝石のような輝きを放つ仮面を被ったタキシード姿の男……冥闘士ベクターの一人、天魁星・メフィストフェレスの杳間よつまが居た。

杳間「……魂集めは順調ですかい？」

杳間は影の少女に声をかけた。

影の少女「ええ、あなたが持ってきてくれた人形と、それを元に私  
が作ったもう一つの人形のおかげだね。」

杳間「そうですかい、そいつはよかった。そうでなくちゃあ、オレ  
があんたにあげた真の紋章が無駄になっちまいますからね。」

影の少女「……杳間、あなたには感謝している。あの忌々しい  
死の妖精と死神族のせいで、両方の世界に干渉できなくなった私に  
この……」

そう言って影の少女は封印球の中に閉じ込められた真の紋章を見せ

る。

影の少女「真の紋章を与えてくれて、再び両方の世界に干渉できるようにしてくれた。もしこれが無ければ、私は今でもこの次元の狭間をただ漂っているだけの存在に成り果てていた。」

杳間「なぐにかまいませんよ。オレはただ、この紋章をそのまま魔王軍の連中に渡しても面白くないからこうしたまですよ。」

影の少女「そう言えば、あなたは壁際でパーティを見るのが好きでしたね。」

杳間「そつ！くるくるくるくる、オレが落としたり一滴で、舞台の上の連中が踊るのを見るのが好きなんですよ。」

杳間は楽しそうに影の少女の周りを飛び回りながら言う。

影の少女「……その舞台上を躍る者の中には、私も含まれるのかしら？」

杳間「……気に入りませんか？」

杳間は飛び回るのを止めて影の少女に向き直る。

影の少女「……正直言えば気に入らないわ。……. . . . .けど、今はあえてあなたが用意した舞台上、おとなしく踊ってあげる。」

杳間はその言葉を聞き、少し驚く。

杳間「!.....ほづ。」

影の少女「けど、私がいつまでもあなたの手のひらの上で踊っているとは思わない事ね。」

影の少女はそう言いながら杳間にプレッシャーをかける。

杳間「おゝ怖い怖い。せいぜい気を付けるとしましょうか。」

杳間はおどけた声で言う。

影の少女「ふん!」

影の少女は一度杳間を見て、そのままその場を立ち去る。

影の少女（.....前回のツテは踏まない。こんどこそ!）

そう思いながら影の少女は杳間の前から居なくなった。

杳間「ククククッ!いいね、言ってる側からくるくるくるくる踊ってくれて。」

そついいながら杳間は次元の狭間の隙間からある世界を見る。

そこには聖時が病院に入る所が見えた。

杳間「さあ演者諸君!えんじやしょくん!!新たな舞台の開幕だ!!!」

才人が運びこまれたとある病院。その待合室で聖時とふたばとピティはイスに座り込んでいた。

その後、聖時はふたばをなだめながら携帯で救急車を呼び、その場にふたばを残して職員室に残っている先生に事情を話しに行った。

その後、駆けつけた救急隊に付いて行ったふたばから携帯で連絡を受け、才人が運びこまれた病院を知り、その場所へと向かった。

聖時は病院に入り、運び込まれた才人の居る処置室へ向かった。

処置室の前には付き添ったふたばが椅子に座っていたので聖時はふたばにどうなったかを聞こうとした。その時、処置室からちょうど処置をしていた医師が出てきたので、ふたばと二人で才人がどうなったかを聞いた。

聖時は才人は自分と同じく「すぐに意識を取り戻すはずだ、きっとそうだ。」とそう希望を持ちながら話を聞いた。

しかし、その話はその希望を打ち砕く内容の物だった。

ふたば「……………才人くん……………」

ピティ「才人……」

聖時「……………どうして……………こんな事に……………」

そう聖時たちが呟いた時、数人の人物が聖時達に近づいてきた。

アキ「聖時！ふたば！」

聖時達は声のした方を向く、そこには先ほど連絡をしたアキ達をはじめとした別荘に集まっているメンバーが歩いてこちらに向かって来ていた。

アキ「才人は？才人はどうなったの?!」

士郎「そうだ、大丈夫なのか？無事なのか？」

アキたちが聖時たちに次々と質問する。

ふたば「……………アキ……………う、うづうづ……………」

ピティ「アキ」

ふたばとピティは駆けつけたアキの顔を見ると、見る見ると涙を目にためた。

アキ「……………ふたば？ピティ？」

アキは二人の顔を見て、どうしたのかを聞こうとしたが、次の瞬間二人はアキに抱きつき泣き始めた。

アキ「ふたば？ピティ？」

ふたば「う……うわあああああ！」

ピティ「才人が！才人があああああ！」

アキの胸で泣き続ける二人。

琴乃「ふたばさん?!」

明日香「ピティ？」

突然泣き始めたふたばに驚く琴乃と明日香。

そしてそれを見た他のメンバーは事情を知っているもう一人の人物、  
聖時に事情を聞いた。

剛「おい聖時、才人はどうなったんだよ……大丈夫なんだよな  
？」

アルフ「無事なのかい？大丈夫なのかい？」

しかし、いくら呼びかけても聖時は顔を下に向けたまま喋ろうとし  
なかった。

それに苛立ち猛が聖時の肩をつかみ、揺すって声を荒げる。

猛「おい聖時！」

すると、ようやく聖時は顔を上げた。

聖時「猛……………」

猛「聖時、才人はどうなったんだ？」

聖時は猛の問いを聞くと唇を強く噛んだ後、その重い口を開けた。

聖時「才人は……………もしかしたら、もう意識が二度と戻らないかもしれないって……………」

猛「え？」

猛は聖時が言った言葉をしばらく理解できずに立ち尽くす。

アルフ「ど……………どういうことだい？才人の意識が二度と戻らないかもしれないって……………」

アルフは先ほど聖時が行った言葉の意味を聞く。

聖時「……………才人を処置したお医者さんが言ったんだけど、意識を失った才人の脳波が、この前運び込まれた意識不明者の物と違い、今だに意識が戻らない人の物と同じなんだって。それでもしかしたら、その人と同じように、もしかしたら意識がそのまま戻らないかもしれないって……………」

士郎「な……………意識が……………」

琴乃「二度と戻らない？」

明日香「うそ……………才人お兄ちゃんが……………」



猛「な……なんだよ……なんなんだよそれ!!」

声を荒げ、近くの壁を猛は殴った。

剛「騒ぐな猛。病院内だぞ。」

猛「うるせい!お前は才人がこんな事になっているのになに平気な顔してるんだ!!」

剛「平気なもんか!!」

剛は声を上げて猛に怒鳴り返す。

剛「オレだつて才人の事で頭のなかグチャグチャだよ。けどな、だからってこんな所で騒いでもどうにもならないだろ?」

猛「……………」

士郎「猛、剛の言つと通りだ。」

士郎は猛の肩に手を置きそう言った。

猛はそれを聞き、力なく椅子に座り込んだ。

そんなやり取りを、どこか遠くの世界の事のような感じで聞きていた聖時は別の事を考えていた。

聖時（なんで才人だけ……僕は一度意識不明になったけど、しばらくして意識を取り戻した。けど才人は違った……なぜ？）

そんな風に考えていると、ふと聖時は今日会った不思議な先輩、星原百合の事を思い出した。

聖時（たしか星原先輩は、この事件は誰かの手で起こされた物だつて……ならその犯人を捕まえれば、もしかしたら才人の意識不明状態から回復させる手がかりを掴めるかもしれない。）

自分の考えで僅かな希望を持った聖時は、まずこの事を教えてくれた星原百合に話を聞こうと思った。しかし、今のこの時間ではもう彼女は帰っていると思い断念する。

だが聖時は才人のことを考えてしまい、落ち着いていられないようになる。

なにか他の手がかりはないかと考えると、ふと、自分の側にいるふたばに目が行った。

聖時（……もしかしたらふたばが何か見てるかもしれない。もし見ていたのなら、今日手に入れたあの力……ニューロマンシーで……）

そう思い、聖時は再びふたばを見た。しかし、聖時はここでニューロマンシーを使うのはさすがに不味いと思い、立ち上がって全員に声をかけた。

聖時「みんな、いったん別荘に集まろう。」

聖時の声で一斉に聖時の方を向くアキ達。

ふたば「別荘？」

アキに慰められ、ようやく泣き止んだふたばが言う。

聖時「うん、みんなに話があるんだ。」

剛「話？」

猛「いつたいなの話だよ！第一こんな時に！」

猛が再び大声で言い放つ。

聖時「才人のことについてだ。」

全員「！」

全員が聖時の言葉に息を飲む。

士郎「才人の事について？」

聖時「ああ。」

アルフ「なんだいその話って？」

聖時「それはここじゃちょっと。」

そう言っつて聖時は周りを見る。

聖時たちの周りには医師や看護師、入院患者と思わしき人たちが、こちらのやり取りを遠くから伺っていた。

ピティ「確かにここじゃ落ち着いて話が出来ないね。」

明日香「うん。」

琴乃「ならさつそく別荘に移動しましょう。」

アキ「でもその前に家に連絡入れないと、別荘を使うにしても、最低でも1時間かかるから。」

剛「そうだな、もうこんな時間だからな。」

剛は外を見た。外はすでに日が暮れて、すでに夜になっていた。

聖時「それじゃあみんな、移動しよう。」

アルフ「ああ。」

こうして聖時達は神谷邸に向かった。

\*

ここは聖時の別荘の居間。そこには聖時を始め、病院に来ていたメンバーの他に聖時の師である童虎も居た。

聖時は先ほどまで童虎に今日起きた才人が意識不明になった事につ

いての説明をし、たった今それを終えた所だった。

童虎「……そうか、才人が……」

そう童虎は言って顔を曇らせた。

猛「……で、聖時、さっき病院で言ってた話ってなんだ？」

猛が先ほど病院で言った聖時の話について切り出してくる。

聖時「ああ、実は……」

聖時は今日の放課後であった高等部の先輩、星原百合との事を話した。

アルフ「……意識不明事件は何者かの仕業？」

アキ「人の心に直接働きかける魔法……ニューロマンシー……」

猛「……まじかよ……」

剛「……その星原って言う先輩……信用できるのか？」

ピティ「……わたしは……どっちとも言えない。確かに怪しい所はあるけど……聖時の中の魔力の流れを整えて、再び魔法を使えるようにしてくれたばかりか、新しい能力を使えるようにもしてくれた……けど……」

士郎「だからと言って、その人の言うことを鵜呑みには出来ない……」

・か。」

ピティ「……うん……。」

童虎「……そうか……聖時、おぬしはどっと思っ。」

聖時「……僕は……信じてもいいと思っ。」

童虎「……なぜそう思っ？」

聖時「カンです。」

明日香「え？カンなの？！」

聖時「ああ。」

聖時の答えに一同があきれる。

アルフ「あのね、そんなカンとかで決めるんじゃないよ。」

アキ「たしかに聖時のカンは良く当たるけど……。」

聖時「もちろんそれだけじゃないんだ、あの時……星原先輩から感じた感じは、人を騙したり、ウソを言ったりする者のじゃなかった……だから……。」

琴乃「信じて見たいんですね？」

聖時「ああ。だから僕は星原先輩が言っていた意識不明事件が何者かによって起こされている事を信じてその犯人を捕まえようと思っ

んだ。」

一同「「「「「「「「「「犯人を捕まえる?!」「」「」「」「」「」

聖時を残した全員が声を揃えて言った。

ふたば「犯人を捕まえるって・・・どうして?!」

聖時「意識不明事件は何者かによって起こされている・・・ならその犯人を捕まえてどうやって人を意識不明状態にしているのかを聞き出す。その方法から才人の意識不明状態から回復させる方法の糸口をつかめるかもしれないと思ったんだ。」

剛「なるほど・・・先ほど病院で言ってた才人の事についてはこの事だったんだな。」

聖時「ああ。僕らの手で才人を助けよう!」

士郎「そうだな!よし、なら早速犯人を捜そう。」

猛「ああ、犯人をとっ捕まえて、とつとと才人を元に戻す方法の糸口をつかもうぜ!」

剛「ああ、そしてその糸口から才人を回復させる方法を見つけて、あいつの目を目を覚まさせてやろう!」

アルフ「そうだね、あたし達であいつを助けてやろう!」

琴乃「みなさんががんばりましょう!」

明日香「がんばろう！」

猛たちがそれぞれ決意を言葉にする。

童虎（フツ、ここに来るまではまるでお通夜のような顔をしていたやつ等がもう元気になった・・・聖時、不思議なやつだ）

童虎は聖時達を見ながらそう思った。

アキ「で、犯人を捜すのはいいとして、どうやって捜すの？」

アキがこれからの方針のことについて話す。

士郎「そうだな、今の所手がかりは無いんだよな。」

士郎もアキに続いて言う。決意したはいいが、手がかりが無い為猛達は頭を一斉に悩み始めた。

聖時「・・・大丈夫、手がかりは有るよ。」

一同「「「「「「「「「「え!?!」「「「「「「「「「

聖時の一言で一斉に聖時の方を向く。

ピティ「手がかりって?」

聖時「まず一つはさっき話した星原先輩、そしてもう一つは・・・」

そう言いながら聖時が指さした。

聖時の指の先にはふたばが居た。



ふたば「え?!わたしが手がかり!？」

聖時「うん、そう。ふたばは才人が意識不明になった時、側に居たんだよね？」

ふたば「う・・・うん、けど私その時は気が動転してて、その時の事をうまく思い出せないの・・・」

琴乃「仕方ありませんよ。自分の目の前で才人さんが倒れたんですから。」

剛「なら、ふたばさんがその事をうまく思い出せるまで待つしかないのか・・・」

剛は少し落胆した声で言った。

聖時「いや、その必要はないよ。」

アルフ「え?!どう言うことだい?必要ないって・・・」

するとピティがなにか思いついたのか大きな声で言った。

ピティ「わかった!百合に教わったニューロマンシーを使うんだね?」

聖時「そう、僕がふたばにニューロマンシーを使い、ふたばの思い出す事の手伝いをするんだ。」

アルフ「なるほど、それはいい。」

聖時「うん、もつとも、ふたばがニューロマンシーを使って接続する事を許してくれたらだけど。」

全員が一斉にふたばの方を見る。

ふたば「あ、えっと・・・」

聖時「大丈夫、プレイベートな事には触れないようにするから。信じて。」

聖時は真っ直ぐな目でふたばを見た。

ふたばはそんな聖時の視線をうけた後、少し悩んだあと聖時に同じような真っ直ぐな目で返事をした。

ふたば「わかった、聖時を信じて、ニューロマンシーを受けるよ。」

聖時「ふたば・・・ありがとう。」

そういつて聖時はふたばの前に立つ。

聖時「それじゃあ早速。」

ふたば「・・・うん！」

そういつて聖時は百合が自分の中に入れたニューロマンシーの知識を頼りに接続の準備をする。

聖時（え〜っとまずは・・・）

聖時が接続の準備の事を思いだそうとすると、不意に聖時の頭の中に声が響いた。

ピティ（まずは相手をリラックスさせる！）

聖時（え?!なんでピティの声が頭に響いて来るんだ?!）

聖時は突如頭の中に響いてきたピティの声に驚く。

ピティ（さつき準備している時に気がついたんだ。百合に中を整理してもらったおかげで念話を使えるようになったみたい。）

聖時（へへそっか、便利だなコレ。これなら周りに人が居てもピティと会話ができるな。）

聖時はピティと念話で話しながらそう思った。

今までは回りに人がいた場合、ピティの声が回りに聞こえる危険があったので会話する事が出来なかった。

しかし、コレなら周りピティの存在を悟られることなく会話が出るのである。

ピティ（あとコレ、波長を合わせれば、魔力持ちの人とでも会話できるみたい。）

聖時（へへ、じゃあアキや士郎や猛たち共念話で話すことができるんだな）

ピティ（うん。さて念話の話はここまで。黙ったままだから回りのみんなが心配してるよ?）

聖時（おっと、じゃあさっそくはじめよう。）

聖時はそう念話で話ながら、まず接続対象であるふたばに話しかけた。

聖時「ふたば、まずはリラックスして。」

ふたば「う・うん。」

ふたばは聖時に言われた通り力を抜いた。

ピティ（視界確保お願い。）

聖時「ふたば、僕の目を良く見て。」

ふたば「う・うん（ちょっと照れるな／＼／＼）」

ふたばは照れながらも言われた通り聖時の瞳を見つめる。

接続にはいくつかの条件があった。その一つが相手の視界の確保である。

視覚は、人の器官の中でも、外部に露出しているほぼ唯一の「精神への直結経路」である。

だから視界を確保するのは相手ほ心を捉えることと同意であり、接続するのに一番楽な方法でもある。

次に聖時はふたばの瞳を覗きながら、魔法を使う要領で魔力を解放した。

ピティ（魔力解放確認。接続準備完了）

続いて聖時は接続に必要な暗示の言葉を言う。

聖時「コネクト接続」

聖時がふたばに接続する。すると周りが赤い色で染まった不思議な空間が広がり、ふたばは一瞬ビクンと体を痙攣させ後固まったかのように動かなくなった。瞳も虚ろになる。

ピティ「やったよ聖時！初接続、成功」

聖時「フウ、うまくいった。」

聖時は接続が成功したの事に安堵する。

そんな風に聖時が思っていると、ふたばの目にゆっくりではあるが生気が戻っていく。

ふたば「うーん……あれ、えっと……これは成功したのかな？」

聖時「うん、なんとかね。」

ふたば「あれ、体が動かない……」

ピティ「接続中は接続されている人は動けないの。」

ふたば「そ……そうなんだ。ってあれ？なんでピティが居るの？」

聖時「ピティは僕がニューロマンシーを使うのをサポートしてくれるエルフィンの役割をしてくれるんだ。」

ふたば「へ〜、そうなんだ。」

ちなみに今聖時達は普通に会話しているように見えるが、実際はそうではない。

聖時達とふたばの間には目に見えない回路が直結されていて、音声や言葉を介さなくても意識をダイレクトに相手に伝えられるようになっている。

聖時「さて、え〜とまずは才人が倒れた時の記憶を検索して取り出そう。」

ピティ「だね、で、検索する為の条件は？」

聖時「う〜ん、才人、倒れる、校庭で。ただし今日分だけで検索。」

ピティ「了解。実行中……………」

ピティがふたばの記憶の中から検索条件に合った記憶を探し出す。

ピティ「検索終了。1件ヒットしたよ。」

聖時「よし、じゃあ早速それを再生して。」

ピティ「了解。」

ピティがそう言うと、聖時達の目のまえにふたばの視点で、才人と並んで歩いてる映像が映し出される。

ふたば「うわ〜すごい、こんな事まで出来るんだ。」

聖時「うん。」

才人「やれやれ、やっと終わったよ。」

ふたば「つかれたね〜」

写し出された映像からふたばと才人の声が流れ始めた。

~~~~~

するとふたばの携帯が突然鳴る。

才人「？なんだ？」

ふたば「あ、ごめん、私の携帯」

映像のふたばはポケットの中から携帯を取り出し見る。

ふたば「あ、理佐お姉ちゃんからだ。」

才人「理佐先輩から？」

ふたば「うん、翠屋のケーキを買ってきたから一緒に食べないか？
つて。」

才人「へ〜、翠屋のケーキか・・・あそこのケーキうまいんだよな
」

ふたば『うん、おいしいよね。』

そう言いながら映像のふたばは携帯を折りたたむ。そのとき携帯のストラップが外れて落ちる。

ふたば『あっ』

ふたばは落ちたストラップを拾おうとしてしゃがむ。

その時、シュツ！と言う音を立ててしゃがんだふたばの頭上を何か
が通過する。

ふたば『？ねえ才人くん、いま私の上を何かが・・・』

ふたばは才人に、今しがた自分の頭上を何かを通ったかどうかを聞
こうと立ち上がりながら才人の方に体を向ける。
だが、才人はそれに答えず、突然ふたばの目の前にで倒れこんだ。

ふたば『才人・・・くん？・・・才人くん！！』

倒れた才人に近づくふたば。

ふたば『才人くん！才人くん！！だれか・・・だれか！！』

叫びながら周りを見渡すふたば、すると校舎の影からこちらを見て
いるある人物を見かける。

その人物はふたばから見たらとても目を引く特徴のある人物だった。
緑を基調とした女子制服を来た、緑色のショートカットの髪で、瞳
は赤。そして何より目を引くのは両にある長い耳であった。その子
は、驚いた顔をしてふたば達の方を見ていた。

「????」まさか・・・タネ・・・二つ・・・当たる・・・」

何か喋っているみたいだが、この距離では聞き取れないみたいだ。

聖時「?!ふたば・・・この人は。」

ふたば「あつ、そう言えあの時こんな格好をした人に合ったんだっ
た。」

ピティ「なにこの子、コスプレ?」

聖時「あれ、この人が着ている服・・・階段の踊り場に飾っている
絵の女の子が着ている制服と 같다。」

ふたば「た・・・たしかに。」

ピティ「階段の踊り場の絵の女の子って・・・たしか昼休みの時に理
佐が言ってたあの?」

聖時「うん。」

そんな風に話していると、映像の中の女の子はふたばと視線が合う
と、そのまま走って逃げる。

そしてそのすぐ後に遠くから聖時の呼ぶ声が聞こえ、そのすぐ後に
聖時が到着した。

聖時「ピティ、映像止めて。もういいよ。」

ピティ「了解。」

ピティは目の前の映像を消した。

聖時「ふう、さて、どう思う？」

ピティ「うん、やっぱりあの緑の髪の子が一番怪しいね。」

聖時「僕もそう思う。格好ばかりじゃなく、才人が倒れた時に側に居て、しかも倒れた才人の事をほっといてそのまま逃げるようにあの場を去って行った。」

ふたば「・・・まさか、あの子が犯人？」

聖時「分からない。けど、なにか重要な手がかりを持っている事だけは確かだ。」

ピティ「そうだね。」

聖時「とにかく、接続を切って他のみんなにこの事を話しておこう。」

ピティ「了解。接続切りまゝす。」

そう言っつてピティが接続を切った。
すると周りの景色が元に戻る。

聖時「ふう、無事何とか終えたな。」

ピティ「うん。」

ふたば「うん・うん。」

ふたばが少しふらつきながら頭を押さえた。
そんなふたばを聖時は腕で支えた。

聖時「ふたば、大丈夫？」

ふたば「大丈夫、ちょっとフラフラしただけ。」

ピティ「ニューロマンシーに初めて接続された人はそうなる見たい。
しばらくしたら治るから。」

聖時「少し座って休んだ方がいいよ。」

ふたば「うん、そうする。」

そう言ってふたばは居間のソファに座り込んだ。

猛「で、どうなったんだ？」

聖時「うん、実は……」

・
・
・
・
・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

剛「・・・なるほど、才人が倒れた時、側に犯人らしき人物が居たと。」

聖時「ああ。」

聖時は全員にニューロマンサーで見た映像の内容を話した。そして今、映像で見たその犯人らしき人物の似顔絵を書いていた。

聖時「・・・よし完成だ。どうだいふたば、似てるかい？」

聖時は完成した似顔絵をふたばに見せた。

ふたば「良く書けてる。そっくりだよ。」

ピティ「ホント、そっくり。」

アルフ「へへ、どれどれ。」

そう言って周りにいたアルフ達が似顔絵を見る。

琴乃「・・・この人が才人さんが倒れた時に居た人ですか？」

明日香「なんだいこの格好・・・コスプレ？」

士郎「……本当にこんな格好した奴がいたのか？」

聖時「それは間違いないよ。」

猛「そうは言っけど……こんな格好した奴が本当に居たとは思えないんだ。」

猛が訝しげながら言う。

アキ「……………」

明日香「？アキお姉ちゃん、さっきから黙ってどうしたの？」

先ほどから黙っていたアキを不思議に思い明日香が声をかけた。

聖時「……アキもやっぱり気付いたか。」

アキ「うん。」

剛「？なんだ気付いたって？」

聖時「ふたば、アルフ、この子が着ている服に見覚えがないか？」

アルフ「え、見覚えって……そう言えばどっかで見た覚えが……」

ふたば「さっき聖時が言ってたね、この制服、階段の踊り場に飾ってある絵の女の子着ている制服と同じだって。」

アルフ「あっ、そう言えば！」

聖時「そう、でアルフ、今日の昼休みに理佐先輩から聞いた話、覚えてるか？」

アルフ「え〜と確か・・・絵の女の子が抜け出して・・・」

聖時「その前。」

アルフ「その前って・・・たしか。」

アキ「昨日あった意識不明者の側から立ち去った人物が絵の女の子と同じ服装だって。」

アルフ「あっ！」

剛「おい、それじゃあその立ち去った奴って・・・」

聖時「うん、十中八九ふたばが見たこの子の事だろう。」

ふたば「やっぱりこの子が犯人なのかな？」

聖時「それはわからない。けど重要な何かを持っていることは間違いない。まず最初はこの子身元を探ろうと思う。」

アルフ「そうだね。犯人を捕まえるにはこの子から話を聞くのが一番手っ取り早そうだからね。」

アキ「じゃあ明日の放課後からは聖遼に通っている人は学園内での聞き込みだね。」

剛「じゃあ俺たちは学園近辺での聞き込みだな。俺たちじゃあ学園内には入れないからな。」

聖時「そうだな、じゃあ剛達は学園の近辺での聞き込みを頼む。」

剛「ああ。」

聖時「じゃあみんな、明日からは頼んだよ！」

一同『ああ！「はい！」』

別荘内に童虎を覗いた全員に声がこだました。

聖時（待ってる才人、必ず犯人を捕まえてお前を助けてやるからな！）

《つづく》

おまけコーナー

ピッピティと

ユ「ユニの」

二人「おまけコーナー」

ピ「はいやって来ましたおまけコーナー。司会進行役のピティです。」

ユ「解説のユニです。」

ピ「アシスタントのビツキーです。」

ピ「さて今回はこの前応募を出した真の紋章のアイデアの発表だったんだけど・・・」

ビツ「だったんだけど？」

ピ「応募が全然こなかった・・・。」

ユ「あははは・・・。」

ビツ「ま、まあ仕方がないじゃないですか、それに一つ目の紋章のアイデアをいただいただけでも良しとしましょうよ。」

ピ「そうだね・・・あ、ちなみに残り最後の紋章はこちらであらかじめ用意した物を使います。」

ユ「発表は本編に直接だすと言う形で発表します。」

ピ「と言うことはだいぶ先になるね。」

ピッ「そうですね。」

ピ「さて、今回はいいまで。」

ピッ「あれ？もうですか？」

ユ「今回は募集の結果発表だけですからね。」

ピッ「あ、そうですね。」

ピ「そうですね、そうですね。」

ユ「それじゃあ締めといきますよ、みなさん」

三人「「「まったね」「」」

第25話 事件調査開始（後書き）

アイデア募集は締め切りましたが、感想等はいつでも受け付けています。

第26話 刹那と由香（前編）（前書き）

どうも剣 流星です。

ピ「ねえねえ作者〜」

ん？なに？

ピ「武闘鬼人さんが何か送ってきたよ？え〜となになに、「スペシヤルスパイシーパウダー」？だって」

あ〜、これは次の話で載るおまけコーナーで聖時に処理してもらいましょう。

ピ「・・・やっぱり聖時に処理させるのか・・・」

ま、聖時はこう言う事に関しての処理についてはすでにスペシヤリストだからね〜

ピ「あはは・・・」

ま、何はともあれ第26話です。今回の話はまさかのあの人が登場です。（サブタイトルでバレバレですが）ではどうぞ。

第26話 刹那と由香（前編）

第26話 刹那と由香（前編）

ここは第97管理世界によく似た世界第97 - a管理世界。その世界の日本の京都にある関西呪術協会アラルの総本山である近衛家。その屋敷内で関西呪術協会の長にして次元世界でも有名な「赤き翼ブラ」のメンバーの一人、近衛詠春このえいしゅんとその前に跪いている一人に少女、桜咲刹那おんくさきせが居た。

刹那「長、お呼びでしょうか？」

詠春「ハハハ、そんなにかしこまらないでください。」

詠春は刹那にかしこまらないように声をかけた。

刹那「は・・・はあ」

詠春「・・・さて、今日キミを読んだのは、私の古い友人の一人、ユニ君からの依頼だね。刹那君にある世界に行つてしばらくの間ある人の護衛をして欲しいんだ。」

刹那「護衛・・・ですか？しかし長、私には木乃香お嬢様の護衛が・・・」

刹那は自分の護衛対象である木乃香の事について尋ねた。自分がい

なくなれば、木乃香を守る者がいなくなる。そしてその分木乃香が危険になってしまう。

刹那としてはそれだけは譲れない事だった。

詠春「そちらの方は今の所大丈夫です。木乃香の居る麻幌良学園は比較的 안전한場所です。それに、タカミチくんにもそれとなくガードをしてもらうよう頼んであります。」

刹那「しかし……」

木乃香の今現在居る麻幌良学園が比較的 안전한こと、そしてあのタカミチ・Ｔ・高畑がガードにつく。これなら大丈夫だと思ったが、刹那は自分自身の手で木乃香を守りたかったのでなお食い下がったが、詠春はそんな刹那の言葉をさえぎって話を続けた。

詠春「刹那君、これは彼と同一年であり、彼と親しい君にしか出来ない事なんだ。」

刹那「私と親しい……？」

刹那は詠春の言葉を聞き考え込んだ。自分と親しく、同年の木乃香以外の人物……最初は思い当たらなかったが、ふとある人物の事が浮かび上がった。その人物は幼き日、自分と木乃香を結びつける事に協力してくれた人物で、自分の中では木乃香と同じくらい大切な人だった。

刹那「長！まさかその人は？！」

詠春はうなずきその名前を言った。

詠春「そう、ナギと同じく「アラル フラ赤き翼」の中心人物である、竜帝・神かみ谷聖やひじりの一人息子、神谷聖時君だよ。」

刹那「やはり……しかし、なぜ今になって護衛が必要に？」

刹那は自分の疑問を詠春にぶつけた。

詠春「それはね、今彼の周りである事件が起きているんだ。」

刹那「ある事件？」

詠春「ああ、しかもその事件はどうやら27の真の紋章絡みかも知れないと言われているんだ。」

刹那「真の紋章?!」

刹那はその言葉を聞き驚く。刹那自身も真の紋章がどういう物なのかはある程度知っていた。持主に強大な力を与える代わりに、その代償なのかその身に不運が良く起きる。

刹那はかつて真の紋章を宿していた聖時の父・聖や、聖時の母・千草の事を思い出した。

二人とも真の紋章を宿してからは、他人から見ればとても幸せな人生だったとはとても言えない生い立ちをしていた。

詠春「キミも知ってる通り、聖時君はあの聖と千尋さんの子供です。真の紋章を受け継ぐ素質は十分にあります。このまま何もしないでいると最悪、彼が真の紋章の器にされてしまう可能性があります。」

刹那はそれを聞き顔を青くした。もし真の紋章が聖時に宿ったら、

聖時の両親のような不幸に見舞われ、最悪死んでしまつかもしれないと思った。

刹那「ならば聖時さんをその場から遠ざければすむ話なので？」

刹那は聖時を事件が起きている場所から遠く離れた場所に事件が起きるまでに避難してもらった方が確実なのだと思います。それを口にした。

詠春「私も最初はそう思ったさ、けどユニ君が言うには最近の聖時君は魔法の存在に薄々感づいてきていてね。今彼に下手な事をしたら、魔法の存在が彼にばれるかもしれないんだ。」

刹那「……………」

詠春「聖時君には千尋さんの遺言で、うちの木乃香と同じく魔法の存在を知らせる事なく、普通の人としての人生をまっとうしてほしいと言う事だからね。」

刹那「そこで私が護衛に回り、聖時さんが真の紋章や魔法の事柄に近寄らないようにするのですね。」

詠春「ああ、本来なら彼の側にいる護衛役の子がすればいいんだけど、その子は事件の調査を手伝う事になったから、聖時君の護衛にまで手が回らなそうなんだ。」

刹那「そうですね……………わかりました。護衛の任、承ります。」

詠春「うん、任せたよ。君にはこの後、来迎寺財閥の所有する次元航行艦で第97管理世界に行ってもらおう事になるよ。」

刹那「はい。」

詠春「そこでキミには聖時君と同じ学校に行ってもらうことになる。期間は一応約1年間になる。その頃には事件も沈静化して思うから、それまでの間の護衛をよろしく頼むよ。」

刹那「ハッ！」

刹那はこれから護衛する聖時の事を思った。

彼が一番辛く、悲しいときに側にいてあげることすら出来なかった事を思い出し、今度こそ彼の力になってあげようと思った。

*

ここは聖時の別荘の調合室。

そこで聖時は自分が使っている刀型のデバイスを土郎と一緒に改造していた。

聖時「あとは、童虎先生からもらった先生の血を刀身にすり込んで・・・これでよし。あとは精霊を召還して、デバイスに憑依させれば、エレメンタルデバイスの完成だ。」

聖時は弄っていたデバイスから手を離し、側で手伝っていた土郎に言った。

土郎「ああ。しかし、よくこんな資料があつたな。」

土郎は側にあるノートに手を伸ばしそれを開いた。そのノートの表紙にはエレメンタルデバイス作成方法と書いてあった。

このノートは、エレメンタルデバイスの唯一の製作者であるあの魔界の名工ロンベルクの一弟子であるノヴァの技巧を聖時の父、聖が書き写したものである。

聖時「このノートに書いてあつたけど、父さんはこのデバイスで、エレメンタルデバイスを作るつもりだったみたいなんだ。」

土郎「へ〜。」

聖時「僕も最初と父さんの部屋に隠してあつたこれを見て、自分で完成させたいと思っていたんだけど、僕一人だけじゃ完成させられなかったよ。ありがとう土郎。」

聖時は土郎に礼を言った。

「 士郎「いいって、それにオレも機械いじりが出来て楽しかったから。」

「 そう言っつて謙遜する士郎。」

「 聖時「これでエレメンタルデバイスが完成したら戦力としては申し分ない。」

「 士郎「今追っている犯人はどれくらい強いのか見当もつかないからな。戦力を整えるのに越した事はないからな。」

「 聖時「ああ。それじゃあ早速精霊の召還をしようか。」

「 士郎「ああ。」

「 そう言っつて聖時と士郎は中庭に移動した。」

「
聖時達が犯人探しを始めてから数日後の別荘の中庭。そこで聖時はノートを見ながら精霊召還の魔方陣を地面に書いていた。」

聖時「これでよしと。あとはデバイスを魔方阵の中心に置いて・・・」

そついいながら聖時はいつも使っている刀型のデバイスを鞘から抜いて魔方阵の中心につきたてた。

聖時「よし、後は召還の呪文を唱えるだけだ。」

そつ言つて聖時は魔方阵の外に出る。

士郎「準備は終わったのか？」

聖時「ああ。」

そつ言つて聖時は魔方阵に手をかざし、魔力を解放しながら呪文を唱え始めた。

聖時『来たれ！虚無と現の狭間に住みし者よ！万物に宿りし共存を謳いし者よ！心の海より生まれし純粹なる正しき物よ！わが呼びかけに答え、わが前に現れ出でよ！汝、陽炎の精霊ジャノクよ！！』

魔方阵から強烈な光が発し始める。

やがて光は辺りを包みこみ、眩しさで聖時は目をつぶった。

やがて光がおさまり、聖時はおそろおそろ目を開け魔方阵を見た。魔方阵の中心、突き立てたデバイスの上に光の玉のような物が浮かんでいた。

その光の玉はぶかぶかと浮いていたが、やがてデバイスに吸い込まれるようにして消えた。

士郎「・・・成功したのか？」

聖時「ああ、デバイスに精霊を宿らせるのには成功した。あとは、精霊に僕自身が認めてもらうだけだ。士郎、神官役頼んだよ。」

士郎「ああ。」

そう言つて士郎は突き立てたデバイスの側に立ち、聖時はデバイスと士郎の前にひざまずいた。

士郎「じゃあ行くぞ。」

士郎が一旦間を置いた後、思い口調で喋りだした。

士郎「神谷聖時、汝に問う。デバイス光牙こうがと生死を共にする事に異論無きか？」

聖時「ありません」

士郎「重ねて問う。汝、天地精霊に誓いて、精霊の契約者としての務めを果たす事に異論無きか？」

聖時「ありません」

士郎「では、光牙こうがに宿りし陽炎の精霊ジャノクに祈願を」

聖時「うつろいゆらめきし陽炎の精霊ジャノクよ、願わくばこの私とともに至高の道を歩まれん事を」

聖時はそう言つた後、目を瞑り黙祷する。

すると魔方陣の中心に刺さっているデバイス・光牙こうがが光を放ち聖時

の呼びかけに答えた。

士郎「やったぞ聖時！精霊との契約に成功したな！」

聖時「ああ、これで光牙を使ってバリアジャケットを着る事が出来るようになった。これなら犯人がどれ程の力を持っていてもそこそこ戦えるはずだよ。」

士郎「そうだな。お、そろそろ別荘（こゝ）に入って丸一日がたつな、じゃあそろそろ帰るか。」

聖時「そうか、じゃあまた明日。」

士郎「ああ、また明日。」

そう言いながら士郎は玄関にある魔方陣に向かって行った。

聖時「さて、僕も休むとするか。……明日こそ犯人の手がかりをつかめつといいな……」

朝、なのは達との合流する場所。そこにふたばと理佐とピティ三人を連れて聖時は歩いていった。

聖時はふたばと理佐二人と並んで歩く。

聖時はたわいない話を二人としながら歩いていると、歩いていく方向から声がかげられた。

なのは「あ、聖時君、ふたばちゃん、理佐さん、おはよう。」

聖時「おはようございます。」

ふたば「おはようございますなのはさん。」

理佐「おっはよ〜」

挨拶してきたなのはに挨拶をしながら合流する聖時達。

聖時「アルフにフェイトさん達もおはようございます。」

フェイト「おはよう聖時。」

アルフ「オースッ。」

はやて「おはようさん。」

アリサ「おはよう。」

すずか「おはよう、聖時くん。」

聖時「いや、今日もいい天気ですね。」

聖時は雲ひとつない青空を見て言う。

伊達「遠い地平線が消えて、深々（ふかぶか）とした夜の間に心を休める時、はるか雲海の上を音もなく流れゆく気流……」

聖時「……いきなり現れて、ワケのわからない事を言いながら夜にするな！今は朝だ！」

聖時はバラをくわえて突然現れた伊達にツッコム。

伊達「ジェットストリ……ム……」

聖時「朝っぱらから夜間飛行するな！そんなに飛びたいなら飛んでろ！」

ドカッ！

伊達「オールヴォワ……ル……！！」（吹っ飛ぶ伊達）

キラ〜ン!

聖時「まったく、お天道様に逆らう変態は星にでもなってる。」

吹っ飛んだ伊達を見ながら言う聖時。

なのは「……………伊達君……………ずいぶん飛んだね。」

はやて「こら〜成層圏かなあ?」

理佐「い〜や、これは対流圏まで飛んだんじゃない?」

なのは達が飛んで行った伊達を眺めながらつぶやく。

ふたば「ねえ……………あれ、ほつといていいの?」

伊達を指さしながら言うふたば。と言うかすでにアレ扱い……………

聖時「いいのほつといても。あのバカは殺したって死なないから。」

伊達「その通〜〜〜り!」

聖時「うああ?!」

伊達「日々研鑽し、いついかなる時も聖時くんを受け入れる準備をしている僕が、聖時くんを受け入れずに死ぬわけないじゃないか〜」

「

聖時「いつ戻ってきた!そんな気味悪い準備せんでいい!」

「

ピティ（ゴキブリ並みの生命力だね・・・）

はやて「・・・・・・・・よく無事やったな・・・・・・・・。」

伊達「いやあ、本当にジェット気流に乗って太平洋を渡ってしまったてねえ。さすがの僕もどうしようかと思ったよ、あぁっはっはっはっ。」

アリサ「いや・・・というか、それでどうやって戻ってきてんのよあんだ・・・。」

伊達「サンフランシスコから泳いで帰ってくるのにいささか手間を要したよ。まあ、僕にとってはたやすいことだよ。」

聖時「・・・いい、語らんでいいから。」

アルフ「と言うか・・・突っ込みどころ多すぎ。」

伊達「まっ、それはさておき、聖時くん！さあ恋人である僕と熱い朝の挨拶のキスを~~~~~。」

聖時「だれが恋人だ！ツて言うかするか~~~~~！！！」

ドカッ！

伊達「アイキャンフラ~~~~~イ！！」（また吹っ飛ぶ伊達）

キラーン！

聖時「ハア、ハア、ハア、まったく朝っぱらから疲れる……」

フエイト「あはははは……お疲れ。」

聖時「まったく、さあ行きましょう。」

そう言うてなのは達をうながし、自分も歩き出す聖時。

ふたば「あ、そうだ聖時。」

聖時「うん？なに？」

ふたば「今日、うちのクラスに転校生が来るって知ってる？」

聖時「へ？転校生？この前アルフが入ってきたばかりなのに、また転校生？」

ふたば「うん、昨日の帰りぎわに鈴木君がその事で騒いでたよ。」

アルフ「またあいつはくだらない事で騒いで。」

聖時「しかし、どんな子が来るんだろうね。」

ふたば「ちょっと楽しみだね。」

聖時「ああ。」

そんな風に会話しながら聖時はふたば達と歩いて行った。

*

聖遼学園前の道、そこで彼、河瀬裕也は考え事をしながら歩いていった。

考えている内容は最近自分の周りで起きている変な事である。猫の幻を見たり、友人の修一が自分の知らない自分の記憶をもっていたり、さらにその修一が翌日、「そんな事言っただけ？身に覚えがない。」と言う。ウソはついていない事は能力でわかる。ではなぜそうなったのか、そもそも修一が言っていたコウノとは何者なのか？悩みは尽きず、裕也はだんだんと不安が増していた。

裕也「はあ〜一体何がどうなっているんだ？」

裕也はボソツと言いながら通学路を登校している生徒を見た。すると、ふとある二人組みの女子生徒の片方に目が行った。まるで勝手に目の焦点が、その女子生徒に引き付けられたようだった。

その女子生徒は長い黒髪を髪留めで後ろにまとめてショートカット風にしていて、かわいらしい感じの子だった。

だが裕也はその女子生徒をまるで前から知っている感じにとらわれた。

裕也「！（・・・見た事ないはずなのに前から知っている感じ・・・既視感^{デジャヴ}？・・・いや、もっと強い、何かがあったはずだ。」

そんな事を思いながら裕也は女子生徒を見続けた。女子生徒は連れの子と話しながら裕也の側を歩いて行く。

女子生徒「・・・よね。でもあのレポート、いつもヘンな問題で、面白いから結構好き。」

連れの女子生徒「え〜、参考書に載っていない解答を求めるのは、横暴だわ。」

二人は何気ない、当たり前前の会話を話しながら裕也の側を通り過ぎようとしていた。

裕也は心臓が高鳴るほどの、強烈な既視感^{デジャヴ}を感じていた。すると女子生徒はすれ違う瞬間、首を傾げて、裕也の方を見た。

・・・かと思ったら、彼女はスカートのポケットから時計を取り出して、時間を確認しただけだった。しかし、この時計を確認する仕事草すら、記憶にあるような気がした。

裕也は女子生徒が自分の前を通り過ぎた後も、彼女を目で追っ

た。

記憶にないのに知っている感覚。

裕也（どうしちまったんだ、オレの頭は？）

裕也は無意識に自分の手を握り締めていた。

静かに開いてい見ると、汗ばんでいた。

裕也（大丈夫、頭は冷静だ。最近ポンコツ気味だが落ち着いている。）

そう自分に言い聞かせていた裕也だったが、体はかすかに震えていた。

*

ここは中等部の聖時の教室。登校した聖時が自分の席に座ろうとして時、クラスメイトの眼鏡をかけた男子の一人が声をかけてきた。

男子生徒「なあ、神谷聞いたか？今日転入生が来るって事。」

聖時「……………?」

男子生徒「……………何だよ。反応薄いな？」

聖時「……………ごめん。キミ誰だっけ？」

男子生徒「……………鈴木だ。」

聖時「あ、そうそう。鈴木だ。」

鈴木「あのな〜。同じクラスになってもう2ヶ月以上経ったんだぞ。いい加減クラスメイトの顔と名前を覚えろよ。」

聖時「ごめんごめん。あんまりにも影が薄いから……………」

鈴木「悪かったな〜！どうせ影薄いよ。」

そんな風に話していると、教室に担任の教師が入ってきた。

担任教師「みんな席に着け。」

担任教師の声で教室にいる生徒たちが席に着く。

担任教師「はい、では朝のHRを始める前に転入生を紹介する。」

担任の言葉に反応して教室内が騒がしくなる。

担任教師「はい、静かに。ではこれからその転入生を紹介する。入ってきて。」

担任教師の合図で教室の戸が開き、一人の女子生徒が入ってくる。

黒くて長い髪を左サイドで束ねた髪型で、目はやや鋭い感じの子だった。

担任の教師が黒板に彼女の名前を書く。

担任教師「彼女の名前は桜咲刹那さくらさきせつなくんだ。みんな、仲良くしてやってくれ。では、桜咲くん、なにか一言を」

刹那「桜咲です。どうぞよろしく。」

彼女の挨拶で教室内の生徒たちがまた騒ぎ出したが、聖時はそな中で彼女を見て首を傾げていた。

聖時（あれ？あの人……もしかして……）

ピティ（どうしたの聖時？）

首をかしげている聖時を見てピティが念話で話しかけてきた。

聖時（いや、彼女……どっかで見たような感じがするんだ……
それに……あの名前……どこかで……）

ピティ（どこかで見たって……会った事あるの？）

聖時（うーん）

クラスメイトの質門を受けている刹那を見ながら、そんな風に念話で話しているとふたばが念話で聖時たちに話しかけてくる。

ふたば（どうしたの？さっきから？）

聖時（いや、彼女……どっかで見たような感じがしてさぁ……）

ふたば（？会った事あるの？）

聖時（そこが思い出せないんだ……それにあの名前にも聞き覚えがあるんだ……）

ふたば（そうなんだ……あ、そうだ。ねえこの前使ったニユーロマンシーで思い出す事出来ないの？）

聖時（あ、そうだ。その手があった。ピティ、僕の記憶の検索、検索内容は桜咲刹那で、ただし今日の分は入れずに）

ピティ（了解。検索中……ヒットしたよ。数は1287件）

聖時（1287件?!そんなに?!）

ふたば（どうなったの?）

ふたばが検索の内容の結果を聞いてくる。

聖時（……どうやら僕と彼女は知り合いらしい。）

ふたば（え?! そうなの?!）

聖時（うん、ピティ、ヒットした検索内容で最新の物はいつ?）

ピティ（今年の5月のゴールデンウィークの初日頃、入録者は聖時本人。場所は聖時の部屋だよ。）

聖時（僕の部屋?）

ピティ（うん）

聖時（それじゃあ、それを再生してみて。）

ピティ（了解）

ピティがそう言ったと同時に聖時の脳裏にある映像が流れる。

その映像は聖時が部屋で木乃香からの手紙を開けて読んでいる姿だった。

聖時『刹那とは……相変わらずか……』

映像の自分の声を聞き、聖時は思い出した。そしてその勢いで席から立ち上がり、彼女を指で指しながら思わず叫んでしまっていた。

聖時「あゝゝゝ！そうだ木乃香と一緒にいた刹那だ！！」

*

アルフ「あっははははっ、それでつい叫んでしまったんだ。」

聖時「・・・うん。」

今は昼休み。聖時達はいつもの様には屋上でお昼を食べながら、聖時は朝のHRで思わずさげんでしまった事に付いての経緯を話していた。

アキ「それにしても転入生の桜咲さんがまさか聖時が前に言っていたあの“せつちゃん”だったなんてね。」

ふたば・アルフ・理佐「「せつちゃん!?!」」

聖時「やめてよアキ!小さい頃の呼び方を言うのは!」

理佐「へへ、小さい頃はそういう風に呼び合う間柄だったんだ。ならお昼、誘えばよかつたんじゃないの?」

聖時「ええ、誘ったんですけど・・・断られて。」

理佐「えっ?!断られたの?」

聖時「はい、・・・なんだか僕、刹那にさけられてるみたいで・・・僕、なにか刹那に嫌われる事したのかな・・・」

聖時は刹那に対し休み時間のたびに声をかけたが、「用事があるから」と避けられるように逃げられてしまって、少し落ち込んでいた。聖時にしてみれば、才人が意識不明になったため気持ちが悪くなっていた。が、昔、桃華とうかと一緒に遊んだ楽しい頃の記憶の中の一人である人物、刹那に再会した。この事は聖時にとってとても嬉しかったのである。

しかし、いざその刹那に話そうとしても、当の本人は逃げるように

聖時を避けたので、すこし落ち込んでいると言つ訳である。

ふたば「聖時……。」

聖時「はあ。」

ふたば（……よし！）

ふたばは落ち込んでいる聖時を見て、なんとか励まそうとして声をかけた。

ふたば「ほら聖時！ため息なんてつかないの！」

聖時「ふ……ふたば？」

ふたば「たかが1度や2度避けれたからってそれでへこまないの。桜咲さん、本当に用事があったかもしれないでしょ？それに、もし意識的に避けられたんだつたらその理由を聞いてみればいいじゃない。」

聖時「けど……。」

ふたば「大丈夫、私も協力するから。」

聖時「ふたば。」

ふたば「大丈夫だよ。友達だったんでしょ？なら、また昔みたいになれるよ、ね。」

聖時「……そうだね、もう一度話しかけてみるよ。それでもし、

避けられるんだったらその理由を聞いてみる。そして問題があったならそれを解決するよ。そしてまた、桃華が生きてた頃みたいに一緒に居られるようにしてみるよ。」

アキ「そう、なら私も協力するよ。」

聖時「え、けど・・・」

アキ「大丈夫、（それに最近聖時は、調査の事で少しコンを詰めすぎよ。ここいらで少し息抜きしないと体が持たないわよ?）」

聖時（うっ!）

聖時は念話で指摘して来たアキに反論できなかった。たしかにこの所、意識不明事件の犯人探しの調査で少し根を詰め込みすぎていた。聖時は一刻も早く犯人を捕まえようと躍起になっていたが、手がかりの一つである星原百合はこの事に関わるなと言っただけで何も話してくれず、似顔絵を使っただけの聞き込みも進展がなかったため、聖時は焦ってしまった。それで根を詰めてしまい今に至った。

アキ（とにかく、そんな調子じゃ調査に身が入らないでしょ?今日の調査については私たちに任せて、聖時は放課後、桜咲さんにもう一度声をかけてきなさいよ）

聖時（・・・ごめん。ありがとう。）

アキ「さあ、お昼を早く食べてしましましょう。」

聖時「そうだな。」

そう言って聖時達は昼食を再開した。

《うづく》

第26話 刹那と由香（前編）（後書き）

感想等お待ちしております。

第27話 刹那と由香（後編）（前書き）

どうも剣 流星です

私生活が超忙しい上にこの暑さで夏バテ気味です。

皆さん体調管理には十分注意してください。

では第27話どうぞ。

第27話 刹那と由香（後編）

第27話 刹那と由香（後編）

放課後の中等部の聖時の教室。

そこで聖時は帰り支度をしている刹那に声をかけた。

聖時「なあ、刹那、一緒に帰らないか？ほら、この数年間の事を色々聞きたいし……」

聖時は刹那と一緒に帰らないかと言った。刹那とまた以前のように笑い合えるような関係に戻りたいと思い、そのきっかけになるかと思いをかけたのである。

刹那「……すみません。これから用事があるので。」

そう言っつて刹那は教室を出て行ってしまった。

聖時「……」

ふたば「だ……だいじょうぶだよ。また明日誘えば良いじゃない。」

聖時「そうだな。じゃあ今日はこのまま星原先輩の所に行って話を聞いてこよう。」

ふたば「そうだね、他のみんなは似顔絵の女の子の搜索と聞き込みに行っちゃったしね。」

ピティ「でもさ、百合がこっちの話を聞いてくれるかな？また前みたいに関わるな」
「うつつえ言われるだけじゃないの？」

ピティが以前、星原百合に話を聞きに行ったときの事を言った。

聖時「話してくれないのなら、話してくれるまで何度でも聞きに行くまでだ。」

聖時はそう言ってふたばとピティ二人と一緒に教室を出た。」

一方、その頃の河瀬裕也も星原百合を探して図書室に来ていた。裕也はコウノのことはひとまず置いて、先に何とかかなりそうな星原百合に会って話を聞こうと思いい図書館に来た。

裕也（星原さん、図書室こくしょにいるかな？）

そう思いながら書架を歩き回った。

聖時「あれ、河瀬先輩？」

裕也「ん、ああ、確かアキのクラスメイトの……」

聖時「聖時です。」

ふたば「ふたばです。」

裕也は書架を同じように歩き回っている聖時とふたばの二人に話しかけられた。

裕也「二人とも何か本を探してるのか？」

裕也は二人が歩き回っている事から本を探しているのかと思いきう言った。

聖時「いいえ、実はある人を探してるんです。」

裕也「人？」

聖時「はい、高等部の女子の先輩で黒くて長い髪の人で、星原百合って言う人なんです。」

裕也「へ？なんだお前らもさがしてるのか。」

ふたば「探しているって……先輩もですか？」

裕也「ああ、けどどうやらここには居なさそうだな。」

聖時「ですね。……しかたない、ふたば、他を探そう。」

ふたば「そうだね。それじゃあ先輩また。」

聖時「失礼します。」

裕也「ああ。」

二人は裕也に挨拶して図書室を出て行った。

裕也も星原がここにいないので用がないと思い、図書室を出て行くとして時、書架の間に今朝強い既視感を覚えた女子生徒を見つけた。彼女は一心不乱に本を読んでいた。

裕也はその姿を見つけると同時に心臓が高鳴った。

頭の中身が急速に拡散していくと同時に、ぎゅっと締め付けられるような、頭が爆発しそうな奇妙な感覚がし、それを抑えようとして奥歯をかみ締めた。

裕也（この感覚は・・・これはもう、既視感とかじゃない。確かに俺は、過去にこの子と会っている。）

何の根拠も無いが、裕也は強い信念みたいな直感がそれを言っている。

一方、目の前の女子生徒は、立ち尽くす裕也には目もくれず、持っている本を小声で音読していた。

女子生徒「・・・・・・・・から飛び降りた。それが彼等の流儀だ。バス停に傘を立てかけ、紫陽花の茂る階段を一目散に駆け上がって行く。この街で一番見晴らしの良い場所に、魔法使いが・・・・・・・・」

本を読み上げる女子生徒の声には何の表情も、何の昂揚も無かった。

入力された文字を、そのまま音声として出力しているだけといったように、ただブツブツと音読している。本人には内容すら理解せずに、機械的な作業として音読しているだけの印象だった。

裕也は彼女に一步近づいた。すると彼女はスカートのポケットから時計を取り出してそれを見たあと、裕也の方を見た。

女子生徒「え」と・・・・・・・・」

裕也「2 - Aの河瀬」

女生徒「あ、え〜と、よろしく願います……」

裕也「え、なにを？」

ユカ「え、だって、ユカに用事があったんじゃないの？」

裕也「あ、いや、別に……」

ユカ「え〜！じゃあ何をよろしくなの？」

裕也「自分で言っというて……」

ユカ「あ、そうだった、そうだった。用事じゃないとしたら……じゃあ何だろう〜。だいたいのは用事に含まれるからな〜。」

裕也「そんなんじゃない、ただ、ちょっと気になってさ……」

ユカ「もしかして、聞こえてた？」

裕也「ああ……バツチリ」

裕也がそう言うと、ユカは顔を赤くして言う。

ユカ「うわあ、見られちゃったか〜。やばいなこれは、恥ずかしいな／＼／＼。」

裕也「大丈夫、誰にも言わないから。」

ユカ「あなたには黙秘権があり、自分に不利と思える供述について

は黙っていてもいいんだよ！」

裕也「いやいや、偉そうにお願いすんなよ。」

ユカ「あはは、アメリカ映画でよく聞くよね、これ。」

さっき音読していた時とは違って、ユカはころころと楽しそうだった。

裕也「で、えっと、名前なんだっけ？」

ユカ「人に名前を尋ねるときはねー」

裕也「2-Aの河瀬。さっき言っただろ？河瀬裕也。」

由香「あはは、ごめんごめん河瀬くん、どうも香野由香（しゅうのか）です。」

裕也「え……？」

由香「え？」

裕也（香野？……コウノ……？修一が言っていた、俺が気に入っていた女子生徒のコウノ……強い既視感……）

裕也「君が……香野さん……？」

由香「なに、神妙な顔して……？」

裕也「やっぱり君は、俺と過去にどこかであった事あるよね？」

由香「うーん、無いけどなあ」

裕也は能力で《嘘》じゃないと判別する。

裕也「でも俺、君にすごい既視感があるんだよ。」

由香「うーん、そう言われてもなあ……」

裕也「君は俺を覚えてない？」

由香「そう言えば……」

裕也「そういえば？」

由香「ごめん、由香の記憶には全然ないかも」

裕也は件の香野に会えば今までの強い既視感の謎が解けると思っていたので、さっきの言葉で少しへこんだ。

裕也「……」

由香「あ、そんなに落ち込むとは思わなかったよ、ごめんごめん。でもなんで……由香の事を知っているんだろうね？」

裕也「俺が聞きたいよ……」

由香「そんなに強い既視感なの？」

裕也「ああ……幼馴染だった、っていわれても信じられるくらい強い既視感だよ。」

由香「おかしいねえ、そんなに強い既視感なんて。普通はそんなに強い既視感はないもんね」

裕也「うん」

裕也は首を傾げて考えた。彼女が件の香野だとそう思った。が香野は裕也の事は知らない。

由香の屈託の無い笑顔や、話を聞いていると彼女が裕也を担いでいるようには見えない。何より裕也のウソを見破る能力は、彼女がウソを言っていないと言ってる。

裕也は暫く考え込んだ。

裕也「・・・悪いな、邪魔して。それでは読書の続きを楽しんでくれ。」

由香「あ、うん、じゃあね川瀬くん」

裕也はこれ以上話をして、何も得られない予感がしたので引き下がった。

裕也（ここはもう一度修一から話を聞いた方がいい。）

そう思い裕也は修一を探すために、早足で図書室を出た。

*

放課後のグラウンド。そこに彼女、桜咲刹那が居た。

今まで、聖時達を影からこっそりとも見守っていたが、聖時たちが帰路に付いたので彼女も護衛を切り上げたのである。彼女の護衛は事件が起きている学園内に限られているので、聖時たちが帰った後はその対象外なのである。

刹那は今日の放課後、聖時を影で見守りながらその行動を見て、それについての事を考えていた。

753

刹那（しかし、今日の聖時さん……誰かを探しているような感じでしたけど……一体誰を探して……結局は見つかりませんでした。）

刹那はそんな事を思いながらグラウンドの方を見た。

刹那「うん？あれは……」

*

裕也は修一を探すべく校内を回った。修一は放課後、訳もなく構内

を歩いて回る事が多かったのを校内を回る事にしたのである。

裕也「まずはグラウンドから探すか。」

そう言つてグラウンドから探しているとふと、中庭の方に光る物が落ちていたのを見つけた。

裕也「何だろう?」

裕也は落ちていたそれに近づいた。

裕也「これは・・・七角ペンダント?」

裕也のポケットにいつの間にか入っていた物で、この前星原百合に渡したものだつた。

裕也「なんでここに・・・」

そう言いながら七角ペンダントを拾いながら周りを見た。
落とし主である星原百合が居るかもと思つたのであるが、回りに星原百合は居なかつたが校舎裏には・・・修一と女子生徒が何か話してるようだった。

裕也「あの女子生徒は・・・香野さんか?」

そこには髪を下ろした香野由香がいた。髪型が違つたので裕也は最初誰だかわからないでいた。

裕也「二人してなにやってるんだ?」

ここからの距離では二人が何を話しているのかが分らない。
ただ、どうやら二人は手を繋いでいた。

裕也「修一のやつ、俺にコウノさんがどうのこうの言ってたくせに、
実は自分が狙ってたって落ちか？」

裕也はそう言いながら二人を見たが、見るとどうやら二人は手を繋
いでいるが、どうもそう言う感じには見えなかった。

裕也（一体なんだ？）

そう思いながらしばらく二人を見てみると、急に修一がドサリと倒
れた。

裕也「な・・・なんだ？どうしたんだ？」

裕也は十数メートル先で起きている事を見て体が硬直していた。

修一は、倒れたままピクリとも動かない。

香野の方も、修一の方を見下ろしたまま動かなかった。

裕也は二人の所に駆けつけようとした時、由香が一直線に裕也を見
ていた・・・無表情な顔で。

そして由香は修一から手を離すと真っ直ぐに裕也の元み歩いてきた。
何事もなかったかのように、冷たく、無表情な顔で。

裕也は目の前の出来事に、頭と体がついていけず、硬直した。

裕也（何故だ？何故香野さんは倒れている修一を無視して歩くんだ
？）

裕也はそんな事を思いながら由香を見る。

由香はそんな裕也をまるで無視するかのようにつき、そのまま側を通り過ぎようとした。

その時、彼女はポケットから時計を取り出し見る。そしてすれ違いざまに……

由香「ローレンツ因子ね」

と、裕也に言っただけ立ち去った。

裕也「なっ……なんだっただ……」

そんな事を口にしたとき、裕也の視界の端でのそりと動く物があった。

先ほどまで倒れていた修一である。

修一はゆっくりと立ち上がって、周囲を見回した後、裕也の姿を確認して、何事もなかったかのような笑顔で片手を上げた。

修一「よお」

裕也「おい、大丈夫か!？」

修一「ん、何がだ？」

裕也「何がだじゃねーよ!どうしたんだ!？」

修一「どうしたって、喉が渴いたからよ、コーヒーでも買おうと思っただけ。」

裕也「何暢気な事言ってるんだよ!」

修一「お前こそ、なに興奮してんだよ。何かあったか？」

裕也「何って、お前が倒れてたから……」

修一「おお、持つべき物は友達だな！でも心配しすぎだぞ、ちょっと座ってただけだろうがよ」

裕也「いやおまえ……じゃあ香野さんは？」

修一「香野？なんだ紹介して欲しいのか？べつに良いが、紹介料としてコーヒー三杯だぜ？」

裕也「そうじゃなくて、いま香野さんが居ただろう！？」

修一「え、どこどこ？っていつかお前、興奮しすぎだろ。そんなじゃ紹介もできないぞ」

裕也（埒があかないな……）

裕也は修一と会話がかみ合わない事にいらだった。

裕也（仕方がない、最初から質問していくしかないようだな……）

裕也「いま香野さんが居ただろう？」

修一「俺は見ていないけどな。あれか、恋は幻って奴か？」

裕也「それを言うなら盲目だ」

能力のウソセンサーで修一がウソを言っていない事がわかった。

裕也「じゃあお前が倒れてたのも、俺の幻覚か？」

修一「倒れてねーよ。」

能力ではウソじゃないことになっているが、それは嘘だった。

修一が倒れていた事は紛れもない事実だ。

裕也（くそ！俺のセンサーがぶっ壊れでもしたか？）

裕也「香野さんを紹介してくれるってマジか？」

修一「ああ、いいぜ！そうか、マジだったのか、茶化してスマンかったな……。」

裕也「そうか……修一は、今まで100人の男女を結びつけた経歴があるもんな？」

修一「ああ、《二つ名は聖遼学園のキューピット》だぜ！」

裕也（《嘘》を見抜く力は正常だ。じゃあなんだ？修一が言うとお
り香野さんや倒れていた修一は、俺の幻覚だったとでもいうのか！
？）

裕也はますます訳がわからなくなった。

修一「へえ、裕也がねえ……それじゃあさ、これからゲー
センにでも行くか？歩きながらゆっくり話そうぜ？」

事態をわかっていない修一は暢気に裕也をゲーセンに誘ってきた。裕也はさっきまで倒れていた修一を気遣い、その後を見守る為に誘いを受けた。

裕也「……OK。じゃあカバン取りに行くか」

修一「さすが裕也。んじゃ行こうぜ」

そう言っつて二人はその場を後にした。

そしてその二人を物陰で見っていたものが居た。

刹那「……さっきのアレはいつたい……」

刹那はさっきまでの一部始終を見て、先ほどまで起きたことに疑問を持ちながら二人の背中が視界から消えていくのを見つめていた。

《つづく》

おまけコーナー

ピ「ピティと」

ユニ「ユニの」

二人「「おまけコーナー」」

ピ「はい、やってきましたおまけコーナー。司会進行役のピティです。」

ユ「解説のユニです。」

ピ「アシスタントのビッキーです。」

ピ「さて、ひさびさのまともなおまけコーナー。さて今回のゲストはこの方だ！コショウパツ、パツと。」

ピ「ハ・・・ハ・・・ッシユン！」

パツ！

ピ「召還成功！さて今回はヴァンパイア十字界からで、スポーツは無論、武道も極め教養と知識の深さはバベルの図書館を頭におさめているかのような人物、この男には出来ない事など無いと言われた人、ローズレッド・ストラウスさんです。」

ス「いや、どうもお招きに預かり光栄だよ。」

ユ「こちらこそ、かの有名赤バラの王に会えて光栄です。」

ス「なに、それ程でもないよ。……所詮国を滅ぼした国王だからね……」

ビツ「あ、あははは……」

ピ「ちょっと暗くなったね……まあ気を取り直して今回の解説をしましょう。」

ユ「今回の解説は、使用原作の一つ、「ヴァンパイア十字界」についてです。」

ス「その説明については私がやらせてもらうよ。一応この作品の主人公だからね。」

ユ「それではよろしくお願いします。」

ス「ああ、それでは作品の解説をさせてもらうよ。ヴァンパイア十字界とは「月刊少年ガンガン」（スクウェア・エニックス）で連載されていた漫画作品。作：城平京、画：木村有里。英語による副題は”THE RECORD OF FALLEN VAMPIRE”（堕ちた吸血鬼の記録）。2007年2月10日発売の「少年ガンガン3月号」にて最終話を迎え、全9巻が発刊された。ミステリー作家の城平らしく、二転三転する展開が特徴的。また、同作家の微妙にズレたギャグセンスが最も反映された作品である。

タイトルの「十字界」は、アーデルハイトがセイバーハーゲンによって十字碑に封印されていたのと同様、私、ストラウスが常に「世界」そのものに封じられていた。つまり世界そのものが私にとつての十字碑であり、「十字界」である、という意味を持っていると

言われている。」

ユ「でわ、次は私が話のあらすじを。話のあらすじは次の通りです。遠い昔、夜の国の至高のヴァンパイア王は、余りの強さから人間だけでなく同族からも恐れられた。そしてついには愛する女王を人質にとられ、王は処刑されることとなる。しかし、それに狂乱した女王は自分でも知りえなかった秘めた魔力を暴走させ世界を崩壊の危機へと追い込んでしまう。人々はかろうじて女王を世界のどこかに封印するが、王はそれに怒り、自ら夜の国を滅ぼしてしまう。

女王を助け出すために、王は封印をめぐって同族や人間たちと果てのない戦いを続けていく。最後のヴァンパイア王「ローズレッド・ストラウス」は、守るべき国も民も捨てて封印を探す放浪を、千年以上も続けている…。ただ、愛する女王「アーデルハイト」を取り戻すために。」

ビツ「うわゝまさに愛のためって言えるお話だねゝ」

ピ「けどこのお話の本編は、このあらすじを大きく覆させるような展開が繰り広げられるんだよねゝ。」

ユ「まっそれはここでは語りません。興味を持たた方は古本屋に行ってみて読んでください。」

ス「何気ない作品の宣伝ありがとうございます。」

ユ「いえいえ。」

ピ「しかし。作者はよくこんなマイナーな作品を使おうと思ったの
かねゝ」

ユ「こら！失礼ですよ！」

ス「かまいませんよ。」

ピ「作者さんは、この作品でのストラウスさんの生き方に感動して、ぜひこれを入れてみたいと思ったみたいです。」

ピ「まあ、たしかにストラウスの生き様は悲惨なものだったけど、その生き方の根底に流れてる心の強さは、作者も聖時に受け継がせたいって言ってるしね。」

ユ「その点に関しては本当に尊敬します。」

ス「ハハ、尊敬されるような事でもないですよ。」

ピ「さて今回はここまでにします。」

ユ「え、もうなんですか？じ・・じゃあその前に、ストラウスさん、サインくれませんか？」

ス「ハッ？」

ユ「いえ、実は私、ストラウスさんとブリジットさんが書いた伝説の漫画、「魔法豆腐は恋の味」のファンなんです。」

ス「あ、ああ、最後の羽計画の傍らで書いたあの作品の。読み切り作品なのにファンが居るなんてうれしですね。ありがとございませ。」

ユ「い、いえ／＼／」

ピ「うわ〜、まさかユニにこんな一面があったなんて驚き〜」

ス「ではサインを。」

ユ「あ、お願いします。」

ス「でわ・・・」

バン！（スタジオの扉を開ける音）

セ「ユニさん！」

ピ「へ？刹那!？」

ユ「ど・・・どうしたんですか？」

セ「聖時さんが、武闘鬼人さんからもらったお土産を喰らって、死に掛けてるんです。はやく蘇生魔法サオラルをかけてください！使えるのはユニさんだけなんですから！」

ユ「え、いや今ストラウスさんにサインを・・・」

セ「なにを言ってるんですか！さあ、早く！」

ズルズル（ユニが引きずられて連れて行かれる音）

ユ「あ、いや・・・サ・・・サイン~~~~~!!!!!!」

ボタン！

ピ「……連れて行かれちゃったね。」

ビツ「……そうですね。」

ス「仕方ないな、では後でサイン入りの色紙をここに送っておきま
すね。」

ビツ「あ、スイマセン。」

ピ「それじゃあ、改めて、今回はここまで。」

ビツ「みなさん」

二人「……まっただね」

ス「……ふむ、読み切りでファンが出来たのだから、今度は連載
用の作品でも書いてみるか……」

第27話 刹那と由香（後編）（後書き）

最近感想がないのでちゃんと読んでもらっているのか心配です。感想等おまちしております。

第28話 守る事の意味（前書き）

どうも剣 流星です

この猛暑のせいで夏バテ気味で体調があまり良くありません
ですが、がんばってアップしました。
では第28話をどうぞ。

第28話 守る事の意味

第28話 守る事の意味

学校からの帰り道、刹那は長おである詠春から紹介されたこの世界でお世話になる家に向かっていた。

刹那「（え〜と、こっち・・・）」

刹那は手に持っているメモに書かれている地図を見ながら歩いて進んでいく。

やがて幾つかの道を曲がって、目的地の家に辿り着いた。

刹那「ここか。」

刹那は大きな平屋建ての武家屋敷のような日本家屋の前に立った。

刹那「ここが今日からお世話になる家・・・」

刹那はこれからしばらく世話になるこの家の住人たちにまずは挨拶しなくてはと思いながら屋敷の敷地に入り、玄関のインターホンを鳴らした。

ピンポン

インターホンからの声『はい。』

インターホンからこの家の住人らしき人物の声がしてきた。

刹那「あ、私、今日からこの家でお世話になる刹那です。」

インターホンからの声「あ、はい玄関は開いてますのでどうぞ。」

刹那「あ、はい、では……」

そう言つて刹那は玄関の戸を開けた。

刹那「失礼します。」

パンパンン！

刹那「!？」

刹那が玄関を開けると突然何かはじけたような音がした。

刹那（敵襲!？）

刹那は瞬時に身構えた。しかしそんな刹那の心境を無視したような声が彼女にかけられた。

大勢の声『いらっしやい刹那さん。神谷家によっこそ』

刹那はその声を聞き、しばらく啞然とした。

今彼女の目の前には先ほどまでに一緒の教室で授業を受けていたク

ラスメイトの聖時、ふたば、アキ、アルフが居て、さらにその他にも刹那と同じくらいと思われる男子と女子が5人くらい、そして中国の人民服のような服を着ている20代ぐらいの男性が居た。

聖時「いらっしやい、刹那。さあ早く中に。」

アキ「まったくびっくりしたわよ。まさか桜咲さんが聖時の家に住むことになってるなんて思わなかった。」

アルフ「まったくだよ。ユニの奴、今日の放課後いきなり聖時の携帯に刹那の事を言ってくるんだもんね。」

ふたば「おかげで桜咲さんの歓迎会の準備、大急ぎでやらなきゃならなくなっただしね。」

童虎「まあまあ、こうしてちゃんと準備は間に合ったのだからよいではないか。」

琴乃「そうですよ。」

明日香「うんうん。」

士郎「俺も久々に料理の腕を存分に振るえたよ。」

猛「そうか、存分に振るえたのか。これは料理が楽しみなな。」

剛「おい猛、今日の主役は桜咲さんなんだからな、そこを忘れるなよ。」

それぞれが思い思いの言葉を口にする。

刹那はそれを見て、若干戸惑いながらも声をかけた。

刹那「あ……あの……これはどう言うことなんですか？」

聖時「ん、どういう事って……刹那の歓迎会だよ。刹那をウチでしばらく預かる事になったってユニから聞いたから、みんなで歓迎会をやるうって事になってね。」

刹那「歓迎会って……」

刹那は自分を見ている人たちを見て、軽いため息をする。

刹那「あの、私の部屋は？」

聖時「へ？え〜と南側の一番はじにある部屋だけど……」

刹那「そうですか、ありがとうございます。」

そう言つと刹那はその場を後にして部屋に向かった。

ふたば「え？あ……あの！」

ふたばがその場を去ろうとする刹那の背中に声をかける。

刹那「すいません。明日に備えて早めに体を休めたいので、歓迎会は遠慮しておきます。」

そう言つて刹那は部屋へ行ってしまった。

ピティ「刹那……行っちゃったね……なんか避けられてるみた

い。ねえ聖時、なんで刹那に構おうとするの？刹那は聖時の事を意図的に避けてるように見えるよ？なのになんで・・・」

ピティは今日1日を見て刹那が聖時を意図的に避けてるのがよく分かった。それは聖時もよく分かっているはずだとピティは思った。しかし聖時はそれを知っていてもなお刹那にかまおうとしていた。それがピティにはなぜそうするのか分からないのである。

聖時「それはね、刹那が一番最初に会った頃のような感じがするからだよ。」

ピティ「最初に会った頃の感じ？」

聖時「うん、木乃香の手紙にも書いてあったんだけど、刹那が一番最初に会った頃のように人を避けてるように見えるんだ。」

聖時は一番最初に会った頃の刹那を思い返しながら話し始める。

聖時「詳しくは知らないんだけど、刹那は両親を早くに亡くし、親戚からは厄介者扱いされて、なかば捨てられるような扱い寸前だったんだ。そんな時、木乃香のお父さんの詠春さんが引き取ったみたいなんだ。けど、最初の頃の刹那は親戚たちから受けた仕打ちで、人と触れ合う事を怖がっているような感じだったんだ。」

アルフ「へへ、あいつもあまり家族に恵まれなかったんだね・・・」

聖時「・・・続けるよ。人と触れ合う事を怖がり避ける刹那を見て桃華が刹那をどうにかしてあげたいと言って構うようになったんだ。」

アキ「桃華とうかが？」

聖時「うん、桃華とうかは刹那の事情を聞いて、刹那に人の温もりを教え
てあげたいと

思ったんだろうね。僕も木乃香も桃華がやろうとしている事を手伝
おうとして刹那に構い始めたんだ。最初の頃は避けられっぱなしだ
ったけど、だんだんと一緒にいる時間が増えてきて、いつの間にか
仲良くなっただ。

ふたば「そんな事があっただ。」

アルフ「で、今の刹那がその当時の刹那と同じ感じがするって？」

聖時「・・・うん。」

猛「確かに、話の中のあいつと同じように今のあいつは人を避けて
るような感じがするな。」

聖時「うん、その事で木乃香がすごく悲しんでるんだ。以前のよう
に話してくれないって。手紙にはそれでも気丈に振舞ってがんばる
ような文面が書かれていたけど・・・その手紙には涙の跡があ
っただ・・・。」

琴乃「涙の・・・跡・・・。」

聖時「うん、木乃香は刹那と仲良く出来ない事を悲しんでる・・・
だから桃華がやったみたいに今度は僕が刹那の心を開かせられたら
って思っただけど・・・うまくいかない・・・。」

聖時は少し悲しそうな顔をしながら、桃華とうかから移植された左足を撫でた。

聖時「……なんでかな……桃華とうかが生きてたら……もう少しうまくやれただろうにね……」

ふたば「聖時……」

聖時「やっぱり……僕じゃ桃華とうかの代わりにはなれないか……桃華とうかが生きていた時みたいに、刹那にも笑ってもらえるようになって欲しかったんだけど……」

アルフ「……」

しばらく沈黙が続いた後、アルフが何かを決意したような顔をして刹那が向かった部屋の方に向かって歩き出した。

聖時「え、ちよっ……アルフ！」

アルフ「あんた達は歓迎会の準備をしておいて。あたしがあいつを連れてくるよ。」

聖時「連れてくるって？……アルフ？」

聖時はアルフの背中に声を掛けたが、アルフはその声に反応せずそのまま行ってしまった。

・
・
・

宛がわれた部屋に入った刹那はふくと深く息を吐いた。

そして先ほどまで自分のために歓迎会を開いてくれた聖時の事について思い返していた。

彼女は自分の記憶の中にある彼とまるでかわらない感じで話しかけてくれた事を嬉しいと思ったと同時に、申し訳ないとも思った。

刹那は幼い頃、川でおぼれた木乃香を助けられなかった事をひどく後悔していた。その時、大人達を呼んできた方が良いと言う聖時達の声の聞かずに飛び込み、自分も溺れそうになった。結局、聖時達と呼んできた大人たちの手で助けられた。

聖時達の忠告を無視し、拳句の果てに自分も溺れてしまうと言う大失態をした。しかも聖時達にも心配を掛けてしまい申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

刹那（もつと強くなる！）

あの時助けられなかった木乃香を今度こそ自分の手で守れるように、そしてその後、落ち込んでいた自分を励ましてくれた聖時達の為にも強くなる。そんな気持ちで剣の修行に打ち込んだ。そんな風に修行を積んで数年後、彼女の元に凶報が届いた。桃華がテロで死んだのである。刹那は桃華を自分の手で守ることが出来なかった悔しさ
と、桃華を失った悲しさで一杯になり、それを忘れようとするかのように以前よりもさらに激しい修行をするようになった。それこそ
桃華の葬儀に出ないくらいに……

だがそれは間違いだつたとその後気がついた。自分が悲しさと悔しさで無茶な修行をしていた時、自分以上に悲しんでいた木乃香や聖時を自分は放って置いていたのである。

刹那がそのことに気がついた時、彼女は酷く後悔した。守ると誓いながら、結局は二人の心さえも守ってやれてなかった自分に腹が立っていたが、それはすでに遅かった。

木乃香を守れず、逆に聖時達に助けられ、しかも今度は自分の悲しみや悔しさで、二人の心さえも守ってやれなかった。

自分はもう二人の側に居る資格はない。刹那はそう思い、これから二人を影から守っていくこうと思ひ。今回の護衛を引き受けた。そんな風にして思い返していると、部屋の襖を開けてアルフが入ってきた。

アルフ「勝手に入るよ。」

刹那「……ノックも声もせずに入るのは礼儀がありませんね。」

刹那はアルフに少し非難を込めた声で言った。

アルフ「人の好意を無下にする奴ほどではないよ。」

刹那「！」

刹那はアルフの言葉を聞いてアルフを睨みつけた。

アルフ「おや？怒ったかい？ま、事実だから仕方がないよね。」

アルフは刹那をからかう様な口調で話しかける。

刹那「……………それで、なにか用ですか？」

アルフ「護衛の件の引継ぎについて話しに来ただけだね。」

刹那「護衛？……………そうですか、ではあなたが前任の護衛係でしたか。」

アルフ「まあね。さて、ここであんたに護衛の任をあんたに引き継いでもらうんだけど……………今のあんたを見て気が変わったよ。あんたにはこのまま国に帰ってもらうよ！」

刹那「な！帰ってもらうって……………どう言うことです！」

刹那はアルフの帰ってもらうと言う言葉を聞き声を荒げた。

アルフ「そのまんまの意味だよ。あんたには聖時の護衛をせずにそのまま帰ってもらうって事だよ。今のあんたじゃ本当の意味で聖時はおろか、木乃香って子さえ守ってやれるもんか！」

刹那「なに！わが剣を侮辱するか！」

刹那は剣を持ってアルフに迫った。

アルフ「別に侮辱するわけじゃないよ。あんたの剣は確かに聖時や木乃香って子の身を守る事は出来るだろうよ。」

刹那「なら！」

アルフ「でも、“それだけだ”。」

刹那「！」

アルフ「確かにあなたのやり方で体を……命を守る事は出来るだろうよ。けど心を守る事は出来ない。」

刹那「心を？」

アルフ「ああ、あんた知ってるかい。あんたが向こうで守っていた木乃香って子があんたと以前の様に話せなくなっただけで悲しんでるって事を！」

刹那「！」

刹那はアルフの言葉を聞いて心臓を鷲？みにされたような感じがした。

アルフ「聖時はそれを知ってあんたに以前のように木乃香や他の人にもう一度触れ合えるようになって欲しいと思って今日一日あんたに声をかけてたんだよ！」

刹那「！」

アルフ「聖時はね、いなくなった桃華とうかの代わりに今度は自分が刹那と木乃香の間を取り成すつもりなんだ。」

刹那「……………」

アルフ「あの子はね……あのテロで自分が桃華とうかを守れなかった事をずっと後悔してた。だからこれからは自分の大切な人たちを守っ

ていけるようになりたい、自分のように悲しんでいる人たちを救いたって思って強くなるように修行をし始めたんだ。」

刹那「修行？」

刹那はアルフの言葉の中の修行と言う言葉に疑問をもった。

アルフ「ああ、修行だよ。剣術をはじめとする戦い方、そして・・・魔法に関してのね。」

刹那「な！？」

刹那はアルフの言葉を聞いて絶句した。

自分たちの護衛の目的は聖時を魔法に関わらせないための物だ。しかしそれを行っているはずの前任のアルフから、聖時が魔法の修行をしていると言う言葉を聞いたのだ。驚くのは当然であった。

779

刹那「ど・・・どう言う事です！我々の護衛の目的には聖時さんが魔法に関わらないようにすることも含まれたいはず！それを！」

刹那はアルフに掴みかかった。

アルフ「あたしは、聖時の身を守りたいけど、同時に聖時の志こころざしも守りたい。だから、聖時が魔法に関わる事に関しては口を挟まないつもりだよ。」

刹那「志を守りたい？けどそのせいで聖時さんが危険な事に巻き込まれたら？真の紋章の力せいで不幸に見舞われたらどうすると？！」

アルフ「そうならないためにあたしが居るんだ！」

刹那「！」

アルフ「あたしだけじゃない。アキやふたば、猛たちだっている。分かるかい、あたしたちはみんなで聖時を仲間として、友達として互いに支えあっているんだ。あんたと違って独りよがりですべてのと訳が違うんだ！」

刹那「ひ……ひとりよがり……」

アルフ「分かるかい刹那。あんたの守り方では体は守れても心は守れない。例えば体が守れても、その体に入る心が守れてなければ、その体はただの肉の塊に過ぎないんだよ。」

刹那「……」

アルフ「本当の守るって事の意味がわからない今のあんたには聖時達の護衛は無理だよ。おとなしく国に帰ってもう一度修行のやり直しをするんだね。」

アルフは刹那に背中を向けるとそのまま部屋を出て行くこととした。すると背中から刹那が声をかけてきた。

刹那「ま……まっってください。」

刹那の声でアルフは後ろを振り向いた。

刹那「私は……聖時さんや木乃香お嬢様が一番辛い時に側にさえ居ることが出来なかった……そんな私にお二人の側にいる資格などないと思っていました。二人を影から守ればそれでいいと……」

・ ・ ・ けど、それでは二人を本当の意味で守る事が出来ない．．．．
私はまた同じ過ちを繰り返すところだったのですね．．．」

アルフ「刹那？」

刹那「本当の意味での守るという事．．．それは体も心も守ると
いう事、けど私は資格が無いと言い訳をして、本当は二人に触れ合
うのが怖がってただけなのかもしれない。桃華さんのように無くす
のが怖くて．．．．」

アルフ「．．．．．」

刹那「いい機会だったのかもしれませんが。もうこれからは逃げない
ようにする為に聖時さんや木乃香お嬢様と向き合うようにして行き
たいです。」

アルフ「刹那。」

アルフは刹那が聖時たちと向き合うことを決意してくれた事に嬉し
くなった。

刹那「アルフさん、もう一度私にチャンスをくれませんか？この事
件が終わるまでの間、聖時さんを本当の意味で守ってみたいんです。
そして、今度こそ木乃香お嬢様を守って．．．」

アルフ「刹那．．．わかったよ。あなたにもう一度チャンスをあげ
るよ。本当の意味で聖時を守ってみせなよ。」

刹那「はい！それと．．．」

アルフ「うん？」

刹那「私自身のワガママを少し聞いてもらいたいんですけど・・・」

アルフ「なんだい？」

刹那「聖時さんの魔法に関わる事についてどれだけの覚悟があるのかそれを確かめてみる為に、聖時さんと手合わせを試みたいのです。」

アルフ「手合わせ？」

刹那「はい、私は剣士です。ですから聖時さんの覚悟を知る為には剣を交えるのが一番わかりやすいので。」

アルフ「うん・・・わかったよ。なら早速聖時にその事を話してみるよ。」

刹那「あ・・・ありがとうございます！」

アルフは刹那の礼を聞くと聖時達の元に戻った。

刹那はアルフの背中を見ながら、今までの自分のやり方について恥、そして今度こそ聖時や木乃香を守って行こうと思っつつ、聖時との手合わせの事について考え始めた。

《つづく》

おまけコーナー

ピ「ピティと」

ユ「ユニの」

二人「「おまけコーナー」」

ピ「はい毎度お馴染みおまけコーナーのお時間です。司会進行役のピティです。」

ユ「解説のユニです。」

ピ「アシスタントのピツキーです。」

ピ「さて、ではさっそくのゲスト召還と行きましょうか コシヨウ
パツパツと」

ピツ「ハツ……ハツ……ハツ……ハツ……ックシヨン!!」

パツ!

ピ「召還成功!さて今回は、魔法先生ネギま!からのゲストのアル
ビレオ「クウネル・サンダースです。」って、え?」

ク「クウネル・サンダースとお呼びください。」

ユ「え〜つとアル・・・」

ク「クウネルです。」

三人「「「・・・」」」

ユ「わ・・・わかりました。クウネル・・・」

ク「ハイ」

ピ「え〜つと、それじゃあ恒例の補足と行こうか。」

ビツ「そうですね。」

ユ「ええ、それじゃあ今回は、ネギま！の作品内でも有名なパーティー「赤き翼」についてです。」

ク「ではその説明、私も手伝いましょう。」

ユ「あ、お願いします。」

ク「赤き翼とはかつて魔法世界で起きた大戦を終結に導いた有名なパーティーで、メンバーはこの私の他にサウザンドマスターのナギ・スプリングフィールド、サムライマスターの近衛詠春このえいしゅん無音拳の使手のガトウ・カゲラ・ヴァンデンバーグとその弟子のタカミチ・T・高畑、千の刃のジャック・ラカン、とそしてフィリウス・ゼクトの六人です。」

ユ「原作のネギま！ではこの六人だけですが、この作品ではこのメンバーの他に聖時せいじさんの両親である竜帝りゅうていの神谷聖かみやひじりと魔法の詩姫、来迎寺千尋らいじうぢちゆんとそして聖さんの使い魔であったこの私、最強の使い魔、ユニの三人が加わります。」

ピ「最強って……自分で言う普通……」

ユ「わ……私が言ってるんじゃないんですよ！」

ク「続けますよ。このパーティーは、この作品では竜帝の神谷聖が中心となって作ったと言われています。このパーティーは当初、魔法世界を裏から操っている「完全なる世界コスモエンテレケイヤ」に協力している、当時の魔王軍の協力を得ていたハルモニア軍の調査及び討伐を目的に作られました。」

ユ「そして魔法世界での戦いの後、ナギさん達は聖さん達について次元世界にある様々な異世界に赴き、ハルモニアが原因で起きた戦いを終わりへと導きました。この時、偶然にアルトネリコ2の舞台であるメタ・ファルスに行つたみたいです。そしてその後、当時魔王軍の協力関係にあつたハルモニアに向かい、これを壊滅させました。俗に言う「真の紋章事件」または「ハルモニア事件」とも言われています。」

ク「そしてこの事件の中で、私たちは当時次元管理局に勤めていたクロノ君の両親のスクライド君とリンデイさん、そして現在特務捜査課に入っている東郷大地とうじうだいちとその姉の巴さん、千尋さんの義理の兄に当たるエルネスト・来迎寺氏らいじうぢやてんや斎藤夜天さいとうやてんと出会つたのです。」

ピ「へへ、特務捜査課の面々とはこの頃からの付き合いなんだ。」

ユ「ええ、そして「赤き翼」の面々は、この事件で次元世界の消滅を食い止めたので、次元世界でも有名になったんです。」

ビツ「す・す・すごいんですね。」

ピ「しかもそのメンバーの一人がユニだって言うのがまたすごい。私には酔っ払うたびに道端にある看板やら何やらを持ち帰ってくる酒癖の悪い使い魔にしか見えないんだけどね。」

ユ「なにか言いましたかピティ（怒）」

ピ「い・い・いい何も・・・。」

ク「ユニ・・・あなたその酒癖、まだ直ってないんですか。」

ユ「・・・ほっといてください。」

ビツ「まあまあ、さて今回はここまでにしましょう。」

ユ「あ、そうそう。クウネル、これお土産です。」

ク「これは？」

ユ「今度来迎寺財閥傘下の飲料水の会社から出す試作品の缶ジュースの詰め合わせです。飲んだら後で感想を送ってください。」

ク「缶ジュースの詰め合わせですか・・・ありがとうございます。では後で感想を送っておきます。」

ユ「お願いします。」

ピッ「それじゃあ送りますね。んんんんえい！」

ヒュン！

ピ「行っちゃったね。あ、所でさっき渡した缶ジュースの詰め合わせって一体どう言うジュースが入っていたの？」

ユ「あれですか？あれはシャマルさんが達料理研究会が開発した不思議飲料水シリーズですよ。たしか入っていた缶ジュースは・・・ライチみつくす、みるくスイカ、アロエシェイク、ラズベリーソーダ、インド風しるこの五つよ。」

ピ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピッ「だ・・・大丈夫でしょうか？」

ユ「たぶん大丈夫でしょ。あれでも一応「赤き翼」のメンバーの人だから死ぬ事はないと思うから。」

ピ「そうだろうけどさ・・・・・・・・なんでまた料理研究会が作った缶ジュースの試作品なんてお土産に持たせたの？」

ユ「いやだってシャマルさんが「来迎寺傘下の会社の協力でジュースを作ったから味見してみてください」って言うから・・・ほら私一応来迎寺の総帥代行だから・・・・・・・・」

ピ「そう言えばそうだね。」

ピッ「って言うかなんで来迎寺傘下の会社が料理研究会の料理に協

カしてるんでしか?!」

ユ「どうやら私の名前を使ったみたいなんです……」

ビ「あはははは……」

ピ「シヤマル……あんたね」

ユ「と……とにかく今回はここまでします。」

ビ「それでは皆さん」

三人「まっ たね」

第28話 守る事の意味（後書き）

ちなみにクウネルから送られてきた感想は次の通りでした。

ライチみつくす・・・普通

みるくスイカ・・・普通

アロエシエイク・・・まずい

ラズベリーソーダ・・・まずい

インド風しるこ・・・悪夢

以上です。インド風しるこ・・・一体どんな味だったんだ・・・

第29話 聖時VS刹那（前書き）

どうも剣 流星です。

無事葬儀も終わり、北海道から帰ってこれました。

では長らくお待ちせしました、第29話ですどうぞ。

第29話 聖時VS刹那

第29話 聖時VS刹那

ここは聖時の別荘の裏庭にある広場。

普段は聖時達が童虎から修行をつけてもらっている場所である。この場所の中心に聖時と刹那が互いに得物を持って対峙しており、それを遠くから見守るように童虎をはじめ、ピティ、ふたば、アキ、士郎、猛、剛、琴乃、明日香、アルフが見ていた。

猛「二人の手合わせ・・・どっちが勝つと思う？」

剛「さあ？・・・それよりも猛、さっきアルフと刹那から聞いた話・・・どう思う？」

剛は先ほど、アルフと刹那の二人が話した内容を思い返した。

刹那の所に向かったアルフが刹那と共に聖時達の所に戻ってきた時、アルフから「重要な話があるから別荘に先に行ってくれ」と言ってきた。

聖時達はアルフの言葉に疑問を抱きつつ、別荘へ入った。そして別荘の居間で待っていた聖時達の前にアルフが刹那を連れて現れた。聖時達はアルフが刹那を連れて現れた事に対して疑問を投げかけた。それに対しアルフは刹那と共に聖時達の疑問に答えた。

その内容は、まず刹那が魔法の存在を知っている事、刹那が実は別

世界の人間だと言う事、アルフが実はフェイトの使い魔で、フェイトとなのは、そしてはやて達、八神家の面々が魔法を使える魔導師で、時空管理局と言う次元世界を監視している組織の一員だと言う事。そして・・・聖時の両親が次元世界でも有名な「赤き翼」の一員だったと言う事、最後に刹那は自分が最近起きている意識不明事件に聖時が巻き込まれないようにするために来た護衛だと言う事を話した。

猛「・・・アルフの話・・・突拍子ない話だと思ったけど、よくよく考えたら魔法なんてもんを信じてる段階ですでに何を今さらって感じだよ。」

剛「確かに・・・魔法をすでに信じてるから、別世界や時空管理局についてもあまり違和感を感じなかったな。」

アキ「それにしても時空管理局の魔導師か・・・この世界に魔術師って魔術を使う人たちが居たって事は士郎から聞いてたけど魔導師の存在は初めて聞いたね。」

琴乃「士郎さんは魔導師の事については何か知ってましたか？」

士郎「いや・・・そもそも魔術や魔術師に関しての事だって死んだおやじからホンの少ししか聞けなかったから魔導師のことまでは・・・」

琴乃「そうですか。」

明日香「それにしても刹那お姉ちゃん、聖時お兄ちゃんといきなり戦いたいってどうしてだろう?」

ピティ「さあ？・・・ん？童虎？どうしたの？」

ピティは聖時達の方を見ながら何か考え事をしていた童虎を見て声をかけた。

童虎「ん？いや、先ほどアルフからワシと同じ世界から来たって言う人が居ると聞いたのだ。」

ピティ「え？！本当！？」

童虎「ああ、その者が話した世界観を聞くと、ワシが居た世界とほぼ同じようだし、何よりその者がワシの知り合いである可能性がある。」

ピティ「へ～そうなんだ。」

童虎「ああ。（ただ、聞いた名前からするとワシの記憶が確かならその者は前聖戦の・・・）」

そんな風に童虎が考えている前で刹那が聖時に話しかけてた。

刹那「聖時さん、あなたがどんな思いで魔法や剣の修行をしていたのか、またその思いがどれだけなのかはアルフさんから聞きました。しかし、私の護衛の仕事には聖時さんを魔法に関する事柄から遠ざけて危険な目に合わせないと言う事が含まれます。しかし聖時さんはすでに魔法に関わってしまったし、何よりも私は聖時さんの強くなるうと言う志を知ってしまったので、無下に魔法に関わるなどは言いません・・・だから！」

刹那は手に持っている刀・夕凧を鞘から抜き放ち、聖時に向ける。

刹那「聖時さんのその思いがどれだけ強いかをこの剣で見極めます！もしその思いが中途半端な物ならこの事をすべて協力者であるアルフさんの主に報告し、聖時さんには今後二度と魔法に関わらないようにしていただきます！」

聖時「・・・わかった。なら僕も全力で挑むよ。僕の思いが中途半端な物じゃない事を刹那にわかしてもらうために！」

聖時も左手の指に身につけている指輪の形の待機形態の光牙を起動させ刀にして左手に持ち、抜刀術の構えで構えた。

刹那「いいでしょう、受けてたちます！」

そう言つて刹那は脇構えの構えをとつた。

聖時「・・・・・・・・・・・・・・・・」

刹那「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ピティ「・・・・・・・・いよいよ始まるね・・・」

二人を見ていたピティが口にする。

二人は構えたまま互いにじりじりと間合いをとる。と、次の瞬間二人は相手に向かって行った。

聖時「ハアア！！」

聖時は刹那の剣よりも早く抜刀術で攻撃し刹那を捕らえた。

刹那「くっ！（早い！）」

しかし刹那はそれを夕風で受け止めてかわし、聖時から一旦離れた。聖時は距離を取ろうとした刹那を追いかけて一撃を入れる。

聖時「ハア！」

刹那「クツ！」

刹那は聖時の一撃を飛んでかわし、上空から攻撃をする。

刹那「神鳴流奥義、斬空掌・散！」

刹那は剣先から飛び散る散弾銃のような斬撃を聖時に放った。

聖時「うわっ！」

聖時に刹那の斬撃が当り、その余波で回りに土煙が舞う。

それを見ながら刹那が上空から地面に降りて再び構えを取る。

刹那「さあ聖時さん！どうしました！この程度なのですか？！これではあなたがこれから魔法の事に関わることをとても容認できませんよ！」

刹那が土煙が舞う聖時が居た場所に言葉を投げかける。すると突然土煙から聖時の言葉と共に斬撃が刹那に向けて飛んできた。

聖時「アバン流刀殺法・海波斬！！」

刹那「なっ!？」

刹那は飛んできた斬撃をなんとかギリギリでかわす。

聖時「身体強化の為の気での強化以外に守備力強化を戦闘前に掛けておいてよかったよ。」

土煙が晴れてきて、聖時が姿を現した。

刹那「守備力強化の魔法を事前にかけておいたのですね……」

聖時「自分より強い相手には保険をかけておくもんだよ。」

そう言つて聖時は再び構えて刹那と対峙した。

そんな二人を見ていた士郎が側で一緒に見ていた童虎に話しかけた。

士郎「童虎さん、聖時は呪文を使つての身体能力の他に気での身体強化の方法を身につけてたんですね？」

童虎「ん?ああ、まあな。」

士郎「しかし、気の事についてなんてよく知つてましたね?俺も聖時が見つけた資料を見て初めて知つたのに、異世界人の童虎さんが知つてたのはちょっと驚きました。初めから知つてたんですか?」

童虎「いや、ワシも聖時が見つけた父親の残した様々な戦闘技術が書かれた資料を見てワシも初めて知つたのだ。」

士郎「え?それでよく聖時に気の使い方を教えられましたね?」

士郎は今までこの別荘で童虎が聖時対して気の使い方を教えていた事を見ていた。その童虎が気の存在についてつい最近知ったと言うのでどうして聖時に気の使い方を教えられたのか疑問に思いその事について問いかけた。

童虎「なに簡単な事だ。ワシ居た世界で使われていた力・・・小宇宙コスモとこの世界にある力、気と魔力は使い方が基本的にはほぼ同じような物だった・・・ただそれだけの事だ。だから小宇宙コスモの使い方の応用が結構きくんじゃよ。」

士郎「ほぼ同じ?」

童虎「ああ、人の内から出てくる力は基本的には似たようなものらしい。ただその眠っている所が人の内側のどれくらい深いところにあるかと言っただけの違いだ。」

士郎「眠っている所・・・」

童虎「人間には五感と言う物がある。嗅覚、触覚、味覚、聴覚、視覚・・・そしてそれら五感より人の内側にある力・・・気や魔力、そして超能力とか言った力は第六感とも言っべき場所から出てきている物だとワシは考えておる。」

士郎「第六感・・・」

童虎「そしてその第六感の一番奥・・・第七感に一番近い場所に眠っている力が、ワシらの世界で使われている力、小宇宙コスモなのだよ。」

士郎「小宇宙……」

童虎「そうじゃ。気も魔力も同じ第六感から来ている力じゃ、だからその使い方もある程度応用がきくのだ。」

士郎「なるほど、つまり童虎さんは自分が持っている力……小宇宙の使い方を応用して気や魔力の使い方を聖時に教えていたんですね。」

童虎「ま、そう言う事じゃ。ただ同じ第六感から来ている力でも、小宇宙は他の力と一線を隔てておるから応用がきくと言っても基礎ぐらいまでなのだから。」

士郎「へ……隔ててるって？」

童虎「魔力や気は個人の差があるにしても、その容量には限りがある。じゃが小宇宙にはそれがない。」

士郎「え？ないって、それじゃあ小宇宙と言う物は……」

童虎「そう……無限なのじゃ……しかも小宇宙は人間のさらに内側にある力……第六感よりも深い場所に眠っている力……究極の小宇宙と言われている第七感に繋がっているとでも言われている。ま、そこまでいくことが出来るのはほんの一握りの者だけだかのう。」

士郎「一握り……」

童虎「ああ、そして聖時にはその素質がある。」

士郎「ええ?! 聖時に?!」

童虎「ああ、ワシは聖時にはいずれ小宇宙^{コスモ}を会得出来るよう修行をするつもりだ。」

士郎「そう・・・なんですか・・・聖時が・・・」

士郎は自分が魔術師としては落ちこぼれで、呪文もろくに契約できなかつたので、聖時に小宇宙^{コスモ}の素質があると言われて少しうらやましいと思った。

士郎「しかし、聖時は面白いやつじやのう。力の素質もそうだがあやつ^{コスモ}の周りにはなぜか小宇宙の素質がある人物が多く集まる・・・猛や剛、アキや琴乃や明日香、ふたばやあの才人、それに・・・おぬしとな。」

士郎「え?! 俺に?! そんなまさか?! 魔術師として落ちこぼれの俺にそんなものあるわけがありませんよ。」

童虎「いや、第六感の力である魔力を使うのが下手でも小宇宙^{コスモ}を習得する事はできる。現にワシ等が居た世界で使われている第六感の力の一つ、超能力が使えなくても小宇宙^{コスモ}を習得している者もあるし、さらにその上の力である第七感^{セブンセンス}まで達した者もあるし、なにより小宇宙^{コスモ}は誰の内にも眠っている力なのだからのう。」

士郎「誰の内にも眠っている力・・・」

士郎は自分の手を見て、自分にもその力があるのか? と思った。

ピティ「ちょっと二人とも! 話し込むのはいいけど聖時達の方を見

なさいよ!!!」

士郎「あ!」

童虎「むう・・・」

ピティに言われて二人は聖時達の方に顔を向けた。

二人が顔を向けた方を見ると二人が互いにぶつかり合い、鏢迫り合いをしている所だった。

聖時「くっ!」

刹那「ムウ!」

二人は鏢迫り合いの状態から互いに離れて間合いを取った。

刹那「やりますね聖時さん。なら・・・これならどうです!!!」

刹那が夕風を振りかぶり技を出す。

刹那「神鳴流奥義・百列桜華斬!!!」
ひやくれつおうかざん

刹那が無数の嵐のような斬撃を聖時に向けて放つ。

聖時「飛天御剣流・土龍閃!!!」
どりゅうせん

対する聖時は強烈な斬撃を地面に放って無数の土の塊を刹那に向けてぶつけるように放った。

互いの技がぶつかり衝撃波が発生し、土煙が出る。

聖時と刹那は土煙の中互いに相手の方角に向けて得物を振りかぶり突進する。

刹那「斬神鳴流奥義・岩剣いしがんけん!!」

聖時「アバン流刀殺法りゅうとうころぼつ・大地斬だいちざん!!」

刹那の斬岩剣ざんがんけんと聖時の大地斬だいちざんがぶつかり互いにまた罅迫り合い状態になる。

そこから聖時は間合いを取るために刹那から離れるが、刹那はそれに追いつき技を出す。

刹那「神鳴流奥義・斬鉄閃ざんてつせん!!」

刹那の技が聖時に再び迫る。

聖時「くっ!!」

聖時はそれを身をひねってかわす。

刹那「!(今のをかわす?!)」

聖時はそのかわした身をひねった反動でそのまま刹那に攻撃を仕掛ける。

聖時「飛天御剣流・龍巻閃りゅうまっかんせん!!」

聖時の身をひねった動きを利用した攻撃が刹那に迫る。

刹那「くっ！」

刹那はその攻撃を体をひねって打点をズラして直撃を避けて受けた。攻撃を受けた刹那は吹っ飛んだものの、すぐに体勢を立て直して聖時と対峙する。

聖時も技の後の硬直の後すぐに構え刹那に対峙した。

聖時「強いね、刹那は。」

刹那「聖時さんこそ。2種類の剣術を使つての攻撃・・・よく使いこなしていますね。」

聖時「ま、死ぬほど修行したからね。実際、童虎先生に教わり始めてからは何度か本当に三途の川を渡りかけたしね・・・フッフッフ」

聖時が童虎との修行を思い出しながら遠い眼をする。

刹那「ど・・・どうやら相当ハードな修行をしてきたみたいですね。」

聖時「まあね、さてそろそろ決着をつけよう刹那」

聖時は鞘を召還し、光牙ひつがを鞘に収め抜刀術の構えを取る。

聖時「次の攻撃に僕はすべてをかける。これの攻撃がかわされれば刹那の勝ち、けどこれが決まれば僕の勝ちだ！！」

刹那「いいでしょう。では私も次の攻撃にすべてをかけます！！」

刹那も構えて聖時と対峙する。

刹那（抜刀術はその性質上一撃必殺の威力がある分、かわされれば大きな隙を作ると言う性質がある……つまり放たれる一撃をかわしければこちらの勝ちです!!）

刹那は聖時の抜刀術後の隙を突くよう考え、その一撃をなんとかかわすと言う作戦で行くことにした。

刹那「勝負!!」

刹那は聖時に夕凧を構えながら迫る。

聖時「!!」

聖時は間合いに入ってきた刹那に鞘から抜き放った光牙での抜刀術で攻撃した。

刹那（ここだ!!）

刹那はその抜刀術を夕凧で防ぐ。

聖時の光牙と刹那の夕凧がぶつかる。

刹那（ここで聖時さんの攻撃を防いで……）

刹那は右手で持った夕凧で聖時の攻撃を防ぐと次の瞬間、夕凧を手離して流れるような動作で聖時に素手で襲いかかった。

刹那（今の聖時さんは抜刀術の攻撃を防がれて無防備!!ここで!!）

刹那は握った拳で聖時に殴りかかる。

刹那「私の勝ちです！聖時さん！！」

そう刹那が叫んだ次の瞬間、刹那の右脇腹に衝撃が来た。

刹那「な？！（なぜ攻撃が?!）」

刹那は信じられないと言う顔で自分の右脇腹に走った衝撃の源を見た。

そこには聖時が左手で持っていた抜刀術で使った鞘が叩き込まれていた。

刹那（鞘を使つての二段抜刀術……）

刹那はそう認識しながら倒れて行った。

聖時「飛天御剣流・双龍閃そつりゅうせん！飛天御剣流の抜刀術は二段構えで常にスキはない……あらゆる抜刀術に精通しているのが飛天御剣流の抜刀術の特徴だ。」

聖時はそう言いながら倒れた刹那に光牙を向けて言う。

刹那「まいりましたね……様子見だけで済ますはずでしたのにまさか負けてしまうとは……私もまだまだですね。私の負けです。」

そう言つて刹那は聖時の実力を見て満足し、満足した顔で自分の負けを認めた。

明日香「す……すごい！聖時お兄ちゃん勝っちゃった！！」

猛「やったぞ聖時！」

ピティ「さすが聖時！」

剛「すごいじゃないか！」

ふたば「聖時、刹那さん、お疲れ様。」

琴乃「刹那さん大丈夫ですか?!」

アキ「早くケガの治療を！」

アルフ「ならこれを使いな。ここに来る前にこんな事もあるうかと
思っ
て持っ
てきた薬草だよ。この程度の傷ならこれで十分だよ。」

刹那「あ……ありがとうございます。」

聖時「刹那……。」

聖時は琴乃達に支えられながら立ち上がりながら視線を向けてくる
聖時に顔を向けた。

刹那「約束です。聖時さん達の今の状況の事はアルフさんと同じよ
うに私も黙っておきます。」

聖時「ありがとう。けで……やっぱりいつまでも黙ったままって
言っ
つわけにはやっ
ぱり行かないと思っ
んだ……。」

刹那「？」

聖時「だからこのことに関してはせめてこの事件を解決するまで黙ったままで、事件を解決したら自分の口からなのはさん達に言おうと思うんだ。」

刹那「聖時さん……」

聖時「刹那やアルフ達にこのまま嘘をつき続けさせるのは心苦しいし、何よりなのはさん達にウソをつき続けるのもなんだか嫌なんだ……だから！」

童虎「事件解決の後に自分の口から言うというのだな。」

聖時「はい！」

ピティ「それはわかったけど、どうして事件解決の後なの？」

聖時「今話すと、絶対になのはさん達に反対されるし、何より心配を掛けると思うから……」

刹那「なるほど……わかりました。では、黙っているのは事件解決までと言う事で。」

聖時「うん、それまでの間、力を貸して欲しい刹那。」

聖時は刹那に手を差し出した。

刹那「私の力でよければ喜んで。」

刹那はその手を掴み固い握手を交わした。

《つづく》

オマケ

刹那との手合わせ後、別荘から出てくる聖時達。

聖時「さて、歓迎会の続きと行くつか。」

アルフ「今度はちゃんと出てくれるんだろう？」

刹那「はい、もちろん喜んで。」

猛「そんじゃ、さっさと料理を並べてる居間に戻って飯を食おうぜ？」

明日香「うん、私お腹ペコペコだよ」

琴乃「もう、明日香ったら。」

ピティ「私もお腹ペコペコ」

剛「そうだな、俺も減ったよ。」

アキ「そうだね」

聖時「ん？……先生……」

童虎「うむ、誰か居間に居るな。ユニは今日は戻らないと言っていたからユニではないな……」

ふたば「それじゃあ一体誰なんでしょう？」

シヤマル「あら、みんなやつと戻ってきたのね。」

聖時「あれ？シヤマルさん？」

アルフ「シヤマル？なんであんたがここに？」

シヤマル「聖時君たちが今日から神谷ニ家に居候する子の歓迎会をするって言うてたから、私も何かお料理を作って持ってってあげようと思って。」

アキ「シャ……シヤマルさんの料理？」

聖時「う……」

ふたば「ねえ、聖時。この人は？」

聖時「あ、そうか、ふたばや先生、猛達は初めて会ったんだよね。シヤマルさんは町内に住んでいる昔から世話になっている八神はやてさんの家の人だよ。」

童虎「そうだったか。では改めて、ワシの名は童虎。一応この家の

庭師みたいな物だ。」

ふたば「聖時のクラスメイトのふたばです。」

刹那「はじめまして、今日よりこの家にお世話になる者で、桜咲刹那と申します。」

猛「聖時の友達の八岐猛です。」

剛「同じく大斗剛です。」

琴乃「白鳥琴乃です。」

明日香「妹の明日香です。」

シャマル「これはみなさん。ご丁寧に、シャマルといます。」

聖時「あ……あの、所でシャマルさん、お料理を作って持ってきたって言ってたけど……」

シャマル「ええ、さっき持ってきた料理をを並べ終えた所なの。」

アルフ「え?!それじゃあ聖時達を作った料理の中にシャマルの料理が混ざってるって事?!」

アキ「ねえ聖時。どの料理が聖時達を作った物かわからないの?」

聖時「いっぱい作ったから、どれがそうなのかわからないよ……」

「

アキ「……………」

ふたば「へ〜どれもおいしそうですね。」

琴乃「本当です。聖時さんはお料理がお得意ですからとっても楽しみです。」

明日香「うん 私、聖時お兄ちゃんのお料理大好きだよ。」

猛「ホント聖時の料理はうまいからな。それに今日は美人のシャマルさんの手料理まで食べられるんだ。言う事無しだな。」

剛「そうだな」

童虎「うむ。」

ピティ「……………聖時、ひょっとしてふたば達って……………」

聖時「ああ、シャマルさんの料理の怖さについて知らないんだ」

アルフ「そう言えば話してなかったね。」

アキ「それでどうするの？」

聖時「……………しかたがない。一つずつ食べて確かめるしかないね」

ピティ「みただね……………」

聖時「アルフ・アキ……………ハア〜〜〜〜」

刹那「うん？どうしました聖時さん、ため息なんてついて？」

猛「ため息なんてついてないで早く食べようぜ。」

聖時「そ．．．そうだな．．．」

童虎「それではさっそくいただきます。」

童虎達「いただきます！」

聖時達三人とピティ「いただきます．．．．．」

こうして恐怖のロシアンルーレット料理を使った歓迎会が開始した。ちなみにシヤマルの持ち込んだ料理は四点で、料理に当たったのは聖時・アルフ・アキ・ピティと言うシヤマルの料理の恐怖を知っている者たち全員だったという。

第29話 聖時VS刹那（後書き）

ご意見・感想お待ちしております。

第30話 SE(前編) (前書き)

どうも剣 流星です。

最近あまりの暑さでまともに寝られず、いささか寝不足気味です。けど、がんばって何とか書き上げたので投稿します。では第30話をどうぞ。

第30話 SE(前編)

第30話 SE(前編)

刹那の歓迎会をやった翌日の朝、神谷家の玄関。

聖時「いつてきます。」

ピティ「いつてきます。」

刹那「いつてきます。」

童虎「おう、いつてらっしゃい。」

学校に登校すべく神谷家を出る聖時達。

聖時「うっ……」

ピティ「聖時、大丈夫？」

刹那「まだ顔色が優れませんか。やはり今日は休んだ方がよかったですのでは？」

聖時「だ……大丈夫、昨日のダメージが抜け切ってないだけ……いつものことだから、じきに良くなるよ……」

刹那「い……いつものことって、いつもシャルさんの“あの料理”を食べてるんですか?!」

ピティ「そうだよ。だって聖時はあのシャルルの料理に一番免疫があるから、シャルルの料理の処理を誰よりも多くやってるんだ。」

刹那「そ……そうなのですか？」

聖時「うん……なれない人があれを食べると下手をすると命に関わるからね。」

ピティ「聖時は小さい頃からシャルルの料理を食べてきたから免疫力が付いてるんだ。」

刹那「め……免疫力ですか。」

ピティ「そう、免疫力。だからあの料理を免疫力がない刹那はくれぐれも食べないようにしてよ。」

刹那「え、ええ。以後気を付けます。」

そんな風に歩きながら話していると前方にふたば達を見えてきた。

聖時「ふたば、先輩、おはようございます。」

ふたば「おはよう聖時。」

理佐「おはよう。あ、その子がふたばが言った転校生の子だね。」

刹那「はい、桜咲刹那といます。」

理佐「へへ、礼儀正しいそうな子だね。私は聖遼の高等部一年の山田理佐。よろしくね。」

刹那「はい、よろしくお願いします。」

理佐「ところで聖時くん、なんだか顔色がよくないね。」

ふたば「……まだ昨日のシャマルさんの料理のダメージが抜け切らないの？」

聖時「う……うん。」

理佐「シャマルさんの料理って、昨日ふたばが言ってた例の？」

ふたば「うん。」

理佐「……その顔色を見ると、そうとうな物らしいね……
一体どんな料理なのか興味がわくね。一度食べてみたいな。」

聖時「や、止めといた方がいいです！」

ふたば「そうだよ！あれ食べたら、理佐お姉ちゃん死んじゃうよ！」

刹那「興味本位であれには手を出さない方が身のためです！」

理沙を必死な形相で止める聖時たち。

理佐「いや死ぬって……どんだけ凄いのその料理……」

聖時「先輩……世の中には知らない方が幸せな事があるんですよ……あれには興味本位で首を突っ込まない方がいいです……」

「

理佐「わ・・・わかった。」

そんな風に話しながら歩いていると、いつものなのは達との合流する所に付いた。

そこにはすでになのは達が来ていた。

聖時「あ、なのはさん。おはようございます。って・・・どうしたんですか？なんか暗いですね？」

聖時はなのはから黒く沈んだオーラが漂っているのを感じた。はやとアリサはなにやら「そういう趣味の持主じゃない、そういう趣味の持主じゃない」とぶつぶつ言っており、なのは暗く沈んでおり、フェイトは「なのはが望むなら／＼／＼」などと言いながら顔を赤くしており、すずかは「アリサちゃんたら強引なんだから／＼／＼」などと言っている。

ふたば「・・・ねえアルフ、なのはさん達どうしたの？」

ふたばがなのは達のなかで唯一まともそうなアルフに話を聞いた。

アルフ「ん、ああ、実は昨日、フェイト達がアリサの家でやったケーキの食べ比べから帰ってきてからずーっとこんな感じなんだ。」

ピティ（な・・・なにがあったんだろっね？ねえ聖時、聞いてみてよ。）

聖時「（ん？ああ）あの～なにかあったんですか？」

聖時は先ほどからぶつぶつ言っているはやてに話を聞いてみた。

はやて「ん？ああ、聖時か・・・いやな、昨日の放課後、アリサちゃん家でケーキの食べ比べをする事になったんやけど、アリサちゃん家に行く途中で夕立にあっつてずぶぬれになっちゃたんや、で、塗れたままだと風邪引くし、体も冷えてたもんやからアリサちゃんがお風呂で温まったたほうがいいと言ってくれたんや。でお風呂に入る事になったんやけど、アリサちゃん家のお風呂って結構広いからみんなと一緒に入ろうって事になったんや。で、その時、聖時が前にくれたピンク色の入浴剤を入れたんや。」

聖時「え？僕があげた入浴剤を？」

はやて「そうや。たしか名前が「とろとろむらむら」って変な名前のやつや。」

聖時「（えつくとたしか・・・ああそうだ。前に別荘で調べた入浴剤をなのはさん達にあげたやつだな・・・（第9話参照））で、その後どうしたんですか？」

はやて「そのあとみなでお風呂に入ったんやけど・・・その後・・・変な気分になって・・・う、うううううう」

聖時「え？はやてさん？」

はやて「なあ聖時、あの入浴剤・・・なんか変な効果でもあるんじゃないか？」

聖時「へんな効果？うん・・・そうだ！」

聖時はニューロマンシーの能力で自分の記憶の検索をするためにピ

ティに念話で話しかける。

聖時一（ピティ！記憶の検索お願い。検索するのは〇月×日の記憶で、キーワードは入浴剤、レシピ、とろとろむらむらで。）

ピティ（了解。検索中・・・・・・・・・・ヒット。ヒット件数は3件）

聖時（それじゃあその中の一番最初の物を出して。）

ピティ（了解）

聖時の脳内に検索で出てきたそのときの記憶の映像が現れる。

聖時（ピティ、レシピの書いてあるメモ部分で一旦停止。）

ピティ（了解）

記憶の映像がビデオの停止ボタンで止まっているみたいに止まる。

聖時（え〜っとレシピには・・・・・・・・あれ？こんな端っこに注意書き？内容は・・・・・・・・注意、この入浴剤には媚薬効果があります。これを入れたお風呂に入ると、顔が火照り、体がむらむらしますのでこれを使用するときは必ず一人で入ってください。もし複数の人と一緒に入ったなら貞操の無事は保障できません・・・・・・・・って、なんだこれ！）

ピティ（うわ〜媚薬効果って）

聖時（な・・・なるほどね・・・・・・・・これに書いてある事が本当なら、

はやてさん達がお風呂に入った後どうなったかはある程度想像できるね……)

ピテイ(だね……どうしようか?)

聖時(……黙ってよう……これの効果の事を知られたら……僕、なのはさん達に殺される……)

ピテイ(……だね。)

はやて「聖時?」

聖時「あ、ごめん。ぼくとした。え〜と入浴剤の効果だけど、多分変な効果はなかったと思うよ。」

はやて「……そうか。」

聖時「うん。(はやてさん……今回の事で同性主義者だと思ってショックを受けたみたいだな……なんか気の毒な事をしたな〜)

伊達「同性だろうが異性だろうが、そこに愛があれば関係ないよ。そうでしょ聖時君?」

スリスリ (聖時に抱きつき頬ズリをする音)

聖時「いきなり出てきて勝手に人の心を読むな!それと……」

バキッ! (伊達を殴り倒す音)

キラ

聖時「まったく朝っぱらから余計な体力を使わせるなよ」

聖時は肩を落としながら力がない声でしゃべった。

刹那「あの……さっきの人は？」

聖時「気にしないでいいよ。ただの幻影だから。」

刹那「げ……幻影って……」

アルフ「いつもの事だから気にしない方がいいよ」

刹那「は……はあ……」

刹那はそう返事をしながら前を歩いている聖時たちに追いつくようにして足を速めた。

*

聖遼に行く為の電車の中。

聖時達は途中で合流したアキと念話で話しながら電車に揺られてた。

刹那一（あ、そうだ。聖時さん、実は昨夜、聖時さん達から事件の調査の進展について聞いた時に気になった事があるんですけど・・・）

聖時一（気になった事？）

刹那一（はい、聖時さん達はふたばさんが見た才人さんを襲撃した人物を今まで探していたんですよ？）

聖時一（うん。けど今日まで依然手がかりはナシ。なのに犠牲者は才人が倒れてからも出ているんだ。犯人はどうやって僕達の目をかいくぐってるんだろう。）

聖時達は学園内外共に襲撃犯の緑髪の女の子を連日探していた。しかし犯人探しや聞き込みを連日やっているのにも関わらず、意識不明者は才人が倒れた後にも出てきているのである。しかも襲撃された時間帯は聖時たちが犯人探しや聞き込みをやっている時間帯なのである。にもかかわらず聖時達は犯人を見つける事が出来ないばかりか、犯人の情報も掴めていない状態なのである。

刹那一（聖時さん、私思っただんですけど、ひょっとして犯人は複数いるんじゃないんですか？）

ふたば（え？複数？）

刹那（ええ、聖時さん達は連日才人さんを襲った犯人を捜して
ましたよね？）

聖時一（うん。）

刹那（けど連日の犯人探しでは見つからなかった。そうですね。）

アキ（ええ。）

刹那（犯人はふたばさんに顔を見られてます。そんな犯人がわざわざ
ざぼとぼりが冷める前に行動を起こすでしょうか？私だったらしば
らくは時間を置くか、もしくは……別の人を使います。）

聖時一（え?!別の人?!)

刹那（はい、聖時さんたちが犯人を捕まえられないのはその犯人が
すでに行動していなくて、変わりに別の犯人が動いてるんじゃない
んですか?」

ピティ（なるほど……それなら私たちが襲撃した時間帯にいても
犯人を見つけられなかったのは納得いくね。）

聖時一（しかしそうなると犯人探しの手掛かりがなくなるな……
・）

刹那（そのことなんですが、実は昨日、私はそれらしい人物を見て
いるんです。）

聖時一（え?それホント?!)

刹那（はい、昨日の帰り、中庭で高等部の制服を着た男女が居たんです。それ自体は特に変わったことではないのでそのまま立ち去ろうとしたのです。そして次の瞬間、男子生徒の方が突然倒れたのです。）

ふたば（倒れた？）

刹那（はい、そしてそのまま女子生徒の方はそのまま何事もなかったかのように立ち去りました。そしてしばらくしてから、男子生徒の方は何事もなかったかのように立ち上がって歩いてその場をたし去りました。）

聖時（うーん、確かにその女子生徒は怪しいね。）

アキ（けどその男子生徒は何事もなかったように立ち上がって立ち去ったんでしょ？なら襲撃犯とは関係ないかもしれないよ？）

聖時一（そうかもしれないけどそうじゃないかもしれない。いきなりは犯人扱いは出来ない……）

ふたば（いずれにしても判断材料が少ないから判断のしようがないね。）

刹那（ならもう一人の目撃者に聞いてみたらどうです。）

聖時（もう一人目撃者がいるの？）

刹那（はい、たしか高等部男子の制服を着ていたから高等部男子生徒だと思えます）

聖時（ならその人に話を聞いてみよう。刹那はその人の顔を覚えてるよね？）

刹那（はい。）

聖時（なら今日の昼休み高等部に行つてその人に話を聞いてみよう。）

ふたば（うん、そうだね。あ、そろそろ着くよ。）

話し込んでいた聖時たちの頭上から車内アナウンスで次の駅の名前が出てくる。

聖時「じゃあ話はここまでにしよう。乗り過ぎたら大変だから。」

アキ「そうだね遅刻確定になっちゃうしね。」

そう話ながら聖時達は降りる準備をし始めた。

*

ここは高等部にある河瀬裕也の教室。

担任「瑞穂……よし、今日も全員居るな。」

朝のホームルームで担任がいつものように出席を取った後、そのまま出席簿を閉じた。

裕也はそんな担任の声を聞きながら昨日の放課後に起きたことについて考えていた。

裕也（香野……彼女は一体……）

そんな風に考えている裕也を他所に担任は話を続けた。

担任「よし、じゃあここでみんなにお知らせだ。先生も急に聞いたんだが、どうやらウチのクラスに転校生が来るらしいぞ。」

生徒たち「ざわざわ……」

担任「しかも驚け、来週の月曜からだ！まーオレが一番驚いているんだがな」

夏原修一「はい、先生！」

担任「なんだ夏原。来るのは女子だぞ」

修一「聞いてないっすよ。でももう質問も無いです」

生徒たち「あははっ」

担任「まー、その他のステータスは、来てからの楽しみだ。先生もまだ会ったことは無いから、どんな生徒かは知らん。ただ頭はいいぞ」

生徒たち「ざわざわ」

担任「と、今日はそんなところだな。連絡事項は以上だ」

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り担任が教室を出て行く。

それと同時に修一が裕也に近づいてきた。

修一「転校生、だってよ」

裕也「物好きも居るもんだなあ。」

修一「なんだよ、物好きって?」

裕也は意識不明事件が起きている最中だっと言おうとしたが明るい雰囲気の水を差したくないのであわてて話を変えた。

裕也「あ・・・いや別に・・・」

修一「?」

裕也は自分の顔を見る修一の顔を見た。

昨日倒れた所を見たがこの様子ではどうやら大丈夫そうだと思った。

修一「どうしたんだよ。俺の顔なんてジロジロ見て」

裕也「いや、なんでもない」

そんな風に話していると辺りにチャイムが鳴り響いた。

キンコーンカーンコーン

修一「お、チャイムだ。そんじゃまた後な。」

そう言いながら修一はそそくさと自分の席に戻って行った。

そして昼休み。

修一「なあ、今日の放課後、香野に紹介してやるよ。」

裕也「なに!？」

修一「会ってみたいんだろ?」

裕也「あ、いや、そう言うんじゃない……」

修一「そう言うんじゃないなくても会ってみない事には始まらないだろ
う?」

裕也「……………」

裕也は確かにその通りだと思った。昨日のことをどうも考えよ
りもまずは会って確かめればいいのだと思った。

修一は良からぬ誤解をしているみたいだったが、そこは渡りに船だと思った。

裕也「じゃあ頼むぜ。」

修一「まかしとけて!」

修一はガッツポーズをしながら言った。

修一「じゃあ今日の放課後、校門のへんで待ち伏せしようぜ」

裕也「待ち伏せ……か……」

修一「なんだ? いやなのか? だったらいつそ教室に乱入でもするか?」

裕也「いや……いい。待ち伏せで。」

修一「なら決まりだな。コーヒー3杯な。」

裕也「あ、ああ。」

裕也はそう返事をしながら香野に会って何を聞けば良いのかを考えていたすると、教室の外から聞きなれた声が聞こえてきた。

アキ「裕也さん!」

声のした方を見ると、そこには自分にイトコのアキとその友人らしき人物が数人回りに居た。

*

時間は少しさかのぼり、時間は昼休みが始まったばかりの中等部の聖時の教室。

そこで聖時は昼食を食べながら刹那の言っていた目撃者を探す方法を話し合っていた。

ふたば「やっぱり高等部の校舎に行つて、刹那に探してもらつ以外ないよね。」

聖時「……いやそれ以外でも方法はあるよ。」

アルフ「え？それって……」

聖時「うん、僕が刹那にニューロマンシーを使って刹那の記憶を見た後、似顔絵を書いてみんなで探すつて方法だよ。」

アルフ「なるほど。ふたばにした時の方法を今度は刹那に試すんだね。」

聖時「うん。」

刹那「あの、ニューロマンシーとは昨日の別荘での模擬戦の後、情

報交換をした時に話した人の記憶を見る事が出来る能力ですよね？」

聖時「うん。あ、大丈夫。必要なところしか見ないようにするからそこは安心して。」

刹那「あ、はい。」

聖時「じゃあ、食事をした後、早速刹那に接続してみるよ。」

刹那「あ、はい。」

そう言いながら聖時達は食事続けた。

その後、食事を終えた聖時達は、中等部の校舎の屋上に行った。刹那に接続する為に。

聖時「じゃあ、始めるよ。」

刹那「はい。」

今、屋上で聖時の目の前に向かい合うような形で刹那が立っている。

聖時「じゃあ、まずは体から力を抜いて、気持ちを楽しんで。」

刹那「は、はい。」

聖時に言われて刹那は体から力を抜いて、気持ちを落ち着かせた。

聖時「じゃあ行くよ。ピティー！」

ピティ「準備OKだよ。」

聖時「それじゃあ……」

そう言いながら、聖時は刹那の肩に手を当てて、瞳を覗き込んだ。

聖時「コネクト接続」

聖時がそう言うと世界が一変してニューロマンシーを使う世界に変わる。

聖時「それじゃあ、まず最初に刹那。目撃した時間帯、もしくはそれを目撃した時に感じたキーワードの様なものはないかな？」

刹那「キーワードですか……そうだ、確かあの時、腕時計で時間を確認した直後にそれを見たはずですよ。」

聖時「その時間は？」

刹那「確か……五時ごろだったと……」

聖時「わかった。それじゃあピティ。昨日の放課後の記憶の検索をして。キーワードは腕時計で時間は五時ごろの物。」

ピティ「了解。検索中……」

ピティが刹那の記憶の中からキーワードに当てはまる物を探し出す。

ピティ「検索1件ヒット。」

聖時「それじゃあその時の記憶を出して。」

ピティ「了解。」

ピティがそう言うと、次の瞬間、聖時の目の前に刹那の記憶が表示される。

それは刹那が腕時計で時間を確認している所から始まる物だった。その記憶の中の刹那は、腕時計で時間を確認すると校舎の下駄箱で靴に履き替えて校舎を出て行く。その時、中庭の方を見るとそこで高等部の制服を着た男女が向い合って立っていた。それを少し離れた所で別の高等部の男子生徒がそれを見ていた。

刹那「この人です。この離れてみている人が目撃者です。」

聖時「え?!」

聖時はその人を見て驚いた。

刹那「?.....聖時さん?」

聖時「この人は.....」

刹那「知っているんですか?」

聖時「ああ、河瀬裕也先輩.....アキのイトコだ。」

刹那「え?!」

刹那は聖時の言った事に驚く。

聖時「まさか目撃者が河瀬先輩だったなんてな……」

ピティ「ホント、驚きだよ。」

そんな風に言いながら、聖時達は流れている刹那の記憶を見る。

記憶は向かい合っている男女のうち、男の方が突然倒れる。

女の方は倒れた男の方を見向きもせず、見ていた裕也の方に歩き出す。

その時何か裕也につぶやくと、そのままその場を離れて行き、倒れた男はその後、何事もなかったかの用に立ち上がり、裕也の方に向かって歩き出す。

そこで記憶の映像は途切れる。

聖時「……………これが刹那が言っていた事……………」

刹那「……………はい。」

ピティ「確かにコレは怪しいね。もしかしたらこの子が犯人？」

聖時「まだこれだけではわからないよ。けど一度このことに関して裕也さんに話を聞いてみないと。」

ピティ「そうだね。」

聖時「それじゃあピティ。接続をカットして。」

ピティ「了解。」

そう言うと聖時達を取り囲んでいた物が無くなり、元に戻っていく。

ふたば「……………どうだった？」

アルフ「ちゃんと顔は覚えてきたよな」

アキ「それじゃあさっそく似顔絵を……………」

アキが聖時に似顔絵か書いてもらおうと、スケッチブックとエンピツを取り出そうとしたが、それを聖時が止めた。

聖時「いや、いいよ。その必要はないから。」

アキ「え？」

アルフ「必要ないって一体……………」

ふたば「どういづことなの？」

聖時「……………知り合いだったから。」

《つづく》

第31話 SE（中篇）（前書き）

どうも。剣 流星です。

今まで、ちゃんと説明してませんでしたけど、河瀬裕也の100%
ウソを見破る能力の表現の仕方ですけど、原作ではウソの部分の文
字に色が付いてましたが、この話ではウソの部分を《》で囲むよう
にしています。

では第31話どうぞ。

第31話 SE（中篇）

第31話 SE（中篇）

聖遼学園中等部校舎屋上。

今ここで、聖時達はアキの従兄弟の河瀬裕也に対して聞き込みをしていた。

聞いている事はもちろん、昨日、刹那が見た事についてである。

聖時達は自分たちが意識不明事件の犠牲者になった才人のために、意識不明事件の犯人を捜していると言う事情を話してから、裕也と話していた。無論、事情を話した時は魔法等に関しては触れないようにして話した。そして裕也も、自分が最近デジャブウを感じたり、猫の幻を見たりした事など、さらに友人から自分が香野の事を聞かれたと言う、自分にない記憶の事を言われるなど、不思議な事が続いた。そんな時、昨日の図書室で香野由香に出会った。そしてその放課後に例の出来事を目撃したと言う。

聖時「……………じんのゆか香野由香。」

裕也「…ああ。俺は彼女の事を知らないし、会った事も無い。だが、なぜか周りの奴は俺が香野の事を聞いてきたと言うし、直接本人に会うと、とてつもないデジャブウを感じるんだ。」

アキ「そうだったの。」

刹那「で、そんな矢先、昨日の放課後に例の事をあなたも目撃した

んですね?」

河瀬「ああ。」

聖時「……………」

刹那「?聖時さん?」

刹那は話を聞いた後から考え込んでいる聖時に声をかけた。すると側に居るピティがその場に居る全員(裕也を除く)に聞こえるように、念話で聖時に話しかけた。

ピティ(ねえ聖時。これってやっぱり……………)

聖時(ああ、これはまず間違いなく記憶をいじられてるね。)

アルフ(記憶をいじる?そんなバカな事が……………)

刹那(……………いえ、ありえるかもしれません。確か聖時さんが使ったニューロマンシーならそれも可能なんですよ?)

聖時(……………うん。確かに可能だね。しかしそうになると、香野って人は僕と同じニューロマンシーなのかもしれない)

ピティ(だね。)

ふたば(ねえ、香野さんはどうして裕也さんの記憶をいじったりしたんだろ?)

アルフ(そりゃあ、自分に都合が悪い所を見られたか、聞かれたか

したんだろっ?)

刹那 (そう考えるのが妥当ですね)

ふたば (じゃあ、裕也さんにニューロマンシーを使ってその消された記憶を見るって事は出来ないかな?)

聖時一 (?!)

アキ (無理なんじゃないかな)

ふたば (どうして?)

アキ (だってその記憶、消されたんでしょ。消された物を見る事は出来ないでしょう?)

ふたば (た・たしかに)

聖時 (いや……見る事は出来るかもしれない)

アキ (え、本当?!)

聖時 (うん、記憶の完全な消去で本当は出来ないんだ。ニューロマンシーでの記憶の消去って言うのは、記憶を思い出させないようにする事なんだ)

刹那 (そうなんですか?じゃあ……)

聖時一 (うん、もしかしたら記憶を見る事が出来るかもしれない)

アルフ（じゃあ、さっそく裕也に接続してみなよ）

聖時一（うん、けど……あんまり気は進まないな。勝手に他人の記憶を覗くのは……）

ふたば（じゃあ、裕也さんに催眠術で、あなたの失った記憶を呼び起こす事が出来るって言うて接続させてもらえばいいじゃない）

聖時一（そうだね。それしかないか……）

聖時はそう念話でいいながら裕也に顔を向けた。

先ほどまでの念話を聞くことができないう裕也は、急に黙り込んだ聖時達を訝しげに見ていた。

そんな裕也に、聖時はふたばが提示した話を切り出した。

聖時「あの裕也さん」

裕也「な……なんだ？」

聖時「裕也さんが感じるデジャブウや、周りの人が言っていた自分がない記憶のことを話す事の原因がわかりました。」

裕也「ほ……本当か？」

聖時「はい。原因はあなたの記憶がいじられているからなんです。」

裕也「い……いじられているだつて?!」

聖時「はい。おそらく裕也さんは催眠術似た物で、その記憶を封じた者にとって都合が悪い記憶を消されたんだと思います。で、つき

ましては、その失った記憶を僕が呼び起こそうと思います。」

裕也「呼び起こすって……そんな事が可能なのか？」

聖時「はい。実は僕もその催眠術のような物を使えるんです。ですから、封じられた記憶ももしかしたら僕なら呼び起こせると思っています。」

裕也「そうなのか。」

聖時「はい。で、どうします？呼び起こして差し上げましょうか？」

裕也「うん……。」

裕也はしばらく、空を眺めながら考え込んだ。が、やがて聖時の方に顔を向けて返事をした。

裕也「……呼び起こしてくれ。やっぱり自分でも思い出せない記憶があるのは、はつきり言って気持ち悪い。だから頼む。」

聖時「わかりました。では……。」

そう言つて、聖時は裕也の肩に手を置いて、裕也の瞳を見て魔力を解放した。

ピテイ（視界確保。ライン繋がったよ。合言葉を）

聖時「接続」

聖時が接続に必要な合言葉を言った瞬間、裕也の体がビクン！とは

ね、世界が一変する。

聖時「さて……まずは記憶の検索を……」

そう言いながら聖時は記憶の検索をしようとした。が、それを遮るようにある者の声が響いた。

裕也「な……なんだこれ……この前、星原さんにされたの似た感じだ……」

聖時「へ?!裕也さん?!意識を失わなかったんですか?!普通接続された瞬間、接続された者は意識を失う……接続された瞬間に意識を失わないのは、ニューロマンシーの能力を持った者だけのはず……」

聖時は星原百合から受け取った知識から接続された瞬間に意識を失わない者の知識を抜き出して言った。

???「ようやくオレ様の出番だな」

すると突然、聖時たちの耳に聞き慣れない声が聞こえてきた。

ピテイ「え?!」

裕也「な……なんだ?!」

聖時「く……黒猫?!」

聖時達は声のした方に顔を向けると、そこには黒猫がいた。

ピティ「な……なによあんた！接続中は接続された者と接続した者、それと接続した者のエルフィンしか居ないはずよ！」

聖時「ま……まさか……裕也さんのエルフィン?!」

聖時は黒猫を見た瞬間、様々な可能性を上げて、一番可能性が大きい理由を上げた。

それは裕也も聖時と同じニューロマンシーだという事だ。

これならば、先ほど接続の瞬間、裕也が意識を失わなかった理由にも繋がる。聖時は思った。

黒猫「エルフィン？オレはそんな変な名前物じゃないぜ。オレはそこに居る河瀬裕也のCAアシスタントのトラブルタツて言うんだ。」

ピティ「アシスタント？」

聖時「アシスタントって……つまり裕也さんのサポートをするんだよね？」

トラブルタ「おうよ。」

聖時「じゃあ一体何のサポートをするの？」

トラブルタ「決まっているだろう？SEだよ。」

聖時「SE？」

トラブルタ「シナプス・エンジニアリングを略してSE。人間の脳をコンピューターに見立てて、それを操る能力の事だ。お前が今使っているこの能力だよ。」

聖時「え？これはニューロマンシーって言う能力だよ。」

トラボルタ「呼び方なんてどうでもいいんだよ。ようはお前のこの能力と同じ能力がコイツにもあるって事さ。」

聖時「は・・・はあ」

聖時は気の抜けた返事をした。

裕也「お・・・おい！オレを置いてけぼりにして話を進めるなよ！一体なんなんだよこれは！？さっきの会話でこの黒猫がオレのサポーターみたいな物だって事は分かった。けどそれだけじゃあ分からない事が多い！全部話してくれ！」

裕也は声を荒げて言い放った。

ピティ「聖時・・・」

聖時「・・・わかりました。けどそれを知ったらあなたも無関係とはいきませんよ？それでもいいですか？」

裕也「すでにもう無関係じゃなくなっている！」

聖時「・・・わかりました。すべて話します。」

こうして聖時はすべてを話した。それは意識不明事件の事ばかりではなく、聖時たちが何者なのかという事も含めて話した。

裕也「・・・魔力・・・魔法か・・・」

聖時「?あんまり驚きませんね?」

裕也「今日まで色々な不思議体験をしてきたからな……感覚が少し麻痺してるせいかもしれない。」

聖時「そう……ですか……では、今度はこっちの番ですね……裕也さん……これは一体なんですか?」

聖時はトラボルタと名乗る黒猫を指しながら裕也に聞いた。

トラボルタ「あくムダムダ。コイツ、記憶消されてるから何も知らないぜ」

ピティ「消されてる?!」

聖時「……やっぱり。で、そうになると必然的に誰がこの記憶を消去したかってことになるね。」

トラボルタ「犯人なら知ってるぜ。犯人は香野由香っていう娘っ子だけ。」

裕也「な!」

聖時「香野由香……先輩。」

ピティ「へへ、あんたよく知ってるね。」

トラボルタ「由香って子はコイツの記憶だけをいじったからな。オレが情報を引き出す事に関してはなんの処置もしなかったからな」

聖時「なるほど。」

裕也「で、なんでオレは記憶をいじられる事になったんだ？」

トラボルタ「それは昨日の放課後に見た事と同じような事を見たからだよ。」

裕也「な……なんだって!？」

聖時「裕也さんは前にも似たような事を見たんですね」

トラボルタ「そう言うこつた。で、前に記憶をいじられた時にお前のウソを見破る能力に気がついて、あの娘っ子はその能力を自分には効かないようにする為に、お前にS Eの能力を授けたんだ。そうしないと能力の操作が出来なかつたらしい」

聖時「……なるほど。」

裕也「そつい訳だつたんだな。それじゃあ、あいつの言つた言葉の中にはウソも多く含まれてた訳か……」

聖時「……ピティ。記憶の解放と能力に付加されている制限を解くことが出来ないかな？」

ピティ「うん、実はさつきスキャンした時に分かつただけけど、この制限、とても強力で、今の私たちでは解くことは出来ないよ……」

聖時「そつか……」

裕也「じゃあ、制限を設けた本人に言っただirect解いてもらおうぜ？」

聖時「え？」

裕也「聖時。オレにも協力させてもらえないか？実は俺も去年の意識不明事件の被害書なんだ。それに、今現在の最大の手がかりは、香野だ。コイツにはオレの記憶の事についても関係あるしな」

聖時「裕也さん……ありがとうございます！」

裕也「良いつて。これはオレの事でもあるし、何よりかわいいイトコが困ってるからな。」

聖時「はい。あ、じゃあそうになると、この能力の扱い方について説明しなきゃならないね。」

ピティ「そうだね。けどそんなめんどくさい事ライブラリしなくても、あんたがこの能力を覚醒してもらった時ライブラリみたい知識をコピーして渡せばいいんじゃない？」

聖時「あ、そうか。じゃあピティ、あの時渡して貰った知識ライブラリをコピーして裕也さんに渡して」

ピティ「了解 実行中」

トラブルタ「お、おい。オレにも仕事を……」

ピティ「あんたは黙ってて！」

トラブルタ「チィ、また仕事ナシかよ。」

ピティ「・・・・・・・・・・・・・・・・終了」

聖時「これで良し。どうですか？」

裕也「どうって・・・・・・・・あ！わかるぞ。能力の使用方法がわかる。」

聖時「よかった。ただ、それはあくまでニューロマンシーの使い方です。僕のカンだと裕也さんが使うSEはニューロマンシーと何処か違うような感じがしますので、その違いの所は自分で実際に能力を使って比べて見つけてください。」

裕也「わかった。」

聖時「それじゃあピティ、接続を終了させて。」

ピティ「了解 終了します」

ピティが言うと同時に周りが元に戻った。

戻った回りを見て、周りに居たふたば達に目を向けた。

ふたば「どうだった？」

聖時「ああ、実は・・・・・・・・」

聖時は接続中に話した事をふたば達に話した。

アキ「それじゃあ裕也さんも協力してくれるの？」

裕也「ああ。ま、かわいいイトコが困ってるし、何よりオレも無関係じゃあないからな。」

アキ「ありがとう。」

裕也「良いって。で、これからはどうするんだ？」

刹那「やはりその香野由香と言う人物が今の所怪しいですね。」

アルフ「あたしもそう思うよ。」

聖時「やっぱりその、香野由香って人に一度会ってみなきゃならぬいね。」

裕也「だったら今日の放課後なんてどうだ？今日の放課後、オレの友と一緒に校門の所で待ち伏せる事になってるんだ。」

聖時「そうなんですか？じゃあそれでいきましょう。」

裕也「よし。じゃあ今日の放課後に、校門前で。」

アキ「ええ。校門前で。」

そう言った後、チャイムが辺りに響いた。

聖時たちはチャイムの音に反応し、それぞれの教室に向かうために屋上を後にした。

*

放課後の校門前。

そのに聖時達と裕也。そして裕也の友人の夏原修一が居た。

修一「……………なあ、なんでお前のイトコとその友達がここにいるんだ？」

修一は聖時たちを見て裕也に聖時達の事を聞いてきた。

裕也「え……………え」と、その、実は放課後、こいつ等と一緒に遊び

にいく約束をされていてさ、それで……」

修一「それでって、お前なく」

裕也「そんな事より、ほら、香野だ。」

裕也は修一に目で校門の方を指した。

そこには一人でカバンを持って校門を出ようとしている香野由香がいた。

修一「よお、香野」

修一は片手を上げながら香野に近づいて挨拶をした。

由香「よお修ちゃん、と、河瀬くん」

裕也「よ、よお」

由香は笑顔で二人に挨拶をした。

聖時と刹那はそれを見て唾然とした。

二人は昨日の放課後の香野由香を見ている。その香野由香は冷たいような感じのする子だったので、今日の前で笑顔で挨拶をするのがとても信じられなかったのである。

由香「あれ？後ろの子達は……」

由香は裕也の後ろに居る聖時達を見て言う。

裕也「……オレのイトコのアキとその友達だ。」

アキ「藤宮アキです。」

聖時「神谷聖時です。」

ふたば「渡良瀬ふたばです。」

アルフ「アルフ・ハラオンだよ。」

刹那「桜咲刹那です。」

由香「その制服、中等部の子達だね。どうも始めまして。香野由香です。」

由香はお辞儀をして挨拶をした。

由香「それにしても……」

由香は裕也と修一の二人を見た。

由香「二人は友達だったんだ。どおりで……」

裕也「なに？」

由香「んーん」

由香は笑顔で首を横に振った。

裕也「どおりで、なんだよ？」

裕也は少しすごんだ声で言った。

由香「えっと、雰囲気似てるなって……」

修一「おい、裕也！わりいな香野、こいつ何か緊張してるんだ」

由香「何で？お腹でも痛いの？」

裕也「あ、いや、ちょっとイヤな事があったさ、ごめんごめん」

裕也が由香にあやまっていると、後ろからこっそりと小声で聖時が裕也に注意する。

聖時一（裕也さん。気持ちはわかりますが、そんな態度じゃあ怪しまれますよ？もっと自然体に！）

裕也（わかってる……）

そんな風に聖時たちが小声で話していると修一がしゃべりだした。

修一「てかお前ら知り合いだったのかよ。だったら話は早いや」

由香「知り合いって程でも……ねえ」

裕也「あ、ああ……」

修一「これから仲良くなればいいだろっ」

由香「うん、由香もそう思ってた。」

修一「おお、ほんと話が早くて助かるぜ。裕也も香野と友達になり
たいってさ」

由香「そっかー、やったー！」

笑顔で喜ぶ由香。

裕也「よろしくな、香野……さん」

由香「由香でいいよー」

裕也「ゆ……か、ちゃん」

由香「うん アキちゃん達もよろしくねー」

アキ「え?!あ……はい。よろしくお願いします」

聖時達「」「」「よろしくお願いします。」「」「」

由香「うん」

修一「なんだよ、付き合いの長いオレは苗字で呼んでるってのに」

由香「修ちゃんも由香ちゃんって呼べー」

修一「おう、由香ちゃん!」

由香「素直でよろしいー。素直が一番だよ」

修一「さてと、オレは急用があるから帰るが、お前らはもう少し話

していくか？」

由香「うん。由香も帰る。じゃーね、修ちゃん、河瀬くん。アキちゃん達。またお話しようね。」

香野は胸の前で控えめに手を振って駆け出して行った。

修一「んじゃあオレも帰るからな。お前らはこれから一緒に遊びに行くんだっけ？」

裕也「あ、ああ。」

修一「そっか。んじゃなー。裕也、がんばれよ。」

そう言いながら、修一も駆けて帰って行った。

裕也「……………どう思う？」

裕也は聖時たちに話を振った。

刹那「……………昨日の放課後に出会った時とはまるで雰囲気がちがいます……………まるで別の人みたいです。」

聖時「うん……………」

アルフ「こりゃあ……………かなりの猫被りだね……………」

ふたば「うまく尻尾を掴めればいいんですけどね。」

そう言いながら聖時達は、裕也に自分たちが集まって情報を交換す

る場所である神谷家にある聖時の別荘へ案内する為に神谷家へと向
かった。

《つづく》

第32話 SE（後編）（前書き）

どうも剣 流星です。

今回のおまけコーナーではアスミタ達のキャラが壊れまくっています。

ファンの方々すみません。

では第32話をどうぞ。

第32話 SE（後編）

第32話 SE（後編）

聖時達が校門で、裕也の友人の夏原修一から香野由香を紹介してもらった日の翌朝。

聖遼への通学路を一人で歩きながら裕也は昨日の事を思い出していた。

裕也は修一から由香を紹介してもらった後、聖時達の別荘に招待され、その時に士郎や猛たちの事を紹介してもらった。その時、別荘の事に関しても説明を受け、必要な時には好きにここを使っても良いと言われた。

裕也一（……別荘内では1日が外では1時間だなんて、便利でいいな……）

トラブルタ（その分、一日分早く老けるけどな。）

不意に自分の頭の中に声が響く。裕也のCAのトラブルタである。

裕也一（……ハア、お前、朝から元気だな。）

裕也は自分のCAを見てウンザリした様な顔をした。

このトラブルタ、実はとてもおしゃべりで、CAの音声をOFFにしていないと延々と話し続けるのである。昨夜もあまりの煩さに寝られず、ついには切れて音声をOFFにして寝たのである。

トラブルター（ん？どうした。疲れた顔をして。もしかして悩み事か？やめとけやめとけ、大して入っていない頭で考えたってムダムダ……）

裕也はトラブルタのお喋りのせいで寝不足気味だったのだが、そんな裕也の状態など知らずにトラブルタは裕也に話しかける。

トラブルタ（大体な〜）

裕也はそんなトラブルタを見て、ついに切れて大声を上げる。と、そんなタイミングで誰かが裕也に声をかける。

「???」おはよー！

裕也「うるせーってばー！」

由香「……………」ごじやいます

裕也「ん、あ……………」

声をかけられた方を見ると、そこには昨日会った香野由香が申し訳なさそうな顔で立っていた。

由香「ごめんね、背後から突然。考え事でもしてた？」

裕也「あ、いや……………」えと、別人と間違えたんだ、ごめんよ。それで、おっす

由香「そっかー。それで、おっす。別人て誰かな？ふふ、彼女？」

いたずらっぽく笑う由香。

そんな由香を見て、裕也は一昨日の放課後に見た由香を思い出した。あの時の由香と、今日の前に居る由香。同じ人物であるはずなのに、こうして見比べてみると別人のようであると裕也は思い、つい口に出してしまった。

裕也「別人……だよな……」

由香「なになに、だれがだれが？」

おまえがだ！と指をさしたい衝動をなんとかおさえた裕也は、由香から視線を逸らしながら、なるべく冷静に言った。

裕也「いや……いいんだ。今はいいんだ」

由香「そっか、じゃあさ、今日の放課後にお話しませんか？」

裕也「……なに？」

由香「河瀬くんが知りたい事、教えてあげるよ」

裕也「！」

裕也は絶句し、数秒間固まった。

そんな裕也を見て、由香は裕也の心を見透かしているかのようになり、目を合わせて微笑んだ。

トラブルタ（……おい。）

裕也（ああ、わかってる。畏だっけ言うんだろっ？）

相手にどんな魂胆があるのかはわからないが、裕也はこれはチャンスだと思った。

裕也「（これはチャンスだな。香野の事を知る為の。幸い、香野は聖時達の力や存在を知らない。逆にこれを利用して香野の情報を引き出そう。）

トラボルタ「だな。のこのこ来た所を、あいつ等で囲っちゃえばこっちのもんだからな」

裕也「（ああ。）

裕也は頭の中でトラボルタと話し、由香の誘いをわざと受ける事にした。

裕也「……わかった。」

由香「じゃあ5時に中庭ね。楽しみにしてるー」

そう言っつて由香は裕也の肩をポイント叩いた後、ポケットの時計をチラリと見てそのまま行ってしまった。

裕也「……今日の昼休みに、聖時達と会わないとな。」

トラボルタ「……会うのはいいけどよ。お前、今日が土曜だっつて事忘れてないか？」

裕也「あ、そういえば今日は午前中で終わりだ！」

トラブルタ（5時までどう過ごすんだよ）

裕也「……………」

*

放課後、裕也は5時から由香に会うことを聖時達に伝える為に、中等部の聖時達の教室に来た。聖時達は授業の後も、聞き込みやらなにやらで学園に残ると昨日聞いたのでまだ学園内にいるはずだと思い、まず聖時達の教室へと足を運んだ。すると聖時達は、今から屋上で昼食を食べるところだと言い、裕也も一緒にどうだと誘ってきた。裕也は5時から由香に会うことを話すついでに一緒に昼食を食べてしまおうと思い、誘いを受けた。

そして今、屋上で聖時が作ったお弁当をアルフ達全員で食べていると事である。

アルフ「ん~~~~うまい!! 聖時、前よりさらに料理の腕を上げてないかい?」

ピティ「本当! 前よりも美味しくなってる!」

聖時「そう? 美味しくなってる?」

刹那「はい、とても美味しいです。」

アキ「うん、本当に。ねえふたば?」

ふたば「.....うん、本当に.....前以上に美味しくなってる.....」

アキ「あ! (あははは、前以上に聖時との料理の腕の差が開いて落ち込んで)」

ピティ(無理ないね。自分の好きな人が、自分よりも料理の腕が上なんだから.....)

アキ(しかもふたばは料理の腕には結構自信があつたみたいだからなおの事だね)

落ち込んでいるふたばの側で、二人が小声で話す。

アルフ「しかしさ、本当、ここ最近では料理の腕の上がり方のスピードが速いような気がするんだけどさ、これって一体.....」

聖時「ああそれ。実は最近、別荘での食事を作る時は士郎と料理の

腕比べをしながらやっているんだ。料理の腕の上達が早いのは多分そのせいだと思うよ。」

ふたば「……………へえー、聖時の料理の腕がここ最近急激に伸びたのは衛宮くんのせいなんだ。」（余計な事を！）

聖時「へ?!あ……………あのふたば?なんか瞳の色が単色になって怖いんですけど……………」

ピティ「な……………なんか背後に般若の面が浮かんでそんな雰囲気なんだけど……………」

アルフ「か……………顔は笑っているのに、目が笑っていない……………まるで魔王化したなのはみただよ……………」

なのは「誰が魔王ですか!?!」

アルフ「へ?!」

刹那「?どうしました?」

アルフ「い……………いや、今なのは声が聞こえたような気がして……………」

刹那「なのはさん?」(キョロキョロ)……………周りには私達以外の人は誰もいませんよ?」

アルフ「き……………きつと気のせいだよ。(気のせいだよ……………ねえ?）」

ふたば「うふふふふ、衛宮くんには後で“お話”をしないといけませんね〜」

聖時「な・・・なんでふたばがそのセリフを！」

アキ「ま・・・まさか、なのはさんの魔王化が移って・・・」

ピティ「お・・・おそろしい・・・」

裕也「・・・あゝみんな、そろそろ良いか？」

ふたばの魔王化？で混乱してきた場の空気を切り替えていい加減に香野の事を話そうと裕也が声をかけた。

聖時「あ、すいません。話があるんですけどよね？」

アキ「たしか今日の5時から例の香野由香さんと会って事の話ですよね？」

刹那「しかし、それは十中八九、相手側の罠なのでは？」

アルフ「たしかにね、けど、これは逆に相手の尻尾を掴むチャンスじゃないかい？」

裕也「確かに、オレも実はそう思っていたんだ。だから今日の放課後、香野と会う時に聖時達は回りに隠れて待機していて欲しいんだ。」

聖時「なるほど、僕らが回りに隠れて待機して、彼女が裕也さんに接続して動けなくなっている所をみんなで囲んでしまっつて事です」

か。」

裕也「ああ。」

刹那「なるほど。言い訳できない状況的証拠をつかみ、かつ身柄を拘束できるチャンスでもありますね。」

聖時「なら、今日の5時から裕也さんの手助けをして、香野由香さんの身柄の確保をするって事で。」

アルフ「ああ、それで行こう。」

刹那「それでは細かい指示やは、人員の配置などを決めましょう。」

聖時「ああ、そうだね。」

こうして聖時達は5時の待ち合わせの時間までを人員の配置やら何やらを決める話し合いで時間をつぶした。

*

日が傾き周りがオレンジ色になる時間帯でもある5時ごろの中庭。聖時達は話し合いで決めた場所に身を潜めながら、由香を待っている裕也を見ていた。

ふたば「・・・ねえ聖時。」

聖時「うん？」

聖時の側にいるふたばが聖時に小声で話しかけてきた。

ふたば「この前、香野先輩はもしかしたら犯人の一人かもしれないって話をしたよね」

聖時「うん」

ふたば「けど、私はそうは思わないんだ。」

ピティ「え？どうして？」

聖時の肩に止まっているピティが聞き返す。

ふたば「昨日の放課後、夏原先輩の紹介で会った時感じたんだ。もしかしたらこの人も今回の事件の被害者なのかもしれないって」

聖時「・・・・・・・・・・」

ピティ「どうしてそう思うの？」

ふたば「あの時・・・私は香野先輩を見て、顔ではニコニコいつも笑っているけど心の中では何時いつも一人ぼっちで・・・不安におびえて・・・それをたった一人で抱えている・・・そんな感じがしたの・・・まるで・・・小さい頃、入院生活でいつも一人ぼっちだった私みたいに・・・・・・・・」

聖時「ふたばもそう感じたんだ・・・」

ふたば「え？聖時も？」

聖時「うん。あの人は一人ぼっちで不安におびえ、心の中で誰かに助けを求めている・・・そんな感じを僕もあの時そう感じたんだ。あの笑顔がとても痛々しいように感じるくらい。」

ふたば「私・・・出来れば香野先輩も救ってあげたいって思うの。そのためには話して協力してもらおうように話したい。もし協力すれば、香野先輩の悩みを解決するのに協力も出来るし、香野先輩の力も得られるでしょ？」

ピティ「・・・たしかにそうだね。もしあの子が犯人か、犯人の協力者じゃなければそう言う方向に持っていくのもありだと思うよ。」

聖時「だな。ん？どうやら来たみたいだ。」

聖時が裕也がいる方向を見たので、ふたば達もつられてそちらを見た。

そこには待っている裕也に近づいてくる由香の姿が見えた。

聖時「（みんな、何かあったらいつでも飛び出せるようにしておいて）」

全員（了解！）

聖時は裕也の方を見ながら念話で全員に声をかけた。

《づづく》

おまけコーナー

ピ「さあ、はじまるザマスよー!!」

ビツ「いくでガンスー!!」

ユ「フンガ〜! って私に何をやらせるんですかー!!」

ピ「たまにはいいじゃないの。それに自分だってノリノリだったクセに……」

ユ「う……それは。」

ビツ「ま、いいじゃないですか。それよりも早く進めましょーうよ。」

ユ「そ・そつですね。」

ピ「それじゃあ改めて、ピティと」

ユ「ユニの」

二人「おまけコーナー」

ピ「はい、こんにちは。もしくはくんばんは。司会進行役のピティです。」

ユ「解説のユニです。」

ピ「アシスタントのビッキーです。」

ピ「さて、ネタが尽きてきた上に、この連日の40度近い暑さで参っている作者ですが、私たちがムチを入れて書かせている今日この頃です。」

ビ「なんか何気にひどいですね。」

ピ「いいのよ。これぐらい追い詰めなくちゃこのクサレ作者は動こうとしないんだから！」

ユ「あ、あははは……」

ピ「さてと、ではさっそく今回のゲスト召還行ってみよう」
コシヨ
ウパツパツと……」

ピッ「ハ・・・ハ・・・ツクシユン!!」

パッ!!

ピ「召還成功！さて今回は、アルトネリコ2から料理の腕はシヤマルクラスの巫女様の片割れの一人、ルカ・トゥルーリーワスに来てもらいました。」

ル「どうも！あの、所で私はここで一体何をしゃべればいいんですか？今までのゲストさんは、本編の話の内容に関係ある人が出てきてみたいけど、今回のお話には私が出ている作品の話のからみがありませんよ？」

ピ「え？なに言ってるの。前編の最初の方に、ルカが出てきている作品のアイテムが出てきてるじゃない。」

ル「え！それってもしかしてあ・・・」

ピ「そう！入浴剤の「とろとろむらむら」の事よ!!」

ル「え~~~~~!!アレの事についてですか!!だ・・・ダメです！アレについては、私もあまり良い思い出が無いんですから!!」

ピッ「いい思い出がない・・・ですか？それって一体なにが合ったんですか？」

ユ「あ、それはですね、昔、ルカさんがクローシェさんと一緒にデュアルストール・・・ま、簡単に言えばレーヴァタールがレベルアップするためのお風呂なんですけど、その時に「とろとろむらむら」を入れた時・・・」

ルカとクローシェの「とろとろむらむら」を入れたときの入浴風景の回想

ク「・・・マズイわね。」

ル「そ・・・そう？いい加減慣れたような気もするけど・・・」

ク「・・・だったら、どうして私の手を握ってるのよ？」

ル「あ、あれれ！？む、無意識に私・・・」

ク「今の状況で使うのは、ちょっと危険な入浴剤みたいね。」

ル「で、でも、普通に使うだけでも気持ちいいから、私は結構好きですよ。とろとろしてるから、なんて言うか・・・」

ク「完全におかしくなっているわ。ほら、しっかりしなさい。」

ル「で、でも、クローシェ様も段々こっちに近づいて来てるし・・・」

ク「そ、それは、えっと・・・。」

ル「・・・」

ク「・・・！？」

ク「ルカ、しっかりして!!このままじゃ冗談抜きで一線越えるわ!!」

ル「ま、まあ、それも悪くないような気が……」

ク「た、確かに、それも……って違う!!お湯足して薄めないと……」

ル「あ、うん!!……これ、ちょっと危険かも。」

ク「ちょっとじゃなくて、最高に素敵な……」

ル「え?」

ク「じゃなくて!!最高に危険な入浴剤よね!」

回想終了

ピ「……………うわ……」

ル「……………」

ビツ「え〜と……………これは……………」

ユ「……………効果を知っているルカさん達でさえこれですから、効果を知らずに入ったのはさん達は……………」

ピ「あ~~~~多分・・・」

ユ「ストップです！それ以上言ったらこの小説削除されますよ！」

ピ「そ・・・そうだね。ところでこれって最初に調合で作ったのってルカなんだよね？」

ル「え？あ・・・はい」

ピ「こんな入浴剤を作るなんて・・・大人だね」

ル「し・・・知りませんよ！私はただ、レシピ通りに調合しただけなんですから！」

ピ「まあまあ、それにしてもこの入浴剤・・・本当に危険な物ですね。」

ピ「だね。まっ、新しく作りでもしない限りなのは達が使った入浴剤が最後・・・あ！」

ル「？どうしたの？」

ピ「そういえば忘れてた！確かこの前、おまけコーナーに出てくれたマニゴールドに入浴剤の効果を知らずに渡したんだっけ」とるところむらむら」を！」

ユ二達「「え！！」「」「」

*

そのころのマニゴルド、達特務捜査課の聖闘士三人組
その三人が使っている寮の大浴場

ア「…………マニゴルドがもらって来た入浴剤を入れてみたのだが・
…………」

マ「なははは。アスマタ、お前どことなく女みtainな顔立ちしてる
な」

ア「…………近いぞマニゴルド。それになんで肩を組もうとする。」

ギョー（カルディアがアスマタの手を握る音）

ア「なぜ手を握ってくる…………カルディア。」

カ「フツ…………お前となら…………一線を越えても…………」

ア（ゾワゾワゾワ） 鳥肌が立つ音

ア「う…………うわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわわ
わわわわわわわっ!」

*

ル「？今叫び声のような物が聞こえてきませでしたか？」

ピ「き……気のせいだよ。」

ユ「え……ええ、きっと気のせいですね。」

ビツ「だといいんですけど……。」

ピ「と……とにかく今回はここまでにします。」

ユ「それではみなさん」

三人「……まっ たね」

ル「ごまかす為に、無理やり終わりにするなんて……まっ、
いつか」

ア「いいわけ有るか……！」

第33話 一人じゃない（前書き）

どうも、剣 流星です。

さて今回の話は説明メインの話です。

読みやすくまとめるのに苦労しました。
それでは第33話どうぞ。

第33話 一人じゃない

第33話 一人じゃない

由香「ごめん、待った？」

裕也「いや・・・全然。で、話って・・・？」

由香「その前に、そこに座らない？」

いつものようににっこりと微笑みながらそう言って、由香は側に有るベンチを指した。

裕也「あ、そうだな。んじゃ座ろうか」

そう言って裕也は座り、由香は自分が持ってきたカバンを裕也の隣に仕切り代わりのように置いた後、その隣に座った。

由香「ごめんね。こんなへんな時間に呼び出しちゃって」

裕也「いいけど・・・何か用？」

由香「もちろん、河瀬裕也くんに関することだよ」

裕也「オレに……?」

由香「うん、もちろん」

裕也「……」

由香「あ、そうだ、何か飲む?っていうか、河瀬くんって飲み物なにが好き?」

裕也「オレは……そうだな、紅茶が好きかな。」

由香「だよね!お茶と言ったら紅茶だよね。」

裕也「紅茶、好きなのか?」

由香「うん。じゃあちょうどいいね。実は紅茶を持ってきたんだ」

そう言いながら由香はカバンの中からステンレス製の水筒をだして、そのフタに中身を注ぎ、裕也に差し出した。どうやら中身はごく普通の紅茶で、爽やかな匂いが漂ってきた。まだ暖かいのか、湯気が立っていた。

由香「はい、どうぞ」

由香は笑顔でそれを差し出す。

裕也「え?」

由香「へんな時間に呼び出したんだもん、これぐらいはサービスしないかね」

裕也「飲んでいいのか？」

由香「もちろん」

裕也は少し警戒した。が、もし自分に何かあったら、すぐに周りにいる聖時達が駆けつけてくれると思えば受け取った。

裕也「それじゃあ遠慮なく」

そう言つて裕也は紅茶を一口飲んだ。

味は薄口だったがノンジュガーで、紅茶本来のかすかな甘さがあり、爽やかでとても美味しかった。

その美味しさもあつてか、裕也は残りの紅茶もすぐに飲み干してしまった。

裕也「・・・美味しいな」

由香「それならよかつた！」

裕也「結構なお手前でした」

そういいながら持っていた水筒のフタを由香に返す。

由香「いいえー、お粗末さまでした」

そう言つて由香はフタを受け取ると水筒にフタをしてカバンにしまった後、由香はしばらく黙り込むと、急に勢いよく立ち上がると、くるりと裕也の方を向いた。

由香「……ねえ、河瀬くんは由香の事をどう思ってるの？」

裕也「は、はあ?!」

聖時達一（は、はあ?!）

あまりの突然の質問で、裕也とそれを見ていた聖時達は念話と実声で八モってしまった。

アルフ（な……なんだい……この展開は？）

ピティ（ま……まさか……愛の告白?!）

アキ（え~~~~~!!）

聖時一（んなわけあるか!!）

周りで見ていた聖時達が念話でざわついているなか、裕也と由香の話は続いていく。

裕也「い……いや……か……かわいいと思っけどぞ……」

アルフ・ピティ（お~~~~~!!）

聖時一（静かにしろ!）

由香「ほんと?嬉しいな!」

裕也「でもなんていうか、ちょっと疑わしいって言うか……」

由香「それは由香じゃないんだよ」

裕也「どういう……こと?」

由香「今の由香と、その疑わしい由香、同じに見える?」

裕也「正直……見えない」

由香「由香のこと、気になる?」

裕也「そ、そんなんじゃ……」

由香「《嘘》ね」

裕也「!」

裕也は無意識に立ち上がり、しばらく由香を見つめた後、無意識に視線を外しながら声を絞り出した。

裕也（大丈夫だ……周りには聖時たちがいる。）

裕也は突然、纏う空気が変わった由香に対し、少し言い知れない何かを感じ取るが、一人ではない事を自分に言い聞かせて平静を保った。

裕也「気には……なる。怪しいところばかりだけど、疑わしいヤツには見えないんだ……」

聖時一（裕也さんも香野先輩の事をそう言う風を感じ取っていたんだ。）

由香「そう……」

そう言うと、由香は裕也を見て静かに微笑んだ。

裕也は心が震え、由香から視線を外す事が出来なくなった。

由香「いいのよ、それで……」

裕也「なにが……君は何者なんだ？」

由香「由香はね、河瀬くんにしなればいけないことがあるの」

裕也「！」

由香は裕也にゆっくりと近づく。

トラブルタ（おい！気をつける！接続しようとしてるぞ！）

トラブルタが裕也に警告をするが、当の本人は体が硬直して動けないでいた。

刹那（聖時さん！）

聖時（待って！もう少し！）

そう聖時が言っている中、由香はドンドン裕也に近づく。

2メートル

1メートル

50センチ

そして・・・0センチ。

裕也は由香に正面から抱きつかれる形で密着された。

由香「本当はね、こうして抱き合うのは2回目なんだよ。覚えてる？」

裕也（そ・・・それはおそらく、前にオレの記憶を消した時の・・・）
密着した状態で由香はゆっくりと髪留めを外した。
長い髪がばさりと由香の肩にかかる。

由香「思い出させてあげようか？」

裕也「え？」

由香「香野由香よ」

裕也「コウノ・・・ユカ・・・」

由香「その言葉が欲しかったの。条件は満たされたわ」

トラブルタ（くるぞ！）

由香「接続」
コネクト

由香が裕也に接続した。

裕也はその感覚を感じ取り、自分の体の自由が利かなくなるのを感じた。

裕也（接続されたのか・・・）

そう思いながら、裕也は正面を見た。するとそこには、自分のCAのトラブルタの他に黄色い色のイルカと、そして・・・香野由香がいた。

黄色いイルカ「河瀬裕也のの出力装置回復しました」

裕也「この黄色いのは？」

トラブルタ「由香って言う娘っ子のCAだよ」

裕也「・・・・・・・・・・」

トラブルタが裕也の疑問に答えていると、黄色いイルカが話し出した。

黄色いイルカ「意識を停止させましょうか？」

由香「別にいい。」

トラブルタ「じゃあ妄想流出させようぜ。桃源郷なやつな」

裕也「な!？」

由香「やめて」

トラブルタ「ちつ、オレが暇じゃないかよ。」

黄色いイルカ「対象者の意識はいつでも停止できません。」

由香「セーフモード最小限起動をキープだけでいい」

裕也「……………（これが由香のSE……………）」

裕也はそんな事を思いながら、由香と由香のCAとのやり取りを見ていた。

由香「……………ずいぶん落ち着いているのね？」

裕也「！」

裕也は内心少し驚いてはいた。が、聖時達からSEの事についてある程度聞いていたし、今回の事で、自分が由香に接続される可能性があるという事を聞いていたので、由香が思っていた以上に驚いてはいなかった。

裕也「ところで、そのイルカは？」

由香「この子は由香のCAのきいろ」

裕也「へ〜。で、この状況は？まるで脳内だけで喋っているような感じなのに、まるで脳内同士がくっついて、声が直接相手に伝わっている感じがする。」

由香「それは半分正解。由香と河瀬くんの脳はシステムLANで繋がっていると思うて。」

裕也「……なるほど。で、これは由香がやっているんだな。」

裕也は今、自分が置かれている状況を指して言った。

由香「うん。由香はこれをSEと呼んでいるの。シナプス・エンジンアリング。接続して脳を操る技術。」

裕也「なるほど……で、なんでオレに接続したんだ？」

由香「河瀬くんの記憶を消去するため。」

裕也「なんで?!」

由香「由香にとって都合が悪い物だから……ごめんなさい。」

裕也「都合が悪い?」

由香「由香がSEである事。」

裕也「だれにも言わないよ。」

由香「だめ。もし他のSEに潜脳されたらバレる。」

裕也「……………」

由香「きいろ、聴覚からの情報だけを対象に検索。文字列は「ローレンツ因子」」

きいろ「“ローレンツ因子”の検索結果、1件」

裕也「な・・・なあ、「ローレンツ因子」って？」

由香「検索用のタグ。なるべく無意味で、なるべく河瀬くんが知らない単語の方が、その場所を検索しやすいから」

裕也「検索用のタグだったのか・・・」

聖時「なるほど。そのキーワードはやっぱり検索用のタグだったんですね。」

由香「!?!」

きいろ「注意！何者かが接続中のラインを経由してこちらに接続してきます！」

きいろの警告と同時に、由香達の視界に二つの影が現れた。

聖時「また会いましたね。香野先輩。」

ピティ「裕也、大丈夫だった？」

トラボルタ「大丈夫じゃねえ！後もう少しで記憶を消されるところだったぞ！」

ピティ「うるさいわね！しょうがないでしょ。言い逃れできないような状況証拠が必要だったんだから！」

聖時「すいません裕也さん。接続していると言う決定的な状況でなければ、言い逃れされて逃げられると思ったので。」

裕也「かまわねえよ。それに、最初に接続されるかも知れないって
言われてたしな」

由香「・・・あなたは？」

聖時「昨日の放課後に会いました、あなたと似たような力を持つて
いる神谷聖時です。」

ピティ「聖時の使い魔兼エルフィン・・・SEで言うとCAの
ピティだよ。」

由香「・・・河瀬くん。」

裕也「すまねえな。実は昨日の昼休みの時に、SEの事については
聖時から聞いていたんだ。ついでに言うと、オレの記憶が由香に消
された事も、聖時が接続してくれた事でわかった。その時にオレの
能力のウソを見抜く能力を由香が自分に効かないようにしたことも
知った。」

由香「・・・そう。じゃあ今回、由香と会おうとした事は・
・・・」

ピティ「そう。あなたがSEである事を確実に確認し、裕也の記憶
を消した事についての理由を知る為。そして何より・・・あなた
の正体を知る為よ！」

由香「由香の？・・・由香をどうするき？」

ピティ「さ〜てどうしようかな。あっ、言っとくけど、変な事はし

ない方がいいよ。周りには、すでに私たちの仲間がいつでも飛び出せるように囲んでいるから。」

由香「……………」

聖時「ピティ！脅かすんじゃない！……すいません。手荒なマネはしません。僕らが香野先輩に接触したのは、今起きている意識不明事件の手がかりが欲しかったからなんです。」

由香「意識不明事件の手がかり？」

聖時「はい。僕らは今回の事件で意識不明になった友人のために犯人を追おうと思ったのですが、手がかりがまるで掴めない状況が続いて……………」

ピティ「そんな時、私たちの仲間の一人が、一昨日の放課後、あんたが修二を気絶させた所を見ていて、もしかしたら意識不明事件と何かしらのつながりがあるんじゃないかって思ってそれで……………」

由香「由香に接触してきたってわけ。」

聖時「そうです。」

由香「河瀬くんに接続したのは？」

聖時「夏原先輩を気絶させた時の詳しい状況を知りたくて。」

由香「なるほど。で、あなたたちは、由香を犯人だと？」

聖時「え？」

由香「……たしかにS Eの能力を使えば人を意識不明にする事も可能……そのS E技術を持ち、しかも人の記憶を消したり、気絶させたりしていれば、確かに犯人と思われるのは仕方がないよね……」

聖時「あ、いや……」

由香「けど……由香は犯人じゃない！第一S Eを使って人を意識不明にしたことなんてないからその方法はわからないよ！」

聖時「……」

由香「由香はただ……由香の記憶を取り戻したいだけなの……」

由香は視線を下に向け、悲しそうな顔をした。

裕也「……どういうことだ？」

由香「由香のS E能力はいつの間にか身についていたの。」

聖時「身についていた？」

由香「正確には気がついた時には、もうS Eの由香だったの……それ以前の記憶は無いから……」

聖時（そうか……僕やふたばが香野先輩から感じた悲痛な感じは記憶が無いからなんだ。）

由香「河瀬くんは由香という脳に、二人の人格が宿っている事・・・わかるでしょ」

裕也「あ、ああ。それは普段明るい由香ちゃんとSEの香野ってことだよな？」

由香「そう。河瀬くんの分類・・・由香と香野の二人に分けて言うと・・・今年の1学期の授業中に突然、香野の自我が目覚めたの。」

聖時「自我が突然？」

由香「そう。それ以前の香野としての記憶は無いけど、由香として学園生活を送っていた生活記録ログはあるの。」

裕也「・・・・・・・・」

由香「由香は自律的な、日常用の人格。ただし由香は、香野の制御下に置ける。香野は由香の行動に干渉できるし、いつでも切り替わる事ができる」

聖時「・・・つまり香野は「由香」という役割を演じることができるところのことですか？」

裕也「・・・つまりオレがAという別人格を演じている場合、オレはAを自由に操れるけど、他人から見ればAこそがオレの本質だと思われたいに・・・」

由香「河瀬くんは、自分の意識がない時でもAを演じる事が出来る？」

裕也「それは無理だろう。Aはあくまでオレの上に成り立っている物なんだからな」

由香「由香は香野の意識がない時でも、問題なく生活していたんだよ……由香は生活用の代理人格エージェントなの。今はそう割り切っている」

聖時（……だとしたら由香こそが本質で、由香が「香野」を演じている、あるいは由香が「香野」という人格を作り出してしまったのではないだろうか……そう考えれば、突然「香野」が誕生して、それ以前の「香野」の記憶が無いのは当然のことだ。さらに誕生した「香野」の自我が強すぎて、主従関係が逆転したと考えれば、説明が付く）

そんな風に考えている聖時の考えをわかっているかのように裕也が由香に言う。

裕也「なあ、由香が行動している時に、由香は何をしているんだ？」

由香「ゲームの主人公を操作している感覚……たまに出る選択を選べば、あとは由香が自動的に学園生活を送ってくれる感じ……」

裕也「……言いくいんだけどさ、それは主従関係が逆じゃないのか？香野は自分が主で、由香が従だと思っているけど……」

そう言っつて裕也は声を詰まらせた。

由香「そうかもしれないね……」

由香の寂しそうな呟きに、裕也は自分の言ったことが残酷なだけで無意味な事だと気付いた。

聖時「……そうだよな……自分でその可能性に気付かないわけ無いよな。」

そんな風に考えている聖時の前で、由香は淡々と話を続ける。

由香「……だけど、由香の行動記録ログを遡っても、聖遼高校に入る以前の記憶は無いの……」

聖時・裕也「ええ……!?!?」「」

由香「自分の脳システムをいくら探しても、封印されている領域セクタが走査できなくて……」

聖時「……その封印プロテクトを解くにはどうすればいいんですか?」

由香「合言葉パスワードを発声するしか……でも合言葉は何かの文字列だつて事しか……」

聖時「わかっていないって事ですか……」

由香「うん……由香は代理人格の“由香”がいないと生活できない。生活する為の記憶が無いから……じゃあ……私は一体誰なの……」

消え去りそうな声が、重く、悲痛に響いた。

聖時（由香の人格。香野の人格。どちらが本物かなんて、これほど無意味で馬鹿げた疑問はない。どちらも過去の記憶が無いんだから・・・自分の事なのに何も分からない・・・）

聖時達は由香の話の話を聞いて、自分がそんな境遇に立たされてたらと想像しようとしたが、まるで想像できなかった。

ただ話を聞いて思った事は話を聞いた者たち全員共通していた。・・・辛いだろうな、と。

由香「・・・少し無駄に喋りすぎたね。」

裕也「・・・無駄なんかじゃねーよ。辛かったんだろ？誰かに聞いて欲しかったんだろ？だったら無駄なんかじゃねーよ。」

聖時「そうです！無駄なんかじゃない！今までずっと一人で大変だったんですよ？その気持ち少しわかります・・・自分一人で辛い気持ちを抱え続ける事の気持ちの大変さ・・・あの時の僕と同じだから。・・・母さんと桃華が死んで、一人ぼっちになったあの時と・・・」

聖時は母親と双子の妹の桃華が亡くなったときの事を思い出した。病院で目覚めた聖時に医者から告げられた絶望の言葉・・・病院内の霊安室で物言わなくなった母と妹を車椅子に座って無言で見ていた自分。

当時は父親は行方不明で、父に付きしたがっていたユニも行方不明だった。ピティは使い魔の卵からまだ孵ってなく、文字通り一人ぼっちだった。

しかし、そんな聖時を気にかけて面倒を見てくれる人たちが出てきてくれた・・・なのは達である。生きる気力を殆どなくし、せつかく移植してもらった左足のリハビリもせず、ただ悲しみに打ち震え

ていた聖時を支え励ましてくれたのは達……やがて聖時は、左足のリハビリをするようになり、今では問題なく歩く事ができるようになった。

聖時（今のこの人の状況と少し似ている……この人は……あの時の僕と同じだ……だから！）

聖時は由香を助けてあげたいと思い、裕也の顔を見た。裕也もどうやら同じ気持ちらしいと表情でわかった。

裕也「なあ、自分の中にある辛さとか不安を抱えて、この先も一人で背負って立ち向かうのか？それでいいのか？」

由香「《ええ……》」

裕也の嘘センサーが反応した。どうやらこう言う状況下では由香の嘘センサーに対する無効化が効かないようになっていているようだ。

裕也「《嘘》だ」

由香「え？」

聖時「一人で良い訳がない！一人で抱え込まないでください。まだ会ったばかりの僕達ですけど……でも！僕は……僕達は香野先輩の力になりたい！」

由香「……けど……」

聖時「今の話を聞いていたみんなもきつと同じ気持ちです。」

由香「みんな？」

聖時「今までの会話は僕を通して、外にいるみんなに念話で伝わるようにしてあったんです。」

アルフ（そう言う事。）

あたりに頭の中に響くような声が聞こえてくる・・・アルフの声だ。

アルフ（話は聞かせてもらったよ。確かに聖時の言う通り、このまま見て見ぬふりはできないね。）

アキ（確かにそうですね。）

ふたば（香野先輩、わたし・・・何の力もとりえもありませんけど・・・でも先輩の力になってあげたいんです！）

刹那（それに、もしかしたらあなたの封印された記憶には、ひよつとしたらこの事件の手がかりがあるかもしれません。ですから私も協力させてもらいます）

由香「けど・・・これは由香の問題・・・」

裕也「その発想がおかしいんだ。香野の問題は、香野の周辺を巻き込んだ問題でもある。現に今、オレを巻き込んでいる。」

由香「・・・・・・・・」

聖時「一人でやっていたら、いつまでも解決できません。それは今までの事でよくわかっているはずですよ。」

裕也「そうだ。一人で抱え込むな！オレが……オレが香野を助ける！助けてみせる！」

由香「助けて……みせるって……」

聖時「僕達も協力しますから……」

裕也「一緒にやろうぜ。」

由香「本気で言ってるの？」

裕也「センサーが無くてはわからないだろうか？」

由香「………わかつ……た。ログアウト接続解除を……」

聖時「！はい！ピティ！ログアウト接続解除」

ピティ「了解！」

ピティの返事と共に世界が元の姿に戻る。
体の自由が戻る。

聖時の視界には抱きあつた形のままの由香と裕也がいた。
その二人の方に手を置いた形で聖時は立っていた。

先ほどまでの熱弁と抱きあっている形のせいなのか裕也は気恥ずかしそうな顔をしていた。

聖時は由香の方を見た。

由香は裕也の胸に顔をうずめたままの状態で泣いていた。

そんな二人を見ている聖時の肩にポンとふたばが手を置いた。

周りを見ると、いつの間にかアルフ達が聖時達の側に立っていた。みな由香と裕也を少し優しげな目で見ていた。

しばらくして、由香は裕也から離れた。

髪を下ろした状態の由香・・・香野が聖時たち全員を見る。

その目にはまだ少し涙の跡があった。

その目を手で擦り、そして聖時達に向けて言った。

香野「これから・・・よろしく。」

その顔は香野の物ではなく由香の物だった。

聖時「はい！」

夕暮れ時の聖遼学園に聖時の声が響いた。

《つづく》

おまけコーナー

ピ「ピティと」

ユ「ユニと」

ビツ「ビツキーの」

三人「「「おまけコーナー」」」

ピ「はいOPの掛け声を今回から変えたおまけコーナー！司会進行役のピティです」

ユ「解説のユニです。」

ビツ「アシスタントのビツキーです。」

ピ「さて今回はユニと私自身の事について話そうと思います。」

ビツ「ユニさんとピティさんの事を？」

ピ「そう 今回の話で、聖時がテロ事件にあった直後の事について書かれていたでしょ？」

ビツ「ええ」

ピ「その時、私は生まれていなかったって事は書かれているから解るよね。なら私はいつ生まれたのかって、その辺りを踏まえて話そうと思うの。」

ピッ「なるほど。そういうわけですか。」

ユ「それではまず最初に私たちの生まれ方についてです。」

ピッ「生まれ方？」

ピ「私たちが使い魔なのは知ってるよね。」

ピッ「はい。」

ユ「普通、使い魔を作る時は、何かしらの生き物を元にして作るのが定石なんです。」

ピ「たとえば、アルフの場合は狼を元にしてるって具合にね。」

ユ「ですけど、私とピティはそうじゃないんです。私たちは使い魔の卵と言う物から、主となる人の血と魔力を受けて生まれてきたんです。」

ピッ「つまり、使い魔の卵に主の血と魔力を吸収させて孵したと言うわけですね。」

ピ「まっそう言う事。」

ピッ「しかしその使い魔の卵って代物、一体どこから手に入れたんですかね？」

ピ「え〜っと、たしか聖時が言うには、私の使い魔の卵は父親に貰ったって言うてたよ。」

ユ「私の卵は、ピティの卵と一緒に神谷邸の裏にある裏山で拾ったって聖さんが言ってました。おそらく裏山に発生した空間の切れ目を通ってどこからか流れ着いたんだと思います。」

ピ「へへ、なるほどね。」

ピ「ちなみに、卵から孵った私たちは、普通の使い魔といくつか違う所があるんだ。」

ユ「まず一つ目は、主からの魔力供給を必要としないところです。私たちは卵から孵る時に主の魔力を必要としますが、生まれた後は魔力を必要のしないんです。」

ピ「そんでもって二つ目は、普段の姿が魔力を持たない人には見えないと言う事。」

ユ「私たちの姿は魔力を持たない人には見ることができません。ですがこの能力は本人の意志で自由にON、OFFができます。」

ユ「そして三つ目は、たとえ主がいなくなっても滅ぶ事が無い所です。本来使い魔は、主からの魔力の供給で体を維持しています。ですがそれを必要としない私たちは、たとえ主を失っても消滅する事はありません。」

ピ「へへ、こうして見ると、二人は他の使い魔とはだいぶ違うことがわかります。」

ピ「そうだね。私なんてニューロマンシーのアシスタントのエルフィンもかねてるから、さらに違うからね。」

ピッ「そうですね。あ、所でさっき冒頭でも触れましたけど、ピテイさんがいつ生まれたのかについてなんですけど、ピテイさんはいつ生まれたんですか？」

ピ「あ、それはね、実は私が使い魔の卵から生まれたのは、聖時がテロ事件に会ってから1年後なんだ。」

ビィ「あ、そうなんですか。」

ピ「そ、だから私は聖時の父親の事はもちろん、母親や双子の妹の桃華の事もよくは知らないんだ。」

ビィ「そうなんですか。」

ユ「あ、それと本編でも書かれてたと思うんですけど、テロ事件の時、私は行方不明で居なかったとなっております。」

ビィ「あ、そうですね。」

ユ「実は私はピテイが生まれる少し前まで、異世界にいたんです。」

ビィ「異世界に?! なんで?」

ユ「実は私は冬木市であった例の大火災で起きたショックで異世界に飛ばされていたんです。」

ピ「あ、そうだったんだ。」

ユ「はい、しかも管理局も把握していない世界だったので、自力で

帰らなければならなかったので時間が掛かってしまったということです。」

ピツ「なるほどです。」

ピ「しかし、孵った本人が言うのもただけど、使い魔の卵って一体なんなんだろうね？」

ユ「私達が孵った卵以外は現物も資料も管理局にすらないと言いますから、もしかしたら使い魔の卵ってロストログアなのかもしれないですね。」

ピ「え！？それじゃあそれから孵った私達もロストログアって事？！」

ユ「そうかもしれないですね。」

ピツ「それじゃお二人はシャルルさんのお友達の名前に“リ”が付く人に気を付けなければいけませんね。」

ピ「え？なんで？」

ピツ「忘れたんですか？その人が遺跡マニアだったことに。」

ピ・ユ「あ！」

ユ「た・・・確かに気づけなくちゃいけませんね・・・」

ピ「た・・・たしかに、もしこの事が知れたら、何されるかわからないもんね。」

ピッ「そうですね・・・あ、そうだ！」

ピ「な・・・なに？」

ビィ「いえね、実は先ほどその頭に“リ”が付く人がシャマルさんと歩いてるのを見かけたんです。」

ピ・ユ「「え!!!」」

ユ「な・・・なんでこっちに来てるんですか?!」

ビィ「あれ？忘れたんですか？あの人、シャマルさんの料理研究会の一員だって事を。」

ピ「あ、そういえば・・・」

ユ「そうでしたね・・・」

二人「「・・・・・・・・」」

ピ「こ・・・ここは一旦避難しておいた方が良くも・・・」

ユ「そ・・・そうですね。」

ピ「じゃあ私たちは一旦避難してるから、後お願いね」

ユ「お願いしますね。」

ピッ「あっ、ちょっと二人とも！締めはどうするんですか~~~~~！

！・・・行っちゃった。しかたがない、とりあえず私だけで締め
をしますか・・・それではみなさん、まったね〜」

ビツ「・・・やっぱり一人だと絞まらない・・・」

第33話 一人じゃない（後書き）

さて次の話なんですが、そろそろ原作で使われているもう一つの世界、幻想界にスポットを当て行こうと思います。ではでは

特別編2 聖時の〇〇&〇〇〇疑惑と大捕り物事件（前編）（前書き）

才人「……おい！前回の後書きで幻想界側の話を書くって書いてなかったか？」

いや〜それがね、面白そうな話を考え付いたからそれをまず書こうかな〜と……

才人「書こうかな〜じゃない！人を意識不明にさせといて、本編の話を進めずになにやってる！！」

す……すいません……と、とにかく特別編の話です、どうぞ。

特別編2 聖時の〇〇&〇〇〇疑惑と大捕り物事件（前編）

特別編2 聖時の〇〇&〇〇〇〇疑惑と大捕り物事件（前編）

ここは聖時の別荘の居間。

今この場には、なのは達に呼び出された聖時とそれに付いて行ったピティ、それと用事でこれなかった明日香以外のいつもの面々に加え、つい最近仲間になった裕也と由香がいた。

ふたば「……………それでは報告を……………」

ふたばが重い口調で言葉を発した。

裕也「……………じゃあ……………まずはオレと士郎の報告からだな。」

報告1 裕也と士郎の場合

裕也「アレは……………オレが士郎と一緒に聖時の部屋の家捜しをしようとした時の事だった……………」

・
・
・
・

・
・
士郎「……やっぱりよしでしょうよ。」

士郎は聖時の部屋の物の影などを覗いている裕也に言った

裕也「なに言ってるんだ。男友達の部屋に来たなら、まずする事と
いったらエロ本探しと相場が決まってるだろう?」

士郎「決まってるだろう?と言われたって……」

渋る士郎を他所に、部屋の物色を進める裕也。

裕也「いいから、こつ言つのはノリだよ。」

そう言いながら、今度はベッドの下を探る裕也。

士郎「けど……」

裕也「いいから……つと、お!何か有るな……」

裕也はベッドの下に入れた手の先に、本のような物の感触を感じた
のでそれを取り出す。

裕也「ベッドの下とはまた古典的な所に隠してるな。」

そついいながら取り出した本を見ようとする裕也。

裕也の後ろでは、取り出した本が気になるのか、士郎もそれを見よ
うと除き見ようとしていた。

裕也「さうて、あいつはどんなエロ本を見てるのかなうって……
……え?!」

士郎「はあ?!」

二人は取り出した本を見て固まった。

その本は……男同士が絡みあっている女性向けのBL関係の本、
数冊だった。

二人「……」

・ ・ ・ ・ ・

裕也「いや、驚いたよ。まさか聖時の部屋からこんな本が出てく
ると思わなかったよ。」

一同「……………」

裕也の報告を聞き、その場の全員が黙り込み、ふたばは顔を青くした。

ふたば「……………次の報告を……………」

刹那「……………では次は私が。あれは……………私が神谷邸の居間を通り抜けようとした時の事です。」

報告2 刹那の場合……………

刹那「ん？」

刹那は居間のテーブルの上に置いてある箱に目が行った。

その箱は聖時宛の小包の箱であり、どうやらインターネットで注文した物らしく、箱には某有名なインターネットショップの名前がついていた。

その箱はついさっき開けたばかりなのか、箱を開ける際に切った箱の切り口が真新しかった。

刹那「……………聖時さん宛の小包？まったく、こんな所に置きっぱなしにして。」

そう言いながら、刹那は箱に近づく。

刹那「箱を持って行って、片付けるように言っておきましょう。」

そう言つて、刹那は箱を持つとして、箱の中身をチラリと見た。

刹那「え?!」

中身は本で、刹那はその本の表紙にかかれてある字を見て絶句した。その本の表紙にはこう書かれてあつた。

「オンナノコになりたい! 着るだけは今日で卒業! もっとかわいい男の娘になろう!」と書かれてあつた。そう、これは女装専用の指南書であつたのである。

刹那「……………よし! 見なかつた事にしましょう。」

箱から手を離し、刹那は急いでその場所を離れた。

……………
一同「……………」

刹那の報告後、あたりは再び沈黙が支配し、ふたばはさらに顔を青くした。

刹那「……………私もあの時は、自分の目を疑いましたよ……………」

ふたば「……………つ……………次の報告を。」

剛「……………じゃあ……………次は俺たちだな。アレはオレと猛が、この別荘内にある聖時の部屋に聖時を呼びに行った時の話した。」

報告3 剛・猛の場合

猛「おゝい聖時！そろそろお昼の時間だぞ〜って……………居ないな……………」

別荘内にある聖時の部屋の扉を開けながら猛。が部屋内には誰もいなかった。

剛「どうした猛？聖時は居たのか？」

猛「いや、居ないみたいだ。」

そう言いながら猛は部屋の中に入り、部屋の中を見回した。

猛「？」

ふと、猛は部屋の中にある机の引き出しからはみ出している用紙に目が行った。

猛は気になり、それを引っ張り出して見て……………固まった。

剛「お……………おい、勝手に見たらまずいだろっ？」

剛は用紙を引っ張り出して見ている猛に注意をするが、猛はそれが聞えていないかのように、用紙を見た常態で固まり続ける。

剛「……どうしたんだ猛？」

固まった猛が気になり、その元凶であろう用紙を剛は見て……
……剛も固まった。

猛、剛の二人が見て固まった用紙……そこに書かれていたものは、二人をモデルにしたキャラが裸で絡み合っている書きかけのB
L漫画であった。

・ ・ ・ ・ ・

剛「まったく……なんで俺たちをモチーフにしてあんな物を書いたんだか。」

一同「……………」

再び辺りが沈黙に染まり、ふたばの顔はこれでもかと言つぐらいに青くなつていった。それこそ事情を知らない人間が見たら、100%の確立で119番通報するくらいである。

アルフ「……今までのみんなの証言をまとめてみると……」

アキ「やっぱり……間違いないみたいだね……」

由香「じゃあやっぱり……」

琴乃「はい……間違いなく……」

ふたば以外のメンバー「聖時（さん・くん）はホ○でオマに目覚めてしまった！」

ふたば「ふう〜（バタツ！）」

あまりのショックで倒れるふたば。

琴乃「あ！ふたばさん！」

倒れたふたばを抱き起こす琴乃。

ふたば「そ……そんな……聖時が……聖時が……」

琴乃「しっかり！ふたばさん！」

士郎「ふたば……気持ちわかるが……」

剛「ああ、だがこうして物的証拠がある以上……認めなくては……」

悲痛に話す士郎と剛。

裕也「諦めるんだ……ヤツは……すでに手遅れだ……」

ふたば「！」

その一言にショックを受け、頭をたれるふたば。

琴乃「ふ……ふたばさん！」

猛「無理もないか……」

そついいながら琴乃に抱きかかえられるふたばを見る猛。

ふたば「……て……れ……ない」

猛「へ?!」

琴乃「ふ……ふたば……さん？」

ふたば「手遅れなんかじゃない!!」

琴乃「キャッ！」

猛「おわ！」

突然、何かを決意したかのような顔をして立ち上がるふたば。

ふたば「聖時が女装好きで男好きな性格になんかせない!百歩譲

って、女装は認めるとしても……」

琴乃「み……認めるんですか……」

ふたば「B.L好きの、男好きになんてさせない！よしんば、なつていたとしても、私が正常な男としての心を取り戻してみせる！！」

アルフ「ふ……ふたばが燃えてる！！」

ふたば「待つててよ！聖時！私が男としての心を取り戻してあげる！！」

*

一方その頃、なのは達に呼び出された聖時は……とあるスタジオの控え室にいた。

聖時「……ねえ、なんで僕はなのはさん達にこんな所（写真

撮影用のスタジオ）に呼び出されて、ゴスロリドレスを着せられて
女装しなきゃならないの！」

聖時は心の底からの慟哭のような声でなのは達に講義の声を掛ける
が……

はやて「ハアハアハア、か……かわいいで〜聖時……ううん、
セージちゃん？」

アリサ「本当 よく似合っているわよ」

すずか「ええ、どこからどう見ても女の子にしか見えません」

なのは「本当 やっぱり聖時くんはかわいい格好をさせがいがある
の」

フェイト「聖時……お……お……お持ち帰りしたい……
」

聖時「……みなさん……人の話を聞きましょうよ……」

聖時のあまりのかわいいさにトリプツて話を聞いていないのは達
……

聖時「(ス〜)」

大きく息を吸い込む聖時。

聖時「なのはさん……!」

なのは達『キヤア!』

聖時の大声でようやくトリップ状態から脱するなのは達。

聖時「……なのはさん」

なのは「え?」

聖時「え! じゃありません。どうして僕がこんな格好をしなきゃならないんですか?」

なのは「え? だってこれは聖時くんに対する罰だもん。」

聖時「罰?」

なのは「そう罰。聖時くん、今年の春休みに無茶をして私やユニさんに怒られたの覚えてる?」

聖時「え? それって……僕が車に引かれそうになった犬を助けた事だよな?」

それは春休み中に起きた事で、引かれそうになった犬は実はふたばの飼い犬のラキで、ふたばとは学校で再会した時、それをきっかけに友達になったのである。

聖時「たしか犬を助けた所をなのはさんとユニに見られて、その場で説教を受けてその件は終わりになったんじゃない?」

なのは「あれ、わすれたの? わたし最後に、「この件に関しての罰を後で受けてもらう」って言わなかった?」

聖時「言ってますんよ!」

なのは「あれ?そうだった?・・・まあ、あの時の説教は、私とユニさんがあの後用事があったから短めになったから、どの道罰は受けてもらっから」

ピティ（なぐるほど。で、その罰が・・・この女装って訳か・・・。それにしてもなのはか、はやてかは知らないけど、なんて効率のいい罰なの〜）

今まで静観していたピティが念話で独り言を言い始めた。

ピティ（聖時の罰と同時に、聖時の女装姿も見ることが出来ると言う、まさに一石二鳥!）

聖時一（おいピティ!なに喜んでるんだ!）

念話でこの状況を喜んでるピティに突っ込む聖時。だが・・・

ピティ（やっぱり美少年に女装をさせるのはたまらない!ハアハアハア〜）

聖時（・・・聞いてないよ〜いっ・・・）

なのは「とにかく!これはやてちゃん提案の聖時くん女装してもらい、さらに撮影会をしようつのはあの時の罰なんだから、黙ってつけてもらっからね!」

聖時「へ?あ・・・あの〜今、とんでもない事をさらりと言いま

せんでしたか？撮影会がどうとか……」

アリサ「ええ、言ったわよ。実は今回の撮影会には、なんとプロのカメラマンを用意して撮影会をする事になっているの」

聖時「プ……プロのカメラマン……！」

アリサ「そ！今回は覚悟しててね。なんせ今回の撮影会で写真集を作るぐらいたくさん取ってもらおうから」

聖時「しゃ……写真集……！！！」

聖時は顔から血の気が一気に引いて真っ青になるのを感じた。

はやて「さくて、それじゃあさっそく撮影をするために、スタジオに入りますか」

そう言って聖時ににじり寄るはやて。

聖時「うっ……！」

それを見て後ずさる聖時。

聖時（写真集なんて……冗談じゃない！そんなもの作られてたまるか……）

聖時は心の中でそう思い、逃げ出す事を決意した。

なのは「さあ聖時くん……」

聖時（あきらかに怪しい雰囲気を出しながらにじり寄らないでなのはさん！）

アリサ「大人しく〜」

聖時（正常じゃない目のにじり寄らないでアリサさん！）

すずか「写真を〜」

聖時（かわいいものを見るような目で見ないですずかさん！）

はやて「ハアハアハア、取られなさ〜い」

聖時（なんなんですかはやてさん！そのハアハアは！！）

フェイト「聖時・・・お持ち帰り・・・」

聖時（正気に戻って〜フェイトさん！！）

聖時ににじり寄るのは達。

聖時（ピ・・・ピティ！手を貸してくれ！）

念話でピティに手助けを願う聖時。だが・・・

ピティ（聖時の女装写真集・・・ハアハアハア〜）

聖時（お前もか！！！！）

ピティも聖時の女装写真集と聞いてトリップっていた。

聖時（ま……まずい……このままじゃ……）

内心の焦りながらさらに後ずさる聖時。

そんな時、聖時ににじり寄っていたなのは達の後ろにある入り口から人が入ってきた。

スタジオの係員「失礼しますバニングさま。そろそろお時間ですが……」

係員の声で一瞬動きを止め、背後の扉を見るなのは達。

聖時「今だ！」

その隙に、なのは達の包囲網をかくぐり、入り口に居る係員を避けて控え室を出る聖時。

はやて「あ、逃げた！」

すずか「逃がしません！」

なのは「アリサちゃん！」

アリサ「任せて！」

アリサはポケットから携帯を取り出すと、短縮でどこかにかけ始めた。

アリサ「あ、もしもし、私。聖時が逃げたわ！手筈通りに配置した

人員を使って捕獲作戦を開始しなさい！」

ピー！

携帯の電源を切るアリサ。

はやて「アリサちゃん、さっきの電話は？」

アリサ「ああ、ウチのSP。こんなこともあるのかと思って人員をこのスタジオの周りに配置しておいたの」

はやて「よ……用意周到やな……」

アリサ「さあ、わたし達も行くわよ！なにが何でも聖時を捕まえて、写真集を作るわよ！」

すずか「楽しそうだね、アリサちゃん。」

アリサ「とおせんじゃない こんな楽しそうな事楽しまなきゃソーンよ それに……私も聖時の女装姿のファンだしね」

すずか「そうだったよね 聖時くんの女装姿……」

はやて「これを見て喜ばない女子は居ない！」

なのは「うん」

フェイト「聖時……お持ち帰り……」

アリサ「絶対つかまえるわよー！」

なのは達『お~~~~!!!!』

こうして聖時を捕まえる為に、鳴海の町を舞台にした大捕り物が始まった。

《後半につづく》

特別編2 聖時の〇〇&〇〇〇疑惑と大捕り物事件（前編）（後書き）

話の中では書きませんでした。実は聖時の女装姿のファンは結構居て、実はなのはやはやて達はその隠れファンだと言う事になります。

特別編2 聖時の〇〇&〇〇〇疑惑と大捕り物事件(中編)(前書き)

特別編2の中篇です。それではどうぞ。

特別編2 聖時の〇〇&〇〇〇疑惑と大捕り物事件(中編)

特別編2 聖時の〇〇と〇〇〇〇疑惑と大捕り物事件(中編)

鳴海の町の中を聖時は走っていた。

アリスの家のSP「いたぞ〜!こっちだ〜!」

聖時「見つかった!」

聖時は見つかった事に気付き、近くの路地に逃げ込んだ。はたから見れば、とてもシリアスな逃亡劇なのだが・・・聖時の格好が、その空気をぶち壊すような格好であった。

聖時の今の格好は白と黒で、フリルがついたゴスロリなドレスに身を包み、頭にはリボン。

男がこんな格好をしたら、普通は似合わない。だが、聖時は男にしては背が低く、容姿は母親似。そして、長く美しいその亜麻色の髪・・・それらがとても服装と合っており、道行く人が見れば、百人中百人が彼を美少女だと思うだろう。

そんな格好で聖時は、一人で(ピティはスタジオを脱出した時、トリプツていたのでその場に置いてきた)逃げ回っていた。

聖時「と・・・とにかく、一旦家に帰ってこの格好をどうにかしない

と……これじゃあ目だつてしょうがない。」

聖時は今の自分の格好がとても目立つ物（本人は自覚していないがその容姿が服装にとでもあっているのも目立つ要因の一つになっている）で、逃亡するには不向きと判断した。

よって聖時は、まず着替える為に家に帰ろうと思った。そしてそのまま別荘に入り、ほとぼりが冷めるまでそこに隠れていようと思った。

SPたちの包囲をかくぐり、それを突破すると言ったことを繰り返して、ようやく神谷邸に辿り着く聖時。

聖時「ハア……ハア……や……やっと辿り着いた。」

聖時は肩で息を切らしながら神谷邸の玄関にヨロヨロと入っていく。

ガラガラッ

聖時「ただいま。」

そう良いながら、玄関の扉を開けて中に入る聖時。

ふたば「お帰り聖時。」

聖時「あ、ふたば、来てた……ん……だ？」

聖時の視線の先……その先にいるふたばの格好を見て、聖時は……固まった。

ふたばの格好は、まるで旧ナチスドイツの親衛隊が着てるような黒

い軍服と帽子と言う格好で、手にはなんとムチを持っており、ふたばの背後にはそれを気の毒そうな目で見ているいつものメンバーがいた。

聖時とふたば、二人はお互いの格好を見てそれぞれ言葉を失い、黙ってお互いを見ていた。

聖時「え……え〜と……」

ふたば「……………」

聖時「あ〜」

ふたば「……………」

聖時「ふたば？」

ふたば「……………(ポツ)……………」

聖時「はあ？(な……なんでそこで顔を赤くするの?)」

ふたば「ハッ！(い……いけない！聖時の格好が、あまりにも可愛いから、つい……)」

ふたばはハツとなり、頭を2、3回降つた後、咳払いをした。

ふたば「ゴホン！聖時、なにその格好？」

聖時「あ、いや……これは……」

ふたば「まったく、そんなことをしているから男としての性を無くしてしまうのよ!」

聖時「はあ?」

ふたば「私が今からあなたを鍛えて、男としての性を取り戻してあげる!私の格好は、それをするための決意の証よ!」

そう言いながら持っているムチを聖時に向けるふたば。

聖時「へ?ちよっ・・・ちよつと待って!なに言ってるの?!」

突然わけのわからない事を言い始めたふたばに困惑する聖時。

聖時「ちよつと!みんなも止めてよ!」

聖時はふたばの背後から様子を見ているメンバーに助けを求めるが、全員視線を逸らしてしまう。

聖時「ちよつと!なんで視線を逸らすの!」

ふたば「聖時、覚悟はいい?」

ムチを片手に近づいてくるふたば。

聖時「な・・・なんの覚悟かな?」

ふたば「決まってるでしょ?男としての性を取り戻すための特訓についてのよ!」

聖時「なんかふつてあるルビの字が物騒な言葉になつてー!!」

ふたば「いいからさっさと始めるわよ！」

ビシツとムチで床を叩いてさらに近づいてくるふたば。

聖時（ま……まずい……あの目は正気を失っている……逃げないと……命に関わる!）

聖時はそう思いクルリとふたばに背を向けるとその場から全力疾走で逃げ出した。

聖時「戦略的撤退！」

ふたば「あ！待ちなさい聖時！」

アキ「……追ってつたね……」

士郎「ああ……」

由香「そ……それにしてもさっきの聖時くんの格好つて……」

裕也「えつと……ゴスロリ？」

猛「な……なんであんな格好を……」

剛「してたんだろつな……」

アルフ「けどさ……」

琴乃「ええ・・・」

一同『可愛かったな〜』

男性陣「ハッ！な・・・なに言ってるんだオレはああああああ
！！」

壁や床に頭突きをし始める男性陣。

アルフ「・・・ま・・・まあ・・・仕方がないか・・・洒落になん
いくらい似合ってたからね・・・」

アルフはそう言いながら聖時とふたばが走り去った方を眺めた。

*

一方聖時は、ふたばの追撃を走って振り切り、今は聖遼学園近くの

路地裏に身を潜めていた。

聖時「ふう、どうにか振り切ったか……それにしてもふたば、どうしたんだろう?」

そう言いながら先ほどのふたばを思い返す聖時。

伊達「カラコラムからカチエンジンガに吹き渡る風のようなさわやかな……実に爽やかな天気じゃないか聖時くん。」

聖時「……まともに出てこれないのかお前は!って言うか、お前はヒマラヤに登った事があるのか?」

伊達「フツ、愚問だね。この僕に不可能な事……は……」

聖時「?どうしたんだ?」

伊達「ジーーーーーー(ゴスロリ姿の聖時を黙って見る伊達)」

聖時「な……なんだよ?」

伊達「今すぐに結婚しよう!」

聖時「へっ?」

伊達「たしかここの近くに教会があつたはずだ!そこに行って今すぐ二人で永遠の愛の誓いを!」

聖時「だれがするかあああああああ!」

アリサ「とにかく！さあ、一緒に戻るわよ。ゴスロリの次は私が用意したナース服を着てもらおうんだから！」

なのは「え〜！次は私が用意した巫女服だよ。」

すずか「何言ってるんですか。次は私の用意したメイドさんです！」

はやて「いや！次はウチの番や！聖時にはウチが用意したスク水、ネコミミ、セーラー服でメガネの格好をしてもらうんやからな！」

聖時「な・・・何なんですか！そのワケのわからない格好は！！！」

フェイト「聖時・・・スク水、ネコミミ・・・お持ち帰り／／／／」

聖時「・・・それといい加減に帰ってきてくださいフェイトさん・・・」

はやて「とにかく！さあ、ウチらと来てもらおうか？」

聖時「明日に向かって全速力！！！」

アリサ「あっ！また逃げた！」

なのは「追うよフェイトちゃん！」

フェイト「聖時・・・お持ち帰り／／／／」

なのは「・・・」

全速力で逃げる聖時を追うのは達。

そんななのは達に追いかけられる聖時の前に更なる追っ手が立ちふさがった。

ふたば「見つけたわよ聖時！」

聖時「ゲツ！ふたば！」

ふたば「大人しく私の調教・・・じゃなくて、特訓を受けなさい！」

聖時「悪いけど、それカンベンして！」

後ろになのは達、前にふたばと挟まれた聖時は、すぐ脇にある小道に入って逃げる。

そこからさらに走った所でさらに障害が・・・

伊達「聖時くん！あくまで僕から逃げようとするんだね。だが！ここから先に進むんだったら・・・この僕を踏み越えて行け！」

バキッ！ブミブミ！（伊達を踏みつける音）

伊達「ああ、古典的な道に行く君が好き・・・」

・
・
・
・
・
・

・ ・ ・
その後、なのは達やふたば、復活した伊達に加え、アリサが呼び寄せたSPのせいで、聖時を追いかける人の数はもはや黒い波状態と化していた。

聖時「このまま逃げつづけると学校に向かう事になるな・・・あそこなら校内を知り尽くしているこっちが有利だな・・・よしこのまま学校に！」

そう言って聖時は聖遼学園へと向かった。

*

聖遼学園・新聞部・天羽碧^{あまはなみどり}の証言

ええ、その日は休日で、私は新聞部の活動で学校に came ました。

その時は、ちょうど校庭の花壇にあると言われている青い鬼灯ほおむすきを取ろうと思ってカメラを持ってその場所に向かう所でした。すると校門の向こう側から黒い人の波に追われているゴスロリの格好をした子が走って学校に向かっていているのを見かけたんです。

よく見ると、追われているその子の顔に身に覚えがありました。

たしか屋上で、私の知り合いの星原百合と最近よく話していた・・・ たしか中等部の神谷聖時くんだなとわかったんです。

しかし、その格好はゴスロリの格好で、あまりの可愛さについて無意識に手に持っているカメラでシャッターを切ってしまいました・・・

•
本当にあの可愛らしさはまさに犯罪級です！男の子しておくのがもつたいないくらいです！

新聞部発行の校内新聞より一部抜粋。

*

なのは達から逃げる為に、自分に有利な校内へ入る聖時。
ここは一見校内の構造に詳しい聖時に有利だと思われたが、相手側にも校内に詳しい人物・・・ふたばが居たせいで、うまく撒く事ができないでいた。

聖時「くそ、ふたばが居るせいで、うまく撒く事ができない・・・
ふたばを何とかしないと・・・」

ふたば「聖時！観念なさい！」

聖時「げっ！もう追いついてきた！・・・やはりふたばを何とかしないと・・・」

そんな風に考えてると、横から伊達が懲りずに聖時にアタックを仕掛けてきた。

伊達「聖時くん！さあ、一緒に教会に行つて結婚式を！」

ガシッ！（聖時が伊達の頭をつかむ音）

伊達「へ？」

聖時「おりゃあああああ！伊達ミサイル！！」

聖時は横から来た伊達の頭を鷲？みにすると、そのまま伊達をふたばに向けて投げつけた。

ふたば「え？きゃああああああ！」

ゴン！

ふたばは飛んできた伊達にぶつかり倒れて気絶してしまった。

ふたば「キユウ~~~~」

聖時「これでよし。ふたば、ごめんな。いま捕まるわけにはいかな
いんだ。」

そんな風に話していると、遠くから黒服の男の声が聞こえてきた。

アリスの家のSP「いたぞ！こつちだ！」

聖時「ゲツ！もう見つかった！」

そう言って逃げる聖時。

しかし、人数が圧倒的に多いのは達に、徐々に屋上へと追い詰められいった。

*

星原百合の証言

はい、その日は私は屋上で景色を眺めていました。

すると突然学校の敷地外から黒い人だかりが、波となって学校に入って行きました。

しばらくすると、学校のあちこちで、「こつちだ〜」とか「いたぞ〜」と言う声が聞こえてきて、それらが段々と私に居る屋上に近づいてきたんです。

そして、突然屋上から校舎内に続く扉が乱暴に開かれると、ゴスロリの格好をした聖時さんが駆け込んできたんです。

*

聖時「ハアハアハア……お……追い詰められちゃった……」

そう言つて聖時は逃げ込んだ屋上を息を切らしながら見回した。
するとこちらを不思議そうに眺めている百合を見つけた。

聖時「あつ！星原先輩！」

百合「せ……聖時さん？」

聖時「はい！あの……か……匿つてくださ！」

百合「匿つ？」

聖時「はい！詳しい理由は省きますけど、とにかく追われてるんです！ですから……」

そう言いながら百合に近づくと、聖時に背後で、またしても校舎内に続く扉が乱暴に開かれると、そこからは達を先頭に、アリサの

家のSP達が現れた。

はやて「さあ、男らしく観念しいや!」

聖時「男らしくって、こんな格好をさせられて、男らしくもないでしょ!それに・・・冗談じゃないです!僕の女装姿の写真集を作る為の撮影なんてお断りです!」

聖時は百合の陰に隠れながらはやて達に言った。

百合「写真集?」

聖時「ええ、僕に色んな格好をさせてそれを撮影して、写真集を作るって言ってるんです。」

百合「せ・・・聖時さんの写真集・・・」

そう言つて百合は聖時の今の格好を見た後、何か考えるような素振りをした。

百合「・・・ポツ／／／／／／／／／／」

聖時「とにかく撮影会はお断り・・・」

ガシッ!(百合が聖時の肩を掴む音)

聖時「へっ?あ・・・あの星原先輩?」

百合「写真集・・・良い／／／／／」

聖時「え？」

百合「私もそれ……もらえますか？」

聖時の肩を掴みながらはやてに尋ねる百合。

はやて「へっ？え……ええ、もちろん！」

百合「なら捕まえます。」

聖時「え！そんな……」

アリサ「総員、確保おおおおお！」

聖時「ほ……星原先輩の……裏切り者おおおおお
おお！」

聖遼学園の空に聖時の絶叫が響いた。

《つづく》

特別編2 聖時の〇〇&〇〇〇疑惑と大捕り物事件（中編）（後書き）

話が予想以上に長くなったので3部に分ける事にします。
本編の更新を待っていた方、本当にすいません。

特別編2 聖時の〇〇&〇〇〇疑惑と大捕り物事件（後編）（前書き）

特別編2完結ですではどうぞ。

特別編2 聖時の〇〇&〇〇〇疑惑と大捕り物事件(後編)

特別編2 聖時の〇〇と〇〇〇〇疑惑と大捕り物事件(後編)

日が傾き、辺りがオレンジ色になる夕方。

普段着姿に戻った聖時がピティを連れて、ヨロヨロとおぼつかない足取りで歩いていた。

聖時「つ……つ……つかれた。」

ピティ「さすがプロのカメラマンだけの事はあるね。撮影中、聖時に「見た奴を虜にしてやろうと思いつめ！」とか「自分は世界最高の女だと確信して写るんだ！」だとか言つて聖時をその気にさせるんだもん。」

ピティは嬉しそうな声で聖時の横を飛びながら言った。

聖時「う……う……う……終わった後に自己嫌悪………
なんか色々終わった……。」

ピティ「なに落ち込んでるの？いや、撮影の最後のは仕草から何まで、見てる限りではまさに完璧な女の子だったよ。」

聖時「うっ！（グサッ！）」

ピティ「いやホント、可愛かったよ」 最後の方に着た魔法少女の衣装（なのは無印時代のなのはの格好）した時なんて、あまりの可愛さにフェイトなんて鼻血出して気絶しちゃったもんね」 ってどうしたの？」

声がしなくなつた聖時の方を見ると、聖時は地面に両手を付いて黄昏していた。

聖時「う……うつつつ、僕……男なのに……しかも写真集……」

ピティ「……あー、聖時？と……とにかくもうすぐ日も暮れるから早く帰ろう？今日の夕飯の仕度は聖時がしなきゃいけないんじゃない？」

聖時「……そうだね……早く帰ろうか……」

そう言いながら聖時はフラフラとおぼつかない足取りで家へと向かった。

*

聖時「ただいま」

ピティ「ただいま」

聖時とピティは神谷邸の玄関と扉を挨拶しながら開けては入って行った。

すると家の中から二人の挨拶に声を返す者が居た。

ふたば「お帰りなさい」

聖時「うわあああああつ！！」

ふたばに声をかけられて驚く聖時。しかし、それは無理もなかった。昼間、彼が帰ってきた時、ふたばは黒い軍服姿で、ムチを振るい聖時を追い掛け回したのである。しかし、今の彼女の格好は普段彼女が休日で着ているなじみの私服であり、黒い軍服姿ではなく、昼の時に感じた、とてつもないプレッシャーも発してはいなかった。

そんな彼女の変わりようを見て、聖時は訝しげにふたばの顔を見た。

ふたば「？どうしたの聖時？私の顔に何かついてる？」

聖時「え？あ、いや……」

聖時はふたばの顔を見て頭に？マークを浮かべる。そんな時、ふたばの後ろに居たいつものメンバーの中からアルフが近づいてきて、聖時にだけ聞こえるように耳打ちしてきた。

アルフ「ボソ（フェイトから連絡を受けて、あたしが引き取ってきたんだけど、どうやら昼間、頭を強く打ったせいで、今日一日分の記憶が抜け落ちたちゃったみたいなんだよ）」

聖時「ボソ（えっ！頭を打って記憶が抜け落ちた?!）」

それを聞いて聖時は昼間、自分がふたばに伊達を投げつけた事を思い出した。

聖時（あゝ、アレで頭を打ちちゃったんだ・・・なんかふたばには悪い事をしたな）。僕的にはそれで助かったけど・・・）

そう思いながら、聖時はふたばに昼間追いかけられた事を思い返した。

聖時（なんで追いかけられたのか理由は今一わからなかったけど、これでもうふたばに追いかけられる心配はないみたいだな・・・）

そう思いながら聖時はふたばを見た。

ふたば「そう言えば聖時。今日、わたし何かしたの?」

聖時「へっ?何かって?」

ふたば「いやね、気がついたら居間で寝かせられていて、頭にたんこぶが出来てて、今日一日の記憶が無くなったの・・・ねえ、何か知らない?」

聖時「え・・・え」と、詳しくは・・・」

ふたば「そう……」

聖時「あんまり気にしない方がいいよ。忘れたって事はたいした事
ない一日だったんだよ。」

ふたば「うん……それもそうだね。」

聖時「それよりもふたば。今日は大事を取って早めに帰って休んだ
ほうが良いよ。」

ふたば「それもそうだね。実はまだ少し頭が痛いからそうするよ。」

そう言いながら、ふたばは家へと帰って行った。

そんなふたばの背中を見送った後、聖時は残ったメンバーに顔を向
けた。

その顔は顔では笑っているが、目があきらかに怒っているのが目に
見てわかる表情だった。

聖時「さ〜て、昼間はよくも僕を見捨ててくれたね。それに今日、
なんでふたばがあんな格好をして僕を追いかけたのか、じつ々
り聞かせてもらっからねえ〜」

琴乃「あ……え〜と。」

刹那「せ……聖時さん？」

士郎「お……落ち着いて話し合おう!」

数時間後の別荘の居間。

ここで聖時は今日の昼間、なんでふたばがあんな事になったかをアキ達に聞いていた。

聖時「はあ！僕がホモ&オカマに目覚めたあ？！」

アキ「え．．．ええ。」

聖時「なんでそんな話が出てくるの！？」

裕也「い．．．いや．．．なあ、だって聖時の部屋からBL系の本が出てくるし．．．」

刹那「聖時さん宛に女装指南用の本が送られてくるし．．．」

剛「別荘内の聖時の部屋から描きかけのBL系のマンガの原稿が出てくるからつきり．．．」

聖時「はあ？！なにそれ？！全然見に覚えが．．．」

無いと言おうとした時、聖時はそれらに関係するであろう出来事を思い出した。

聖時「そう言えばこの前、ピティが僕の部屋のベッドの下から出て来る所を見たな．．．たしかあの時は「ベッドの下に小銭を落とす」って言ってたな．．．」

聖時の話を聞いて全員が一斉にピティの方を向く。
ピティはなにか気まずそうな顔をした後、全員の視線から目を逸らすように、あさっての方向く。

聖時「それにこの前、コソコソとパソコンのネット通販で何か買ってたし……」

全員のピティを見る視線がますますきつくなる。

聖時「この前なんか、マンガを書くのに必要なインクだとか、スクリーンションを買ってきて欲しいと頼まれたし……」

士郎「……なるほどな」

ピティ「あ……あはははあ……」

聖時「……何か言い残すことは無いか？」

ピティ「あー、弁護士を要求します……」

全員『却下!!』

ピティ「即答!!…って……ああああああ!!」

別荘内にピティの絶叫が響いた。

翌日の朝。
神谷邸の玄関。

ユニ「それでは行ってきます。」

童虎「おおユニ殿。今日は少し遅めなのですか。」

ピティ「……………」

ユニ「ええ。今日は少し遅めの出勤なんです。」

童虎「そうですね。それは良い。最近、ユニ殿は何かと忙しいかったですから、朝、ゆっくり出来るのはとてもいいことです。」

ピティ「……………」

ユニ「そうですね。朝、ゆっくりする事が出来ると気持ちにゆとりが持てますから、とてもいいと言われていますから。……………所で……ピティ、何をやってるの?」

ユニは玄関の軒下に簞巻きで逆さに吊るされ、口には猿ぐつわ。胸に「お仕置き中」と書かれてあるピティを見てたずねた。

童虎「なんでもお仕置き中だそうです。聖時がかなり怒っていたみたいですが……………」

ユニ「……………ピティ……………あなた何をしたの?」

ピティ」・・・・・・・・・・・・・・・・」

*

聖時「まったく、ピティにも困ったもんだよ。人の趣味をとやかくは言わないけど、人の名前を使ってネット通販で買物するのはさすがに許せない！おかげでヘンな誤解を受けたし・・・まったく！！」

ふたば「まあまあ、罰として簞巻きにして逆さ吊りにしてきたんでしょ？今頃反省してると思うから、帰ったら許してあげてよ。」

聖時「ま・・・まあ、ふたばが言うなら・・・」

そう言いながら聖時は、ふたば、アルフ、刹那、アキを連れて登校のために校門をくぐって学園の敷地内に入った。

すると敷地内に入ってから複数の視線を聖時は感じ、周りを見渡した。

聖時「・・・・・・・・・・・・？」

刹那「どうしました？」

聖時「いや……複数の視線を感じるんだけど……」

アルフ「視線？」

刹那「それだったら私も感じましたが、敵意がありませんから放っておいてもかまわないと思います。」

聖時「そうだね……ん？」

聖時はふと、前方の掲示板に人ばかりできているのに気づき、そこから向いた。

聖時「な……なんだアレ？」

アルフ「なんの人だからだろうね？」

聖時「行ってみよう。」

そう行つて聖時は人だかりに近づき、その中心にある掲示板に視線を移した。

聖時「え〜と何が貼つてあるの……か……な?!」

ふたば「え?!これって……」

アルフ「あ……昨日のアレ……写真に取られてたんだ……」

刹那「あ……あははは……」

聖時は掲示板に貼つてある物を見て絶句していた。
そこに貼つてある物は新聞部の書いた、昨日の聖時達の追いかけて
こについての記事が書かれてあるものだった。しかも聖時のその時
の女装姿の写真付き……

男子生徒A「あー！！セージちゃんだ！！」

聖時「せ……セージちゃん？！」

男子生徒B「本当だ！セージちゃんだ！！俺、昨日のセージちゃん
の姿を見て、一発でファンになっちゃたんだ！」

男子生徒C「あ、俺も俺も！」

男子生徒D「セージちゃん！写真集出すんだって？俺、絶対買うか
らー！！」

男子生徒E「あ、俺も買う！」

聖時は異様な熱気に包まれた男子生徒たち（一部女子生徒も混じっ
ている）に囲まれたじろいだ。なぜなら生徒たちが聖時を見る目は
尋常ではなかったのである。

聖時「あ……え〜と……」

男子生徒F「セージちゃん！俺の気持ちを書き示した手紙です！ど
うか受け取ってくれー！！」

男子生徒G「あ、こらー！！抜け駆けするなー！！」

男子生徒H「そう出るなら、俺だって!!」

男子生徒I「セージちゃん!!俺の気持ちを受け取ってくれ!!」

聖時「う……うわ~~~~~」

男子生徒J「あ、逃げたぞ!!」

男子生徒K「待ってくれ、セージちゃん!!」

聖時「なんで男から求愛されなきゃならないんだあああああああ
あ!!」

大量の男子生徒に追われながら逃げる聖時とそれを追う男子生徒の
集団。

それを見送りながらその場に取り残された刹那……

刹那「……走って行っちゃいましたね……」

アルフ「うん……」

アキ「物の見事に殆ど男子生徒だけでしたね……」

ふたば「せ……聖時が……妖しい世界に住人に……
フ〜（バタツ!）」

アルフ「ふ……ふたば?!」

アキ「大変!倒れちゃった!」

刹那「ふたばさん?!ふたばさん!!」

この日、聖遼学園にセージちゃんファンクラブなるものが誕生したと言っ。

おまけ

なのは「昨日の聖時くん・・・可愛かったね」

はやて「ホンマやね〜。」

アリサ「写真集は早くて今月末には出来るみたい。」

はやて「それは楽しみやな〜」

すずか「そうだね。けど、それにしても聖時くん。本当に男の子にしておくのは勿体無いくらいの可愛さだったね。」

フェイト「うん／＼／＼／＼」

すずか「いつその事、今度聖時くんが寝ている隙に、取っちゃおうか（何を!!!!）」

なのは達『……………え?』

アリサ「……………すずか?」

はやて「すずかちゃん?・・・冗談やる?」

すずか「そう見える?」

なのは達『・・・・・・・・・・・・・・・・』

すずか「冗談だよ」

なのは「だ・・・だよね。」

はやて「せやな・・・」

フェイト「ボソ（・・・・・・・・・・本当に冗談かな?）」

アリサ「ボソ（ね・・・念のために聖時に警戒するよう言っておいた方が良いわね）」

なのは「ボソ（うん・・・・・・・・）」

なのは達『・・・・・・・・・・・・・・・・』

すずか「」

上機嫌な顔で歩いていくすずかを見て、複雑そうな顔をするなのは達であった。

ちなみに余談ではあるが、この話をしていた時、聖時はとてつもない悪寒に襲われたと言う・・・

特別編2 聖時の〇〇&〇〇〇疑惑と大捕り物事件(後編)(後書き)

すずか・・・取るって何を取るつもりだったのでしょうか・・・
お・・・恐ろしい!!

第34話 幻想界（前編）（前書き）

どうも、剣 流星です。

今回からしばらくは、原作の幻想界側に当たる話になります。
では第34話をどうぞ。

第34話 幻想界（前編）

第34話 幻想界（前編）

ここは聖時の別荘の居間。

そこにはいつものメンバーの他に新たに協力関係になった河瀬裕也と香野由香が居た。

由香「これが聖時くん達の友達を意識不明にした犯人・・・」

由香は居間のソファーに座りながら、聖時が書いた似顔絵を見ていた。

裕也「前にも見せてもらったけど、本当にこんなヤツが居るのか？目が赤くて髪が緑色。耳がと尖っているなんてさ」

聖時「僕もそう思った時もありましたけど、事実です。」

由香「ふ〜ん・・・ねえ子が意識不明にした方法ってSEなの？」

ふたば「・・・いいえ、違います。私は才人くんが意識不明になった時に居合わせてましたから良く分かるんですが、あれはSEではないとおもいます。」

由香「SEじゃない？」

ふたば「はい……これは私の予想なんですけど、実は私、才人が意識不明になる直前、何かを空気を切って飛んでくる音を聞いたんです。」

裕也「空気を切る音？」

ふたば「はい、もしかしたら、犯人は相手を意識不明にする何かを才人くんに投げつけたんじゃないかと思うんです。」

聖時「意識不明にする何か……とにかく協力者も増えたし、やる事も増えた。そこで当面の間は香野先輩の記憶探しと、犯人探しと二手に分かれてやっていこう。」

アキ「そうだね。」

明日香「じゃあ、私たちは今まで通り、学園の外での犯人探しだね。」

琴乃「そうね。あれ？どうしたんです、刹那さん？」

琴乃は似顔絵を見て考え込んでいる刹那に声をかけた。

刹那「いえ、この犯人について考えてたんですけど、ひよっとしてこの犯人、この世界の住人ではなく、私のように別の世界から来たものなのではと思うんです。」

士郎「別の世界？」

刹那「ええ、まずこの犯人の一番目を引く・・・この尖った耳なんですけど、こんな形をした耳を持っている種族はこの世界には居ないはずですよ。」

アルフ「確かに、この世界の人間以外の種族って、外見的には人間と殆ど変わらない姿をしているのが殆どだからね。」

刹那「ええ、ですからもしかしたら犯人は他の世界からこの世界に来た者なのではと思ったんです。」

猛「異世界人か・・・」

剛「確かにそう考えれば、この容姿も納得ができるな。」

聖時「それにしても・・・」

聖時はテーブルの上に置いてある似顔絵を持ってつぶやく。

聖時「もしそれが本当なら、この子が居た世界ってどついつ世界なんだろう・・・」

*

聖時達が別荘で犯人が異世界人なのではと言っていた時から少し時間をさかのぼった時間帯。その犯人がいる世界、幻想界。

そのある朝。

その世界にある聖時達の通う学園と同じ名の聖遼学園近くにある通学路。

その道には聖遼学園の制服を着た様々な種族の子達が学園に登校するために歩いてきた。

金色の猫目のワータイガー、額に一本角を持つ夜叉族、小さい体で、昆虫のような羽根を持つ妖精族など様々な種族の生徒たちが、話ながら、時にはじゃれ合いながら学園へと歩いていく。

そんな人ごみの中を縫うように、聖遼学園中等部の制服を着て、右手に青色の三角形の形のクリスタルの飾りの付いた手袋をした長い金髪の少女が走っていた。

やがて少女は目の前に長い赤い髪で死神族の特徴の大きな鎌をもった、聖遼学園中等部の制服を着た少女を捕らえると大きな声でその少女に呼びかけた。

金髪の少女「優希お姉ちゃん！」

優希「え？アリシアちゃん？」

アリシアと呼ばれた少女は優希と呼ばれた少女の側まで駆け寄る。

優希「どうしたの走って来て？」

優希は走ってきたアリシアに声をかけた。

アリシア「忘れ物を届けに来たんだよ。」

優希「え、忘れ物？何かな・・・鞆もお弁当も鎌も持ってるし・・・」

アリシア「・・・気がつかない？」

優希「う・・・うん。」

優希がうなずくと、アリシアはため息をついて自分の手に持っている優希の忘れ物を差し出した。

アリシア「ほら、この子が置いていかれた〜って泣いてるよ。」

アリシアの手のひらの上には、緑色の蛇をデフォルメかしたようなマスコットキャラのような生き物がきゅ〜きゅ〜と泣いていた。

優希「あ、ポチ！やだ私ったらすっかり・・・ごめんなさい。」

アリシア「まったく、自分の使い魔を忘れるなんて。」

優希「ごめんね、アリシアちゃんもわざわざ届けてくれて。」

アリシア「いいよ別に。私居候だから、これくらいしないと。」

優希「そんなこと言わないで。私はアリシアちゃんの事実の妹みたいに思ってるんだから。」

アリシア「ありがとう。優希お姉ちゃん。」

そう言た後、二人は並んで歩き出した。

優希「そう言えば聖遼の中等部にはもう慣れた？」

アリシア「うん。入学してからもう2ヶ月以上経ってるもん。いいかげん慣れるよ。」

優希「そうだね。……アリシアちゃんが家に来てからもう3年たって、アリシアちゃんは今年から中学生。月日が経つのは早いな。」

アリシア「そうだね。……3年前、お母さんのお仕事の都合で、お母さんと一緒に居られなくなって、それでお母さんの知り合いである舞波の家に居候する事になった……」

優希「……アリシアちゃん、寂しくは無いの？お母さんと離れて暮らして……」

アリシア「ううん、大丈夫。確かにお母さんと一緒に居られないのは少し寂しいけど、優希お姉ちゃんや聖邪お兄ちゃんが居てくれるから大丈夫。」

優希「アリシアちゃん。」

???「おゝい、優希ちゃん！アリシアちゃん」

突然声をかけられて、声がした方向を向く二人。

優希「あつ、鈴科先輩、に桐生先輩。」

声のした方向から声の主である高等部の制服を着た女子である幽霊族の鈴科流水音すずしろと高等部男子の制服を着て、肩にギターケースを担いでいる軽音部所属の人間族の桐生真きりゆうが歩いて二人に近づいてきた。

優希「おはようございます。鈴科先輩、に桐生先輩。」

流水音「おはよう二人とも。」

真「おゝす。」

二人はアリシア達と合流すると、そのまま一緒に並んで歩き出した。

流水音「二人とも一緒に登校？相変わらず本当の姉妹みたいに仲がいいわね。」

アリシア「はい それよりも今日は一緒に登校してるんですね。お二人も仲がいいんですね。」

真「な・・・仲が良いつて・・・そんなじゃね〜よ。さっきまたま会っただけだよ。」

ぶっきらぼうに言う真。

流水音「なによ！私と居るのがそんなに嫌なの？！」

真「別にそんなこと言ってないだろうが！なに突っかかって来るんだよ！！」

アリシア「まあまあ、それよりも桐生先輩、今年も文化祭で軽音部・・・ZAPは演奏を？」

アリシアは学園の軽音部所属のメタル系バンドで桐生が所属しているZAPの事を聞いた。

桐生「ああ、しかも聞いて驚け！今年はなんと去年の文化祭で好評だった流水音のピアノとのジョイントもあるんだぜ！」

流水音「ちよつと！その話は断ったはずよ！第一メタルにピアノが合うわけではないでしょ！」

桐生「だがよ」

流水音「第一優しい音楽じゃなきゃ誰も聞いてくれないわよ！」

桐生「優しいってお前な・・・そんな腑抜けた薄っぺらいもの、ZAPが演奏できるわけねーだろう！この半透明女！のろいのレンタルビデオ！」

流水音「ちよつと、なによその言い方！それに「呪いのレンタルビデオ」ってワケ分かんないわよっ！」

アリシア（あはははっ・・・流水音さんが幽霊族だからそれをひっかけたって事だね・・・）

優希「あ・・・あの～お二人とも喧嘩は・・・」

優希が二人の方を見ながら喧嘩を止めようとした時、前方を見てな

かったせいで前を歩いている人にぶつかってしまった。

優希「きゃー！」

前方を歩いていた人「おわっ！」

優希はぶつかった後、すぐにぶつかった方を見て、自分が前方不注意でぶつかった事に気づき、すぐに謝罪した。

優希「ご……ごめんなさい！」

ぶつかった人物「痛つて〜な！どこ見てるんだオラツ！」

ぶつかった人物は、アリシア達を通っている聖遼学園高等部の制服を着た、ガラの悪いワータイガー族の男子だった。

ワータイガー族の男子「つたくよ！ちゃんと前見て歩けよ！」

優希「す……すいません……」

ワータイガー族の男子の迫力に縮こまってしまい、言葉が小さくなる優希。

ワータイガー族の男子「あん！もっとデカイ声で言えよコラツ！こっちは朝、コンビニでタバコ買おうとした時、天使族の女に電撃魔法を浴びせられてイライラしてるんだ！」

優希「す……すい……ま……」

ワータイガー族の男子の態度でますます縮こまり、おびえる優希。

そんな優希を見て、流水音が優希を助けるべく割って入った。

流水音「ちよつともう良いでしょう！こんなに謝ってるじゃない！」

ワータイガー族の男子「あん！関係ないやつは引ッ込んでろ！」

桐生「関係なくね〜よ。コイツは俺の連れだ！」

ワータイガー族の男子「なんだてめ……ん？てめ〜確かZ A Pとか言う軽音部所属のバンドのギターの奴じゃないか？」

桐生「ああ、そうだが？」

ぶつきらぼつに答える桐生。

ワータイガー族の男子「ちよつど良いや。てめ〜で憂さ晴らしをしてやる。テメ〜は前々から気にいらなかったからな！」

桐生「ほつ？やるつってのか？上等だ！」

ワータイガー族の男子の挑発にノッて構えを取る桐生。

流水音「ちよつと桐生、止めなさいよ！こんな所で騒ぎを起こしたら、今年の文化祭でのステージでの演奏ができなくなるわよ!？」

桐生「くっ!」

そう言っつて悔しそつに構えを解く桐生。

ワータイガー族の男子「へ〜、いい事聞いたな。そんじゃお前は俺には手が出せないんだな。そんじゃ今からお前は俺のサンドバックだ！」

そう言っつてワータイガー族の男子は桐生に殴りかかろうとした。

アリシア「や・・・やめてください！」

その時、アリシアが二人の間に割って入った。

優希「アリシアちゃん！」

流水音「あんだ？第二次成長期前の小学生は引っ込んでる！」

アリシア「！」

その時、ワータイガー族の男子の一言で、桐生たちは一瞬フリーズした。

優希「あ……………」

流水音「や……………やばい……………」

桐生「ま……………まずいぞ……………」

アリシア「……………第二次成長期前の小学生……………確かに……………私は、同年代の子達と比べれば子供っぽい体型ですよ……………」

アリシアは顔を伏せて、なにやらぶつぶつと言いだした。心なしか、彼女の右手の手袋の中から黄色い色の光が漏れ出し、彼女の体から

パチツと電撃がはじけ始めた。

アリシア「胸も無いし・・・背もそんなに高くないし・・・」

体から出てくる電撃の量がますます増える。

流水音「あ・・・あわわわわっ」

桐生「おい・・・二人とも逃げるぞ・・・」

優希「は・・・はい・・・」

アリシア「お母さんはあんなにスタイル良いのに・・・どうして娘の私はこんななの？・・・」

そうなのである。確かにアリシアの母親、プレシアはその歳の割には抜群のプロポーションをしていた。

はたから見ても美人と言う言葉がよく似合う女性である。そんなプレシアの娘であるアリシアもそんな風に成長してもいいはずなのだが、一度死んで生き返った弊害なのか、他の同世代の子と比べると、成長の仕方が極端に遅かった。背の伸び方も遅く、胸の成長などかわいそうと思わず言ってしまう位なのである。

ワータイガー族の男子「な・・・なんだ？」

ワータイガー族の男子はアリシアの変貌に戸惑い、先ほどの勢いをなくしていた。それどころかアリシアの出す雰囲気に飲まれ、後ずさりし始めた。

アリシア「クラスの男子は・・・私の事をペッタンちゃんとか言

うし……あなたも私をそう言っんですか？」

ワータイガー族の男子「？ペッタンも何も、本当のことだろうが。」

桐生「あ……あいつ言っちまいやがった！」

優希「アリシアちゃん！落ち着いて！」

流水音「二人とも伏せてえええええっ！」

アリシア「う、うっうっうっ（涙目）どうせ私はペッタンですよ
おおおおおおお！！！」

アリシアがそう叫んだ瞬間、アリシアが全身から出した電撃があたり一面を埋め尽くした。

ワータイガー族の男子「うぎゃああああああ！！！」

桐生たちは、流水音が叫んだ瞬間に地面に伏せたので巻き込まれなかったが、ワータイガー族の男子は巻き込まれてしまった。

電撃が収まり、優希はおそろそる顔をあげて辺りを見回すと、あたり一面は電撃で焼け焦げ、ワータイガー族の男子は電撃で綺麗にミデアムになっていた。

流水音「あゝあ、またやっちゃったね……」

桐生「馬鹿な奴だぜ……アリシアのタブーを言っただからな」

優希「アリシアちゃん？大丈夫？」

アリシア「うっうっうっうっ、ペタンじゃないもん。ちょっと成長が遅いだけだもん。」

優希「あゝよしよし。そうだよ。成長が遅いだけだもんね。」

優希はアリシアの頭に手をやりナデナデと頭をなでながらアリシアをなぐさめた。

桐生「それにしても、相変わらずの破壊力だな・・・」

流水音「だね。あつ、まずいよ、このままじゃ遅刻しちゃう。」

流水音は自分の腕時計を見てそう言った。

真「やべーな。先週遅刻ばっかしてたから、今週は遅刻できないんだった。」

そう言って駆け出す流水音と真。

優希「あつ、私、今日は高等部に用があつたんだった。だから急がないと」

アリシアをなぐさめながら優希は今朝、用が有った事を思い出した。

アリシア「ぐすん、用って確か聖邪お兄ちゃんが言ってた心靈管理局のお仕事の事？」

優希「うん、お兄ちゃんが言うには高等部の九門くもん一馬かずまって言う先輩に会わなきゃならないの。」

アリシア「そう言えば、私も聖邪お兄ちゃんから、優希お姉ちゃんがその人に会う時に一緒に行って欲しいって。」

優希「アリシアちゃんも？なんだろうね。」

首を傾げる優希。

アリシア「ひよっとして、この前言った心霊管理局のお仕事のお手伝いについてか・・・それともこの・・・」

アリシアは自分の右手の手袋にはめ込まれている青色の三角形型の飾りを見る。

アリシア「心霊管理局が最近開発して、私が今作動テストしているこのデバイスのバルニフィカスの事についてかな。」

優希「たしかそれって心霊管理局が、アリシアちゃんのお母さんが技術提供して完成した新しいマジックアイテムだったよね。」

アリシア「うん、その関係で私がこれのテストを受ける事になったんだけど、今回の事と何か関係があるのかな？」

優希「わからない。会えばわかるかもしれないね。」

アリシア「そうだね、なら急ごう。急いで会いに行かなきゃ時間がなくなっちゃう。」

流水音「ほら二人とも早く。このままじゃ遅刻しちゃおうよ!」

一足先に駆け出したかけだした流水音が道の先で叫んできた。

優希「あ、はーい！ほら、行くっつ？」

アリシア「うん。」

こうして二人も急いで学園へと走って行った。

そして……

ワータイガー族の男子「そ……その前に……きゅ……救急車……（ガクッ）」

ほっとかれる脇役、役一名……

チーン

《つづく》

第34話 幻想界（前編）（後書き）

Lの季節の幻想界側のキャラで舞波優希は作者が一番気に入っているキャラです。

うまく書く事ができるかいささか心配です。ではでは

第35話 幻想界（中篇）（前書き）

どうも剣 流星です。

季節の変わり目なのか、最近体調を崩しがちです。

みなさんは体に気をつけてください。

では第35話をどうぞ。

第35話 幻想界（中篇）

第35話 幻想界（中篇）

アリシアが電撃魔法で、絡んできたワータイガーの男子を撃退してからしばらく経ってからの通学路。

アリシアの電撃魔法の焦げ跡が、あちらこちらに残る道を赤い髪の毛の高等部の制服を着た少年が歩いていた。

その少年は下を向いて歩き、事あることに「ハア〜」とため息を吐いて歩いていた。

彼の名前は九門くもん一馬かずま。ネクロマンサーの一族の少年である。

さて、なぜこの少年、九門一馬はため息を吐きながら歩いていると言うと、実は昨日、心霊管理局からの入局の為とも言うべき任務を受けたのである。それはニューロマンシーを使ったもので。彼はその任務に失敗し、落ち込んでいると言うことである。

一馬「ハア〜」

リファ「九門……元気出すです。」

ため息をばかりだす一馬に、彼の妖精型のエルフィンであるリファが声をかけた。

リファ「意識不明者に接続するのは難しいと言われています。です

から失敗しても仕方がないです。』

一馬「けど……」

リファ『九門……入局の為の試験はこれだけじゃないです。他ので取り返せば……！後方から未確認人物が急速接近中う！二秒後に激突コースですう！逃げてー！』

一馬「え？」

????「うわー、どいてどいてー！」

一馬の背後から元気な声が聞こえてきたので、一馬はハツとして振り返った。

????「ほっ！」

一馬「うわっ!?!」

一馬の両肩に一瞬かかる重み。

一馬が気が付いた時には、彼の頭上を女の子が跳んでいた。

一馬の方を支えにして、跳び箱のように飛び越えていく。

????「あっ、おっはようー、カズくん！」

跳びながら、女の子が一馬を見下ろしてそう声をかけてくる。

一馬「前を……」

見ていないと、危ないよ……一馬が言おうとしたら。

????「むぎゆう!」

案の定、彼女はものの見事に着地に失敗した。

一馬の前で派手にずっこける。

????「痛たたたたー……………」

一馬「大丈夫、双葉?」

彼女は^{みおずみ ふたば}澗泉双葉。緑の髪に尖った耳、赤い目が特徴のドライアド族の女の子だ。去年一馬と同じクラスになった事がある一馬の友人である。

双葉「あつはー、ちょっと勢い付けすぎちゃったよ。でもでも全然大丈夫っ!」

一馬が差し出した手を取って双葉は立ち上がった。

一馬「相変わらずパワー全開だね、双葉って。少しは元気をセーブしたら?」

双葉「え、なんでー?あたしのお母さんが言ってたけど、元気な方が毎日ワクワクできるんだよ」

一馬「双葉がうらやましいな。僕は今、とてもそんな気じゃないんだ…………。できるなら穴を掘って入りたいよ…………」

双葉「穴掘りならあたしのクラスの安藤くんに頼めば?ほら、安藤くんってコボルトだからさ!穴掘り得意だって言ってた!」

一馬「いや、そういう意味じゃないんだけど……そ、それより、双葉はどうしてあんなに急いでたの？」

双葉「あーっ！そうだ、遅刻！」

一馬「遅刻？」

すると、見計らったかのように予鈴が学園の方から鳴り響く。

リファ『現在時刻、8時25分です。』

一馬「…………え、もうそんな時間!？」

双葉「もーこんな時間だよ！遅刻しちゃう！カズくん、のんびりしすぎ！ほら、ダッシュ！ダーシュ！」

リファ『ここから教室まで、全力疾走すると2分で到着可能なのです。濤泉の言う事聞いた方がいいです!』

一足先に走り出した双葉を追いかけるようにして、一馬も慌てて校門へ走り出した。

二人はそのまま速度で校門を抜け、校舎に入り、下駄箱で上履きに履き替えた後、再び廊下を走り出す。

双葉「んじゃっ、また後でねー、カズくん！」

一馬の前を走っていた双葉が、振り返って小さく手を振った。

双葉は2年B組で、一馬はA組と、クラスは別々なのでここで分か

れたのである。

一馬は双葉に手を振り返した後、自分の教室に入って行った。

教室に入ると、教壇にはまだ担任の先生の姿が無かった。

一馬「ふう、間に合った」

????「間に合っていないですわ」

一馬「え？」

突然、声をかけられてそちらの方を向こうとした時、その方向から電撃の魔法が一馬に向かって飛んできた。

バチィ！

一馬「うわっ！」

一馬は慌てその場を飛び退き、それをかわした。

一馬「あ、危なかった・・・」

さっきまで一馬が立っていた場所は、先ほどの魔法で黒焦げており、ブスブスと煙が立ち上がっていた。

????「あら、変ですわね・・・。一馬さんに頭から水をかけようと思ったんですけど、なぜか電撃魔法になってしまいました。」

呑気に一馬にそう言っている少女、天使族特徴の白い肌と髪をして

いる彼女は、一馬のクラスメイトの純耶すみや佳奈かな本人だった。

リファ『魔法をまともに食らったら、火傷は確定だったです。ヘタをするとその火傷が悪化して死に至っちゃうかもしれないなあですう』！』

一馬「（いや死にはしないでしょ）」

リファ『0・0024%もの可能性があったですよ。九門、避けて正解だったです！』

佳奈「まっ、それはそれとして、遅刻はいけませんよ、一馬さん」

一馬「それはそれとして、じゃないよっ。佳奈、僕を感電死させるつもりだったの!？」

佳奈「規則を乱した人に、ちょっとした「正義の鉄槌」を下してるだけです。まったく最近では規則を乱す人が多くていけませんですわ。今朝も、うちの学生がコンビニで堂々とタバコを買おうとしたので、「正義の鉄槌」を下してきたところです。」

一馬「佳奈・・・そんなことしてたんだ。」

リファ『佳奈の魔法を食らって、その人は大丈夫でしたでしょうか？死んでなきやいいですが・・・』

一馬「（確かに・・・佳奈は魔法の力の加減がヘタだからね・・・にしてもちよっとう偉そうだね。）

リファ『佳奈は規則や戒律を守る事にすごくこだわるタイプですう。』

ま、天使族なら仕方がないですけど。』

天使族は法や規律を守る種族であり、元々は神に仕える神官だったと伝えられている。背中に羽を持っているが、普段は透明化して見えないようになっていた。法や規律を守る職についているものが殆ど占めている。そのため、天使族である彼女もまた法や規則にうるさい性格なのである。

一馬「・・・にしても、遅刻しただけで、いきなり電撃魔法を撃ってくるのはどうかと思うんだけど」

佳奈「それは、さっきも言った通り、間違えたんですわ。ごめんなさい」

視線を逸らしながら答える佳奈。

リファ『佳奈が魔法をミスする確立はこれまでの経験から計算して81%です。ちなみに九門がその餌食にされたのは208回に及ぶです。』

一馬「（そう言う情報を教えないでよ。へこむから。）

一馬「佳奈は魔法のセンス、ゼロなんだから、軽々しく使っちゃダメだよ」

佳奈「う・・・。人が気にしている事をはっきり口にするなんて・・・一馬さんはいじわるですね。そういうの、嫌われますわよ?」

一馬「問答無用で魔法によるお仕置きをしてくる天使よりはマシだ

と思う」

佳奈「それは規則を守らないからいけないのです。私はそれを正してあげようとしているだけですわ。」

一馬「佳奈の場合はやりすぎなんだって」

佳奈「ああっ、私に口答えをするなんて、一馬さんはいつからそんな不良に？中学生の頃はもっと優しくかったですのにつ！」

一馬「（佳奈との付き合いは、確かに中学の頃から続いているけど、今のやり取りが不良っぽいかな？）

そんな風に一馬が考えていると、ふと自分たちに刺さる視線に気がついた。

その視線の方を見ると、クラスメイトがニコニコとした顔で見ている。

クラスメイト達は「相変わらず仲が良いな」とか「純耶は九門の保護じゃだからな」とか「夫婦漫才お疲れさん」だとか言っていた。

一馬「みんな、その認識おかしいよ。第一、保護者は被保護者を感じ電死させようとしないうよ。」

佳奈「そうですわね。私は一馬さんの保護者と言うよりは、お姉さん代わりと言った方が正しいですわね。」

一馬「いや、それもおかしいよ。第一、僕達は同じ年でしょう」

佳奈「あら、ついこの前までは、私の後をトテトテとくっついて歩

いてたではありませんか。」

一馬「そ、それはついこの前って言うより、中等部に居た頃の話じゃ……」

そんな風に話していると、教室の扉を開けて担任が入ってきた。

一馬たちは慌ててそれぞれの席へと着く。

そうしている時、一馬は腰の辺りが熱を帯びている事に気付いた。それはズボンの左ポケットから発していた。

一馬「（？なんだろう）」

そう思いながら一馬はポケットに手を入れて、発熱している物を取り出した。

一馬「（なんだこれ？）」

リファ『ペンダントみたいです。』

一馬が取り出したものは、腕時計ほどのサイズの七角形型にカットイングされた水晶のペンダントが金属の枠にはまっているペンダントだった。

一馬「（なんでこんな物が……リファ、このペンダントをいつポケットに入れたのか、僕の記憶を検索して。）

リファ『……該当なしです。』

一馬「（そうだよな。自分で買った覚えも、誰かにもらった記憶もない。このペンダントはいつか僕の中のポケットの中に紛れ込んで

だんだらう……)

一馬はそう考えながらそれをポケットにしまい直し、後で調べよう
と思いつつ、教壇に居る担任の教師の話に耳を傾けた。

《つづく》

第36話 幻想界（後編）（前書き）

剣「颯爽登場！銀河美少年！タウ……」

ピ「ピティちゃんキー……ク……」

剣「ホゲツ……」

ピ「あんたが言っても全然キマないからヤメろ……！大体、美少年なんて言える歳じゃないだろう……！」

剣「うっうっう、ひ、ひどい……」

ピ「とにかく、第36話をどうぞ」

剣「それ……オレのセリフ……ガクッ……」

第36話 幻想界（後編）

第36話 幻想界（後編）

放課後の九門一馬の教室。

帰り支度をしている彼の元にクラスメイトの一人、イフリート族の提齋つづめとしが声をかけてきた。大柄な体に赤い髪、そして人の良さそうな顔と性格が特徴の人物である

齋「九門くん。」

一馬「ん、何？」

齋「実は君に伝えなきゃならない事があったんだ。」

一馬「え？伝えたい事？なに？」

齋「え」と確か、今朝、九門くんが来る前に中等部の女の子二人が君を尋ねてきたんだ。赤い髪と金色の髪で、二人とも長い髪だったよ。」

一馬「中等部の女の子？中等部の女子には知り合いは居なかったはずだけど……。」

齋「赤い髪の方の子の名前は聞いてるよ。たしか舞波優希って名前だったよ。」

リファ『舞波ってたしか、昨日試験の時に立ち会った心霊管理局のエージェントと同じ性です。』

一馬「（そう言えばあの人・・・聖邪さんも舞波だったね。）

斎「たしか放課後また尋ねてくるって言ってたよ。」

一馬「放課後にか・・・ありがとう斎。」

斎「いって。それじゃまたね。」

一馬「さよなら。また明日。」

挨拶をして教室を出て行く斎。

一馬「さて・・・舞波さんだけ、その子が来るまで、教室で待ってない。」

そう言つて一馬が自分の席に座りなおして待とうとした時、教室の扉の方から誰かが呼ぶ声が聞こえた。

????「す・・・すいません。あの〜」

一馬「うん?」

一馬は声のした方を見た。そこには赤い長い髪と金色の長い髪の中等部の女の子二人が居た。

リファ『九門、もしかしたら斎が言ってた子はアレなのでは?』

一馬「（うん、多分ね。）」

そう、リファと会話しながら、一馬は教室の扉のところに居る二人に近づいた。

一馬「え〜と、何か用かな？」

優希「すみません、九門一馬先輩はいらっしゃいますでしょうか？」

一馬「九門一馬は僕だけど？」

優希「あ、そうなですか。ようやく会えました。」

アリシア「よかったね、優希お姉ちゃん。」

一馬に会えた事に喜ぶ二人。

優希「あつ、すみません。自己紹介がまだでしたね。え〜と、中等部3年の舞波優希です。」

アリシア「中等部1年のアリシア・テストロッサです。」

そう言ってお辞儀をする二人。

一馬「どうも九門一馬です。それで、僕に何か用事があるのかな？」

優希「あ、はいっ」

優希は背筋を伸ばすと、コクコクとうなずいた。

優希「じ、実は、兄から心靈管理局の仕事について、伝言を……」

一馬「君のお兄さんって、舞波聖邪さん？」

優希「あ、はい、そうです。」

一馬は優希を見て聖邪とは対照的な子だと思った。

聖邪は堂々として、すこしプライドが高そうな感じがしていたのに対し、優希はやけにオドオドした態度をしていた。髪の色こそ同じだから、兄弟だとわかるが、それ以外だけ見ると、とても兄弟とは思えない感じがした。

アリシア「聖邪お兄ちゃんを知ってるんですね。」

一馬「え？聖邪お兄ちゃんって、君も聖邪さんの妹さん？」

一馬はアリシアの聖邪お兄ちゃんと言う言葉を聞いて、アリシアも聖邪の妹だと思った。

しかし、聖邪や優希との共通点である赤い髪ではなく、夕日に照らされて美しく光る、長い金髪であった為、一馬は言葉が疑問系になっってしまった。

アリシア「あ、いいえ、違います。舞波の家にお世話になっていて、それでそう言う風に呼んでいるだけです。」

一馬「あ、そうなんだ。」

アリシア「ええ、聖邪お兄ちゃんは親と離れて暮らしている私によ

くしてくれるんで、自然とそう言う風に呼ぶようになったんです。今では、実の兄のように思っています。」

一馬「へ〜。」

優希「あの〜そろそろ兄の伝言を伝えたいんですけど……」

優希が恐る恐るアリシアと話している一馬に言ってきた。

一馬「あ、ごめん。それで、聖邪さんの伝言って？」

優希「あ、はい……。ええと……」

なぜか優希は考え込んでしまった。

やがて、おずおずと口を開いた。

優希「九門先輩は、ニューロマンシーと言う魔法が使えると聞いたんですが……」

一馬「うん、使えるけど」

アリシア「あ、聞いた事がある。たしか人の心を読む事ができる魔法でしたっけ？」

アリシアがニューロマンシーについて、聞きかじった程度の知識で答えてきた。

一馬「正確にはちょっと違うかな。ニューロマンシーは他人の記憶を探る魔法なんだ。」

優希「そ、そうですか……」

そう言つて優希はしばらく黙つて考え込んだ後、口を開いた。

優希「実は、兄から、変な事を言われて……」

一馬「へんな事？」

優希「はい、実は九門先輩に、任務内容について、口頭で直接伝える必要はないつて……」

一馬「え、それつて……もしかして、ニューロマンシーを使つて君の記憶を読めつて言う事？」

アリシア「え、そうなの？」

アリシアは優希の言葉を聞き返した。

優希「え、ええ。」

アリシア「大丈夫なの？」

アリシアは心配そうに優希を見る。

一馬「大丈夫だよ。プライベートなことに関しては触れないようにするから、と言うか、ニューロマンシーを使う者にとって他人のプライバシーに関する記憶を無闇やたらに覗く事はご法度だから。」

アリシア「そう……なんですか」

一馬「うん、だから安心して。」

アリシア「あ、はい」

優希「では、お願いします。ちなみに、これ課題なんだそうです。」

一馬「課題？」

優希「九門先輩の、心霊管理局のエージェントとしての適正を見るための……」

リファ「ひよええ！これは入局審査を兼ねているですか！」

一馬はこれを聞き、すこしあせった顔をした。

今の一馬は立場上あくまでただの学生であり、心霊管理局入りを希望する研修生のようなものであった。

一馬（ここでうまく任務をこなせば、正式に心霊管理局への入局に内定をもらえるかもしれない。しかし……）

一馬は昨日接続に失敗しており、そのため、うまくやる事ができるかと思っていた。

リファ「九門……ファイトです！昨日の汚名返上のチャンスです
」！

一馬（けど……）

そんな風に悩んでいる一馬に、アリシアは心配そうに声をかけた。

アリシア「あの〜大丈夫ですか？」

一馬「え？あ、うん、大丈夫だよ」

アリシア「…………昨日の事は正邪お兄ちゃんから聞いてます。昨日の接続、あれは成功しても儲けものだと言っくくらいの感じでした。もらった物だそうです。」

一馬「え？そうなの？」

アリシア「はい、ですから、昨日の失敗を気にしているのなら、気にする事はありませんよ。」

一馬「けど……………」

一馬はアリシアの言葉を聞いても、自身なさげに顔を伏せた。

アリシア「失敗してもいいじゃないですか。」

優希「え？アリシアちゃん？」

アリシア「誰にだって失敗はあります。それにたとえこれに失敗しても、これで入局のチャンスが無くなる訳じゃないんですから、もっと肩の力を抜いて、リラックスしてください。」

一馬「え、あ、うん」

一馬はアリシアの言葉を聞いて少し考えた。

一馬（確かに、内定をもらえればそれに越した事はない、けど、た

とえそれをもらえなくても、心霊管理局への入局の道が無くなる訳じゃない……たしかにそうだ)

一馬はそう考えをまとめた。すると自然と肩の力が抜けた。

一馬「ふう、確かに君の言う通りだ。おかげで肩の力を抜く事ができたよ、ありがとう。」

アリシア「いいえ、どういたしまして。」

一馬「さて……。」

一馬はそう言って優希の正面に立ち、魔力を解放するためのアイテムであるドクロ型の指輪を指にはめた。

一馬「それじゃあ接続させてもらうよ。」

優希「あ、はい。」

少し緊張する優希。

一馬「それじゃあ僕の目を見て。」

優希「こ、ことうですか……?」

優希が遠慮がちに一馬の目をみつめた。灰色の瞳に、一馬の姿が映りこむ。

リファ『視界確保完了です』

次に一馬は解放した魔力で精神を研ぎ澄ました。

リファ『ニューロマンシー発動をお願いしますです。』

一馬「繋げ、心の鎖（グレイプニル！）」

リファ『接続成功！魔力回路直結しましたです。』

まるで彫刻のように動かなくなった優希は焦点の定まらない瞳を一馬に向けていた。

一馬「舞波さん、平気？」

声をかけると、ビクンと身を震わせる優希。それから、戸惑ったような表情を浮かべる。

優希「……………うまく、いったんですね。」

そう言っただけで周りを見ようとした優希は、体が動かない事に気付いた。

優希「あの、私、体が動かないんですけど……………」

一馬「そう言う物なんだ。ちょっとだけ我慢して、なるべく早く終わらせるようにするよ」

優希「あ、はい」

一馬「さて、任務の内容なんだけど……………」

優希「実は任務の内容については私、聞かされてないんです。」

一馬「聞かされてない？」

優希「はい、昨日、兄から命令書を見せられました。」

一馬「え？じゃあ……」

優希「でも、見せられたのは一瞬で……。何が書かれてあるのか読む時間もなくて……」

一馬「なるほど、そういうことか。」

一馬は優希の言ったこと聞いて一人納得していた。

一馬「なら、その時の記憶を再生すれば、なんとかなるかもしれない。」

優希「そうなんですか？」

一馬「うん、それで、聖邪さんからなにかキーワードとか聞いてない？」

優希「キーワード、ですか……？」

一馬「特徴的な言葉。いや、言葉じゃなくていいんだ。物を見せられたとか、音とか、匂いとか」

一馬の言葉を聞いてしばらく考え込む優希。

優希「あの、キーワードかどうかは分からないんですけど……」

命令書を見せられたときに、兄がメルクリウスって、言っていました。

」

一馬「ありがとう、それで十分だよ。」

一馬「リファ、検索よろしく。条件は、昨日、メルクリウス」

リファ『実行中です。チチンプイプイクルクル』

二人の視界から外れていたリファが出てきて、検索を開始した。

優希「今、妖精さんが……」

一馬「エルフィンのリファって言うんだ。僕をサポートしてくれるパートナーだよ」

優希「な、なるほど……」

リファ『検索終了です。該当は5件です』

一馬「5件とも概要を表示。」

リファ『1、昨日、21時32分27秒、舞波聖邪より入力。2、昨日、21時33分03秒、舞波優希が出力。3、昨日、21時35分12秒、舞波優希の思考内にて展開。4、昨日21時39分48秒、舞波優希の思考内にて展開。5、22時01分33秒、舞波優希の思考内にて展開。』

一馬「1を再生。」

リファ『再生するです。』

リファがそう言うと、二人の目の前に舞波聖邪の姿が映った映像が映し出された。

優希「あ、これ……」

一馬「舞波さんの記憶を映像として再生してるんだ」

優希「すごいです……」

そう言いながら優希は映し出された映像を見だしたので、一馬もそれを見だした。

映像の聖邪はどうやら自宅に居るみたいで、テーブルを挟んだ向かい側のソファーに座って、こちら……つまり優希の方をじっと見ていた。

その手には紙が一枚握られていたが、聖邪はそれをすぐに折りたたみポケットにしまった。

優希「あ！アレが命令書です」

一馬「リファ、1分前まで巻き戻して。」

一馬に言われ、リファが映像を1分前まで戻すが、状況は殆ど変わっていないかった。

しばらく待っていると聖邪が、手にした命令書をこっちに差し出してくる。

優希はそれを読もうと身を乗り出す。

一番上に「心霊管理局より通達」と書かれてるのは読めるが、だ

がそこまで読めたところで、聖邪は紙をすぐに引っ込めてしまった。そして、「メルクリウス」とつぶやくと、紙を折りたたみポケットにしまった。

優希「これだけしか、見せてもらえなかつたんです……」

一馬「たしかにアレじゃ、内容を読んでいる時間はないね。けど・
・リファ、あの紙が差し出された瞬間を再生して、一時停止して。」

リファ『実行中です。チチンパイプイクルクル』

リファがそう言ったあと、差し出された命令書が表示された状態で、停止した映像が映し出される。

優希「すごい、これなら、ちゃんと読めますね。」

一馬「さて、内容は……」

そうやって一馬は命令書を読み始めた。

『心霊管理局より九門一馬に任務通達。コードネーム・フィサリスの正体を調査の上、報告せよ。』

フィサリスの容疑は、法律で禁止されている異世界への出入りを頻繁に行っていることによる、界面干渉法違反容疑である。その正体は今のところ不明。対象を追跡した際に残した遺留品より、コードネームはフィサリスとした。異世界に通じる扉が、聖遼学園内のどこかにあることまでは判明している。任務内容はあくまで調査であり、逮捕ではないが、万が一の危険があるかもしれないため、管理局が新しく開発した、試作型の武装マジックアイテムの試験運用者と共にこれに当たられたし。なお状況が判明次第、連絡担当官に報

告せよ。なお、この任務は極秘とする。部外者へ漏洩した場合、相応の処分を下す。以上。』

命令書の内容はそこまでだった。だが、その下には付箋が張られてあり、そこには別の筆跡でなにかが書かれてあった。

『聖邪だ。お前はわきまえているから大丈夫だと思うが、念のために忠告しておく。必要ないこと以外に、優希の記憶を探った場合、お前は俺を敵に回すことになる。任務中にアリシアや、優希に手を出せば同じことになる。後悔したくなければ止めておけ。連絡担当は優希だ。分からない事があれば優希を通して俺に質問してくれて構わない。良い結果を期待している。』

一馬「……………」

リファ『ひよええええ……………』

一馬「ぶ、文書だけなのに、思わずたじろいじゃったよ……………」
優希「す、すいません、兄が失礼な事を」

一馬「いや、妹さん思いのいいお兄さんだね、あはは……………」
リファ、接続終了。」

リファ『接続終了するです。お疲れ様でした!』

リファがそう言うと二人は通常の状態に戻った。

アリシア「終わったの?それで?」

アリシアは優希に内容を聞いてきた。

優希「あ、えつとね……」

優希は任務の内容をアリシアに話した。

アリシア「なるほどね、だから私も一緒に行けって言ってたんだ。」

一馬「え、じゃあ命令書に書いてあった、試作型の武装マジックアイテムの試験運用者の人ってテストロッサさんの事だったの？」

アリシア「はい、試作型の武装マジックアイテムの製作には、母が提供した技術が使われているんで、その経緯で、私に試験運用の話が来たんです。」

一馬「へへ、なるほど。で、そのアイテムってどういうの？」

アリシア「これです。」

そう言いながら、アリシアは自分がしている手袋に付いている青色の三角形の宝石のような物をさせだして見せた。

一馬「これが？」

アリシア「はい、これが心霊管理局が新たに開発した、魔法をサポートしてくれるアイテム。デバイスです。」

一馬「へへ魔法を使うのをサポートしてくれるアイテムか。」

アリシア「これには思考回路の様なものが組み込まれていて、使用

者の状況や状態を考慮して、的確にサポートしてくれるんです。」

一馬「なるほど。ニューロマンシーを使う際のエルフィンみたいなものだね。」

一馬は思考してサポートしてくれていると言う所を聞いて、自分のエルフィンであるリファが頭に浮かんだため、それを口に出した。

優希「あの・・・それで、任務の内容は確認できましたよね？」

一馬「うん、コードネーム・フィサリスか・・・初めて聞く名前だね・・・」

リファ『犯罪者ですよ・・・ガクブル・・・』

一馬「しかも異世界に出入りしているって・・・でも異世界って都市伝説じゃない？」

優希「実在します。」

優希はそこだけはキツパリと答えた。

優希「心霊管理局だけが掴んでいる、極秘事項ですが。すでに調査済みです。」

一馬「どんなところなの？」

優希「えっと・・・それは・・・」

優希はそれを言うのを躊躇する。

アリシア「すいません。それは教えられないんです。」

一馬「そっか、まっ無理ないか。こっちはただの学生なんだからね。」

優希「すいません。ところでフィサリスの調査はいつから始められますか？」

一馬「明日からでOKだよ。」

優希「分かりました。では局の方にはそう伝えておきます。」

アリシア「それじゃあ、捜査には私と優希お姉ちゃんがサポートします。」

優希「私達三人でチームみたいですね。」

一馬「そうだね。じゃあ、よろしくね、舞波さん、テストロッサさん」

一馬が改めて挨拶すると、優希は申し訳なさそうな顔をした。

優希「あの・・・その呼び方だと、兄と一緒にの時、呼びにくくありませんか？」

一馬「え、そんなこと無いと思うけど・・・。お兄さんの事は聖邪さんって呼んでるし。」

優希「それなら私の事も名前で呼んでくれてかまいません。」

アリシア「あ、なら私も名前で呼んでくれてかまいませんよ。」

一馬「じゃあ、優希ちゃんとアリシアちゃんです。」

優希「あ、はい。ではそれで。」

アリシア「私もそれでいいです。」

一馬「それじゃあ、二人とも、明日からよろしくね。」

二人「はい！よろしくお願いします！」

二人の声が綺麗に重なったり、ペコリと頭を下げるふたり。

こうして、一馬は明日からの任務に、若干の不安と、がんばろうという気持ちを胸に秘めて当たる事になった。

《つづく》

ピ「ピティと」

ユ「ユニと」

ビッ「ビッキーの」

三人「「おまけコーナー」「」

ピ「はい、毎度お馴染みのおまけコーナー 司会進行役のピティです。」

ユ「解説のユニです。」

ビッ「アシスタントのビッキーです。」

ピ「さて、本編は今回の話から、幻想界の話に突入しました。だから今回は、その幻想界のことを説明してくれる人をゲスト召還します コシヨウパツ、パツと・・・」

ビッ「ハッ・・・・・・・・ハッ・・・・・・・・クシユン!!」

パツ!

ピ「召還成功! 今回のゲストは、本編にはまだ名前しか出ていない舞波優希の兄、舞波聖邪さんです。」

聖「ふむ、よろしくたのむ。」

ユ「さて、では聖邪さん、ではさっそく幻想界についてのお話をしていただけませんか？」

聖「ふむ、そうですね。ではさっそく、まず我々が住む幻想界は、表の世界、つまり、ピティ、君たちが住んでいる世界と表裏一体の世界で、トランプで言うところと裏に当たる世界なのである。」

ピ「へへ、表裏一体なんですか。」

聖「そうだ。この二つの世界はとても似通っていて、地形や国の名前、果ては町にある建物などにいたるまで、殆どがそっくりにできている。両方の世界に同じ名前で同じ場所、同じような形の聖遼学園があるのがいい例だ。」

ピ「あ、そういえばそうだったね。」

聖「ただ、この二つの世界の違いは、まず一つは、魔法の存在が広く一般に普及しているのといないと、もう一つは、人間以外の種族がとても多く住んでいて、それらが人間と共存していると言う違いがある。」

ユ「そう言えば、前編で人間以外の種族が街中を歩いている場面がありましたね。」

聖「住んでいる種族は、人間と見分けが付きにくい、私達の種族の死神族やネクロマンシーの一族などから、頭に角が生えている種族や耳が尖っている種族、巨大な体を持つ種族など、特徴的な身体を持つ者など、実に様々な種族がいる。」

ピ「ほへへ、たくさんの種族が居そうだね。」

聖「まつ、その分、問題も多いがな。」

ユ「確かに多そうですね。」

ピ「所で話が変わるけど、聖邪は妹の優希とアリシアと仲が良いんだってね？」

聖「ああ、優希は目に入れても痛くないくらいに可愛い妹だ。もちろん同じくらいにアリシアも可愛いがな。」

ピ「え、え〜と……………」

ビツ「そんなに仲がいいなら、休みの日とか一緒に出かけるとかしてるんじゃないですか？」

聖「ああ、最近はずっとなんだがな。」

ピ「へ〜。」

聖「この前は近くにある室内温水プールに二人を連れて行ったな〜（何かを思い出してるかのような顔）」

ユ「あ、あの〜聖邪さん？」

聖「あの時の二人……………可愛かったな〜」

ピ「もしも〜し」

聖「……………（回想中）」

ユ「あはは・・・え」と今回は「」までになります。」

ビツ「それではみなさん」

三人「」「待ったネ」「」

聖「煩惱退さ～～～～～～～～～～ん!!!!」

第37話 黒炎と転校生（前編）（前書き）

どうも 剣 流星です。

今回、ピティが本編内である歌を歌います。

この歌のタイトルわかる人いますかね？

答えはあとがきに書きます。

では第37話をどうぞ

第37話 黒炎と転校生（前編）

第37話 黒炎と転校生（前編）

あたり一面を覆う黒い煙と赤い炎。

聞こえてくる音は何かが燃える音と人のうめき声。

そんな中に、一人の少年が倒れていた。

少年「うっうっうっうっ……………」

少年は自分自身に襲い掛かってくる痛みに耐えていた。

少年は左足を失っており、その傷口から血が絶え間なく流れていた。

少年はその左足から来る痛みに耐えながら頭だけを起こし、周りを見た。

周りは黒い煙に包まれており、視界がはっきりしない状態だった。

少年「……母さん……何処？桃華……才人！」

少年は自分の母と双子の妹、そして幼馴染の名前を呼んだ。

少年「ゴホゴホッ！」

大声を出した為、煙を吸い込みむせる少年、と、その時、視界を覆っていた煙が風で流され消える。

すると、煙が覆っていた場所に人影を見かけた。

その人影は少年が捜していた物だったため、少年は声をかけようと

した。

少年「母さん！桃華！才人！みんな無事・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

少年のかけようとした声は途中で止まってしまった。

なぜなら少年がかけようとした相手の状態が、普段見ているものからかけ離れていた為だった。

少年の妹は幼馴染を庇った状態のまま倒れていて、背中には大きな切り傷が深く刻まれており、母親の方は肩から胸にかけて大きく切り裂かれたような傷があり、二人ともその傷口から止め処なく血が流れ出ている。そしてその血で二人は血だらけになっていた。

少年「母さん？・・・・・・・・桃華？・・・・・・・・あ・・・・・・・・

あああああああああああああああああああああああああああああああああつ！」

*

聖時「うわあああああああああああああああああつ！！！」

聖時はベットから叫びながら飛び起きた。

聖時は全身から流れる冷や汗に不快感を感じながら自分の周りを見

た。

そこは見慣れた自分の部屋だった。

聖時「ハアハアハアハアツ…………夢？また…………あの時の夢か…………」

それはかつて聖時が妹と母を亡くしたときの夢だった。

聖時は時々この夢を見る。それはかつて自分が無力な存在だったと、聖時に語りかけ、責めるよかのように忘れた頃に聖時にその夢を見させるのである。

聖時「はあ…………命日が近いせいかな…………夢を見る回数が増える…………」

そう言いながら聖時は部屋の時計を見た。

時間は普段起きる時間より少し早い時間だった。

聖時「…………少し早いけど、ランニングに行くか…………」

そう言いながら聖時はベットから起きて着替え始めた。

*

神谷家一同「~~~~~いただきます!」

ここは神谷家の居間、そこに聖時、ピティ、ユニ、童虎、刹那の五人が

集まり朝食を食べ始める所だった。

本日の朝食は聖時が作った和食の朝食で、メニューは釜で炊いたご飯に、だしをちゃんと取った味噌汁、炭火で焼いた塩鮭、火で軽く炙って香りを引き出させた焼き海苔である。

ピティ「~~~~~ん!おいし~~~~~!聖時、今日も朝ごはんグットだよ!」

童虎「うん、確かにこれはうまい。この釜で炊いたご飯は粒が経っていてとてもいい。」

刹那「味噌汁もダシが出ていてとてもいいです。ダシ、変えましたか?」

刹那が聖時にお味噌汁のダシを変えたか聞いてきた。が、聖時は今朝見た夢のせい、少し暗い雰囲気になっていて、心ここに在らずと言った感じだった。

その為、声をかけた刹那は不振に思い聖時に問いかけた。

刹那「聖時・・・さん?どうしましたか?」

聖時「え?あ、ああ、何?確かダシのことだったよね?よく気づいたね、お味噌汁は具によってダシを変えるのがポイントだよ!」

聖時は自分の暗い雰囲気をこまかす為に、あえて明るく振舞い、そ

れをごまかそうとした。

刹那「いえ、あの……そうですか。」

刹那は聖時が先ほどの雰囲気を読み取ったかと言おうとした瞬間、
暗い雰囲気を読み取ったかと言おうとした瞬間、

一同「……………」

刹那が質問を止めた後、重い空気が辺りを包み込む。と、その時
の空気を破るかのようにユニが聖時に声をかけてきた

ユニ「……………ところで聖時さん。」

聖時「え？な、なにユニ？」

ユニ「最近、よくお友達が家に来ているようですね？」

聖時「え？あ、うん。」

ユニ「お友達が増える事は良い事だと思います。ですけど……
・そのお友達と一緒に私に内緒で何か良からぬ事をしてませんよ
ね？」

ユニを除いた全員「……………ギクッ！……………」

ユニの言葉を聞き、その場にいる全員が驚く。

ユニ「おや、どうしました童虎さん？刹那さん？」

童虎「な・・・なんだこのプレッシャー!? ワシが気おされるとは?!」

刹那「これがあの有名な般若スマイル?! これの前では、さすがの長たちもそのプレッシャーのせいで黙り込むという・・・」

聖時「あのなのはさんの魔王式OH H A N A S Hの元祖と言われた物だよ・・・おそろしい・・・」

ユニ「何か言いましたか?」

四人「・・・いいえ! 何でもありません!」「」「」

そう言ってユニは食事を再開した。

それを見て聖時たちも食事を再開したが、食べた朝食の味があまり良くわからなかったと後の四人は言ったという。

その後、朝食を済ませた聖時達は学校に行く為に家を出た。

ピティ「夜空を翔るゝ流れ星を今ゝ見つけられたら 何を祈るだら
」

ピティが陽気に歌いながら先頭を飛び、それに続くように聖時と刹那は歩いていった。

陽気なピティと違い、今の聖時は朝食の時と同じ暗い雰囲気を感じていた

やがて、いつもふたば達と合流する場所に差し掛かる。

だが、そこにいる人影の数がいつもと違い、三つあった。

ピティ「あれ、なんか知らない人がふたば達といる。」

ピティの声に聖時は正面を見て、その見知らぬ人影を見た。

その人物は、聖祥の中等部の男子の制服を着た15〜6の男だった。

ふたば「あ、聖時、刹那さん、おはよう。」

理佐「おはよう、聖時くん、刹那ちゃん。」

男の側にいたふたばと理佐が聖時たちに挨拶をしてくる。

聖時「おはよう、ふたば、先輩。」

刹那「おはようございます。お二人とも。」

あいさつを交わす聖時達、そしてその後、聖時達はふたば達の側にいる男に視線を向けた。

それに気付いた理佐が聖時達にその聖祥の制服を着た男子のことを話し始めた。

理佐「あ、紹介するわね。この子は私の弟で^{かがり}篤^かって言うの。ほら、挨拶して！」

理佐は聖時たちと視線を合わせようとしない篤に対して挨拶をするようにうながした。

すると篤は素っ気無さそうな顔をしながらこっちを……と言っか、聖時の方を見た。

篤「……ふたばが言ったた神谷聖時ってのはお前か？」

篤は見下ろすような感じで聖時を見た。

篝は聖時よりも背が高く、180ぐらいあるので、その身長で見下ろすような形になった。

聖時「あ……はい。僕が神谷聖時ですか？」

そう返事をした聖時。だが篝はその返事を聞いてないのか、返事をせずに聖時を観察するように見る。

聖時「あ……あの〜」

聖時は相手から返事が帰ってこないのので、少し心配になり声をかける。

と、突然、篝がものすごい速さで聖時の首を片手でつかみ、片手で持ち上げた。

聖時「グッ！」

あまりの速さだったので聖時は反応できず、宙吊り状態になる。

ふたば「聖時！」

理佐「聖時くん！」

刹那「聖時さん！きさま！何をする！」

刹那はとっさに背負っている竹刀袋に手をかけて声を上げた。

聖時（な、なんて速さ！反応できなかった！）

聖時は首をつかまれ、宙吊りになりながら、先ほど反応できなかった

た速さに驚いていた。

篤「……この目で見て確信した。やはり俺が睨んだとおりだ。貴様はふたばに不幸をもたらす存在だと俺のカンがそう言っている……」

そう言つて篤は聖時の首をつかんでいた手を開き、聖時を解放する。篤から解放された聖時は地面に落ちて、くるしそくにゴホゴホと咳き込む。

聖時「……僕が……ふたばに不幸を？」

理佐「ちよつと篤！あんなに言つてるの?!聖時くんがふたばに不幸をもたらす?しかも、それを言う理由がカンだつて?何バカなことを言つてるの?!」

理佐は聖時の首を締め上げた自分の弟にたして怒る。

篤「事実をいつたまでだよ。それに、コイツ自身が直接の理由ではないけど、コイツのせいでふたばは前に危険な目にあっている。」

聖時とふたばはそれを聞いて、ハツとなった。

二人は思った。篤が言っている事は、この前ふたばが聖時の祖父の家に向かった時に下位元霊神に襲われたときの事だと思った。

聖時「な……なんでその事を?それにそれは……」

ふたば「聖時のせいじゃないはずだよ!それに、あの時、聖時は私を守ってくれた!救ってくれた!」

箒「だが、コイツの爺さんの家に行こうとしなければ、あんな目にはアワなかつたろ？それに、一度ふたばを守ったからって言うっても、次も守れるとは俺には思えない！」

聖時「！僕は・・・それに！自分の過去におびえている奴に、ふたばを守り支える事などできない！」？！な・・・なにを・・・」

聖時は箒が言った言葉を聞いて、まるで心臓をワシ掴みされたような感じになった。

自分の過去におびえる・・・それは時々、聖時が夢で過去の悪夢を見ている事などだと聖時は思い、何も言えなくなつた。

箒「いいか！これは警告だ！ふたばに二度と近づくな！」

そう言つて、箒はその場を去つて行つた。

理佐「ちょ・・・ちよつと箒！まちなさい！」

去つていく箒の背中に怒鳴り声をかける理佐。

聖時「自分の過去に怯えている？」

ふたば「聖時？」

聖時は箒が言った言葉を口にして、自分に問いかけた。

聖時たちからだいぶ離れた、人気の無い路地通り。

そこで、突然、箒に話しかける人物が現れた。

杳馬「……やはり気に入りませんか？あの坊やは？ま、仕方が無いですよ。メデイウムの旦那が2年前に真つ二つにしちゃった真の紋章の欠片の一つ、それをあの嬢ちゃんが宿してから今まで、嬢ちゃんに悪さをしようとしてくる連中を影ながら始末してきた兄ちゃんにしてみれば、ぼつと出のガキに奪われたような感じで、おもしろくないよな。」

箒「……なんのようだ道化師！言っておくが冥王軍の冥闘士になれと言う誘いだったら断るぞ。」

杳馬「そうは言っても、あんたが冥闘士になるのは運命だ。だってあんたの中には冥闘士の一人、天暴星・ベヌウの魂が宿ってるんだから、だから、さからったりしたって無駄なんだって。」

そういいながら杳馬は箒に近づく。

箒「だまれ！」

そう言いながら箒は右手から黒炎を出してそれを杳馬にぶつける。

杳馬「おっと！あぶないあぶない」

箒の攻撃を寸前でかわす杳馬。

篝「俺は誰ともつるまない！俺はただ、あいつを・ふたばを守ればそれでいい！俺が望むのは、ただそれだけだ！それ以外のものは俺にはいらぬ、だから冥闘士などと言うのにも興味が無い！」

そう言つて篝は杳馬に背を向けて歩いて行つた。

杳馬「興味が無い・・・ね。まっ、それがどこまで言えるのか見させてもらいましようか。」

そう言つて楽しそうな顔をしながらそう言つて篝の背中を見送つた。

《つづく》

第37話 黒炎と転校生（前編）（後書き）

歌のタイトルはテイルズオブシンフォニア（ゲームキューブ版）のテーマソングで「Starry Heavens」です。

なぜこの歌を出したかと言うと、作者はこの歌をとても気に入っているからです。

皆さんはどうですか？感想をお待ちしております。

第38話 黒炎と転校生（中篇）（前書き）

どうも剣 流星です

今回は少し短めです。

ではどうぞ。

第38話 黒炎と転校生（中篇）

第38話 黒炎と転校生（中篇）

聖遼学園高等部、河瀬裕也の教室。
そこでは朝のHRが開かれていた。
壇上で担任の教師が連れて来た一人の女子生徒の紹介を始める。
その女子生徒は147ぐらいの背で小柄な体型で、傍からみると中学生ぐらいに見える。腰まで伸びた髪を2本に分けて編みこんでいる髪型で、前の学校の制服なのか、こちら辺ではあまり見ない制服を着ていた。

担任「え、この前話したとおり、今日からウチのクラスに転校生が来る事になった。榎山遥さんだ。結構しっかり者っぽいぞ」

遥「榎山です。突然の転入でご迷惑をおかけしますが、みなさん、よろしく願います。」

担任「な、しっかりしてるだろう？でもそれ以外の性格は先生もよく分かっていないので、質問タイムを設ける。質問ある人いるか？はいはいはい！はい、じゃあ先生」

担任の教師は自分で手を上げて、自分で指して、自分で質問を始めた。
それを見た生徒達がクスクスと笑う。

裕也はそれを見て、「あゝあ、こんな担任イヤだなあゝ……」
と思っっていた。

担任「好きな教科と嫌いな教科はなんですか？」

遥「好きな教科は歴史と地理です。時間と空間を、大きなスケールで捉えるのが好きですわ。あまり好きじゃないのは……古文や漢文です。」

担任「なるほど、いいね、大きなスケール。じゃあ、先生が何を担当してるか知ってる？」

遥「古文……でしたわね」

担任「はいみなさん、榎山さんしっかり者で、プラス正直者だという事が分かりましたが、先生は泣きます。」

教室がどつと沸き、和んだムードの中、何人かの生徒が担任教師に続いて挙手する。

担任教師は泣き止んだフリをして、笑顔に戻ってから奈々瀬駒子を指した。

駒子「彼氏とは涙のお別れを済ませてきました？」

遥「……そういう人は居ませんでしたから」

駒子「うっそだー、かわいいのに。いろんな意味で」

ざわざわと静かにざわめいていた教室内が、最後の一言で笑いに包まれた。

裕也「（確かにかわいい・・・かわいい身長だな）」

トラボルタ（あれじゃあクラスの最小の座に踊り出るとは間違いないな）」

などとトラボルタが失礼な事を言っているのを聞き流しながら裕也は壇上の遥を見る。

遥は顔を赤くして頷いていたが、やがてニヤリと笑ってから言った。

遥「からかわないで下さい。すすすすく起こしてみせますわ。」

駒子「こりゃ失礼」

そのやり取りで、クラスはまた笑いに包まれた。

裕也（一見、厳しそうで取っ付き難そうなヤツだけど、結構社交的なかもしれないな。）

トラボルタ（ただ単に負けず嫌いなだけかもしれないぜ）」

裕也（確かにそうかもしれないな・・・）」

駒子の質問の後いくつかの質問が出て、質問タイムは終了した。

担任「じゃあ質問タイムは終了。楢山は最後の列の空いている席に・・・しまった！」

遥「？」

担任「いや、なんでもない、なんでもないんだが……最後の列で大丈夫か、榎山？」

遥「どういう意味でしょうか？」

クラス全員がその意味を分かっているだろうが、そのクラスノ意見を代表して駒子がボソリと呟いた。

駒子「身長的ないみだろうな……」

担任「こら駒子、他にも色々あるだろう。視力が悪いとか、他には……まあ色々あるんだが、そういう複合的な意味合いを含めて、先生は言ったんだ。」

遥「お気遣いありがとうございます。でも両目ともに1.5ですし、後の席でも何の問題もありませんから。まったくありませんから」

担任「そ、そうか、もしも席替えしたくなったらすぐに言うんだぞ。遠慮はいらんからな？」

遥「いいえ、することは無いと思います。」

裕也（あゝあ、火に油だな……）

担任「そうか、じゃあ親切にしてやれよ、河瀬」

裕也「はいよ。」

そう言つて裕也が返事をした後、遥は、言われた席の近くまで歩いてきた後、裕也に対しペコリと頭を下げ、隣の空いてある席に座

った。

裕也（ふうん、意外と礼儀正しいんだな。しかしこの子が、アルフや刹那が言ってた例の……）

そんな事を思いながら、裕也は壇上で担任が続けて言っている、朝の連絡事項の続きに耳を傾けた。

《つづく》

第39話 黒炎と転校生（後編）（前書き）

どうも、剣 流星です。

さて最近暖かくなったり、寒くなったりと気候がころころと変わる
ので自分の周りでは体調を崩す人が続出してます。

みなさんは体調管理をちゃんとして、体調を崩さないようにしてく
ださい。

では第39話をどうぞ

第39話 黒炎と転校生（後編）

第39話 黒炎と転校生（後編）

裕也「……………って感じな転校生なわけよ。」

昼休みの屋上、ここでいつものように、いつものメンバーお昼を食べている聖時たち。

そこで聖時たちは、今朝やって来た裕也のクラスの転校生の話を聞いている。

アキ「背が低い事を気にしている、負けず嫌いの転校生ね。」

刹那「おそらくその方が、例のES使いでしょう。」

アルフ「たぶん間違いないと思うよ。あたしが協力するように言われた人物の名前と同じだから。」

由香「だとすると、その人に接続されないように注意しないとね。」

ピティ「うん、そうだね。接続されたら、私達の事がなのは達にバレちゃうからね。」

刹那「ES能力は対人・個人に対してはかなり強力な能力です。ですがその能力は一人に対してです。」

由香「うん、接続している間、ES能力者は無防備になるから、能

力者は相手に能力をかけるときは一対一になるよう心がけるの。だから、これからは決して一人で行動しないよう心がけた方がいいと思う。」

裕也「そうだな、ならこれからは常に二人以上で行動できるように行動ってことでいいか聖時？」

裕也が自分が提案した案で良いかと言う事を聖時に聞いた。

聖時「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

裕也「？おい、聖時！」

聖時「ん？何？」

裕也「何？じゃないだろう。話、聞いてたか？」

聖時「あ、一人で行動するなって事でしょう。うん、良いと思いますよ。」

アルフ「・・・・・・・・・・ねえ聖時、今日はどうしたんだい？朝からずっとなんか心ここにあらずって感じだけど・・・・・・・・」

アキ「・・・・・・・・・・ピティ、聖時、いったいどうしたの？朝、私と会う前に一体なにがあったの。」

ピティ「いや、それがね、実は・・・・・・・・・・・・・・・・」

・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

ピティ「……………って事があったの。」

ピティは今朝、なのは達と合流する前にであった、双葉の幼馴染である篝との事について話した。

裕也「な……なんだよその篝って奴！会ったばかりの聖時になにイチャモンつけてんだ！」

由香「聖時くん、それで今朝から様子が変わったんだね。」

そう言っつて由香は聖時を心配そうな顔で見る。

聖時「……………」

聖時は黙ったまま、食事を淡々と続けていた。

ふたば「……………確かにそれもあるんだと思うんです。けど、実は

篤兄さんの事が起きる前、今朝会った時からすでに様子がおかしかったんです。」

刹那「そう言えば、朝食の時もどこか心ここに在らずと言った感じでした。一体どうしたんでしょうか？」

刹那たちは、食事を淡々として続けている聖時に声が聞こえないようう小声で話し合う。

アキ「……………ひよつとして……………」

ふとアキが思い当たる節があるかのような口調を取る。

由香「何か心当たりがあるの？」

アキ「……………ええ、ねえ聖時！」

アキは聖時に自分が思いついた心当たりが当たっているかを聞くために、聖時に話しかける。

聖時「？何アキ？」

アキ「聖時、ひよつとして昨夜、例の夢を見たの？」

ピティ「？例の夢って……………あっ、ひよつとしてあの事についての？！」

聖時「……………うん。」

アキ「やっぱり。」

アキは納得した顔をした。

刹那「？あの……例の夢とは一体？」

アキ「えつと……それは……」

アキはいかにもマズイと言う様な顔をする。

刹那「あ、無理に話さなくても「昔あった、ある事の夢だよ」「いいつてえ?!」

聖時が突然食事を止めて、話しかける。

アキ「……聖時、いいの？」

聖時「別に知られたら困るような物でもないでしょう。目の前でテロに巻き込まれて死んだ母さんと妹の桃華事を夢で見ただけなんだから。」

刹那「あっ……（そうか、そうですよね、今の元気そうな聖時さんを見て忘れかけていましたが、アレからまだ2年しか経っていいないんですから）」

アキ（聖時、……やっぱりあの夢を見たんだ。去年も今ぐらいの時期……命日の日が近づくと見てたしね……）

刹那は思い出したかのような顔をした後バツがわるそうな顔をし、アキも少し暗い顔をする。

他の人物も聞いてはいけない事を聞いたかのような顔をしてた。

辺りに重い空気が漂う。

ふたば「あ、あのさ……」

ふたばが重い空気を変えようと話をしはじめた。

ふたば「夢で思い出したんだけど、実は私、時々不思議な夢を見
るんです。」

ピティ「へ〜、不思議な夢ね〜」

由香「ねえねえ、一体どんな夢なの？」

ふたばの考えを悟ってか、他の人たちもこの重い空気を変えようと
話に食らい付いてくる。

ふたば「え〜とですね、その夢にはいつも同じ人物が出てくるんで
す。その子は歳は同じぐらいの女の子で、髪は金髪で名前がサキち
やんて言っんです。」

聖時「！サキだって?!」

ピティ「聖時？」

聖時「あ……いや……なんでもない……続けて。」

ふたば「?うん……でそのサキちゃんんだけど、私が10
歳ぐらいの時から夢に出てくるようになったの。」

アルフ「へ〜、10歳ぐらいの時ね。たしかあんたそのぐらいの時

は、確か病気で入院してなかったけ？」

ふたば「うん、そうだよ。ちょうどその頃は長く続いていた入院生活に少し疲れてたの。で、そんな中、ある日、ふとサキちゃんが出てくる夢を見るようになったの。最初は同じ人が出てくるのが気味悪かったけど、夢の中のサキちゃんとだんだん話すようになってお友達になったの。サキちゃんとはまず、お互いの事に付いて話したの。サキちゃんは、なんでもアルシエルと言う世界にあるソル・クラスタと言う塔の中にある街の一つ、アルキアの街の幼稚園で住み込みをしながら子供たちの面倒をみているらしいの。で、サキちゃんと話すようになってからは入院生活の疲れも薄れくるようになって、とても楽しかった。」

由香「へ〜、夢の中にいるお友達か〜、なんか不思議だね。」

ふたば「このサキちゃんが出てくる夢は、今でも時々見ている、サキちゃんには時々相談に乗ってもらったりしてるの。」

裕也「へ〜、不思議な話だな〜。」

そんな風を話しを聞いてた聖時がふと時計を見ると、昼休み終了五分前の時間になっていた。

聖時「あ、そろそろお昼休み終わっちゃうよ。」

ピティ「あ、本当だ。」

由香「じゃあ片付けて教室に戻ろう。」

そう言って由香は広げてあるシートや弁当箱を片付けはじめ、他の

メンバーもそれに続いた。

裕也「あ、そうそう、お前らは放課後はいつものように聞き込みをするのか？」

アルフ「いや、あたしは今回からはできないからね。フェイトに言われて榎山遥の手伝いをしなきゃならないからね。」

刹那「そうですか。では今回からはアルフさんはしばらく抜けると言う事で良いんですね？」

アルフ「すまないね。」

刹那「いいえ。」

二人はそう言いながら片付けをする。

そんな風に片付けをしている間、ふたばは聖時の顔を見ながら今朝の事を考えていた。

考えていた内容は、篝に言われた一言、「過去におびえている」と言われた時にした聖時の顔である。

ふたば（あの顔……まるで触れられたくない心境をズバリ言い当てられたような顔だったけど、文字通りそうだったんだ……
・しかも、昨夜の夢で、その過去の夢を見たばかりだったから、聖時、結構堪えてるみたい……大丈夫かな……）

そんな風な事を考えながら、ふたばは聖時の顔を心配そうな顔を見ながら見続けた。

《つづく》

おまけコーナー

ピッコピティと

ユニ「ユニと

ピッコピッキーの

三人「「「おまけコーナー

ピティ「はい、みなさん司会進行役のピティだよ

ユニ「解説のユニです。

ピッコアシスタントのピッキーです。

ピッコさて、最近作者がスタードライバーとスパロボOG2のアニメ、そして今更にハマッているマブラブをプレイして執筆速度が遅れがちのこの作品です。」

作「こらバラすな!!」

ピ「はいはい、あんたは引っ込んでる。そんじゃさっそく今回のゲストを呼ぶとしましょうか。コシヨウパツパツと……………」

ビツ「ハツ……………ハツ……………ツクシユン!!」

パツ!!

ピ「召還成功!さて今回のゲストは科学と魔法のコラボによる奇跡の産物、吸血鬼のエヴァの従者の絡操茶々丸さんです。」

茶「どうもよろしくお願ひします。(ぺこり)」

ユ「は、本当によくできてますね。まるで人間みたいです。」

ビツ「本当です。私が以前見たカラクリ機械とはまるで違います。」

ピ「……………ねえビツキー、あんたが以前見た自動人形ってまさか、原作(幻想水滸伝)で仲間になったあのからくり丸のこと?」

ビツ「?はいそうですけど。」

ユ「そう言えば幻想水滸伝にもロボット(?)が出てましたね。」

ピ「たしかに出てたね。ま、もっともあっちはロボットと言っか……………タル?見たいな感じだからね。」

茶「タル……………ですか?」

ピ「あつ、深くは突っ込まないでね。さて、では今回の補足は作品

内に出てきた聖時の母親の実家、来迎寺家が経営している「来迎寺グループ」についてです。」

茶「来迎寺グループですね。あのグループは聖時さん達が住んでいる第97管理世界でも有数の企業でしたね。」

ユ「ええ、けどそれだけじゃないんでうすよね。このグループは来迎寺繁之氏の純血種のレーヴァテールの奥さんがもたらしたアルシエルの技術を使い、97管理世界ばかりか、次元世界にまで手を伸ばしています。」

ピ「今じゃあ、他の世界、ミッドや刹那たちの世界にまで来迎寺グループの店があるくらいだからい広がってるんだよね。」

茶「確かにそうですね。私達の世界でもその規模はとても大きく、乳母車からお墓まで売り文句にしています。」

ピツ「そんなに広がってるんですか？」

茶「はい、現に私の体に使われている部品の多くは来迎寺グループ産の物が殆どですからね。」

ピツ「へ〜。」

ユ「さらに、最近では管理局の使う次元航行間やデバイスなんかも委託されて作っていますから、その規模は相当大きいです。」

ピ「へ〜、詳しいね。さすがグループの代表代理をしてるだけはあるね。」

ユ「まあ、それくらい把握してなければ代理なんか出来ませんからね……もつとも把握できてないとお仕事にもなりませんし、あの量の仕事をこなす事はできませんから……フツ（遠い目）」
ピ「あゝ、そうと忙しいみたいね……」
ビツ「ええ……」

ユ「はあく、だれか優秀なサポート……秘書が付いてくれば仕事が楽になるんですけど……（茶々丸の方を見る）」

茶「……ハイ？なにか……」

ユ「茶々丸さん……私の秘書になりませんか？（イツちゃつてる目で見える）」

茶「……ハイ？」

ユ「あなたはとても優秀だときいています！だからぜひ、私の秘書になって私の仕事を減らすのを手伝って！！」

茶「あ……あの……（おびえた目で見える）」

ユ「待遇はよくします！お給料も今の数倍は出します！！ですから今すぐに私の所に来てください！て、言うかも決定で良いですよね！そうしましょう！そうしましょう！」

茶「あ……あの落ち着いて……」

ユ「いいえ、これが落ち着いてなどいられません！私の睡眠時間の

為にもぜひとも私のところに・・・」

ピ「久々のピティちゃんキ~~~~ク!!!」

ユ「グフツ!!!」

ピ「落ち着きなさいよ。茶々丸が怯えてるでしょうが!!!」

ユ「だ・・・だって・・・最近・・・仕事が忙しすぎて・・・睡眠時間も取れないのよ~~~~!!!」

「

ピ「な・・・泣き出しちゃいましたね・・・」

ピ「よっぽど辛いんだね・・・大変そう・・・」

茶「げ・・・元気・・・出してくださいね・・・ナデナデ」ユニの頭を撫でる音「

ピ「と・・・とにかく、今回はここまでにします。」

ピ「それではみなさん!!」

二人「「待ったネ」」

ユ「睡眠時間~~~~!!!」

茶「（ナデナデ）」

第40話 前へ踏み出す勇氣？（前書き）

どうも 剣 流星です。

最近、リアルが忙しすぎて、過労気味です。
でも、とりあえず短めですが投稿します。
では第40話をどうぞ。

第40話 前へ踏み出す勇氣？

第40話 前へ踏み出す勇氣？

篤「自分の過去におびえている奴に、ふたばを守り支える事などできなない！」

山田篤に言われたこの一言、聖時はこの一言が耳に残り、それを気にするあまり朝から周りの人達に心配をかけていた。

あの日・・・空港に母と妹、そして幼なじみと共に叔父を迎えに行つた時に、聖時はテロに巻き込まれた。

突然の衝撃、そして視界の暗転、そして次に意識を取り戻した時は、あたり一面の火の海だった。

聖時はその時、すでに左足を失くし、そのせいで視界と意識がぼやけていた。そのぼやけて見える視界には、血を流して倒れている妹、そして、その妹に庇われるように倒れて気を失っている幼馴染。そして・・・黒い鎧と兜を被って片手に剣をもった人物から自分たちを庇うように立っていた自分の母が見えた。

二人は互いに2・3言話しをした後、突然黒い鎧の男が剣を振り上げて、母を斬ろうとした。

聖時はとっさに動いて母を助けようとした。だが、片足が無い状態な上に、黒い鎧の男から発せられる殺気に体が震えて動こうとしなかったのである。

大好きな母が目の前で切り殺されそうになっているのに、恐怖で動けない自分。

そして・・・黒い鎧の男の剣が母の体へと迫り。そして・・・
・母である千尋は・・・切り殺された。

聖時はその時、恐怖で動けなかった弱い自分が許せなかった、だから聖時は強くなるうと決意をし、剣術で体を鍛え、魔法を覚えるようになった。

あれら二年、体も鍛え、魔法をある程度覚え、さらに自分の手で友人であり、クラスメイトであるふたばを守る事ができた。自分はあのころの自分とは違うと、強くなったんだと自信を持てるようになった。そんな矢先、幼馴染である才人が何者かにより意識不明にさせられる事件が起き、さらにあの時のテロの悪夢を見た後に、あの「自分の過去におびえる・・・」的なことを言われたのである。

その一言は、悪夢を見て、弱っていた聖時の心に深く突き刺さった。その言葉はまるで、「あの時、恐怖で動けなかったお前はあの頃をとまるで変わっていない・・・そんな弱いお前に守れるものなど無い！」と言われているみたいで、その言葉は聖時の心に深く突き刺さった。

僕はあの頃の弱い自分のままなのか？自分が今まで強くなるうとして、してきたことは無駄だったのか？僕は強くなる事はできないのか？僕はあの頃から一歩も前に進むことが出来ていないのか？そんな自分自答が聖時の頭の中で、朝からずっと続いていた。

士郎「聖時！」

聖時「へっ?! な・・・何？」

士郎の呼び声で、思考の海から抜け出された聖時はしどろもどろになりながらも返事を返した。

士郎「何じゃない！前、前！」

明日香「聖時お兄ちゃん、お鍋吹いてるよ！！」

聖時「え？あつ！？」

あわてて鍋の火を消す聖時。

聖時は今、別荘のキッチンに立ち、いつも通りに別荘内に集まっているみんなの昼食の準備を士郎や琴乃等と共にしていた。

琴乃「大丈夫ですか？」

聖時を心配する琴乃。

聖時「あつ、う・・・うん大丈夫。」

明日香「お鍋は大丈夫じゃないみたいだけどね・・・」

明日香の言葉を聞き、吹き零れた鍋を見る。

その中身は明らかに失敗した料理だと、だれが見てもわかるような状態になっていた。

聖時「わ・・・悪い・・・失敗しちゃった。」

士郎「こりゃあ作り直すしかないな・・・」

明日香「だね。それにしても聖時お兄ちゃんがお料理を失敗するなんて珍しいね？」

いつも聖時の料理をつまみ食いするために台所に来ている明日香が

疑問に思った事を口にした。

ここ最近、士郎と共に、別荘でのみんなの食事を作っている聖時は、そのせいか、料理の腕がとて上達していた。

それを側で見てきた明日香達をはじめのとした面々は、料理を失敗した聖時を見て、少し疑問に思った。

琴乃「聖時さん、今日の聖時さんは何か変ですよ？」

士郎「そうだな。童虎さんとの修行の時もまるで身が入っていないみたいな感じだったし……」

明日香「聖時お兄ちゃん……大丈夫？」

聖時「あ、ああ、大丈夫だよ。」

そう言っただけで明日香の頭を撫でた後、吹きこぼした鍋に手を出し、料理を作り直す準備に入ろうとする聖時。

聖時「さてと、作り直さないとな。」

そう言っただけで鍋を持つとした聖時に、士郎が声をかけた。

士郎「待て聖時。後は俺たちがやるから、お前は少し休んでいる。」

聖時「え？いや……でも……」

士郎「今のお前の状態じゃあまた失敗しちゃう。だから……」

聖時「……分かったよ、後は頼むね……」

そう言って、聖時は着ていたエプロンを外しながらキッチンを出て行った。

そんな聖時の背中を残ったメンバーは心配そうな目で見送った。

《つづく》

第41話 前へ踏み出す勇氣？（前書き）

どうも剣 流星です。

今回、英語の歌詞をふたばに歌わせました。
スペル間違ってなければいいけど・・・
とにかく第41話をどうぞ。

第41話 前へ踏み出す勇氣？

キッチンを出た聖時は、他のメンバーがいる居間による気分にもなれなかったので、別荘の裏庭にある林の中を散歩することにした。

聖時の頭の中は、先ほどと変わらない内容で占めつくされた状態だった。なので一人になっている分それが加速度的にドンドン進んでいく。けど他の人と居る気分にもなれず、そこで一人になると更にそれが加速度的に進んでしまうとと言う悪循環状態になっていた。

そんな状態で林の中を歩いていると、不意に自分が進んでいる方向から歌声が聞こえてきた。

???「Amazing grace how sweet
the sound is」

聖時「?この歌は……アメイジング・グレイ？」

聖時はこの歌声のした方へと足を運ぶ。

やがて林を抜けると、そこには一面の野花が咲き乱れた花園が広がっていた。

その中心にはこの歌声の主である、ふたばが歌っていた。

ふたば「That saved a wretch like me」

その歌声はこの別荘の澄んだ空に響き……

ふたば「I once was lost but now I

聖時「ああ、途中からね。しかし……」

周りを見ながら聖時はふたばに話しかけた。

聖時「まさか別荘内にこんな所があったなんてね。」

聖時は周りに咲いている野花の花畑を見ながら言った。

ふたば「つい最近わたしも見つけたの。とても綺麗な場所でしょう？ここで歌ったら気持ちいかな〜と思って……それで、最近はこの歌の練習をしてるんだ。」

聖時「歌の練習？」

ふたば「うん、私ね、聖時のお母さん……千尋さんみたいに歌えるような人になりたいって思ってるの。」

聖時「母さんみたいに？そう言えば、ふたばは母さんのファンだったね。」

ふたば「うん 大ファン」

聖時「そっか……」

不意に暗い顔をする聖時。

母の名前を聞いて、聖時はまた考え込んでしまった。

ふたば「……ねえ聖時、今日は朝からどうしたの？悩み事？」

聖時「あ……いや……別にたいした事じゃないよ……ただ自分

のダメダメさを知って、少し落ち込んでるだけだよ……」

ふたば「ダメダメって……聖時、私は聖時がダメダメだなんて思っていないよ？」

聖時「それは買い被りすぎだよ……」

ふたば「そんなこと無い！現にこの前だって私とピティを助けてくれたじゃない！」

聖時「ああ、僕もそれで少しは強くなったかなと思った。けど……」

ふたば「……篤兄さんに言われた事？」

聖時「ああ、自分の過去に怯える……たしかにそうなんだ。僕はただ……強がっているだけで、本当は、あの頃の自分……弱くて、何もできずにただ立ち止まっているだけの頃と何も変わっていないんだなと思いつたんだ……時々見るあの時の悪夢が痛い証拠だよ……」

ふたば「聖時……。」

ふたばは聖時の名前を言って考え込んだ。そして、しばらくして聖時に話しかけてきた。

ふたば「ねえ聖時、私はやっぱり聖時が弱くてダメダメだなんて思えない……だって私は聖時の強さをよく知っているから。」

聖時「僕の強さを？」

ふたば「うん、・・・・・・・・ねえ聖時、私がなんで聖遼に入ったか知ってる？」

聖時「え、理佐先輩が居るからじゃないの？」

ふたば「確かにそれもあるんだけど・・・・・・・・一番の理由は、私に生きる勇気と前へ踏み出す勇気くれた人に、もう一度会うためなんだ。」

ふたばは何か、とても大切な思い出を思い返すような感じで語り始めた。

《つづく》

第42話 前へ踏み出す勇氣？（前書き）

どうも剣 流星です。

今回のふたばとの絡みは、自分自身がとても書きたかった話の一つです。

だけど、いざ書き始めると、話の後半がうまくまとめられませんでした。

書きたい事をうまく表現できない自分の文才の無さを痛感します。

それでは第42話をどうぞ。

第42話 前へ踏み出す勇氣？

第42話 前へ踏み出す勇氣？

聖時「勇氣をくれた人？」

聖時はそうふたばに聞き返した。

ふたば「うん、勇氣をくれた人。．．．聖時には前、私が病気で長期入院していた事は話したよね？」

聖時「たしかデジエルさんのお見舞いのにときに聞いたね。」

ふたば「そう．．．私はね、生まれつきその病気にかかったの。その病気は、当時、治療法が確立してなくて、私はその病気の発症を抑えて、延命する為に入退院を繰り返す生活を送っていたの。」

聖時「生まれつきの病気．．．。」

聖時はそれを聞いて今でこそ健康そうに見えるが、今までふたばは苦勞をしてきて、それは自分なんか創造できない物だったんだなと思った。

ふたば「そして、そんな生活がずっと続いて、私が10歳くらいの頃、私の病気の治療法が発見されたの。けど．．．それはとても危険で、成功率もそんなに高いものじゃなかった．．．。」

聖時「．．．．．。」

ふたば「お医者さんは私に、このままに延命治療を続けるか、それとも成功率は低い治療のための手術を受けるか聞いてきたの。．．．私は悩んだ．．．．だつてこのまま痛くて苦しい延命治療を続けるか、それとも．．．たとえ成功率が低くても、手術を受けるか、家族は手術を受ける事を進めてくれたけど、私は乗り気じゃなかったの。」

聖時「乗り気じゃ．．．ない？」

ふたば「うん、長い闘病生活で、当時の私は生きる事に．．．疲れたたの。死んだ方が楽になるかな？なんて考えてたぐらいだもん．．．」

聖時「．．．．．」

ふたば「だから生きる事にそんなに執着して無かった．．．そんなある日、ふと病院内のリハビリ施設に立ち寄った時に、私は．．．あの子に出会った。」

聖時「あの子？」

ふたば「その子はリハビリ施設で、歩く為のリハビリをしていたの。その子は痛みや苦しみに耐えながらも、必死に歩こうともがいていた。最初はただ、大変だなと思っただけだった。けど次の日に立ち寄った時、側で話していた看護師の人達がその子のこの事を話していたのを聞いて、私のその子を見る目が変わったの。」

聖時「変わった？」

ふたば「看護師の人はこう話していたの。その子はテロでお母さんと妹さんを亡くして、自分自身も左足を無くしたって、そして死んだ妹さんの遺言で、妹さんの左足を移植して

もらい、再び歩けるようにしてもらったって。けど、お医者さんが言うには、たとえ移植がうまく行っても元の用に歩けるようになることは3%も無いって。けど、それでもその子は諦めずに歩けるよううりハビリを繰り返した。何日も何日も・・・そんなあの子を毎日見て、いつからか、私もその子を見るのが日課になっていた。」

聖時はこの話を聞いて、不意にその風景が思い起こされそうになった。

聖時（？この話・・・なんか身に覚えが・・・）
そんな風に思いながらも聖時はふたばの話の続きを聞いた。

ふたば「私はその子を見ながら思った。「看護師さんの話ではお父さんも居ないみたいだった・・・あの子は一人ぼっちなんだ・・・けど、あの子は一人ぼっちでも、前へ進む事を諦めていない・・・どうしてがんばれるの？どうして？」って、あの子は一人ぼっちでも歩く事を・・・前へ進む事を諦めていない・・・それに比べて自分はどうかろう・・・優しい家族や幼馴染のお姉ちゃん達に囲まれ、優しくされているのに治療の辛さに負けて、死んで楽になろうとすら考えている・・・なんて弱いんだらうって・・・。」

聖時「ふたば・・・。」

ふたば「強くなりたい・・・あの子のように・・・私も強くなつて、あの子の様に前へ踏み出したいと・・・私はいつしかその子のがんばりを見ていてそう思うようになったの・・・私はあの子の頑張りから・・・前へ踏み出す勇気と生きる勇気を学んだの。だから私は手術を受ける事にした。手術を受けて元気になって、あの子

に元気になった私を見てもらうんだって。あの時の私にとって、あの子は憧れだったんだ。」

ふたばは遠くを見るような目でソラを見ながら、まるでとても大切な物を見せるような感じで話を続ける。

ふたば「手術を受けて、私は病気を治した。手術後も治療等は大変だったけど、私はがんばれた。あの子に元気になって会うんだ。歩けるようになったあの子と元気になった私で会って、友達になるんだって。やがて、病気を治した私は退院する事になった。けど・・・その子はもう病院にいなかった。あの子は、私よりも先に退院したって看護師さんは言っていたの。私はその子の事を聞いた。どこでどうしているのかを。けど看護師さんも詳しくは知らなかった。ただ、その子が、聖遼の入学案内のパンフレットをよく見ていた事を聞いて、それで・・・。」

聖時「聖遼に入った・・・て事？」

ふたば「うん、私は退院後、入院生活で遅れた勉強を取り戻すために必死に勉強をしたの。そして受験をして・・・聖遼に受かった。これである子に会うことができる。そう思ったんだけど、再会は、以外にも学園が始まる前の春休みだった。」

聖時「春休み・・・。」

ふたば「そう、私の飼い犬のラキが車に引かれそうになって、それを助けてくれたのがその子だったの。」

聖時「え？それって・・・。」

ふたば「そう、私に生きる勇氣と前へ進む勇氣をくれたのは・・・
聖時、あなたなの。あなたが居たから、私は今、こうしていられる。
生きている事ができる。私に生きる勇氣をくれた聖時が弱いわけな
い！私は少なくともそう思っているよ。」

聖時「けど・・・それでも・・・やっぱり僕はふたばが思うほど
強くは無いと思うよ。あの時だって僕がリハビリをするようになって
たのは、なのはさん達が励ましてくれたからだよ・・・」

ふたば「・・・それでも私はやっぱり聖時は強いと思う。だって悩
んでいると言う事は、悩んでいる事その物と向きあっているから悩
んでいるんだもん。逃げずに向き合っている時点で十分強いと思っ
よ。それに、たとえきっかけが他の人に言われたからでも、それを
自分自身で飲み込み、自分の身にすることが出来たのなら、それは
もう聖時自身の物だと思う。だって人はいろんな人から色々な物を
もらって成長していく物なんだもん。」

聖時「あ・・・」

聖時はふたばの言葉を聞き、確かにそうだと思った。

自分があの手ハビリを乗り越える事が出来たのは、なのは達や
ユニ達、そして何より、「たとえ形は変わっても、私はいつもお兄
ちゃんと居るよ」と言う言葉と共に自分に左足をくれた妹の桃華とうかの
言葉があったからだ。

人は一人では生きられない。人は誰かに支え、支えられているから
強くなれる。

そうやって人は前へと進んでいけるものだと言う事を、自分はあの
時に知ったはず・・・

なのに自分は自分の強さを誤解して、それを自分だけの強さだと
思いこんでいた。

強かったのは僕じゃない。みんなに支えられ前へと進める様になった自分なんだと聖時は思い返していた。

ふたば「聖時が抱えている悩み・・・それがどれほどの物なのか私自身にはわからない。もしかしたら、その悩みは一人では解決できる物じゃないかもしれない。もしそうならば他の人の助けを借りてもいいと思う。自分自身で歩く事を忘れなければ。」

ふたばはそう言うと、笑顔で聖時の手を取った。

ふたば「一歩ずつでもいい、一歩一歩歩いて行こう？私も手伝うから。あの時貰った勇気を、今度は私が聖時にあげるから・・・一緒に・・・がんばろうよ！」

ふたばの笑顔と共に聖時に向けられた言葉は、聖時の心に深く染み入ってきた。

聖時「ふたば・・・そうだね、僕自身が弱いと言う事は、僕自身が一番知ってたことなのに、何今更その事で悩んでいるんだろうね。ありがとう、僕にそれを思い起こさせてくれて。」

聖時は笑顔をふたばに向けながら、ふたばに握られた手を握り返して言った。

ふたば「あっ／／／／／ち・・・力になれてよかったよ／／／／／／／／／／／」

ふたばは赤くなりながら聖時にそう言った。

士郎「おゝい！聖時！渡良瀬〜！食事の支度が出来たぞ〜！」

遠くから二人を呼ぶ声が聞こえてきた。

聖時「あっ！ 士郎の声だ。」

ふたば「どうやらお昼ができたみたいだね。」

聖時「だね。さして、お昼にしますか。」

ふたば「うん」

二人はそう言って士郎の音がする方向に歩き始めた。

《つづく》

おまけ番外編

シヤマルの翠屋奮闘記？

アースラ内の食堂。

そこで彼女、高町なのはは悩んでいた。

なのは「うーん困った。」

シヤマル「あら、なのはちゃん、どうしたの？」

なのは「シヤマルさん。」

シヤマル「どうしたの？何か悩み事？」

なのは「ええ、実は、美由希お姉ちゃんが足を怪我してしまっ
て．．．」

シャマル「え?! 怪我を?」

なのは「はい．．．階段から転げ落ちたそうです。で、右足を骨折
してしまって．．．だから、お姉ちゃん翠屋のお仕事ができなく
なってしまう、今お店の人手が足らなくて困ってるんです。」

シャマル「そうだったんですか。」

なのは「本来なら私がお手伝いすればそれで解決するんですけど、
今抱えている仕事結構手間がかかってしまうものなので、お店を
手伝う事ができなくて．．．」

シャマル「そうだったの。」

なのは「今臨時のアルバイトを探してるんですけど、なかなか見つ
からなくて。シャマルさん、どこかにうちのお店で働いてもいい人
居ませんか?」

シャマル「そうですね、うくんやっぱりそう言う人の心当たりは．
．．．あっそうだ!」

なのは「え?! もしかして心当たりがあるんですか?」

シャマル「いいえ、無いけど、その代わり、その臨時のアルバイト
を私が引き受けようと思っの。」

なのは「え?! シャマルさんが?!」

シヤマル「ええ、私は今、取り入って忙しい仕事も無いし、それに今私は後方勤務だから、時間がある程度作れるの。それに、前々から翠屋で一度働いてみたいと思ってたの。」

なのは「そ……そうなんですか。」

シヤマル「あ、そうだ！どうせなら私が考えた新しい料理なんかも新商品として翠屋に出してもらおうかしら？」

なのは「え?!シヤマルさんの料理を?!」

シヤマル「なんだか楽しみになってきた それじゃあ早速翠屋に行つて臨時のアルバイトの話受けてこよう」と

そう言つて食堂を飛び出すシヤマル。

なのは「ちよつ、ちよつと待って!シヤマルさ……ん……
……行つちやつた……まずい……このままじゃあ翠屋
がつぶれちゃう……止めなくちゃ!待って!シヤマルさん!
」!

そう言つてなのはシヤマルの後を追いかけていった。はたして、なのはは翠屋を魔の手から守れるのか?次回へつづく!!

第43話 星の少女と帰国子女？（前書き）

どうも、剣 流星です。

気付いている人も居ると思いますが、この作品のあらすじを変えました。

それと、原作の作品を一つ追加しました。

確認してみてください。

それでは第43話をどうぞ。

第43話 星の少女と帰国子女？

第43話 星の少女と帰国子女？

まどろむ意識、やがてその意識はある世界へと入り込む。
そしてその世界の中で彼女、渡良瀬ふたばはいつものように、とある少女に会う。

その少女は入り込んだ世界の中心にある木、アルファージの根本に居た。

少女「あっ！ふたばちゃん！」

金色の髪で、ふたばと同じぐらいの少女がふたばに声をかけた。
ここは彼女の中にある心の世界「コスモスフィア」である。
ここで彼女は、何度かふたばと出会い、お互いの事を話し合っていた。

ふたば「サキちゃん！また会えたね」

サキ「うん ここ所頻繁にあえるようになったね」

二人はそう言い合いながら、二人はアルファージの根本に腰をおろした。

ふたば「それにしても相変わらず不思議だね。こっやってお互い

が寝ているときに、この世界で会える事が。」

サキ「そうだね。私たちが10歳の時に胸にこの模様が現れてからだよ、お互いの夢が繋がったの。」

そう言ってサキは自分の左胸にある模様・・・紋章を服の上から触った。

ふたば「うん、そして私たちは、このサキちゃんの心の世界「コスモスフィア」で会えるようになった。」

サキ「そうだね。けど本当に不思議です。夢が繋がったこともそうですけど、私がこの自分のコスモスフィアでふたばちゃんに合っている事を、目を覚ました後でも覚えている事が。」

ふたば「え？夢で見た事を覚えている事が不思議なの？」

サキ「はい、私たち「レーヴァテール」は自分のコスモスフィアでの出来事は普通は覚えていません。「ダイブ」の時でも自分のコスモスフィアに誰かをダイブさせても、ダイブした人は中での事を覚えていて、「ダイブ」された本人はコスモスフィア内での事を覚えていない物なの。」

ふたば「そうなんだ。」

サキ「ここは確かに私の中にあるコスモスフィアなんだけどな。」

そう言ってサキは自分の周りを見渡した。

ふたば「あっ！そう言えばコスモスフィアで思い出したんだけど、

コスモスファイアって普通自分が認めた相手でなければ、ダイブさせないものなんだって、ダイブはレーヴァテールにとつてとても大切なことだからって聞いたんだけど……」

サキ「え?!よく知ってましたね。私その事お話ししましたっけ?」

ふたば「あ、これは聖時から聞いたの。レーヴァテールにとってコスモスファイアを見られる事は、裸を見られる事よりも恥ずかしい事なんだって。」

サキ「よく知ってましたね。ふたばちゃんの世界にはレーヴァテールは居ないはずだから、そんな事は知らないはずなのに……」

ふたば「あつ、それはね、聖時のお母さんのお母さん……つまり、お婆ちゃんが実はサキちゃん達の世界から来たレーヴァテールだったんだって、だから知ってたの。それに聖時のお母さんも第三世代って言うレーヴァテールだったらしいから……」

サキ「だから知ってたんですね。」

ふたば「そう言う事」

サキ「そう言えばその聖時さん?でしたっけ。その人の事なんですけど……」

サキは少し聞きづらそうな顔をしながらふたばに聖時の事を尋ねる。

ふたば「うん?聖時の事?」

サキ「はい。……ふたばちゃん……その聖時さんに

もう告白したんですか？」

ふたば「ええ！？ナ・・・・・・・・ナニヲイキナリ／／／／／／／／」

ふたばはサキからの予想外な質問に顔を真っ赤にしながら答えた。

サキ「この前、ふたばちゃんが話してくれた、ふたばちゃんに「生きる勇氣」をくれた恩人さんだったんですよね？その事を聖時さんに告白したんですか？」

ふたば「へっ?!」

ふたばはサキが話した告白の意味を「好きだと」聖時に言う事だと思っていたので、サキのこの言葉を聞いて拍子抜けしたような顔をした。

ふたば「あの告白って・・・・・・・・ひょっとして・・・・・・・・聖時が私の恩人だっと言う事なの？」

サキ「？そうですけど・・・・・・・・それが何か？」

ふたば「う・・・うん、なんでもない。えくと、で聖時に話したかって事だよ。うん、話したよ、この前。」

サキ「そうでしたか。」

ふたば「聖時、あの時、私が見ていたことをどうやら知ってたみたい。」

サキ「知ってたんですか?!」

ふたば「うん、それで……………」

ふたばはサキに別荘の野花の花畑でした話の内容をサキに話した。その後、さらに最近の出来事等をサキに話、サキも自分の近況をふたばに話した。そんな風にお互いがお互いの事をしばらく話し合い、楽しいおしゃべりをしばらく続けた。

ふたば「……………それでね、聖時がね「ウフフツツ」って?どうしたの?」

サキ「いいえ、ふたばちゃん、さっきからずっと聖時さんの話ばかりだな〜で。」

ふたば「そう?」

サキ「うん。ふたばちゃんはとても聖時さんの事が好きなんですね。」

ふたば「え?!な……………何を……………」

突然の「聖時が好きなのか?」と言う言葉で顔を赤くするふたば。

サキ「ここ最近、聖時さんと再会してからは、聖時さんの話ばかりしていましたし、何より……………聖時さんの話をしている時のふたばちゃん、とても良い顔してたからもしかしたらと思って。」

ふたば「そ……そうなんだ。……私……結構顔に出る夕
イブなのかな？……気をつけないと。」

サキ「それで、聖時さんにはいつ気持ちを伝えるんですか？！好き
だって言うんですか？！」

サキは目を輝かせながら、まくし立てるように喋りながらふたばに
迫った。

ふたば「え、え〜と、ま……まだ伝えてない……。」

サキ「ダメですよ！気持ちはちゃんと伝えないと！気持ちって相手
にちゃんと伝えないと伝わらない物なんですから！」

ふたば「わ……わかってるよ。わかってるけど……やっぱ
り伝えるのは怖いし、何より私なんか「好きです」なんて言っ
たら、聖時に迷惑だと思っの……。」

ふたばは顔を伏せ、暗い表情をした。

サキ「私なんか」ってそんな事言っちゃダメです！ふたばちゃ
んはとても魅力のある女の子です！私が保証します！」

ふたば「あ……ありがとう。……でも……それでもやっ
ぱり自信がないよ……。」

サキ「ふたばちゃん……。」

黙り込んで顔を伏せるふたばを見るサキは、どうにかしてふたばに
自信をつけさせてあげようと思った。

サキ「うん……そうだ！そう言えばさっき、来週に
聖祥で文化祭をやるって言ってましたよね？」

ふたば「え?!うん……うん。」

サキ「その文化祭の出し物の中に「歌のコンテスト」があるって言
ってましたよね。」

ふたば「そ……そうだけど……」

サキ「ふたばちゃん、度胸試しのつもりで、今度そのコンテストに
出てみましょう!」

ふたば「え?!コンテストに?!」

サキ「はい」

ふたば「無理無理無理無理無理!!そ……そんなの出来な
いよ!」

ふたばは顔を横に激しく何度も振りながら無理だとサキに言った。

サキ「大丈夫です ふたばちゃんの歌はとても上手ですからコンテ
ストでも良い所まで行く事が出来ると思います。レーヴァテールで
あるサキが保障します」

ふたば「で……でも……」

サキ「ふたばちゃん……もし自分自身に自信がもてないなら、

ふたばちゃんの歌を認めたサキや聖時さんの事を信じてください。」

ふたば「サキちゃんと聖時……を？」

サキ「はい」

ふたば「う……う……うん……」

サキ「まっ、コンテストまでまだ日がありますから、よく考えて、もし出たいと思えたなら出てみてください。このコンテストで人前で歌えるようになったら、きつと度胸が付くと思っんです。そうすれば自信をもって聖時さんに告白できると思っんです。」

ふたば「聖時に……」

サキ「とにかくよく考えて置いてください。」

ふたば「う……うん。」

自信なさげに返事をするふたば。と、そのとき、サキとふたばの視界に変化がおきた。

目が霞み、周りの風景が霞んでいき、二人の姿が少しずつ薄れてくる。

サキ「あっ！どうやらそろそろ目が覚めるみたいですね。」

ふたば「そうみたいだね。それじゃあまたね、サキちゃん。」

サキ「はい またねです、ふたばちゃん」

二人は互いに挨拶を交わし、やがてこのコスモスファイアから消えた。

.....

ふたば「う……う……うん……」

意識が段々と覚醒していき、やがて瞼を開けて目をさますふたば。目を開けたサキの目にまず最初に映ってきたのは、幾度も見て慣れ親しんだ自分の部屋の天井だった。

ふたば「……またサキちゃんの夢……」

そう言いながらふたばは体を越して部屋の窓を見た。

締め切ったカーテンからは外から入ってくる朝日の光が漏れている。俺を見ながらふたばは、先ほど夢の中で会ったサキに言われた事を思い返した。

ふたば「……………コンテストに出る……………か……………」

……………

ふたば「ゆめみ……………さん？」

ふたばは今、聖時や理佐、なのはたちと共に学校への道を歩いて
いた。

聖時「そう、春先から家を空けていたゆめみがもうすぐ帰ってくる
んだ。」

ふたば「ゆめみさんね、どんな人なの？」

聖時「そうだな・・・うん」

聖時がゆめみについて考えていると、横からはやてがふたばの問いに答えてきた。

はやて「ゆめみさんはな、神谷家の住み込みの家政婦みたいな人でな、見た目は15〜16歳位の女の子でな、聖時の事をとても大事にしている、過保護なロボっ娘なんなんや」

ふたば「は？ロボっ娘？」

はやて「ゆめみちゃんはな来迎寺グループが作った人間形態型のロボットでな、聖時が生まれる前から神谷家の家事等を仕切ってたんや。」

ふたば「ロボットって・・・刹那さんは知ってた？」

ふたばは側で話を聞きながら歩いている刹那に聞いた。

刹那「はい、昔、小さい頃お嬢様と一緒に世話になりましたから。」

ふたば「そうなんだ。けど・・・なんで今まで居なかったの？」

ふたばは今年の春から神谷家に入入りしていたが、それらしい人？は見かけなかった。

だが、その人がふたばが出入りし始めた頃から、家を留守にしていたのなら納得した。

しかし、そうすると次に、なぜ今まで留守にしていたのかという疑問が浮上してきたので、ふたばはそれを聞いてみた。

聖時「ゆめみは春先から来迎寺の研究所でフルメンテをしてたからいいままで居なかつたんだ。」

ふたば「へーそうだったんだ。」

聖時「うん、けど・・・フルメンテだけで済んでれば良いんだけど・・・あのマッドが妙な機能を追加して無ければいいんだけどな。」

聖時がなにやらぶつぶつと独り言を言っていたがふたばは声が小さくて聞き取れないでいた。

.....

いた時に、戦争で無人になった世界で見つけたんだって。来迎寺の科学力は確かにすごいし、その気になれば、人間形態型のロボットヒューマンフォームを作るけど、採算に合わないから今まで作らなかつたんだって。」

ピティ「へへ、そうだったんだ。じゃあ、ゆめみはこことは別の世界の出身ってことになるね。」

アルフ「あゝ、そう言えば聖からそれらしい事を昔聞いたな」

アキ「私は初耳だよそれ。」

刹那「私もです。どこでその事を知ったんですか？」

聖時「父さんの部屋で見つけた、父さんの日記に書かれてあったんだ。」

ピティ「へへそうだったんだ。」

聖時「……ゆめみはね、その世界の人たちが滅んでも、自分を必ず迎えに来るって言うてくれた人たちの帰りをずっと待ってたんだ。その人たちから留守を任されたプラネタリウムを守りながら……」

ふたば「プラネタリウム？」

聖時「うん、プランタリウム。ゆめみはあるデパートに設置されたプラネタリウムの解説員だったんだ。そこでゆめみはその世界の人たちが滅んだ事を知らずに、迎えに来るって言葉を信じてずっとプラネタリウムの留守を守ってたんだ……いつもの業務お客の呼び込みをしながら……」

んな時でも決して消える事のない、美しい無窮のきらめき、満天の星々がみなさまをお待ちしています。」って言いながら、無人の街で来るはずの無いお客を招き入れる為に街頭に立ってたんだって。」

ふたば「なんだかとても悲しいね。帰るはずの無い人たちをたった一人で待ち続けるなんて……」

ふたばは話を聞いてとても悲しそうな顔をした。

ふたばは薄暗い、所々破壊された廃墟の中で、一人の少女が、一人ぼっちで主たちの帰りを待っている姿を思い浮かべた。ふたばはその姿がとても寂しそうに感じて暗い顔になった。

聖時「うん……そうだね。」

聖時も同じような風景思い浮かべたのか暗い顔になった。暗い雰囲気^{アムビエンス}が聖時たちを包む。

アルフ「あ、そうだ。みんなに言うておかなきゃならない事があったんだ。」

アルフが暗い雰囲気を換えようと話題を変えるために別の話を始めた。

聖時「何？」

アルフ「ほら例の檜山遥の事だよ。あの子……あんなたちが怪しいと睨んで接続して情報を抜き出そうとしてるみたいだよ。」

聖時「なっ!」

ふたば「私たちが……」

アキ「怪しい?!」

ピティ「何それ?!なんでそうなるの?!」

アルフ「あの子は、どこで嗅ぎ付けてきたのか、裕也と由香がES能力者だと知ったの。……あの子流に言えば、「フラーレンに所属していないES能力者は危険」だって事みたいだよ。」

聖時「き……危険って……」

刹那「……でも、それは仕方がない事だと思います。ES能力は対人に対しては、とても高い能力です。そんな能力を持った人が野放し状態なら、警戒もすると思います。」

アルフ「刹那の言う通り、確かにそうなんだよ。だからあの子は二人を危険視して、犯人候補にした。さらにこの所、二人に良く会っている聖時たちを協力者だと思っているみたいだよ。」

ピティ「なんか気分悪い。勝手に犯人候補にされるなんて!」

ピティが犯人候補呼ばわりされた事に腹を立てた。

アルフ「とにかく、接続される隙を作らない為にも、常に二人組みで行動して欲しいんだ。あたしもそれとなく、あの子を注意を逸らすようにするから。裕也と由香達にもその事を伝えておいてくれな
いかい。」

聖時「うん、わかった、伝えておくよ。」

聖時はそう言っつてうなずき、返事をした。

車内アナウンス「次は○×駅～○×駅」

アキ「あ、そろそろ着くよ。」

聖時たち車内アナウンスを聞き、降りる準備を始めた。

《つづく》

第44話 星の少女と帰国子女？（前書き）

どうも、世間も懐も寒くなってきた今日この頃の剣 流星です。

懐が本当に寒く、年末を無事に過ごせるのかいささか心配な状態ですが、

それでもがんばって投稿します。

では第44話をどうぞ。

第44話 星の少女と帰国子女？

第44話 星の少女と帰国子女？

昼休み聖遼学園の屋上、ここで河瀬裕也は一人で居た。

裕也「は……腹減った〜。」

今日は聖時達が全員分のお昼を作って持ってくることになっていたので、裕也は昼食を買わずにここで聖時達が来るのを待っていた。

トラブルタ（おい、一人で行動するのは不味いんじゃないか？釘刺されてたる？）

裕也「別にいいだろう？どうせすぐに聖時達に来るんだから〜」

裕也は空腹のせいか、力ない声でトラブルタに答えた。

トラブルタ（けどよ〜）

あまり気にしない様子の裕也にトラブルタがもう一度注意しようとしたとき屋上の扉が開いた。

裕也「おっ、ようやく来たか。遅いぞ聖……時？」

聖時たちがきたと思い、来るのが遅い事に対して、文句を言いなが

ら扉の方を見る裕也。

だがそこに居たのは聖時たちではなく、今、最も会うのがまずい人物である榎山遥だった。

遥「悪かったわね、待ち人じゃなくて。」

裕也「な……榎山……」

裕也は遥の姿を見てあせった。

今、裕也は一人である。

もし接続された終わりな状況である。

そのため裕也はこの状況にあせっていた。

裕也（ま……まずい……今、俺は一人だ。もし、相手が俺以上のSEの使い手だったら……完全にアウトだ！）

トラブルタ（だから言ったんだ。一人の状態だとやばいんじゃないか？って。）

裕也（うるさい！いまさらそんなこと言っただって仕方がないだろう！とにかく接続されないように触られるのをさけないと）

トラブルタ（賢明な判断だな。接続するには相手に触れて接点ノードを作る必要があるからな）

裕也は内心焦りながらも、表層上は平静を保ちながら遥を見た。

裕也（と……とにかく、平静を装って普通に会話をして、聖時達がここに来るまでの時間を稼がなきゃな……）

裕也はそう思いながら、今日の前に居る遙に目を向け、会話をしようとして声をかけた。

裕也「よう、榎山。屋上になにか要なのか？」

遙「ええ、ただし、用があるのは屋上じゃなくて河瀬くんになんだけどね。」

遙は会話をしながら裕也に近づいてきた。

それに対して、裕也は遙との距離を一定に保つ様に後ずさりをした。

遙「・・・河瀬くん、どうして後ずさりをするの？」

一歩近く遙。

裕也「い・・・いや、ただ・・・なんとなく・・・」

一歩さがる裕也。

遙「フフフツ、相手に触られて接続するための接点ノードを作らせないようにしてるみたいね？」

裕也「?!」

遙「けど・・・それは10年前の反応ね。」

裕也「なんだって？」

遙「現代のSEはね・・・無線ワイヤレス接続なのよ。」

裕也「な……に?!」(無線接続?!つまり、接点を作らなくても接続出来るって事か?!)「

トラブルタ(あゝあ、こりゃツミだな。)

裕也(もうダメだ!?)

遥「接……」

遥が接続をしようとし、裕也が諦めかけた時、突如屋上の扉が開かれた。

遥「?!」

裕也「?」

裕也と遥はそれに驚き、二人そろって開かれた屋上の扉の方を見た。するとそこには聖時を初めとしたいつもこの屋上で昼飯を食べているメンバーだった。

聖時「あつ、河瀬先輩。先に来てたんですか?教室に居ないから探しましたよ?」

ふたば「あれ?隣に居るのは先輩のお友達か何かですか?」

裕也「あ……ああ。」

ふたば「そうなんですか。あつ、はじめまして、渡良瀬ふたばと言います。これからみんなでお昼を食べようと思うんですけど一緒に

「どうです？」

親しげな感じで遙に接するふたばを見て、毒気を抜かれたような顔を
する遙

遙「あ……いいえ、遠慮しておきます。」

そう言つて遙は屋上の扉から校舎内へと消えた。

遙「フウ〜ツ、まったく屋上には誰も入れないようにここで足止め
してと言つて置いたはずだけど？」

遙は、屋上から続いている階段を下りながら、階段の踊り場の壁に
持たれている人物……アルフに話しかけた。

アルフ「いや〜ごめんごめん、強引に押し切られてね、止める事が
出来なかつたんだよ。」

遙「強引にね、故意に、の間違いじゃないの？」

遙は足止めが出来なかつたアルフ疑うような目で見た。

遙「……まあいいわ。過ぎた事をとやかく言つても仕方が
ないわね、けど、今後こう言つ事は無いようにしてもらいたいわね。」

アルフ「あ、ああ……」

アルフの横を歩きながら通り過ぎる遙。

遥「あ、そうそう……」

アルフの横を通り過ぎた遥は、立ち止まり、アルフに話しかけた。

遥「もし、今後、私の邪魔をした場合……容赦はしないからそのつもりで。(……そう、私の邪魔をするなら、たとえ相手が誰であろうと容赦はしないわ！私は事件の謎を解いて、必ず先生を！)」

遥は首だけを振り返りながら、アルフに殺気をぶつけてそう言った後、その場をたち去った。

アルフはそんな遥の背中を見送った。

アルフ「フツ、つたく殺気を込めながら言わないで欲しいね。」

そう言いながらアルフは、聖時達が居るであろう屋上へと足を運び、その扉を開けて、屋上にでた。

するとそこでは、今回一人で行動した裕也を注意すべく、他のメンバーがお説教をしている最中だった。

聖時「あれほど一人で行動しないでくださいと言っておいたのに！」

アキ「まったくです。香野先輩が教室に河瀬先輩が居ない事に心配して、私たちに連絡をすぐにくれたからこうして助けられましたけど、もう二度と一人で行動しないでください！！」

裕也「わ……悪かったって。」

いで、そこから恐怖しか感じられない。

「怖い、逃げ出したい！」側に居るだけの聖時たちですらそう感じているくらいである、それを向けられた裕也は、その比ではないはずである。

現に裕也は恐怖で立ちすくみ動けなくなっている。

裕也は目の前の笑顔を向けながら、恐ろしい怒気を放つ由香を見ながら、由香の話を聞いていた。

由香「河瀬くん……ちょっと、OH HANA SHIしようか」

ピティ「OH HANA SHIって……まさか?!」

聖時「香野先輩もOH HANA SHI病に罹ってたのか!？」

説明しよう!

OH HANA SHI病、それは別名・魔王病、なのは病とも言われている。この病気は普段、性格が大人しく、温和な性格の女性が主に感染し、これが発病すると、知人や友人、家族が無理や無茶をすると、目が単色になり、黒いオーラを身に纏い、OH HANA SHI SHIと言う名の肉体言語を交えたお説教をする様になる。これを喰らった人物は、大抵みなこれがトラウマになると言う。感染元・高町なのは。

以上、解説は作者の剣 流星でした。

由香「さあ河瀬君、OH HANA SHIしようか？」

裕也「いや、それ絶対お話しじゃないだろう!？」

由香「そんなこと無いよ、ただちよつと拳を交えての会話をするだけだよ ほら良く言うじゃない、「拳と拳、それを交えてはじめて分かり合えることもある!」って」

裕也「お前はガ○ダムファ○ターか! って言うか、主に俺だけが一方的に拳を喰らう羽目になりそうな予感しかないんだけど!」

由香「そんなこと無いよ (ボソ、オペレーションイエロー発動) またまた説明しよう。」

オペレーションイエロー、それは由香のACである「きいろ」が、SEの能力を使って、由香本人の肉体のリミッターを外し、一時的に人間離れた動きが出来る物である。

以上、剣 流星でした。

裕也「ちよつと待て!なんでそんな物を使う必要があるんだ!？」

由香「い・い・か・ら、大人しく、OH HANA SHIを喰らいなさい」

裕也「あーーーーー!」

裕也の絶叫が屋上にこだました。

聖時「……平和だね。」

ふたば「そうだね。」

ピティ「うん。」

アキ「いい天気ですね。」

刹那「・・・そうですね。」

アルフ「ああ・・・。」

何かを振り切ったような、すがすがしい顔をしながら、屋上に広がる青空を眺める6人・・・。

うららかなお昼時（一部の者除く）であった。

第44話 星の少女と帰国子女？（後書き）

O H H A N A S H I病、最近は他の作品でもちらほら感染した方が見受けられますが、あなたの書いている作品のキャラは感染してませんか？感染してしまう前に、どうか適切な予防をすることを勧めします。ではでは

第45話 星の少女と帰国子女？（前書き）

どうも剣 流星です。

今年の更新はこれで最後です。

次回の更新は正月明けになります。

それでは第45話をどうぞ。

刹那「なるほど、そうだったんですか。それなら納得できますね。」

聖時「ん？なにが？」

刹那「別荘の事です。あれほどの広さの屋敷を一人で管理するのは、家事全般が得意な聖時さんでも無理だと思ってたんです。」

ふたば「あ！そっいえばそうだね。あの別荘、今では私達が聖時の手伝で、掃除等をやっているけど、それ以前は聖時一人だったんだもんね。」

聖時「ゆめみは、魔法の事を父さんの部屋で知った時に、一緒に居たから僕が魔法に関わっていることを最初から知ってたんだ。僕が別荘の使い方や魔法等の習得の仕方を知っていたのは、ゆめみが教えてくれたからなんだ。」

アルフ「へ？ゆめみは初から聖時が魔法に関わって居た事を知ってたの？！」

聖時「うん。」

アルフ「よくゆめみが許してくれたね。ゆめみの事だから「魔法の修行なんてもつての他です！！もし修行中に聖時さんの綺麗なお顔や白魚のような手が傷ついたらどうするんですか？！」と言いきりなんだけどね。」

聖時「た・・・確かに最初そう言われたし、ずいぶん反対されたけど、ゆめみは僕が強くなるうとする事は、ある程度は仕方がないと思っていたみたいだし、何より、あのテロ事件の後、下手に塞ぎこ

んだままで居るよりは良いと思って、ユニには内緒で許可してくれ
たんだ……。もつとも、その分の代償は払わせられたけどね。
……」

当時の事を思い出しながら遠い目をする聖時。

ふたば「だ……。代償って……。一体何を払わせられたの？」

聖時「……。ゆめみお手製の衣装を着ての撮影会……」

アルフ「あー、それは気の毒に……」

由香「？衣装を着ての撮影会がどうして気の毒なの？」

アキ「ゆめみさんの作る衣装は、その……。なんて言うか、いわゆるゴスロリ的な衣装がホトンドなの。」

由香「え？そ……。それじゃあ……。撮影会って……」

聖時「……。そう……。僕の女装した姿の撮影会……。OTL

由香「あははは……。と……。所で、その事は童虎さんや猛くん達にも知らせたの？いつもの様に家に行ったら、知らない人がいたって驚くよ？」

聖時「童虎先生には今朝家を出る前に知らせたし、猛達にはメールで知らせたから。ゆめみにはコッチの事を定期的に電話やメールで伝えてたから大丈夫だよ。」

ピティ「あ、そういえばあんた、マメにゆめみにコッチの事を電話

やメールで知らせてたね。」

聖時「まあね。ま、とにかく仲間が増えると言う事だよ。」

刹那「再会するのが楽しみです。」

アキ「だね。」

そう言って穏やかな空気の中、昼食は続いた。

裕也「……………ど……………どうでもいいけど、誰か治療を……………(ガクッ!)」

……………若干一名を覗いて。

*

聖時達がお昼を食べている時と同じ時間。

出雲にある猛達が通う中学でも、聖時達と同じように猛たちも集まってお昼を食べていた。

猛「……マズイな……」

猛のその一言で、お昼を一緒に食べていた琴乃と剛が箸を止めた。

琴乃「……私の作ったお弁当、お口に合いませんでしたか？」

琴乃が顔を曇らせながら自分の箸を止めた猛に聞いてきた。

猛「へ？あ、いや……」

琴乃「確かに、聖時さんや土郎さんの作った物に比べれば美味しくは無いですけど……」

剛「猛……作ってくれた琴乃さんに対して、その一言は、失礼なんじゃないか？」

猛「あ、イヤイヤ、別に琴乃の作った弁当が美味しくないって言ってるんじゃないくて、俺がマズイと言ったのは、芹の事についてだよ。」

琴乃「へ？芹さんの事……ですか？」

剛「芹って……確か六介ろくすけさんの……」

猛「ああ、爺ちゃんの孫のあの芹の事だよ。父親の一時帰国に便乗して、昨日アメリカから帰ってきて、今家に居るんだ。」

剛「そうなのか？」

琴乃「はい、そうなんです。私も今朝、朝食を作り猛さんの所に来たら、芹さんが居たので驚きました。」

剛「そうだったのか、だがそれがどうしてマズイんだ？」

猛「実はさ、昨日聖時達の所から帰って来たのが遅かったらどう？」

剛「？ああ。」

猛「その事で、芹が不振がって俺が何か良くない事をしてるんじゃないかって疑り始めたんだ。それで、俺にしつこく付きまとうようになって、それで・・・。」

剛「確かにそれはマズイな・・・。」

琴乃「芹さんが猛さんに付きまとうてしまったら、下手をすると私たちが明日香の持っている「風の帽子」で海鳴市の聖時さん達のところに行く所を見られてしまいますね。」

剛「確かに、それはマズイな・・・。」

猛「見られるリスクを考えると、ここはやっぱり、芹が帰るまでは向こうに行くのを自粛した方がいいかもしれないな、どうせ明後日には帰るみたいだし、それまでは聖時達だけでがんばってもらおうか。」

琴乃「あれ、でもそうすると、今日はどうするんですか？確か聖時さんからメールで「今日会わせたい人が居る」って来てましたけど？」

琴乃は今朝方、携帯のメールボックスに入っていた聖時からのメールの内容を思い出して言った。

猛「そういえばそうだったな。なら、行かない訳にはいかないか・
・なら、芹の居ない隙を付いて、明日香ちゃんと合流して、向こうに行くしかないな。」

剛「それしかないか・・・」

琴乃「ならその旨を明日香にもメールで知らせておきます。」

猛「頼むよ。」

そう言っただけで食事を再開する猛たち。だが、この時、しっかりと対策をしていなかったため、あんな事が起きてしまうとは、この時の猛たちは知る良しもなかった。

放課後の聖遼学園の敷地内。

そこで聖時達はいつもの様に、犯人探しと聞き込みをしようと玄関前に集まっていた。

ちなみにアルフは遥の手伝いで別行動中である。

聖時「それじゃあ今日は・・・？なんだ、校門の辺りが騒がしいな？」

ふたば「・・・本当だね。」

聖時達は校門前に人が集まっているのを玄関先から見て言った。

裕也「何か有るのか？」

由香「行ってみる？」

聖時「ええ、行ってみましょう。」

そう言つて聖時達は校門の方へと移動した。

その時、校門の方へ移動している聖時に、聖時のクラスメイトの鈴木が声をかけてきた。

鈴木「あれ？神谷も例のコスプレ美少女を見に来たのか？」

聖時「は？コスプレ美少女？」

鈴木「なんだ知らないのか？今日の午後から、校門前に、まるで誰

かを待っているようにコスプレ美少女が居座っているって。」

聖時「誰かを待っているコスプレ美少女ね……」

聖時はまるで気にしてないような声でそう言った。」

鈴木「いや、まじで本当に可愛かったな、まるで人形のようなスタイルと白い肌、それがコンパニオンの様な紺の制服と、耳についているメカの耳がまた合って、とてもいいの……!」

ふたば「ふ、んコンパニオンの様な紺の制服に機械の耳ね、ってどうしたの聖時？」

ふたばが鈴木の話聞いて様子がおかしくなった聖時を見て声をかけた。

聖時「……紺のコンパニオンの制服に機械の耳……ま……まさか……!」

聖時はいきなりふたば達を置いて、走ってその少女が居る校門に走って行った。

校門にはその少女を中心に人が集まり始めていた。

聖時はその集まりの中心の少女を見て、そして……固まった。

そんな聖時の後ろから、聖時を追ってふたば達が走って追いつき、聖時に声をかけた。

ふたば「ど……どうしたの聖時?いきなり始めて。」

聖時の方が見ているほうを見ながら、ふたばは聖時に話しかけた。

ふたば「・・・アレが例のコスプレ美少女？」

ふたばは校門の前に佇んでいる少女を見た。

その少女は話の通り、紺のコンパニオンの制服を着て、耳のところに、なにやらインカムを模したような何かをつけており、年のころは15〜16ぐらい、服と同じ紺の帽子をかぶり、長い髪を後頭部で分けてあり、その長さは膝くらいまでであった。

由香「この子がコスプレ少女ね、結構かわいい子じゃない。」

ふたばの後ろから、少女をみた由香が感想を言った。

聖時「・・・ゆめみ。」

ふたば「へ？聖時、今なんて？」

聖時「アレ、今日みんなに紹介する予定だったゆめみだよ。」

由香「え?! そうなの?!」

刹那「ま・・・間違いありません。私の幼いころの記憶にあったゆめみさんと同じです。」

アキ「な・・・なんでここに来てるの?!」

ゆめみを知っている面々が騒ぎ出す。すると、その騒ぎでこちら存在に気がついたゆめみは聖時の顔を見て笑顔になると、聖時に向け

て走って抱きついた。

ゆめみ「聖時さん……聖時さ~~~~ん」

抱きつくゆめみ、それを受け止める聖時。

ふたば「あ~~~~!!」

ゆめみ「聖時さん！聖時さん！聖時さん！」

ギュツと力強く聖時を抱きしめるゆめみ

聖時「ゆ……ゆめみ落ち着いて！と言うか、力強く抱きつかないで……お……折れる折れる折れる折れる……ギャ~~~~」

ゆめみに抱き付かれ、サバ折状態になり絶叫を上げる聖時。

この後、ゆめみに落とされた聖時が意識を取り戻すのに、数分かかったと言っ。

《つづく》

第45話 星の少女と帰国子女？（後書き）

今年最後の更新でした。

それではみなさん良いお年を。

第46話 星の少女と帰国子女？（前書き）

明けましておめでとう御座います。

剣 流星です。

新年初投稿です。

では第46話をどうぞ。

第46話 星の少女と帰国子女？

第46話 星の少女と帰国子女？

- - - 数分後

聖時「ゼエ・・・ゼエ・・・ゼエ・・・し、死ぬかと思った・・・」

ゆめみ「す・・・すいません、ひさしぶりの聖時さんだったから、つい・・・」

聖時「そりゃ、久し振りなのはわかるけど、それで抱きしめられた拳句、そのままサバ折で意識を落とされるのは・・・もっと時と場所を考えてよ・・・」

ふたば「まったくです。公衆の面前であんな事をするなんて、常識を疑いますよ！」

ふたばは擬音で「ブンブン」と言う文字が付きそうな感じで、なぜか怒っていた。

ゆめみ「あら？あなたは・・・」

ゆめみはふたばを見ると、まるで値踏みでもする様な感じでふたばを見始めた。

ピテイ「な……なんか語り始めたね……」

刹那「説明してくれるみたいですね……」

ゆめみ「つまり私は聖時さんの母親も同然！ですから聖時さんのお嫁さんを決めるのも私の役割なのです！！」

聖時「ちょ……ちょっと待って！！なんでそうなるの！？大体嫁つて！？」

ゆめみ「私は常々思っていたんです……聖時さんのお嫁さんになる人は、千尋さんの様な女性でなくてはと……」

聖時「話聞こうよ！！」

ゆめみ「そんな時、聖時さんから最近よく名前を聞く女性……渡良瀬ふたばさんの存在を知りました。」

ふたば「よく聞くて……そうなの……」

聖時「あ、う……うん……」

お互いを赤い顔して見る聖時とふたば。しかしそんな二人を置いてゆめみはさらに語る。

ゆめみ「聖時さんの話を聞いている内に、聖時さんがココまで言わせるほどの人、渡良瀬ふたばと言う人がどんな人なのかを知りたくなり、私は今日ここに来たんです！！」

聖時「そ……そうだったんだ。それで、結果が……」

ゆめみ「さつき言った通りです・・・」

ゆめみはふたばを見ながらふたばについての感想を話し始めた。

ゆめみ「平坦な胸・・・」

ふたば「(グサツ!)うっ!」

ゆめみ「お子様同然の体つき・・・」

ふたば「(グサグサツ!!!)うっ!!」

ゆめみ「さらにはお子様顔と三拍子付き・・・」

ふたば「(グサグサグサツ!!!)うっ!!」

カンカンカンカ〜ン

どこかでゴングのような音が鳴り、ゆめみの容赦ない言葉でOTZの体勢で倒れこむふたば。

裕也「よ・・・容赦ないな〜」

由香「まるで姑みたい・・・」

聖時あ・・・あのさ、ゆめみ・・・ふたばはまだ中学生だよ、今は
それでも、将来的には・・・」

何とかふたばのフォローを使用とする聖時。

ゆめみ「……無理ですね、私的に言わせて貰いますと……」

聖時「貰いますと?」

ゆめみ「この歳でアレでは、将来は絶望的だと私はそう判断します。絶望的です。まっ平らです。」

ふたば「ま……まっ平ら……フツ、フツ、フツ、フツ、フツ、フツ、フツ……」

聖時「ふ……ふたば?」

さつきまでOTZの体勢で黄昏ていたふたばが、不気味な声で笑いながら、まるで幽鬼の様にユラユと立ち上がった。

ふたば「さつきから人の胸を平ら平らって……」

アルフ「イヤ、そんなに平ら平ら言って「何か言いました」いいえ何でもありません……」

ふたば「とにかく!人の事を平ら平らって言ってましたけど、あなただって人の事をどうこう言えるような大きさしてないじゃないありませんか!」

ふたばはゆめみの胸をビシッ!と指さしながら言い放った。

たしかにゆめみの胸は、お世辞にも有るとは言えないような大きさだった。

一応大きさは有るには有るが、申し訳程度の大きさで、今現在のふたばとそう変わらない大きさだった。

聖時「いやいやいや、まったく身に覚えが「神谷!!」って鈴木?!」

殺気を含んだ男子の目の集まりから、メガネをかけたクラスメイトの鈴木が出てくる。

鈴木「きさま〜、なんてうらやましんだ!!このリア充!!」

聖時「はあ?!」

鈴木「たださえお前の周りには、大和撫子と言っ言葉がよく似合う藤宮さん、クラスで1、2を争う可愛さの渡良瀬さん、さらには巨乳留学生のハラオンさんや、高等部の図書館のアイドルと言われている香野先輩、最近はそのセージちゃんまでお前の周りに!!」

聖時「おい待て!!最後!ナンカ妙なのが紛れ込んでるぞ!!」

鈴木「さらにはこんな可愛い子の胸を揉んだと〜〜〜!!」

殺気を含んだ男共の目に当てられ、冷や汗を垂らしながら後ずさる聖時。

鈴木「貴様はこの学園の男子の大半を敵に回した!もはや逃げられんぞおおおお!!」

いつの間にか囲まれる聖時。周りからは「覚悟しろ」だの「リア充め!」だの「もげろ!」だのと言っ言葉が聞こえてくる。

聖時「や・・・やばい、なんて殺気・・・まるで血に飢えたケモノ

の……いやこの場合はケダモノ……か？)

鈴木「さあ、覚悟……鈴木くん……そこ……どいてくれるかな？」って渡良瀬さん今は取り込み……ヒィ！」

背後から肩をふたばに叩かれ、振り向いた鈴木は、ソレを見て、悲鳴を上げた。

ふたば「フッフッフ、聖時」

そこにはハイライトが消えた目で、黒い何かを噴出したふたばが立っていた。

ピティ「ま……魔王化だ……ふたばにも「なのは病」が感染してたんだ……」

ふたば「聖時……」

ガシッ！

突如聖時の頭をバスケットボールをつかむように驚掴みするふたば。

聖時「ふ……ふたば……さん？」

ふたば「何怯えてるのかな？私はちょっと向こうの校舎の影に逝って、OH H A N A S H Iしよと思うているだけだよ」

聖時「なんか字が不吉な物になってるうううううううう！！」

ふたば「そんな事無いよ さあ、ちょっと逝こうか」

アキ達は時折鈍い音がする校舎裏を見ながら、引きずり込まれた聖
時の安否を祈った。

《つづく》

第46話 星の少女と帰国子女？（後書き）

前々から作品内に出てくる、クラスメイトの鈴木くんは、IZUM
O2に出てくるあの鈴木くんです。

第47話 星の少女と帰国子女？（前書き）

最近、ますます寒さが厳しくなり、
布団から出るのが辛くなっている剣 流星です。

では第47話をどうぞ。

第47話 星の少女と帰国子女？

第47話 星の少女と帰国子女？

聖時「痛つつつ……」

ふたば「ごめんね……まさか赤ちゃんの時の事だとは思わなくて……」

アチコチを負傷した体を裕也に支えられながら、聖時は神谷邸の玄関前まで歩いてきた。

あの後、聖時がふたばからのOH HANA SHIを受けた後、ふたばはゆめみから話を聞いて落ち着いた。そして聖時の体が負傷して動けない状態なので、とりあえず聖時を神谷邸に送り届けてから、残ったメンバーで捜査をしようとした時、猛たちから「重要件で相談したい事があるから、至急こちらに来て欲しい」と言うメールが来たので聖時達は全員で神谷邸に来たのである。

聖時「い……いいよ、ゆめみの言い方が悪かったんだから。」

ピティ「まったく……ゆめみ！あんな言い方されたら、誤解されるでしょうー！」

ゆめみ「ウフフツツ / / / / / (トリップ中)」

アキ「ピティ、ダメだよ……まだトリプツてるから。」

ピティ「……頭痛い。」

ピティは目頭を押さえながら、疲れた声で言った。

刹那「さて、つきましたよ。ただいま戻りました。」

先頭を歩いていた刹那が玄關の扉を開けて、挨拶をしながら入っていき、続くように聖時達も入って行った。

童虎「お！戻ったか。」

ピティ「あつ！童虎、ただいま。」

童虎「うむ、お帰り。猛たちはもう来てるぞつと……どうしたんだ聖時は？ボロボロではないか……それにそちらの娘さんは？」

童虎は裕也に肩を貸してもらっている聖時と、トリプっているゆめみを見て聞いてきた。

ピティ「あー……聖時についてはちよつと……ね、で、こつちの女の子は、今朝話していたゆめみだよ、ゆめみ！いつまでもトリプってないで挨拶！！」

ゆめみ「ハッ！え？」

ピティの一言で我に帰ったゆめみが、周りを見渡した後ピティを見た。

ピティ「童虎にあいさつだよ！あ・い・さ・つ！！」

ゆめみ「あっ！はじめまして、童虎さん。ゆめみと言います。童虎さんの事は聖時さんからの電話で聞いてます。」

童虎「ああ、話はユ二殿や聖時達から聞いている。一応神谷家の庭師と言う事でこの家においてもらっている童虎と言う者だ。よろしくたのむ。」

ゆめみ「こちらこそ。」

童虎「所で、今日は早かったが、どうしたんだ？」

聖時「実は猛達からメールで「重要用件で相談したいことがあるから至急来て欲しい」と言われたから急いで来たんですけど、何か聞いてませんか？」

童虎「それならたぶん芹の事だろう。」

聖時「芹？誰ですソレ？」

童虎「ワシに聞くより猛に聞いたほうがいい、猛たちは今、茶の間に居る。」

聖時「わかりました。猛達から聞いてみます。」

そう言って聖時は居間へと移動した。

居間へと続く廊下を歩き居間への襖を開くと、そこにはいつもこの神谷邸に来る猛、剛、琴乃、明日香、士郎がいたが、その中に見慣

れない少女が居たのに気づいた。

歳は聖時たちと同じぐらいで、黒髪の活発そうな顔の子だった。

明日香「あっ！お帰り聖時お兄ちゃん」

明日香が笑顔で聖時の側によりお帰りの挨拶をしてきた。

聖時「ただいま明日香ちゃん。」

聖時は微笑みながら明日香の頭を撫でた。

明日香「エヘヘッ」

聖時に撫でられて、明日香は満面の笑顔になった。

猛「聖時、お帰り。」

剛「お邪魔してるぞ聖時。」

琴乃「おじゃましてます聖時さん。」

猛達が挨拶をしてくるその後続くように、黒髪の少女が挨拶をしてきた。

芹「あなたが聖時くんね、はじめまして、私は大須芹^{おおすせり}、猛の幼馴染よ、よろしくね」

聖時「あ……はあ、よろしく……」

いきなり挨拶をされて、気の抜けたような返事をする聖時。すると、聖時を見ていた芹は、次に聖時の肩の辺りを見て話し始めた。

芹「へへ、さつき話しを聞いた時は半信半疑だったけど、本当に妖精の姿をしてるんだ……」

芹の声を聞いて聖時達は驚いた。

聖時「な?!ピティは今、姿を消しているはず?!」

アキ「ソレが見えるって事は、魔力持ちって事?!」

ピティ「わ……私の姿が見えるの?」

自分の姿が見える事に驚き、不可視モードを解き、一般人にも見えるようにしながら芹に話しかける。

芹「うん へへ、可愛い」

芹はピティの姿を見て出た感想を直に言った。

ピティ「え?!あ……ありがとう//////」

赤くなりながら答えるピティ。

由香「あ!ピティ、赤くなってる」

ピティ「う、うるさい!」

ピティが不可視モードを解いたので、ピティの姿が見えるようにな

芹「そ！私も猛たち同様に犯人探しに協力することに決めたの。」

猛「な？！犯人探しに協力？！」

明日香「でも芹お姉ちゃんは後、数日したらアメリカにか帰っちゃうんでしょう？」

芹「大丈夫、明日香ちゃんの持つてる「風の帽子」だっけ？ソレを少し私に貸して欲しいの。ソレを持って私がアメリカに帰った後、ソレを使って私が出雲に戻るの。そして、今度はみんなを連れて一旦アメリカに渡れば、みんないつでもアメリカに行ける様になるでしょう。そしたら今度捜査に行くときに、一旦私のところに来て、私を拾って行く様にしてくれれば問題ないでしょう？」

猛「確かに、その方法を取れば芹も一緒に行動できるようになるけど……」

猛は複雑そうな顔をしながら芹を見た。

由香「……芹ちゃんの申し出は嬉しいけど、その申し出は受けるべきじゃないと由香はそう思うの。」

芹「え？！」

意外そうな言葉を聞いたような顔をして芹が由香を見た。

由香「コレは遊びじゃないの。下手をすると捜査をしている私達も意識不明にされるかもしれないの。だから自分の身を守るすべを持たない人を捜査に参加させる訳には行かないの。」

士郎「確かにそうだ。俺達も刹那と聖時との手合わせを見て、自分の力の無さを痛感した。だから最近俺や猛、剛は童虎さんに鍛えてもらってるし、明日香は弓を習い始めた。琴乃とアキ、ふたば、ピティは呪文の契約とソレの使い方を練習してる。」

士郎がココ最近聖時と同じように、別荘で全員がそれぞれ身を守るすべを学び始めた事を言った。士郎達は数日前に行われた聖時と刹那の手合わせを見て自分達も強くならなくては、この先聖時と友としても付き合っていけなくなるのではと思うようになった。この他人を守るためなら、たとえ相手が殺人鬼でも立ち向かって行く優しく、そして少し寂しがり屋の友人はこれからも魔法等に関わっていかだろう。ならその友人として、少なくとも足を引く張るようにならないようにとそう思い、猛達は自分を鍛えるようになった。

刹那「みなさん、そのかい有って、最近ハメキと腕を上げています。コレに今、聖時さんがみなさん様に作っているデバイスを持たば、少なくともご自身の身を守れるようになります。ですが・・・」

そう言いながら刹那が芹の方を見た。

芹「・・・何よ、私じゃあみんなの足を引く張るだけだって言うの?! 見くびらないで!! 私だって護身用の格闘技位使えるわよ!!」

童虎「だがソレは一般人向けの物だろう? ソレではダメだ。」

芹「私の腕じゃあ足を引く張るだけだって言うんですか!!」

猛「・・・ああ、そうだ。だから芹、ココでの事は忘れて大人しくアメリカに・・・」「帰れるわけ無いでしょう!!」「」

芹は怒り顔をしながら猛に食ってかかった。

芹「特訓だかなんだか知らないけど、ちょっと強くなった位でしょう?! なら私の格闘技だつて・・・」

猛「ハア」

食って掛かる芹を見て猛は溜息を吐きながらどうしたもんかと思案し始めた。そんな猛を見た童虎がある提案を持ちかけた。

童虎「口で言っても解ってもらえないみたいだな、ならその腕がどれだけのなのか、猛と模擬戦をしてみても解って貰うのが一番じゃないだろうか?」

猛「模擬戦か・・・確かにソレが一番かもな」

芹「いいじゃない、乗ってあげるわよ。見てなさい! 私の格闘技の腕がどれほどの物かを見せ付けてあげるわ!!」

芹は猛を指さしながら、高らかにそう言い放った。

童虎「決まりだな。なら早速別荘に移動しよう。」

聖時「確かにココじゃあなんですからね。」

そう言つて聖時達は別荘に移動し始めた。

《<UJ>》

第48話 星の少女と帰国子女？（前書き）

どうも剣 流星です。

最近インフルエンザに周りの人が次々にかかりはじめ健康管理に気をつけるようになりました。

みなさんも健康管理には十分注意してください。

どれでは第48話をどうぞ。

第48話 星の少女と帰国子女？

第48話 星の少女と帰国子女？

いつも聖時達が修行で使っている別荘の裏庭、そこで木刀を持った猛と、ポケットからグローブを出している芹が向き合って対峙していた。そしてその中間に、立会い人として童虎が立って二人に話しかた。

童虎「相手が戦闘不能になるか、降参した時点で負けと言う事ではないな？」

童虎は勝敗の決め方を確認する為に二人に条件を言って確認を取った。

猛「・・・それでいいです。」

芹「私も異論無いわ。」

そう言っ互いに異論が無い事を口にした。

猛はこの模擬戦で手を抜いてはいけないと思っていた。

芹に諦めさせるには圧倒的な実力差を見せ付けて芹に自分自身の負けを認めさせなければならぬ。そのためには芹にはカワイソウだけど、本気でやると猛はそう考えて構えた。

そんな3人を少し離れた所で聖時達が3人を見ていた。

明日香「芹お姉ちゃん！やっぱり猛お兄ちゃんと模擬戦なんて危ないから止めようよ！」

明日香が芹の身を思って模擬戦をやめるよう言った。

芹「大丈夫！心配しないで、こう見えても結構強いんだから！すぐに終わるわよ、私を足手まとい言った猛をフルボッコにして・・・」

芹はそう言いながら、ポケットから母から貰ったグローブを身につけながらそう言った。

明日香「うゝ、全然聞いてくれない・・・ふたばお姉ちゃん、お姉ちゃんも何か言ってよゝ」

明日香は隣に居るふたばに何か言って貰おうと話を振った。だがふたばは話を聞いてないのか明日香の言葉に反応しなかった。

ふたば「・・・・・・・・・・・・・・・・」

明日香「ふたばお姉ちゃん？ふたばお姉ちゃん！！」

ふたば「え！？な・・・何？」

明日香「私の話聞いてた？」

ふたば「あ・・・ごめん、聞いてなかった。」

明日香「もゝ、ちゃんと聞いててよ。さっきからボゝとしてどつしたの？」

ふたば「うん、さっき別荘ユウに来るまでの間に見た芹さんの目が気に

なつて。」

明日香「目？」

ふたば「うん……」

ふたばはそう言ってみんなで別荘に移動していた時の芹の目を見て、こんな目を自分は以前に見た事があると思ったのである。

なら、それは何処で、誰の目なのかと思いつくとすると、なかなか思い出すことがなかなか出来なかった。ただ、その目は自分に常に近いところにあつた物だと言つ事だけは思い出せていた。

明日香「うゝ、もう！目なんかよりも、今は芹お姉ちゃんをどうやって止めるかでしょう！まったく、芹お姉ちゃんも、芹お姉ちゃんだよ、なんであんなに意固地になつてるんだらう！」

明日香は「プンプン」と擬音が聞こえてきそうな感じで怒りながら芹を見、

そんな明日香の横で裕也たちも一緒に芹たちを見ていた。

裕也「それにしても、ありゃあ完全に意固地になつてるな。どうやら、さつき言われた足手まとい宣言がよっぽど頭にきてるみたいだ。」

土郎「まったく、つまらない自尊心やらなにやらで、首を突っ込まないで貰いたいな。」

土郎が芹の方を見ながら溜息交じりで言い、それに同感だと言いなから裕也達が同意した。

ゆめみ「・・・みなさん、本当にそう思ってるんですか？芹さんがただのくだらない自尊心や、面白半分で首を突っ込んでできると？だとしたらみなさん、もう少し人を見る目を養う事をお勧めします。」

聖時「？違うの？」

ゆめみ「はい。」

刹那「・・・なぜ解るんです？」

ゆめみ「芹さんの目を見ればわかります。あの目は自尊心や遊び半分で首を突っ込んできている者の目ではないですアレは・・・」

そうゆめみが口にしようとした時、童虎の模擬戦を始める「はじめ！」の音が響いたため、全員がハツとなり、あわてて模擬戦の方に視線を向けた。

はじめの合図と共に、芹は間合いを一気に詰めて猛を射程に捕らえた。

芹「速攻でカタをけてあげる！」

そう言って握った拳を振り上げた猛に襲い掛かった。

・
・
・
・

・ ・ ・ ・ ・
（数十分後）

開始の時と同じような立ち位置で二人が互いに向き合って立っていた。

しかし、二人の姿と様子は開始の時とは違っていた。

最初、芹は果敢に猛に挑んで行ったが、攻撃のすべてを猛に見切られたため避けられ、逆に反撃を喰らい続けた。そのため芹は体のアチコチに痣や擦り傷だらけになポロボロの状態になった。

対して猛は無傷、明らかに猛の有利な状態なのは目に見えていたが、顔の表情は正反対だった。猛は勝っているはずなのにどこか辛そうな顔をし、それに対し芹はポロボロの状態にも関わらず、目は死んでいなかった。

明日香「せ．．．．芹お姉ちゃん。」

琴乃「芹さん．．．」

ふたば「わ．．．．私．．．．もう見てられない。」

模擬戦を見ていた明日香と琴乃、ふたばはポロボロになっていく芹

を見ていて、辛くなり眼を背けたい状態になり、他のメンバーも辛そうにソレを見ていた。

ピティ「な・・・なんで猛は芹をあそこまでボロボロの状態にしちやうわけ?! 芹が降参しないなら当身の一つでも入れて、気絶させればいいじゃない!? これじゃまるで・・・」

そう言っつてピティは顔を伏せた。

刹那「・・・おそらく猛さんも、そうしようとはしてたのでしょ

う?」

ピティの疑問に刹那が答えたため、ピティは刹那に視線を向け、模擬戦を見ていた他の者たちもそちらに視線を向けた。

由香「なら・・・なんで?」

辛そうな顔で由香が聞いてくる。

聖時「・・・それは芹が猛の思っていた以上に強かったからだよ。猛の意識を奪う攻撃の打点を微妙にずらして、自分の意識が刈り取られるのを防いでいたんだ。だけど打点を微妙にズラすだけで、攻撃そのものは喰らっちゃう、だからあんなボロボロの状態になっちゃったんだ。」

ピティ「そ・・・そうなんだ。芹って結構やるんだね。けど・・・

」

聖時「ああ、今の芹の腕じゃあ猛には勝てない。」

そう言いながら聖時は再び芹と猛の方に視線を戻し、他のメンバーもソレ続く様に視線を戻した。

猛「な、なあ芹、もうやめようぜ、お前の腕じゃあ俺には勝てない。もう身をもって知っただろう？だから……」

猛はこれ以上芹を傷つけるのがイヤになり、芹に降参する事を進めた。

芹「あ……あら、もう勝った……気での？だけど……まだ私は……負けを認めていない!!」

息も絶え絶えな声で芹が言い放った。しかし、誰の目から見ても、芹が勝てる見込みが無いのは目に見えていた。

明日香「私……もう我慢できない!!」

ふたば「私も!」

明日香とふたばは、ボロボロの芹を見て、ついに我慢できなくなり、明日香は芹を背にするように猛と芹の間に立ちふさがり、ふたばはボロボロでフラフラな芹に駆け寄った。

明日香「猛お兄ちゃん!もうやめて!もうお兄ちゃんの勝ちで良いでしょう?」

ふたば「そうです!もう良いでしょう?芹さんも、もう負けを認めてください。」

そう言っつてふたばは芹に手を伸ばそうとしたが、その手を芹は跳ね除けた。

芹「まだ・・・私はやれる！だから邪魔しないで！」

ふたば「もうやめてください！どうしてそこまでしてやるつもりなんです？」

芹「ここで・・・手を引いたら・・・私は置いてかれちゃう・・・。もう猛の側にいられなくなる・・・居場所が無くなっちゃう・・・」

ふたば「置いて・・・いかれる・・・居場所が無くなる・・・？」

つづく

第49話 星の少女と帰国子女？（前書き）

投稿がやや遅れました。 剣 流星です。

それではさっそく第49話をどうぞ。

第49話 星の少女と帰国子女？

第49話 星の少女と帰国子女？

ふたば「置いて・・・行かれる・・・居場所が無くなる・・・？」

そこまで言っただけはハッとなった。先ほど見た芹の目・・・それは昔、入退院を繰り返して学校に自分の居場所をなくしてしまっただけの自分の目と同じだと思いついたのである。

あの当時ふたばは学校で友達を作っても、長期入院を繰り返して、友達に長い間会えない期間を度々作っていた。そしてその友達は、ふたばが再び学校に行ける様になった時、ふたばが居ない間に変わってしまった。ふたばが居なくても平気な人間関係を新たに築いてしまっていた。自分が居なくても良いような関係をその目で見て、そこに自分の居場所が無いと悟るふたば。自分はその関係に対し、むしろ異物となってしまう・・・自分が入って行っても、関係が崩れてしまい、かえってこじれると当時はそう思っていたのである。

ふたば（あの時の芹さんの目は、あの時の私の目と同じだ。）

ふたば「・・・芹さん、あなたは猛さん達の側に居場所を作りたいかった・・・いいえ、居場所を無くしたくなかった・・・そうなんですね。」

猛「え？居場所を無くしたくなかった？」

ふたば「はい、芹さんはアメリカから久し振りに帰ってきた時、魔法の事や事件の調査の事で、自分をどこか避けようとしていた猛さんたちに疎外感を持ったんだと思います。そして、それは自分が居ない間に猛さんたちが変わってしまったために起こった事だと思います。」

そう言いながらふたばは芹の顔を見た。その顔は驚いていて、なんでも解ったのかと言う様な顔をしていた。

ふたば「次に芹さんは、猛さん達の態度が本当に変わってしまったせいであるのかと思い、それを確かめようと思いました。そして、それが魔法や事件の事に対しての事だと知りました。自分の知らない所で、魔法にかかわり、事件解決に向かって進んでいく猛さんを知った時、芹さんは、自分を置いて猛さんが先に進んでしまい、置いていかれる様に感じたのでしょ。だから、自分もこの件に関わろう、そうやって自分も進まないで猛さんたちに置いて行かれる、このまま置いていかれたら、猛さん達の側にある自分の居場所を無くしてしまうと、そう思ったはずですが、違いますか？」

ふたばはそう言って芹の顔を見た。

芹「・・・そうよ、まさにその通り・・・私は・・・猛たちの側にある自分の居場所を無くしたくなかったの・・・。軽蔑するでしょ？猛達は意識不明になった友達のために調査をやっているのに私は、ただ自分のためにだけに・・・居場所を守るためだけにあなた達に関わろうとした・・・。」

猛「そんな事・・・それに、お前の居場所が無くなるなんて大げさな、俺達はそんなに変わってないよ。」

ゆめみ「……本当にそうでしょうか？」

猛「え？」

今まで黙って見ていたゆめみが前に進んで出てきて猛たちに疑問を投げかけた。

猛「……どう言うことですか？」

ゆめみ「猛さん、あなたは魔法に関わってから自分がまったく変わっていないと本当に言えますか？」

猛「それは……確かに少しは変わったと思うけど……でも、それは普通の生活をしていても同じように変わっていく事と同じ様な変化点だ。」

ゆめみ「……確かに魔法に関わり始めたばかりの今のあなた達ではそうでしょうけど、ではこの後、1年……2年後は？」

猛「え？」

ゆめみ「魔法と言う世界観を大きく変えるような、大きな事柄に関わったあなたたちの1、2年後はきつと劇的に変わっているでしょう。芹さんは今回一時的に帰国したただけで、またすぐにアメリカに帰らなくてははいけません。そして完全に帰ってこれる様になるには、それこそ1、2年かかります。そしてその間に猛さん達は劇的に変わる。その変わりようは、普通の人が1、2、年後の変化よりずっと大きいぐらい……芹さんはそれがわかってしまい、自分が置いていかれると思ったから今、この時に私達に関わろうとこんな

になるまでがんばってるんです。」

猛「……そうなのか、芹？」

芹「……うん、たぶんそうだと思う。さっきまで、自分の中の焦りの様な物が心の奥底にあって、それがなんなのかわからなかった……けど、ゆめみさんに言われたら、「ああ、そうなんか。」と思った。」

芹は自分の胸に手を当てながら、そう答えた。

聖時「……よくわかったねゆめみ。」

ゆめみ「私も、昔、置いて行かれた事が有りましたから……」

ゆめみはそう言いながら、悲しそうな顔をした。

ゆめみは表向きは来迎寺の研究機関が開発した人間形態型のロボットヒューマンフォームとなつているが実際はそうではない。かつて聖時の父が、別の世界に迷い込んでしまった時にそこで出会ったロボットなのである。

その世界はそこに住んでいた人たちが起こした戦争のせいで滅んでしまった世界で、人は居らず、居るのは使う人間が滅んだのを知らずに、今も敵を求めて彷徨う無人兵器がわずかに居るばかり。廃墟と灰色の空が何処までも広がり、酸性雨が降り続く、まるでこの世の終わりを絵に書いたような世界だった。

そんな世界のとある地方都市のデパートにあるプラネタリウムに、主たる人たちの帰りを待ちながら街頭に立ち、プラネタリウムに入る客の呼び寄せをしていたのがゆめみである。

彼女は自分の使える主たる人間が滅んだとも知らず……いや、うすうすは知っていたのであるう、だが、それでも彼女は主である

人たちを待ち続けた。ここを避難する時、涙ながら言ってくれた人たちの「必ず迎えに行く」と言う言葉を信じて。

それから30年以上の間、ゆめみは何時もの日課になっているプラネタリウムの呼び子をしながら待っていた。自分の体が徐々に壊れて動かなくなってもそれを続けて。

そんなある日、ゆめみが居るデパートに、30年振りにお客が訪れたのである。その客こそが聖時の父、聖である。

聖はゆめみから聞いた話を聞き、ここが滅んでしまった世界である事を知る。そして、元の世界に戻るまでの間、聖はゆめみと話をしながらココで時間をつぶした。やがて、聖はゆめみと話しているうちに、彼女の純粋な心に胸を打たれ、彼女をココから連れ出そうと決め、彼女に自分とココから出ようと話を持ちかけた。

最初は渋ったゆめみだったが、聖の話を聞いていくうちに、自分が帰ってくると信じて待ち続けた人たちはもう帰ってこないと悟り、聖と共にデパートを出て、この97管理世界に来たのである。

そんな身の上話をゆめみは静かに語った。

ふたば「ゆめみさん……だからあなたは……」

ゆめみ「ええ、だから私は置いていかれる者の悲しみが良くわかるんです。」

ゆめみの話で辺りがシーンと静まり返る。

ゆめみ「……ねえ、みなさん、芹さんを仲間として迎えてあげたらどうでしょうか？」

聖時「え?!」

ゆめみ「芹さんの決意は生半可な物では無い筈ですし、問題にしていた強さも、それなりに有るのがわかりました。後の足りない強さは皆さんと一緒に訓練すれば何とかなるはずですよ。」

聖時「た．．．たしかにそうだね。猛の攻撃をかわせなくても打点をズラして攻撃力を減らす技量は賞賛に値するものだしね．．．」

猛「けどよ！危険なのは変わりには「猛さん」琴乃？」

琴乃「危険なのは私達も同じです。猛さんは自分の大切な人たちが危険かもしれない事をやっていると知って、そのまま黙ったままで居られますか？」

猛「そ．．．それは．．．」

猛は言葉を濁した。もし自分が芹と同じ立場だったら、大人しく引き下がるかと言ったらNOである。むしろ、自分も協力しようと思いい、自ら事件に首を突っ込むだろうと思った。だから猛は言葉を濁した。

猛「．．．聖時、お前はと思う？この事件の捜査を一番最初に言ったのは聖時だ。だからこの集団のリーダーみたいな者だと俺は思っている。だからお前の意見に俺は従うよ。」

聖時「え?!リーダーって、僕が?!」

アキ「え?今まで自覚が無かったの?私はてっきりそうだと思ってたけど．．．」

士郎「俺もだ。」

ふたば「わたしも。」

剛「俺もだ。」

明日香「私も聖時お兄ちゃんだとてつきり……」

裕也「俺もこの集團のリーダーはお前だと思ってたぞ。」

由香「由香もそう思ってた。」

聖時「え?! いや……その……」

ピティ「それで、どうするの?」

言葉を濁す聖時に対し、答えを急かすピティ。

聖時「え!? あ〜と、そうだね、僕はいいんじゃないかと思う。私事だけど、この事に関わろうと考えた彼女の意思は強いものだと思う事はわかったし、力の方もある程度ある。断る理由は無いと思う。だから入れてもいいと思うよ。」

芹「え? それじゃあ……」

聖時「うん、改めてこれからもよろしく芹。」

芹「あ……うん! よろしく!」

聖時の言葉を聞き、芹は喜んだ顔をしながら返事をした。

今日この日、聖時達は新たな仲間を向かい入れた。

《つづく》

おまけ番外編

シヤマルの翠屋奮闘記？

聖時「高町のおじさん、僕に用があるから翠屋に来てほしいって言うたけどなんだろうね？」

ピティ「さあ？」

聖時「・・・なんかイヤな予感がしてきたな」

そんな事を言いながら聖時が歩いていると、目の前に翠屋が見えてきた。

聖時は店に入るために翠屋の入り口の扉を開ける。

カランコロン

シヤマル「いらっしやいませ」 翠屋によっこそ

バタン！ 扉を閉める音

ピティ「聖時？どうしたの？」

聖時「い・・・今、ここに食べ物関係の仕事に付いてはいけない

人ワーストワンの人が、翠屋のエプロンを来て、ウエイトレスの仕事をしてたように見えたんだ・・・疲れてるのかな？」

ピティ「????何言ってるの?いいから早く中に入るようよ」

聖時「そ・・・そうだな・・・きつとさっきのは疲れからくる幻覚だろう。」

カランコロ〜ン

シヤマル「いらっしやいませ〜 翠屋へようこそ〜」

聖時「・・・・・・・・・・・・・・・・シヤマルさん・・・何をやってるんですか？」

シヤマル「何って、怪我をして動けなくなった美由紀さんに代わって翠屋の手伝いをする事になったの」

聖時「え!?!」

高町士郎「聖時くん、聖時くん」

店の奥からなのはの父、高町士郎が手招きをしている。
それに近づく聖時。

聖時「おじさん、正気ですか?!シヤマルさんに料理関係の仕事をさせるなんて?!」

高町士郎「仕方が無かったんだ。急な事で人手を確保できなくて・・・」

聖時「仕方がないって言ったって……」

高町士郎「確かに君の言うように、シヤマルさんに食べ物関係の仕事につけるのは、ある意味危険な行為だ。だが彼女は以外に美人だし、彼女を目当てに来る客も結構居る。だから、彼女の唯一の問題点をクリアすれば、あとは問題ないんだ。」

聖時「問題をクリア？」

高町士郎「ああ、実はこ翠屋で働いてもらう時、彼女にある事を言っつて、彼女が作った料理を出す相手を選んで出してもらう言っつておいたんだ。「あなたの料理はスペシヤル料理で、此方を選んだ特別なお客にしか出してはいけない」と言っつておいたんだ。」

聖時「特別なお客？……なんか悪い予感がしてきた……」

高町士郎「おっ！鋭いね。実はその特別なお客とは、聖時くんを初めとした、シヤマル料理研究会の試食係をした事がある人物達だと言っつておいたんだ。」

聖時「え?!それじゃあ僕を今日呼んだのは……」

高町士郎「うん、シヤマルさんの料理を処理してもらう為だよ。あ、ちなみに、これからしばらくの間、シヤマルさんが翠屋の仕事を終えるまでの間、聖時くんには定期的に店に来て、シヤマルさんの料理を処理してもらうから。コレもお客さんの命と翠屋の守るためと思っつて……」

聖時「ちよっ……ちよっとおじさん!何かっつてに決めてるんです

か！？ちよつとピティ！ピティからもなにか言ってくれ・・・よ？ピティ？」

周りを見てピティの姿を探す聖時。

聖時「さてはアイツ逃げたな！」

ピティの姿が見当たらないので、聖時はピティが途中で逃げ出したと推理した。

そんな聖時にシャマルが聖時に声をかけた。

シャマル「あつ！聖時くん！おなか空いてない？実はちようどさつき、私が厨房を借りて作った新メニューがあるの 感想を聞ききたいから、食べてみてくれる？」

聖時「あ・・・いやゝ実はお腹はあまりへっては「おなかは空いているから食べてみたい。」って、おじさん！」

シャマル「そうなの？ならちよつと食べてみて？」

そう言つてシャマルは聖時の襟首を掴んで、料理を運んだテーブルに引きずるように引つ張つて行く。

聖時「ちよつ！ちよつと！今のは僕が言つたんじゃない・・・

・・・いやあああああああ！」

高町士郎「すまない聖時くん。コレも翠屋を守るため・・・ゆるせ・・・」

涙を浮かべながら、なぜか敬礼のポーズで聖時を見送つた高町士郎だった。

《...^UU》

第50話 幕間（前書き）

どうも剣 流星です。

早いものでもう50話です。

そしてもうすぐこの作品を書き始めてから1年になります。

何か記念に書こうかな

それでは第五〇話をどうぞ

第50話 幕間

第50話 幕間

とある次元世界の一つにある妖魔師団の秘密研究所、その中にあるモニター室に短髪黒髪で白衣を着た男がいた。男はモニター越しに研究所内にある闘技場内の映像を見ていた。

そのモニターに写っている闘技場内の映像は、普通の人が見れば目を背けたくなるような光景が映し出されていた。

その光景とは、年端も行かない小さな子供が複数、番号が入ったアンダースーツを着て、武器を手に互いを殺しあう光景だった。

ある者は血を流して倒れており、ある者は血だらけになりながら、必死に武器を振り回す、またある者は親しい者に武器を向ける事に躊躇しながら涙を流しながら叫んでいた。

白衣の男「シゲマゼロゼブン 07！戦え！！戦って相手を殺すんだ！その場にいる全員を殺し、一人になるまで其処からは出られない。生き延びたければ戦って殺せ！！」

白衣の男は、戦う事に躊躇している07と書かれているアンダースーツの男の子にマイクで指示を出した。

男の子「う……うわあああああつ！！」

男の子は手に持っている剣を叫びながら振り上げ、目の前に対峙している親しい間柄の男の子に切りかかって行った。

ザボエラ「どうやらクラスの絞込みは順調なようじゃなドクターア

「アイアン。」

アイアン「ザボエラ卿……来ていたのですか？」

白衣の男、ドクターアイアンは、スーツ姿の男、杓馬まじまと、杖を突いた老人を連れて彼の背後から近づいて声をかけてきた。

アイアン「ええ、順調です。（シータ）クラス、（オメガ）クラス、（ラムダ）クラスの絞り込みはすでに終えています。後はこの（シグマ）クラスだけです。」

ザボエラ「そうか、これで器の完成にまた一歩近づいたか。」

杓馬「器の完成、頼みますよ。」器の完成はまだか！とタナトス様が焦れてましたから、ハーデス様の魂の器の完成は、お宅らとの同盟の時に交わした約束事ですからね。」

アイアン「わかっている。それよりも今日は何の用だ？前に作ったドライアドの人形が不具合でも起こしたか？」

杓馬「いや、それについては大丈夫さ。こちらの思惑通りに動いてくれているよ。くるくるくるくる 舞台の上で綺麗なマーブルを作りながら踊ってもらってる。今日来たのはザボエラの旦那に頼んでいた例の精霊二体を引き取りに来たからさ。」

そう言っつて杓馬は懐から生き物を一体閉じ込めておける魔法の筒を二つ取り出して見せた。

アイアン「なるほど、その様子だと洗脳はうまくいったみたいですね。」

ザボエラ「ああ、あの程度の事、ワシにかかれば朝飯前じゃて。」

アイアン「そうですか。・・・ところで、さつきから後ろに居る老人は、お客ですか？」

アイアンはザボエラの後ろに居る杖を突いた老人を見て誰なのかと聞いた。

ザボエラ「ああ、お主は初対面じゃったか、此方は第97管理世界の魔術師でワシ等の協力者の間桐蔵硯殿だ。」

蔵硯「始めましてかな、間桐蔵硯じゃあ。ザボエラ殿には令呪の技術提供で協力をしている。ま、その代わりと言ってはなんだが、ザボエラ殿にはワシの新しい体の事で世話になっている。」

ザボエラ「なに、持ちつ持たれつつじゃて、蔵硯殿用の超魔生物の体を作った変わりに、ワシらもまたマキリの令呪の技術技術を教えてもらつとる。アレのおかげで真の紋章用の封印球の作成が出来たのじゃからな。」

蔵硯「なにあの程度の事造作もない。こちらは体を作ってもらった上に、聖杯が欠陥品だと言つ事を教えてもらった。さらに聖杯が使い物にならないと解つたワシに、新たに真の紋章という、ワシの目的を達成させられる物の存在を教えてもらった。まさに至れり尽くせりだ。」

杳馬「へへ、あ！でも、確か超魔生物は確か強靱な体を手に入れる代わりに、生命力を一気に消費してしまう欠陥品じゃなかつたっけ？」

杓馬は昔調べて知った、かつての超魔生物化をした、先代魔軍司令ハドラーの事を思い出して話した。

ザボエラ「それは昔のことじゃ。今、蔵硯殿の体に使っている超魔生物の体は、その点を解決した物じゃ。力は昔作ったハドラーには劣るが、その分生命力の操作がうまく出来、すぐに生命力が枯渇する心配が無い上に、ある一定量の生命力を定期的に取れば、寿命等で死ぬ事も無いと言う代物じゃ。これに今、蔵硯殿と研究中の真の紋章にある不老の力を加えれば、生命力の摂取をしなくても大丈夫にもなる。」

杓馬「なるほどね、それじゃあ今、蔵硯殿はザボエラ殿と一緒に真の紋章の研究をしてるんですね。」

蔵硯「ああ、真の紋章は世界の理が具現化した様な物、我等根源にいたる事を目指している魔術師にとっては非常に興味深い物じゃかな。」

杓馬「ふ〜ん、俺には良くわからないね、あ、でもそうすると、今まで蔵硯の旦那が聖杯を手に入れるために改造してたあの子はどうするんで？たしか桜ちゃんとか言ってたっけ？もう様無しですか？」

蔵硯「桜か・・・確かに聖杯が欠陥品であると解った今、あれの使い道も無くなった、あとは世継ぎの事に関する使い道しかないが・・・それが何か？」

蔵硯に質問した杓馬は面白い事を考え付いたと言うような顔をして、自分のたった今考え付いた事を話し始めた。

杳馬「いやなに、たった今その子を使つてとても面白い事を思いついたんですよ。うまくいけば真の紋章の一つを手に入れる事が出来ますよ。」

杳馬は面白そうな事を放しているような感じで話した。

蔵硯「ほう？それは興味深い話だのう。詳しく話してくれまいか？」

杳馬「ああ、まずは……………」

……………

杳馬「……………と言う様な感じになりますか……………どうですかね？この話乗りますか？」

蔵硯「ほう……………確かにこの方法なら……………」

ザボエラ「確かに真の紋章の一つ……いや、正確にいえば二つに分かれた真の紋章の片割れと、さらに上手く事が運べば、黎真が監視だけにとどめている、聖遼学園にある真の紋章を手に入れることが出来るのう……これは良い！」

蔵硯「確かに……よからう。その話、乗るぞ！」

杓馬「さすが 話が解るね」

そう杓馬は楽しそうに言った。

今、聖時達に新たな脅威の影が忍び寄ろうとしていた。

《つづく》

予告

予告

ピティ「……ねえ……なにこの予告って……」

ユニ「実は……」

ネギ「実は新しい新連載を作者さんが不定期で書こうと思ったので、その作品の紹介の為にこの場を設けたんです。あ、どうもみなさん、ネギ・スプリングフィールドです。」

ピティ「な……なんであんたがココにいるの！て、まさか新連載の作品って……」

ネギ「はい、現在連載している「真の紋章と竜の騎士」内で紹介した話の流れの中にあつたネギま！編の話です。」

ピティ「やっぱり……」

ユニ「たしかネギま！編は今連載している話の一年後ぐらいの話でしたね。」

ピティ「たしか聖時が中学3年ぐらいになる頃の話になる予定だよね。」

ユニ「1年後の聖時さん……どんな風に成長しているんですか

ね？」

なのは「この作品には私もレギュラーとして出るんだよね？」

ネギ・ピティ「うわっ！」「」

ユニ「あら、現在連載中の作品では影が徐々に薄くなっているのはさん。」

なのは「う！人が気にしている事を……しかし、そんな事はこの作品が始まったらもう言わせません！なんたってレギュラーですから！」

はやて「せやせや、もう影が薄くなってきているなんて言わせへん！」

フェイト「うん！」

ピティ「あ、はやてにフェイト。」

ユニ「来てたんですね。」

はやて「そら来ないわけには行かないやろっ？なんせレギュラーメンバーなんやから。」

フェイト「そうそう、これで「このままじゃクロノの様に存在が薄くなって忘れ去られるんじゃないか？」と言う悩みから解放されるんだから！」

はやて「せやな、クロノくんやユーノくんみたいな影が薄いキャラ

の仲間入りになると言う悩みがなくなるんや！なんたってレギュラーキャラやからな！あははははっ！」

ネギ「……え〜と、非常に申し上げにくいんですけど……レギュラーなのは、なのはさんだけなんですけど……」

はやて「あははははっ……は？」

フエイト「え？どう言う事なの？」

ピティ「だから、レギュラーメンバーなのは、なのはだけだって事！」

はやて「え！？うそやる？」

フエイト「そ……そうだよ、だって私達は三人、いつも一緒に出番があっただから……」

なのは「……ごめん、本当にレギュラーなのは私だけなの……」

はやて「そ……そんな？」

ポン（はやての肩に手が置かれる音）

クロノ「……はやて……今日から仲間だ。（とてもいい顔でサムズアップをするクロノ）」

ユーノ「ようこそフエイト。」「日陰者の会」へ！」

はやて・フェイト「い……いやあああああああつ！
！」

ズルズルズルズル（二人がクロノとユーノに引きずられて去る音）

なのは「はやてちゃん……フェイトちゃん、強く生きて……」

ハンカチで目元を覆うのは。

ネギ「え……えくと、と……とにかく新連載！魔法先生リリカルネギま！〜光の勇者と塔から来た少女〜」が始まります！」

ピティ「この作品は作者がココに投稿し始めて丁度1年を記念の作品の為、連載は今月2月の下旬ぐらいになります。」

ユニ「相変わらずの駄文な上に、設定が一部独自の物に変わっていたりしています。それでも読みたいと言う人は、どうぞ読んでみてください。」

ピティ「では予告はここまでで、ではでは〜」

はやて・フェイト「出番〜〜〜〜！！」「」

特別編3 バレンタイン狂騒曲(前書き)

どうも剣 流星です。

バレンタインが近いので、こんな話を書いてみました。
それではどうぞ〜

特別編3 バレンタイン狂騒曲

特別編3 バレンタイン狂騒曲

2月14日、の海鳴市内を聖時、猛、剛の三人は生きるか死ぬかの瀬戸際に立っていた。

剛「急げ二人とも！奴等に捕まるぞ！！」

猛「わかってる！」

聖時「クソツ！どうしてこんな事に……」

なぜこの三人がこんな目に合っているかと言うと、事の発端は数時間前にのぼる……

.....

（数時間前）

シヤマル「今日はバレンタインデー！」

芹「と、言う事で、私達が丹精込めてチョコを作ってきました！」

ココ、神谷邸に何時ものように集まっていた聖時、猛、剛、士郎、才人に芹、シヤマル、ピティ、ふたば、明日香、琴乃が手作りチョコを持ってそれを差し出していた。

聖時「手作りって……それって芹やシヤマルさんが作ったの？」

シヤマル「そうですけど？」

そう言つてシヤマルと芹は自分が持っている箱に入っているチョコを聖時達に差し出してきた。

そのチョコは見た目はごく普通のチョコに見えたが、その“普通に見える”と言う事が曲者だと言う事を、彼等は今までのシヤマルと芹の料理を食べた経験から学んでいた。

男性陣「……く……食べんのか？」

芹「それどう言う意味！」

ふたば「だ……だいじょうぶだよ。」

ピティ「見ていたけど、怪しい作り方はしてなかったよ。」

琴乃「それに、今回は私達も協力して作りましたから。」

明日香「そうそう、だから安心して食べて」

ふたば、琴乃と言う、料理が得意な面子にそう言われ警戒を解く聖時たち。

だが、それが間違いだっただと言う事に聖時達はすぐに気付く事になった。

士郎「明日香ちゃん達がそう言うなら大丈夫だろう。」

才人「そうだな、なら頂くとするか。」

そう言つて差し出されたチョコを手に取り食べる士郎と才人だが、次の瞬間……

ポウン！！

チョコを食べた二人は、口の中で爆発を起こして倒れた。

猛「な！爆発した！？」

剛「チョコ型爆弾か！？」

聖時「どう言う事、ふたば？！」

ふたば「え？え？な・・・なんで？」

琴乃「ちゃんと見ていた時は、何ともない手作りチョコの作り方をしていたはず……」

明日香「あ！でも、私達、ちょっと目を離さなかつたっけ？」

ピティ「そう言えば！ならその時に?!」

聖時「な!?目を離したのか?!」

剛「な・・・なんてうかつな事を・・・」

猛「危険行為だぞ!」

芹「ちよつと、失礼ね!」

シヤマル「そうです!ただちよつと私達自信のオリジナルの作り方をでオリジナリティーを出しただけです!危険じゃ有りません!!」

男性陣「」「十分危険だわ!!」「」

芹「大丈夫!こんな事もあるつかと、別の方法で作った作り置きがあるから。」

そう言つて別のチョコを差し出す芹。だが差し出された箱の中に入っていたものは、ボコボコと音を出すゲル状の黒い物体だった。

男性陣「」「・・・・・・・・・・・・・・・・」「」

芹・シヤマル「」「・・・・・・・・・・・・・・・・」「」

男性陣「」「戦略的撤退!!(ダッシュ!!)」「」

芹・シヤマル「」「逃がすか!!」「」

・ ・ ・ ・ ・

と言つ事があり、冒頭に至るわけです。

猛「それでどうする?」

剛「どうするもこうするも、あんな物食べたら、確実に三途の川行きだぞ!」

聖時「確かに・・・ならこのまま逃げ続けて、ほとぼりが醒めるのを待つしか・・・いたよ!」て、来たーッ!」

話し込んでいる聖時達に、チヨコを片手に持って走って近寄る芹とシヤマルが現れた。

聖時「クツ!もう見つかったのか!」

芹「意地でもあなた達に食べさせてやる!」

そう言つて聖時達の口目掛けて、芹は持っているチヨコを投げつけた。

芹「大人しくお食べ!」

聖時「うわっ!!」

投げつけられたチヨコを寸前でかわす聖時達。
だが、チヨコをかわした次の瞬間……

ドゴンッ!!

かわしたチヨコが背後で爆発し、その爆風で軽くバランスを崩しながらそれを見る聖時達。

剛「な!」

猛「あっ……あいつら……」

聖時「危険度Sランクの物体Xを投げてきた!!!!」

シヤマル「あっ!逃げないでください!!」

芹「コラッ!!避けるな!!」

三人「」「三人避けるわ!!」「」

芹「もう怒った!!」

そう言っつて芹は懐からマジックアイテムの魔法の札・踊る火炎の札（by幻想水滸伝シリーズ）を取り出し火炎を放ってきた。

芹「焼き尽くせ!踊る火炎!!」

聖時「ゲツ！ま・・・待て！！！！ここで火は・・・」

そう、聖時達の周りには、先ほど芹が投げつけた物体Xの不発弾がいくつか転がっていた。

そんなところに火の気があれば当然・・・

ちゅどくくくくん！！！！

大爆発を起こすわけで・・・そして・・・

爆発で発生した土煙が晴れてくると、その爆心地には、聖時、猛、剛、シヤマル、芹の5人の遺体が転がっていた。

猛「ま・・・まだ死んでない・・・」

剛「う、ううううう・・・ま、まさかの爆発落ちとは・・・」

シヤマル「な・・・なんで爆発が・・・」

芹「なんで、なんでく！！」

聖時「い・・・いいかげん・・・料理に対して懲りてください・・・
・（ガクッ！）」

ふたば「・・・やっぱりこうなりましたね。」

琴乃「まさか、私達がちょっと目を離した隙に、こんな惨状を引き起こす手法をチヨコに加えてるなんて・・・」

明日香「お兄ちゃんたち・・・大丈夫かな？」

ピティ「まったく・・・バレンタインデーの意味、解ってるのかね、完全に無視だよアレ・・・」

最初にチョコを食べて伸びた土郎達を看病し、遠くで起きた大爆発の音を聞きながら、ピティたちはそう言うのであった。

やはり、まともな事が終わらない聖時達であった。

《終わり》

第51話 デバイスとアーティファクト？（前書き）

どうも、バレンタインにチヨコを一つももらえなくて激しく落ち込んでいる剣 流星です。OTZ

それでもめげずに書いた第51話をどうぞ。

はあ、チヨコ・・・義理でもいいから欲しかったな。

第51話 デバイスとアーティファクト？

第51話 デバイスとアーティファクト？

芹と猛の模擬戦から、別荘内時間で数日後、別荘内の台所でゆめみは琴乃とふたばの二人と一緒に全員分の朝食を作っていた。分担は、琴乃がシャケの塩焼きを焼き、ふたばがお味噌汁を作り、ゆめみが釜でご飯を炊くと言った感じである。

明日香「お姉ちゃん達、おっはよ〜」

元気な声で朝の挨拶をしながら明日香が台所に入ってきた。

明日香「へ〜、今日の朝ごはんは和風か〜」

ふたば「うん、そうなの。」

そうふたばは明日香に言いながら、自分が今かき混ぜているお味噌汁をオタマで少量をすくい、小皿に入れると、それを口にして味見をした。

ふたば「う〜ん、こんなもんかな？」

琴乃「どうしたの？」

ふたば「うん、お味噌汁の味、これでいいかな〜って・・・」

ゆめみ「では、私が味見をしてみます。」

明日香「え?! ゆめみさん、味見できるの?」

ふたばは人間形態型のロボットであるゆめみが味見が出来る事に驚いた。

ゆめみ「ええ、私には高性能な味覚センサーが搭載されています。その鋭さは、美○しんぼに出てくる海○雄○の舌に引け劣らないと自負しています。」

ふたば「そ……うなんですか、じゃあ……」

そう言つてふたばはおたまですくつたお味噌汁を小皿に取り、それをゆめみに渡した。

ゆめみ「では……ん……」

ゆめみはお味噌汁を口にしてその味を吟味する。やがて吟味し終わったのか、口を開き、味の感想を口にした。

ゆめみ「……お味噌に赤味噌と白味噌を独自にブレンドした合わせ味噌を使った所まではいいいですが、やや赤味噌の比率が多いようです。赤味噌はもう少し……そう、あなたの胸くらい控えめな方がいいです。」

ふたば「胸は関係ないと思うんですけど。」

額に青筋を立てて怒るふたば。

琴乃「え……え」と、とりあえず落ち着いて。」

明日香「そ・・そうだよ。あ、それよりも聖時お兄ちゃんと土郎お兄ちゃんはどうしたの？朝ご飯の準備の時には何時も居るのに。」

琴乃「あ、お二人共、昨夜は遅かったみたいで・・・」

明日香「遅かった？」

ゆめみ「ええ、どうやら例のみなさんのデバイスの最後の仕上げをやっている遅くなったみたいですよ。」

ゆめみは昨夜遅くまでデバイスの仕上げをしていた二人の事を話した。

明日香「へへ、じゃあもうすぐ、私たち、自分のデバイスを持てるんだね、楽しみ〜」

琴乃「ええ、そうね・・・とこんな物かな。」

朝食用のシヤケを焼いていた琴乃は明日香の話聞きながら、シヤケが程よい具合に焼けたので、火を止めてお皿にそれを取った。

琴乃「さてと、明日香、朝食の準備が出来たから、まだ寝ている猛さんや聖時さん達を起こしてきてくれる？」

明日香「え！？私が聖時お兄ちゃんを起こして来て良いの？！やり〜、私、一度でいいから聖時お兄ちゃんを起こしてみたかったんだ〜」

ふたば「え、聖時を？」

聖時の上に飛び上がり、聖時に対してジャンピング・フライングボディープレスをした。

聖時「グエツ！！」

明日香のジャンピング・フライング・ボディープレスを受けてつぶれたヒキガエルのような声を出す聖時。

明日香「朝だ 朝だ 起きろ〜〜〜〜」

明日香は聖時の上に飛び乗った後、さらに体を揺らしながら、手足をバタバタとバタつかせ暴れる。

聖時「ガッ！グッ！ちょ．．．ちよつと．．．明日香ちゃん！」

明日香「あつ！起きた？聖時お兄ちゃん。」

聖時「な．．．何が．．．起きたの？」

現状を把握できずに明日香に質問をする聖時。

明日香「何って．．．聖時お兄ちゃんを起こしに来たんだよ？」

聖時「起こしに来た？」

そう言つて聖時は枕元に置いてある目覚まし時計を見た。

聖時「え？！もうこんな時間？！ごめん！すぐに朝食を作るね！」

明日香「あつ！大丈夫だよ。お姉ちゃん達が朝ごはんを作ってくれたから。」

聖時「あつ・・・そうなの？」

明日香「うん、それで朝ごはんが出来たから、お兄ちゃん達を私が起こしに来たの。」

聖時「そ・・・そうなのか。」

ピティ「うん、何よ・・・朝っぱらからうるさいわね。」

部屋にある机の上に置いてある、人形用のベッドからピティがうるさそうにしながら顔を出した。

明日香「あつ、ピティ、おっはよ。」

ピティ「うん？・・・明日香？どうしてココに？」

眠そうな目をこすりながらピティが目の前の明日香を見て、どうしてこの部屋に居るのかを聞く。

明日香「もうすぐ朝ごはんだから、お兄ちゃん達を起こしに来たんだよ。それじゃあ準備が整ったら食堂に来てね。私は後、士郎お兄ちゃん達を起こさなきゃならないから、そんじゃね。」

そう言っつて部屋を走って出て行く明日香。

ピティ「・・・朝から元気だね。」

聖時「……うん、元気があるのは良いんだけど、起こし方をもう少し考えて欲しいな……」

そう言いながら、聖時は先ほど明日香のジャンピング・フライングボディープレスのダメージを受けて痛むお腹をさすりながらそう言った。

聖時（そう言えば、土郎達を起こすって言ってたけど、土郎達も同じ起こし方をするのかな？）

そんな風に考えていると、遠くの方から「土郎お兄ちゃん！」と言う明日香の声と、「グヘッ！」と言う土郎の声が聞こえてきた。

聖時「……土郎もあの起こし方を受けたのか……合掌」

そんな事を言いながら、聖時は着替え始めた。

*

聖時「へっ？何時もあの起こし方で明日香ちゃんに起こされてるって？！」

猛「ああ、そうなんだ……」

士郎「毎日あの起こし方で、よく体が持つな。」

別荘内の食堂。今ココには別荘に集まる何時ものメンバーが全員居た。ちなみに童虎と刹那は外に出ていて、アルフは遙に呼ばれてココ最近では聖時達と行動を共にしていなかった。

裕也「それにしても、ジャンピング・フライングボディープレスで起こすって……あ、このシャケ、いい焼け具合」

由香「明日香ちゃん、朝から元気だね、あ、このお味噌汁、塩加減が絶妙」

聖時達は今朝、明日香に起こされた方法の事を話しながら、ゆめみ達が作った朝食を食べていた。

琴乃「すみません。起こし方については何時も注意しているんですけど……」

何時も猛を起こす方法について琴乃は妹の明日香に何時も注意していた。だが明日香はあの起こし方が気に入っているのか、一考にやめる気配がない。

明日香「いいじゃない。猛おにいちゃんもあの起こし方の方がバツ

チリ目が覚めるって言ってるし。」

剛「そ……そうなのか？」

猛達と何時も共に行動を取っている剛は初耳だと言つ感じで当の本人の猛に話を聞いた。

猛「いや、俺さあ、朝弱いから、ああいう多少強引な起こし方じゃないと、目が覚めなくてさあ。」

琴乃「た……確かに猛さんは朝が弱いのは事実ですが、あんな起こし方をしていたら、いつかケガを……。」

芹「別に良いじゃない。それにこれは、朝ちゃんと起きられない猛が悪いんだから。猛がケガをしても自業自得よ。」

猛「なんだよ、お前だつてアメリカに行く前までは朝、ちゃんと起きられなかったじゃないか。」

芹「でも、今はちゃんと自分で起きてるわよ。」

ふたば「芹さん凄いですね。ココ最近、毎日アメリカから「風の帽子」しに宿っている「瞬間移動呪文」で来て、向こうとは時差があるのに、別荘に泊まっても、朝はこうしてちゃんと起きてくるんですもん。」

芹「ふふふ、ん、当然よ。聖時から私専用の「風の帽子」を渡されたんだから。誰かさんみたいにだらけてないで、ちゃんとしないとね。」

猛「その誰かさんて俺の事か？」

芹「あら、自覚はあったんだ。」

猛「こ……コイツは！」

怒りで拳を震わせながら猛が言う。

アキ「まあまあ、落ち着いて。」

アキがシャケの身の骨を箸で取りながら言う。

ゆめみ「今は朝食ですから騒がないでくださいね。」

ピティ「そうだよ。それに揉め事なんてしたら、せつかくの朝食が不味くなるでしょう。」

そう言いながらピティは、炊き立てのご飯に卵をかけて、卵ご飯にして食べ始めた。

ピティ「うーん、おいしい やっぱ朝は「炊き立てのご飯」に「卵」をかけた、「卵ご飯」に限るね。」

おいしそうにして卵ご飯を食べるピティ。

猛「わかったよ。……それで、聖時、昨日俺達がした精霊との契約。それが済んだんだから、エレメンタルデバイスは使えるようになったのか？」

猛は昨日、自分専用のエレメンタルデバイスを作る際、必要な精霊

との契約をしたので、その後のデバイス作りの進行について、デバイス作りをしていた聖時と士郎に話を聞いた。

聖時「最終調整は昨夜のうちにすべて終わらせてある。後は実際に人が使ってみて、調子を見てもらうだけだよ。」

剛「ならこの後にデバイスを渡してもらえるんだな。」

琴乃「どんな感じの物なんでしょうね。」

芹「わくわくするね。」

明日香「楽しみ。」

裕也「なあ、今日渡されるデバイスって、昨日精霊との契約をした人たちだけだよな？」

裕也が今日渡されるデバイスの数について聖時に聞いてきた。

聖時「うん、そうだよ。」

裕也「それじゃあ、今回はアキ、と士郎、刹那、ふたばの分は無いのか？」

聖時「うん、そうなるね。」

由香「いいの？デバイスをみんなの分作ったのって護身用にして事で作ったんでしょう？魔力無くて、SEの能力が有るから私と河瀬くんは大丈夫だけど、衛宮くん達の分が無いのってちょっと不味いんじゃないの？」

由香と裕也はSEの能力がある。この能力の中には、アシスタントに肉体のリミッターを一時的に外す能力がある。人間は普段、自分の肉体が傷つかないように無意識のうちに肉体にリミッターをかけている。SE能力者はそれを一時的に外すことが出来る。由香がSE能力者である自分と河瀬は大丈夫だと言ったのはそれがあるからである。

聖時「別に作らないわけじゃないですよ。ただ、アキ用に用意したデバイスはちよつと調整が難しく、太郎のは・・・太郎が使う「強化」の魔術をデバイスを介して使えるようにしようと思つて作つてるんだけど・・・どうも太郎の「強化」の魔術が普通の強化とは違つみたいなんだ。だからその解析に時間がかかるから、今回は見送りにしたんです。」

裕也「普通の強化とは違つてどう言うことだ。」

裕也は先ほど聖時が言った太郎の「強化」の魔術が普通のとは違つと言う事について聞いてきたが、太郎が聖時に変わつてそれに答えた。

太郎「あーそれはだな、実は俺の「強化」は物を強化するつて言うよりも、何も無い所から物を引つ張つてくるつて感じだつて童虎さんがそう言うんだ。」

裕也「何も無い所から引つ張つてくる？」

太郎「俺も良くはわからないんだ。ただ、童虎さんがそう言うつてたから・・・」

聖時「ま、何にせよ、士郎とアキには、とりあえず護身用に紋章術の力が込められている「魔法の札」を何枚か持たせる形で行こうと思います。」

裕也「俺と由香と同じ様に札を持たせるのか・・・桜咲と渡良瀬はどうするんだ？」

聖時「刹那はデバイスが無くても十分強いですからいらなと思います。ふたばについてはちょっと考えがあるんです。」

裕也「考え？」

聖時「ええ、実は「聖時さん、荷物届きましたよ」あ、ナイスタイミング。」

裕也と話していると刹那が手に箱に入った荷物を持ちながら食堂に入ってきた。

刹那は今日届く予定の荷物を置き取ってもらう為に、別荘に入らず、荷物が届くまで外で待っていたのである。

聖時「ありがとう。荷物の受け取りをしてくれて。」

刹那「いえ・・・それよりも気になるんですけど、その荷物の送り主の所に書いてある名前なんですけど、「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」とあるのですが・・・それはもしかあの・・・」

刹那が荷物に貼ってある伝票に書いてある送り主の名前について疑問を感じ質問をしてきた。

聖時「ん？「あの」「って」「どの」「？」」

刹那「それはあの……」マガ・ノスフェラトウ「不死の魔法使いの事ですか？」ってへ？」

刹那の会話に割って入るようにゆめみが言葉を発したので、その場にいる全員がゆめみに視線を向けた。

聖時「マガ・ノス？」

ゆめみ「マガ・ノスフェラトウ不死の魔法使い、人形遣い、悪しき音信、ダーク・エヴァンジェル闇の福音、過音の使徒、エヴァさんの二つ名です。」

裕也「な……なんだその厨二病的な名前のオンパレードは？そのエヴァ何とかって何者だ？」

話を聞いていた裕也が、ゆめみが言っていたエヴァの二つ名を聞いて、エヴァが何者なのかを聞いてきた。

ゆめみ「エヴァさんは吸血鬼の始祖で、聖時さんのご両親の妹分のような方であり、聖時さんと桃華さん達が生まれる時にお二人を取り上げてくださった方でもあり、名付け親でもあるんです。」

刹那「な?! そうだったんですか。しかし、あの赤き翼のメンバーである聖さんと千尋さんがあのエヴァジェリンさんと親しい間柄だったとは……」

ゆめみ「刹那さん達の世界では600万ドルの賞金首でしたけど、私達には……特に聖時さんと桃華さんには良き姉として接してくれていましたよ。」

刹那「そ……そうなんですか……」

多少驚いたような顔で返事をする刹那。その回りでは、エヴァの事を聞いた猛達が驚いたような、あきれたような複雑な顔をしていた。猛「な、なあ……聖時の家族とその関係者ってさ……」

剛「ああ、本当に呆れる様な凄い人の集まりだよな……」

琴乃「ええ、ご両親は次元世界で英雄として有名ですし……」

明日香「叔父さんはあの大企業「来迎寺グループ」の総帥。」

士郎「親代わりのユニさんは今現在はその「来迎寺グループ」の総帥代行。」

裕也「聖時の姉貴分のなのはさん達は管理局が誇るエース。さらに……」

由香「今回は600万ドルの吸血鬼の始祖ですからね……ってそうそう、所で聖時くん、その荷物は結局なんなの？」

由香は脱線した話を戻す為に、聖時に刹那が持ってきた荷物の事を聞く。

聖時「あ、これですか？これは……」

そう言いながら、聖時は刹那が持ってきてくれた箱を開け、中身を取り出してみんなに見せた。

由香「これは……本？」

聖時が箱から取り出した物は、数冊の分厚い本だった。

聖時「これは、刹那の出身世界である第97 - a管理外世界の魔法に関わる事が書いてある物なんだ。」

猛「へ〜、けどそれと、ふたばのデバイスの事がどう結びつくんだ？」

猛はさつき聖時がふたばの分のデバイスをどうするかと聞かれたとき、本が届いた事を「ナイスタイミング」だと言ったので同結びつくのか聞いた。

聖時「うん、実はふたばにはデバイスの代わりにアーティファクトを持たせようと思ったんだ。」

刹那以外のメンバー「アーティファクト?!」

聖時「うん、父さんの日記で知っただけど、刹那達の世界には仮契約^{テイオー}っていう魔法のシステムがあつて、魔法使いと従者の仮契約を結ぶと、パクティオーカードって言うものが現れるんだ。そのパクティオーカードには様々な機能があるんだけど、その中に従者専用のアイテム、「アーティファクト」を召還する物があるんだ。だからふたばには僕と仮契約を結んでもらつて、自分専用のアイテム「アーティファクト」を持つてもらおうと思つんだ。」

猛「へ〜、そんな便利なもんがあるのか。ん、どうしたんだ刹那？」

猛は聖時の話を聞いて、赤い顔をした始めた刹那を見て、どうしたのかと聞いた。

刹那「あ、いや別に／／／．．．．．聖時さん。」

聖時「ん？なに？」

刹那「聖時さんは仮契約バクテイオの仕方を知っているのですか？」

聖時「知らないよ。だからエヴァ姉に仮契約の方法が書かれてそうな本を送ってもらったんだ．．．ってどうやらみんな朝食は済んだみたいだね。」

どうやら、話している最中でも食事をする手は止まっていなかったみたいで、テーブル上には朝食が綺麗に無くなっていた。

聖時「それじゃあ、あとかたづけをした後、猛たちにはデバイスを、ふたばには仮契約を結んでもらうから。」

士郎「じゃあ、とつととかたづけをやっちまうか。」

そう言つて聖時達は席を立ち、朝食のあとかたづけをし始めた。

刹那「あ．．．あの．．．．．聖時さん、仮契約の仕方は．．．．／／／／／」

刹那は何かを聖時に伝えようとしていたが、何か恥ずかしがっているよに体をモジモジさせ、顔を赤くしている。さらに声が小さいせいで、聖時達には届いていない。

そんな風にしていたせいで、聖時達に気付いてもらえず、刹那一人を食堂に残し、全員があとかたづけや、その後のデバイスの受け渡しの準備のために食堂を出て行き、あっという間に刹那だけが取り

残されてしまった。

刹那「う……う……う……、みなさん行ってしまった……。お・
・教えなくては、仮契約の方法が、キ……。キキキ……。キスだ
と言つ事をノノノノノノノノ」

刹那は顔を真っ赤にしながらそう言つて食堂を出て行った。

《つづく》

第52話 デバイスとアーティファクト？（前書き）

どうも、剣 流星です。

最近花粉が飛び始めたため、マスクが手放せなくなりました。

花粉症・・・治らないかな？

それでは第52話をどうぞ。

第52話 デバイスとアーティファクト？

第52話 デバイスとアーティファクト？

朝食後、別荘にある中庭に、聖時、ピティ、猛、剛、芹、琴乃、明日香、ふたばの8人が集まっていた。ゆめみは朝食後、由香とアキの三人で別荘の掃除をしに行き、士郎は昨夜最終調整をしたデバイスを取りに調合室へと向かい、裕也はそれに着いて行った。

聖時「ココをこうして……………」

聖時はエヴァかに送ってもらった本を片手に持ちながら仮契約をする為の魔法陣を書いていた。

ふたば「…………これが仮契約する為の魔法陣なの？」

聖時「ああ、この本によると、この魔法陣の上で契約を結ぶ者同士が契約を結ぶと、仮契約バクティオーが出来るみたい……………よし！これで終わり！」

魔法陣を書き終わった聖時は次にふたばを魔法陣の中央に立たせ、自分もそこに立った。丁度、魔法陣の中央で二人が向き合うような形である。

ふたば「魔法陣の中央に立って…………それでこれからどうするの？」

ふたばが聖時に次の指示を聞いてきたので、聖時は片手に持っている本を見て、次にどうするかを調べた。

聖時「え〜と次は……………えっ！／／／／／／／／／／」

聖時は次に釣るべきことを本で調べ、それが書かれている部分を読んで顔を赤くしながら驚いた。

ふたば「……………どうしたの？」

ふたばは聖時が顔を赤くして驚いたので、どうしたのかを聞くふたば。

魔法陣の外で見ているピティヤ猛たちもどうしたのか思い、聖時に視線を集めた。

聖時「あ……………ああああの、パ、パバクティオー仮契約の契約の仕方が！
／／／／／／／／／／」

ふたば「？契約の仕方が？」

聖時「き、きき……………キ」仮契約の仕方は相手にき、キスをするんです！！／／／／／／／／／／「って刹那？」

突然発せられた刹那の声に、その場にいる全員がその声の主を見た。全員の視線の先に、顔を真っ赤にしながら立っている刹那。

ふたば「え……………今なんて？」

ふたばが刹那の発した言葉を理解できず、もう一度聞き返す。

けど・・・ふたばはどう思う？」

聖時は刹那のキス発言を聞いて、顔を真っ赤にしながらフリーズしているふたばに声をかけた。

ふたば「（思考オーバーヒート中につき停止中）／／／／／／／／／／／／／／／」

聖時「ふたば？」

ふたば「（思考オーバーヒート中につき停止中）／／／／／／／／／／／／／／／」

聖時「ふたば！！」

ふたば「え?!あ・・・あの、きすはやっぱり天ぷらが一番だと思うよ!」

ピティ「ふたば、それは魚の鱻きすでしょうって言うか何動揺してるの?」

いつの間にか二人に近づいて声をかけるピティ。

聖時「いや、何動揺してるって言われても、キスだぞ?恋人同士でもないのにそんな事出来るわけないだろう!」

ピティ「緊急事態って事でいいじゃない。それとも何、ふたばじゃ不満なわけ?こんなに可愛い子にキスが出来るんだから、役得だと思っけどな。」

聖時「あのな、僕なんか相手じゃふたばは嫌に決まって「わ・
・・わたしは別に・・・」ってえ？」

突然の発言に驚きふたばの方を見る聖時。

ふたばは顔を真っ赤にしてうつむいていた。

ふたば「わたしは嫌いじゃないよ・・・相手が聖時なら・・・
聖時はわたしが相手じゃイヤ
？」

顔を赤くしながら瞳を潤ませ、上目使いで聖時を見るふたば。

聖時「え？あついや・・・別にイヤじゃないって言うか・・・(な・
・・なにこの可愛い生き物ノノノノ瞳を潤ませての上目使いっ
て反則だよ～～～！)」

互いに相手と見つめ合いながら顔を赤くして固まるふたり、そして
・・・

明日香「(うわ～キスするの！するの！！)(ドキドキッ！)」

刹那「(わ・・わたし達の歳ではやはりこう言う事は早いのではノ
ノノノノノ)」

芹「(な・・なるほど、瞳を潤ませながらの上目使いは、こうやっ
て使った方が効果的なんだ)、参考になるなノノノノ)」

琴乃「(な・・なるほど、あのようにして迫れば効果的なんですね。
これで猛さんに迫れば・・・ノノノノ)」

剛「（こ・・・これは有りなのか？た・・・確かに調査を進める為に、身を守るのにデバイスやアーティファクトは必要だけど・・・ブツブツ・・・）」

猛「（こ・・・興奮してきた！あつ、ヤベー鼻血出てきた。）」

それぞれ勝手な事を思いながらそれを見守る外野。そんな状態でしばらく時間が経つが、聖時とふたばは、互いに見詰め合ったまま固まったままで動こうとしなかった。

ピティ「（イライライライラッ！）え〜い！まどろっこしい！！ピティちゃ〜んキ〜〜〜クツ！！」

ドゴッ！

聖時「うわっ！」

ふたば「きゃあー！」

ピティのキックが後頭部に綺麗に決まり、それでバランスを崩した聖時が目の前にいるふたばに覆いかぶさるように倒れる。と、その時、聖時の唇に柔らかい感触。

聖時「！」

ふたば「！」

外野一同「くくくくくくおお〜〜〜！！」「」「」「」

見るとそこにはふたばに覆いかぶさる形で倒れこみ、ふたばとキスしている聖時の姿があった。とその時、魔法陣が光り、ふたばの絵が入った仮契約カードバクティオーが出現する。

聖時「ふ．．ふたば．．．」

ふたば「せ．．聖時．．．」

一旦離れてお互いを見る二人。

ピティ「いよっしゃ~~~~!!キスいつた~~~~!!」

高らかにピティの音が響き、そして．．．

聖時「(ボンッ!!)」

ふたば「(ボンッ!!)」

あまりの事に、思考がオーバーヒートし、二人は頭から煙を吹きながら爆発した。

．．．．．

数分後

ピティ「へへ、これがバクティオー仮契約カードか」

出てきたカードを手に取りながら見るピティ。

明日香「あつ！見せて見せて！」

芹「あつ！私も！」

琴乃「へへ、綺麗なカードですね。」

剛「これがバクティオー仮契約カード……」

猛「このカードを使ってアーティファクトを呼び出す事が出来るのか」

「 士郎「まったく、俺達が居ない間に事を進めて……しかし……」

裕也「キスとはね。」

由香「わたしも見たかったな、ちよつと残念。」

アキ「……………」

カードを持ったピティを中心に集まる猛たち、そして……

聖時「////////////////////」
ふたば「////////////////////」

先ほどのキスのせいで、今だにオーバーヒートによる思考フリーズで動かない聖時とふたばと……

刹那「聖時さん！ふたばさん！しっかりしてください！」

二人の肩を掴みながらゆすっている刹那と言う、混沌とした状態になっていた。

裕也「しかし、良いのかピティ？」

ピティ「へ？なにが？」

裕也「二人がキスしたのはお前のせいだって聞いたけど、この事をゆめみさんが知ったら……」

士郎「間違いなく血の雨が降るな。」

ピティ「アッ！そうだ……もしこの事がゆめみに知られたら……」

そう言いながら顔を青くするピティ。

そう、聖時を過保護にしている、聖時大好きなゆめみがこの事を知ったら、聖時とふたばがキスした原因のピティは、間違いなくゆめみの怒りを受ける！その事は明白であった。

ピティ「と……とりあえず、みんな！この事はゆめみにはナイシ

ヨで「何がナイシヨなんですか？」（「ってゆめみ!!」

ピティの背後、そこには音も無く近寄ってきいたゆめみが立っていた。

剛「ゆ・・・ゆめみさん！」

明日香「いつの間に!？」

ゆめみ「裕也さんが「良いのかピティ」と言った辺りからです。」

ピティ「あ、あああああああっ・・・」

顔面蒼白にしながら、恐怖に引きつった顔をするピティ。

ゆめみ「先ほど裕也さんの言った言葉で、なぜ聖時さんがあんな状態なのかがおおよそわかりました。そして、その原因がピティ・・・あなただと言っこともね。」

瞳のハイライトを消しながら、淡々と喋るゆめみ。回りの他の人たちは、ゆめみがかもし出している黒い何かと怒気に気をされ、ガタガタと震えている。

明日香「こ・・・怖いよ〜お姉ちゃん。」

琴乃「だ・・・大丈夫よ明日香。」

芹「そ・・・そうだよ。私たちはただ見ていただけなんだから。」

剛「ココはただ、嵐（ゆめみの怒り）が過ぎ去るのをじっとして待

つしかない。」

猛「それか生贄^{ピティ}を差し出すかだな。」

士郎「その方が効果的だな。」

刹那「確かにそうですね。昔の人は海や川の増水や嵐を鎮めるために、生贄を捧げたといいますし……」

アキ「何より、今回のゆめみさんの怒りの原因はピティにあるから、ここは大人しく……」

由香「スケープゴートになってもらおう」

ピティ「あーっ薄情者！！助ける気無いな！！それでも仲間か！！」

猛たち『~~~~~』

猛たち全員は、ピティと目を合わせないように明後日の方向を見ながら知らん振りのそぶりをした。

ゆめみ「遺言は済みましたか？」

ピティ「……あの、こ……これは、アーティファクトを手に入れるために仕方がない言いたい事はそれだけですか？（ガシッ！）つてへ？！」

喋っている最中のピティを素早く片手で掴むゆめみ。そしておもむろにピティを縄で縛り、さらにその両足を縄で縛り、さらにもう一本の縄を出してその先端にピティの両足を括りつけた。

ピティ「あ……あの〜これって……」

恐怖に震えながら、自分の状態を見て、ゆめみに質問をするピティ。

ゆめみ「ドラえもん……」

ピティ「へっ?」

ゆめみ「ドラえもんの出す秘密道具にタケコプターってありますよね〜」

ピティ「う……うん。」

ゆめみ「あれって良いですよね〜。」

ピティ「え?あ……うん。」

ゆめみ「そう……、なら味わって見みますか?」

ピティ「へっ?」

そうピティが返事をした途端、ゆめみはピティの両足に縛られた縄の反対側の端を掴むと、投げ縄の要領でそれ頭上で回し始めた。

ゆめみ「そ〜らを自由に〜飛びたい“か”」

剛「あっ、あれは!」

猛「伝説の!」

裕也「ドラえもん秘密道具式処刑方法の！」

ゆめみ「無明の闇へ飛んで”逝”け〜 ヒトコプタ〜」

ピティ「うわあああつ！テストメントさんごめんなさい！使わせてもらいましたああああああ！〜！」

ゆめみのヒトコプターで飛んでいくピティ……

ゆめみ「お仕置き完了です」

何かが抜け落ちたような、清々しい顔をするゆめみ。

明日香「ピティ……大丈夫かな〜。」

琴乃「た……たぶん大丈夫だと……良い……わね。」

童虎「……お主ら……一体何やつておるんだ……」

外での仕事が終わりに、別荘に入ってきた童虎が、溜息交じりの声で呆れながら言うのであった。

《つづく》

第52話 デバイスとアーティファクト？（後書き）

今回作品内で使われた「ドラえもん式秘密道具処刑方法」は、自分がお気に入り登録している作品「魔法少女リリカルなのはstc、EX」内で使われた物です。

テストメントさん、勝手に使ってすみませんでした。

第53話 デバイスとアーティファクト？（前書き）

どうも、剣 流星です。

花粉の季節到来！今現在、自分は涙と鼻水で大変な状態です。

うつつうつつ・・・何とかしなくては。

では第53話をどうぞ。

第53話 デバイスとアーティファクト？

第53話 デバイスとアーティファクト？

童虎「……つまり、バクティオー仮契約をする際におこなったキスが衝撃的すぎて、二人はこうなってしまったと。」

そう童虎は言いながら、赤くなり固まっている聖時とふたばを見た。

聖時「／／／／（思考オーバーヒートの為停止中）」

ふたば「／／／／（思考オーバーヒートの為停止中）」

剛「しかし、参ったな、せつかく出たバクティオー仮契約カードも、アーティファクトを出せる二人がこの状態じゃあ、どんな物なのか確かめられないな。」

士郎「仕方がない。とりあえずアーティファクトを確かめるのは後にして、先に猛達のデバイスを渡すな。」

芹「待ってました。」

明日香「うわ、どんなのかな。」

猛「俺のはどれだ？」

猛達が我先にとデバイスを持っている士郎に群がってきた。

士郎「焦るなって、まずは猛の刀型のデバイス・「クサナギ」だ。」

そう言いながら、士郎は猛に与えるデバイスの待機携帯・・・赤い石がはめ込まれている指輪を目の前で展開して見せてみた。展開したデバイスは刀の形をしていて、鐔の所に、デバイスコアである赤い宝玉が埋め込まれていた。そして、刀身の背の部分にカートリッジシステム用のスライドのカバーが付いていた。

猛「これが・・・俺のデバイス・・・」

士郎「そうだ、カートリッジシステムを内臓、装弾数は2、主に近接戦闘型のデバイスで、熱風の精霊・ジエイチを宿している」

士郎はデバイスの事を話しながら、猛にクサナギを渡した。

士郎「次は剛の剣型のデバイス・「ムラクモ」だ。」

そう言いながら、士郎は青色の石がはめ込まれている指輪、待機形態のムラクモを展開して見せた。

その形は、古代日本で使われていた、直刀型の剣の形をしていて、鐔の所に、デバイスコアである青い宝玉が埋め込まれていた。クサナギと同じように、カートリッジシステム用のスライドカバーが刀身の根本近くについていた。

士郎「ムラクモはクサナギと同じ近接戦闘型のデバイスで、カートリッジの装弾数は2。雨の精霊レイラを宿している。」

剛「これが俺のデバイス・・・ムラクモ・・・」

剛はそう言いながらデバイスを士郎から受け取った。

士郎「次は琴乃の笛型のデバイス。「セルフィン」だ。」

そう言つて、ペンダントの形をした待機形態のセルフィンを展開させた。

展開させたデバイスはフルートの様な横笛の形をしていて、吹き口の所に緑色のデバイスコアが付いていた。

琴乃「笛型のデバイス？」

士郎「そうだ。このデバイスには音の精霊メディを宿らせてある。その為、このデバイスで曲を奏でると、その曲は魔曲となり、曲ごとに様々な効果を発揮させられるんだ。」

琴乃「奏でた曲が魔曲に……」

士郎「どの曲がどんな効果を発揮するのは自分で探して見つけてくれ。」

琴乃「はい、ありがとうございます。」

士郎「さて次は、明日香のデバイスだな。」

明日香「いよいよ私の番だね。それで、私のはどんなデバイスなの？やっぱり弓型？」

士郎「ああ、その通りだ。明日香のデバイスは弓型のデバイスで、名を「ビシヤール」、こいつには、かまいたちの精霊・アゲイが宿っている。」

そう言いながら、士郎は黄緑色の石がはめ込まれたブレスレット、

待機形態のビシヤールを展開させて弓の形にした。

その弓、ビシヤールの形は、シグナムのデバイス、レヴァンティンのフルドライブモードの弓形態と同じような形で、色だけ黄緑を基本カラーにしたような感じの物だった。

明日香「これが私のデバイス？これ弓だよな？でも矢が無い……

」

明日香の言う通り、この弓は、光りで出来た弦が張ってあるが、その弦につがうべき矢が何処にも無かった。

士郎「矢があると思って、弓を引いてみな。」

明日香「矢があると思って弓を……」

士郎に言われて、明日香は弓を引いてみた。すると、引いた所から光りの矢が出てきた。

明日香「すごい！まるで、ブーチに出てくるクイオンシーの弓矢みたい」

士郎「クイオンシーの弓矢の弓矢って……まあ、参考にはしただし、使い方も似たような使い方だから、あながちクイオンシーの弓矢と言っても過言じゃないからな。」

明日香「そうなの？なら矢を連射で1200撃てるの？」

士郎「ん……だぶん撃てると思っぞ。」

明日香「え！本当?!」

猛「本当かよ？」

士郎「ああ、元々、ビシャルは連射速度を特化させたデバイスだから、明日香がビシャルを使いこなすよう努力すれば使える様になるはずだよ。」

明日香「そうなんだ。よし、がんばるぞー！」

士郎「さて、じゃあ最後になったけど、芹のデバイスだな。」

芹「やっとね・・・で、私のデバイスはどんなやつなの？」

士郎「芹のデバイスは、芹が今、習得しようとしている武神流を使う為に最適なデバイスを選んで作ったからな。」

猛「武神流？なんだよそれ？」

猛は士郎が言った武神流と言う聞きなれない単語について質問した。

童虎「それはワシから話そう。この前、聖時が父親の書斎から持ち出し、この別荘に運び込んだ幾つかの書物の中に、武神流と言う武術の事が書かれてある書物を見つけた。」

猛「へへ、そんな物が合ったんだ。」

童虎「ワシはお主らを鍛える際、どの様にして鍛えるかと考えていた。戦闘における基本的な事と、小宇宙コスモに関する事は教えてやれるが、個人個人の戦闘スタイルに関しての修行方法についてはサツパリ思いつかなかった。そこでワシは聖時の父親で有る聖殿の所持

していた書物からそのヒントを得ようと思ひ、目を通していたら、
武神流について書かてある書物を見つけたのだ。」

明日香「へへ、そうだったんだ。」

童虎「この武神流に書かれてある書物、書いた人物はマアムと言う
女性格闘家で、聖時の祖父と共に戦った仲間の一人らしいのじゃ。
ワシはコレを読んで、この武神流と言う武術は芹にピッタリだと思
い、コレを芹に習わせたのだ。」

猛「へへ、お前この別荘でそんな事してたんだ。」

芹「あんた達がアバンの書を読んで、アバン流刀殺法を覚えていた
様に、私も本を読んで武神流の修行をしていたの。」

士郎「話を戻すぞ。さっき童虎さんの話にも出てきたそのマアムつ
て人が、聖時のじいさんと一緒に戦った時に使った武装の魔甲拳まこうけんを
デバイス化した物が芹のデバイスだ。」

士郎はそう言いながら紫の石がはめ込まれているブレスレットを光
らせ、デバイスを待機形態から展開させた。その形は、かつての「
魔甲拳まこうけん」の形と殆んど同じで、違いは、中心にはめ込まれている石
の色が紫になつている所だけだった。

士郎「コレが芹のデバイス、「カーヴァイル」だ。コイツには岩の
精霊・フェニールが宿っている。」

芹「これが私デバイス・・・」

芹はそう言いながら、士郎からカーヴァイルを受け取ると、それを

利き腕の右腕に着けようとした。

士郎「利き腕でじゃあ無い方に付ける事をお勧めするぞ。」

士郎は、芹が利き腕の方にカーブアイルを付け様としたので、利き腕じゃない方に付ける様に進めた。

芹「？その方が良いの？」

士郎「ああ。」

芹は「ふん」と言いながらカーブアイルを利き腕じゃない左手に着けた。

士郎「それじゃあデバイスを配り終わったみたいだから、次は全員、バリアジャケットを着てみてくれ。」

芹「あれ？バリアジャケットのデザインは終わって登録してあるの？聖時の刀型デバイス、「ジャメイム」はまだ登録していないの……」

士郎「ジャメイムのバリアジャケットのデザインは、元々そう言った物のデザインを決めるのが俺たちが苦手だったから遅れていたんだ。だけど、ゆめみさんが協力してくれたおかげで、聖時のジャメイムどころか、今回の猛たちの分まで一気にデザインが決まったから、今回まとめて登録したんだ。」

芹「へ〜。」

明日香「どんなデザインなんだろうね。」

士郎「じゃあみんな、セットアップをしてくれ。」

猛「了解。クサナギ！」

剛「ムラクモ！」

琴乃「セルフイン！」

明日香「ビシヤール！」

芹「カーヴァイル！」

五人「……セット、アープ！！」「」「」

五人の掛け声と共に、五機のデバイスはそれぞれの持主にバリアジャケットを着せる。

そして次の瞬間、五人の服装が変わり、五人ともバリアジャケットを着ていた。そしてそのバリアジャケットの詳細は次の通りである。

まず猛は……まあ、ぶっちゃけて言うと、そのデザインは、原作のIZUMO2の前作、IZUMOに出てきたスサノオの服装そのものである。(ピティ：おい、作者！説明それでいいのか！作者：仕方がないだろう！俺はこういう服装のデザイン等を説明するのが苦手なんだから！！)

次に剛のバリアジャケットはIZUMO2・学園狂想曲の序盤で剛が着ていたネノクニの服をデザインしたものだ。

次に琴乃のバリアジャケットは、IZUMO2・学園狂想曲内の演劇で来た巫女服のようなデザインで、明日香はIZUMO2で着て

いた弓道着を模した物だった。

最後に芹の物は、デバイスの元になった武具まこっけん魔甲拳の持主であるマムがかつて着ていた武道着のデザインを模した物になっていた。

ゆめみ「詳しいデザインがお知りになりたい方は、P S 2ソフト・IZUMU 2及びIZUMO 2・学園狂想曲をやって見てください。」

アキ「ゆめみさん、何言ってるんですか？」

ゆめみ「いえ、読者の人達に、ちょっとしたフォローを。」

アキ「？」

ゆめみ「それよりも、みなさんどうですかバリアジャケットは？私がデザインしたんですけど。」

ゆめみは猛たちに自分がデザインしたバリアジャケットの感想を聞いた。

剛「なんだか古代日本の話に出てきそうな感じのデザインですね。」

猛「ああ、けど、結構かっこいいぞ。」

琴乃「私のはどうして巫女服なんでしょうか……」

明日香「似合ってるから良いじゃない。私のは弓道着みたいなデザインだから、弓を打つときに邪魔にならない様になってるから使う分には申し分ないよ。デザインも気に入ったし。」

ゆめみ「芹さんはどうですか？」

芹「私も言いたいと思うよ。動きやすいし。」

士郎「あ、そうそう言い忘れていたけど、芹のデバイスのカーヴァイルは、実は今のバリアジャケットの上に、さらにプロテクターを身につける様になっているんだ。」

芹「え？プロテクターを？」

士郎「ああ、装着方法は、腕に付けているカーヴァイルに鎧化アムドと言うんだ。」

芹「え？あ・・・鎧化アムド。」

カーヴァイル「イエサー」

芹の鎧化アムドの言葉を聞いて、カーヴァイルが展開し、芹の体に装着して身を守る鎧となった。

芹「こ・・・これは?!」

士郎「それがそのデバイス、カーヴァイルの能力だ。カーヴァイルが鎧化アムドしたそのプロテクターは電撃系の魔法以外が一切効かない金属で出来ているから魔法についての防御力は高い。また、装着者のスピードを損なわないようにする為に利き腕とは逆の方に防御力が集中しているから動きが制限されない。そして攻撃力も、左肩内に臓されているナツクルのメタルフェイスを装備すれば、使用者の力量しだいで砕けない物は無い。」

芹「す……すごい。なんて強力なの？なんだかちょっと怖い……」

士郎「確かにコイツは他のデバイスと比べて、強力だ。だから二段構えの装着方法を取っている。」

猛「なるほどな。けど芹ばつかずるくないか？そんな強力なデバイスを貰って。」

士郎「仕方がないだろう。芹は素手での戦いが基本系である格闘家なんだから、コレぐらい防御力が高い物じゃないとインファイトが出来ないんだから。」

童虎「たしかにそうだな。芹の戦い方では、相手に攻撃を加えるには、相手の懐に入らなければならないからな。だから防御力が高いのは当然だな。」

士郎「さてと、デバイスは手渡した。細かい所の説明等は後で手紙にしてみんなにわたしておくから。さて、あとは……この二人を再起動させてアーティファクトの効果を確認するだけだな。」

そう言いながら士郎は、固まったままの聖時とふたばを見た。

聖時「……………（思考オーバーヒートの為停止中）」

ふたば「……………（思考オーバーヒートの為停止中）」

童虎「何とかしないとイカンな……」

全圖『 』

《^U^U》

第54話 デバイスとアーティファクト？（前書き）

どうも、剣 流星です。

みなさん、巨大地震がありました。が、ご無事でしたか？

自分が居た所でも、かなり揺れましたが被害は軽微で、家も破損等はありませんでした。ただ、親戚が、陸前高田に居るので、その安否が確認できず、心配です。

無事だといいいけど・・・

とにかく、第54話です、どうぞ。

第54話 デバイスとアーティファクト？

第54話 デバイスとアーティファクト？

聖時「／／／／（思考オーバーヒートの為フリーズ中）」

ふたば「／／／／（思考オーバーヒートの為フリーズ中）」

ピティ「……………ねえ、いい加減にコレ……………何とかしないとね。」

今だに固まったままの聖時とふたばを見て、いつの間にか戻って来ていたピティが言った。

ゆめみ「そうですね〜って……………ピティ、何時の間に戻っていったんですか？」

士郎「って言うか、元はと言えば誰のせいだよ。」

士郎はそう言いながら、ジト目で元凶であるピティを見た。

ピティ「細かい事は気にしない〜い 気にしない」

士郎「気にしないって……………お前な〜〜。」

明日香「それにしても良く無事だったね。」

ピティ「無事じゃないわよ。頭から地面に突っ込んで突き刺さっ

ちゃったんだから……」

明日香「うわ〜、芸術的な落ち方だね。」

猛「り……リヤル犬神家……」――

ゆめみ「自業自得です！まったく、聖時さんにあんな事を！……
・あんな……ううう……私の聖時さんが汚れてしま
いました……」OTZ

アキ「私のって……」――

ピティ「いつから聖時はあんたの物になった！」

士郎「はいはい、そこまで。それより今は聖時達をどうするかだろ
う？」

士郎が脱線しかけた話を元に戻しながら、再度、聖時達をどうする
か聞いてきた。

猛「その点については俺に考えがある。」

剛「考え？猛、なんだその考えとは？」

猛「なに、最終兵器を使うだけさ。ただ……これはかなり聖時達
にダメージを与えるから使いたくはなかったんだけど……」

アキ「つ……使いたくなかったって……一体何する気？」

アキが不安そうな声で猛に聞いてきた。

猛「なに、芹にちょっと目覚めのコーヒーを作ってもらおうと思っ
て……自分用のオリジナティーを加えてもらって……」

明日香「芹お姉ちゃんにコーヒーを？」

琴乃「そう言えば芹さん、いつの間にか居ませんね？」

白鳥姉妹が芹がいつの間にか居ない事に気付き、回りを見回した。
そんな時、不意に別荘の方から猛たちが居る中庭の方にもすごい
異臭が流れ込んできた。

由香「な……なにコレ？」

刹那「は……鼻が曲がる……！」

裕也「目が、目がああああっ……！」

士郎「どこぞの天空都市を復活させた某大佐かあんたは……っつてツ
ッコミ入れてる場合じゃないな俺も……鼻も目も痛い……」
「……！」

童虎「な……なんだコレは？！コレはクサイと言うよりは鼻が痛
いといしか言いようがない臭いだ……！」

剛「し……死ぬ……死ぬ……！！！」

ゆめみ「きゅ……嗅覚センサーが麻痺して……」

琴乃「ふ~~~~~（バタツ！）」

明日香「あ~~~~！お姉ちゃんが倒れちゃった！すっかりして~~~~
！！」

猛「ど・・・どうやら完成したみたいだな・・・」

鼻をつまみながら、涙目で猛は別荘への入り口を見た。
そこには、丁度別荘から出てきた一人の人物が居た。

芹「猛~~~~！お待たせ~~~~。」

そう言いながら芹は、異臭が漂う二つのマグカップを持ち、猛たちの側に歩み寄ってきた

刹那「せ・・・芹さん・・・それは一体なんですか？！」

刹那は明らかにこの異臭の原因と思われる、芹の手に握られた緑色の液体が入っている二つのマグカップを指さした。

芹「何って、猛が気付け用のコーヒーを作ってきてくれて言ったから作ってきたの。」

ピティ「こ・・・コーヒー？」

芹の発言にピティを筆頭に、その場にいる全員が引きつた顔になった。

芹「そう！このコーヒーを飲めば、たとえ死んだような深い眠りに付いた人でも一発で目を覚ます究極の目覚ましコーヒー！その名も

！芹ちゃん特性「死者の目覚めコーヒー」よ！！」

芹は手に持っていたコーヒーを掲げて「ババーン！！」という効果音が背景に出そうなポーズを取った。

童虎「き・・・究極の目覚ましコーヒーだと?！」

剛「コレ・・・緑色してるぞ・・・」――

士郎「て言うか、こんなの見てコーヒーだってわかるか!!」
「は緑色していない!!！」

芹「そんなこと言ってもコレはコーヒーなんだから、そう言いようがないわよ。」

芹はそんな事を言いながら猛の前に立った。

芹「はい猛、頼まれていた私オリジナルのスペシャルコーヒーよ。
作ってあげたんだから感謝しなさい。」

猛「ああ、サンキューな芹。」

いつの今にか用意した洗濯バサミで鼻をつまみながら、猛は芹から異臭コヒクの元が入った二つのマグカップを受け取った。

ゆめみ「猛さん?それをどうするんですか?」

ゆめみは異臭が漂うそれを指さしながら、心配そうな顔をした。

猛「コレ?コレはどうするの。」

そう言うと、猛は固まったままの聖時とふたばに近づき、手に持った“ソレ”を聖時達の口に流し込んだ、マグカップの中身をすべて・

芹と琴乃以外の声『あっ！』

聖時「・・・・・・・・・・・・・・・・」
ふたば「・・・・・・・・・・・・・・・・」

猛「ど・・・・・・・・どうだ？」

聖時「・・・・・・・・・・・・・・・・」
ふたば「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その場の全員「・・・・・・・・・・・・・・・・」

聖時「！」
ふたば「！」

しばらく沈黙が続くと、不意に聖時とふたばは急に立ち上がり、声にならない声を出しながら回りを走り出した。「

聖時「%*@£!!!」
ふたば「%@#!!!」

ゆめみ「あっ！聖時さん!!!」

アキ「ふたば!!!」

聖時「み……みみ！」

ふたば「み……み……み……」

明日香「み？」

刹那「あつ！水ですね！」

聖時達が言っている事を理解して、刹那は別荘に戻り、すぐに水をコップに汲んで戻ってきた。

そしてそのコップを受け取ると、二人はものすごい勢いで水を飲み干していった。

聖時「……………つぷは！死ぬかと思った……」

ふたば「……………つぷは！死ぬかと思った……」

コップの水を飲み干して、声を揃えて言う二人。

アキ「大丈夫？二人とも？」

聖時「だ……誰だ！！僕に毒を盛ろうとしたのは？！」

芹「毒だ……？！」

聖時「あつ……いや……な……何だったんだ？今のアレ？」

ふたば「言い表せないあの味……ううん、アレはもはや味ではなくただの痛みだよ……アレ……一体なんだったの？」

猛「芹特性の目覚ましブレンドコーヒーだそうだ。」

聖時「え？……アレ……コーヒー……」
ふたば「……だったんだ……」

二人はそろって芹を見て、心の中で同じような事を思った。「料理の腕はシャマルさん並みたいだ、今後は芹には料理をさせない様にしよう」と誓った。

士郎「さてと、二人が目を覚ましたことだし、アーティファクトを確かめようぜ。」

剛「そうだな。」

明日香「ねえねえ、アーティファクトってどんなの？見せて見せて」

聖時「え？ああ、コレだよ。」

明日香に急かされ、聖時は仮契約で出てきたカードをみんなに見せるように差し出した。

そのカードの中央には、杖を持ったふたばが描かれていた。

ピティ「へへ、コレが仮契約カードね。」

明日香「うわー、キレイ」

アキ「このカードを使ってアーティファクトを呼び出すのね？」

刹那「たしかそうだったはずですよ。」

猛「じゃあさっそく呼び出してみろよ聖時。」

聖時「ああ、じゃあさっそく「エクセルケアース・ポテンティアム能力発動渡良瀬ふたば！」」

聖時が呪文を唱えると、次の瞬間、ふたばの手に一本の杖が握られていた。

ピティ「その呪文を聖時が唱えないと、ふたばはアーティファクトを使えないの？」

聖時「ふたばにカードのコピーを渡しておけば、ふたば自身でもカードの発動が可能だよ。後でコピーカードを渡しておくよ。」

聖時はそう言いながら、たった今発動したふたばのアーティファクトを見た。

それは杖の形をしていて、先端に、黄金で出来ている鳥が羽を広げたような形の飾りがついていた。

由香「へへ、キレイだね。」

裕也「頭についているコレって、金でできてるのか？」

刹那「見ていると、なんだか儼かな気分させる杖ですね。」

聖時「あれ？先生どうしたんですか？」

聖時はふたばのアーティファクトを見た時から驚いた顔をしながら固まっている童虎に声をかけた。

童虎「な……なぜコレが、こんな所に？」

聖時「先生？どうしたんですか？」

滅多な事では驚かない童虎が驚いた顔をしていたので、聖時は怪訝そうな顔をしながら話しかけた。

童虎「そのアーティファクト……」

聖時「コレの事について何か知っているんですか？」

童虎「ああ、コレは勝利の女神の杖……」

聖時「勝利の女神の杖？」

童虎「ワシがかつて居た世界の女神・アテナの右手に握られていた神具とも言うべき代物だ。」

聖時「なっ！！！」

ふたば「神具……」

由香「女神アテナって!?!」

裕也「あのギリシヤ神話の!?!」

刹那「その女神が使っていたものがコレだと?!」

童虎「ああ、そうだ。その昔、女神アテナは、左手にあらゆる攻撃を弾く盾を、右手には勝利の女神を手に持っていたと言う。」

アキ「左手に盾、右手に勝利の女神……」

童虎「ワシ等聖闘士が仕えた、現代に蘇ったアテナは、右手に持つ勝利の女神を杖の形で握っていた。その杖がソレだ。」

童虎はそう言いながらふたばが握っている勝利の女神の杖を指差した。

ふたば「コレが・・・勝利の女神？」

童虎「その杖を携えた物の陣営は、勝利の女神の加護を受け、必ず勝利に導かれるといわれている。アテナが神話の時代より常勝なのは、その勝利の女神の加護があるからとも言われている。」

童虎の言葉を聞き、驚き戸惑うふたば。

ふたば「な・・・なんでそんな凄い物が、私のアーティファクトとして呼び出されたんだろう・・・」

童虎「ワシにも解らん。だが、勝利の女神がお主を選んだのにはワケがあると思うのじゃ。」

ふたば「ワケが有る・・・」

ふたばは少しその選ばれたワケというがあるのかを考えた。だが、いくら考えてもその理由思い浮かばなかった。

ふたば「・・・」

童虎「まあ、ココであれこれ推論しても仕方がない。とりあえずこの問題は保留にして、今日の分の修行を行うとしよう。」

刹那「そうですね。あれこれ推論しても仕方ありませんしね。」

童虎「では早速、本日の修練を行うとし」「あっ！そうだ！」「っと、
・・・どうした聖時？」

童虎の声を遮る様に、突然聖時が声を上げた。

聖時「みんなに渡さなきゃならない物がデバイス以外にもあったんだ。」

士郎「みんなに渡す物？なんだそれ」

聖時「マジックアイテムだよ。」

ピティ「ああ、もしかしてこの前別荘内で見つけたあの石の事？」

猛「見つけたって、何を見つけたんだ？」

聖時「ああ、この別荘が、実は裏山の中で捨てた物だって事はみんなには話したよね？」

猛「ああ、ここを紹介された時に話してもらったな。」

聖時「そう。この別荘は拾い物。と言う事は、本来の持主が居るって事だよな。」

アキ「まあ、そうなるね。」

聖時「と言う事は、この別荘内には、以前使っていた人の物があつ

ても不思議じゃないよね。」

剛「確かにそうだな。もしかして、前の持主の持ち物でも見つけたのか？」

聖時「ああ、実はこの前隠し戸棚を見つけたんだ。で、その中にコレが入っていたんだ。」

聖時はそう言いながら、ポケットの中から真珠ぐらいの大きさの翠の石を数個出した。

明日香「うわゝ、綺麗ゝ。何コレ？」

聖時「この石は、別荘内限定で、身につけた者が歳を取らなくなる力があるんだ。」

芹「えっ?!それ本当?!」

聖時「ああ。どうやら前の持ち主が別荘を作る際に一緒に作ったものらしいんだ。これからはみんなにコレを別荘内で身につけてもらおうと思うんだ。コレを身につけていれば、この別荘を使いすぎて歳を取りすぎて、家族や周りの人たちに違和感を与える心配がなくなるから。」

童虎「ほお、ソレは便利じゃな。実は別荘の使いすぎによる、歳のとりすぎには、ワシも心配していたのだが、コレさえあればその問題も解決だな。」

猛「でもさゝ、別に1日や2日、余計歳を取ったぐらい別にいいんじゃないか。」

ピティ「あんなね、ソレは若いうちだから言えるのよ。歳の問題は結構深刻なんだからね。特に女性にはね。」

裕也「なんか詳しそうだな。」

ピティ「いや、ね、ユニやシャマル、エイミー、美由希のような微妙な歳の人や、リンディや桃子みたいに、小ジワが気になる歳の人の眩きを聞いてきたからね。」

ピティはしみじみしながらそう言っていたが、回りの人たち全員は「勇気がある発言だね」と思っていた。

ピティ「良い？今のうちだからそう言う事に関しては気よつけないと、歳の割りには老け込んだ、老成ろうせいした性格の人間・・・そう、なのはやフェイト、はやて達のようになるわよ!!」

ピシツ！と指を刺すポーズをしながら言い切るピティ。

アキ「ろ・・・老成した性格・・・」

刹那「老け込んだって・・・。」

ふたば「本人達が聞いたら、間違いなくOH H A N A S H I
ですね・・・」

聖時「ああ、ま、まあとにかく、この石を使って装飾品を作るから、これからは別荘内ではソレを身につけておいてくれよ?」

そう言っ聖時は急いでこの話を打ち切った。なぜかは知らないが、

聖時は「この話をこのまま続けると命に関わる！」と本能が告げているのを感じていたと言っ。

《つづく》

おまけコーナー

ピティ「あ、イタタタツ・・・ピティと・・・」

ユニ「ユニと」

ビッキー「ビッキーの」

三人「「おまけコナ」」「」

ピティ「どうも、司会進行役のピティです、あ、イタタタタツ・・・」

ユニ「解説のユニです。ってどうしたのピティ？体中に包帯を巻いて・・・」

ビッキー「どうも、アシスタントのビッキーです。ピティさん、事故が何かにあつたんですか？」

ピティ「いやね、散歩をしていたら、上空から桜色の砲撃魔法や電撃属性の攻撃魔法等が降ってきて・・・死ぬかと思つたよ・・・」

ユニ「あゝそれは・・・（だぶんなのはさん達ですね。本編でピティが言つた老成つてい言う言葉を言つた事に対する報復ね・・・」

」

ビッキー「さすがですねなのはさん・・・よく聞こえる耳をお持ちで・・・」

ピティ「何でこんな目に合うのかはわからないけど、まっ！とりあえず久方ぶりのおまけコーナーだから、張り切っちゃおうよ」

ユニ「ええ、そうですね あっ！ちなみにこのコーナーは、「おまけ番外編」と交互に連載します。」

ビッキー「では早速、今回の補足にいきましょう。」

ピティ「そうね、さて、今回の補足は、本編に出てきたこの話オリジナルの設定、「エレメンタルデバイス」についてだよ。」

ユニ「一応は、設定資料のページにも書いてありますけど、ここでも大まかな紹介をします。」

ピティ「さてと、まず「エレメンタルデバイス」とは何かと言う事だよ。これは・・・まっ、ぶっちゃけて言うと、精霊が宿ったデバイスの事を言うの。」

ユニ「エレメンタルデバイスは、通常のデバイスに使われているデバイスコアに精霊を宿らせるのに必要な呪文を彫りこみ、そのコアを使ってデバイスを組んだ後、精霊をデバイスに宿らせる儀式をして、エレメンタルデバイスは完成します。」

ビッキー「へへ、コアに呪文を刻む以外は、殆んど同じなんです。」

」

ユニ「ええ、でも、その能力は普通のデバイスとは違います。普通のデバイスは術者の魔法の補助や制御等をするだけの存在ですけど、エレメンタルデバイスは、術者の力を増幅させる力があります。その増幅力は、宿っている精霊の位で違いが出ますが、エレメンタルデバイスの裏システムである精霊ホセーション憑依システムを使った場合、無限の力を得られると言われています。」

ピティ「無限の力が使える様になるって凄いよね。」

ユニ「ええ、けど、エレメンタルデバイスは誰にでも仕える物ではありません。」

ピティ「えっ！そうなの？」

ユニ「はい、エレメンタルデバイスを使える様になるには、エレメンタルデバイスに宿っている精霊に認められた上に、契約をしないと使えません。」

ビッキー「用は使い手を選ぶって事ですね。」

ユニ「はい。そして、精霊は心正しき者しか認めません。しかも、契約する精霊の位が高ければ高いほど、契約を結ぶのが大変になります。」

ピティ「へー、じゃあ、本編内で精霊との契約をしてエレメンタルデバイスを使えるようになった猛たちは、結構凄いな。」

ユニ「ええ。特務捜査課に所属している東郷さんや四乃森さん達も、精霊と契約を交わすのに結構苦労したみたいですし、何回も失敗し

てます。」

ピティ「え?! そうなの? 猛達は1回で済んだから、これって結構凄い事じゃない。」

ユニ「ええ、凄いですよ。契約を交わした精霊の位が、一番低い低位であつたとしても、コレは凄い事なんです。」

ビッキー「あの、さっきから位がどうか言ってますけど、位って?」

ユニ「ああ、そう言えば精霊の位については話してませんでしたね。精霊には、光、夜、風、水、火、土の六つの属性に分けられます。」

そして、その属性内で力の大きさから、さらに三つの位に分けられます。その分け方は、上から、聖位、高位、低位と言われています。」

ピティ「へ、あつ、ちなみに猛達が契約した精霊は低位で、特務捜査課の人たちが契約を交わした精霊は聖位だから。また、精霊の名前と位、属性の分け方は、設定資料集の場載っているから、詳しく知りたい人はそっちを見てね。」

ユニ「さて、説明はこんな所ですかね。」

ピティ「だね。」

ビッキー「それにしても、デバイスコアに呪文を刻み込むだけで精霊を宿らせるようになるなら、なのはさんたちも、いずれはエレメンタルデバイスを持つようになるんでしょうか?」

ピティ「さあね、けど、もしなのがエレメンタルデバイスを持つ
としたら、契約精霊は絶対闇の精霊だと思うんだよね。」

ビッキー「？何で闇なんですか？」

ピティ「だって、なのは魔王だもん。魔王に合う精霊って闇くら
いしか・・・って！桜色の砲撃魔法が迫ってくるっっっっっっっっっっ！！」

ドカッ~~~~~ン！！

ピティ「ぎゃあああああっ！！」

ユニ「・・・まったく、あの子は本当に学習しませんね。では今
回はここまでにします。」

ビッキー「ではでは」

ピティ「わ・・・わたしのセリフ・・・ガクッ！」

第55話 修行風景とお墓参り？（前書き）

どうも剣 流星です。

前回書いた、岩手の陸前高田にいる親戚に連絡が付き、全員無事だと言う事がわかりました。家も無事で、今、近所の家をなくした人たちと共にそこに居るそうです。どうやら、家の位置が山の中腹だった為、津波による直接的な損害を受けなかったそうです。ですが、電気等のライフラインが止まり、生活するのが大変な状況だそうです。とりあえず無事でよかったです。では、第55話をどうぞ。

第55話 修行風景とお墓参り？

第55話 修行風景とお墓参り？

武家屋敷のような広さのある日本風の家屋。

ふじみや藤宮と書かれた表札がかけてあるその屋敷の玄関から、長い黒髪を後ろで縛った

12〜3歳位の男の子と、髪をツインテールにした同じぐらいの歳の少女、そして着物を着た女性が出てきた。

男の子「では母さん、行ってきます。」

女の子「行ってきます、おばさま。」

着物の女性「ええ、いつてらっしゃい。晶さんティアナさん。聖時さん達によろしく。」

晶「はい。」

ティアナ「あの、連矢兄さんはやっぱり・・・後から行くんですか？」

着物の女性「ええ、なんでも朝早くからからの仕事があるからと、仕事のお手伝いをするデジェルさんと一緒に出て行ったわ。」

ティアナ「そうですか。なら仕方がないですね。」

そう言いながら二人は玄関から、屋敷の敷地の入り口の門に向かう。すると門の近くに誰かがいるのが見えた。

そこには、この屋敷の庭師である老人の男の人が、門近くの植木の

手入れをしていた。

庭師「おや？晶坊ちゃん、お客様とお出かけですか？その格好でのお出かけはお久し振りですね。あ、そう言えば、今日は神谷の奥方と娘さんの命日でしたね。」

晶「うん、だから今日、聖時達と一緒にお墓参りに行くんだけ。」

庭師「そうですか。行ってらっしゃいませ、お気をつけて。」

男の子「うん。行ってくるね。」

男の子はそう言って門をくぐり、ティアもペコリと頭を下げたあと、晶に付いて出かけて行った。

着物の女性「早いものですね。二人が亡くなってからもう、3年経つのですね。」

男の子の背を見送る為に、門の所まで出てきた女性が、男の子の背を見ながらそう言った。

庭師「そうですね奥様・・・それにしても晶坊ちゃんのお姿、本当に久し振りですね。」

着物の女性「ずっと女の格好のままでは息が詰まるでしょうし、それに・・・桃華ちゃんの墓参りの時ぐらい、ウソ偽りのない自分の姿で参りたいでしょうし。」

庭師「そうですね・・・。」

そう言いながら、二人は晶とティアの背中が消えるまで、ずっと見送っていた。

*

別荘内でふたばのアーティファクトを確かめた翌日、デバイスを渡された猛達は自分のデバイスを使って修行をしていた。

猛「アバン流刀殺法……」

剛「大地斬!!」

ズバツ!!

別荘の裏庭、そこで目の前に置いてある大岩を、手に持っているデバイスで真っ二つにする猛と剛が居た。

猛「ふ〜っ、やっと出来るようになった。」

剛「ああ、アバン流刀殺法・大地斬。」

そう言いながら剛は近くの岩の上に置いてある、聖時から借りたアバンの書を手に取った。

猛「だけど大地斬は初歩の技なんだよな……」

剛「ああ、だけど聖時はこの技をすでに会得して、今は刀殺法の中で、一番習得が難しいと言われている空裂斬を習得中……」

猛「先は長いな〜」

童虎「何だ、もう根を上げたか？」

別荘の方から歩いてきた童虎が猛たち2人に声をかけた。

剛「童虎先生……」

童虎「自分達と聖時と一緒にするな。修行を始めた時間が違うのだから、差が有るのは当たり前だ。お主らはお主らなりのペースで修行をするんだ。」

猛「はい！」

童虎「さてと、他の者達の修行の様子を見るか。」

そついいながら、童虎は回りを見回した。

剛「あ、琴乃さんと明日香ちゃんは向こうに居ますよ。」

そう言つて、猛は別荘の右向かいに有る広い空き地を指差した。

童虎「そうか。なら行つてみよう。」

そう言つて童虎は、剛が指さした方角に歩いて行つた。

*

琴乃「いくわよ、明日香。」

明日香「うん、お姉ちゃん。」

別荘の右向かいにある空き地。

そこで、琴乃と明日香は、デバイスを手に訓練をしていた。

琴乃「ハチャトウリアン作曲、剣の舞！」

自分の横笛型のデバイス・「セルフィン」を吹き、演奏を奏で始める琴乃。

）
）

笛から奏でられる曲は魔力を帯た魔曲、その魔曲が徐々に効果を発揮し始めたのか、琴乃の周りに何かが具現化し、そしてソレはいくつ物の空中に浮いた剣として現れた。

）
）

そして、現れた剣群は、琴乃の奏でる曲に合わせてるように、琴乃の目の前で対峙している明日香に向けて飛んで行った。

明日香「全部打ち落とす！！」

明日香そう言って手に持っている、自分の弓型デバイス、「ビシャル」を構えると、次の瞬間、ビシャルから光りの矢が無数に飛んで行き、剣群を打ち落としていく。

明日香「くっ！」

だが、打ち落とすのが狙いが甘い攻撃が外れてしまい、琴乃の攻撃が明日香に届いた為ソレを避ける明日香。

童虎「ダメだダメだ。いちいち避けていたらキリがないぞ。」

琴乃「あ、童虎先生。」

最近、聖時に習い先生と呼ぶようになった琴乃が、見ていた童虎に気付く。

童虎「明日香、お前の戦闘スタイルは、管理局で使われている「センターガード」と言う所と同じで、飛んでくる攻撃をいちいちよけていたら攻撃が続かないポジションだ。だから相手の攻撃を常に迎撃して打ち落としていかなくてならない。「立ち止まって迎撃。」
コレが基本だ。」

童虎は、明日香達の修行を見るに当たり、自分の知識だけでは見えあげられないと思い、最近は管理局などが使っている戦闘スタイルや訓練方法を学習して、ソレを修行に組み込んでいた。

明日香「攻撃を全部打ち落とす」ってそんなの無理だよ。」

童虎の「攻撃を全部打ち落とす」と言う言葉に無理だと言う明日香。

童虎「いや、無理ではない。明日香のデバイス「ビシヤール」の最大連射速度は1200近く有る。その性能を見積もつてのセンターガードのポジションだ。」

明日香「不可能ではないか……よし！もうちょっとがんばってみます。」

童虎「よし、その意気だ。ところで琴乃、どの曲にどういった効果があるかの検証は進んでいるか？」

琴乃「はい、主にクラシックの曲を中心に調べてみましたけど、調べれば調べるほど魔曲の凡庸性に驚かされます。攻撃・防御・サポ―トと、とても幅が有ります。」

童虎「琴乃、おまえは自分の能力である魔曲の特徴を把握し、使えるようにしておくのが、今現在の修行だ。しっかり把握し、使いこなせるようにしておくんだぞ。」

琴乃「はい。」

童虎「さてと、次は芹か……あやつは何処に居るのか……」

琴乃「あ、芹さんでしたら、裏庭に有る林を抜けた先にある小川です。」

童虎「おおそうか、では芹の様子を見に行くとするか。二人とも修行に励めよ。」

二人「はい!!!」

童虎に言われ返事をする二人。その返事を聞き、満足そうな顔をした童虎は、琴乃に教えてもらった、芹のいる小川へと向かった。

*

別荘内にある小川、そこで芹は小川に両足をつけて、目の前にある小川に流れ込んでいる滝に向かい立っていた。

芹「はあっ!」

拳を一閃し、目の前の滝を打つ芹。

芹の拳で目の前の滝は爆ぜて、無数の水滴を生み四散する。

芹「はあっ、はあっ!」

ビシッビシッ!!

その水滴、一滴一滴を拳で打ち落としていく芹。

やがて、水しぶきがやみ、その中から姿を現す芹。

芹「ふう〜」

童虎「おっ!どうやら言われたとおり、スピードアップの修行をしていたな。」

芹「あっ!童虎先生。」

聖時に倅い、先生と呼ぶようになった芹が、童虎の姿に気付く。

童虎「スピードアップと気のコントロールの修行、今のお前に必要なのはこの二つだ。しっかりやれよ。」

芹「はい。」

童虎「ソレと、回復系呪文ホイミの契約は済ましたか？」

童虎は今日の修行を始める前に、各自に修行方法を伝える際に、芹に回復系の魔法を契約しておくようにと伝えておいた。

芹「はい、修行を始める前に済ましておきました。あの、コレってやっぱり武神流の奥義を仕えるようにするために契約させたんですか？」

童虎「ああ、武神流の奥義「閃華裂光拳」せんかれつこうけん、コレを使える様になるためには回復系の魔法が必要とあの本に書かれてあった。いずれ使える様になるための準備として回復系の魔法ホイミを使えるようにし、なれておく事に越した事はないからな。」

芹「はい。」

童虎「さてと、後は・・・」

童虎は今別荘内で修行しているメンバーを思い出し、見に行っていない人物を思い浮かべる。

芹「河瀬先輩と香野先輩は別荘の玄関先で、ピティの修行を見てい

ましたよ。」

童虎「そうか、あいつらはピティの修行に付き合っているのか。どれ、見に行ってみるか。それでは修行に励め、芹。」

芹「はい。」

そう言つて芹は再び修行に戻り、童虎はその芹を後に別荘の玄関の方へと向かった。」

*

別荘の玄関先。

そこでピティは、裕也たちが準備してくれた、呪文を当てるための

的用の丸太の前の空中に浮いており、ソレを少し離れた場所から裕也と由香が見ていた。

ピティ「……右手から閃熱呪文、左手から真空呪文……」

ピティは右手と左手、それぞれに違う呪文を両の手に発動させていた。

そして、その両の手に纏った呪文を、両の手を自分の胸の前で合掌させることにより、呪文を合体させた。

ピティ「合体魔法、バギラ!!」

合体させた魔法を目の前に突き出し、ソレを放つ。

放たれた真空の刃と閃熱は、目の前にある丸太を切り刻み燃やした。

由香「す・・すごい、二つの呪文を合体さえるなんて!」

目の前の、切り刻まれ、燃やされた丸太を見て由香が驚く。

裕也「コレが合体魔法……、ユニさんが最強の使い魔と言われる理由となった由縁。」

童虎「おっ、やってるな。」

ピティ「あ、童虎。」

様子を見に来た童虎を見て、ピティは修行の手を止めた。

童虎「異なる呪文を融合させて、放つか……すごいものだな。」

童虎は先ほど見たピティの合体呪文を見て言った。

ピティ「この合体呪文は、元々ユニが開発した物なんだって、二つ以上の呪文を融合して、その威力を上げるものなんだって。」

ピティは聖時の父、聖の書いていた日記からこの合体呪文の存在を知った。

ピティは自分と同じ「使い魔の卵」から孵ったユニが使えるのだから、自分も使えるのではない、コレの修行を開始した。

童虎「合体呪文・・・一応は使える様になったと言う所だな。」

ピティ「うん、けど合体に成功したのは、初級呪文同士の合体だけなんだよね。」

童虎「あせるな。まだ修行を始めたばかりであろう。ソレよりもピティ、今日は確か聖時たちと一緒に墓参りに行くはずだったので？」

童虎は前日に聖時がユニやゆめみ、それとアキとなぜか一緒に行きたいと言いだしたふたばと共に、聖時の母親、千尋と妹の桃華の墓参りに行くと言っていたのを思い出していた。

ピティ「うん、実を言うと、私は聖時のお母さん、千尋と妹の桃華と会った事がないだよ。」

由香「え？そうなの？」

ピティ「うん、私が使い魔の卵から孵った時にはすでに二人とも死んでいたから、二人のお墓参りって言ってもピンとこないんだよ。」

だから、お墓参りよりも修行をしようと思ったんだ。」

裕也「なるほどね。じゃあ今日はずっと別荘（に）で修行か？」

ピティ「そのつもりだよ。」

裕也「そうか。なら俺達は昨日言った通り、学園に行つて聞き込みをしてくるよ。明日は学校は休みだけど、部活等で着ている奴らも居るからな。」

童虎「ならワシがピティの修行の手伝いをしよう。的になる丸太の運搬はピティ一人では運ぶのには無理であろうからな。」

ピティ「助かるね、ありがとう。」

童虎「うむ。」

裕也「それじゃあ、代わりに来た事だし、俺達は行くな。」

そう言つて裕也と由香は玄関口の少し先に設置してある別送の出入り口の魔法陣へと向かつて行った。

童虎「さて、ではワシは新たな用的丸太を持つてくるか。」

そう言つて童虎は丸太を持ってくるためにその場を後にした。

ピティ「あつ、お願いね。」

そう言つて見送るピティ。

ピティ「さてと、……そう言えば、そろそろアキが聖時達に合流したところかな、そう言えば、アキが誰かを連れてくるって言うてたけど……誰だろう。」

ピティは昨日アキが言っていた事を思い出してつぶやいた。

《つづく》

第56話 修行風景とお墓参り? (前書き)

剣「どうも剣 流星です」。

ピ「どうも、今現在全身に包帯を巻き、ミイラ状態のピティです。」

剣「どうしたんだその姿？」

ピ「いやね・・・山田花太郎先生の作品、「君と響き合おう」の感想蘭でちよつと余計なことを言っ、練成されそうになっ・・・」

剣「あゝ、まあ、深くは聞かないよ。それじゃあ第56話をどうぞ」

第56話 修行風景とお墓参り？

第56話 修行風景とお墓参り？

ここは神谷邸の玄関。

そこで靴を履き、出かける準備をしている聖時が居た。

靴を履き、靴ヒモを結んだ後立ち上がり、家の奥の方に顔を向けて、聖時は奥に居る二人に声をかけた。

聖時「刹那、ゆめみ、準備は出来た？」

そう言った聖時に二人は返事をしながら近づいてきた。

刹那「準備整っています。」

お墓に供える花束を持ちながら刹那が言い。

ゆめみ「こちらもOKです。」

線香等が入ったバツクを持ったゆめみも返事をした。

刹那「聖時さん、ところでユニさんは一緒には行かないんですか？」

聖時「ああ、午後から用事があるから、午前中になのはさん達と一緒に رفتりたい。僕等と一緒に行くふたばが午前中に用事があるから、午後になったから一緒に行けなかったんだ。」

刹那「そうだったんですか。」

聖時「さて、それじゃあ行くところか。」

ゆめみ「あ、そう言えば、今日は“アキ”さんではなく、“晶”あまきさんが来るんですかね？」

聖時「あ、それと、ソノの晶からさっき連絡があつて、もう一人連れて来るって言つてたよ。」

ゆめみ「もう一人？」

刹那「誰か連れてくるんでしょうか？」

聖時「さあ？まっ、行けばわかるでしょ？さあ行くところ。」

そう言つて聖時達は玄関を出て神谷邸を後にした。

*

ふたば「少し早く来すぎたかな？」

待ち合わせの駅前で、自分の腕時計を見ながらふたばは呟いた。

今日は聖時の母親である千尋ちひろと双子の妹の桃華とうかの命日である。聖時は今日、お墓参りをする為、別荘での修行や事件の捜査には参加しないと猛達に言った。そして、そのお墓参りにはアキも付いていく事を言つと、ふたばも付いていくと言つたので、駅で待ち合わせをすると言う事になった。

なぜ待ち合わせが駅になったと言つと、お墓が有る場所と、ふたばの家の場所、そしてアキや聖時の家の場所の丁度中間地点にあつたため、誰かの家で待ち合わせたり、迎えに行くより距離的に都合がいいので、駅での待ち合わせになった。

駅前で時計を見て、待ち合わせの時間より30分も早く来てしまつたふたばは、これからお墓参りをする、聖時の母、千尋と双子の妹の桃華の事について、考えた。

ふたば自身は二人には直接会つた事は無い。ふたばが聖時の事を知つたのは、二人が死んで、聖時が病院に入院していた時である。ふたばは、聖時と出会つたその時の事を、今でもはっきりと覚えている。聖時が懸命に歩くりハビリをしている姿。そして、その姿に勇気付けられ、当時、生きる気力を無くしていたふたばは、生きる気力を取り戻した。

そんな、自分に生きる気力を取り戻させてくれた当事の聖時に、前へ歩き出す為の力を与えてくれた聖時の妹の桃華。もし、聖時があの当事、母親と桃華の死を受け止められずに生きる気力を無くし、歩くりハビリをしなかつたら、ふたばはココにはいなかったであろう。桃華が遺言で、聖時に前へ歩いて行って欲しいと言つてくれたおかげで、聖時は歩く為のリハビリをした。そして、ふたばはそんな聖時を見て勇気付けられ、病気を治す為の大手術を受けたのである。つまり、桃華は聖時とふたば、二人の人物を救つたのである。そんな自分にとって恩人とも言つべき桃華にお礼を言いたくて、ふたばは今回のお墓参りに、自分も付き合つと言つたのである。

そんな事を考えながら聖時達を待っているふたばに、背後からそつと近づくと人影があった。

晶「わっ！」

ふたば「キヤア!!」

突然背後から驚かせられたふたばは、悲鳴を上げて驚きながら、大きな声がした背後を見ながら後ずさりした。

晶「あ……ごめん、まさかそんなに驚くとは思わなかった。」

ティアナ「まったく、何やってるのよ。」

先ほどの大きな声を出した人物、長い黒髪を後ろで縛った男の子が、髪をツインテールにした女の子と一緒にそこに立っていた。

ふたばはその男の子を見て、誰かに似ていると思った。少しその顔をじっと見てフト思った。その顔を自分がほぼ毎日みている顔……。クラスメイトで、今、一番の友達のアキに似ているのだと思った。

ふたば「……アキ？」

晶「あはははっ、アキに似てるけどアキじゃないよ。僕の名前は藤ふじ宮みや晶あきら。アキの双子の兄弟だよ。アキが今日来れないから、僕が今

日代わりに来たんだ。」

ふたば「え？アキの双子の兄弟？アキに双子の兄弟がいるなんて初めて知った……で今日はアキの代わりに？」

晶「うん、アキは用事で来られないから、代わりに僕がね。アキからはよく話を聞いていたから、一度会って見たかったから、ココにいるティアナと一緒に来たんだ。」

晶はそう言いながら隣に居るツインテールの女の子に視線を向けた。

ティアナ「ティアナ・ランスターよ、よろしく。」

晶「ティアナは僕の従兄にあたる、四乃森連矢さんが保護者兼後継人をやっている人で、聖時のお母さん、千尋さんや妹の桃華とは生前会っていて、自分もお墓参りをしておきたいって言うから一緒に来てもらったんだ。」

ふたば「そうなんですか。あ、私、渡良瀬ふたばです。ティアナさんは聖時のお母さんや妹さんとは知り合いだったんですか？」

ティアナ「うん、まあね、私が小さい頃・・・当時、兄さんの相棒をしていた連矢兄さんの誘いでココに来たときお世話になったんだ。桃華とは歳が近かったからよく一緒に遊んだ仲だし、千尋さんはここに居る間は、親身になって面倒を見てもらったんだ。・・・まるで本当のお母さんみたいに・・・私、両親を早く亡くしたから、お母さんってどう言うものなのかわからなかったんだけど、きつとあんなふうな感じだったのかなって・・・」

ふたば「ティアナさん・・・」

ティアナ「あ、そう言えば、聖時達はまだ来てないのかな？」

少し暗くなった雰囲気を目覚めするようにティアナは話題を変えるた

めに、聖時の名前を出した。

ふたば「聖時達ですか？もうすぐ待ち合わせの時間だからそろそろ・・・あつ、来た。聖時！コツチコツチ！」

ふたばは辺りを見回し、遠くの方から刹那とゆめみの二人を一緒に歩いてコツチに来ている聖時を見つけ、手を振りながら声をかけた。

聖時「待ち合わせ時間より少し早めに行くように家を出てきたんだけど、待たせちゃったかな？」

ふたば「ううん、大丈夫そんなに待つてないから、あ、そうそう実はアキなんだけど、用事で来られないみだから、アキの双子の兄弟の晶さんが来てくれたみたいだよ。それにしても、アキも聖時達もなんでアキに双子の兄弟が居る事を教えてくれなかったの？」

聖時「え？双子の兄弟？」

そう言つて聖時は側に居る晶に顔を向けた。

晶「あ・・・はははは・・・」

乾いた笑いをしながらコツチを見る晶。

その晶に聖時は近づき小声で小声で話した。

聖時「（ボソボソ）双子の兄弟つて・・・何？」

晶「（ボソボソ）い・・・いや、本当の事はまだ話したくないから、誤魔化す為にそう言うしかなかったんだ。」

ふたば「?どうしたの聖時?」

聖時「あ、いや、なんでもない、なんでもない。……ん?」

聖時はその時、初めてそこにある人物が居る事に気き、顔を見た。

聖時「……ひょっとしてティアナ?」

ティアナ「やっと気付いた。まったく、いつ気付くのか思ったわよ。」

聖時「ゴメンゴメン、……久し振り、ティアナ。」

そう言つてティアナを見つめ、彼女の両手を握る聖時

ティアナ「う……うん、ひさしぶり／＼／＼／＼」

そう言つて聖時を見つめ、挨拶をしながら、握られた両手を握り返すティアナ。その顔は、心なしか少し赤くなっていた。

連矢「むっ！」

ウィンダム「どうしました？ご主人様？」

連矢「今、ティアナに悪い男が付く予感が……」

レティシア「ムシ？」

連矢「こうしてはい居られない、ティアナに悪い男が付く前に排除しなければ！」

レティシア「ちょっと、どこ行くの?!今日は溜まった書類仕事をやってもらうんだから逃がさないわよ!!」

連矢「放せ！ティアナが！ティアナが!!」

レティシア「仕事しろおおおお!!」

聖時「(ゾクッ!)」

ティアナ「?どうしたの？」

聖時「いや………何か理不尽な事で命を狙われたような気が

して……………」

ティアナ「？」

頭に？マークを浮かべるティアナ。

そんなティアナを見て、先ほどティアナが聖時に手を握られて、顔を赤くしていた事に気付いたふたばは、もしかしたらと思った。

ふたば（ティアナさんだっけ……………この人も、聖時の事が？）

そんな事を思っていたふたばだったが、隣から感じてきた黒い何かを感じ取り、そんな考えが吹っ飛んでしまった。

ゆめみ「……………ティアナさん、いつまで聖時さんと手を握りながら、見つめ合っているんですか？」

互いに手を握り、見つめ合っている形になっていた聖時達に対し、ゆめみは黒い何かかもし出していた。

聖時・ティアナ「ひい！」

ゆめみの出した「黒い何か」に当てられ、短い悲鳴を出しながら後づさるふたり。

ゆめみ「聖時さん……………女性の手を握りながら、瞳を見るクセを直すよう以前言っただけですが？」

そう、ゆめみが言うように、実は聖時には少し困ったクセがある。

それは時々、女性の目を見ながら手を握る癖があるのである。

聖時はたから見れば、男装の令嬢と言っ言葉が当てはまるような顔

立ちをしている。その宝塚の舞台に出ても、何の違和感も無いような人物に、瞳を見つめながら手を握られたら、大抵の女の子はコロツと言ってしまう。事実、聖時自身は知らないが、過去に彼がコレを数回したため、彼に片思いをした人物が居た事をゆめみは知っていた。ちなみに余談ではあるが、春休み中に再会したふたばにも聖時はコレをしたのだが、それは本当に余談である。

聖時「え？あ・・・うん、言ったけど・・・なんで直さなきゃいけないの？」

ソレを聞いた晶とゆめみは呆れた顔をした。

晶「無自覚でやってたのか・・・よけい性質が悪いな。」

そう言った晶を見て、今まで黙っていた刹那が聖時達質問をしてきた。

刹那「あの・・・すみません。此方の方々はどちら様なのでしょうか？」

聖時「ああ、一応初対面だもんな。えくと、コッチが藤宮晶、アキの双子の兄弟。で、コッチがティアナ・ランスター、アキたちの従兄の四乃森連矢さんが保護者兼後景人をしている子で、昔からの知り合いなんだ。」

ティアナ「ティアナ・ランスターよ、よろしく。」

刹那「あ、桜咲刹那です、こちらこそ。」

ティアナが手を差し出してきたので刹那はソノ手を握り握手をした。

そんなティアナを見て、聖時は微笑んだような顔をした。

聖時「よかった、どうやら大丈夫そうだね。」

ティアナ「何？まだ心配していたの？もう大丈夫だって、去年別れる前に言ったでしょう？」

聖時「うん、そうなんだけどね、それでもやっぱり心配しちゃって……」

ティアナ「信用無いな、ま、それも仕方がないか……去年、再会したばかりの時の私を見ていれば……」

ティアナはそう言って少し暗い顔をした。

ふたば「……あの……ティアナさん？」

ティアナ「ティアナで良いわよ。」

ふたば「じゃあティアナ、去年再会したばかりの私って言ってたけど、何か有ったの？」

ティアナ「まあね……歩きながら話すわ。」

聖時「そうだな。」

そう言いながら聖時達は移動を開始した。そして歩きながら、ティアナは去年あった出来事をポツリポツリと話し始めた。

ティアナ「去年……私の兄が死んだの……」

ふたば「え？」

ティアナ「両親は私が小さい頃に亡くなってたから私にとって肉親と言えるのは兄さんだけだった。私はその事で一時期情緒不安定になってね、そんな私を見て、連矢兄さんは一人にしておけないって言って、自分が下宿している海鳴市にある、従弟である晶の家に連れてきたの。」

刹那「連矢さんは晶さんの家に下宿してたんですか。」

聖時「刹那は連矢さんを知ってたの？」

刹那「ええ、海鳴市ココに来る時に会って。」

そう言いながら、刹那は連矢達特務捜査課の面々に会った時の事を思い出していた。

刹那は当初、聖時を護衛する為にこの第97管理外世界に来たのである。そして、ココに来る際、特務捜査課の面々やなのは達に会い、聖時の護衛をするに当たり、いくつかの事を彼等から教えてもらったのであった。

ティアナ「へ〜、連矢兄さんに会った事があるんだ。とにかく、その連矢兄さんに連れられて、ココにきて、その時に聖時達の再会したの。けど……」

聖時「当時、再会したばかりの時のティアナはとてもひどい状態だった。まるで絶望が顔にこびりついている様な顔をしていて、本当にあのティアナなのかと疑ったぐらいだよ。」

ティアナ「ええ、そうね。たしかに当時の私の心の中にある物は絶望しかなかった。そんな絶望していた私に聖時達は、必死になって私を励まし、立ち直らせようとしてくれたの。」

そう言いながら、肩を並べて歩いている聖時と晶をティアナは見た。

晶「そう言えばそうだったね。去年の今頃ぐらいだったかな。僕達と才人はティアナを元気づけようとあれこれやってたね。特に聖時は僕達以上にガンバってたね。」

聖時「まあね、僕自身も母さんや桃華を亡くして、そんなに間が無かったからね・・・気持ちがよく分かるから・・・だから、ティアナには元気になって立ち直ってもらいたかったんだ。」

ティアナ「そう・・・聖時は私の事を思って、毎日毎日、私に会いに来てくれてただけど、その時の私は、自分の事しか考えれなくて、そんな聖時について言っちゃったの・・・「あんたみたいな奴に肉親を亡くした人の気持ちかわかるもんか!!」って・・・ホント、自分の事ながら、そのダメさ加減がイヤになってくるわ。肉親を亡くした辛さは、聖時が一番よく知っているのに・・・。」

聖時「ティアナ・・・。」

ティアナ「聖時、ホント、あの時はごめんね。」

聖時「いって、それに去年別れる時にも謝ってもらったから、これ以上謝まれると、コッチが返って申し訳なくなってくるよ。」

ティアナ「それもそうね。とにかく、そんな聖時達のおかげで、半年で情緒不安定も治って立ち直ったと言うわけ。ホント、聖時には

感謝してる、ありがとうね。」

聖時「別にいいよ。僕自身が好きでやってたんだし。」

ティアナ「聖時／／／／／。」

ふたば・ゆめみ「ムー！」（なんだか面白くない二人）

その頃の特務捜査課

連矢「うおおおおおっ、離せ！ティアナ、ティアナアアアアア！」

ウィングダム「落ち着いてください！！！」

マニゴールド「落ち着け！このシスコン！！！」

レティシア「仕事しろ！！シスコンバカ！！！」

連矢「うおおおおおおっ！！！」

聖時「んんんっ？」

ティアナ「どうしたの？」

聖時「いや、どこかのシスコンが暴走しているような……」

ゆめみ「何ですソレ？」

ティアナ「それよりも、今日は随分と静かだと思ってたけど、あの騒がしいのが居ないからなのね。」

ふたば「騒がしいの？」

聖時「もしかしてピティの事を言っているの？」

ティアナ「そうよ。騒がしいのって言ったらあいつしか居ないですよっ？」

聖時「騒がしいのって……」

聖時は呆れたような顔をした。そんな聖時の横で、ふたばはさつきティアナが言った言葉に驚いていた。

ふたば「え?!ピティを知ってるの?それじゃあティアナもピティの姿が見えるの?!」

ティアナ「ええ、見えるわよ。」

ふたば「じゃあ、聖時からピティの事を説明してもらったんだ。」

聖時「うん、去年ね。そうそう、ティアナ、お墓参りが終わった後なんだけど、時間が有る?話しておきたい事があるんだけど。」

ティアナ「時間だったら有るけど何の話？」

聖時「ちよつと今、僕達がしている事についてね。」

ティアナ「？」

ティアナは頭に？マークを浮かべながら、霊園への道を聖時達と一緒に歩いて行った

《つづく》

第57話 修行風景とお墓参り? (前書き)

どうも剣 流星です。

回線トラブルで、インターネットが繋がらなくて更新が少し遅れて
しまいました。

それでは第57話をどうぞ。

第57話 修行風景とお墓参り？

第57話 修行風景とお墓参り？

海鳴市郊外にある霊園、そこに聖時の母、神谷千尋と妹、桃華の墓がある。

聖時達はその霊園に入り、二人が入っている神谷家のお墓へと向かった。

並んだ多くのお墓の横を抜けて歩くと、やがて正面に神谷家のお墓が見えてきた。そのお墓には、先に来た者達が供えていった花やお供え物が添えられていた。

聖時「コレは……」

ゆめみ「おそらく、先に来たなのはさん達がお供えしたものだと思います。」

聖時「こんなにたくさんのお花を……母さん達、さぞ喜んでるだろうね……」

ゆめみ「ええ……さあ、私たちも。」

聖時「そうだね。」

そう言っつて聖時達は、持ってきた清掃用具でお墓を掃除し、持ってきた華を生けた。

そして、一人一人が火のついた線香を持つと、まず最初に聖時がお墓に、持っている線香を供え、手を合わせてから語りかけるように話し始めた。

聖時「母さん、桃華・・・今年も来たよ。今回は、ある理由で、桃華の大好きな才人を連れてこられなかったけど、その代わりて言うわけじゃないけど、刹那とティアナが今回は来てくれたよ。」

そうやって聖時は後ろに居る二人にお墓前の場所を空けた、刹那がそこに移動して、線香を才お供えすると、しゃがみんで手を合わせた。

刹那「お二人共、お久し振りです。今まで来れなくてすみません。本来なら、お嬢様・・・このちゃんと一緒に来れるのが一番でしたんですけど、今回は一緒に来る事が出来ませんでした。」

そうやって少しすまなそうな顔をする刹那。先ほど刹那が言うように、本来なら同じ時期に桃華達と出会い、会う時も、いつも木乃香と二人で会っていたので、ココに来るのも本来は二人一緒なのが自然なのであるが、今は木乃香を連れて来る事が出来ないのである。理由は幾つか有るが、刹那が木乃香を連れて来れない一番の理由は、木乃香と距離を作ってしまったのが一番の理由だと刹那は思っていた。

第97管理世界に来た当初はそれでいいと思っていた刹那だったが、聖時にそれではダメだと悟された。だから刹那は向こうに帰ったら木乃香との間にある距離を縮めて、以前のような間柄になろうと思っていた。なので、ココに連れて来られない最大の理由が刹那的には無くなった。後、幾つかの問題が有るが、最大の理由に比べれば、何とかなるレベルだと刹那は思った。

刹那「今回は私だけでしたけど、次に来る時は、必ずこのちゃんと一緒に来ますから、楽しみにまっついていてください。」

そう言つて刹那は次のティアアナに代わつた。

線香をお供えし、しゃがんで手を合わせるティアアナは、次に話すようにお墓に語りかけ始めた。

ティアアナ「千尋おばさん、桃香、久しぶりです。まずは去年これなくてごめんなさい。これなかった理由は……そつちに兄さんが行つてるから、大体は察しが付いてると思います。だからきつと私に親身になってくれた二人は、きつと一人になつてしまった私を心配してると思います。けど大丈夫です。二人の自慢の息子であり、兄でもある聖時が、私を励ましてくれたからもう大丈夫です。聖時がくれた「前へ進む為の勇氣と希望」が私を支えてくれるから、もう立ち止まつて前へ進むとうとしないと言う事は無いと思うから、どうかそつちで、兄さんと一緒に見守つていてください。」

ティアアナはそう言つて手を合わせたまま目を瞑り祈ると、その場を次の人に譲つた。

その後、晶、ゆめみと順番が回り、最後にふたばの番となつた。線香をお供えし、手を合わせて目を瞑つたあと、目を開き、今までの人たちを同じように墓石に語りかける様に話し始めた。

ふたば「始めまして、渡良瀬ふたばと言います。聖時とはクラスメイトで、あとその……パ・・バクティオー仮契約をした中です。／／／／／

ティアアナ「？バクティオー仮契約？……て何？」

聖時「あの……あんまり深くは聞かないで／／／／／」

ティアナ「？」

ふたば「まず・・・お二人に言っただけで置きたいことがあります。「ありがとう」、「お二人が聖時にくれた「前へ歩き出すための勇気」のおかげで、聖時は前へ歩き出すことができ、その勇気のおかげで今、私はココにこうして居られます。もし、この勇気がなければ、私は病気に負けてきつと死んでいたと思います。つまり、お二人は聖時を通して私を助けてくれたんです。ですからありがとうございます。これから聖時と一緒に、このもらった勇気で生きていきたいです。」

そう言っただけで言葉を締めくくったふたばは、再び目を瞑り後、立ち上がった。

ふたば「終わったよ、聖時。」

聖時「もう良いの？」

ふたば「うん。」

聖時「じゃあ行くところか・・・母さん桃華、また来るね。」

そう言っただけで聖時達はお墓にお辞儀をしてその場を後にした。

晶「さて、この後どうするの聖時？」

聖時「ティアナ、この後、時間有るんでしょう？だったら神谷邸（かみやてい）に来てくれない？」

ティアナ「あ、さっき話したいことが有るって言ってたわね。その

事を神谷邸で？」

聖時「うん、そう。けどその前に行きたい所があるんだ。」

ティアナ「行きたい所？」

聖時「うん、冬木にある輸入雑貨店。士郎が前に教えてくれた所で、そこで取り扱っているオリーブオイルがとても良い物らしいんだ。だから今夜の晩御飯を作るのに使いたいから、買いに行こうと思つて。だからティアナ達は先に神谷邸かみやぢに行つていて。」

ティアナ「解つたわ。」

そう言つてみんなとは違う方向に向かう聖時。

その聖時にふたばは声をかけた。

ふたば「ねえ聖時、その買い物、私も一緒に行つても良い？」

聖時「え？別に良いけど、なんで？」

ふたば「あ、え〜と、ほら、お料理の上手な聖時が普段どういふ所で材料を買っているのかと思つて・・・つまりお料理研究のためだね！（聖時と二人つきりになるチャンス！サキちゃんも積極的に行動を起こして行けつて言つてたしね。）」

聖時「まあ別にいいけど、じゃあゆめみはティアナ達と一緒に「私も一緒にいきます！」ってゆめみ？」

ゆめみ「この聖時さんと二人つきりにすると、この「まな板」は何するか解りませんから一緒に行きます。」

*

夕方の冬木市、その商店街。

その付近に、たった今買い物を終えた聖時達がいた。

その聖時達に夕飯の買い物に出かけている人々の視線が集まっていた。

なぜ聖時達に視線が集まっているかと言うと、今の聖時の状態がとても目立つ状態になっているからである。

今の聖時は両手に店で買った荷物を持ちながら、右腕にふたばが、左腕にティアナがそれぞれ腕に組み付いている状態で、後ろからはゆめみが抱きつくようなカツコウで抱き付かれている状態で歩いているのだから、イヤでも目立ってしまうのである。

聖時「……………ねえ、三人共……………歩きづらいから、離れてくれないかな？」

ふたば「あ、そうなんだ？聖時が歩きずらいんですって、だからいい加減離れたらどうですゆめみさん？」

ゆめみ「あら、だったらお二人が離れたらどうです？腕をつかまわっていたら、荷物が持ちずらくなり邪魔になるち聖時さんは思ってますよ？」

ふたば「後ろから抱き付いているゆめみさんの方がよっぽど邪魔ですよー！」

ゆめみ「腕に組み付く方がよっぽど邪魔です！大体、なんでティアナまで聖時さんにくっ付いているんですか！？」

ティアナ「こ……これは……その……////そ、そう！迷子にならないようにするためにくっ付いているの！」

顔を赤くしながら言うティアナ。なぜティアナがこのような行動を取るのかと言うと、実は第97管理外世界このせかいに来たばかりの時にあった連矢の同僚の一人にたきつかれたからなのである。ちなみにそのティアナをたきつけた本人、特務捜査課のレティシアは、椅子に縛られた状態で、「うううっ、ティアナ〜」と言いながら書類仕事をしている連矢を面白そうに見ながらお茶をすすっていた。

そんなふたば達のやり取りを、並んで歩きながら刹那と晶が見ていた。

刹那「い、一緒に歩いているコツチまで恥ずかしくなってきましたね。」

刹那は晶にそう言って話を振ったが、いつまで経っても晶からの返事をせず、晶は聖時と腕を組んでいるふたばを、辛そうな顔ですつと見ていた。

刹那「晶さん？」

晶「……………」

刹那「晶さん！」

晶「え？何？」

刹那「どうしたんです？」

晶「いや……別に…………ん？」

そうやって誤魔化すように視線を背けた晶の視界に、一人の女の子が目に入ってきた。

その子はすぐそこに有る児童公園に居り、歳は明日香と同じぐらい。紫色の長い髪の子で、なぜか顔色が悪く、フラフラしていた。

晶は気になり、足を止めてその子を見た。

そして、足を止めた晶に気付き、聖時達も足を止め、晶に声をかけた。

聖時「晶、どうしたの？」

晶「いや……あの子……………」

そう言った晶のしている先を聖時達も見て、その子の存在に気付い

た。

聖時「？あの子・・・なんかフラフラしてないか？」

ふたば「なんか・・・顔色も悪そうですね・・・」

全員が心配そうにその子を見てみると、次の瞬間・・・

ドサッ！

その子は聖時達の前で倒れてしまった。

ふたば「あっ！」

聖時「まずい！」

ソレを見ていた聖時達はその子の元に駆け寄って行った。

《つづく》

第58話 修行風景とお墓参り？（前書き）

どうも剣 流星です。

今年は花粉の量が多くて例年より多く、医者からもらった薬でも症状を緩和しきれなくて、涙と鼻水が止まりません。うつつっ・・・

そ、それでは第58をどうぞ。

第58話 修行風景とお墓参り？

第58話 修行風景とお墓参り？

聖時「キミ！」

倒れた女の子に駆け寄り、抱き起こす聖時。

その聖時の周りには、心配そうにして女の子を除き見るふたば、ゆめみ、晶、刹那、ティアナが居た。

聖時「しっかり！しっかりして！！」

聖時が抱き起こした女の子の顔は他の人が見ても解るぐらい青い顔をしており、大量の脂汗を出していた。

聖時「どうしよう……」

ふたば「と、とりあえず救急車を……」

そうやってふたばは自分の携帯で救急車を呼ぼうとした。

その時、聖時が抱き起こしている女の子が苦しそうにしながら喋り始めた。

女の子「まっ……て、救急車は……呼ばないで……」

「

聖時「え？救急車を……」

ふたば「……呼ばないで？」

聖時「な……何言ってるんだ！こんなに顔色悪くしている人が！」

女の子「お医者……さん……じゃあ……治せない……よ……」

晶「医者じゃ……治せない？」

回りで見ていた晶が女の子の言った言葉を聞き返した。

聖時「それってどう言う……」

ソレを聞き、疑問を投げ返す聖時に、脇で見ていたゆめみが声をかけた。

ゆめみ「……確かに、普通のお医者さまでは治せませんね。」

聖時「え？どう言う事？」

ゆめみ「先ほどこの子の体をスキャンしました。この子の体は毒性のある魔力のような物を注がれた為に、中毒症状に近い症状を出しています。」

聖時「毒性のある魔力による中毒症状？」

ティアナ「ちょ、ちょっとゆめみさん！！一般^{せいじ}人の前で何魔法関係

の事を話しているんですか!？」

ティアナがゆめみが聖時の前で魔力と言う魔法関係の話を出した事に驚き、声を上げた。

ティアナは聖時が使い魔のピティを持っているが、それ以外では魔法関係にまつたく関わらない関わらない一般人だと思っていたので声をあげた。

晶「ティアナ、聖時はね、もう魔法の存在について知っているんだ。

」

ティアナ「え?! い・・・いつの間に・・・一体いつ知ったの?

」!

ティアナは聖時に、魔法マジックについていつ知ったのかを聖時に問いたただした。

聖時「ごめん! 後で話す! それより今はこの子を!」

そう言っつて聖時は抱き起こした少女を見た。

女の子「う・・・うううううう!」

先ほどよりもさらに苦しそうにする女の子。

刹那「先ほどゆめみさんは、この子の体は毒性のある魔力による中毒症状を引き起こしていると言いました。ならその毒を解毒魔法等で取り除けば直るのでは?」

聖時の周りで見ていた刹那が女の子の見てそう言った。

聖時「そ、そうか！そうすればこの子は治る！……けど僕は解毒魔法は使えない……」

そう言つて聖時は刹那を見た。

刹那「すいません、私も使えません……ティアナさんは？」

ティアナ「わ……私は回復系の魔法は使えなくて……」

少し申し訳なさそうな顔をする二人。

そんな二人を置いて、ふたばが声をあげた。

ふたば「わ……私、^{キアリー}解毒魔法なら使えるよ。」

聖時「?!本当!?!」

ふたば「うん!」

聖時「なら頼む!!!」

刹那「まってください!まずその前に!」

刹那はそう言つと、札を取り出して公園の四隅に走り札を貼つた。

刹那「人避けの結界を張りました。これで魔法を使つても人に見られませんか。さあふたばさん、解毒を。」

ふたば「うん!……かの者を蝕む毒を取り除かん……^{キアリー}解毒魔法!!!」

ふたばは解毒魔法を使い、女の子の解毒を開始した。

聖時「……………」

ゆめみ「……………」

晶「……………」

ティアナ「……………」

キアリー「解毒魔法を使うふたばを聖時達。だか、いくら解毒魔法をかけても女の子の症状は一向によくはならなかった。」

ふたば「ど……………どうして良くならないの？」

キアリー「聖時「解毒魔法じゃあ効かないくらいの猛毒なの？それとも診断そのものが違ったのか？」」

ゆめみ「そ……………それはありえませんが！確かにこの子は毒性のある魔力による中毒症状を出してます！」

聖時「ならなんで……………」

そう聖時が言おうとしたとき、何者かが聖時達に声を掛けた。

「……………その子は確かに毒性のある魔力に体を蝕まれている、けどその毒はただの毒じゃないんだ。」

聖時達「……………?!」「……………」

いきなり声をかけられた聖時達は、一斉に声がした方向を見た。その方向……結界が張られてある公園の入り口にサングラスを掛け、黒いコートを着た優男風の男が居た。

男「その子の中にある毒は、正確言えば「毒性のある呪い」のような物だ。だから解毒魔法だけじゃ回復しないんだ。」

刹那「だ……誰です！ココには私が張った結界があつたはず。どうしてココに入つてこれるんです！？目的はなんですか！」

刹那は夕凧を構えながら、聖時と男の間に入った。

男「いや、目的つて言つても……結界が張つてあるから様子を見に来んだ。あの程度の結界ならすり抜けて入れるからね。」

刹那「……魔術師……ですか？」

刹那は第97管理外世界このせかいの魔法使いに当たる魔術師の名前を出した。

男「まあね。それよりもその子だ、その子を治すには強力な解毒魔法と呪解除魔法を同時にかけないと治らないよ。」

男はそう言つて女の子を見ながら言った。

聖時「強力な解毒魔法と呪解除魔法を同時にかける？」

ふたば「それで治るんですか？……でも私は呪解除魔法シヤナクを覚えていない……」

聖時「刹那、……は？」

聖時は刹那の顔を見ながら、呪解除魔法を使えないかと聞くが、刹那は首を横に振った。

ふたば「そんな……どうしよう……」

落胆した顔をするふたば。その時ふたばのスカートのポケットから突然光が発せられ始めた。

聖時「?!ふたばその光りは？」

ふたば「え?……これは?!」

ふたばは光っている物の元となるものをポケットから取り出しソレを見た。

ゆめみ「こ……これは、この前、聖時さんとふたばさんが仮契約して作ったパクティオーカード！」

ふたばが取り出したソレは、中央に勝利の女神の杖と盾を持ったふたばが描かれたカードパクティオーカードだった。

ふたば「なんでいきなり光り初めたんだろう……まるで今自分を使えって言っているみたい……」

男「……案外そう言ってるんじゃないかな？」

男の声でカードに視線が集中していた聖時たちは一斉に男の方を見た。

男「そのカード・・・かなり強力な力を秘めているね。ソレを使えば、この子を治す事が出来るかもしれないね。」

そう言いながら男はサングラスを取りながら聖時達に近づいてきた。

刹那「な！・・・ち・・・近づくな！」

刹那はそう言いながら夕凧を構えた。

男「大丈夫、危害を加えるつもりはない。ソレよりもその君。」

ふたば「へ？！わ・・・私ですか？！」

男「ソレを使って早くその子を。ソレならその子を蝕むソレを浄化する事が出来るかもしれない。だからはやく！」

ふたば「あ、はい！来たれ！！アテアット」

ふたばがパクティオーカードを発動させて自分のアーティファクトの勝利の女神ニケの杖じゅうを出し、それを手に持った。

ふたば「・・・じゃあ・・・いきます！」

そう言つて杖を女の子に掲げると、杖に意識を集中させるふたば。すると杖から暖かい、黄金の光がゆっくりと発せられ、その光が女の子を包んでいく。

その時、杖を使っていたふたばの背に、白い光でできた翼のようなものが生えているのをふたば達から少し離れた場所から見ている男がそのことに気付く。

男（あの翼は……まさか天使族の？）

そう男は思ったが、今は倒れている女の子の方に意識を向けるべきだと思い、視線をそちらに向けた。

ティアナ「何……この光り……とても暖かい。」

晶「慈愛に満ちた暖かい光だね。」

聖時「うん。」

杖から発せられる光を見て、それぞれが感想を言った。

光りに包まれた女の子は見る見る顔色がよくなっていた。

やがて光が止むと、女の子の顔色はすっかりよくなっていた。

ゆめみ「脈拍等共に安定しています。もう大丈夫です。」

聖時「良かった。」

ふたば「ふう、上手く行ってよかった……あ！ありがとうございます。」

ふたばは男の方を見て、アドバイスをしてくれた事についてのお礼を言った。

男「なに、ちょっとした助言をただけだよ。それじゃあ。」

そう言って男はサングラスを掛けながら公園の出口へと向かった。

ふたば「あの！」

男「うん？」

ふたば「もし……よければお名前を教えてくださいませんか？」

男「名前？」

ふたば「はい。」

男「……ストラウス……ローズレット・ストラウスだ。」

ふたば「ストラウス……」

男「……ローズレット・ストラウスはそう言ってその場を後にした。」

《つづく》

第59話 修行風景とお墓参り? (前書き)

どうも剣 流星です。

いや、第2次スーパーロボット大戦Zが面白すぎて、危うく作品を書くの忘れそうになりました。

第2次スパロボZ・・・面白すぎる!

まっ、そんなこんなで第59話をどうぞ

第59話 修行風景とお墓参り？

第59話 修行風景とお墓参り？

助言をしてくれたローズレッド・ストラウスの背中を見送る聖時達。

聖時「助かったね、アドバイスをしてもらって」

ふたば「うん。私たちだけだったらどうなってたか・・・」

聖時「そうだね・・・ん？刹那？どうしたの？」

聖時はローズレッド・ストラウスの背中を冷や汗を流しながら見送っていた刹那に声をかけた。

刹那「あ・・・あの人・・・私が今まで会ったどの人物よりも強い・・・」

聖時「え？」

刹那「あの時・・・あの男に剣を向けた私は、正直言っただけ動く事が出来ませんでした・・・どの様に飛び掛っても、自分が殺されるビジョンしか思い浮かびませんでした。あそこまで力の差が開いている人物とは初めて会いました・・・」

ティアナ「そ・・・そんなに凄い人だったの？！私は人が良さそうだなにしか見えなかったけど・・・」

聖時「刹那にそこまで言わせるなんて……あの人、本当に何者なのかな？」

聖時は自分が思っている疑問を口にして言った。と、その時、痛みと苦しみで気絶した女の子が目を覚ました。

女の子「う……ん」

聖時「あ、気がついた？」

女の子「あれ？私……」

聖時「立てる？」

女の子「あ……はい。」

そう言つて聖時は抱きかかえていた女の子を立たせた。立った女の子は回りを見て、自分の状況を理解し、次に先ほどまで自分の体を縛っていた激痛がなくなっている事に気付いた。

女の子「……？体が……」

そう言つて女の子は先ほどのことを思い出した。自分が激痛で倒れた時、自分を抱き起こしてくれた人と、暖かい光を放つて自分を助けてくれた人の事を思い出した。

女の子「あなた達が？」

ふたば「ええ、倒れていたあなたを助ける為に、私のアーティファ

クトであなたを癒したの。」

女の子「じゃあ・・・あの暖かい光は？」

ふたば「うん、私が出した物だよ。私のアーティファクトであなたの体に入っていた毒の呪いのような物を浄化したの。」

女の子「浄化した？」

女の子はそう言った次の瞬間、自分の体の変化に気付いた。自分の体には、幼い頃から祖父に入れられた刻印虫が巣食っていたはずなのだが、ソレが今は体の中からすっかり無くなっていった。女の子はその事に気付き話しかけてきたふたばに話しかけた。

女の子「あ・・・コレをあなたが？あなた達は魔術師なの？」

ふたば「うん、まあ似たようなものかな。ソレよりも聞きたいんだけど、あなたの体に巣食って居たアレは何ナノか聞いていい？アレを浄化する際、アレがどんな物なのかある程度解ったけど・・・どうしてあんな物があなたみたいな女の子の体に入れられているの？！あんな物を年端もいかない女の子の体に入れるなんて正気じゃない！！！」

ふたばは女の子の体に入れられている刻印虫をこの子の体に入れた人物に対して憤りを感じていた。

聖時「どうしたんだふたば？そんな風に怒るなんて・・・この子の体に入れられていたアレがどんな物なのか解るのか？」

ふたば「う・・・うん・・・浄化した時、勝利ニケの女神の杖を通して

「コレがどんな物なのかが少し解ったんだけど、コレはね……………」

「そう言っつてふたばはコレについて聖時達に話した。」

聖時「な?! そんな物をこんな女の子の体の中に植えつけるなんて!!!」

晶「何て事を……………」

ティアナ「しょ…………正気じゃないわ……………」

刹那「狂ってますね……………」

ゆめみ「ソレが本当なら、あなた、今までずっと辛かったでしょうね…………あ、え〜とそう言えば名前を聞いてませんでしたね、わたしはゆめみといます。」

聖時「神谷聖時。」

ふたば「渡良瀬ふたばよ。」

刹那「桜咲刹那です。」

ティアナ「ティアナ・ランスターよ。」

晶「藤宮晶だよ。」

女の子「あ……………間桐桜です……………」

ゆめみ「間桐？……もしかして間桐雁夜さんの？」

女の子「え？……叔父さんを知ってるの」

ゆめみ「ええ。」

聖時「ゆめみ、その間桐雁夜ってだれ？」

ゆめみ「間桐雁夜さんはあなたのお父様……神谷聖さんが介入した第4次聖杯戦争に参戦した魔術師の一人です。」

ティアナ「聖杯戦争？何それ？」

聖時「……僕も父さんの日記に書いてある事しか知らないけれど……」

そう言うて聖時は父が行方不明になったキツカケである聖杯戦争について話した。

ティアナ「……なるほどねそんな事がこの町で起きていたんだ。」

ゆめみ「はい、聖さんはこの聖杯戦争で現れる聖杯の危険性を誰よりも早くに気付き、ソレを世に出さない為に、聖杯戦争に介入したのです。その時に参戦した魔術師の一人が間桐雁夜さんだったんです。」

刹那「聖さんはそんな事をしてたんですか……」

ゆめみ「ええ、聖さんはその時に間桐雁夜さんと出会い、彼が聖杯

戦争に参戦する理由を聞いたのです。その理由が、かつての思い人の娘であるさくらさんのためだと言っていました。・・・あなただつたんですね。」

さくら「・・・・・・・・・・」

ゆめみ「聖さんは間桐雁夜さんの願いを知り、彼の願いを適えてあげたいと思い、聖杯戦争の介入に対して手助けをしていた私にそのさくらさんの事について調べ、可能なら助けてあげる様に言いました。しかし・・・その命を私に出した後、聖さんは行方不明になり、当時の私の能力ではさくらさんの事を調べることが出来なく、さらにその後、千尋さんや桃華さんが亡くなったりと色々有り、今までロクに調べる事が出来なかつたんです。」

聖時「そうだったんだ。父さんがそんな事を言ってたんだ。」

ゆめみ「はい、今思えば、間桐雁夜さんがさくらさんを間桐の魔術師の道から解放する事を願ったのも、今のさくらさんの状態を見れば納得します。・・・さくらさん、間桐雁夜さんと聖さんの願いの為にも、わたしはあなたを救いたい。」

さくら「え?」

聖時「僕もさくらちゃんを救いたい。父さんの願いの事も有るけど、僕自身も君を救いたいと思っている。」

ふたば「私も・・・さくらちゃんを助けない。」

さくら「・・・・・・・・どうして今日知り合っただばかりの私なんかを・・・」

ふたば「今のさくらちゃん目はね・・・昔の私の目に少し似てるんだ。小さい頃から病気の為、痛みを伴なう治療を長年に渡って受けて、生きる事を諦めた・・・聖時と会おう前のあの時の私に・・・だからそんなさくらちゃんを放って置くことなんて出来ないよ。」

さくら「・・・・・・・・・・」

さくらは自分に救いの手を差し伸べようとしている目の前の人達について考えた。

出来ればこの差し伸ばされた手を掴みたいとさくらはそう思った。先ほど自分を救ってくれた暖かい光を放つふたばと、自分が苦しんでいる時に、最後まで自分を抱きとめて、手を握ってくれた聖時、この二人が悪い人ではないと、むしろ、暖かく、とても優しい人だと言う事がわかった。わかってしまったから、さくらにはこの人達の手を握る事だ出来ないと思ってしまった。

自分に刻印虫を入れた祖父がさくらを自分から遠ざけようとする者がいると知れば、黙ってはいないだろう。祖父の危険性はさくら自身がよく知っている。

こんなやさしい人たちを巻き込むわけにはいかない！そうさくらはそう思っ差し出された手を拒絶することにした。

さくら「・・・・・・・・気持ちは嬉しいですけど・・・あなた達を巻き込むわけにはいきません・・・・・・・・もし、そんな事をすれば、祖父がだまっては居ません。下手をすれば殺されてしまいます。だから・・・」

そう言ってさくらは押し黙ってしまった。

ふたば「・・・さくらちゃん、手を差し出した人も、差し出された人も、その手を取るには勇気が居るよね？ 私たちは半端な気持ちでさくらちゃんに手を差し出しては居ないよ？ 大丈夫！！ 私達はそんな簡単にやられたりしないよ？」

聖時「そうそう、僕達それなりに強いし、事情を話せば先生も力を貸してくれる。僕達の先生はとても強いんだよ？ それに・・・いざとなれば、来迎寺の叔父さんに協力を頼むしね。・・・他人任せな所があるから、ちょっとかつこ悪いけど。」

晶「叔父さんに？ 叔父さんって・・・もしかしてエルネストさんの事？ 協力を頼むのはいいけど、そうなると僕等が魔法の事柄に首を突っ込んでいる事がわかつちゃうよ？」

聖時「確かにそうだけど、さくらちゃん為なら仕方がないよ・・・」

晶「仕方がないって・・・それじゃあ才人はどうなるの？！ 才人を意識不明にした犯人を捕まえて、その原因を取り除くんでしょう？ もし魔法に関係している事をエルネストさんが知ったら、絶対になのはさんやユニさんにも知らせるよ！ そしたらなのはさん達は絶対に聖時達を魔法から遠ざけようとするよ！」

ゆめみ「大丈夫ですよ。さくらさんを発見したのは私と刹那さん、ティアナさんの三人だと言えば何とか誤魔化せます。私たち三人なら魔法の事を知っていても不思議ではないですし、間桐雁夜さんの事を出せば、私たちがさくらさんを救う理由にもなります。」

聖時「そうか、ならその方向で、叔父さんにも手伝ってもらおう。天下の来迎寺グループが付いているなら心強いしね。」

ふたば「なら後は、さくらちゃんが手を握ってくれれば大丈夫ですね。」

そう言っつてふたばはさくらに手を差し伸べた。

ふたば「さくらちゃん、もう一度言っつね。私たちはあなたを助けたい。だから、私たちが信じて、勇気を出して手を握り返してください。勇気を持って、前へ一緒に踏み出そう？」

そう言っつてふたばはさくらに笑顔を向けた。

さくら「・・・あ・・・」

笑顔を向けられた時、さくらの目から一時の涙が頬に伝わって落ちた。

この優しい、素晴らしい笑顔を向けてくれる人が差し伸ばしてくれた手を自分は取っつても良いのかな？自分は救われても良いのかな？と思っつ、そして・・・

さくら「お・・・お願い・・・私を・・・助けて・・・」

差しの伸ばされてその手をさくらは、両手で取っつた。

聖時「・・・必ず助けよう。さくらちゃんも、そして・・・」

晶「意識不明になっつている才人もね。」

聖時「ああ。」

そう言つて聖時は決意を新たにした。

《つづく》

シヤマルの翠屋奮闘記？

聖時「……なんで僕は翠屋「コ」の前に居るんだろつ。そんなにあの破壊的なあの料理を食べたいんだろつか？」

ピティ「なにぶつくさ言つてるの？店長の士郎に言われて、シヤマルの料理が他のお客に回らないようにする為にココに来るように言われてたんでしょつ？」

聖時「そ……そうなんだけどね……」

ピティ「……………」

聖時「う~~~~つよし！やっぱり帰ろつ！」

ピティ「ちょ、ちょっと待って！シヤマルを野放しにするつもり？」

聖時「離せ！ピティ！最近、みんな、僕を劇物処理装置か何かと勘違いしてないか！？ただでさえ、最近シヤマルさん並の破壊的料理の腕の持主である芹の料理も処分してるんだ！ここでシヤマルさんの料理の処分までしたら、命がいくつあつても足りないよ！！」

ピティ「そんな事言つたつて、他の人がシヤマルの食事を食べたら、一口であの世行きになつちゃうよ！！最近さらに破壊力が増してる

んだから!！」

聖時「そんなの知るか!! シヤマルさんに見つかる前にココを離れて! あら? 聖時くん?」って……シヤマルさん?」

シヤマル「あ、ちょうど良かった」

聖時「へ? ちょ、ちょうど良かったって?」

シヤマル「実はさつき、ドリンクサーバーに間違えて麺つゆを入れちゃって……」

聖時「麺つゆって……なんで喫茶店の厨房に麺つゆが有るの?」

シヤマル「なんでも、お昼のランチを作るのに使おうと用意してたんだけど、私が間違えて入れちゃって。土郎さん、「こんな時に、聖時くんが居てくれたなら……」って言ってたから……」

聖時「……あんたの所の店長は僕に何をさせようとしてるんだ?」

シヤマル「とにかく、店に寄って行ってよ。」

聖時「ちょ! 手を引つ張らないで! 飲まないぞ! 飲まないぞ!! 麺つゆなんて飲まないぞ!!!」

ピティ「逝ってらっしや~~~~い」

*

聖時「……よく考えたら、ただの麵つゆなんだから、飲んでも害が無いんだよな。」

シヤマル「聖時くん、何飲む？」

聖時「麵つゆじゃなければなんでもいいですよ。」

シヤマル「解った。じゃあ「抹茶コーラ・オレンジモドキ」ね」

聖時「な……何ですか?! その物騒な名前の飲み物は!!」

シヤマル「じゃあ待っててね、今持ってくるから。」

聖時「しかも人の話を聞いてない?!」

そう言つて厨房に消えるシヤマル。そして厨房から漂ってくる得体に知れない臭いが漂ってくる。そして……満面の笑顔を浮かべたシヤマルがトレイに飲み物と丼を持って来た。

シヤマル「はい、お待たせ。抹茶コーラ・オレンジモドキとランチの残り物で作ったシーフードリゾットよ。」

聖時「……あの、なんで注文していない品物が出てきてるんですか？しかもリゾットなのにどうして丼に入ってるの？いやそれ以前に……今日のランチって何だったの？」

シャマル「チキンバスケットだけど？」

聖時「……どこに魚介類が介在する余地があったんですか、どこに!？」

シャマル「？なにが？」

シャマルがドンとテーブルに置いた丼には海鮮ご飯がテニコ盛りになっていた。

聖時（ランチのチキンバスケットの余り物で作ったって言ってたな……どう言うチキンバスケットだったらこういう余り物が発生するんだろう……想像できない……）

聖時「シャマルさん……あなた絶対に鶏とマグロの区別が付いてないでしょう……」

シャマル「そんなの見間違える分けないでしょう？ソレよりも、残さずに食べてね」

そう言いながら、シャマルは問答無用で異臭がする物体Xをずいと聖時の方へと押す。

聖時「リゾットと言うより、海鮮焼き飯を無理矢理丼に詰め込んだって感じた……」

おそろおそろ口にソレを運ぶ聖時。

聖時「……………」

シヤマル「どう？味薄かったかな？」

聖時「……………ねえ、チキンバスケットでもしかしてすぐくレモンが余らなかった？」

シヤマル「うん、余ったからすり下ろして卵でとじてみたけど？」

聖時「やっぱりこれ全部レモンの酸味がこれはっ!？」

聖時（こ……これは強力すぎる……一撃で胃が痙攣けいれんを起こしそ
うだ……………）

シヤマル「足りなかったら、まだあるよレモン」

聖時「それだけはいらんっ!!!」

早く食わないと、間違いなく追加されると聖時思い、死ぬ思いで井を平らげ、抹茶コーラ・オレンジモドキを胃袋に流した……………え？抹茶コーラ・オレンジモドキの味？……………言わなくても解るでしょう……………。

第60話 さくらとティアナ？（前書き）

どうも剣 流星です。

更新遅れてすいません。

実はゴールデンウィーク中、東北に居る

震災にあった親戚の家に行って手伝いをしていました。

昔行って遊んだ街が、津波で根こそぎなくなっているのには

さすがに堪えました。

では第60話をどうぞ。

第60話 さくらとティアナ？

第60話 さくらとティアナ？

暗い闇が支配し、その闇の中に何かがつごめく空間……
ここは間桐の家の地下室。そこに間桐蔵硯は居た。

蔵硯「……………杵馬か？首尾の方は？」

杵馬「ああ、うまくいったぜ、あんたの所のさくらちゃんは、無事に奴等に接触できたぜ。」

蔵硯「そうか、しかし……事がうまく運べば、本当に真の紋章が手に入るのか？あやつらは、ワシが数年かけてさくらに埋め込んだ刻印虫を一瞬でその殆んどを浄化してしまったのだぞ？」

杵馬「大丈夫だって、あいつ等のようなお人よしには、この手の策が結構効くんだよ。それに刻印虫もすべてが浄化されたわけじゃないんだろう？」

蔵硯「……………確かに今回の件で使う刻印虫はかるうじて無事だが……」

杵馬「なら黙って見てなよ、この俺が、最高の演出で最高の舞台にしてやるよ！！誰もかれもがぐるぐるぐるると踊る舞台になっ！
！はあっははははははははあー！！」

蔵硯「……………」

うす暗い地下室に杳馬の音が響き、蔵硯はその声を黙って聞いていた。

*

所変わってここは警視庁内にある特務捜査課。

連矢「ウイングダム、次の書類を・・・」

ウイングダム「ハッ、次はココ最近の魁音寺についての報告書のまとめです。」

そう言つて連矢の鳥型使い魔のウイングダムが嘴で器用に書類の紙を連矢の前に移動させ、ソレを物凄い速さで処理していく。そんな感じで、先ほどからバリバリと書類を捌く連矢を書類仕事をやりながらダムピールの少女レティシアと瞬きの紋章の使い手であるビツキーが見ていた。

レティシア「・・・こうやってバリバリと仕事をこなしてる姿を

見ると、とてもじゃないけど、さっきまで義理の妹の事で騒ぎまくってた奴と同じ人物とは思えないね。」

ビッキー「そうですね。しかし、ああやって黙って仕事してるだけなら、仕事ができるキャリアって感じなんですけどね、アスミタさん?」

そうやってビッキーは近くで自分と同じように書類仕事をしているアスミタ達に話を降った。

アスミタ「……………」

ビッキー「アスミタさん?」

アスミタ「……………ん?」

ビッキー「どうしたんですか?」

ビッキーは仕事の手が止めて考え事をしているように見えるアスミタにどうしたのかと問いかけた。

アスミタ「いや、課長ホスのお客が連れていたあの少女の事が気になつてな……………」

アスミタは先ほど自分達特務捜査課の課長ホスである東郷大地の友人であるエルネストと協力者であるユニが連れて来た中学生くらいの男の子?と女の子、そして、小学生くらいの女の子の事を言った。

ビッキー「あの少女って……………二人居ましたけど?」

アスミタ「中学生ぐらいの歳の子の方だ」

ビッキー「ああ、あっちの方の子ね、たしかあの子は……」

デジエル「フェイトさんの弟分である聖時くんのクラスメイトで、たしか名前は、渡良瀬ふたばさん……だったかな？」

書類仕事の手伝いをする為に特務捜査課に来ていたデジエルが、書類を片手にしながら答えた。

カルディア「なんだお前、知ってるのか？」

同じように書類仕事をしているカルディアがふたばの事を知っているデジエルに問いかけた。

デジエル「ああ、ケガで入院していた時に聖時くんと一緒にお見舞いに来てくれたんだ。」

カルディア「へ〜、で、あのガキがどうしたってアスミタ？」

アスミタ「あの少女から、かすかにだが、アテナと似た小宇宙コスモを感じたのだ。」

マニゴルド「あのガキからアテナの小宇宙コスモを!？」

書類の前で腕を組んでうなっていたマニゴルドが大声を出しながら立ち上がって言った。

マニゴルド「アスミタ〜、今日一日中、書類仕事をしたせいでおかしくなったか? あんな小娘からアテナに似た小宇宙コスモが発せられるわ

け無いだろう？」

アスマタ「わたしもそうだと思うのだが……」

そう言いながら、ふたばが案内された接客室の方を見た。

その接客室の隣の部屋で、聖時の叔父であるエルネストとユニと東郷大地、の三人に対し、ゆめみがさくらをココまで連れて来くまでの過程を話していた。もちろん聖時達が魔法関係に関わっている事をナイシヨにした内容である。で、その内容は、ゆめみが聖時達とお墓参りをした後、聖時達と別れて買い物をしていた時に、偶然さくらが倒れる所を発見。さくらの体をスキャンして、さくらが毒性の有る呪いのような物で苦しんでいる事を知り、偶然自分が持っていた魔法アイテムを使って回復させたと言う内容である。

ユニ「……なるほど……で、あなたはその後、桜さんから話を聞いて、彼女が“あの間桐桜”だと知って、彼女の保護を考え、それをする為の協力を私とエルネストさん、そして警察内での知り合いである東郷さんに頼もうと特務捜査課に来たと。」

ゆめみ「はい、その通りです。」

エルネスト「……あの二人を連れて来た理由は？」

エルネストが言う二人とは聖時とふたばのことである。桜の保護を求めるのが理由なら桜だけを連れてくれば済むはずである。だがゆめみは二人を連れて来た。その理由を聞いているのである。

ゆめみ「……実は、連絡を取る為に一度神谷の家に戻ったのですが、その時に聖時さんとふたばさんが桜さんと話して、それで懐

いてしまつて、二人から離れようとしなかつたので、ここに連れて来たのです。」

エルネスト「なるほど、確かにあの子は二人になつているように見えるね。」

そう言いながら、エルネストは隣の部屋の中の様子を扉の隙間から覗いてみた。

隣の部屋にあるソファで聖時とふたばの二人に挟まれた状態で座っている桜の顔は、とても安心しきつた顔をしていたので、それを見てエルネストは納得した。

ユニ「……それにしても、あの桜つて子、随分とひどい虐待まがいの物を受けてきたのね……、気付いてます？あの子、聖時さんとは一っしか歳が違わないんですよ？」

大地「そうなのか？俺はてつきり十歳ぐらいだと思つてたぞ。」

東郷大地はそう言いながら少し驚いた顔をした。

彼が勘違いするのは無理も無かつた。実際今の桜は体つきから十歳くらいに見えるのである。

ユニ「恐らく、虐待まがいの魔術の継承を受けた時に精神的に大きなショックを受け続けたせいでしょうね……」

大地「不憫な……」

エルネスト「ああ、……ゆめみ、あの子を保護するという件だが、私も全面的に協力しよう。」

大地「私も全面的に協力しよう。我が友である聖が助けたいと言っていた少女でもある。そしてなにより……」

ユニ「子供は何にも変え難い宝ですからね。それを助けるのに理由はいりません。」

ゆめみ「あ……ありがとうございます。」

エルネスト「なに、かまわない。さて、それでは早速、保護をするに当たつての具体的な方法なのだがまずは……」

そう言つて彼等は桜を保護するに当たつての方法を話し始めた。

一方その保護される桜と、その桜の付き添いで付いてきた聖時達は、別の部屋でソファーに座つて待たされていた。

ふたば「……遅いですね。」

聖時「うん、まだかかるのかな？この後、神谷邸かみやていで待っているティアナに事情を説明しなきゃならないんだけどな……ん？」

そう言つて聖時は待たされている間に出席されたお茶を見ながらそう言つと、桜が自分の顔を見ていたのを感じ、桜に話し掛けた。

聖時「どうしたの？僕の顔じつと見て。何か付いてる」

桜「（ふるふる）」

首を横に振る桜。

聖時「じゃあ何を見ていたの？」

桜「目を……見ていたの。」

聖時「目を？」

さくら「(コクン)」

聖時「何で目を……」

聖時が何で目を見ているのかを聞こうとすると、ふたばが割り込んで話しかけてきた。

ふたば「それはたぶん、聖時の瞳が不思議な色をしているからなんだと思うな。」

聖時「不思議な色？」

ふたば「うん、聖時の瞳って光の加減で、角度によってはエメラルド色に見えるんだよ。」

聖時「ああ、そう言えばそうだって、前に桃華にそう言われたな。僕自身は自分の瞳の色なんてあんまり見ないから解らないけど、桃華や母さん、叔母さん達のようなエメラルド色なんだろうな。」

ふたば「へへ、聖時のその瞳ってお母さん似だったんだ。」

聖時「まあね。けど母さん達は、僕はむしろ叔母さんによく似ているって言ってたけどね。事実、小さい頃の自分が写っている写真を

見て、これは叔母さん似だな〜と思ったもん。」

ふたば「へ〜、そうなんだ。」

聖時「まつ、その叔母さんもお爺ちゃんの母方の祖母似だったんだ。なんでもその人、今はもうないヨーロッパのイタリアに隣接した国、たしか名前はソビエルだかソヴユールだとかそんな感じの名前で、その貴族の娘さんだったんだって。」

ふたば「へ〜。」

聖時「で、叔母さんは先祖帰りで、家族の中で唯一の金髪でその人似たんだって。」

ふたば「なるほど、金髪でエメラルドの瞳……とても綺麗な人だったんだね。」

聖時「まあね。まつ、もつとも身長はそんなに大きくなかったんだけどね。」

ふたば「え？そうなの？」

聖時「うん、まつ、そんな叔母さんに小さい頃似たせいか、僕も身長がなかなか伸びないんだよね……」OTZ

ふたば「あつ……え〜と……そ……それよりも、その叔母さんって確か、千草さんって名前だったよね。」

聖時「う……うん、なんで知って……て、そうか、確かふたばは母さんと叔母さんが一緒に歌った曲のCDを聴いたって言った

ね。」

ふたば「うん、けど声と名前しか知らないから、どんな感じの人だったのかな教えてくれる？」

聖時「そうだな、まず外見は金色の長い髪でエメラルドの瞳、そして……」歳の割りには低い背丈で、そのせいか幼く見えてしまい、その姿はまるで等身大のビスクドールみたいな人だったのよ。」

聖時の話に突如割り込んできた声に驚きその声のしたこの部屋の入り口の方を向く聖時達。

そこには銀色のウェーブの掛かった長い髪の妙齡の女性、ジーンが立っていた。

聖時「あの……あなたは？」

ジーン「私はジーン、君は確か聖時くんだったわね。……大きく変わったわね。」

聖時「え？僕を知っているんですか？」

ジーン「ええ、小さい頃のあなたをあなたのお父さんとお母さんから紹介させてもらった事があるの。」

聖時「じゃあ、父さんと母さんの知人ってことですか？」

ジーン「ええ。」

そう言っただけジーンは二人の方へと歩いて近づき、ふたばの顔をジーン

と見始めた。

ふたば「あ……あのく何を……」

ジン「……あなた、何か変わった力か何かもってない？」

ふたば「?!」

《つづく》

第60話 さくらとティアナ？（後書き）

聖時の叔母が似たと言う、父親の母方の祖母とは、
今絶賛放送中の作品「GOSICK」に出ている
あの人です。

第61話 さくらとティアナ？（前書き）

どうも、剣 流星です。

なんだかティアナが些かキャラ崩壊気味に……

なんでこうなったんだろう……

と、とにかく、第61話をどうぞ

第61話 さくらとティアナ？

第61話 さくらとティアナ？

ジーン「・・・あなた、何か変わった力か何かもってない？」

ふたば「?!」

ジーンの一言にふたばと聖時は内心で驚いていた。

二人は内心で、ふたばの持っているアーティファクトの事がバレタのかと思っただが、まだ誤魔化せると思い、会話を始めた。

ふたば「あ・・・あの、何を言っているんですか？」

あくまで惚けるふたば。

ジーン「・・・そう、なら質問を変えましょう。あなた、体の何処かに、紋章のような模様が浮かび上がってない？」

ふたば「?!」

ふたばはジーンの手を聞き、無意識のうちに紋章が有る左胸を無意識に腕で隠してしまった。

ジーン「・・・なるほど、胸にあるのね。」

ふたば「うっ！（な・・・なにこの人、まるですべてを見透かされ

るみたいで・・・怖い！」

ふたばは力の事や紋章の事などを次々と言い当ててくるジーンに、言い知れない恐怖を感じ、無意識に聖時の手を握っていた。桜も同様に、ジーンの言い知れない何かを感じ取ったのか、ふたばと同じように怯えて聖時の後ろに隠れる様にすがりついた。

聖時「ふたば？さくらちゃん？」

ふたりの行動に驚く聖時だが、その手が震えている事に気付き、その手をぎゅっ！と握り締めた後、ジーンに言い放った。

聖時「・・・父さんの知人のようですけど、会ったばかりの人に対して、質問ばかりしてくるのは些か失礼じゃないですか？」

ジーン「・・・そうね、確かにあなたの言うとおりね、ごめんなさい。（どうやら怖がらせちゃったみたいね、今回は確認だけにしておきましょう）」

そう思ったジーンは聖時達にペコリと頭を下げ、部屋を出て行くこととした。その時、部屋の扉が開き、ゆめみ、ユニ、エルネスト、東郷大地が部屋に入ってきた。

ゆめみ「すいません、待たせてしまって・・・で、ジーンさん？どうしたんですか？聖時さん達に何か御用でしょうか？」

ジーン「・・・ええ、ちょっと聖くんの息子さんがどれ位大きくなったのかなって思って・・・それでは失礼します。」

そう言ってジーンはゆめみ達の側をすり抜けて部屋を出て行くこと

した。が、その途中、東郷大地の側を通り過ぎる時、回りに聞こえないように、大地だけに聞こえるように小声でこう言った。

ジーン「……課長、後でお話しが有ります。」

大地「……わかった。」

部屋を出て行くジーン。それを見て、聖時達はホッと胸をなでおろした。

ゆめみ「？どうしたんです聖時さん？」

胸を撫で下ろした聖時を見たゆめみはそれを疑問に思い聞いてみた。

聖時「い……いや、なんでもない。それよりもさくらちゃんの事、どうなったの？」

ユニ「桜さんの件に関して、エルネストさんと東郷さんが全面的に協力してくれるそうです。」

エルネスト「ああ、ゆめみくんのくれたスキャンデータが証拠にもなるから、彼女の保護することは出来るだろう。私の知り合いの弁護士や児童相談所の人に協力を頼むから、彼女を間桐の家から解放してあげる事も出来るだろう。」

大地「とりあえず、間桐の家の親権を破棄させまでの間は、我々警察が彼女を保護するという形で彼女の身柄を保護しよう。」

そう言って東郷大地が桜に手を差し出して来たが、桜はそれに怯え、聖時とふたばの後ろに隠れてしまった。

ふたば「……桜ちゃん？」

桜「……私……二人の側が良い、離れるの……いや。」

それを見た東郷大地達は困った顔をした。

大地「二人の側が良いか。」

聖時「……ねえユニ、桜ちゃんの件が片付くまで、神谷家^{ウチ}で預かる事は出来ないかな？」

ユニ「え？……そうですね……」

そう言つてユニはエルネストと東郷大地の方に視線を向けた。

大地「……良いだろう。二人はどうやらその子になつかれていくようだな、ならその子もお前達二人の側の方が安心するだろう。手続きは私がしておく、連れて帰つてあげるが良い。」

聖時「ありがとうございます。」

ユニ「では聖時さん、桜さんを連れて先に帰っていてください。私とゆめみさんはこの後も話し合わなければならぬので。」

聖時「うん、わかったよ、じゃあ行こうか、二人とも。」

ふたば「うん、それじゃあ失礼します。」

さくら「（ス）（ソ）」

そう言って聖時達は部屋を出て行った。

*

一方、ティアナと晶を連れて先に帰った刹那は、別荘で修行をしていたピティ、猛、剛、芹、明日香、琴乃、それと、調査の為に出ていた由香と裕也達二人と交えて現状の説明をティアナにしていた。

ティアナ「……………つまり、聖時はずいぶん前から魔法に関していて、あんた達もつい最近関わり始めたって事なのね。」

刹那「……………ええ。」

ティアナ「はあ、やっぱり連矢兄さんが危惧していた通りになっていたってワケね。」

晶「え？連矢兄さんが危惧していた？」

ティアナ「ええ、連矢兄さん達は、聖時達がすでに魔法に関係に関して関わっているのでは？と疑い始めていたの。」

ピティ「え〜！ソレまずいよ。もし、魔法に関して関わっていて、しかもソレを隠していたなんてユニに知られたら………（ガクガクブルブル！）」

晶「まず間違いなくお仕置きを含めたOHANASIになるだろうね。」

ピティ「こ……怖い……いやああああああっ！！！」

明日香「ちょ……ちょっとピティどうしたの？落ち着いて！！！」

琴乃「よ……よっぽどユニさんのお仕置きが怖いんですね。」

剛「い……一体どんなお仕置きなんだろう。」

芹「と……兎に角、私たちの魔法に関わっている事に関してばれそうになっているって事はよく解ったわ。それで？」

ティアナ「ええ、連矢兄さんは、私に聖時が魔法に関わっているか調査して欲しいって言っていたの。」

刹那「調査……ですか？ですがそれは護衛をやっている私やアルフにやらせれば良いのに、なぜわざわざティアナさん、あなたに頼んだのです？」

ティアナ「それは、あなたが聖時達に取り込まれて、共犯者にな
っているかもしれないって思っていたからよ。」

刹那「なっ!」

由香「ばれかかってるみたいね、刹那さん。」

裕也「アルフも共犯者だって思われているみたいだな。でも何でバ
レそうになっているんだ？俺達の今までの行動にそんな要因は無か
ったと思うけど?」

ティアナ「それは、あなた達も今調査している「意識不明事件」、
それを追っている「フラーレン」のエージェントから「あなた達が
怪しい」って報告が上がってきたからよ。」

由香「フラーレンのエージェント?」

裕也「あ!ソレって榎山のことじゃないか?」

ピティ「榎山ってたしか・・・裕也、あんたのクラスに転入してき
たあの?そう言えばあいつフラーレンのエージェントだったわね。
じゃあ、疑われ始めた要因ってこの前の屋上の件のせいじゃない?」

そういつてピティは、この前屋上で裕也が榎山遙にS E能力を掛け
られそうになった時、聖時達が助けた件の事を言った。

刹那「あの件ですか・・・それなら納得できますね。」

ピティ「なるほど、だからティアナにお鉢が回ってきたのね。」

ティアナ「ええ、管理局を通して私に捜査協力の話が持ちあがってきてね。おかげで私は、ミッドの学校を休んで、あんた達に通っている聖祥学園に転入する破目になったんだけど。まっ、向こうの学校は公勤扱いになっていてから出席日数は足りる事になる上に、来年から入る陸士訓練校の推薦もしてくれるから別に良いんだけどね。」

ピティ「え?!ティアナ、あんたしばらくコッチに居るの?!」

ティアナ「調査するって言ったでしよう?あ、安心なさいよ、あんた達の話聞いて、あんた達の覚悟は解ったから、しばらくの間は黙っておいてあげるから。」

晶「え?良いのか?だって、調査をして成果を出さないと、陸士訓練校の推薦がパアになるんじゃない?」

ティアナ「大丈夫よ、だって調査をする代わりに、訓練校の推薦をしてもらうんだから、調査を引き受けた時点で推薦してはもらえるの。それに、たとえ推薦がなくても、私は自分の実力で受かって見せるわよ。」

ピティ「そっか、……ティアナ、ありがとうね。」

ティアナ「な、何よ突然、お礼なんて言っで。」

ピティ「いや、だって聖時の為に、聖時達の事を黙ってくれるんでしよう?だからさ、ありがとうっで。」

ティアナ「べ、べつに//////聖時の為に黙っているわけじゃないわよ//////」

晶「素直じゃないな、正直に「大好きな聖時の為に力になってあげたい!!」って言えば良いのに」

ティアナ「なつ、何言ってるのよ!!!////////////////////で、デ
タラメな事言ってるんじゃないわよ!////////////////////」

由香「へへ、ティアナちゃんは聖時くんの事が好きなんだ。」

ティアナ「ちゃん?!////////////////////」

明日香「あゝ、ティアナさん顔が真っ赤になってるゝ、かわいいゝ
」

ティアナ「~~~~~//」

ピティ「さらに赤くなったね。」

ティアナ「も・・・もう!////////////////////なんなのよおおお!あんな
達はあああああつ!!!////////////////////」

顔を真っ赤にしたティアナの声が別荘内に高らかと響いたのであつ
た。

《つづく》

第62話 さくらとティアナ？（前書き）

投稿遅れてすいません！剣 流星です。

作品を書いたのに、投稿する事を忘れるという、とんだ間抜けをしてしまいました。すいません！

では第62話をどうぞ

第62話 さくらとティアナ？

第62話 さくらとティアナ？

刹那が猛達にティアナの事を説明してから、別荘内で丸一日がたった頃、聖時とふたば、ゆめみが桜を連れて別荘にやってきた。元々、魔術の存在を知っている桜には別送の存在を教えても問題ないと聖時はそう思い、桜を連れて別荘に来たのだった。

そして今、その桜の事を猛達に説明し、自己紹介をしている最中であるが、自己紹介をしている最中なのに、桜はその自己紹介をしている人物の中の一人、ピティに視線が釘付けになっていた。その顔は目を「パチクリ、パチクリ」と瞬かせ、驚きの顔になっていた。

桜「（パチクリ、パチクリ）」

ピティ「……………ねえ、聖時、なんか物凄く見られてるんだけど……………」

桜「……………妖精さん……………」

ピティ「へっ?」

桜「はじめて見た、カワイイノノノノノ」

ピティ「か……………カワイイ?!」

明日香「よかったねえピティ、カワイイって言われて、珍しいでし

よっぴーの姿。」

桜「は……はい、白鳥さん」

明日香「明日香でいいよ、さくらちゃん。白鳥だとお姉ちゃんと区別が付きにくいでしょう？」

桜「で……でも……」

明日香「同じ年なんだし、それに、今日から友達なんだから、名前で呼んでよ。」

桜「と……友達……」

明日香「うん、友達だよ！だから名前で呼んで。」

桜「うん、あ……明日香ちゃん／＼／＼」

明日香「うん、桜ちゃん！あ、ねえ、この別荘を私が今から案内してあげる！行こう！」

明日香はそう言って桜の手を取って歩き出した。

桜「！？……うん！／＼／＼／＼」

そして、手を引つ張られた桜もつられて歩き出し、二人は別荘の奥へと消えて行った。

ふたば「さすが明日香ちゃん、桜ちゃんをもう自分のペースに引つ張り込んでる。」

二人が消えた方向を見ながらふたばはそう言った。

聖時「ああ、それになんとか嬉しそうだな。」

琴乃「多分、明日香も嬉しいんだと思います。同い年のお友達が出て。」

桜が同い年だと知った時、とても嬉しそうな顔をした実の妹、明日香の顔を思い出しながら琴乃はそう言った。

芹「そう言えば、明日香ちゃんと同い年って、今までは居なかったもんね。」

聖時「だな、ところで、香野先輩と河瀬先輩が別荘ゴッコに戻ってきているって事は学園での聞きこみの捜査は済んだんですか？」

聖時は今日SE能力を使つての捜査をする予定だと聞いていたので、その成果を二人に聞いてみた。

裕也「ああ、そのことに関してなんだが、実は去年起きた意識不明事件の詳細を知つてそんな人物達と会えたんだ。」

聖時「え？去年の意識不明事件の詳細を知る人物に？」

裕也「ああ、今の俺たちは、犯人の顔を知っていても、「なんでもんな事をしているのか？」と、言うその理由については知らなかった。」

聖時「確かにそうですね。」

裕也「そのせいなのか、捜査方は手がかりが掴めずに行き詰まってしまった。そこで俺は、まず犯人が、「なぜこんな事をしているのか？」と言う、動機の方から捜査を進めようと考えてな。で、ソレを知る為に、まず去年起きた意識不明事件の事に付いて調べようとしたんだ。」

聖時「なるほど……確かに着眼点は良いですね。去年の意識不明事件、あれは確かに一時的では有りましたが、終息しました。つまり、誰かが何かをして、事件を終息に導いたわけです。そして、前回の事件と今回の事件は、何らかの繋がりがある筈ですから、そこから犯人に繋がる何らかの手がかりが見つかる……そう言う訳ですね？」

裕也「ああ。」

剛「でも、よく見つけれましたね？去年の意識不明事件の詳細を知る人物なんて……何ていう人なんですか？」

由香「聖遼学園の新聞部の人の三年の人で、確か名前は上岡進先輩かみおかすすむと、天羽翠先輩あそつみどりっていう人だよ。」

聖時「上岡進先輩かみおかすすむと、天羽翠先輩あそつみどりですか……よく話してくれましたね、去年の意識不明事件の原因は当時の高等部二年生……現三年生の誰かだと言う噂が出回っていたから、三年生は去年の意識不明事件について、あまり話したからなかったのに。」

聖時は事件の聞き込みの時に、高等部の生徒に聞いた事を思い出して言った。

裕也「実は最初、先輩方も話してはくれなかったんだけど、偶然俺がポケットから落とした……」

そう言つて裕也はポケットからペンダントのような物を取り出した。

裕也「コレを見て話してくれると言つてくれたんだ。」

ティアナ「？コレ……ペンダント？」

ティアナが裕也が取り出したソレを見て言った。

ソレは金属の輪っかに嵌つていて、淡いライトグリーンのがラスの様な物で出来た、七角形の形をしていた。

刹那「……コレは？」

裕也「学園七不思議の一つに数えられているあの「七角ペンダント」だよ。」

聖時「七角ペンダント？」

裕也「七角ペンダントとは「ペンダントを覗くと、未来が見えると言つ、校内に出回る謎のアイテムだよ」って……え?!」

裕也が七角ペンダントについて話そうとしたとき、突然声が割り込んできて、裕也の言おうとしていた事言つてしまった。

聖時達はその声に驚き、声が出た方を向くと、そこに声の主が居た。

ティアナを除く全員『アルフ!?!』

《<UJ>》

第63話 さくらとティアナ？（前書き）

うづうづっ・・・腰が・・・

どうも、この歳で腰を痛めて、ぎっくり腰になった剣 流星です。

腰が痛むせいで、パソコンの前に座るもがとても辛い状態でしたが、がんばって執筆しました。

それでは第63話をどうぞ。

第63話 さくらとティアナ？

第63話 さくらとティアナ？

ティアナ以外の全員『アルフ?!』

突然したアルフの声に、一斉にアルフの方を見る聖時達。

聖時「ど……どうしてココに?!」

アルフ「どうしてって、今日は学校は休みだろう、あの榎山遥の手伝いは、学校にいる間だけだから、休日の日は自由にしているよ。で、聖時達の様子を見に行こうと思って別荘（別荘）に来たってわけ。」

アルフはそう言いながら、歩いて聖時達の側に来る。

アルフ「え〜と、あんたがティアナだね。話は特務捜査課経由で聞いているよ。別荘（別荘）にいるって事は、聖時達に協力してくれるみたいだね。」

ティアナ「あ……はい。」

アルフ「聖時にふたばに刹那、それに猛たち……ん？土郎が居ないみたいだけど？それからアキ、何で男の格好なんてしてるんだい？」

アルフは晶を見て、晶が男装したアキに見えたのでどうしたのかを

聞いてきた。

聖時「ああ、アルフ、彼はアキの双子の兄妹の晶だよ。」

晶「どうも、アキがいつも世話になってます。アキの双子の兄妹の晶です。」

晶は視線を向けてきたアルフに対し、挨拶をしてペコリとお辞儀をした。

アルフ「アキの双子の兄弟?!アキに双子の兄妹が居たなんていたんだ・・・」

聖時「まあね。」

アルフ「別荘ヨコに居るって事は晶も、魔法の事を?」

聖時「ああ、知ってるよ。アキから話は聞いてたみたい。あと土郎なんだけど、今は先生に言われて、隣町でやっている「古代の中国展」を見に行っていて、今日そのまま家に帰るって言ってたよ。」

アルフ「古代の中国展?なんでまたそんな物を見に行けって童虎は言っただい?」

聖時「先生が言うには、「土郎が持っている能力をうまく使いこなすようになるためには、名の有る武器や能力が附加してある武器を多く見ておく必要がある」って言ってたんだ。」

刹那「そうだったんですか、そう言えば別荘に居る時も、裏山で聖時さんが拾ってきた武具なのを良く見ていましたね。」

アルフ「なるほどね、そう言えば隣町でやっている「古代の中国展」では、最近来迎寺グループが中国の遺跡で発見した「干将、獏耶」の夫婦剣が展示されてたね。どうやら士郎はそれを見に行ったみたいだね。」

聖時「たぶんそうだと思うよ。あ、そうそう、実は今日、別荘ココに連れて来た新顔がもう一人居るんだ。」

アルフ「新顔がもう一人居るのかい？」

聖時「うん、桜って子なんだけど、実は……………」

聖時は連れて来た桜の事を、ココに連れてくるまでの事情を含めてアルフに話した。

アルフ「……………虐待まがいの魔術の継承、その子はそんな物を長い間受け続けて来て……………胸糞悪くなってくるね！」

アルフは桜の事を聞いて、かつて自分の主人であるフェイトがプレシアに虐待を受けていた時の事を思い出した。アルフには桜がその時のフェイトと重って見え、その虐待をした人物に対して怒りを顕わにした。

アルフ「……………それで、その桜って子は聖時達……………神谷家が引き取るのかい？」

聖時「うん、もっとも桜ちゃんの正式な、ちゃんとした人が見つかるまでの間なんだけどね。」

アルフ「そうかい………良い人が見つかるの良いね。」

聖時「うん、そうだね。」

そんな風に聖時達が話していると、桜に別荘内を案内していた明日香が桜の手を引いて戻ってきた。

明日香「聖時お兄ちゃん、そろそろお昼の時間だよ」

ふたば「？お昼？」

ゆめみ「外ではそろそろ夕食の時間でしたけど、別荘内では、ちょうどお昼どきの時間だったんですね。」

聖時「そっか、別荘内の一日は、外では一時間だったからね。」

ティアナ「そう見たいね、私も別荘ココに来て丸一日経ったけど、いまだに実感がわかないわよ。聖時、あんた本当に便利な物を持つてるわね。」

聖時「本当に便利で良いでしょう。さて、じゃあティアナと桜ちゃん、それと晶の歓迎会を含めて、今日のお昼はちよっと豪華に行こうか？」

明日香「え！ご馳走なの！？やった、良かったね、桜ちゃん！」

明日香はご馳走に喜び、手を握ってた桜の方を見て、桜の顔が先ほどまで、別荘内を案内していた時の戸惑いの顔とは打って変わって曇った顔をしていた。

桜「・・・・・・・・・・・・・・・・」

明日香「・・・・・・・・桜ちゃん？どうしたの？ご馳走・・・・・・・・うれしくないの」

桜「あ・・・・・・・・その・・・・・・・・そう言うわけじゃ・・・・・・・・」

明日香の質問に対して申し訳なさそうな顔をしながら目を背ける桜。そんな桜を見て、ゆめみは何かを悟ったのか、みんなに言うように話し始めた。

ゆめみ「・・・・・・・・ひよっとして・・・・・・・・人が手を付け、調理した料理に対して抵抗があるのでは？」

ふたば「？どういことですか？」

ゆめみ「以前ボランティアで行った孤児院に、実の母親に虐待を受けた際、食事にゴミを入れられて食べさせられていた子供が居たんです。その子はその時のトラウマのせいで、調理する際に人が調理をしたものを食べられないようになっていました。桜さんも、もしかしたらその子と同じなのではと思うんです。」

聖時「え、その子と同じって・・・・・・・・どうしてそう思うだいゆめみ。」

ゆめみ「私の中にある間桐の魔術の継承の仕方の中には、食事に毒を仕込む物もあるんです。」

ピティ「食事に毒?!そんな事したら死んじゃうじゃない!」

ゆめみ「食事に含まれる毒は、死なない程度に薄められた物です。」

ですから死ぬことは無いはずなんですけど、これを毎日の食事に入れた人はたまったものではないでしょう。食事をする度に体調を崩すんですから・・・ましてやそれをされたのが小さな子供ではトラウマになっても仕方がないでしょう・・・」

アルフ「じ・・・じゃあどうするんだいこの子の食事、いくら作った人があんだ達でも、この子、それを食べられないんだろう？」

ゆめみ「大丈夫です。手立てが無いわけではありません。先ほど言った孤児院の子に対してやった方法で対処すれば、時間がかかりますが桜さんのトラウマも克服できると思います。」

ふたば「本当ですか！それでその方法とは？」

ゆめみ「簡単です。他人が調理するから食べられないんです。ですから食事を自分で作るようにすればいいんです。」

聖時「食事を自分で？」

ゆめみ「はい、他人が・・・しかも自分が見ていない所で調理をしているから食べ物に恐怖を感じるんです。でもその食事を自分で作れば何も問題が無いはずですよ。」

聖時「言われてみれば確かに・・・なら・・・」

そう言って聖時は桜に近づき、屈んでさくらの目線になってこう言った。

聖時「桜ちゃん、僕と一緒にご飯を作ろうか？」

桜「…………ご飯？」

聖時「そう、ご飯。」

桜「…………でも私…………ご飯作ったことが無い……………」

聖時「大丈夫、僕が教えるから。」

桜「で…………でも……………」

ふたば「さくらちゃん、私も一緒に作るから、一緒にやろう。」

桜「……………うん。」

聖時「よし！なら決まりだ！今日のお昼は僕とふたばと桜ちゃんの三人で作ろう。」

明日香「じゃあ私たちは食器とかを用意するね。」

猛「じゃあ俺達は、食堂の片付けだな、今朝、芹の作った朝食での騒動で半壊してたからな。」

聖時「ちよ…………ちよつと待て！今さらりとんでもない事を言わなかった!？」

ふたば「な…………何が有ったんです?」?

琴乃「あ、それは……………」

聖時「あ、いいです。言わなくてもなんとなくわかりますから……………」

「？」

芹「ちょっと聖時くん、それってどう言うことなのかしら？」

猛「簡単な事だろう、芹と食事、そこから導きだされる答えは惨劇以外無いからな。芹の食事は惨劇しか生み出さないからな、うん！」

バキッ！

芹の一撃を受けて吹っ飛び壁にめり込む猛。

芹「誰の食事が惨劇だ！いい加減なこと抜かすと殴るわよ！」

猛「な・・・殴ってから言うな・・・（ガクッ！）」

芹「まったく、なんて事言うのよ、このバカは！」

ゆめみ「でも猛さんでは有りませんが、芹さん当分の間は食事を作るのは控えてくださいね。」

芹「な・・・なんでですゆめみさん?!」

ゆめみ「悪いんですけど、あなたの料理で桜さんのトラウマをさらに深刻にしないためです。」

聖時「確かにそうだな、うっかり芹の料理を桜が食べて、トラウマを酷くしたんじゃないからな。」

ゆめみ「そう言う訳ですから、少なくとも桜さんが居る時には台所には絶対に立たないでくださいね。」

ふたば「美味しいご飯をつくらうね」

そう言つて笑顔で桜に言つたふたばは、桜の左手を取つた。

二人に手を握られ、挟まれるような形になる桜。

桜「!?!?.....うん!//////」

二人に挟まれた格好になつた桜の顔はどこかとても嬉しそうな顔をしていた。

猛「おゝい、俺を置いてかないでくれ」（涙）。

壁にめり込んだまま忘れ去られた猛であった。

《つづく》

第64話 さくらとティアナ？（前書き）

うう、いたたたたつ、久方ぶりに力仕事をしたために、
今現在筋肉痛で苦しんで知る剣 流星です。

その筋肉痛せいで、キーボードを旨くたたくことが出来ず、今回は
短めになってしまいました。

ピティ「言い訳するんじゃない！このダメ作者！」

ううう、本当にすみません。
では第65話をどうぞ。

第64話 さくらとティアナ？

第64話 さくらとティアナ？

桜が聖時達に料理を教わりながら昼食を作った後、その作った料理で昼食となった。

味の方は、初めてにしては上出来と、お世辞抜きでも美味しいと言える位の物であった。

桜は、聖時達に初めて作ってもらった料理を「美味しい！」と言って貰って、恥ずかしそうに顔を伏せ、頬を赤くしながら喜んだ。

そして、昼食の後、聖時達は各々の修行をする為にバラバラに行動をした。その中、桜とティアナ、ふたばは模擬戦をやる聖時と刹那に着いて行き、二人の模擬戦を見学した。

そして、二人の模擬戦を見たティアナ達は、二人の模擬戦に見て、その攻防があまりの美しさに見入られてしまった。

正確に言えば聖時の剣技に魅入られたと言うのが正しい。

刹那の剣技を、まるで舞を踊るかのように避け、飛天の剣を巧みに操りながら刹那に当てるその動きは、まるで精練された舞いのようなのであったのである。

その姿は、聖時の中性的な容姿と相まって、尚の事美しく見えたので、ティアナたちが見入ってしまうのは仕方がなかったのかもしれない。

そんな模擬戦が終わり、その後、別荘内での夕方になり、夕食の時間になったので、再び桜に料理を教えながら夕食を作り、ソレを食べ、そしてその後、別荘内に居る全員でトランプなどを使ったゲームを何回かしてから、その場で解散となり、各々に用意された別荘内の部屋へと行った。ちなみに桜はふたばから離れなかったので、二人は同じ部屋で寝る事になった。

そして今、全員が部屋に引き払ってから数時間後の夜の中庭で、聖時は一人で夜風に当たっていた。

聖時「フウ、今日は本当に色々あったな。ティアナと再会したり、晶が出てきたり、桜ちゃんを保護する事になったりと、本当に色々会った。」

ティアナ「ソレはコッチのセリフよ。」

不意に背後から声がしたので、振り向くと、そこにはティアナが立っていた。

聖時「ティアナ？どうしたのこんな時間に、こんな所に来て。」

ティアナ「ちよつと寝付けなかったから、夜風に当たりきたの。」

聖時「そうか、僕と同じだね。」

ティアナ「あ、そうだったんだ。」

ティアナはそう言いながら聖時の横へと移動し、並び、別荘の空を見上げた。

ティアナ「別荘^コ、本当にすごいわね、こうやって空を見ても、本物と大差ないように見えるね。それに、凄いと言えば、聖時、あんたが模擬戦で見せた剣技、あんな物がいつの間にか使える様になっていた事にも驚いたわよ。」

聖時「え？そんなにすごかった？僕としてはまだまだだと思ってるんだけど……」

ティアナ「それでも凄いわよ、まるで舞いを舞っているみたいで・・・
とっても綺麗で、思わず見入っちゃった／＼／＼／＼／＼／＼。」

聖時「そう？なら、その言葉、素直に受け取っておくよ。」

ティアナ「ええ、受け取っておきなさいよ。ふふふつ。」

ティアナはそう言って柔らかい笑顔で微笑んだ。

ソレを見た、聖時は、どこか安心したような顔した。

聖時「良かった。本当にもう大丈夫なんだね。」

ティアナ「まだ心配してたの？昼にも言ったでしょう？」「もう大丈夫だ。」って、心配すぎよ。それに、私には執務官になるって夢があるんだから、落ち込んで立ち止まっている暇なんて私には無いの！」

聖時「ははっ、その意気、その意気。」

聖時はそう言って笑い、ソレにつられるようにティアナ笑顔で笑った。

ティアナ「フフフツ、・・・聖時、ありがとう。改めて御礼を言わせて。」

聖時「？どうしたの？改まってお礼を言うなんて。お礼なら昼間も言っただじゃないか。」

ティアナ「そ・・・そうなんだけど、その・・・、ふ、二人つき

りの時に、改まって言いたかったのよ／＼／＼／＼。」

聖時「？そうなんだ。」

ティアナ「・・・私ね、あの時、私と同じような・・・うつん、私なんかよりもさらに深い絶望の底に居るあんたが、医者も見放した左足のリハビリを続けていく姿を見て、そしてあんたが私に掛けてくれた言葉の数々で、私は前へ進む為の勇気を貰った。その事に、私は凄く感謝してるんだよ。」

聖時「いいよ、感謝なんて。それにティアナなら、いずれ自力で答えを見つけて前に進んでいったよ。」

ティアナ「うつん、そんなこと無い。聖時に勇気付けられなければ、私は今でも座り込んだまま、立ち上がるうとしなかったと思う・・・」

聖時「ティアナ・・・」

ティアナ「ねえ聖時、何で私が聖時達の事を連矢兄さんたちに報告せず、あんた達に協力をするって言ったと思う？」

聖時「？・・・何でって・・・」

ティアナ「それはね、私が聖時に何かしてあげたいって思ったからなの。」

聖時「え？」

ティアナ「聖時に助けられたあの日から、もし、聖時に何か合った

第65話 さくらとティアナ？（前書き）

どうも、剣 流星です。

いや〜最近熱くなったり、肌寒くなったりして、ちよつとでも気を抜くと

体調を崩してしましそうな気候が続いてますね〜。

おかげで自分もいささか体調を崩しがちです。

みなさんも体調管理に十分注意してください。

それでは第65話をどうぞ。

第65話 さくらとティアナ？

第65話 さくらとティアナ？

時間は少し遡り、聖時がティアナと中庭で会って話をする少し前、別荘内で自分にあてがわれた部屋で、ふたばは桜を寝かしつけていた。

桜「スウ〜、スウ〜」

桜は最初、やはり不安だったのかベットに入ってもふたばの手を握って放さなかった。その為ふたばは桜が安心して眠るまでそばにいて手を握っていた。やがて安心したのか「スウ〜、スウ〜」と寝息を立てて寝始めた。ふたばはベットに寝ている桜を見て思った。桜は本来ならふたばと一つしか年が違わないのである。が、その外観は、長年の虐待のような魔術の継承の儀のせいで心的外傷を負い、体が他の年の子より成長せず10才前後のままなのである。そのせいか、心も体に引つ張られて成長していかないのである。ふたばは桜を不憫な子だと思い、この子の成長の手助けをしてあげたいと思うようになった。ふたばは部屋のベットで安心したような寝顔で寝ている桜を見て、「こちらから一緒に成長していこうね。」と語りかけながら優しく微笑えんだ。

そして桜が安心して寝たのを確認すると、寝巻きの上にストールをはおり、夜風に当たる為に部屋を出て、中庭に移動した。

誰も居ない暗闇に染まっている中庭。その暗闇に別荘からもれる光りとそして、魔法の力だろうか、夜空に光る星の光が中庭の闇を照

らしていた。

その中庭で、ふたばは壁に寄りかかりながら、はおっているストールを両手で握り締め、夜空の星を見ながら昏に使った自分の力、アーティファクトの勝利の女神ニケのじょうの杖を使った時の事を考えていた。

ふたば（あの時・・・勝利の女神ニケのじょうの杖を使おうとした時、杖からの力とは別に胸にある模様からも力が流れてきたように感じた・・・
・あれは一体なんだったのかな？それに・・・）

ふたばは首を回して、肩越しから自分の背中を見る。

ふたば（あの時、回りにいたみんなは気付いてなかったみたいだけど、私の背中から、光で出来た翼のようなものが出ていた・・・あれはあの時のお母さんの背中にあったのと同じ物・・・）

ふたばはあの時、自分の背中から出てきた翼は、幼い頃に見た母の背中から生えていた物と同じ物だと感じた。

ふたばは幼い頃、例の病気のせいで急に倒れた事があった。その時朦朧とした意識で、母が幼い自分に必死に呼びかけた後、懐から石のような物を取り出し、なにやらつぶやきながら自分の方に掲げた。すると、石から淡い光が自分に振りそそぐと、苦しかったのが段々と楽になってきたのである。その時、石を掲げて光らせた母親の背には、杖を使った時のふたばと同じ、光でできた翼が生えていたのである。

あの後、ふたばは母親の背中を何度か確認したが、光でできた翼などまったく無かった。ふたばは、あれは意識が朦朧としていた自分が見た幻だと思って、忘れる事にしたのである。

ふたば（今思えば、あの石を光らせて、私を治したのは魔法の力だったんじゃないのかな？
だとしたらお母さんは……）

そんな事を考えているふたばに声を掛ける者が現れた。

晶「あれ、ふたばさん？」

声がした方を向くと、そこには青い色の寝巻きを着た晶がそこに居た。

ふたば「あ、晶くん？」

晶「どうしたの？別荘の中庭で？」

ふたば「ちょっと寝付けなくて……それに昼間使ったこれの事について考えていたの。」

そう言いながら、ふたばは懐から自分の仮契約カードを取り出して見た。

取り出したカードには白くて薄い、シンプルな感じのドレス……見る人が見たら、それは異世界の女神、童虎が仕えていたアテナがよく来ていたドレスと同じだと気付くだろう。

ソレを着たふたばが右手に勝利の女神の杖を持ち、左手に盾を持った姿がカードには描かれていた。

晶「仮契約カードを使った時の事か……」

ふたば「そう言えば晶くんは私たちの力の事やこの別荘の事をテイアナの様にあまり聞いてこないね？もしかして、話をアキから聞いていたの？」

晶「うん、色々聞いてるよ。少し引つ込み思案な所があるとか、昔、重い病気で入院してたとか、あと・・・歌が取っても上手いとか。」

ふたば「え?!なんで知つてるの?!」

ふたばが晶の口から「歌が上手い」と言う事を聞いて驚いた。なぜなら、ふたばが人前で歌ったのは、この前、聖時の前で歌ったのが初めてだったのである。

晶「アキがこの前、聖時の前で歌つてたのを偶然きいてたんだ。アキ、言つてたよ。とつても綺麗な歌声で上手に歌つてたつて。」

ふたば「あ・・・あう////////」

ふたばはあの時歌つていた事を聖時以外の人に聞くからだと知り、恥ずかしくなつて顔を赤くした。

ふたば「あ、アキつたら、もう!恥ずかしい////////」

晶「別に恥ずかしかる事ないと思うけど。アキはとつても上手かつたつて言つたんだから。」

ふたば「上手いだなんてお世辞だよ////////」

晶「そんな事無いと思うよ。アキがあればほど上手いつて言つたたん

だから、上手いんだよ。あゝあ、僕も聞いてみたいな、キミの歌。……ねえ、前は聖時に聞かせてあげたんだから、今度は僕の為に歌ってくれないかな？」

ふたば「え?!」

晶「ダメ……かな？」

ふたばは晶の言葉にどう返事をすれば良いのか迷った。

正直言つて人前で歌うのは恥ずかしい……けど、同時に自分の歌を色んな人に聞いてもらいたいと言う思いも同時にあつた。

だが、ふたばはソレをする為の勇気が出てこない。もし自分の歌が下手だといわれたら、気に入ってもらえなければ……そう思うと躊躇してしまうのである。

ふたば(どうしよう……)

そう思った時、この前、夢の中のサキに言われた言葉「自分の歌を認めてくれたサキや聖時を信じる」と言う言葉を思い出した。

ふたば「……歌ってみようかな。」

晶「え?本当!」

ふたば「うん、けど……あんまり上手くないから、笑わないでね。」

そう言つてふたばは目を閉じて、精神を集中させた後、歌い始めた。

ふたば「~~~~」

ふたばの澄んだ美しい声が辺りに響く。

晶「これは……なんて綺麗なんだ。」

ふたば「~~~~?~~~~」

ふたば達から少しはなれたところに居る聖時とティアナにもその歌声は響いてきた。

聖時「ふたばの歌声……綺麗だ。」

ティアナ「本当、綺麗、上手。」

ふたば達に気付かれないように二人を見ていた聖時達は歌を歌っているふたばの姿が、その美しい歌声と相まって、とて神秘的で、美しく見えたので、思わず見入ってしまった。

ふたば「~~~~」

猛「これは……」

剛「ああ、渡良瀬さんの歌声だ。」

猛「綺麗だな。」

ふたばの歌声は、別荘の部屋で休んでいた猛たちの元にも届く。

ふたば「~~~~~」

アルフ「これ・・・ふたばかい？」

刹那「美しい歌声です。」

ふたば「~~~~~」

由香「綺麗な歌声だね、河瀬くん。」

裕也「ああ、聞き惚れちゃいそうだな。」

ピティ「ふたばの歌声・・・まるで天使の歌声だね。」

ふたば「~~~~~」

琴乃「胸に響くような歌声・・・」

明日香「綺麗な歌声だね〜ふたばお姉ちゃん。私、ふたばお姉ちゃん
の歌好きになっちゃった」

芹「私も好きになっちゃいそう。本当に良いわね。」

ふたば「~~~~~」

ふたば「ど・・・どうだったかな？」

歌い終わり、側で歌を聞いていた晶に歌の感想を聞くふたば。

晶「す・・・凄いい、凄いいよ！渡良瀬さん！まるで天使の様な歌
声だったよ！」

ふたば「て、天使の歌声だって、そ、そんな、褒めすぎだよ／＼／＼。」

晶「褒めすぎじゃないよ、キミはそれだけ凄いつて事なんだから。」

ふたば「そ．．．そう？／＼／＼／」

晶「うん、まったくキミは本当にすごいよ。この歌声を聞いて、ますますキミの事が好きになったちゃったよ。」

ふたば「え？す．．．好きに？！／＼／＼／」

晶「さて、そろそろ部屋に戻るか、おやすみ渡良瀬さん。」

そう言つて、何事もなく部屋に戻る晶。

ふたば「あ！ちよつと、ま．．．待つて．．．行つちやつた．．．．．。さっきの言葉の意味．．．．．どう言つ意味だろう．．．．．」

ふたばは晶から言われた「ますます好きになた。」と言つ言葉の意味を掴みあぐね、悩みながら自分も部屋に戻つて行つた。

ティアナ「．．．．．え．．．えらい事を盗み聞きしちゃつたわね
聖時。」

聖時とティアナはふたば達から隠れて二人の会話を聞いてしまつていた。

先ほどまでティアナは中庭で、聖時と話をしていたのだが、聖時が

何者かの気配を感じ取り、そこに向かったので、ティアナも付いていった。そして、その先にふたばと晶が二人つきりで居たので、思わず隠れて盗み聞きをしたのである。

ティアナ「晶がふたばの事が好きって……これってどう言う意味なのかな聖時、……？聖時？」

聖時「晶がふたばの事が好き？」

*

一方、ココは警視庁内にある特務捜査課。

ここで、先ほどまで居た聖時と一緒に来たふたばにジーンがふたばを探るような話し方をしたので、東郷大地はその理由を聞いていた。

ユニ「なっ！ふたばさんが真の紋章の宿主ですって?!」

ジーン「ええ、なぜか知らないけど、力が半分ぐらいになってたけど、まず間違いなくあの子は、27の真の紋章の一つを宿しているわ。」

エルネスト「して、あの子が宿している紋章は一体何の紋章なのだ？」

ジーン「直接紋章を見ているわけではないから、確かな事は言えな
いけれど、生ソウルイーターと死を司る紋章や、罪と罰の紋章のような呪いの強い
紋章でない事はたしかね。」

大地「そうか・・・しかし、そうだと解れば、このままと言うわけにはいかないな。今までは無事で居たが、いつ魔王軍に見つかり狙われるかかもしれないな。」

ユニ「たしかにそうですね。けど・・・事情を話して、私たちが護衛をする事に協力してもらおうと、ふたばさんと親しい間からの聖時さんに、魔法関係の事がバレる可能性が出てきます。」

エルネスト「ならば、影ながら護衛をするしかないな。幸い、彼女は聖時くんの側によくいるから、彼の護衛役をやっている刹那くんに、ふたばくんの護衛もしてもらい、聖時くんを探りを入れていてティアナくんにそのサポートをもらうのが適切だろう。」

大地「うむ、それが無難だな。」

エルネスト「では、そのように二人に伝えましょう。あと、この事をなのは君たちにも。」

ユニ「ええ、伝えておきましょう。」

ユニはそう言いながら考えていた。

聖時は「光輝の紋章」を受け継ぐ要素を兼ね備えている。

その聖時の側によくいるふたば、彼女の宿している紋章が、かつて聖時の母親の宿していた物なのでは？と考え始めていた。

《つづく》

おまけ

ユニ「所でエルネストさん、しばらくはこちらに居るんですね？」

エルネスト「ああ、調べ物の方がひと段落したのでな。」

ユニ「そうですね・・・なら、ちょうど良いですね。」

エルネスト「丁度良い？」

ユニ「ええ、あなたの採決待ちの書類が山のようにあるので、ソレを捌いてもらおうと思ひまして」

エルネスト「・・・ハ？」

ユニ「総帥代行の権利をあなたからもらいましたが、それでも私の判断では判断しきれない物が結構出てきたんですよ」

ニコニコと笑顔で話すユニ。だがその目は笑っていない事は、その場にいる全員が感じ取っていた。

エルネスト「私の判断って・・・そんな物必要な仕事は無かった

と思うが……」

ユニ「あつたんですよ だいたい……いきなり私に総帥代行を任せてさっさと居なくなつて、私がどれだけ苦労したと思つてるんですか？」

さらにニコニコと笑顔になるユニ。だが、彼女から立ち上るとす黒い何かの量がさらに増える。

ユニ「大体、あなたが残して行つた仕事は、ロクな物がありませんでしたよ？ グループの仕事の不備についての謝罪やら、セクハラおやじとの会食など……、特にセクハラおやじとの会食三連発は、とっ……てもロクな仕事ではありませんでしたわよ」

エルネストはユニから立ち上る「黒い何か」に怯えながら、地雷なのだが、それでも聞かなくてはならないので、その内容を聞いた。

エルネスト「ぐ……具体的に……どういつた事が？」

ユニ「まずは、怒鳴られましたね。「こんな小娘を変わりによこしてくるなんて何事だ！」とさんざん嫌味を言われましたわね」

顔を青くするエルネスト。

ユニ「ま、まだそれくらいなら良いですわよ。けど、会食した人物の中にはセクハラをしまくる人もたくさん居ましてね、胸やお尻をジロジロ見るのはまだカワイイ、中には食事手中を握つて、ソレを頬擦りしたり、キスしようとしたり、お尻を触ろうとしたりするし……中には、なれなれしく肩をだき、「どうだい？ この後、実はホテルに部屋を取つていてね、もしキミさえ良ければ、この後、

「・・・」なんて言ってくるんですよ？まったく中年太りで腹が出ているハゲ親父が、何ボケた事を行っているんでしょうね？「鏡見てから言え！」って感じですよ、まったくウフフフフ・・・」
さらに顔を青くするエルネスト。

エルネスト「そ・・・そうか、しかし、その様子だと何とか上手くかわした様だね」

ユニ「ええ、でも私、あまりにもセクハラが過ぎるから、思わず相手を極大呪文で死体も残らずに消滅させちゃおうと何度思った事か・・・でも、それはさすがに不味いと思って、その怒りを我慢して胸に今までずっと溜め込んできたんです この状況の原因である人物に・・・ゼンブブツケルタメニ・・・」

エルネスト顔色が青を通り越して、土色に変わる。

ユニ「サテ、デハサツソク、タメコンダモノヲブツケサセテモラオウカ。」

そう言っただけでエルネストの襟を掴み引きずって歩き出すユニ。

後日、その姿を見た特務捜査課の面々は、その様子をこう言っていた。

「アレはまさしく魔王だ。さすが管理局の白い魔王の元祖」と言っていた。

ちなみにこのコメントを言った人物は、数日後、桃色の極太の光りに飲み込まれ、病院送りにされ、同じく病院送りにされたエルネス

ト氏と仲良くズットを並べて入院したと言っ。

第66話 女神と花輪の約束？（前書き）

どうも、剣 流星です。

今、重い物を持ったせいか、腰を痛めて呻いています。

うっ、痛い………

それでは第66話をどうぞ。

第66話 女神と花輪の約束？

第66話 女神と花輪の約束？

晶「キミの事がますます好きになったよ！」

晶の言った事を考えながら、別荘内の自分に宛がわれた部屋に戻るふたば。

ふたば（…………あの言葉の好きって言う言葉…………どう言う意味なんだろう？）

そんなふうを考えながら部屋の扉を開けて中に入る。

部屋の中のベットには、先ほどふたばが寝かせつけた桜がスヤスヤと寝ていた。

そんな桜の寝顔を見て、ふたばは「今ココで考えても答えは出ない」と言う結論に達し、自分もベットに入り、そのまま寝た。

やがて、ふたばは己の意識が何処かに引き込まれるような感覚を感じていた。

ふたばは「ああ、またサキのコスモスフィヤに行くのだな」と思っていた。

やがて引き込まれる感覚が終わったので、閉じていた目を開けてみる…………が

ふたば「…………え？」

ふたばの目の前に広がっている光景は、何時ものサキのコスモスフイアのソレではなく、本やテレビなどで見たギリシャの遺跡のような建物群だった

ふたば「ここ……どこ？」

回りを見渡し、そして次に自分の体を見た。

服装こそ寝た時の寝巻きの姿だったが、体が半透明になっているのである。

ふたば「……………まるで幽霊みたい……………」

そんな事を言っていると、ふたばは後ろから声を掛けられた。

サキ「ふたばちゃん！」

ふたば「あ！サキちゃん！」

そこにはふたばと同じように半透明な体になっているサキが居た。

ふたば「ココにサキちゃんが居るって事は、やっぱりここはサキちゃんのコスモスフイアなの？」

ふたばは自分が思っていた事を言ってみた。

サキ「ううん、ここはサキのコスモスフイアじゃありません。それは間違いないです。でも、じゃあここが何処なのか？と言われると……………」

ふたば「分からないって事？」

サキ「……………はい。」

そう言った後、二人はここが何処なのか？と考え始めた。

ふたば「雰囲気的には私達の世界にあるギリシャっぽいんだけど……」

そんな風にふたばが言葉を漏らしていると、不意に聞き覚えのある声かふたばに話しかけてきた。

聖時「あれ？ふたば？なんでここに？それに隣の子は？あとここは一体どこなんだ？僕は確か部屋で寝てたはず……」

ふたばは聖時の声が出たのに驚き、慌ててそちらの方を向いた。そこには自分たちの同じように半透明になっている聖時が佇んでいた

ふたば「せ……………聖時?!」

……………

・ ・ ・ ・ ・

聖時「・・・じゃあ二人もここが何処なのかは解らないんだね。」

ふたば・サキ「うん（はい）」

そろって返事をする二人。

ふたばが聖時に気づいて驚いた後、三人は互いに自己紹介をし、お互いの今に至りまでの状況を説明しあった。

聖時もサキも、ふたばからお互いの事を聞いていたので、すんなりと自己紹介は済んだ。サキが聖時を見て、女の子と勘違いし、ふたばの事を、実は「同性愛主義者なの？」と聞いた事を除いてではあるが・・・

サキ「それにしても聖時さんは、本当に女の子みたいですね？髪の毛はサラサラですし、肌はスベスベですし、瞳はパツチリですし・・・ねたましいですね・・・」

（な・・・なんか不名誉な事で、ちょっと睨まれているような？）
と言つことを思いながら聖時は自分たちの置かれている状況を整理した。

聖時「と・・・とにかく、ここに来る直前の記憶は、三人とも部屋

のベットで寝ていたって事で間違いないんだね。」

ふたば・サキ「うん（はい）」

聖時「と、なると・・・僕たち三人は意識だけをこの場所に飛ばされたって所かな？」

サキ「い・・・意識だけを？」

ふたば「あ！だから私たちの体、幽霊みたいに半透明なんだね。」

聖時「うん、・・・しかしなんでこんな事になってるんだろう・・・？！」

聖時が考え始めたその時、聖時はある物を感じ取った。

聖時「これは・・・小宇宙？！」

ふたば「え?!・・・本当だ、小宇宙だ。」

二人はこちらに近づいてくる小宇宙を感じ取った。

聖時達は童虎から時々発せられる小宇宙を身近に受けていたので、いつからか小宇宙を感じられるようになっていた。

二人は自分たちが普段感じ取っている童虎とも違う小宇宙でありながら、どこことなく似ている小宇宙に戸惑いながらも、近寄ってくる小宇宙の方向を向いた。

サキ「?二人ともどうしたんです?同じ方向を向いて?」

ふたば「…………誰かこっちに来るの。」

聖時「…………ああ。」

サキ「え？」

そう言つてサキも釣られて同じ方向を見た。

やがて、その方向から長い黒髪で、目を閉じた一人の男が歩いてこちらに来るのが見えてきた。

ふたば「…………誰だろう？」

聖時「…………さあ、でも敵意は無いみたい。」

ふたばとサキを庇うように前に出ながら、こちらに来る男を見る聖時。

やがて男は、三人の前まで来て話しかけてきた。

男「警戒しないでくれ、こちらは君たちに危害を加えるつもりはない。」

聖時「…………あの、あなたは？」

紫龍「俺は龍星座リウセイザの聖闘士セイウトシ、紫龍しじゅう、女神アテナの命でキミ達を迎えに来た。」

《つづく》

第66話 女神と花輪の約束？（後書き）

本編内にあつた聖時達のコスモ小宇宙を感じ取る力は、聖時とふたば以外の、別荘によく集まるメンバー全員が所有している事になっています。

第67話 女神と花輪の約束？（前書き）

どうも、剣 流星です。

最近真夏日が続いていささか夏バテ気味です。

うー、調子悪い……

で、では第67話をどうぞ。

第67話 女神と花輪の約束？

第67話 女神と花輪の約束？

聖時「ドラゴン龍星座のセイント聖闘士、しりゅう紫龍？つて……もしかして！」

ふたば「聖時、もしかしてこの人って！」

聖時「ああ、童虎先生が話していた先生の弟子だった人だ。」

紫龍「！老師を知っているのか?!」

聖時「ええ、僕は童虎先生から戦い方や身の守り方を学んでいるものです。ですから僕はあなたの弟弟子に当てはまりますね。」

紫龍「老師の新しい弟子……そうなのか……それで老師は今どうしている？あ、え」と……」

聖時「聖時です。かみやせ神谷聖時。で、こっちが……」

ふたば「渡良瀬ふたばです。で、こっちにいるのが私の友人の……」

サキ「サキと言います。よろしくお願いします、紫龍さん」

紫龍「あ、ああ、よろしく。それで老師は？」

聖時「あ、はい、今は住み込みで、家の庭師として働きながら、僕らに色々と教えてくれています。」

紫龍「そうか、ご無事だったか。」

紫龍は童虎の無事を知り、安堵した。

聖時「先生は時々、あなたの事を話してくれます。いささか人間が硬い所あるのが玉に傷だが、ワシの自慢の弟子だと。」

紫龍「老師……。」

紫龍は自分の師が行ってくれた言葉を嬉しそうにかみしめた。

聖時「あの、それで、女神アテナの命で僕らを迎えに来たって……どう言うことですか。」

紫龍「あ、そうだ。忘れるところだった。実は女神アテナが君たちを呼んでいる。どうか一緒に来てくれないか？」

聖時「女神アテナが……。」

ふたば「私達を……。」

サキ「呼んでいる？」

紫龍「ああ。」

聖時「……どうする？」

聖時はどうするかをふたばとサキに聞いた。

ふたば「どうするって言われても、ここでこうしてても仕方がないし、それに……」

サキ「もしかしたら私達がこうなっている事の原因を知っているかもしれないから、会いに行く事に関してはサキは賛成です。」

ふたば「そうね、私も会ってみたほうがいいと思う。」

聖時「そうか、なら……紫龍さん、案内お願いします。」

*

紫龍に案内されて、今聖時達は女神アテナが居るといわれている十二宮の

奥にある教皇の間に向かっていた。

教皇の間に行くには聖闘士最強である黄金聖闘士が守護する十二宮を抜けなくてはならないのである。

その十二宮であるが、冥王ハーデスとの戦いで、その殆んどの黄金聖闘士が死に絶え、今現在はずべての宮が守護者不在になっている。その十二宮の階段を紫龍に案内されながら、聖時達は登っていた。

丁度今は、第5の宮「獅子宮」を抜けて、第六の宮「処女宮」へと向かう階段を登っていた。

その階段を登りながら、聖時は自分の前サキと話しながら登っているふたばを見て、ふたばが中庭で晶と会っていた時の事を考えていた。

聖時（晶が言っていた「キミの事がますます好きになったよ」という言葉、どういう意味なんだろう・・・ふたばはその事、どう考えているんだろう・・・）

そんなふうを考えていると、前をふたばと一緒に歩いているサキが、聖時に話しかけてきた。

サキ「そう言えば聖時さんは女の人に間違われるのを極端に嫌いますね？なのに何で髪を短くしないんですか？髪が長いままだと、女の人に間違われやすいんじゃない？」

サキが先ほど聖時の事を女の子と間違えてしまったので、聖時が女の子に間違われやすい原因のひとつと思われる、長い髪について聞いてきた。

ふたば「確かに髪が長いのも女の子に間違われやすい原因の一つだと私も思う。」

ふたばの言うとおり、確かに聖時は母親譲りの美しい髪をしていた。それが同じく母親似の顔と相まって、女の子としか見えない容姿を形作っている。

サキ「・・・何か理由があるんですか？」

サキは、女性に間違われやすいと言っリスクをしても、聖時が髪を短くしないのは何故なのかと疑問に思い、その理由を聞いてみた。

聖時「理由か。・・・そうだね、髪を短くしない理由、それは死んだ母さんと妹の桃華との繋がりだからかな。」

ふたば「繋がり？」

聖時「うん、繋がり。僕が何で髪を長いままにしているのは、死んだ桃華と母さんとのお揃いにしていたからなんだ。母さんも桃華も僕とお揃いの髪型をするのがとても好きで、僕自身もそれをあまり嫌いじゃなかったから、二人に併せてずっと髪を長いままにしていたんだ。」

サキ「そっか・・・だから長い髪は二人とのつながりなんですか？」

聖時「うん。」

ふたば「でも長い髪の方が聖時には似合ってると思う。」

サキ「はい！聖時さんの綺麗な髪と相まって、とても綺麗です。ちょっと羨ましいぐらいです・・・。」

聖時「そう？けどサキだつてとても綺麗な髪だと思つよ？」

サキ「えっ！？そ……そうですか？あ……ありがとござ
います／＼／＼／＼／」

聖時に綺麗な髪だと言つて褒められたサキ、顔を赤くして嬉しそ
うな顔をしながらうつむいた。

ふたば「……聖時はサキちゃん位の長さの髪形が好きなの？」

聖時「？好きだよ。けど、一番好きなのは母さんや桃華のような長
い髪型だな。」

サキ「そ……そうなんですか？（そっか、長い方が好きなんだ・
……こんど髪を伸ばそうかな）」

長い方が好きだと聞いたサキは髪を伸ばそうかと思ひながら回り風
景を見た。

すると次の「処女宮」のすぐ横に花園があるのを見て、先頭を歩い
ている紫龍にアレは何なのかと聞いてみた。

サキ「紫龍さん、次の宮の横に有るアレは花園ですか？」

紫龍「ん？ああ、アレは沙羅双樹の園だ。」

サキ「沙羅双樹の園？」

紫龍「ああ、以前あつた冥王との戦いで一旦は無くなってしまつた
のだが、サンクチュアリ聖域近くにあるロドリオ村の人々の手伝いもあつて今は前

以上の素晴らしい物になったと言う。「

サキ「へーそうなんですか、確かにココから見ても綺麗ですね。・
・・・あつ、そうだ！ねえ紫龍さん、女神様と会った後、あの花
園に入っても良いでしょうか？」

紫龍「？沙羅双樹の園に？」

サキ「はい」

紫龍「んー、女神アテナにお伺いしてみないと何とも言えない。直接女神アテナ
にお伺いを試してみられないか？」

サキ「そうですね、解りました。」

ふたば「サキちゃん、そんなに花園に入りたいの？」

サキ「うん、ちょっとね、最近園長先生に教わったある物を作って
見たくて。」

聖時「ある物？それは一体何？」

サキ「今は秘密です」

そう言いながらサキは再び黙って歩き出した。

聖時とふたばはサキの「秘密です」の言葉で、頭に？マークを浮
かべながらサキと紫龍につづいて黙って歩き始めた。

《つづく》

第68話 女神と花輪の約束？（前書き）

どうも、剣 流星です。

長らく放置して申し訳ありません。

では早速の第68話をどうぞ。

第68話 女神と花輪の約束？

第68話 女神と花輪の約束？

十二宮最後の宮・双魚宮を抜けて教皇の間へと続く階段を登る聖時達。

やがて目の前に、今までの宮よりも大きい宮殿が見えてきた。

紫龍「あそこが女神^{アテナ}が待っている教皇の間だ」

聖時「他の宮と違って、とても大きい。」

サキ「はい、倍近く大きいです。」

ふたば「うん。」

教皇の間を見て、その大きさに驚きながら見上げる聖時達。

そんな聖時達に階段の上の方から降りてきながら声をかける者が居た。

????「お？やっときたか。」

声の人物は金髪で、片方の目を包帯で覆っている男だった。

紫龍「氷河、迎えに来たのか？」

先頭に居た紫龍が男を氷河と呼び、気軽に声を掛けた。

氷河「ああ、それと沙織さん……女神アテナがわざわざ呼び寄せた「異世界の女神候補アテナ」がどんな人物なのか見てみたくてな。」

そう言つて氷河は聖時達を見た。

氷河「うん？紫龍、女神アテナが呼び寄せた女神候補アテナの少女は確か2人じゃなかったか？」

紫龍「ああ、後一人は、向こうに行つてから老師が弟子にした、俺の弟子だ。」

氷河「老師の新しい弟子？！老師は無事だったのか？！」

紫龍「ああ、どうやら彼らの世界に流れ着いていたみたいだ。」

氷河「そうだったのか……無事だったのか。」

そう言いながら氷河は老師の無事を喜んだ。

氷河「で、紫龍、弟子と言つていたが、妹弟子の間違いじゃないか？ここにいるのはみんな女の子みたいなんだが……。」

氷河は先ほど紫龍が言つていた「弟子」と言う言葉を聞いて疑問に思ったことを口にした。

紫龍「？女の子？何言っているんだ？聖時は男だぞ。」

氷河「聖時？」

聖時「あの……僕ですけど……」

そついいながら、おずおずと手を上げる聖時。

氷河「うん？君が紫龍の弟弟子？妹弟子の間違いじゃないか？」

そつ言いながら氷河は聖時を見た。

何度も言うが、聖時の外見は、そこらに居る女の子よりも女の子らしく、可愛い外見をしていた。くびれた腰に白い肌、長く綺麗な髪と綺麗な顔立ち、そして瞳……あえて言うなら「おと僕」のミヤ コウジ ミ ホのような容姿なのである。女と間違われるなど言う方が無理なのである。

聖時「ハ、ハハハ……ここでも女の子に間違われた」 or z

サキ「せ……聖時さん、元気だしてください！」

ふたば「そ……そうだよ、外見が女の子に見られのがなによ！中身はちゃんとした「男の娘」だって事、私はちゃんと知ってるから、元気出して。」

聖時「男の娘言うな！」

氷河「え、え」と……と、兎に角、男だつてことで良いんだな？」

聖時「……はい。」

落ち込んだ状態のまま、返事をする聖時。

氷河「わ．．．悪かったな、女に間違えて．．．」

聖時「いいですよ、慣れてますから．．．」

氷河「．．．」

慣れていると言つ言葉を聞き、悪いことをしたな〜と思う氷河。

氷河「あ、え〜と．．．と、兎に角、沙織さん．．．女神が
待ちだ。早く行くでしょう。」

紫龍「そ．．．そうだな。」

気まずい雰囲気を変えるべく、女神アテナの下に行くよう促す氷河。

サキ「そ．．．そうですね。」

ふたば「そ．．．そうだね。行こう聖時。」

聖時「．．．異世界でも間違われた．．．」

ふたば「ほら行こう。」

そう言つて動かない聖時の手を取つて、引っぱって行くふたばと、
ふたばに引きずられる聖時。

そうやって、一同は教皇の間に入って行った。

石作りの神殿内をしばらく進んで行くと、やがて正面に大きな両開きの扉が現れる。

その扉の前で一旦立ち止まる一行

氷河「女神はこの奥でお待ちだ。」

そう言つて氷河はその両開きの扉を開けて入り、氷河に続いて紫龍が続きその後には聖時達が続いた。

部屋の中には赤い絨毯が敷いてあり、それが部屋の置くへと続いており、その奥の床は一段高くなつた作りで、一段高くなつた床の上には金色の玉座が置かれ、その玉座に一人の女性が座っていた。

その女性はとても神々しい美しさを持ち、そしてとても雄大な小宇宙を発していた。

そのあまりの美しさと、発する雄大な小宇宙に当てられ、聖時達は、思わずその前に膝を着いて頭を垂れていた。

紫龍「女神お言いつけになつた、者達をお連れしました。」

女神「ご苦労様です。」

そう言つた後、紫龍と氷河は玉座の脇に立つた

アテナ「そんなに畏まらないください。気を楽しんでください。こちらの都合で一方的に呼び出したのですから。」

硬くなつてい思つた女神は緊張して硬くなつている聖時達にやさしく声をかけた。

聖時「あ……はい。」

ふたば「わ……わかりました。」

そう返事はしたが、聖時達はまだ緊張が抜けずに居た。

アテナはそれを感じ取ったが、話が進まなそうだったのでそのまま話し始めた。

アテナ「私はアテナ、まずは一方的にあなた達をココに呼び出したことにお詫びを申し上げます。」

サキ「い……いいえ、サキは別に気にしてません。」

ふたば「私もです。」

聖時「僕も気にしてません。」

女神「そう言っていたら、助かります。では、なぜあなた達をココに呼び出したかについてですが、実はあなた達にお願いがあるのです。」

ふたば「お願い？」

アテナ「はい、ふたば、サキ、あなた達二人に、あなた達の世界の女神アテナとなってもらいたいのです。」

ふたば「え?! 私たち二人が……」

サキ「女神アテナに!?!」

アテナ「はい。」

ふたば「ちょ……ちょっと待ってください！なんで私たちなんか……」

サキ「そ……そうです、サキなんかじゃとてもじゃないですが、勤まりません……なんでサキたちなんですか？」

ふたばとサキはアテナに選ばれた事に対し驚き、自分じゃとても勤まらないと思い、その事に疑問を思っ、その理由を聞いた。

アテナ「あなた達を何で選んだかですか……それはふたば、あなたが私の力の一部、二ケを呼び出して使ったからです。」

ふたば「二ケを？」

ふたばはアテナが言った二ケという言葉聞いて、今日、桜を救うために使った自分のアーティファクトの勝利の女神ニケのウイの杖の事を思い出した。

ふたば「アレを使ったから……」

アテナ「ええ、故意か偶然か……ふたば、あなたが呼び出した二ケは、誰でも使うことができる代物ではありません。」

ふたば「だから、選ばれたと？」

アテナ「はい。」

ふたば「じ……じゃあ、サキちゃんは？なんでサキちゃんは選ばれたんです？」

サキ「そ……そうです、サキはどうして選ばれたんです？サキはふたばちゃんみたいに勝利の女神ニケのじょうの杖を呼び出して使ったりしてません。」

アテナ「サキを選んだ理由……それは女神の力を半分に分けて、互いに宿しているからです。いわばあなた達は、二人で一人の女神なのです。」

サキ「サキたちが……」

ふたば「二人で一人前の女神。」

ふたばはその言葉を聞き、自分とサキの胸に現れた紋章と、時々見るお互いの夢がくっついて、同じ夢を見るのはそう言う理由があったからなのかと思った。

サキ「なるほど……そう言う訳があったんですね。」

サキは女神アテナの言葉を聞き、納得した。

聖時「女神アテナ……いいでしょうか？」

アテナ「？あなたは？」

聖時「向こうの世界で天秤座ライブラの童虎の新しい弟子になった聖時とい
います。」

アテナ「老師の新しい弟子？」

聖時「はい。先ほどの話で、ふたばたちを選んだ理由は解りましたけど、先程の説明だと、なぜ僕たちの世界での女神アテナを作らなければならぬのか？そしてふたば達を女神にして何をやらせるのか、まさかその理由は「二人に素質があるから」と言う理由だけではないですよ？」

聖時は「なぜ今、新たな女神アテナが必要なのか？」その理由に付いて問いかけた。

アテナ「二人を女神にする理由・・・それはあなた達の世界に逃げ込んだ冥界の王・・・冥王ハーデスと彼が率いる冥王軍からあなた達の世界を守ってもらいたいからです。」

聖時「め・・・冥王・・・」

ふたば「ハーデス?!」

つづく

第69話 女神と花輪の約束？（前書き）

どうも、剣 流星です。

今回ほど自分の文才の無さを感じずには居られませんでした。
自分にもっと文才を~~~~!!

では第69話をどうぞ。

第69話 女神と花輪の約束？

第69話女神と花輪の約束？

聖時「め・・・冥王・・・」

ふたば「ハーデス?!」

聖時とふたばはその名前を聞いて驚愕した。

冥王ハーデス、その名前を聖時達は師である童虎から聞いていた。死の国に君臨し、人間を容赦なく断罪する無慈悲な神。

その無慈悲までの圧倒的な力の詳細を童虎から聞いていた聖時達は、女神アテナの口から出た「ハーデスが自分たちの世界に逃げ込んだ」と言う言葉を聞き、恐怖した。

ふたば「な・・・なんで冥王が・・・この世界の神が・・・私たちの世界に?」

ふたばの言葉を聞いた女神アテナは少し辛そうな顔をしながら話始また。その話とは、アテナ軍と冥王軍との間にあった戦いで、アテナと彼女に率いられた数人の聖闘士達セイントは、冥界の最奥にあるエシシオンまで進軍し、そこでハーデスの側近2人とハーデス其の者を撃つた。そして、ハーデスが作った冥界は崩壊し、アテナ達は其処から脱出したのだが、その崩壊する冥界の中から、冥王と側近の二人、そして・・・冥王軍の戦士である108人の冥闘士スベクターの魂を連れ出した物

が居るといふ。そしてその者が、聖時達の世界の人物であり、その者の協力で、冥王軍は徐々にではあるが復活してきており、このままでは冥王ハーデスの復活も時間の問題だといふ。

アテナ「……本来なら私達が行かなければならないのですが、私たちは基本的にはあなた達の世界に行くことができません。稀に偶発的に起きる次元の隙間から、からあなた達の世界に行く者もいます。童虎達なのがその最もたる例です。ですが、この方法はあくまで稀に発生する自然現象……誰かを自分達たちで送るということはできません。ですから、私達は基本的にはあなた達の世界に直干渉することができません。今回の事も……ふたば、貴方が二ヶをもっていたおかげで、二ヶを通してあなた達の意識体をこちらに連れてこられたのです。」

聖時「そ……そうなんですか。」

聖時はそう返事をしながらふたば達の顔を見た。

どうやら迷っているようだ。

ふたばは自分達の世界にハーデスがいると聞いたとき、自分の大切な人達……家族や友達などが、その犠牲になるところを想像した。冥王ハーデスの容赦の無さは童虎から聞いていた。かつてこの世界でロストキャンバスやグレイテスト・エクリプスなどを使い、地上の生きとし生けるもの全てを死に追いやるうとした。もしそれらを自分の住んでいる世界でやられたら……そして、それに自分の身近な人たちが巻き込まれたら……それを考えたふたばはゾツとした。

ふたば（みんなを守りたい！けど……私に女神アテナなんてが務まるの？）

ふたばは童虎から聞いた、目の前にいる女神アテナのしてきたことを思い出した。海王ポセイドンとの戦いの時、地上の崩壊を少しでも引き伸ばすために、女神アテナ自らが海界の中心を支える柱、メイン・ブレド・ウイナに入り、地上に降り注ぐハズの雨水をその身ひとつで受けたと言っ。

そんな真似が自分にも出来るか？ふたばは女神アテナとしてのあまりにも大きい使命とその重さ、プレッシャーのせいで返事をができず、とても苦しそうな顔をした。

ふたば（無理！私には無理だよ！）

アテナはそんなふたばの顔を見て、そんな顔にさせてしまった事にすまないと思いつながら口を開いた。

アテナ「そんな顔をさせてしまつてすいません……ですが、どうしても私達はあなた達に頼む以外には無いのです。ただでさえハーデス率いる冥王軍、そしてその冥王軍に協力している者達……さらに、ハーデスの邪悪な小宇宙コスモの影響で、活発化したあなた達の世界の邪悪な者たち……これらがあなた達に牙を剥くでしょう。」

聖時「僕たちの世界の邪悪が？」

アテナ「ええ、現にあなた達の周りでは、既にその影響が出ているはずですよ。」

聖時・ふたば「「?!」「」」

聖時とふたばはアテナの「自分たちの周りに影響が出始めている」という言葉を聞き、とあることがらが思い浮かび、ハツとした。

それは今、聖時たちが追っている意識不明事件の事である。

アテナ「その様子だと、身に覚えがあるようですね。」

ふたば「は・・・はい。」

ふたばはアテナから聞いた言葉で考え込んだ。

もし先ほど言われた事が本当なら、もはや無関係では居られないどころか、既に関係していることになる。それにこのままだと、自分たちの世界が大変なことになると思った。

だが、女神アテナとしてのこれからの未来未来の事にプレッシャーを感じ、そのことに不安になり怖くなった。だが・・・

ふたば（このままじゃ・・・みんなが・・・）

話を引き受けて、みんなを守りたいという思いと、引き受けた先にあるあ女神アテナとしての未来未来にあるプレッシャー・・・その思いのせいで、ふたばは返事ができないでいた。

ふたば（わ・・・わたしは・・・）

どうすればいいの？と思った次の瞬間、横からふたばの手をそっと優しく包む手が現れた。

ふたば「?!さ・・・サキちゃん？」

ふたばの手を優しく包んだ手の持ち主は、隣にいるサキだった。

サキ「ふたばちゃん・・・大丈夫です。女神アテナにはサキだけがなりました。」

ふたば「え?!」

サキ「女神様、女神をやる使命、それはサキ一人で受けます。」

アテナ「サキ・・・あなた一人で受けるつもりですか？」

サキ「はい、女神としての使命・・・そんな大きくて大変な物をふたばちゃんに背負わせたくありません・・・ですから女神にはサキ一人でなります。」

ふたば「サキちゃん・・・どうして・・・」

一人で引き受けようと思ったの？サキちゃんは大丈夫なの？怖くないの？そうふたばは思った。だが、次の瞬間、ふたばが見たサキの手を見て、サキが「どうして大丈夫なのか？」と言う考えは吹き飛んだ。

サキ（?!・・・震えている?）

サキが握り締めていた手は震えていた。

ふたば（サキちゃんも本当は怖いんだ。だけど、私のために一人で女神になると・・・）

ふたばは自分の事しか考えていたかった自分が恥ずかしくなった。

ふたば（そうだ・・・サキちゃんだって本当は私と同じように怖いんだ・・・なのに私は、自分のコトばかり考えて・・・このままサキちゃんに全部押し付けて本当にいいの?）

ふたばはサキの事を思った。夢の中のコスモスファイア内でしか会うことができなかったが、彼女は入院中の辛いとき、術後の辛い治療、遅れた勉強を取り戻そうとしていた時の辛さ、大変さを一番に聞いてくれた一番の友達だと。

ふたば（……その友達に全てを押し付けるなんて出来ない！）

そう思った瞬間、ふたばは声を上げていた。

ふたば「まつ……待つてください！私も……私も女神アテナになります！」

サキ「ふたばちゃん？」

アテナ「ふたば……いいんですか？」

ふたば「女神アテナの使命がどれほど大変なのかは童虎さんから話を聞いて、分かっているつもりです。ですから、私一人ではとても無理だと思いました。けど……」

そう言っつてふたばはサキの方を見た。

ふたば「サキちゃんと一緒なら……二人でなら、やり遂げられると思います！」

サキ「ふたばちゃん……ありがとう。」

ふたば「ううん、お礼を言うのは私だよ。サキちゃんが先に引き受けるって言うてくれたから、私も引き受けるって言えたんだもん。」

サキ「ふたばちゃん。」

二人は互いに手を取り合って微笑んだ後、意を決した顔を前にいる女神アテナに向け、声を揃えてこう言った。

ふたば・サキ「この話、受けます！私達、女神アテナになります！！」

その声は綺麗に重なり、そして、とても力強さに満ちていた。

アテナ「二人共・・・いいんですね？引き受けたと言うことは、これから先、様々な危険や辛い試練があなた達に迫ります・・・それでもいいんですね？」

ふたば・サキ「はい！たとえこの先、どんなに辛くても、私達は一人じゃない・・・サキ（ふたば）ちゃんが一緒だから！」

聖時はそんな二人の意思の強さを見て、「危険だから断れ！」とは言え無かった。

聖時（二人の意思は硬そうだな・・・なら、僕に出来る事は・・・）

そう思った聖時はこの場にいる人全員に聞こえるぐらいの大きな声で二人に対して出来ることを口にした。

聖時「・・・なら、僕はそんな二人を守るよ。」

ふたば「え?!」

サキ「聖時さん？」

聖時「二人が女神アテナなるんなら、僕は今日から二人と共に戦い、二人を守る、二人の聖闘士セイントになる！」

ふたば・サキ「せ……聖時さん」

二人は最初、驚いた顔をしたが、やがて喜びに満ちた涙を流す顔になった。

二人は話を受けると言ったが、心のどこかには、まだこれから有るであろう戦いへの不安や恐怖がいくつもあつた。だが「聖時の聖闘士トになって二人を守る！」宣言はそんな二人の不安や恐怖を吹き飛ばし、二人に言いしれない位の喜びを与えた。

サキ「せ……聖時さん。」

ふたば「せ……聖時。」

サキ・ふたば「「守って……くれますか？私達の聖闘士セイント？」」

自分の大切な人たちと大切な人たちが住んでいる世界を守るために女神アテナになると勇氣ある決断をしたふたば、そんなふたばを支え、協力していこうと決めたサキ。そんな勇氣あつて、心優しい二人を守りたいと思つた聖時はこう言つて誓つた。

聖時「ああ、誓う！僕は二人を守る！！」

つづく

第70話 女神と花輪の約束？（前書き）

どうも 剣 流星です。

相変わらずの亀更新の上、今回もあまり話が進んでません。

本当にスイマセン。

では第70話をどうぞ。

第70話 女神と花輪の約束？

第70話 女神と花輪の約束？

聖時の「二人を守る！！」と言った声は教皇の間に響いた。

アテナ「……聖時、あなたは一人を守るために、あなた達の世界の聖闘士セイントになると言っんですね？」

聖時「はい！」

アテナ「そうですか……良いお友達を……仲間を持ちましたね？」

そう言っアテナて女神は、微笑みながらふたばとサキを見て

ふたば・サキ「はい」「

二人は嬉しそうに返事をした。

アテナ「では、改めてお願いします。ふたば、サキ、そして聖時、どうかそちらに逃げ込んだハーデスの件……どうかよろしくお願
いします。」

三人「……はい！任せてください！！」「」

三人の元気な返事を聞いて、満足そうに微笑むアテナ女神。

アテナ「では、新たな女神と聖闘士セイントの誕生に対して、私たちからの贈り物を贈りましょう。」

聖時「お・・・贈り物ですか？」

サキ「そ・・・そんな・・・贈り物なんて」

ふたば「お・・・恐れ多いです。」

アテナ「遠慮しないでください。それにこれから渡す贈り物は、ハーデス率いる冥王軍との戦いに必要になる物や、力になってくれる物ばかりなので受けとってもらわないと困ります。」

聖時「、そう言う理由があるなら・・・」

聖時はそう返事をした後ふたばとサキの方向を見、二人は無言で首を立てに振った。

アテナ「ではさっそく渡しましょう。まずは、聖時、こちらに。」

女神が聖時に前に出て、自分に近くに来るように招いたので、聖時は前に出て女神アテナが座っている玉座のすぐ近くまで近づき跪いた。

そんな聖時に対して女神アテナは玉座から立ち上がると、聖時の前に立つと、聖時の額に右手の人差し指を当てた。

聖時「？」

聖時は女神アテナの行動に対して頭に？マークを浮かべたが、次の瞬間、

額に当ててある女神アテナの指から黄金色の光が聖時へと伝わり始めた。

聖時「こ……これは?!」

その事に驚く聖時。やがて光が収まると、女神アテナは聖時の額から指を離した。

アテナ「今、あなたとふたばとの間にある力の線ライン……仮契約と言いましたか?とにかく、あなたからふたばへと流れる線ライン以外にもう一つ線を増やし、ふたばからあなたへも力が流れるようにしました。」

そう言いながら女神アテナは玉座に再び座りなおした。

聖時「え?それって……もしかして仮契約バクティオーで出来たパスの事ですか?」

聖時がそう言った次の瞬間、ふたばの目の前に一枚の仮契約カードバクティオーが現れた。

ふたば「え?これって……聖時の仮契約カード?」

現れたカードを手に取ったふたばはそこに描かれている絵を見た。

そこには黒いアンダースーツの上に白を基調にした鎧の様な物を身に纏っている聖時が居た。

氷河「?!こ、これは、色こそ白だが、この形は紫龍の身に纏っている龍星座ドラゴシンの聖衣クロスと同じだ?!」

ふたばの持っているカードの絵を見た氷河が、カードの中で聖時が見に纏っている鎧を見て叫んだ。

紫龍「な・・・なに?!」

聖時「え?! 聖衣?! な・・・なんで・・・」

困惑する聖時達を他所に女神が口を開いてカードのことに付いて話し始めた。

アテナ「それは、この世界の聖衣の力を召還し具現化したものです。小宇宙に目覚めていない今のあなたではそれを身に纏うことが出来ないのでしょうが、あなたが真に小宇宙に目覚めた時、その聖衣はあなたの力になつてくれるはずですよ。」

聖時「僕の聖衣・・・龍星座の聖衣と同じ形なのは、僕が竜の騎士の血を引いているからなのかな?」

ふたば「たぶんそうなんだろうね。」

二人はカードを見ながらそう言った。

アテナ「この方法なら、あなた達の世界に行つた童虎にも聖衣を持たせることが出来ます。戻った後、この事を教えてあげてください。この先の事を考えると、聖衣が無いと辛いでしょから・・・では次に、ふたば、サキ、前に出てください。」

ふたば「? はい。」

サキ「?」

二人は聖時と入れ替わる形で女神アテナの前に出た。
そんな二人の前に立った女神アテナは右手をふたばに、左手をサキの頭の上アテナにそれぞれ手を置いた。

アテナ「今からあなた達の女神の力の源の一つである紋章に、私の力を分け与えて、紋章の失った力の不足分を補います。」

ふたば「紋章の失った力を・・・」

サキ「女神様アテナの力で補う？」

アテナ「はい、あなた達の宿している紋章は、本来は一つ紋章でした。それが何らかの理由で二つに引き裂かれてしまい、さらに引き裂かれた時に力の大部分を失ったのです。ですがその失った力を私の力で補うのです。」

そう女神アテナが言った次の瞬間、女神アテナからふたば、サキへと黄金の光が腕を伝って注がれ始めた。その光の量は先程の聖時の時と比べ物にならないほどである。

ふたば「こ、これは?!」

サキ「す、すごい!」

二人は女神アテナから注がれた力を感じ取り驚いていた。
その力は雄大で、とても優しく暖かい物だった。
その力はまるで染み込むように二人に吸い込まれていった。
やがてある程度の力が注がれると、女神アテナは二人の頭から手を離れた。

アテナ「うっ！」

手を離れた瞬間、女神はまるで立ちくらみをしたかのようによろめいた。

紫龍「アテナ！」

側にいた紫龍が慌てて女神アテナを支える。

アテナ「だ……大丈夫です、それよりも……氷河、例の物を。」

氷河「あ、はい。」

アテナは近くに居た氷河の方を向くと、氷河はコクリと首を立てに一度だけ振ると、玉座の少し後ろにあるテーブルの上に置いてある物を持ってきて、聖時達の前に差し出した。

聖時「こ……これは？」

差し出された物は、きれいな細工を施してある箱と、中に何かが入っている水色のガラスのビン、そして数珠と鞘に収められた黄金の短剣だった。

聖時「これは？」

アテナ「これから先の、ハーデスとの戦いで必ず役に立つ物です。」

ふたば「役に立つ物？」

アテナ「ええ、まずこの箱ですが……」

女神はそう言いながら細工が施されている綺麗な箱を手にとって説明し始めた。

アテナ「この箱はかつてハーデスの側近、死の神・タナトスと眠りの神・ヒュプノスの魂を封じ込めていた聖櫃です。今、箱の中にはこの・・・瓶のなかに入っている私の血で書かれた護符が十数枚入っています。」

そう言っただけで女神は瓶と箱の中に入っていた護符の束を取り出して見せた。

アテナ「これらをうまく使えば、ハーデスやタナトス達を弱体化させ、この聖櫃に魂を封印することが出来ます。では次に・・・」

そう言っただけでアテナは次に数珠のような物を手に取って見せた。

アテナ「これは冥闘士スペクターの108の魔星の魂を封じることが出来る数珠です。以前の戦いではこの数珠に冥闘士スペクターの魂を封じていました。これで冥闘士スペクターの魔星の魂を封じないと、かれらはハーデスの加護の力で、倒しても何度でも復活します。」

聖時「復活する？・・・と言う事は、冥闘士スペクターは不死なのですか？」

アテナ「ハーデスの加護が有る限りは。ですがこの数珠で魂を封じれば、冥闘士スペクターの復活を防ぐことが出来ます。」

聖時「この数珠が・・・」

アテナ「これと同じ物はたぶん二度と作れないと思うので、決して

無くさないでください。では最後に……」

そう言いながら女神アテナは黄金の短剣を手に取って話し始めた。

アテナ「この黄金の短剣はかつて、この聖域サンクチュアリを乗っ取るうとして反乱を起こした物が、まだ赤子だった私を殺そうとした時に使ったものです。」

聖時「え?!こ……殺そうとした時に使った短剣?」

ふたば「な……なんでそんな物騒な物を私たちに?」

アテナ「この短剣は、武器の形をしていますが、これはれっきとした神衣カムイです。」

サキ「か……神衣カムイ?」

アテナ「神衣カムイとは神々の中でも、オリンポスの十二神のみが纏うことを許されたものです。それゆえに、神衣カムイを身に纏うものは神にも匹敵する力を得ることが出来るといえます。」

聖時「か……神にも匹敵する力……」

アテナ「聖域サンクチュアリを乗っ取るために私を殺そうとした者がなぜこの短剣を使ったのか……それは、いかに赤子だとはいえ、神を殺すには神に匹敵する力が必要なのだとなり、この黄金の短剣を使ったのです。この短剣を使えば、ハーデスとの戦いを有利にすることが出来るはずです。」

聖時「ゆ……有利に……」

アテナ「ええ、ですが気をつけてください。この短剣の力はとても強い物です。ですから、この力に振り回されず、常に正しい事のみこの力を使ってください。」

聖時「あ……はい。」

そう言いながら、聖時とふたば達は女神アテナから箱と瓶、それと数珠、短剣を受け取った。

アテナ「そして最後に、あなた達の世界に流れ着いた童虎を始め、これから流れ着くかもしれない聖闘士セイントたちに事伝をお願いします。」

聖時「事伝……ですか？」

アテナ「はい……あなた達をこちらの世界に呼び戻すことが出来ないばかりか、あなた達だけに冥王軍との戦いを押し付けてしまい申し訳ないと……そして、どうかこの新しく生まれた、この異世界の女神アテナと聖闘士セイントと共に、どうかハーデスの力から異世界を守ってくださいと……それから特例として、正義に反する事以外であれば、生活の糧を得るために聖闘士の闘技を使用することを認め、状況によっては、あの『影の闘法』の使用も認めると。」

聖時「わ……わかりました。」

聖時は女神アテナが言った「影の闘法」とは何なのかと疑問に思ったが、師である童虎に聞けばわかると思い、あえて聞かずにうなず碎けました。

アテナ「では、話も済みましたし、あなた達の精神体を渡した荷物
共々、体の元に戻しましょう。」

そう言つて女神が手をかざそうとした時、サキが話しかけて
それを止めた。

サキ「ま・・・待ってください！サキ達を戻す前に、実は女神様アテナに
お願いがあります。

アテナ「お願い？」

つづく

第71話 女神と花輪の約束？（前書き）

どうも剣 流星です。

今回は久々のおまけコーナーです。

さて、今回のゲストはどんな方なのでしょうか・・・
では第71話をどうぞ

第71話 女神と花輪の約束？

第71話 女神と花輪の約束？

アテナ「お願い？」

サキ「はい、実は……」

.....

ここは十二宮の中にある6番目にある『処女宮』の裏にある沙羅双

樹の園。

そのはずれで、女神は紫龍、氷河と共に花園の中に居る聖時達を見ていた。

紫龍「……まさか頼みとは、この『沙羅双樹』の園で約束の証であり、お守りでも有る花輪を作ることだとはな」

アテナ「あの子達は今まで、夢という限られた空間でしか会う事が出来ませんでしたし、今回も精神体だけの再会でした。だから不安だったでしょう、これが夢だと思いこんでしまい、夢だと思って、会った事を忘れてしまうのが。だから今回会った事の記念として、また再会の約束をした事を形として残したかったのでしよう。」

氷河「再会の約束を形にした花輪か……」

氷河はそう言いながら「『沙羅双樹』の花園の中に居る聖時たちを見た。」

その花園の中に居る聖時とふたばは、目の前で花輪を編んでいるサキを見続けていた。

聖時「しかし……なんでまた「再会の約束をした証」が欲しいと思っただんだ？」

聖時はサキに対して「今日出会った事の証と再会の約束をした証」を欲する事の理由を聞いた。

サキ「……実はサキ……時々記憶が無くなる事があるんです。」

聖時「え？記憶が……」

ふたば「無くなる？」

サキ「はい、サキは物心付いたときから、時々記憶がすっぱり無くなる事があるんです。ですから、もし今回の事を忘れてしまったら、って思つて、それで……」

ふたば「……証となる何か欲しくなったのね。」

サキ「……はい。」

悲痛そうな顔をしたサキの顔を見て、聖時は何も言えなくなつた。そんな中、ふたばは何かを決めたような顔をしながらサキに話しかけた。

ふたば「……サキちゃん、私もその花輪作り、手伝わせて。」

サキ「え？ふたばちゃん？」

ふたば「実はさっきサキちゃんが証を作る理由を聞いた時、実は私も証が欲しいなつて思つたんだ。」

サキ「ふたばちゃん……」

ふたば「だから、一緒に作ろう？」

サキ「うん！」

そう言つて二人は協力して花輪を作り始めた。

やがて二人の手で三人分の花輪が作られた。

聖時「よく出来てるね。」

聖時はそう言いながら二人が協力して作った輪を利き腕につけながらそう言った。

サキ「えへへっ、ありがとうございます。」

サキはふたばが作った、自分の分の花輪を触りながら嬉しそうに微笑んだ。

ふたば「本当によく出来てるね。コレ。」

そう言ってふたばはサキが作った花輪を腕につけてそう言った。

サキ「コレで三人おそろいですね。」

そう言ってサキは花輪をした腕を前に出してそう言った。

ふたば「ええ、そうね。」

そう言ってふたばもそう言いながら花輪をした腕を見せる。

聖時「じゃあ花輪も出来たことだし、再会の誓いをしようか？」

そう言って聖時は花輪をつけた方の手を出しながらそう言った。

ふたば「そうだね。」

そう言つてふたばも花輪をした方の腕を出して、聖時が出した手の上に重ねた。

サキ「はい、しましよー！誓いを！」

そう嬉しそうに言いながらサキも花輪をしたほうの手を出して、聖時、ふたばの手の上に重ねた。

聖時「今ココに誓おう、今は体が遠くに離れていても……」

ふたば「今は、精神体こんなかたちでしか会えなくても……」

サキ「たとえこの先、どんなに辛いことがあつても……」

三人「……いつか必ず、現実で再会をする事を誓おう！」

三人は微笑みながら誓いの言葉を誓った。

その言葉がきっかけとなつたのかの用に三人の体が徐々に透けて消え始めた。

聖時「！？こ……これは……」

聖時は体が消え始めた事に驚いてると、花園の端のほうで見っていた女神アテナと紫龍、氷河が聖時達に近づきながら聖時達に話しかけてきた。

アテナ「精神体からだが透けてきたのは、本体の体が目を覚まし始めたためです。」

ふたば「か……体が？」

アテナ「ええ、ですから受け取った物を早く手に持ってください。この世界から持っていける物は、精神体の時に手に持っていたり、身に着けている物だけです。」

そう答えた女神アテナの言葉を聞き、聖時は足元に置いておいた、アテナからもらった品々を慌てて手に持った。

聖時がそうしている間にも体は徐々に透けて消えていく。

アテナ「ではみなさん、ハーデスの事と、向こうに行った童虎達の事、くれぐれもよろしく願います。」

ふたば「はい、まかせてください。」

サキ「が・・・がんばります！」

聖時「紫龍さん、何か童虎先生に言っておく事はありませんか？」

紫龍「・・・・・・そうだな、じゃあ、「俺と春麗は元気にやっている」と、そして・・・・・・そちらに援軍としていくことが出来ないことをお許しください」

聖時「わかりました。童虎先生にはちゃんと伝えておきます。」

紫龍「ああ、伝言のこと、老師こと共々よろしく頼む。」

紫龍と言葉を聞き終わるころには聖時たちの体は殆ど消えかけていた。

聖時「じゃあサキ・・・またね。」

サキ「はい、じゃあまたねです、聖時さん。」

そうサキが言った瞬間、あたりに強い風が吹き、その場にいた紫龍達は思わず目をつぶった。

そして、目を開けた時には、聖時達がいた場所には誰も居なくなっていた。

アテナ「行きましたか……この度は彼等の事、そしてハーデスの事をお教えくださった事、改めてお礼申し上げます。『バランズの執行者』。」

女神は背後に向けて、聖時達の居た場所を見ながらそう言った。

「……お礼を言われる事ではありません。それに私はこの地に『門の紋章』を使って一時的に、この方を連れてきただけです。」

女神の言葉を受けた盲目でローブを纏った女性、レックナートは彼女の側に居る人物の方に盲目の目を向けながらそう言った。

レックナートの盲目の視線の先に居る人物……ピンクブロンドの長い髪で、歳は聖時達と同じぐらいの女性は、女神アテナに対して話かけた。

「……アテナ……お礼を言われる筋合いは私にも有りません。むしろ、今まで……神話の時代からあの人……ハーデスを放っておいた私には、あなたやこの世界の地上の人々に対して、むしろ謝罪をしなくてはならない立場なのですから……。」

アテナ「……それでも、お礼を言わせてください。前聖戦、そし

て今聖戦において、冥王軍との戦いで死にそうになった聖闘士セイントを助け、あちらの世界に送りだしてくれたのですから。」

「???」それをしたのも、せめてもの罪滅ぼし……それに、この肉体の持ち主の少女が、兄や友人達を守りたいと言っているのです。その手助けの為に彼らをあちらに送っただけのことです……」

アテナ「ペルセポネ……」

ペルセポネ「……かつて神話の時代において、冥王ハーデスの妻であった春を司る女神である。」

アテナはこの女神がした、その悲痛そうな顔を見て、なんとも居えない顔をしたのであった。

《つづく》

おまけコーナー

「ピティ」………

ユニ「……………」

ビッキー「?どうしたんです二人とも?いつもの掛け声、やらないんですか?おまけコーナー、始まってますよ?」

ピティ「……………あんなね……………空気読めないわけ?」

ビッキー「え?!」

ユニ「ビッキーさん……………この雰囲気で、いつもみたいな掛け声……………出来ると思います?」

ビッキー「?なんで出来ないんです?」

ピティ「あなたが呼び出した今回のゲストのせいで、空気がめっちゃ重いのがわかんないわけ?!」

ビッキー「え?私が呼び出したゲストの方のせい?」

ハーデス「……………」

ピティ「なに何気にラスボス級の人物呼び出してるのかな、このKYちゃんは!」

ハーデス「どうした、無知なお前達のために、わざわざ私が出向いてやったのだ、何か質問でもしたらどうだ?」

ピティ「あ、は……………はい!そ……………そうですね!(注意:小声で)ど……………どうしようユニ?」

ユニ「（注意：小声で）と……とにかく、話を短めにして、とつとつ、終わらせましょう」

ピティ「そ……そうね、じゃあさつそく……では改めて、紹介します、今回のゲストは、聖闘士聖矢からお越しの、冥王ハーデス様にお越しいただきました。」

ハーデス「冥王ハーデスだ。よろしく頼む。」

ユニ「で……ではさつそく今回の補足について語りましょう。今回の補足は、今回のお話の最後に出てきた、女神ペルセポネに付いてです。」

ハーデス「何?! わが妻、ペルセポネについて語るのか?! だったら、この私がペルセポネの魅力を余すことなく語ってやるぞ!」

ピティ「え?! は……ハーデス様?」

ハーデス「私の妻ペルセポネは、それはとても可愛らしくも美しい女性で、その美しさは他の女神なんて目じゃないくらいで、「アップロディテ? アルテミス? はあっ? なにそれ?」って言うくらいとてまずばらしい女性なのだああああああっ!」

ユニ「あ……あの〜」

ピッキー「奥さんの名前が出たら、途端に語りだしましたね〜」

ピティ「い……以外ね、どうやら、とんでもない愛妻家みたいね……と、とにかく、落ち着いてください、奥さんがとてもすばらしい女性だったことはわかりましたから、奥さんがどんな女神な

のかの説明を……」

ハーデス「ん？説明？……そうだな、まずは妻がどんな女神なのか説明しないといかん。妻の名前をココで初めて聞いた者も居るかもしれないからな。」

ユニ「え、ええ、そうですね……では、ご説明をお願いします。」

ハーデス「では……我が妻、ペルセポネは大地の女神『デメテル』の娘であり、春を司る女神である。昔、私がまだ独身の頃、用事で出てきた地上で、偶然彼女を見た私は、一目見た瞬間……・彼女を好きになってしまったな。」

ピティ「一目見た瞬間好きになつてたつて……」

ビッキー「一目惚れだったんですね、素敵です」

ハーデス「フツ、ありがとう。とにかく！彼女に一目惚れした私は、彼女をぜひ妻にしようと考えたが、中々良いアイデアが浮かばなくてな……そこで私は最高神であるゼウスの相談をし、彼の知恵を使い、彼女を妻として冥界に連れ帰ることが出来たのだが、そこで問題が発生してな……」

ビッキー「問題……ですか？」

ハーデス「ああ……ペルセポネの母、デメテルはまりの親馬鹿な上に、子離れが出来ない女神でな、娘が冥界に嫁いで会えなくなつた事にショックを受けて、女神の仕事をしなくなつてしまったのだ……おかげで地上の作物が実らなくなり、他の神々が心底困つてしまったそうだ。まったく義理母上には本当に困つたものだ。」

いいかげん子離れして欲しいものだ！」

ピティ「うわ、仕事を放り出すなんて・・・ずいぶんと傍迷惑な女神だね」

ハーデス「まったく。とにかく、そんな事態を見て困ったゼウスは、私に対して「ペルセポネを地上の義理母上の元に返してくれないか？」と言ってきた！新婚早々、早くも破局の危機に対し私は焦った・・・このままではペルセポネとの甘い新婚生活が！！と・・・」

ユニ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ハーデス「そこで私はある作戦を思いついた。ペルセポネが冥界を去る際、彼女に冥界の作物「ザクロの実」を4粒食べさせたのだ。冥界の作物を口にした者は冥界からは出られない掟でな、出た者には厳しい罰があるのだが、ペルセポネが食べた実は4粒だけだったため、処分は軽かった。以来彼女は一年のうち、4ヶ月は冥界で過ごし、のこりの8ヶ月は母の元で過ごす様になったのだ。」

ピティ「な・・・なんだか出張中の旦那のところに定期的に通う、通い妻みたいだね。」

ハーデス「ま、まあ、似たようなものだな・・・とにかく！以来、義理母上は、ペルセポネが地上に居る間の8ヶ月は喜んで仕事をするようになり、逆に、ペルセポネが冥界に行っている4ヶ月の間は、娘が居ない寂しさからか、仕事をいっさいしなくなり、地上では作物が枯れ育たなくなってしまうという。」

ユニ「コレが、俗に言う四季の始まりといわれています。」

ピティ「なるほどね、しかし、本当に傍迷惑な女神ね、仕事を放棄するなんて・・・どこぞの労働環境に対して憤った社員が、ストを敢行する感覚で仕事を放り出すなんての！」

ハーデス「まったくくだ！あの義理母上には本当に困ったものだ！あの事件以来、義理母上は、まるで嫁をいびる姑のように、事有るごとに私に対して嫌味をいう・・・うつ！思い出しただけでも胃が・・・」

ユニ「神様と言っても、そう言う所は人間と同じで、苦労してるんですね・・・」

ハーデス「わかってくれるか？この辛さ・・・」

ユニ「胃に来るストレスとその辛さ・・・私もつい最近までその辛さで苦しんでましたから・・・」

ハーデス「おお、そうか・・・そなたも苦労しているのだな・・・」

ユニ「ええ、実はこの前なんて・・・」

ビッキー「あ、あの、ユニさんと語りだしちゃいましたよ？」

ピティ「あははははっ・・・ユニも意外と苦労人だからね、ま、とにかく語りだしたこの二人はしばらく放置しておいて、締めと行きましょつか？」

ビッキー「そうですね、では今回はここまでで。」

ピティ「それではみなさん！」

二人「「まったね~~~~~」

ハーデス「そうかそうか、わかるぞその辛さ！」

ピティ「……いいかげん語り合っのをやめろっての

第71話 女神と花輪の約束？（後書き）

胃を痛める神様って・・・
でも仕方がないと思いますね。

上司のゼウスは浮気魔で、イイ女と見れば見境がなく・・・

その奥さんは嫉妬魔・・・

しかも度々夫婦喧嘩をするし・・・

自分の奥さんの義理の母親は子離れできない親馬鹿で、しかも度々仕事を放り出す・・・これじゃあストレスで胃を痛めても仕方がないか。

案外、今まで起こした聖戦も、元をたどればストレス発散をするための八つ当たりと言う意味も含まれてたのかもしれない・・・

第72話 剣の継承者？（前書き）

どうも、剣 流星です。

さて、今回から、この作品で取り扱う原作が増えます。

なんの作品が追加されるかは、今回のお話を読んでのお楽しみと言
う事で。

では第73話をどうぞ。

第72話 剣の継承者？

第72話 剣の継承者？

次元の海に浮か魔王軍の本拠地・バーンパレス。その中心にある謁見の間の玉座には、このバーンパレスの主であるバーン？世が座っていた。

その謁見の間の扉を開けてある人物が入ってくる。仮面の男、魔軍司令ファウストである。

ファウスト「バーン？世様、ファウスト、海鳴市のシンダル遺跡の調査より戻りました。」

バーン？世「ご苦労。すまないな、本来なら魔軍司令であるそなたに任せる事ではないのだが・・・」

ファウスト「仕方ありません。あの遺跡を個人的に管理している赤ラルブラき翼の最強の使い魔

や管理局の目を盗んで遺跡の調査ができる者など私以外にはいませんから。それに・・・あの遺跡を調査したおかげで、女神の後継者の力の一端を見ることができましたからね。」

バーン？世「なに！女神の後継者だと？！会ったのか？「女神の紋章」の宿主に？！」

ファウスト「はい・・・もつとも、二つに裂かれた「女神の紋章」の片方を宿していた者ですが・・・」

バーン？世「そうか・・・ではやはり、そなたの推測は当たっていたのだな。前の女神の紋章の宿主を葬る際に紋章が引き裂かれて二つに分かれたというのは・・・」

ファウスト「はい、2年前に引き裂かれた「女神の紋章」は「門の紋章」や「始まりの紋章」と同じよう

にそれぞれの欠片が一つの紋章として形を作り、宿主に宿っていると思われます。」

バーン？世「・・・なるほど、なら「プロトワン」の中にいる「春の女神」が「戦女神」に接触を図るな。そしておそらく、戦女神は女神の紋章の宿主に力を与えるな。お主の思惑通りに・・・」

ファースト「はい、これで「女神の紋章」は引き裂かれた時に失った力のほとんどを戦女神の力で補って、力の大部分を取り戻します。残りの不足分は自然に回復するのを待つだけで補えるかと・・・」

バーン？世「では、後は回復するまで静観するだけというわけだな・・・ならば、「女神の紋章」についてはしばらくは静観するという方針で進めていこう。話がそれだが、遺跡の調査報告を聞こう。」

ファウスト「はい、あの遺跡・・・「第97管理外世界」の海鳴市にある「シンダルの遺跡」は、現存する「シンダルの遺跡」の中でも最大のものでした。それゆえに我々が把握していない情報があると踏んであの遺跡を調査しました。内部は管理局も今だにすべて発掘できていないみたいで、未発掘の部分が多くありましたので、その未発掘の部分を中心に調査をして、私は例の記述に関する物を発見することができました。」

バーン？世「やはりあったか・・・してその詳細は？」

ファウスト「はい108の宿星と108の魔星の魂についての記述です。」

バーン？世「108の宿星と108の魔星？」

ファウスト「108の魔星とは、おそらく現在同盟を結んでいる冥王軍の正規の冥闘士スペクターの事についてでしょう。そして108の宿星とは、おそらくかつてハルモニアがあった世界で起きた、真の紋章が絡んだ乱が起きるたびに出てきた、「約束の石版」に刻まれた者たちのことでしょう。」

バーン？「そうか……やはり「門」を開けるには108の宿星と魔星が必要か……魔星については我々側についているから良いとして、問題は宿星の方か……これは杓馬を放って置いて正解だったな。」

ファウスト「はい、杓馬は「神殺しの力」を手に入れるために、神かみ谷聖やひじりの息子に力を付けさせるようにしています。「約束の石版」に刻まれる者たちの中心「天魁星」、それに選ばれるのは、おそらく神谷聖かみやひじりの息子、神谷聖時でしょう。なら杓馬のたくらみで力を付けたかの者の元に自然と他の宿星が集まって来ましょう。」

バーン？世「そうだな。この件に関しては杓馬に任せておこう。最近新しい手駒を手に入れて、あやつも張り切っているみたいだからのう。」

ファウスト「はっ、では杓馬のこの件を任せ、我々は監視をメインにし、時々そのやり方に少し手を加えて行く形にします。」

バーン？世「うむ。しかし・・・鳴海に「シンダルの遺跡」が流れ着いてくれたおかげで、我々はこの情報を知ることができた・・・これはまさに僥倖だな。」

ファウスト「はい・・・しかしそれは、あの地が、次元や時空間、次元の狭間に漂っている物が最終的に流れ着く場所だったからです。今回はたまたま私達に有利になる物が流れ着きましたが、今後も我々が有利になる物が流れ着くとは限りません。」

バーン？世「・・・なるほど、今後は我々が不利になる物が流れ着く事もあると言っただな・・・」

ファウスト「・・・はい、もともと、あの地に漂流物が無事に流れ着くのは天文学的数値ですので、おそらく大丈夫だと思います。あまり気にしすぎるのもどうかと思いますので監視だけにすれば問題ないかと・・・」

バーン？世「そうか・・・なら今後も監視だけに留めて置くとしよう。ご苦労だった、下がってよいぞ。」

ファウスト「はっ！」

そう返事をして下がるファウスト。しかし彼は下がりながら海鳴市を去るさいに遺跡から感じた不安の事思い返していた。

ファースト（バーン様にはああ言ったが、海鳴の地を去る際に、遺跡から言い知れない不安を私は感じた・・・アレは私の杞憂であったと思いたいが・・・）

そう思いながら、彼は謁見の間から出て行った。

時間は少し遡り、聖時達がさくらを連れて「別荘」に行った直後の時間帯の神谷邸の裏にある「シンダル遺跡」が埋まっている裏山の中、その中に突如小規模な次元の亀裂が出来、そこからある物が出てきた。

次元の亀裂から出てきた物は黄金の光に包まれた一つの玉だった。黄金の光の玉は隙間から出てきた後、ゆっくりと地面に落ちた後、ゆっくりと光が収まっていき、やがて中にある物が見え始めた。

光の中からは黄金の籠手に収まった人の右腕と刀身の短い曲刀、そして身幅の広い両刃の剣が現れた。

身幅の広い両刃の剣『どどおやら無事に外の世界に出られたようだな。無事かアトワイト。』

身幅の広い両刃の剣から突如年老いた男性の声が聞こえてきた。

刀身の短い曲刀『は……はい、なんとか、エルジド殿は？』

アトワイトと呼ばれた刀身の短い曲刀から出た若い女性の声は黄金の籠手に包まれた右腕に対して声をかけた。

エルシド『な……何とか無事だ。どうやら女神ペルセポネのおかげで、何とか彼女が言っていた世界にこれたみたいだ。だが途中で遭遇した次元の歪みのせいで、クレメンテ殿とアトワイト殿以外の者が別の場所に飛ばされてしまったみたいだ……グッ！』

クレメンテ『エルシド殿？！』

エルシド『ど……どうやら、歪みを突破するさいに宿っている小宇宙^{コスモ}を大量に消費したみたいだ……このままでは後少して右腕に宿った小宇宙^{コスモ}が消滅して、俺の意志も消えてしう……だがそうなる前に、我が生涯をかけて磨き鍛え上げた剣を受け継ぐに足りる者にわたせねば……』

アトワイト『剣を受け継がせる？』

エルシド『女神ペルセポネが教えてくれた。アテナの力を受け継ぎし者が、この世界に逃げ込んだ冥王軍と戦うと言うのだ。なら俺はアテナの為に、アテナと共に戦う者に我が剣を受け継がせなくては……』

エルシドはそう言うと、周りに対してテレパスの様なもので呼びかけ始めた。

エルシド『心に剣を宿し者よ・・・我が剣を受け継ぐに足りし者よ・
・我が元に・・・』

《つづく》

第73話 剣の継承者？（前書き）

どうも、剣 流星です。

ただいま絶賛、腰を痛めて、呻いています。

こ・・・腰が〜

と、兎に角、第73話をどうぞ

第73話 剣の継承者？

第73話 剣の継承者？

彼、衛宮士郎は神谷邸へと続く道を歩いていた。

本当なら彼は、童虎に言われて見に行った「古代の中国展」に言った後、そのまま家に帰る予定だった。だが、やはり顔だけでも出しておこうと思い、神谷邸へと向かった。

士郎「来迎寺グループが中国で発掘した、本物の「干将、獬耶」・・・すごかったな。やっぱり本物は違うな・・・ん？」

士郎は突然歩みを止めて周りを見渡した。

「???」心に剣を宿し者よ・・・我が剣を受け継ぐに足りし者よ・・・我が元に・・・」

突如頭に響いた声を聞き、士郎は周りを見渡した。

士郎「だ・・・だれだ?!」

士郎はそう叫んだが、答えは返ってこず、さらに声が頭に響いてきた。

「???」心に剣を宿し者よ・・・我が剣を受け継ぐに足りし者よ・・・我が元に・・・」

士郎「一体何なんだこの声？」

士郎が考え込んでいると、この声がある方向から響いてくるのを士郎は感じ取った。

士郎「この方向は・・・神谷邸の裏山がある方向？・・・行ってみるか・・・」

士郎はそう言って裏山へと歩いて行った。

・・・・・・・・

裏山は日が殆どが沈みかかっているせいか、見通しがいささか悪くとても歩きにくかった。

だが、士郎はそれでも何とかしながら、声が響いてくる場所を目指して歩いた。

やがて前方に黄金の籠手に収まった人の右腕と刀身の短い曲刀、そして身幅の広い両刃の剣が地面に転がっているのを発見した。

「 士郎「？何だコレ？声はココから響いてきてたみたいだけど・・・」

「 そう言っつて周りを見渡す士郎。

「 その時、またあの声が頭に響いてきた。

「 ??? 『 良くぞきた、わが剣を受け継ぎし素質を持ちし者よ。』

「 士郎「?!だれだ!どこに居る!」

「 ??? 『 こつちだ。お前の足元に居る。』

「 士郎「?足元?」

「 士郎はそう言っつて自分の足元を見た。

「 其処には、先ほど見つけた黄金の籠手に収まった人の右腕があるだけだった。

「 士郎「・・・だれも居ないよな。まさかこの籠手がしゃべったってわけじゃないよな?」

「 士郎はそんな有り得ないと思っつことを口にした。

「 ??? 『 その通りだ。今しゃべっているのは、お前の今日の前にある腕だ。』

「 士郎「う・・・腕がしゃべった?!」

士郎は驚き、思わず後ずさった。

「????」驚かせてしまったみたいだな。俺の名はエルシド。女神アテナに仕える12人の黄金聖闘士の一人だ。」

士郎「ご……黄金聖闘士?! 童虎先生と同じ黄金聖闘士だって?!」

エルシド「何?! 童虎を知っているのか?!」

士郎「あ、ああ。」

士郎はそう言って童虎との事を自分の自己紹介も混ぜて話し始めた。

.....

エルシド「そうか……童虎もこの世界に流れ着いていたのか。そして、お前は童虎の教え子で、俺達の事や聖戦について、ある程度

は知っているのかな？」

士郎「あ、ああ。一通り童虎先生から聞いたが……」

エルシド「そうか……なら話が早い。たしか……シロウと言ったな、お前に、俺の右腕に宿っている剣を受け継いで欲しいのだ。」

士郎「剣を受け継ぐ？」

エルシド「そうだ。今の俺は、聖戦の折に、敵に切り落とされた右腕に、俺の意思を込めた小宇宙^{コスモ}を宿らせてあるだけに過ぎない。」

士郎「右腕に……意思を？」

エルシド「そうだ、本体の方である俺は、すでに死んでいる。残ったこの右腕も小宇宙^{コスモ}が尽きたら消滅するだろう。だがそうなる前にこの右腕にやどって居る剣をお前に託したい。これから起きるであろう、この世界での聖戦のために。」

士郎「この世界での聖戦？どう言う事だ?!この世界で聖戦が起きるのか?!」

エルシド「そうだ。この世界に逃げ込んだ冥王ハーデスとその軍団、そしてそのハーデスを封じる為に、アテナの力を受け継いだ、アテナの代行者との戦いだ。」

そう言ってエルシドは語り始めた。

エルシドはハーデスとの聖戦の時、右腕を切り落とされ、その後、

冥王軍の幹部の一人、夢神オネイロスとの戦いで、相打ちになり、オネイロスが滅びる際に発生した次元の亀裂に切り落とされた右腕が吸い込まれてしまい、その結果、今まで次元の狭間を漂っていたと言う。そんなエルシド（腕）の前に突如「女神ペルセポネ」が現れ、この世界にハーデスが逃げ込んだ事を聞いた。そして、アテナがそのハーデスに対して、自分の力を分け与えた代行者がこの世界に居ると言う。エルシドはその代行者の力になるために「女神ペルセポネ」の力でこの世界に来たという。

エルシド『俺はアテナが力を託した代行者と共にハーデス率いる冥王軍と戦わなくてはならない。だが、俺は既に死んだ身、出来ることと言えば、俺の力をこの世界に住む者に託し、冥王軍との戦う事を頼むぐらい……』

士郎「……なるほど、それであんたは、俺を呼んだんだな。」

エルシド『ああ、いきなり現れて、こんな事を頼むのは気が引けるが、俺には最早、こうする以外に道は無いのだ……。だから、もし、お前にこの世界を憂う気持ちがあるのなら……。俺の力を受け継ぎ、冥王軍と戦う代行者の力になってもらいたい。』

士郎「俺が……。冥王軍と？」

つづく

第74話 剣の継承者？（前書き）

どうも、剣 流星です。

いや、最近PSPソフトの「グローランサー？ オーバーリローデッド」にハマってしまい、小説を書くのを忘れそうになってしまいました。

では、第74話をどうぞ。

第74話 剣の継承者？

第74話 剣の継承者？

士郎「俺が……冥王軍と？」

士郎はエルシドの話聞いて考え込んだ。
冥王ハーデスの非情さは童虎からは聞いていた。地上殲滅を企み、死んだ後の人間の魂を冥界に縛り付け、そこで永遠に苦しみを与え続ける無慈悲な神……そんな者がこの世界に来たのなら当然することは、人間の抹殺。その考えに至った士郎はゾツとした。この話を聞いた以上、放って置くことなど、正義の味方を目指して居る士郎には出来なかった。

士郎「……分かった。あんたの力を受け継ごう。あんたに代わって、代行者と共にハーデスと戦う！」

エルシド「そうか。礼を言うぞ。エミヤシロウ。」

士郎「いいさ、礼なんて。正義の味方を目指している者としても、ハーデスの件は見過ごすことができないからな……それで、代行者の子って、この世界出身なんだろう？何処にいるんだ？」

エルシド「俺もアテナに協力した、「女神ペルセポネ」から話を聞いただけで、名前以外は詳しくは聞いていない。」

士郎「何処に居るのか分からないのか……これじゃあ探すのに苦勞するな。」

エルシド『案ずるな、アテナの力を分け与えられているのだ。その者からは、アテナと似た、慈愛に満ちた雄大な小宇宙コスモを感じられるはずだ。』

士郎「小宇宙コスモを頼りに探すしかないって事か……結構骨が折れそうだな。まっ、名前だけは分かっているんだから、闇雲に探すよりはましか……で、その子の名前は？」

エルシド『代行者は二人いて、一人は「サキ」と言い、もう一人は「ワタラセフタバ」と言う。』

士郎はエルシドから出た名前に、最近知り合った友人の名前が出たことに驚きエルシドに聞き返した。

士郎「今、「ワタラセフタバ」って言ってたな！もしかして渡良瀬ふたばの事を言っているのか!？」

エルシド『?!知っているか?!』

士郎「ああ……最近知り合った友人の一人さ。」

エルシド『そうだったのか……代行者の一人の友人が、我が力を受け継ぐ素質を持った者の友人だったとは……これぞ僥倖。』

エルシドは二人の関係を知り、運命的な物を感じ取っていた。

士郎「エルシド、友達が関わってるのなら、もう人ごとじゃない！」

友達としても渡良瀬の力になってやりたい。」

エルシド『そうか・・・なら、さっそく力を渡すぞ。シロウ、右手を前に。』

士郎「こうか？」

士郎はエルシドに言われ、右手を前に出した。

すると次に瞬間エルシドの右腕が光の粒子となって士郎の腕に吸い込まれは始めた。

士郎「こ・・・これは？」

士郎が驚いているとエルシドの声が士郎に語りかける。

エルシド『今、お前の右腕に、俺が生涯をかけて鍛磨きあげてきた俺の剣「エクスカリバー」を宿らせている。』

士郎「え・・・エクスカリバー？」

エルシド『触れるもの全てを切り裂く鋭き手刀・・・それが我が剣「エクスカリバー」だ。』

そう言つて次々と右腕が光の粒子になつて士郎の右腕に吸い込まれる。やがて全てが士郎の右腕に吸い込まれ、継承が完了した。

士郎「お・・・終わったのか？けど・・・あまり変わった感じはしないな・・・」

士郎はそう言いながらエクスカリバーが宿つた右腕を見ながら言っ

た。

エルシド『当然だ。宿っているといっても、眠っている状態だ。この力を使えるようになるには、お前が小宇宙^{コスモ}を身に付け、それを究極にまで高めたとき、「エクスカリバー」眠りから目覚め、お前の力にな……る……はず……だ。』

士郎「？おい、声がとぎれとぎれになってるぞ？大丈夫か？」

エルシド『継承が済んだのだ……俺の意思が消えるのは当然だ……それよりも……エミヤシロウ……最後の頼み……だ。』

士郎「頼み？」

エルシド『周りに落ちている……剣を……回収し、剣の新たな……使い手を……探してやって……くれ。』

士郎「周りの剣？」

そう言つて士郎は周りを見渡した。

そこには先ほどエルシドの右腕と一緒に見つけた2振りの剣が落ちていた。

エルシド『その剣は……ソーディアンと呼ばれる……意思を持つ剣で……俺のいた世界とは、別の世界の物だ。俺と同じく……次元の狭間を漂っていたのだ。冥王軍との戦いに、その二人も力を貸してくれると言ってくれた……だから、その剣の……声を聞ける者を探して……仲間にするのだ……』

士郎「剣の声を聞ける者を探して仲間にするのか……」

エルシド『そうだ……どうか……た……の……
……ん……だ……ぞ……』

そう言った後、エルシドの声は聞こえなくなった。

士郎は自分の右手をしばらく見た後、そばに落ちていた剣2本を拾い、まるで誓うようにこう言った。

士郎「誇り高き、山羊座カプリコーンの黄金聖闘士エルシド……あんたの剣と志、確かにこの衛宮士郎が受け取った！」

士郎の声が高らかに響いた後、士郎はその場を後にした。

そんな士郎を木の上から見下ろしている一人の少女がいた。

黒く長い髪をもち、左手に盾を装備し、右手に護拳の付いた曲刀を持っていた。

少女「……時空の紋章」が宿った「不屈の剣」をどうにかして手入れられないかと思って、この遺跡に来たけど……」

「……まさかクレメンテ老とアトワイトが流れ着く瞬間を目撃することになるとは思わなかったよ」

少女の持っていた剣から声が発せられるが、少女はそれが、さも当たり前だと思うような口ぶりで剣に話しかけ始めた。

少女「アレが、貴方以外のソーディアンなのシャルティエ？」

シャルティエ『うん、ソーディアン・アトワイトとクレメンテ、それぞれ水系の晶術と高威力の晶術シムルの使用に特化したソーディアンだ

よ。』

少女「そう。」

シャルティエ『しかし、あの次元の歪みでバラバラになったせいか、この世界に流れ着くタイミングもどうやらバラバラになったみたい。そのせいで僕はあの2本よりも早くこの世界に流れ着いた。この様子だと他の2振りもこの世界の何処かに流れ着いているかもね。』

少女「何が流れこようと関係ない。今の私がすべき事は、「まどか」を救う力がある「時空の紋章」……「不屈の剣」を手に入れること……それだけよ。」

シャルティエ『わかってるよ、ほむら。』

ほむら「なら、「不屈の剣」の封印が破れない以上、こんな所に長居は無用よ。」

シャルティエ『そうだね。』

ほむら「行くわよ。この後、あの男と会わなくてはならないから。」

シャルティエ『杓馬ですか……僕、あの男……嫌いだよ。』

ほむら「……私だって、出来る事なら会いたくないわよ。けど……「まどか」を救うには、あの男の力が必要なのよ。」

シャルティエ『解ってるよ。』

ほむら「なら、愚痴らないで行くわよ。」

シャルティエ『はいはい。』

シャルティエがそう言った後、ほむらはその場を後にした。ほむらが去ったその後には静寂だけがその場に残った。

《つづく》

シャルマルの翠屋奮闘記？

聖時「あれ？翠屋の前に居るの……あれは猛？おゝい猛！」

猛「ん？あ、聖時。どうしたんだ？こんな所に？」

聖時「僕はいつものシャルマルさん作成の料理けきぐつの処理にきたの……それで猛はどうして翠屋こいに？」

猛「いや、芹に翠屋まで来るように言われて。」

聖時「芹と待ち合わせか……この店を待ち合わせに使うなんて勇氣あるな。」

猛「本音を言うと、あの翠屋（魔窟）に突入する勇氣を俺は持ち合わせていないよ、けど、もしすっぱかしたら芹に後で何をされる

か……」

聖時「確かに、すっぱかしたら骨の二・三本は確実に折られるな。」

猛「と……とにかく、そんな訳だから、逃げる訳には行かないんだ。」

聖時「そうか……なら、僕と一緒にあの魔窟に突入しようか……」

猛「そ……そうだな。」

カラコロン （扉を開ける音）

芹・シャマル「いらっしやいませ」翠屋へようこそ」

バタン！（勢いよく扉を閉める音）

聖時「い……いま、食い物屋で働いてはいけない人物がもう一人増えてたような……幻覚でも見ているのか？」

猛「……奇遇だな……その幻覚、俺も見たぞ。芹がシャマルさんと一緒に翠屋のエプロンを身につけて働いているのを……」

聖時「き……危険物が二つに増えてる？」

猛「……」

聖時・猛「よし！帰ろう！」

芹「なに二人とも帰ろうとしているのよ？」

聖時「うっ！遅かった……」

猛「せ……芹、いつの間に店の外に……」

猛の側には、いつの間にか店の外に出ている芹とシャマルが居た。

シャマル「二人共、よく来てくれましたね さあ、中へ 二名様ご案内」

聖時・猛「い……いやあああああああつ……」

そう絶叫しながら、聖時と猛は芹とシャマルに引きずられながら店に入って逝った。

*

猛「……で、なんでお前まで、翠屋すゐで働いているんだ？」

芹「ピンチヒッターよ、ピンチヒッター。桃子さんがカゼを引いちやったらしいから、シャマルさんに頼まれて、今日1日、桃子さんの代わりとして働くことになったのよ。」

シヤマル「ねえ芹ちゃん、カレーって片栗粉使ってなかったっけ？」

芹「使うんじゃないかな？使わないととろみ付きませんから。」

シヤマル「じゃあ片栗粉と小麦粉も入れましょう。」

猛（待て！片栗粉って……て言うか、なんで小麦粉も！？）

芹「小麦粉はどっち入れます？強力粉と薄力粉。」

シヤマル「強力粉にしましょう。男の子が食べるんですから、強いほうがいいでしょう。それとトウガラシ、辛くないとカレーじゃないですから。」

聖時（ちよっ、カレーの辛さはトウガラシで出す物じゃない！！）

芹「後は、それらしい物を入れておこくと、キムチと……コシヨウ？」

シヤマル「白と黒、二つ有りますよ？」

芹「じゃあ両方入れましょう。後、隠し味。」

シヤマル「そう言えばこの前テレビで言っていました。カレーの隠し味について。確か……チョコ、コーヒー、ヨーグルト……」

芹「全部入れちゃいましょう。」

猛（待てコラア！テレビで手に入れた曖昧な知識を使おうとするな！！）

- ああ、カレー -

作詞 神谷聖時

無慈悲な 風味だけが デタラメに 口に溢れてくる

オオ、デストロイ!

切なく 流れ出た カレー

(あの) カレーを食べた数だけ

人は強く優しくなれる

ああ、カレーカレーカレー……

シャマル「せ……聖時くん?」

突然、後光が差し、悟りを悟った聖人のような顔をして訳の分からない詩を口にする聖時。

猛「せ、聖時! 逝くな聖時! 聖時、聖時、せ〜い〜じいい
いいいい!」

教訓・料理を作る時は、思い込みで材料を選ぶのではなく、ちゃん
とレシピを見て確認してから使いましょう。

《つづく?》

第74話 剣の継承者？（後書き）

次回の更新なのですが、自分が書いているもう一つの作品を更新させたいので、お休みさせていただきます。

第75話 聖霊の女神？（前書き）

更新遅れてしまい申し訳ありません。 剣 流星です。

ピティ「・・・で、どうして更新遅れたの？」

い・・・いやだつて「エクシリア」面白いんだもん。

ピティ「ピティちゃんキーク！！」

ぐはっ！

ピティ「反省しろ！この馬鹿！！」

す・・・すみません。では第75話をどうぞ。

第75話 聖霊の女神？

第75話 聖霊の女神？

夜、魁音寺かいおんじグループ所有の一つのとあるビルの屋上、左手に盾を持ち、腰に鞘に収まった、護拳の付いた曲刀・「ソーディアンシャルティエ」を差した、魔法少女姿の暁美あけみ ほむらが居た。

ほむら「……あの男が指定した場所はここね。」

そう言っただけで周りを見渡すほむらだが、周りには誰もいなく、静寂だけが広がっていた。

シャルティエ「なんだ〜あの男。人を呼びつけておいた、自分は遅刻〜？」

彼女の腰に差している意思を持ってしゃべる剣「ソーディアン・シャルティエ」は、二人を呼びつけた張本人がこの場に居ないことに腹を立て、悪態をついた。

ほむら「愚痴っついても仕方ないわよシャル。取り敢えず、指定の時間までまだあるから待ちましょう」

シャルティエ「……仕方がないですね。待ちますか。」

そう言っただけで二人は呼び出した本人である杵馬を待とうと言っていつ

たやさき、ほむらの背後から何者かが声をかけてきた。

杳馬「大丈夫だよ。待たなくて」

ほむら「!」

シャルティエ『!』

いきなり背後から声をかけられて、驚きながらも、自分の背後を取った人物、サブリス冥衣と同じ材質の仮面を付け、タキシードを来た男、杳馬を警戒するために、その場からと飛び退き、相手を警戒するほむら。

杳馬「よう!」

ほむら「……気配を断って、背後から近づかないで。相変わらずそのふざけた仮面と同じようにふざけた事をしてくれるわね、杳馬。」

杳馬「まあまあ、刺激が合ったほうが人生は楽しいってね。嬢ちゃん的人生に、俺なりの刺激を与えてあげたんだが……気に入らなかつたか?」

ほむら「余計なお世話よ。それより呼び出した要件はなに?」「不屈の剣」を起動せる事が出来る人物……「神谷聖時」につての事?」

杳馬「ああ、それもあるんだが……実は嬢ちゃんに会ってみたいって奴がいてね。」

ほむら「私に会いたい人?」

杳馬「ああ、お〜い、黎真の旦那。」

杳馬そう言うと、屋上の入口の扉が開き、中から白いスーツを着た男が現れた。

杳馬「紹介するぜ。獅子神黎真ししがみれいしん。俺が協力しているとある組織の幹部の一人だ。」

黎真「君が魔法少女の曉美あけみ ほむらか。私は獅子神黎真ししがみれいしん。元神霊だ。
元神霊だ。」

ほむら「……！元神霊！」

ほむらは黎真が元神霊だと名乗った瞬間、黎真から距離を取り、腰にある「シャルティエ」を鞘から抜刀し構えた。

ほむら「元神霊……魔法少女である私を殺しに来たの？」

シャルティエ『気を付けて！この男強い！』

ほむら「わかってる！」

黎真の強さを感じたシャルティエはほむらに警告し、ほむらはそれに返事をしながら、構えを取って警戒する。

黎真「警戒するな。私は今の君をどうこうするつもりはない。」

ほむら「その言葉を信用しろと？……信じられないわね。あなた達元神霊は共存均衡を維持する者。負のエネルギーの化身とも言える「魔女」を生み出す元となる私達「魔法少女」を「逸れし者」と

呼び、存在を消してきたはず。現に私は何回か元神霊もとみたまの襲撃を受けたわ。」

黎真「・・・だから信用できないと?」

ほむら「ええ。」

黎真「元神霊もとみたまは共存均衡を維持するもの・・・たしかにそうだが、今の私は共存均衡を維持するどころか、君たち「魔法少女」と同じ共存近郊を乱す存在だ。」

ほむら「・・・え?共存均衡を乱す?」

黎真「ああ、それに、私は個人的に君に共感できる所があつてな。」

ほむら「個人的に共感?」

黎真「鹿目まどか」と言う少女を救うために、奔走する今の君の姿は、何処か今の私に似ていてな・・・だから会って見たくなった。」

ほむらはそう言った黎真を見て、他の全てを犠牲にしても自分の大切なものを守るといふ気概を感じ取った。

ほむら「・・・そう。で、杳馬、彼と私を会わせるだけで呼び出したんじゃないんでしょう?」

ほむらは構えを解きながらそう言う。

杳馬「ああ、そっちはついであな。本命はこっち、「女神の紋章」が異世界の女神の力を受け継いで力を取り戻した。これなら近い

ちに「光輝の紋章」も復活するはずだ。そこで「光輝の紋章」を受け継ぐ素養がある例の「神谷聖時」に「光輝の紋章」を受け継げるぐらいに強くなってもらわなきゃならない。」

ほむら「ええ、だからあなたは自分の手の者を使って、彼の周りで事件を起こし、私もそれに協力するよう約束した。彼が強くなれば、「不屈の剣」の封印を解き、起動させる事ができるはずだから。」

杳馬「ああ、そして、「女神の紋章」が力を取り戻して宿主が本格的に「聖霊の女神」として覚醒し始めた今、本格的にあの坊主に介入しようと思ったんだが……介入するために使った駒が少々危ない奴でな。下手をするとあの坊主が殺られるちまうかもしれないんだ。だから、嬢ちゃんにあの坊主を陰ながらサポートしてやってほしんだ。」

ほむら「なるほど……けどそれをやるにあたって、少し問題があるわ。」

杳馬「問題？」

ほむら「私は、まどかにキュウベえが近づくのを阻止したいの。まどかが契約をしていない今なら「まどか」を巻き込まなくてすむ。だから……。」

杳馬「サポートは出来ないってか？そう言うと思って手を打っておいてやったよ。黎真の旦那に頼んで、今日本に来ているヨーロッパにある元神霊もとみたまの組織、「ザ・ノーブルワン」のエージェントに情報を流した。「例の「白き魔獣が日本に住む、鹿目まどかと言う少女を狙っている」ってね。ここ数十年、やつらは「白き魔獣」……インキュベータの足跡をたどれないでいたため、大量の「魔法少女」

や「魔女」を誕生させ、後手にまわっていたからな。だからこの情報に奴等にとつても有益だ。」

ほむら「……その人達がまどかを囷にしてキュウベえをおびき出すと?」

杳馬「ああ、それにやつらも何の罪の無い女の子をみすみす殺さなきゃならない「魔法少女」にはさせないだろう。だからそっこのほうはしばらくは大丈夫だ。」

ほむら「……そう、ならその件は了解したわ。」

ほむらはそう言って、抜いたままの「シャルティエ」を鞘に戻した後、その場を離れた。

黎真「……「女神の紋章」が力を取り戻した今、「聖霊」……今は「精霊」と呼ぶんだったな。その「精霊」と契約した者たちは、その事に気付くだろうな。」

杳馬「「女神の紋章」の宿主、「聖霊の女神」が再びこの世界に降臨されたんだ。気付かない訳ないでしょう?今頃は特務捜査課にいる「東郷大地」や「四乃森連矢」、さいとうやてん「斎藤夜天」達も、契約した「聖霊」……いや「精霊」だっけ?とにかく、それが騒いでいる頃だと思っぜ。」

黎真「確かにそうだな。あの三人の契約聖霊は「聖位」……それぞれを属性を統率する聖霊王だから、その反応は強いものだろう。」

杳馬「だね。さして、今回の件で連中はどう動くとするか……」

見ものだな。」

杳馬はそう言いながら、どこか楽しそうに笑いながらそう言った後、
黎真を残し、その場から消えた。

《つづく》

第75話 聖霊の女神？（後書き）

次回の更新ですが、今週の週末の連休で旅行に出かけるのでお休みします。

楽しみにしている方、本当にすいません。

第76話 聖霊の女神？（前書き）

どうも、剣 流星です。

今回は本当に短めです。

本当にすいません。

では第76話をどうぞ。

第76話 聖霊の女神？

第76話 聖霊の女神？

暁美^{あけみ} ほむらが魁音寺ビルの屋上で杳馬と会っていた同じ時間。

聖時、ふたば、さくらが帰った後の特務捜査課のとある一室。

そこにはユニに呼び出されたなのは、フェイト、はやて、三人を呼び出した張本人ユニと、東郷大地、そして紋章師のジーンが居た。

なのは「ふたばちゃんが、真の紋章の宿主って、本当なんですか？」

先ほどジーンからふたばが真の紋章の宿主だと教えてもらったのはが叫んだ。

東郷「高町、落ち着け。」

なのは「落ち着てなんて居られませんよ！ふたばちゃんが真の紋章の宿主なんですよ！聖時くんといつも一緒にいるあのふたばちゃんが……」

はやて「……まさか、ふたばちゃんが真の紋章の宿主やったとはな。このままじゃ聖時に真の紋章の事を始めとした魔法についての秘密がバレるところか、下手をすると巻き込まれる可能性があるな。」

フェイト「うん、そうだね。ただでさえ、真の紋章は宿主の周りに

いる人を巻き込む習性があるからへたをすると聖時も……」

そう言ったフエイトは顔を曇らせた。

フエイトは聖時の父親の聖が、真の紋章を宿したせいでどれだけ辛く、大変な目にあっていたのか、その一部始終をその目で見ていたので、聖時が真の紋章に関わることにあまり良い顔ができないのである。

なのは「ふたばちゃんが真の紋章の宿主なら、聖時くんと合わせないようにしないとイケないね。」

フエイト「……やっぱりそうしないとイケないね。仲のいい二人の仲を引き裂くみたいで、あまり気が進まないけど……」

はやて「せやな……なあユニさん。ユニさんはどう思う?」

そう言うてはやては、さつきから押し黙ったままである、現在聖時の保護者をしているユニに対して意見を求めた

ユニ「……やはり、聖時さんは真の紋章に関わる運命さだめからは逃れられないですね。」

はやて「え?」

なのは「ユニさん?」

ユニ「……生前の千尋様とマスター……聖さんは、聖時さんが真の紋章に関わる事を予想していました。けど二人ともやはり自分の子が辛い目に会うことを良しとじていませんでした。」

ユニは聖時の両親であり今は、今は亡くなり、または行方不明になった二人が、居なくなる前に言っていた事を話し始めた。

ユニ「・・・けど、もし、やも得ずに巻き込まれそうになったら、素直に魔法や紋章について話してあげて、聖時の力になってあげて欲しいとも言っていました。無自覚なままで巻き込まれるのはかえって危険だから・・・そして話を聞いた上で、もし聖時さんが魔法に関わろうとしたのならば、力になって上げて欲しいと。」

なのは「千尋さんと聖さん・・・そんな事言ってたんだ。」

ユニ「私は・・・潮時なんだと思っています。「もしこのまま聖時さんが無自覚のままもし巻き込まれたら、取り返しのつかない事になるのでは?」と・・・」

フェイト「た・・・確かにそうですけど・・・でも!」それに、聖時さんは自分の意思で強くなるうとしています!」っ!？」

ユニ「聖時さんはあの日・・・千尋さんと桃華さんを守れなかったことを気に病んでいました。そんな聖時さんが最近強くなるうとしているんです。」

ユニの言葉を聞いてなのは達は、聖時がシグナムから剣の手解きを受けていたり、最近は童虎にも頼んで稽古を付けてもらっている事を思い出した。

ユニ「強くなるうとしていいるなら、遅かれ早かれ、魔法のことに関わるのは時間の問題です。」

なのは「・・・だから潮時だと?」

ユニ「ええ、あの子は自分の足で歩き始めたんです。その歩みを私達の勝手な思いで止めてしまうのは、それは私たちの完全な我侷です。」

はやて「・・・たしかにそうやな。聖時に辛い目にあって欲しくないからと言ってあの子の歩を止めるのは確かにワガママやな。」

なのは「・・・」

フェイト「確かにそうだね。」

三人はそう言いながら顔を伏せた。

東郷「・・・お前たち・・・ムッ！」

顔を伏せた三人に対して声をかけようとした東郷大地は突然、待機形態にしてあった自分のエレメンタルデバイスから何かに共鳴するような音と光を出したことに驚き、デバイスを取り出した。

なのは「と・・・東郷さん?!」

フェイト「と・・・東郷さんのデバイスが光ってる?!」

はやて「な・・・なんなんや一体・・・この光と音は?」

ジーン「こ・・・これは・・・女神が・・・聖霊の女神・「ルシリ」が蘇った?!」

東郷「この共鳴は・・・やはり「女神の紋章」が力を取り戻した証

扱。
」

四乃森「課長！」
ホス

突如部屋に四乃森連矢と斉藤夜天が入ってきた。手にはそれぞれ、共鳴して光り輝いている自分のデバイスを持つて。

斉藤「さつき、いきなり「精霊」が共鳴をし始めた。これは・・・」

東郷「ああ、わかつている。「聖位」の「精霊」がコレほど共鳴するのはやはり、「女神の紋章」が力を取り戻した証拠だ。」

東郷たち三人は事情を知っているのか顔を見てうなずきあっていたが、何も知らないのはた達は何もわからずにいた。

なのは「あ、あの～これは一体？」

はやて「さつきから何三人だけで納得してるんですか？うち等にも解るように説明してください。」

ワケが解らないと言う顔をしていたはやてが三人に足して事情の説明を求めた。

斉藤「騒ぐなママ狸」

はやて「またタヌキ言った！しかも今回はママまでつけた！！」

東郷「落ち着け八神。今説明する。以前、説明したと思うが、我々のデバイスはエレメンタルデバイスと言う「聖霊」・・・今では「精霊」と呼んでいるが、ソレを宿している特殊なデバイスだ。」

三人は説明をし始めた東郷の方を見て話を聞き始めた。

東郷「その聖霊達は、遙昔、一番最初に「女神の紋章」を宿した、初代の宿主、「ルシリス」がこの世界に生み出した物なのだ」

なのは「め・・・女神の紋章の初代の宿主が生み出した物?!」

東郷「そうだ。そしてそれ以来、「女神の紋章」を宿した者を「聖霊の女神」、「女神ルシリス」と呼ばれる様になった。」

なのは「め・・・女神ルシリス!?!」

第77話 聖霊の女神？（前書き）

どうも、剣 流星です。

昨日、映画の「はやぶさ」を見てきました。

結構感動する作品なので、みなさんも見てみてください。
では第77話をどうぞ。

第77話 聖霊の女神？

第77話 聖霊の女神？

なのは達が特務捜査課で話し合っている頃。

ダイオラマ魔法球の中の聖時の別荘。今現在の別荘内時間、朝。聖時は別荘内にある自分の部屋のベットの途中でまどろんでいた。そんな聖時の耳に、聞き覚えのある声二つが聞こえてきた。

聞き覚えのある声1「・・・やっぱり聖時お兄ちゃん・・・寝てるね。なら、さつき打ち合わせた通りにやるよ。」

聞き覚えのある声2「ほ・・・本当にやるの？」

聞き覚えのある声1「もちろん！聖時お兄ちゃんが朝寝坊するなんて珍しいんだから。やるなら今だよ。」

聞き覚えのある声2「け・・・けど〜」

聞き覚えのある声1「さあ！覚悟を決めて・・・いつつくぞ〜〜〜
〜〜〜！！」

聞き覚えのある声2「え？あ！引つ張らないで〜〜〜！！」

聞き覚えのある声1「起つきろ〜〜〜、聖時お兄ちゃん〜〜〜
ん！！え〜〜〜い」

聞き覚えのある声2「え・・・え〜〜〜い！」

聞こえてきた元気な声と、遠慮気味な声が掛け声を上げた次の瞬間。

ドスッ！！

ドゴッ！！

聖時「グワッ！グエッ！」

突如腹に鈍い痛みが二つ走り、さらに自分の腹の上でそそ痛みの元がじたばたと暴れ始めた。

聞き覚えのある声1「起つきろ 起つきろ 朝だあ」

聞き覚えのある声2「お……起きろ、起きろ、朝だ」(遠慮気味に)

元気な声と遠慮気味な声を聞きながら、聖時は痛みを耐えながら、自分の腹の上で暴れている元凶に目を向けた。

聖時「あ……明日香……ちゃん？またこの起こし方？」

聖時は聞き覚えのある声1の声の持ち主である明日香に声をかけた。

明日香「うん 聖時お兄ちゃんがいつもの時間に起きてこないから、今日はさくらちゃんと一緒に起こしに来たんだ」

明日香の話聞き、明日香と一緒にさつきから遠慮がちにしながら暴れていた、聞き覚えのある声2の主であるさくらに視線を向けた。

さくら「す……すみません……明日香ちゃんに強引につき合わされて……怒りました?」

萎縮しておどおどしているさくらを見ながら聖時はふくと息を吐くと、おもむろに桜の頭に右手を乗せて撫でた。

聖時「怒ってないよ。よく起しに来てくれたね。ありがとう。」

笑顔と共に怒っていないと言うと、ホツとし、撫でられたのが気持ちいのか少し嬉しそうな顔をした。

さくら「あ……はい／＼／＼」

そんなさくらを見ながら、聖時は昨夜見た夢について思い出していた。

聖時「ふたばと、ふたばが話してくれた、自分の夢に良く出てくるサキって娘と一緒に、童虎先生がかつて居た世界にある聖域（サングチュアリ）に行つて、女神アテナに冥王ハーデスとの戦いを託されるって……なんとも荒唐無稽な夢だったな……」

そんな風に考えていると、不意に明日香が聖時に声をかけてきた。

明日香「?ねえ聖時お兄ちゃん、その右手につけてるの何?」

撫でられているさくらを見ていた明日香が、さくらを撫でていた聖時の腕に、見慣れない物が付けられているのを見て聞いてきた。

聖時「え?右手に?何の事?」

そう言いながら聖時は自分の右腕に目を向けた。

聖時「?!こ……これは?!」

聖時は自分の腕に付けられている“ソレ”をみて驚いた自分の腕に付けられている“ソレ”は夢で行った聖域サンクチュアリで自分とふたば、サキの三人で再会を誓って作った約束の花輪だった。

聖時「何で……アレは……夢じゃなかった?」

明日香「?聖時お兄ちゃん?」

頭に疑問符を浮かべている聖時を見て声をかける明日香。そんな時、不意に誰かの声が部屋に響いた。

ピティ「……うるさ……い!朝っぱらから騒いでるのは誰?!」

人形用の自分のベットから目を擦りながら起きてきたピティが声を上げた。

明日香「あっ!ピティ!おっはよ」

ピティ「またあんなの、明日香」。

明日香「うん 今回はさくらちゃんと一緒に聖時お兄ちゃんを起しに来たの」

さくら「ど……どつも……おはようございます」。

ピティ「…………ふう〜、あんたも付き合わされて大変だね〜さくら。」

さくら「い…………いいえ、別に迷惑じゃ…………。」

ピティ「な…………なんて良い子なのさくらは！もう、良い子、良い子」

さくらの頭を今度はピティが撫でまくるピティ。

さくら「あ…………／／／／／／」

ピティに撫でられ顔を赤くしながら喜ぶさくら。

ピティ「ねえ聖時、本当にさくらは可愛くて良い子だよ。いつそのことこのまま神谷家の子にならないかね聖時？って聖時…………その枕元にあるのは何？」

聖時「え？枕元？」

聖時はピティに言われて自分が寝ていたベットの枕元を見た。

聖時「…………コレは?!」

そこにあつた物は、綺麗な装飾をした箱と、何かの液体が入っている瓶、数珠と鞘に入っている綺麗な装飾をしてある短剣、そして聖時の絵柄が描かれたある仮契約のカードがそこにあつた。それらの物は夢の中で女神から託された、アテナの血で書かれた護符が入っている聖櫃とアテナの血が入っている瓶、そして冥闘士の魂を封じる数珠と、神衣の短剣。そして女神の力を借りて出来た聖時のカ-

ドだった。

明日香「コレ何？聖時お兄ちゃん？」

さくら「・・・綺麗。」

聖時「女神アテナから託された物・・・これがあるって事は・・・やっぱりアレは夢じゃなかった？」

ピティ「これ・・・寝る前には無かったよね・・・コレ何なの聖時？それにコレは聖時の仮契約カードバックテイオーだね？一体いつ作ったのよ聖時・・・聖時？」

ピティが寝る前には見かけなかった物があるのでソレについて聖時に聞いたピティだが、聖時は何か考えていたのか、ピティの話をおかず、上の空である。

ピティ「聖時？」

聖時「・・・あの夢が夢じゃなかったのなら、ふたばもこの事を知っているはず・・・。」

ピティ「おゝい聖時？」

聖時「・・・なら、ふたばと一緒に女神アテナからの伝言をふたばと一緒に先生に伝えて、・・・。」

ピティ「もしも〜し、聖時〜」

聖時「・・・これからの冥王軍との戦いに向けての対策を・・・」

「

ピティ「ピティちゃんキィ〜〜〜ク!!」

ドゴッ!

聖時「ウグッ!」

ピティの鋭い蹴りが聖時の顔に突き刺さる。

ピティ「人が聞いているのに無視するな!!」

聖時「ご……ごめん、ちょっと考え事してたんだ。」

ピティ「まったく……で、コレは一体何なの?」

明日香「そうそう、コレなんなの聖時お兄ちゃん。なんだか不思議な……神秘的な感じがするけど。」

さくら「(コクコク)」

ピティと明日香はそう言いながら、聖時のベッドの枕元にある品々の数々について聞いてきた。

聖時「……これは……いや、コレについての話は、みんなにも話さなきゃならないから、みんなが集まった時に話すよ。みんな朝食で食堂に集まるんだろっ?」

聖時はそう言って自分を起こしに来た明日香に聞いた。

明日香「え？うん．．．うん」

聖時「なら、コレの話はその時に。」

聖時はそう言って、寝る前にベットの枕元に置いておいた指輪の待機携帯になつて自分のエレメンタル・デバイス、「ジャメイム」を手にとつて身に付けようとして、デバイスの違和感に気づいた。

聖時「?!こ．．．これは?!」

聖時のデバイス「ジャメイム」は何かに共鳴しているかのように弱々しい光と音を出していた。

明日香「あれ？聖時お兄ちゃんのデバイスも光つて鳴つてるの？」

聖時「え?!僕のデバイスもつて．．．他のみんなのデバイスも鳴つてるの？」

明日香「うん!さつき、さくらちゃんと一緒に起こした猛お兄ちゃんやお姉ちゃんや、それに．．．」

そう言って明日香は、待機形態の自分のエレメンタル・デバイス、「ビシヤール」を取り出して見せた。

明日香のデバイス「ビシヤール」もまた、聖時のデバイスと同じく弱々しい光と音を出していた。

聖時「本当だ．．．同じように共鳴しているように音と光を出している．．．明日香ちゃん、一体いつからこうなっているの?」

明日香「うん．．．朝、起きてからこうなっているよ。」

聖時「朝、起きてから……この事もみんなと話し合わなきゃならないね。とにかく全てはみんなが集まってからだ。だから明日香ちゃん、一応みんな朝食で食堂に集まると思うけど、念のためみんなに話があるから、食堂に一度集まって欲しいって言ってきて。」

明日香「うん！分かった。行こうさくらちゃん。」

そう言ってさくらの手を引いて部屋を出て行く明日香。

さくら「え？え？え？また手を引つ張らないで~~~~~！」

部屋を出て行く二人を見送った後、聖時は寝巻きから普段着に着替えを始めた。

聖時「……エレメンタル・デバイスの共鳴……これは、僕とふたばが聖域サンクチュアリに行った次の日の朝に共鳴現象が起きた……何か関係が？」

ピティ「？聖時」

聖時はそう考えながら着替えを終えると同じように寝巻きから普段着に着替え終えたピティを連れて食堂へと向かった。

《つづく》

第78話 聖霊の女神？（前書き）

どうも、投稿遅れてすいません。 剣 流星です。

いや、まさか打っていた作品が全部一片に消えたのはさすがに堪え
ました。

では、第78話をどうぞ。

第78話 聖霊の女神？

第78話 聖霊の女神？

別荘内の食堂。そこにはティアナ、猛、剛、芹、明日香、由香、晶が居た。

そこに、女神から授かった物を両手に抱えた聖時がピティを連れて入ってきた。

聖時「みんな、おはよう。」

聖時は食堂にいる面々に朝の挨拶をしながら両手で抱えている物をテーブルの上置きながら食堂に居る面子を見た。

聖時「あれ？まだ来てない人が居るみたいだけど……」

ティアナ「ゆめみさんと琴乃さんは、さくらちゃんと一緒に朝食の準備をしてるわよ。」

晶「ふたばさんはまだ部屋みたいだよ。」

明日香「アルフお姉ちゃんと刹那お姉ちゃんは朝の訓練だって。」

由香「河瀬くんは、まだ寝てるみたい。さっき部屋に行ってノックしたけど、中から河瀬くんの寝息が聞こえてたから……」

聖時の質問に食堂いた面々が答えた。

裕也「何が「ウム！ご苦労（ビシッ！）」だ！つぶされるかと思っ
たぞ！」

ピティ「いつまでも寝ているからよ。だいたい、アレで潰れるわけ
無いでしょう！潰れるんだったら、とつくの昔に、猛や聖時が潰れ
てるわよ。」

裕也「俺をあんな人外並に頑丈な連中と一緒にするな！俺はあくま
でノーマルな人間だ！」

聖時「じ……人外つて……」

猛「俺達、人外扱いだよ。」

由香「ま……まあまあ、みんな落ち着いて、ソレよりも聖時くん、
聖時くんが持ってきたソレ……何？」

ティアナ「そうそう、私も気になってたんだけど、コレ……何な
の？」

ティアナ達は、聖時が持ってきた女神から授かった品々を興味津津
に見ていた。

聖時「後で話すよ。それよりもみんな、今朝、明日香ちゃんから話
を聞いたんだけど、みんなのエレメンタル・デバイスも何かに反応
するように共鳴現象を起こしてるんだって？」

猛「……そう聞くなってことは、やっぱり聖時の「ジャメイム」も
共鳴してるのか。」

猛がそう言いながら、自分の待機状態のエレメンタル・デバイス「クサナギ」を取り出した。

「クサナギ」は聖時の「ジャメイム」と同じように共鳴現象を起こしていた。

剛「やっぱりそうなのか。俺の「ムラクモ」も今朝から何かに反応して共鳴現象を起こしているんだ。」

そう言っただけで共鳴している待機状態の「ムラクモ」を差し出す剛。

芹「私の「カーヴアイル」もよ。これって一体何なの？」

共鳴現象を起こしている待機状態の「カーヴアイル」を出しながら、芹はこの共鳴現象が何なのかを聞いて来た。

聖時「わからない。だけど、一つ言える事は、この共鳴現象は「エレメンタル・デバイス」だけに起きている現象だって言う事は確かだよ。」

ティアナ「確かにそうね。さっき見てみたんだけど、私のデバイスは反応してない所を見ると、あなた達が持っている特殊なデバイス……「エレメンタル・デバイス」だっけ？ソレにしか反応がないみたい。」

そう言いながらティアナは自分が作成した、ハンドメイドの自分のデバイスであるアンカーガンを出しながらそう言った。

明日香「「エレメンタル・デバイス」だけが反応をしているんだよね？今朝から……朝、一体何があったのかな？」

明日香が疑問を口にしたその時、食堂の入り口からふたばが、早朝訓練を終わらせた、刹那、アルフと共に入ってきた。

ふたば「みんな、おはよう」

アルフ「おはよう、みんな。」

刹那「おはようございます。」

ふたばがアルフと刹那達と一緒に食堂に入ってきた。どうやら食堂に来る途中、一緒になったみたいだ。

ふたばを先頭に食堂に入る三人。

と、その時、食堂にふたばが入ると同時に、アレほど、うるさいくらい鳴っていた、「エレメンタル・デバイス」の共鳴が、ぴたりと止んだ。

聖時「?!こ……これは……」

ティアナ「共鳴音が止まった?」

猛「ど……どうして共鳴音が止まったんだ?」

剛「まるで……ふたばに反応して、共鳴音が止まったように見えるが……」

聖時「ふたばに反応?……それが本当なら……何でふたばに反応したんだ?」

聖時が疑問を口にする、その疑問に何者かがその答えを言った。

アルフ「？どうしたんだいみんな？」

刹那「な・・・何かあったんですか？」

聖時「え？いや・・・僕にも何がなにやら・・・なんで共鳴音が止んだんだ？」

聖時が共鳴現象が止まった事に関して頭に？マークを浮かべた。

ゆめみ「「エレメンタル・デバイス」がなぜ、ふたばさんに反応したのか？それはふたばさんが「女神の紋章」の継承者・・・聖霊の女神「ルシリス」だからです。」

聖時「ゆめみ！」

突如聞こえてきた声の方に振り向く一同。そこには台所の入り口から、朝食をトレイに載せて運んできたゆめみがそこに居た。そして、その後ろにはさくらと、琴乃が同じように朝食をトレイに載せて続いて出てきた。

聖時「女神の紋章って・・・この共鳴現象がふたばと何かしら関係があるものなの？」

ゆめみ「ええ、これ「女神の紋章」が力を取り戻した証し、早朝からさきほどふたばさんに反応してそれが止むまでの間に起きた共鳴現象、それは私の中にある「エレメンタル・デバイス」のコアに宿っている虹の精霊・「アーザス」も起こしていました。そしてこの反応見る限り、まず間違いなく、「女神の紋章」が力を取り戻し、覚醒した証です。」

ゆめみはそう言いながらさくらや由香、裕也に朝食を並べるように指示を出しながら、自分も持っているトレイから朝食を並べ始めた。ピティ、「私の中にある「エレメンタル・デバイス」「って、ゆめみは自分の中に「エレメンタル・デバイス」を持つてるの？」

ゆめみ「ええ、私の戦闘形態の時の力の源ですから。さあ朝食の準備ができましたよ。色々と聞きたいこと、話したいことが皆さんあると思いますが、まず朝食を食べてからにしませんか？このまま話を続けると、せつかくの暖かい朝食が醒めてしまいますから。」

琴乃「確かにそうですね。このまま話込んでしまうと、さくらちゃんや由香さん、ゆめみさんがせつかく作った暖かい朝食が醒めてしまいますね。」

芹「確かにそうですね。」

明日香「じゃあ早く食べようよ。私お腹ぺこぺこ〜」

琴乃「もう、明日香ったら。」

そう言いながら明日香は自分の席に着き、それに続くように聖時達も席について、朝食を食べ始めた。

《<U>U>》

*

第79話 聖霊の女神？（前書き）

どうも、剣 流星です。

今回は説明回です。

文字ばかりが多くて読みにくいとお思いと思いますが、拙い自分の文書力ではこれが精一杯なのでご了承ください。では第79話をどうぞ。

第79話 聖霊の女神？

第79話 聖霊の女神？

今、聖時達は、ゆめみ達が用意してくれた朝食を食べ終え、後片付けをし終えた後、聖時達やゆめみの話を聞くために、食堂の席に座った状態である。

ゆめみ「・・・さて、ではお話ししましょう。まずは今朝の「エレメンタル・デバイス」が、どうしてふたばさんに反応したのか、まずは其処から話さなくてはなりませんね。」

ピティ「そうそう、なんで「エレメンタル・デバイス」・・・正確に言えば、「エレメンタル・デバイス」内の精霊がどうしてふたばに反応したの？」

ゆめみ「それは、精霊をこの世に生み出し者が、27の真の紋章の一つ「女神の紋章」の初代の宿主だったからです。」

刹那「め、「女神の紋章」の初代の宿主?! ちょ、ちょっと待ってください! それじゃあ、ふたばさんは・・・」

刹那が「女神の紋章」と言う言葉を聞き、驚きながらゆめみに聞いた。ゆめみ「ええ、かつて聖時さんのお母様、「千尋様」が宿していた紋章、「女神の紋章」、あるいはその欠片とも言える物を宿しているのでしょうか。」

聖時「なっ！か、母さんが宿していた紋章がふたばに宿っている？！」

聖時はゆめみの話を聞いて有ることを思い出し、ハツとなった。それは、精神体で行った聖域サンクチュアリで出会った女神アテナに言われたことである。

聖時（女神アテナはふたばとサキ、ふたりで一つの女神の力を宿しているらしい事を言っていた。もしかして、それが女神の紋章の事を指している？）

ゆめみ「聖時さん、あなたも昔、「千尋様」に宿っていた「女神の紋章」を見ていますよね？」

聖時「う、うん。」

ゆめみ「今、ふたばさんの体の何処かに、かつて「千尋様」が宿していた「女神の紋章」、あるいはその欠片が宿っているはずですよ。ふたばさん、体のどこかに、それらしい物はありませんか？」

ふたば「二年前から、左胸に紋章の様なものが浮かび上がってたけど・・・もしかしてそのことかな？」

聖時「ふたばの左胸に母さんの紋章が？それ、本当に女神の紋章なの？」

ふたば「え？わ、解らないよ。だって私、「女神の紋章」がどういう形をしているのか知らないもん。」

猛「そうだぞ、聖時。女神の紋章がどいう形なのかは、ここに
いるメンバーの中では、それを直接見た事のあるお前以外知らない
だから、解りようがないだろう。」

聖時「あ、そうか。じゃあふたば、その紋章、ちょっと見せてく
れない?」

ふたば「えっ! / / / /」

ピティ「ピティちゃんキ~~~~ク!」

ドゴツ!

聖時「グハツ!」

突然のピティのキツク顔面に食い込ませて倒れる聖時。

聖時「いきなり何するんだ!」

ピティ「あんたバカ? 紋章はふたばの左胸にあるのよ? それを見せ
ろって言うことは、年頃の女の子に向かって、「自分の胸を見せて
くれ」って言っているようなものよ? 解る?」

聖時「あっ!」

聖時はピティの言葉を聞き、先ほど自分が言った言葉が如何に迂闊
な言葉だったかを悟り、バツの悪そうな顔をした。

聖時「ふたば・・・ごめん。」

ふたば「え？い、いいよ別に。そ、それに、聖時になら見られても
／／／／／」

聖時「？何か言った？」

ふたば「え！？う、ううん、何でもない。」

ゆめみ「女神の紋章は、私も見たことがありますから、私が後でふたばさんの紋章の形を確認します。さてと、話が逸れましたね。兎に角、初代の「女神の紋章」の宿主は、「聖霊」・・・今は精霊と呼ばれていますが、それを生み出しました。以来、初代の「女神の紋章」の宿主、「ルシリス」は別名「聖霊の女神」と呼ばれ、生み出された「聖霊」と契約をかわし、聖なる小宇宙^{コスモ}、聖小宇宙^{セントコスモ}に目覚めた契約者^{コントラクター}を従え、この次元世界の様々な邪悪と戦ってきました。」

ティアナ「ちょ、ちょっと待って、今「ルシリス」って言ってたけど、それって・・・」

ティアナはゆめみから聞いた「ルシリス」と言う名前に反応し、ゆめみに質問してきた。

ゆめみ「ええ、次元世界・・・特にミッド出身の人にとっては有名な名前ですよね。」

聖時「？有名って？」

聖時は「ルシリス」と言う名前が次元世界では有名だと言ったティアナに質問をした。

ティアナ「かつて、古代ベルカ時代には、強大な力を持った様々な

王が居たの。その中で取り分け強大な力を持った王は、今日までその名前は語り継がれているの。聖王オリヴィエ、霸王イングヴァルト、冥王イクスヴェリア、雷帝ダールグリユン、竜王アトルシャン・ファン。そんな王たちの中に聖霊王の名前で呼ばれていた女性がいたの。聖霊王フィアル・ルシリス。」

ふたば「ル、ルシリス……その聖霊王を呼ばれた人は……」

ゆめみ「はい、初代「女神の紋章」の宿主である「ルシリス」の末裔であり、「女神の紋章」の宿主だった方です。」

明日香「すっごーい！ふたばお姉ちゃん、女神でもあり、王様でもあるんだ。すごいね、さくらちゃん！」

さくら「（コクコク）」

アルフ「た……たしかにすごいね。古代ベルカの王達って言ったら、歴史に疎い私でも名前ぐらい知っている人物たちだ。その王の一人の後継者がふたばだなんて、正直驚いたよ。」

ふたば「そ……そんなこと言われてもあんまりピンと来ないけどね。」

ゆめみ「とにかく、ふたばさんはそんな「ルシリス」の後継者であり、聖霊と契約をかわして契約者になった皆さんは、聖霊の力の影響で、聖なる小宇宙「セントコスモ」に目覚め、「ルシリス」と共に戦う戦士、「セイント聖闘士」になる事が出来るんです。」

剛「ちょ、ちょっと待って！今、「セイント聖闘士」って言ったけど、その名前は確か……」

ゆめみ「ええ、かつて、童虎さんが居た世界の女神アテナと共に邪悪と戦った星座の戦士達と同じ名前です。この次元世界でも、「聖霊」と契約を交わし、聖なる小宇宙、「聖小宇宙」に目覚めた契約者の事も「聖闘士」と呼ばれています。」

聖時「そ、そうなんだ。・・・ん？ちょっと待って、前にゆめみから、僕の父さんは光の聖霊の聖位に位置する光の聖霊王「レイ」と契約を交わしていたって言ったけど、もしかして父さんも・・・」

ゆめみ「ええ、この世に6人しか居ない、聖位の位の「聖闘士」でした。」

聖時「やっぱりそうだったんだ。」

聖時は、今まで、「小宇宙」は童虎の世界で使われている力で、この次元世界では使われていないものだと思っていた。しかし、自分が使っている、父が残した修行方法について書かれた書物の中の修行方法の中に「小宇宙」について書かれてあった事について、今まで疑問に思っていたが、父が聖霊と契約を交わした「聖闘士」だったのなら書かれてあってもおかしくないと思った。

刹那「なるほど。以前、聖時さんから聖様が残した修行方法について書かれた書物を見せてもらいましたが、どの修行方法も初めは、気や魔法に関する修行の見えるのですが、最終的には「小宇宙」に目覚められるようになっていたのは、聖様が「聖闘士」だったからなのですね。」

ゆめみ「ええ、この世界での「小宇宙」の習得方法は、人の体内に

眠る力で、比較的表層に近い位置に眠っている力、「気」や「魔力」と言った物に目覚めさせ、ソレを有る程度極め、その力を使って、さらに奥に眠っている力に働きかけ、目覚めさせると言う方法を取っているのです。ですから、最初の方では「気」や「魔法」についての修行方法が中心になっています。」

芹「なるほどね。つまり、「気」や「魔力」に目覚め極めた後、そこからさらに自分の奥に眠っている力を目覚め極め、さらに奥を目指す・・・童虎さんがいた世界みたいに、いきなり人の奥深い所に眠っている「小宇宙^{コスモ}」を目覚めさせるんじゃなく、段階的に奥を指すって感じなのね。」

ゆめみ「はい、まず、人の内に眠っている力で、比較的表層に有る「気」の力を目覚めさせます。「気」とは、ある程度、その道を極めた人なら自然に身につきますし、普通の人も、日常で無意識にもその力を使っています。人がケガなどをした時、傷口に手を当てる時、痛みが少しだけ和らぐのは、無意識のうちに手に「気」を集めているからなんです。」

由香「そっか、私達が普段ケガした時、確かに傷口に手を無意識に当てているのは、本能的に「気」でケガを癒そうとしてたからなんだね。」

ゆめみ「ええ、その後、「魔力」や「ESP」・・・俗に言う超能力と言った力に目覚めてから、人の内に眠る力でもっとも強大であり、もっとも奥で眠っている力「小宇宙^{コスモ}」に目覚めるのです。」

裕也「なるほどね。だけどさ、その方法だと時間が掛かりすぎるんじゃないか？」

裕也が段階的に、人の内に眠っている力を目覚めさせて行く方法は時間が掛かりすぎるのではと指摘した。

ゆめみ「普通に考えればそうですね、聖さんが残した修行方法なら、計算された効率的な修行方法が取られていますから、時間的にだいぶ短縮できていますし、何より「聖霊」と契約を交わした「契約者」^{トラクター}なら聖霊の力である、「契約者の内に眠っている力を目覚めさせやすくする力」が、その手助けをしてくれますから時間的にも童虎さんが居た世界の「小宇宙」の力に目覚めるための修行方法とそう変わりはありませんし、なにより、その過程で目覚めて使えるようになった「気」や「魔力」による力を「小宇宙」^{コスモ}の力で発揮させる事ができるようにもなります。」

猛「なるほどね。それなら聖時の親父さんの修行方法の方が断然お得だな。童虎先生の世界の修行方法は行き成り「小宇宙」^{コスモ}に目覚めさせると言うちょっと強引な方法だから、その修行内容もまさに命がけの物が多くて、とてもじゃないが、命がいくつあっても足りないくらいだからな。」

剛「た・・確かにそうだな。」

そう言つて猛達は、以前童虎から聞いた向こうの世界での聖闘士^{セイント}の修行方法を思い出し、そのあまりの凄さに身震いした。

聖時「ま、まあ修行云々は置いて。とにかく、ふたばに「女神の紋章」の力が宿り、それを聖霊が感じ取って共鳴現象が起きた。聖霊は初代「女神の紋章」の宿主、「女神ルシリス」が作り出した物だ。だから聖霊は「女神の紋章」の力が復活した事に対して共鳴を起こした。朝起きたデバイスの共鳴は説明が付いたね。」

ピティ「確かにそれで、朝起きた「エレメンタル・デバイス」の共鳴について説明が付くわね。それじゃあ次に・・・聖時、あんたが持ってきたソレに付いて説明してもらえる？」

ピティはそう言って、聖時が部屋から持ってきて、テーブルに置いておいた。品々を指さして言った。

ピティ「そこにある物一つ一つから凄い力を感じる。昨日まではこんな物この別荘内にはなかったはずよ。一体どうしたのコレ。一体いつ手に入れたの？ちゃんと説明してくれる？」

ピティは聖時が持ってきた品々がとてつもない物だと感じ、ソレの説明を聖時に求めた。

???「その説明、ワシも聞きたいな。説明してもらえんか聖時。」

聖時達「!?!」

突如した声に驚きながら、その声のした方向を聖時達は向いた。食堂の入り口、そこには聖時達に修行を付けてくれている人物、童虎と土郎がそこに居た。

聖時「先生！土郎！」

《つづく》

第79話 聖霊の女神？（後書き）

古代ベルカの王の名前のところで出てきた、竜王はこの作品のオリジナルの王です。

第80話 聖霊の女神？（前書き）

どうも、剣 流星です。

最近、朝が冷え込んできてストーブををとおうとしたんですけど、灯油がなくて、かるくOTLになりました。

では第80話をどうぞ。

第80話 聖霊の女神？

第80話 聖霊の女神？

食堂の入り口の方、そこには童虎と士郎が立っていた

聖時「童虎先生！……どうしたんです？顔色が悪いみたいですよけど？」

童虎「い……いや、なにちょっとシヤマルさんの料理の味見役をやったな……」

ピティ「えっ！！シヤマルの料理の味見役をやったの?!」

猛「な、なんて無茶を……」

琴乃「だ、大丈夫ですか？」

童虎「な、なんとかな……しかし聖時、お主よくも毎回毎回あんな料理の味見役ができるな……」

聖時「ま、まあ慣れてますからね。免疫もありますしね。それよりも、なんで受けたんです？味見役なんて？」

童虎「い、いやな、お主が居ない間にシヤマルさんが来てな。お主に料理の味見役をしてもらおうとしてたらしいが、あいにくお主は

留守。そこでシャルさんが代わりにワシに味見役をして欲しいと言ってきてな……」

聖時「で、引き受けちゃったと？」

童虎「まあな、断る事が出来なくてな。ソレよりも聖時、見かけない顔が幾つかあるのだが……それに、そこに有る聖櫃イコイルと霊血の入ったビン等はお主が持ってきたというのは本当か？どこでコレを……」

聖時「今、丁度その事についてみんなに話そうと思っていたところなんです、先生と士郎も来てくれたのなら、都合が良い。みんなに話すのが一編に済む。新顔の人の紹介も含めて話します。」

童虎「そうか、なら、こちらもその後でかまわないから、わしからも話があるので聞いて欲しい。」

聖時「え？先生も話すことあるんですか？」

童虎「正確にいえば士郎がだ。ワシも大まかな事を士郎から聞いただけだからな。」

聖時「士郎が？」

士郎「ああ、俺もみんなに話があるんだ。だけど、俺の話は聖時の話の後でいいよ。」

そう言つて士郎は童虎と一緒に食堂の中に入り、席へと付いた。

聖時「？士郎、その手に持っている剣、どうしたの？」

聖時は士郎が持っている二振りの剣を持って、ソレをどうしたのか聞いた。

士郎「ああ、コレは「ソーディアン・クレメンテとアトワイト」ってえ？ゆめみさん、どうしてこの剣の名前を知っているんです？」

ゆめみが士郎の持っている剣の名前を言った事に驚き、士郎はその事を聞いた。

ゆめみ「知っているも何も、私は以前、^{ひつ}聖さん達と一緒に、その剣の使い手たちと旅をした事があるんです。」

聖時「えっ！どう言う事？！父さんと一緒に旅をしたって……」

聖時は予想外の人物の名前……父の名前が出てきた事に驚き、ゆめみに聞こうとしたがソレを童虎が遮った。

童虎「待て聖時、物事には順番というものがある。まずは、お主の話をするのが先じゃ。」

聖時「……はい、解りました。じゃあ、まずは僕がこの聖櫃等を受け取った経緯について話します。ふたば。」

ふたば「（コクツ）」

聖時は童虎と士郎に昴、ティアナ、さくらを紹介すると、ふたばと一緒に聖櫃を受け取った経緯について、先ほどゆめみから聞いた話の内容を混じえながら話し、聖時達もまた、士郎から「クレメンテ」と「アトワイト」を受け取った経緯を聞いた。

童虎「そうか・・・まさかお主らが「アテナ」から直々に「ハーデス」の事を任されていたとは・・・いささか驚いたぞ。」

士郎「ええ、本当に。」

聖時「驚いたのはこっちだよ。まさか士郎が「黄金闘士ゴールドセイント」から力を受け継いでいたなんて思いもしなかったよ。」

ゆめみ「しかも、「クレメンテ」と「アトワイト」も一緒に連れてくるなんて。」

士郎「そう言えばゆめみさん、さっき「クレメンテ」と「アトワイト」の事知っているような口ぶりだったけど・・・。」

士郎は先程ゆめみが自分が二本の剣の名前を話す前にその名前を口にした事を思い出し、そのことについて聞いてきた。

ゆめみ「知っているも何も、私と聖時さんの両親である聖さん、千尋さんはその剣の前の持ち主たちと一緒に旅をしたことがあるんです。」

ピテイ「えっ！旅を？」

ゆめみ「ええ、聖さん、千尋さん、ユニさん、そして私の四人は昔異世界を渡り歩いていた時期があって、その時に二本の剣の前の持ち主たちの世界にも居たことがあるんです。」

聖時「異世界を渡り歩いた？本当なの？」

ゆめみ「あら、疑っているんですか？なら彼らに証言してもらいましょう。」

ゆめみはそう言っただけで、二本の剣を指さした。

士郎「？」「ソーディアン」に証明させるんですか？確かにこの剣は意思を持ち、しゃべることができると思うけど、その声を聞くことができるのは「ソーディアン」のマスターの素質を持った者だけのはず。」

士郎が「ソーディアン」の声をマスターの素質がある者しか聞けないことを指摘してきた。

ゆめみ「たしかに「ソーディアン」の声を聞くことができるのは、「ソーディアン」が発する波長が合う者……つまり「マスター」の素質を持った者だけです。ですけど、私はその波長を機械的な力でキャッチ出来るんです。ですので、私がキャッチした波長を念話に変換して皆さんに発すれば、みなさんも「ソーディアン」の声を聞くことができます。ちょっと待っていてください……」

そう言っただけで、目は閉じた。

ゆめみ「……」「ソーディアン」から発せられる精神波を受信、それを「念話」に変換し、私から半径5m以内の人物に送信……」

ゆめみはそう言っただけで、閉じていた目を開いた。

ゆめみ「……これでよし。さあ、お二人とも、もう喋っても大丈夫ですよ。皆さんにも聞こえるようにしておきましたか。」

クレメンテ『お、そうか。やれやれ、ゆめみに気を使って、話さないようにしていたのは大変だったぞ。』

アトワイト『ええ、まったく。』

突如、ゆめみが言っていた「クレメンテ」と「アトワイト」と読んでいた剣が声を発し始めた。

聖時「えっ!？」

ティアナ「しゃべった?! インテリジエン・スデバイスなの?!」

ゆめみ「インテリジエン・スデバイスとは違いますが・・・ま、似たようなものです。それにしても、お久しぶりですね、お二人ともお変わりないようで。」

アトワイト『ええ、久しぶりね。貴方も変わりないみたいね。』

クレメンテ『そうみたいじゃのう。前合った時と変わらない、残念な胸のままじゃのう。』

ゆめみ「よ・け・い・な・お・せ・わ・で・す!! (怒)」

クレメンテ『折れる折れる折れる折れる! それ以上曲げたら折れる!』

背後に黒い何かを醸し出しながら、笑顔でクレメンテを折り曲げるゆめみ。と言うか、「ソーディアン」で戦いでも刃こぼれしなく、また、千年以上立っても錆びて朽ちない位丈夫な金属で出来たは

ず・・・なんて馬鹿力。

ゆめみ「何か言いました。(怒)」

地の文に突っ込まないでください。

アトワイト「と、兎に角、コレで自己紹介が出来ますね。皆さん、はじめまして。「ソーディアン・アトワイト」と言います。」

クレメンテ「やれやれ、折れるかと思っただわい。わしの名は「ソーディアン・クレメンテ」じゃ。それにしても・・・ここにはまた、随分とピッチピッチの娘がぎょうさんおるのう」

由香「うっ！何かねっとりと、全身を舐める様な視線を感じます。」

琴乃「わ、私も・・・」

アルフ「私も感じる。なんだい、コレ・・・」

芹「な、何、この悪寒。」

アトワイト「老、ヘンな視線であの子達を見ないであげて下さい。セクハラです。」

クレメンテ「ゆめみの胸のように硬いこと言うでないワイ。久方ぶりのシャバの空気なんだからのう。」

ゆめみ「誰の胸が硬いですって！(怒)今、久方ぶりに触れているシャバの空気を永遠に味わえないよう、溶鉱炉に投げ込みましょうか？ココから一番近い製鉄所は確か・・・」

クレメンテ「ま、待て待て、ワシが悪かった。悪乗りし過ぎた！謝る！」

聖時「ゆめみ、話が進まないから、ソレぐらいにして……」

ゆめみ「……聖時さんが言うなら。（ボソ）これでセクハラじじいを始末できると思ったのに……」

聖時に言われ残念そうな顔をするゆめみ。

聖時「……なんだか本当に残念そうだね。と、とにかく今度はコッチが自己紹介をします。始めまして、神谷聖時です。」

アトワイト「カミヤ？ゆめみ、もしかしてこの子……」

ゆめみ「はい、聖さんと千尋さんの子です。」

クレメンテ「ほお、あの二人の子か。将来美人になりそうな子だのう。将来が楽しみじゃわい。」

聖時「あの……僕、男なんですけど……」

ワトワイト「……え？お、男の子……なの？」

クレメンテ「な、なんと！そんなのか！！ふむ、「ちょっと残念なような」、「これはこれで良い！」と思えるような……」

聖時「ははは……剣にまで女に間違われた……」OTL

ふたば「せ、聖時、元気出して。」

ティアナ「そうよ、こんなのいつもの事でしょう?」

聖時「(グサツ!) うっ! どうせ女顔だよ... 最近「生まれてくる性別間違えたんじゃないか?」とか「実は性転換者」だとか、拳句の果てには「両性具有の両刀使い」だとか言われる始末... うっうっ」

ピティ「せ、聖時、ファイト! 落ち込まない!」

明日香「聖時おにいちゃん、元気出して」

さくら「(こくこく)」

うなだれる聖時の頭を撫でる明日香とさくら。と言うか、年下の小學生に慰められるなんて、ちょっと情けないぞ聖時。

聖時「やかましい!」

だから地の文に突っ込まない。

ゆめみ「と、とにかく自己紹介を続けましょう。えっと次に...」

この後、うなだれる聖時を横に、ゆめみが中心となって自己紹介を続けた。

ゆめみ「...と、以上ですね。さて、これからどうします?」

ゆめみは聖時が受けてきた女神アテナからの依頼を聞いて、今後の行動方針を全員に聞いてきた。

童虎「そうだな……晶。」

晶「あ、はい。」

童虎「確かお前の家にデジエルが居候していたんだったな。」

晶「あ、はい。」

童虎「なら、まずはデジエルに会い、この話を話さんとな。あの「ハーデス」と戦うのだから、コッチの世界に来ている聖闘士セイントと協力して事に当たらんと話しにならんからな。」

アルフ「なら、私が「特務捜査課」に居る聖闘士セイントとの渡りをつけてやるよ。」

童虎「すまん、助かる。さてと、後は……お前達の事だな。」

そう言つて童虎は猛達の方向を見て言った。

猛「え?」

剛「な、何でしょう?」

童虎「この世界では「聖霊」と契約し、小宇宙コスモに目覚めた者の事を「聖闘士セイントと呼び、ワシらの世界の「聖闘士セイント」と同じように邪悪と戦う事が宿命付けられる。」

童虎はそう言いながら、聖時、猛、剛、芹、琴乃、明日香、に視線を移しながら見る。

童虎「おぬし達は、幸か不幸か、この世界の「聖闘士」になる条件である「聖霊」との契約を成功させてある。」

猛達「……………」

童虎「流れからしたら、おまえ達はこの世界の「聖闘士」となり、この世界に流れ着いた「ハーデス」率いる「冥王軍」との戦はなければならぬ。だが、ワシはおぬし達にソレを強要させたくない。だから、お前達が「聖闘士」となって「冥王軍」と戦うかは、お前達一人一人が決めるんだ。」

猛「え？」

剛「俺達……………」

琴乃「一人一人が」

芹「決める……………」

童虎「そうだ、お前達が決めるんだ。「聖闘士」となって「冥王軍」と戦うか？」「聖闘士にならずにこの件から手を引くか？」だ。たとえ手を引いても、ワシは責めたりはせん。」

猛達「……………」

童虎「戦いは辛い物だ。もしソレがイヤなら手を引いても良い。たとえ手を引いても、ワシは責めたりはせん。よく考えるのだな。」

さて、外の時間ではもうそろそろ帰らないとイカン時間帯だ。今日はもう帰るのじゃ。」

琴乃「あ……はい。」

そう言つて椅子から立った琴乃を初め、猛達は次々と立ち上がり帰り支度をする為に、食堂を出て行った。

聖時「先生、僕はもう決めていますからね。僕は誓つたんだ「ふたば達を守る」聖闘士セイントになる」つて。」

ふたば「せ、聖時／＼／＼」

聖時の言葉で少し顔が赤くなつたふたばが聖時を見る。

童虎「……そうか。お前はもう答えが出ていたのだったな。」

聖時「はい、けど……」

そう言いながら聖時は猛達が出て行った食堂の出入り口を見る。

刹那「……皆さんはどうするのでしょうか。危険ですからあまりお勧めはしませんし、それに個人的には聖時さんにもやっではもらいたくは無いですね……」

聖時「刹那……心配してくれてありがとう。けど、もう決めたから。」

刹那「解ってます。一度決めたら人の言う事は聞きませんもんね。」

聖時「ごめん。」

ふたば「みんな・・・どうするんだろつ。」

聖時「それは猛たち自身が自分で決めることだよ。だけど僕は猛達
がどんな答えを出しても、友達で有り続けるよ。さて、僕等もそろ
そろ外に出る支度をしよう。」

ゆめみ「そうですね。」

童虎「ワシ等は来たばかりだから、もうしばらく別荘コウに居なくては
な。」

士郎「ええ。」

聖時「そうでしたね。じゃあ後のことはお願いします。」

そう言つて聖時を先頭にふたば達は食堂を出て行った。

《つづく》

おまけ

ピティ「ねえゆめみ、ゆめみは人間形態型ヒューマンフォームのロボットなんでしょ
う？」

ゆめみ「ええ。」

ピティ「なら、パーツを取り替えれば、胸なんていくらでも大きく

出来るでしょう？胸の事を気にしてるんなら、どうしてソレをしないの？」

ゆめみ「……実は私の整備担当をしている方に以前その事をお願いしたんです。そしたら「あんた、あたしの敵になりたいの？あたしより胸が有る奴はみんな敵よ！どうしてもしても胸を大きくしたいって言うんなら、胸からミサイル出るように改造してやるわよ！」って言われて……」

ピティ「胸からミサイルって……マ　ンガーZに出てくる女性型のロボットかい……それにしてもその整備をしている人って女性だったんだ。しかも、ゆめみやふたば並の貧乳。」

ふたば「だれが貧乳ですって？」

ピティ「うわっ！ふたばいつの間に……！」

ふたば「影口は関心しないな。それにだいたい、私達の胸をどうこう言えるほどピティの胸もないと思うんだけど。」

ピティ「私の胸はこれから大きくなる予定なの！将来が絶望視されている二人とは違うの……！」

ゆめみ「……あの、ピティ、使い魔は背が伸びたりする肉体的成長はしないんですよ。」

ピティ「……えっ、そうなの？」

ゆめみ「ええ、ですからピティはずーとその体型のままです。」

ピティ「が〜ん！一生貧乳体型のまま……」OTL

ゆめみ「……………ピティ、気持ちわかります。今夜は付き合いますよ。」

ふたば「……………私も付き合っ。」

ピティ「グスツ、うん。」

これがこの後、貧乳同盟と言われた集まりの始まりと言われている。のちにこの同盟にピンク髪の貴族の娘やロリ吸血鬼の少女、さらには管理局に務めている狸娘と赤髪のハンマー娘が加わるという。

第80話 聖霊の女神？（後書き）

自分の作品に使っている原作の作品には、結構貧乳キャラがいるので、同盟のメンバーはこれからも増える予定です。

第81話 天使の一族と木の妖精の使命（前書き）

どうも、剣 流星です。

今回は、久々の「Lの季節」の幻想界での話です。

久々なので読者の皆さん忘れてなければいいけど・・・

とにかく、第81話をどうぞ。

第81話 天使の一族と木の妖精の使命

第81話 天使の一族と木の妖精の使命

聖時が別荘でアテナからの依頼について、猛達に話した翌日の朝。ここ、渡良瀬家の玄関先では、学校に行こうとしているふたばと、ふたばを見送るふたばの母・葉子（しゅうま）が居た。

ふたば「それじゃあお母さん、行ってきます。」

葉子「行ってらっしゃい、車に気を付けてね。」

ふたば「うん。」

手を振りながら、笑顔でふたばを見送る葉子。だがその顔は、ふたばが見えなくなると同時に笑顔が消え、なにやら難しい事でも考えているかのような顔を始めた。

理佐「どうしたの？葉子おばさん、そんな難しそうな顔をして。」

隣の家に住んでいる理佐が、制服姿で表れて葉子に話しかけてきた。

葉子「あら？理佐ちゃん、ふたばを呼びに来てくれたの？でも、あの子は先に行っちゃったわよ？」

理佐「あ、良いんです。今日は葉子おばさんに用があったから、ふ

たばとは別々に行くつもりです。」

葉子「私に用事？何？」

理佐「実は昨日、帰ってきた時のふたばをウチの庭先で見かけたんですけど、何時もと違う感じがして、もしかしたら葉子叔母さんが前に言っていた“葉子おばさんの一族の力”が目覚めたんじゃないかって思ってます。」

葉子「そう……だから私に会って話を聞こうと思ったのね。」

理佐「ええ。それでどうなんです？ふたばは“力”に目覚めたんですか？」

理佐の問いかけに葉子はしばらく考え込んだ後、口を開いた。

葉子「……理佐ちゃんの言う通り、あの子は純耶すみやの家の力……

・・天使族の力に目覚めているわ。」

理佐「やっぱり……けど昨日出かける時までは目覚めてなかったんですよね？出かけた先で、力が目覚めるような何かがあったんですかね？」

葉子「……この世界で普通に暮らすあの子には、純耶すみやの力は過ぎた物……このまま知らせずに眠らせたままにしておこうと思ってたけど……けど、目覚めたからには、話さないといけないわね。」

理佐「葉子おばさん……」

そう言つてふたばが歩いて行つた方向を見る二人。そんな二人を少し離れたところから見ているある人物が居た。

篝「……ふたばが力に目覚めた。おそらく原因の一端はあの男にあるな。やはりあの男は危険だ。これ以上ふたばにいらぬ影響をあたえる前に消しておく必要があるな。」

*

所変わつて、ここは聖時達が住んでいる世界と表裏一体の世界、魔法と科学が共に発展し、様々な種族が一緒に暮らしている世界、幻想界。

その世界にある豪邸とも言える家、純耶家すみやの玄関で、その家の娘、天使族の少女・純耶佳奈すみや かなは学校へ行く為に靴を履いていた。靴を履いて立ち上がり、「行って来ます。」と言つて玄関を開けようとする佳奈。そんな彼女に、厳しい顔つきの30代後半から40代くらいの男が声を掛けた。

男「待ちなさい佳奈。」

佳奈「？何ですお父様？」

佳奈の父「お前、まだあのネクロマンサーの少年や、身元がはつきりしないドライアドの子、人間族の娘らとまだ会っているそうだな。」

佳奈「……………」

佳奈「いい加減にあんな者らとつるむのはやめなさい！あんな忌々しい下賤なネクロマンサー族や身元がはつきりしない者、何の力ももたない下等な人間族などと一緒に居ては天使族としての品性が問われるぞ！！あんな「あんなだなんて言わないでください！」っ！」

父親のあんな発言に、佳奈は抗議をするかのように大きな声を出した。

佳奈「一馬さんやふたばさん、アリシアさんは下賤でもなければ下等でもありません！」

佳奈の父「口答えするな！！我が純耶すみやの家は、かつて精霊の女神と言われた方を祖先に持ち、精霊管理局に代々勤めてきた由緒正しい家であり、一族なのだ！お前は禁術に手を出した栖橘すだちや、人間族の男と駆落ちをした葉子すみやみたいに、純耶すみやの家の名に泥を付けるか！！」

佳奈「禁術に手を出した栖橘すだち叔父様はともかく、葉子おば様まで悪く言わないでください！！」

佳奈は父親が叔母の悪口を言うのが嫌でしかたがなかった。

佳奈の父親には妹と弟が居た。

妹の葉子とその下の弟の栖橋すだちである。つまり佳奈にとっては葉子は叔母で、栖橋すだちは叔父ということになる。

叔父の栖橋すだちは禁術に手を出し、ある事が理由で死亡している。そして叔母の葉子は人間族の人との結婚を反対され、駆け落ちをしたので、今は二人とも純耶すみやの家には居ないのである。

佳奈の父親は、この二人を「純耶すみやの家すだちの面汚し」と言って毛嫌いしている。だが佳奈は、叔父の栖橋すだちはともかく、叔母の葉子の事は父親の様に毛嫌いしてはいない。むしろ好きだと思っている。

佳奈は小さい頃、魔法が全然使えず、父親に良く怒られていた時期に、まだ物心付くかつかないぐらいの娘を連れて叔父の栖橋すだちに何回か会いに来た葉子に合っていた。

父親に怒られ、よく泣いていた佳奈を小さな手で自分の頭を撫でて必死で慰めてくれる今居る友人と同じ名前の葉子の娘、そして魔法を使えない自分に魔法を使うコツを教えながら励ましてくれる叔母の葉子。この親娘のおかげで、小さい頃の佳奈はとても助けられ、そして救われた。

そんな叔母を悪く言う父親を、佳奈はとても悲しくそして嫌だった。

佳奈の父「あんな下賤な、何の力もない人間族の男との間に子供を作るような輩など「あんな」で十分だ！」

佳奈「けどー！」

佳奈の父「くだい！兎に角、今後あの下等な者らとは会っんじやない。分かったな？分かったなら早く学校に行きなさい。」

そう言って佳奈の父親は家の奥へと行った。そんな父親を、佳奈は

悲しそうな顔で見た後、学校へと行くために家を出た。

*

佳奈が父親と話していた時と同じ頃、聖遼学園へと続く道を、彼女、
濔泉双葉は一人で歩いてきた。

双葉は最近とある事がうまくいってなくて、焦っていた。
うまくいっていない事、それは「異世界での覚醒の種の植え付け」
である。

なぜ上手くいっていないかと言うと、最近異世界で双葉の似顔絵を
手に双葉を探し回っている者たちが居るからである。そのせいで、
「覚醒の種」を異世界の人々に植え付けることが出来ず、焦ってい
たのである。

双葉「はあ、上手くいかなあ。コレじゃあ使命を果たせな
い……お母さんから伝えられた、「木の妖精の一族の使命」が・

「……………」

そう言つてまた溜息を吐き、暗い顔をする双葉。
そんな双葉にある人物が声を掛けた。

杓馬「何暗い顔をしてるんだい？双葉嬢ちゃん？」

声のした方向を見ると、そこにはタキシード姿で無精ひげを生やした男、杓馬よしまが居た。

双葉「あ、杓馬おじさん！」

杓馬「どうしたんだい？ひよつとして例の「覚醒の種」の植え付けがうまくいってないのかい？」

双葉「……うん。せつかくお母さんのお友達の杓馬おじさんに色々と協力してもらっているのにうまくいってないんだ。異世界で私を探している人たちが居て、しかもその人達、とても強力な魔力を持つてるんだ。私一人じゃ太刀打ちできないくらい……。」

杓馬「双葉嬢ちゃんが太刀打ちできない位の魔力持ちねえ。」

双葉「もし見つかったら、絶対私捕まっちゃう。だから今まで見つからないように隠れながら種の植え付けをしてただけど、この方法だとなかなか種を植え付けることが出来なくて……。」

杓馬「それで悩んでた？」

双葉「うん。」

杳馬「なるほど……うん……よし！なら双葉嬢ちゃんにコレをあげよう！」

そう言つて杳馬は懐から筒のような物を二つ取り出した。

双葉「？何コレ？」

杳馬「コイツは「魔法の筒」と言つて、中に生き物を一体入れて置く事が出来る物だ。」

双葉「生き物を？」

杳馬「ああ、今この筒の中には双葉嬢ちゃん様に俺が拵えた「使い魔」がそれぞれの筒に一体入っている。こいつに護衛をやらせれば、たとえ例の双葉嬢ちゃんを探している連中に見つかつても無事逃げ切る事が出来るはずだ。」

そう言つて、杳馬は魔法の筒を双葉に手渡した。

杳馬「使い方は、「デルパ」の言葉で、中の生き物を外の出し、「イルイル」の言葉で筒の中に入れることが出来る。上手に使うんだぜ？」

双葉「うん！ありがとう」

双葉は受け取つた筒をしまついなながら杳馬にお礼を言った。

杳馬「良いつてことよ。嬢ちゃんのお母さんには世話になっているし、何より俺が嬢ちゃんを応援したいのさ。」

双葉「ありがとうおじさん。」

双葉は再度杓馬にお礼を言った。
そんな双葉に誰かが声を掛けた。

一馬「お〜い、双葉！」

双葉「あれ？カズ君？それに優希ちゃんにアリシアちゃん？」

少し離れた所に九門一馬と舞波優希、アリシア・テストロッサが居た。

三人は双葉に向かって歩いて近寄ってきた。

一馬「おはよう双葉、こんな所で何してるの？」

双葉「え？何って今おじさんと話してて……」

アリシア「おじさん？どこに居るんです？」

双葉「え？どこって、そこに……」

そう言いながら双葉は杓馬が居た場所を見たが、そこに杓馬は居なかった。

双葉「あれ？いつの間に……」

一馬「？双葉？」

双葉「あ、ううんなんでもない。それよりもカズ君、「フェサリス」の調査は進んでる？」

一馬「え？あ、うん実はあまり・・・佳奈に協力してもらって「フィサリス」が使っている「異世界」への入り口が学校内にある霧城さん・・・あ、から出てくることが出来る魔法生命体である絵の女の子ね、その子の絵が「異世界」への出入り口みたいなんだ。」

双葉「へえ、あの七衣ちゃんの家になっているあの絵がね。」

アリシア「それと後もう一つ、「フィサリス」は深夜に儀式を行っていると言う情報も手に入れました。そこで私たちは明日の夜、深夜の学校に入り込んで「フィサリス」を見つけようと思うんです。」

双葉「え？！深夜の学校に入り込むの？うわ、なんだか面白そうねえねえ、私も一緒に行つて良い？」

優希「え？あの、遊びじゃんですけど・・・。」

双葉「大丈夫、解つてるつて、遊びじゃない事ぐらい。」

一馬「本当に分かつてるの？」

双葉「大丈夫だつて、それより早く学校に行こう？遅刻しちゃおう？」

一馬「あ、うん。」

そう言いながら双葉に促されながら、一馬達は学校へと向かった。そんな中、双葉は一馬の話聞き、焦り始めていた。

双葉（カズ君がそこまで私の事を調べて知るなんて、このままじゃバレルのも時間の問題……なら、バレルまでに一つでも多くの種を異世界の人間に植え付けなきゃ。おじさんからもらったこの筒もあるし、今までの遅れを取り戻す為にも、今日辺りに向こうに行つて種を多めに植え付けよう）

そんな考えをしながら双葉は、一馬達と一緒に学校への道を歩いて行つた。

つづく

（おまけコーナー）

ピティ「ピティと」

ユニ「ユニと」

ビッキー「ビッキーの」

三人「おまけコーナー」

ピティ「さうで、やってまいりました久々のおまけコーナー！ホン

ト久しぶりだね……」

ユニ「全くですね。」

ビッキー「まったくです。」

ピティ「まあ、愚痴っついても仕方がないから早速恒例のゲスト召喚行ってみよう」 コウシヨウをパツ、パツと……」

ビッキー「ハツ……ハツ……ツクシユン!!」

パツ

ピティ「召喚成功 さて今回はテイルズオブデステイーからの召喚で、ピコピコハンマーを華麗に操る「セインガルドの薔薇」の異名を持つ、男装の令嬢「リオン・マグナス」です」

リオン「オイコラッ！誰が「男装の令嬢」だ！知らん人間が聞いたら本気になるだろうが！！だいたいこっぴつのは、この作品の主人公である聖時の領分だろう。」

(聖時・人を引き合いに出すなッ!!！)

ピティ「ん？」

ビッキー「どうしました？」

ピティ「今聖時の声が聞こえたような気が……気のせいだよ。ね。まっ、兎に角今回は「リオン」がゲストと言っことぞ。」

リオン「まっ、男装の令嬢云々は置いて、僕がリオン・マグナスだ。この僕が「おまけコーナー」のゲストとして出てやるんだから、ありがたく思うんだな。」

ピティ「相変わらずの上から目線ですこと・・・まっ、言動は上から目線だけど、身長は未だに下から目線だけ・・・。」

リオン「うっ、うるさいっ！スグに伸びる！問題ない！」

ユニ「はいはい、二人ともそこまでにしてください。これじゃ話が進みません。」

ピティ「それもそうだね。それじゃあ今回の補足に行ってみようか。」

ビッキー「今回の補足は聖時の両親とユニさん、ゆめみさんが聖時さん達が産まれる前に幾つもの異世界を渡り歩いたことについてでしたね。」

ピティ「本編の中の話でも出てきたけど、この異世界を渡り歩いた旅にユニも参加してたんだよね？」

ユニ「ええ、そしてその旅の最中に寄った世界の一つが・・・。」

リオン「僕たちが住んでいた世界だったというわけか。」

ビッキー「でも、どうやって異世界を渡り歩いていたんです？」

ユニ「それについては私がお答えします。異世界を渡っていた方法、それは27の真の紋章の一つ「時空の紋章」の力で渡っていたんで

す。」

ピティ「あっ！それって確か、片刃の剣型デバイス内に封じ込めて聖時のお父さんが使ってたって本編で語ってたね。」

ユニ「ええ。聖さん・・・マスターは「時空の紋章」を剣の形で使っていました。そしてマスターが真の紋章が「光輝の紋章」を宿していたのにも関わらず、「時空の紋章」を所持出来たのは、「宿す」形ではなく、剣として「所持」していたからなんです。」

ピティ「なるほど。そして今は神谷家の裏山に有る「シンダルの遺跡」に封印してあるんだね。」

リオン「なるほど。しかし先程「異世界渡り歩いていた」と言っていたが、その言葉から推測するに、僕らの世界以外にも色々な世界を渡ったみたいだな。」

ユニ「ええ、ホント色々な世界渡り歩きました。その中には「アルトネリコ2」の舞台にもなっている「メタファルス」や、「ネギま！」の過去の世界・・・エヴァさんがまだ人間だった頃の世界にも行ってます。」

ビッキー「ああ、そう言えば本編でもちよこつと行った事があるような記述が出てましたね。」

リオン「他にはどんな世界を渡り歩いたんだ？」

ユニ「そうですね、地下に巨大人型兵器が眠る南の島の学園で、仮面をかぶった怪しい集団から島の巫女を銀河な美少年と一緒に守ったり・・・」

ピティ「スードラバー……」

ユニ「Zな戦士と共に宇宙の帝王や、人造人間から星を守ったり……」

ビッキー「ドラゴンボー○Z……」

ユニ「国家な錬金術師の兄妹の体を元に戻す旅について行ったり……」

リオン「鋼の錬○術○か……」

ユニ「後、グルメな時代を向かえた世界で、美食屋の四天王な人とその相棒のコックの人と一緒に食材探しをしたりと、実に様々な世界を旅しました。」

ピティ「ト○コね……本当に色々な世界を渡り歩いたんだね……」

ユニ「ええ、しかもさっき言った世界は渡り歩いた異世界のほんの一部です。」

リオン「あれ以外にもまだあるのか！凄いな……」

ピティ「多過ぎだよ〜。」

ビッキー「まるで武闘鬼人さんの「めぐ銀」の主人公「蒔風 舜」さんみたい……」

リオン「確かに。」

ユニ「ですから、この場で全部は公開できません。すみません。」

ピティ「ま、まあそう言った事情があるんなら仕方がないよね。」

ビッキー「ですよね。」

ピティ「さて、では今回はここまでにします。」

ビッキー「それじゃあゲストのリオンさんにはお土産をお渡しします。」

リオン「お土産？」

ビッキー「はい、コレさえ飲めばグングン背が伸びる身長促進効果が高い特性牛乳、来迎寺グループ傘下の来迎寺食品印の「すすく牛乳」です。」

ピティ「やったねリオン、コレで背が低いのを早めに克服できるね。」

リオン「誰が背が低いだ！・・・まあ、せつかくのお土産だ、一応受け取っておく。」

ピティ「一応ね・・・受け取ったって事は一応気に入ってくれたみたいね。」

ビッキー「リオンさん、何気に自分の背がマリアンさんより低い事を気にしてましたからね。」

ピティ「相変わらず」「マリアン命」な方だね。ま、それじゃ最後の締めをしますか。」

ユニ「あ、待ってピティ最後の締め方なんだけど、今回から少し変えるわよ。」

ビッキー「え？変えるんですか？どんな風に変えるんですか？」

ユニ「それはやってみてのお楽しみですよそれじゃあピティ。」

ピティ「それではみなさん・・・」

三人「「「まったね。」」」

ユニ「皆さんに聖セント小宇宙コスモの導きが有らん事を・・・」

第81話 天使の一族と木の妖精の使命（後書き）

おまけコーナー内で出てきた「めぐ銀」の「時風 舜」とは、作者がお気に入り登録している作品「世界をめぐる銀白の翼」に出てくる主人公のことです。

武闘鬼人さん、勝手に名前を使つてすみません。

それと「おまけコーナー」の最後に出たユニの「セントコスモ聖小宇宙の導き」が有らん事を・・・と言うセリフは、作者が以前から考えていた物です。これの他にもいくつかバージョンがあるので、今後使い分けてちよくちよく使っていきたいと思います。

第82話 幻想との接触？（前書き）

どうも、最近、「魔装機神」の新作が出る事を知り、とても喜んで
いる剣 流星です。

しかし、「第二次OG」の発売がまだなのに、「魔装機神」の続編
を出して大丈夫なんでしょうかね。

取り敢えず、第82話をどうぞ。

第82話 幻想との接触？

第82話 幻想との接触？

聖時が別荘でアテナからの依頼の事を話した次の日の朝。聖時は何時も学校へ行く為に使う通学路を刹那と歩いていた。

そんな聖時を影から見ているある人物が居た。魔法少女の「暁美ほむら」である。

ほむら「……あれが杓馬が言っていた「不屈の剣」への鍵を握る人物、「神谷聖時」。」

シャルティエ『確か杓馬は「アイツの手助けをしろ」って言ったけど、具体的にはどうするの？』

竹刀袋に入れられたシャルティエが聖時のサポート仕方の具体案をほむらに聞いてきた。

ほむら「……サポートは影ながらする事にするから、普段は監視だけにするわ。」

シャルティエ『じゃあ接触はしないんだね？』

ほむら「ええ。その方が面倒事が無くて良いわ。」

ほむらはシャルティエとこんな感じで会話を続けながら、聖時達を尾行していた。そんな風にほむらが聖時達の尾行を続けていると、

聖時達の行く道の先から聖時達に向かって声を掛けながら近づいてくる人影が現れた。

ほむら「……………？知り合い？一緒に登校するのかしら……………
……………！？」

ほむらは聖時と登校するために待っていた人物を見て驚いていた。

シャルティエ『へ〜、女の子二人をはべらせて朝から一緒に登校とは……………あの子中々やるね〜。ん？どうしたのほむら？』

シャルティエはほむらが驚いていた事に気付き、声を掛けた。

シャルティエ『ほむら、どうしたの？あの子……………知り合い？』

ほむら「ええ。なんでココに……………神谷聖時と知り合いなの？」

ほむらの呟きを他所に、聖時達は朝の挨拶をしていた。

聖時「おはよう、ふたば。」

刹那「おはようございます、ふたばさん」

ふたば「おはよう聖時、刹那さん。さくらちゃん大丈夫だった？」

聖時「大丈夫じゃないよ。さくらちゃん、なかなか離してくれなくて大変だったよ。」

ふたば「あ、やっぱりそうだったか。私も昨日、家に帰る時にもなかなか離してくれなくて大変だったよ。」

聖時「コツチもだよ。けど根気よく説得したのと、ピティに付きっ切りで相手をさせる事で、どうにか放してくれたよ。さくらちゃん、結構ピティの事気に入っているみたいだからね。」

刹那「確かにさくらちゃんはピティの事を気に入っていたみたいですが、アレは犬猫に対する接し方……いわゆるペットとして気に入ったと見た方が良いでしょうね。」

ふたば「ピティ……愛玩動物扱いね。まっ、ピティは黙ったままだとしても可愛いからそう言う風になっちゃうのも仕方ないね。」

ふたばはそう言いながら、ピティがさくらに捕まって人形やペットの様に扱われ、其処から必死に逃れようともがいている様子を思い描いて苦笑した。そんな二人のやり取りを見ていた刹那がふたばに話かけてきた。

刹那「そう言えば、その桜ちゃんの事なんですけど、どうやら土郎さんは以前からの知り合いだったみたいです。」

ふたば「え?!土郎くんは前から桜ちゃんの事を知っていたの?!」

刹那「ええ、昨日の帰り際に土郎さんから話を聞きました。自分の知り合いがあんな事になっていたという事を気づかずにいた事が結構ショックだったみたいです。」

ふたば「そっか………所で今日、河瀬先輩が前回の意識不明事件の事を詳しく知っている人から話を聞く事になってたんだよね?」

聖時「うん、放課後に会うことになっているよ。」

刹那「その話を聞いて、少しでも犯人の事に繋がる手掛かりが掴めれば良いのですが……」

聖時「そうだね。ああそれと、今日の放課後、アキは先生をデジエールさんに合わせなきゃいけないから、話を一緒に聞くことが出来ないうって連絡があったよ。それとアルフも例の僕らを疑っている榎山遙の手伝いをしなきゃならないから、聞けない。土郎は今日は別荘に行つて自分のデバイスの調整をするみたいだよ。」

ふたば「じゃあ今日話を直接話を聞くのは、今日転校してくるティアナを含めて6人つて事になるね。」

刹那「……あの、猛さん達は？」

聖時「……昨日聞いた話しのことで、猛たちも考える時間が欲しいと思うんだ。だから今日は……」

刹那「……そうですね。猛さん達がどの選択するのかは分かりませんが、考える時間は必要ですね。」

ふたば「……出来れば私は琴乃さん達を巻き込みたくないから、出来れば手を引いてもらいたい。」

聖時「……それを選ぶのは猛たち自身だよ。……？」

突然立ち止まり辺りをキョロキョロと見渡す聖時。

ふたば「?どうしたの?」

聖時「いや……誰かに見られてたような気がしたんだけど……
……気のせいだったみたい。」

ふたば「?……そう。」

聖時「うん、じゃあ行こう。いつもの所でなのはさん達が待ってる。」

そう言つて聖時達は再び歩きだした。その聖時達を少し離れた物陰に隠れて見ていたほむらは、少し焦った声でシャルティエに話しかけた。

ほむら「……どうやら彼、感が鋭いみたい。まさかこっちの視線に気づくなんて。」

シャルティエ「もう少し距離を開けた方がいいみたいだね。」

ほむら「……ええ。」

ほむらはそう返事をした後、聖時達からも少し距離を開けてから聖時を追つていった。

《つづく》

第83話 幻想との接触？（前書き）

どうも、ただいま絶賛風邪をひいて、体調最悪の剣 流星です。

熱が結構あつて辛いです。

それでも頑張つてアップしました。

では、第83話をどうぞ。

第83話 幻想との接触？

第83話 幻想との接触？

ティアナ「どうも、ティアナ・ランスターです。よろしく願います。」

ティアナ本人から昨日聞いたとおり、聖時達のクラスにティアナが転校してきた。

鈴木を始めとした男子の殆どはツインテールの美少女転校生に沸き立ったが、その本人であるティアナが聖時の知り合いだと知ると、『神谷！またお前か！？』と殺気を放ちながら聖時を追い掛け回したりと色々あったが、本日の授業は滞りなく終わり、現在は放課後となっている。

聖時「え〜と、確かこの後、高等部の校舎にある新聞部の部室に行つて、前の意識不明事件の事を良く知っている人に話を聞くんですけどよね。」

裕也「ああ、新聞部の上岡進先輩かみおかすすむと天羽碧先輩あそひみどり、そして新聞部じゃないけど、星野百合先輩が立ち会う事になっている。」

聖時「星野百合……。」

聖時は星原百合と出会った時の事を思い出していた。

この聖遼にまだ入ったばかりの時、聖時は彼女に出会い、ニューヨークマンシーの能力を授けてもらったが、今思い出してみると、なぜ彼女はニューヨークマンシーと言う能力を知っていて、持っていたのだろうか？彼女は何者なのだろうか？と疑問に思う事が数多く出てきた。

聖時（・・・この機会に、その辺りの事について聞いてみよう）

そんな風に考え事をしながら、聖時はふたば、由香、裕也、刹那、ティアナと共に高等部の校舎へ向かっていた。

そんな時、高等部の校舎へと向かう道の間にある中庭から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

碧「・・・本当に新聞部の活動に興味があるから新聞部に入るの？以前しつこく聞いてきた百合の事を聞く為に近づいたとかじゃないのね？」

遙「はい！もちろんです！」

アルフ（何が「もちろんです！」だよ・・・星原百合の事を探るために入るクセに・・・）

聖時「・・・あれは・・・榎山遙と・・・アルフ?!」

聖時が向いた視線の先には、この学校の制服ではない白を基調とした制服に身を包んだ、見かけ聖時達と同じぐらい、場合によっては小学生に見える人物、榎山遙とアルフが、高等部の制服を着た男女

と話をしていた。

聖時「アルフ？」

アルフ「ん？アレ聖時？どうしてココに？」

遥「河瀬くん？珍しいわね、こんな所に来るなんて。」

裕也「・・・別に良いだろう、人がどこに居ようと・・・それよりも榎山、上岡先輩と天羽先輩に何の用なんだ？」

裕也は警戒をしながら遥に問いかけた。

裕也は以前、遥にS E能力で接続されそうになり、それ以来榎山遥を警戒していた。

遥「新聞部に入ろうと思ってね。それより一緒に居る子達は、以前屋上で見かけた中等部の子達よね？」

裕也「ああ、友達だね。」

聖時「どうも。神谷聖時です。」

ふたば「渡良瀬ふたばです。」

刹那「桜咲刹那です。」

ティアナ「ティアナ・ランスターよ。」

遥「あら、わざわざ自己紹介ありがとう。河瀬くんのクラスメイト

の榎山遥よ。以前屋上で会ったわね。」

聖時「ええ、覚えてます。それより新聞部に入るって言ってましたけど……」

遥「私、転校してきたばかりで、部活に入っていないの。前の学校では部活に入ってなくて、転校して良い機会だから、部活をするのも良いと思ってね。」

聖時「はあ、そうなんですか。それで新聞部に……」

そう言っつて聖時は遥が話をしていた人物、天羽碧を見た。

その時、天羽碧が居る方向にある植え込みに隠れている人影を見かけた。

聖時（ん？あれは?!）

聖時が見かけた人影……碧の髪に碧を基調とした制服の女の子、それは聖時達が捜し求めていた人物、才人を意識不明にした犯人、
透泉双葉だった。

透泉双葉は植え込みに潜みながら天羽碧の方を見ていると、次に手に何かを取り出すと、それに魔力を込め始め、それを天羽碧に向けて飛ばそうとした。

聖時「あ、あぶない!!」

碧「え？きゃあ?!」

みおいすみふたば
清泉双葉の手から何かが放たれる瞬間、聖時は天羽碧を庇う為に飛び出し、彼女を押し倒す。

聖時が押し倒した瞬間、天羽碧あそひむぎの体があった場所を何かが高速で空を切り、そのまま校舎の壁にめり込む。

遥「なに?!」

ティアナ「聖時?!」

ふたば「今何かが空を切ったような音が・・・」

刹那「?!あそこです!」

空を切った何かが飛んできた方向を見て、刹那が清泉双葉みおいすみふたばが潜んでる植え込みを指差した。

双葉「やば!失敗しちゃった!!しかも見つけられた!」

覚醒の種の植えつけに失敗したばかりか、潜んでいた場所まで見つけられた双葉は逃げる為に植え込みから急いで出てくると、そのまま逃げ出そうとした。

碧「いったたたた・・・もう!何なのよ!」

聖時に押し倒され、聖時の下で打った所をさすりながら回りを見る碧。

アルフ「あれは、才人を意識不明にした奴!」

遙「「才人を意識不明に」って、才人ってこの前意識不明になった
中等部の生徒でしょう?!それを意識不明にしたって事は、今回の
意識不明事件の犯人!?!」

ティアナ「まずい、校舎裏の方へ逃げるわよ!」

聖時「逃がすもんか!」

そう言つて聖時はすぐさま双葉を追つ。

ふたば「聖時!一人じゃ危険だよ!」

アルフ「ああ、もう!一人で突つ走つて!刹那は先回りして!校舎
の中を突つ切つていけば先回りできるはずだから!」

刹那「解りました!」

アルフは刹那の返事を聞くとそのまま聖時の後を追いかけて、刹那は
校舎内へと駆け込んだ。

ティアナ「ちょ・ちょつと!私も一緒に行くわよ!」

ふたば「私も!」

裕也「おい、待てよ!お前達!」

由香「河瀬くん、私たちも追おう!」

裕也「ああ!」

そう言って裕也達も後を追いかけ始めた。

進「な、何なんだ・・・」

碧「もう！一体何なのよ！」

遥「・・・あの緑の髪の子が犯人？」

《うづく》

第84話 幻想との接触？（前書き）

どうも、剣 流星です。

甥っ子にクリスマス마스プレゼントをせがまれて今日買いに行きました。

せがまれた物は「仮面ライダーフォーゼのフォーゼドライバー」

甥っ子が住んでいる辺りでは売り切れて無いようなので、自分の所に話が回ってきたみたいです。

何軒かおもちや屋を巡って、やっと見つけることができましたけど・

・ ・ ・ 結構高かったです。懐が寂しい自分には結構堪えました・ ・ ・

さて、では第84話をどうぞ。

第84話 幻想との接触？

第84話 幻想との接触？

聖遼学園の屋上。

そこに魔法少女の姿をし、ソーディアン・シャルティエを携えた暁美ほむらが居た。

ほむらは中庭から校舎裏へと移動する滯泉双葉とそれを追いかける聖時達の中にあるある人物を見つめていた。

ほむら（……あの碧の髪の子、杓馬が言っていた、ドライアスの子を追いかけているって事は、やはりこの件に関係してるのね……ふたば）

ほむらはかつて、入院中の病院内でふたばと知り会い、友達になった間柄だった。

お互い年も近いうえに、似たような性格だったため、共感できる所が有り、直ぐに友達になれた。

そして、お互い同じ日に退院が決まった日、ほむらとふたばはある約束をした。

ふたば『退院したら、今までの引っ込み思案な自分を変えよう。そしてお互い新しい学校で友達をいっぱい作ろう』

ほむらはその約束を守り、新しい学校でかけがえの無い大切な友達と出会った。

その子との出会いのきっかけを作ってくれた、ほむらにとって、もう一人のかけがえのない友達、それが「渡良瀬ふたば」である。

ほむら（……私と違って、普通の生活をして、たくさんの友達に囲まれて、幸せに暮らしているとばかり思ってたのに……）

ほむらは退院後、ふたばとはあまり連絡が取れない状態だった。だから彼女は、ふたばが聖時の側に居た事にとても驚いていた。

シャルティエ『あの碧の髪の子……もしかして、杳馬が言っていた、ドライアドの子だね……』

ほむらが携えた剣、ソーディアン・シャルティエが滲泉双葉を見て、言葉を発した。

ほむら「……ええ、こんな所で、一体何をしているのかしらね。」

ふたばを見ていたほむらは、そんな事どうでも良いような感じでシャルティエに返事をした。

そんな事を口にしてしている間に、澗泉双葉の前に、先回りしていた刹那が現れ道を塞いでいた。

これで澗泉双葉は前と後ろの道を塞がれて逃げ道をなくし、止む無く立ち止まった。

シャルティエ『あらら、挟まれちゃった。どうするほむら？助けとく？助けておけば杵馬に貸しを作っておく事ができるけど？』

ほむら「必要ないわ。私たちは「神谷聖時に助力する」事は言われていたけど、あの子を助ける様には言われていない」

シャルティエ『確かにそうだね。要らぬ労力はしないに越した事は無いね』

そう言つてシャルティエは眼下で行われている聖時達のやり取りに、また耳を傾け始めた。

刹那「此処までです。おとなしく縛についてもらいます。」

そう言いながら刹那は、自分の刀「夕凧」を鞘から抜いて、剣先を澗泉双葉に向けながらそう言った。

双葉「うっ……」

双葉は剣先を向けられてひるみながら後ずさりながら後ろの方を見

た。

聖時「刹那！」

後ろからは、聖時がふたばアルフ、ティアナ、裕也、由香が追いついてきた。

アルフ「でかしたよ！刹那！」

聖時「もう逃げられないぞ！」

ティアナ「観念しなさい！」

双葉「まずい・・・囲まれた。」

追いつて来た聖時達を見て、双葉は焦った。

双葉（このままじゃ捕まっちゃう！そうなれば、もう覚醒の種を植え付けられなくなる・・・そんなのダメ！！お母さんから受け継いだドライアドの一族の使命・・・私はそれを遂行しなきゃならないんだから！何か手を考えなきゃ・・・）

そう思った双葉は、ふと杓馬から受け取った魔法の筒の事を思い出した。

双葉（そうだ！コレを使えば！！）

双葉はそう思うと、ポケットから魔法の筒を取り出しながら、自分の一族に備わっているある能力の発動準備をした。

聖時「さあ、話してもらおうよ。どうやって才人達を意識不明にしたのか。なぜこんな事をしたのか、洗いざらい！」

そう言つて聖時は双葉に近づくと為に一歩踏み出した。

聖時「！」

その時、聖時は双葉から何かの力が発せられるのを感じ取り、飛び跳ねるようにその場から離れて双葉から離れた。

聖時「みんな離れて！何かするつもりだ！」

聖時以外のメンバー「?????????!」「」「」「」「」

双葉「草よ！伸びろ！！！」

双葉の声と共に聖時達の足元当たりには生えている雑草が急に伸びだし、聖時達の足を絡みつき、其処から体を這つて登ってきて、聖時達の動きを封じようとした。

聖時「なっ！！！」

ふたば「な、何これ?!！」

ティアナ「草が！」

アルフ「絡みつく！」

裕也「うっ……」

由香「動けない！」

刹那「まずい！このままでは動けなくなる！」

刹那は、絡まってくる草で体が完全に動けなくなる前に、足元の草を夕凧で切り裂いて防ぐ。

聖時「このっ！火球呪文！」

聖時は火球呪文の呪文で草を焼き切った。

そうやって聖時達の動きを一時的に封じた双葉は、その場から離れながら魔法の筒を起動させた。

双葉「出て来い使い魔！デルパツ！！！」

双葉が発した言葉に反応して、魔法の筒から何本もの絡まった太い緑色の蔦が出てきた。

ふたば「な……何、これ」

アルフ「ば……化け物」

聖時「ま……魔物なのか？」

ふたばとアルフを縛っている草を刹那と共に切っている聖時達の前で、双葉の持っていた魔法の筒から出てきた物は、太い緑色の蔦が幾つも絡まって出来た

裕也「な・・・何なんだ、コレ・・・」

由香「植物の化け物？」

聖時達から少し離れた所で、自分たちに絡まってくる草を、聖時達から以前護身用に貰った紋章術が封じられている魔法で切り落としている裕也達も魔物を見て驚いていた。

聖時も裕也達と同じで、最初は驚いていたが、視界の済で双葉が逃げ出そうとしていたのを見てハツとなり、アルフへ咄嗟に支持を出した。

聖時「アルフ！結界だ！！この辺周辺を結界で被って！魔物の被害防止と犯人が逃げ出すのを結界内に取り込んで防ぐんだ！！」

アルフ「え？！あ・・・わ、分かったよ！」

そう言つて結界を張る準備をするアルフ。

双葉「ま、まずい！逃げなきゃ！！」

聖時の言葉を聞いて、双葉は逃げ出すために走り出す。だが、その前を紋章術の札を持って構えた裕也と由香が立ち塞がる。

裕也「逃がすか！」

由香「逃がしません！」

双葉「クッ！」

裕也と由香に逃げ道を塞がれて、立ち止まる双葉。

聖時「河瀬先輩！そのまま犯人を逃がさないで！僕も今・・・！」

自分も犯人を捕まえよう聖時が犯人に近寄ろうとした瞬間、鳶の魔物が、鳶で聖時を攻撃してきたので、それを咄嗟にその場から飛び跳ねてかわす。

ふたば「聖時！」

聖時「大丈夫！」

聖時はふたばに大丈夫だと返事をした後、自分を攻撃してきた鳶の魔物を睨みつける。魔物は幾つもある鳶を空中でウネウネと揺らしながら佇んでいる。

聖時「・・・どうやら、犯人を捕まえる前に、こいつを何とかしないといけないみたいだね。」

そう言っ聖時は自分の指にはめられている指輪の形の待機形態をとっている自分のデバイスを指で触りながらそう言った。

つづく

第84話 幻想との接触？（後書き）

「^{コスモ}ピティ、次回から本格戦闘、ガチバトルです。お楽しみにね
宇宙の導きを我らに！」

聖小^{セント}

第85話 幻想との接触？（前書き）

どうも、剣 流星です。

先日、フォーゼ&オーズの映画を見に行きました。

最近平成仮面ライダーにハマったので、平成ライダーシリーズの映画を生で見るのは初めてです。

ネタバレになりそうなので、あえて詳しくは書きませんが、実によかったです！

では第85話をどうぞ。

第85話 幻想との接触？

第85話 幻想との接触？

神谷邸の前、そこに昨日童虎から言われた問いに対しての答えを出した衛宮士郎がいた。

もつとも、士郎は最初からこの件に関して手を引く気は無く、むしろ、山羊座カプリコーンのエルシドから力を受け取った時点で、ハーデスのことに関しては十分に関係がある立場だったのである。だから“手を引く”と言う選択肢は士郎の中には無かった。

士郎「……猛達はまだ来てないのか。どうやら早く来すぎたみたいだな。」

士郎は昨日、自分以外に童虎から問いをとわれた猛達の気配も姿も神谷邸に無いのに気づき、自分は“早く来すぎたか？”と思っていた。

そんな時、上空から一筋の閃光が士郎の近くに高速で降りてきた。

ドンッ！

その閃光は瞬間移動呪文ルーラの呪文での移動で発生するものだと思い、士郎は閃光が降りてきて土煙を上げている着陸場所を見て、誰が来たのかと思ひながら其方に視線を向けた。

猛「到着つと……ん？を、士郎じゃないか。お前も今来たところか？」

士郎「ああ。それより答え……出たのか？」

猛「ああ。随分悩んだけど、やっぱり聖時達を放っておけないし、それにハーデスの話が本当なら、このまま何もしなくても、奴らの方から攻めてくる……」

剛「何もしないまま奴らにやられるのも何だし、それに……」

芹「何より、友達のふたばや聖時が戦っているのに、それを見て見ぬ振りなんてできないわよ。ねえ、琴乃？明日香ちゃん」

琴乃「はい」

明日香「うん」

士郎「……そっか、ならこれからもよろしくな。」

猛「ああ。」

そう言つて士郎と猛はお互い手を出し握手をした。

そんな士郎達の耳に突然、神谷邸の玄関を乱暴に開け放つ音が聞こえてきた。

士郎「な、何だ？」

何事だと思い、音のした方へ士郎たち全員が視線を向けると、そこには急ぐ姿のゆめみが居た。

士郎「ゆめみさん？どうしたんです？そんなに慌てて。」

ゆめみ「先程、聖時さんのデバイス「ジャメイム」が起動してバリアジャケットを展開したのを確認しました。おそらく聖時さんは今戦っています。それもデバイスを起動して、バリアジャケット身に纏はなければならぬ程の相手と。」

猛「なんだって?!」

剛「だからゆめみさんは急いでいたのか。」

明日香「聖時お兄ちゃん、大丈夫かな……」

心配そうに聖時の身を案じる明日香。

ゆめみ「私は今から聖遼学園に行つて聖時さんの加勢に行きます。」

猛「なら俺達も一緒に行きます！聖時が戦っているんなら、力になつてやりたい！」

剛「俺も聖時の力になつてやりたい。前の時とは違つて今回は力になつてやれる事が出来るはずだ。」

士郎「そうだな、あの時みたいに何も出来ずにただ見ているだけなんてのはもうゴメンだしな。」

琴乃「聖遼学園に行くなら、私がこの間覚えた瞬間移動呪文ルトラで行けるはずですよ。」

明日香「お姉ちゃん何時の間に覚えたの？」

琴乃「この間、別荘内でデバイスの訓練をしている時にちょっとね。」

ゆめみ「みなさん……ありがとうございます！」

士郎「礼なら良いって。それよりも急ごう、琴乃！」

琴乃「はい！みなさん私にしっかり捕まってください。」

そう言った琴乃の肩や腕に士郎達は手を置いて掴む。

琴乃「では行きます！瞬間移動呪文ルトラ！」

琴乃が唱えた瞬間、琴乃と琴乃に捕まっていた士郎達は光の矢となり大空へと飛んで行った。

*

時間は少し遡り、土郎が神谷邸に辿り着く少し前。

今聖時の目の前には巨大な植物の蔦がいくつも絡まり、中央に食虫直物を思わせるような口が有る、植物の巨大な魔物が居た。

魔物「 %&\$÷ 」

言葉にならないような叫び声を上げながら、魔物は巨大な蔦で聖時を攻撃してきた。

聖時「クッ！」

それを飛び跳ねてかわした聖時は自分の指にはめられている待機形態になっている自分のデバイス「ジャメイム」を起動させた。

聖時「ジャメイム、セットアップ！」

聖時の掛け声と共に聖時のデバイス「ジャメイム」起動させバリアジャケットを身に纏った。

聖時が身に纏ったバリアジャケットは後のエリオのバリアジャケットと同じ白のコートの中に黒のインナーに黒のズボンと言ったデザインで、はたから見ると、ズボン以外はエリオのバリアジャケットの色違いと見て取れるデザインだった。

聖時はバリアジャケットを身に纏うと、左手に持っている鞘に貼った、白と翠を基調とした刀型のデバイス・ジャメイムを右手で鞘から抜くと周りにいる他の者たちの様子を見た。

少し離れた所で刹那が夕凧を構え、ふたばはパクティオーカードから勝利の女神の杖を右手に持っていた。

その二人からさらに少し離れた所では、アルフは結界を貼るために魔方陣を出していて、そのすぐ近くでは逃げ出そうとしている双葉を逃がさないように裕也と由香が紋章術の入っている札を出し、普段と少し違う雰囲気を出しながら牽制をしていた。

どうやらSE能力を使っての肉体のリミット解除「オペレーション・トラボルタ」と「オペレーション・イエロー」を発動させ、肉体の性能を一時的に上げているなど聖時はそう思いながら目の前にいる鳶の魔物を見ながら、結界を貼っているアルフに向かって叫んだ。

聖時「アルフ！結界の展開は!？」

アルフ「もうすぐ・・・良し！展開したよ！」

アルフの言葉と同時に封鎖結界用の魔法が展開され、辺りの様子が変わっていく。

アルフ「結界展開完了。さて、もうココからは逃げられないよ！」

アルフはそう言いながら、裕也と由香と対峙している双葉にそう言った。

双葉「うっ！」

双葉は追い詰められて、一歩後ずさりをした。

裕也「さて、大人しくしてもらおうか？」

そう言って裕也が双葉に手を伸ばそうとした時、すぐ近くに居る由

香が大声を上げた。

由香「河瀬くん、あぶない！」

トラボルタ『相棒！横！』

裕也「ちいつ！」

由香と自分のCAのトラボルタの警告で横から来る魔物の蔦の攻撃を、オペレーション・トラボルタで上がった身体能力でよける裕也。

聖時「河瀬先輩！」

裕也「大丈夫だ！」

アルフ「裕也！由香！防御結界を貼るから、あたしの後ろに！犯人はどの道結界内からは出られないから、あの化け物をどうにかするまで放っておくよ！」

由香「・・・それしかないね。」

裕也「そうだな、分かった。」

二人はそう言うと、防御結界を貼ろうとしているアルフの元に行こうとした。その時、裕也はこの場に居ないハズの人物の声を聞いた。

天羽 碧「な・・・なにコレ?!周りの景色が・・・」

上岡 進「な・・・何なんだ?!あの化け物?!」

榎山 遥「これは……特務捜査かの人達から貰った資料の中にあったミッド式の封鎖結界?!」

裕也「な、榎山?!それに先輩方!?何でココに?!」

遥「河瀬くん?!これは一体どういうことなの?!」

進「君は確か……河瀬くん、だったっけ?」

碧「ちよつと貴方!これ一体なんなの?!何なのあの化け物?!」

裕也「そ、それは……」

榎山 遥や天羽碧らからの質問攻めに言葉を詰まらせる裕也。だがそんな裕也達の都合などお構いなしに鳶の魔物は攻撃を仕掛けてきた。

由香「河瀬くん!」

裕也「うわっ!」

鳶の魔物の鳶を使った攻撃は裕也を少し掠って外れる。

アルフ「裕也!早くこっちに!そいつらも一緒に早く!」

裕也「分かった!……ここは危険です。ですから榎山、先輩達、事情は後で説明します。今は早くアルフの貼った防御結界の中に!」

碧「ちよ、ちよつと!説明は後つて……」

進「天羽さん、後で説明するって言ってるんだ。ここは大人しく彼らの指示に従おう。」

遙「上岡さんの言うとおりです。今は彼女が張る結界の中に。そこなら安全だから。」

混乱し、事情の説明を聞こうと詰め寄る碧を遙が諭す。

裕也「すまねえ榎山。」

榎山「良いわよ。それよりも、ちゃんと後で説明しなさいよ。」

裕也「ああ。」

そう言っただけでアルフの傍に駆け寄り寄る裕也達。

裕也達がアルフの後ろに集まると、アルフは防御結界を這って自分を含め、後ろにいる裕也達を囲む結界を貼った。

アルフ「これでよし。聖時！裕也達の事はあたしに任せて、あなた達はそのデカブツを！」

聖時「分かってる！」

そう言っただけで聖時は魔物の蔭による攻撃をかわしながら、持っている杖から出る光で攻撃をいなしているふたばの傍に立つ。

聖時「さてと……どうやって攻めようか？」

ふたば「あれだけ大きいと中途半端な攻撃は効かないね。」

刹那「火です聖時さん！」

聖時とふたばの傍に、同じように飛び跳ねて攻撃をかわしていた刹那が降りる。

聖時「火？」

刹那「はい、あの魔物はどうやら植物の魔物のようです。ですから・・・」

ふたば「火を使った攻撃が一番効果的って事？」

刹那「はい！」

聖時「なら攻め方は火を使った攻撃で。」

刹那「はい！」

ふたば「それしかないね。周りに被害が出る前に、早く・・・！！？」

会話の途中でふたばが不意に言葉を途切れさせた。

聖時「ふたば？」

ふたば「・・・聞こえる・・・助けを求める声が・・・」

刹那「え？」

聖時「助けを求める声？」

聖時はふたばの声を聞き、反推する。

ふたば「うん、声……」

ふたばはそう言って、その声に意識を集中する。

???（助けて……誰か……私を……助けて……）

ふたば「この声……あの魔物から聞こえる！」

聖時「魔物から……助けを呼ぶ声が聞こえる？どういう事？」

聖時はふたばに声の事を聞こうとした時、横にいる刹那が大声で突如叫んだ。

刹那「二人とも危ない！」

聖時・ふたば「「!？」」

刹那の警告の声で、二人は自分達に迫ってくる攻撃に気づき、聖時は咄嗟にふたばを抱えて攻撃をかわす。

聖時「つ……あぶないな！」

ふたばを下ろしながら言う聖時。

ふたば「聖時、あの子・・・助けを求めている。もしかしたらあの子、こんな事したくないんじゃないかな？」

聖時「こんな事したくない？」

ふたば「うん、感じるの。あの子の本体の様なものが黒い何かに覆われていて、それで苦しんでる！」

聖時「黒い何かって・・・！！」

その時、聖時を狙って魔物が再び攻撃をして来た。

聖時「ちっ」

聖時は咄嗟に飛び退いてかわした。

ふたば「聖時！」

聖時「ふたば、取り敢えず、話は後で！」

そう言っただジャメイムを構えて、魔物に対して攻撃を仕掛けようと飛び出す聖時。そして、その聖時に続いて飛び出す刹那。

刹那「先に仕掛けます！」

そう言っただ迫ってくる無数の鳶に対して、夕風を振りかぶる刹那。

刹那「神鳴流奥義・百烈桜華斬ひゃくれつおうかさん！！」

刹那の斬撃が無数の蔦を切り裂く。

聖時「次は僕だ！」

そう言つて自分のデバイス・ジャメイムを横にして、刀身にある呪文を付加させる。

聖時「火球呪文！」

呪文を唱えた瞬間、刀身に炎の力が宿り燃える。

刹那「魔法剣!?!」

聖時「たあああつ！火炎海波斬かえんかいほざん!!」

火球呪文メラ！の力が付加された海波斬の剣閃がジャメイムから放たれ、魔物から生えている蔦の数本を切り落とし、切り口から炎が発生し蔦を燃やす。

刹那「切ると同時に相手を燃やす・・・これなら行ける！」

刹那は聖時の火炎海波斬を見てこれなら勝てると思った。

聖時「よし！もう一度・・・!!」

聖時がもう一度、火炎海波斬を放とうとした時、突如、脳に直接語りかけるような声を聖時は聞いた。

???? (痛い・・・やめて・・・お願い・・・助けて・・・助けて!!!)

聖時「な……何だ？この声……まさか、ふたばが言っていた魔物の声？」

聖時は突如聞こえてきた声に困惑し、思わず足を止め思考してしまった。

アルフ「何やってるんだい聖時！戦いの最中に動き止めるんじゃないよ！狙い撃ちにされるよ！！」

聖時「はっ?!」

アルフの声を聞いて、不意に思考の海から引き戻される聖時。だが、その隙を魔物は見逃さず、聖時に対して鳶で攻撃を仕掛ける。

スガッ!

聖時「ぐあっ!」

フィをつかれ、鳶のなぎ払いの攻撃をまともに受けて地面に叩きつけられる聖時。

聖時「ぐっ……」

フィの一撃の上に、まともな防御も受身も取れなかった聖時は、叩きつけられた地面で呻き、ダメージで動けないでいた。

ふたば「聖時!」

聖時の身を案じて、駆け寄るふたば。傍から見たら、二人は全くの

隙だらけの状態であり、そんな隙を、魔物が見逃すわけなく追撃をしようと攻撃を仕掛ける。

聖時「よ・・・よせ、来るな・・・ふたば。」

聖時は魔物が自分に対して追撃をしようとしているのを感じ取り、その巻き添えにしないため、駆け寄るふたばを止めるが、時すでに遅く、魔物は二人まとめて葬るために、数本の蔦の先を硬化させて鋭くし槍状にした蔦を放つ。

刹那「聖時さん！ふたばさん！」

二人を助けようと近づくが、魔物の複数ある蔦が行く手を遮り、近づけないでいる。

刹那「クツ！近づけない！」

刹那が、アルフが、裕也が、由香が、それぞれどうにかしようと動くが、無常にも魔物の攻撃は聖時とふたばへと浴びせられ、聖時達が居た当たりに大きな土煙が起こった

刹那「せ、聖時さん！ふたばさん！」

アルフ「聖時！ふたば！」

由香「聖時くん！ふたばちゃん！」

裕也「聖時！ふたば！」

刹那達が聖時の安否を知るため、土煙が舞う場所を注目する。だが土煙が晴れたその場所には、聖時、ふたば共にそこには居なかった。

刹那「…………え？ふたりが居ない？」

アルフ「ど…………どこに？」

刹那達が聖時とふたばの姿が無いことに困惑する。

????「…………まったく、余りにも危なっかしかったから、思わず出て来ちゃったわ。」

????『間一髪つてところだね。』

刹那達「…………?!」「…………」

突如聞こえてきた聞き慣れない女の子の声を聞いた刹那たちは、その声の方向を見た。

その場所は聖時達が居た場所から丁度魔物を挟んで反対側の場所。そこには、長い黒髪で盾を左腕に身に付け、細身でソリが有り、護拳の付いた剣を右手に持った女の子と、その後ろに、貫かれる寸前の格好で、何が起きたか分からないといった顔をした聖時とふたばが居た。

シャルティエ『本来なら陰ながら支援するはずだったんだけど…………どうするほむら??』

ほむら「……………出て来ちゃった物はしょうがないでしょう。

このまま彼らに協力するわよ」

シャルティエ「了解。」

つづく

第85話 幻想との接触？（後書き）

「ピティ「ソーディアン・シャルティエを駆り、颯爽と現れたほむら。」

ユニ「ソーディアンマスターとなった魔法少女の実力がついに明らかされるのか？」

ピティ「そして、聖時とふたばが聞いた魔物から聞こえる助けを求めめる声の正体は？」

二人「次回、第86話 幻想との接触？にご期待下さい」

ピティ「セントコスモ聖小宇宙の導きを我に！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0663k/>

魔法少女リリカルなのは～真の紋章と竜の騎士～

2011年12月11日23時00分発行